

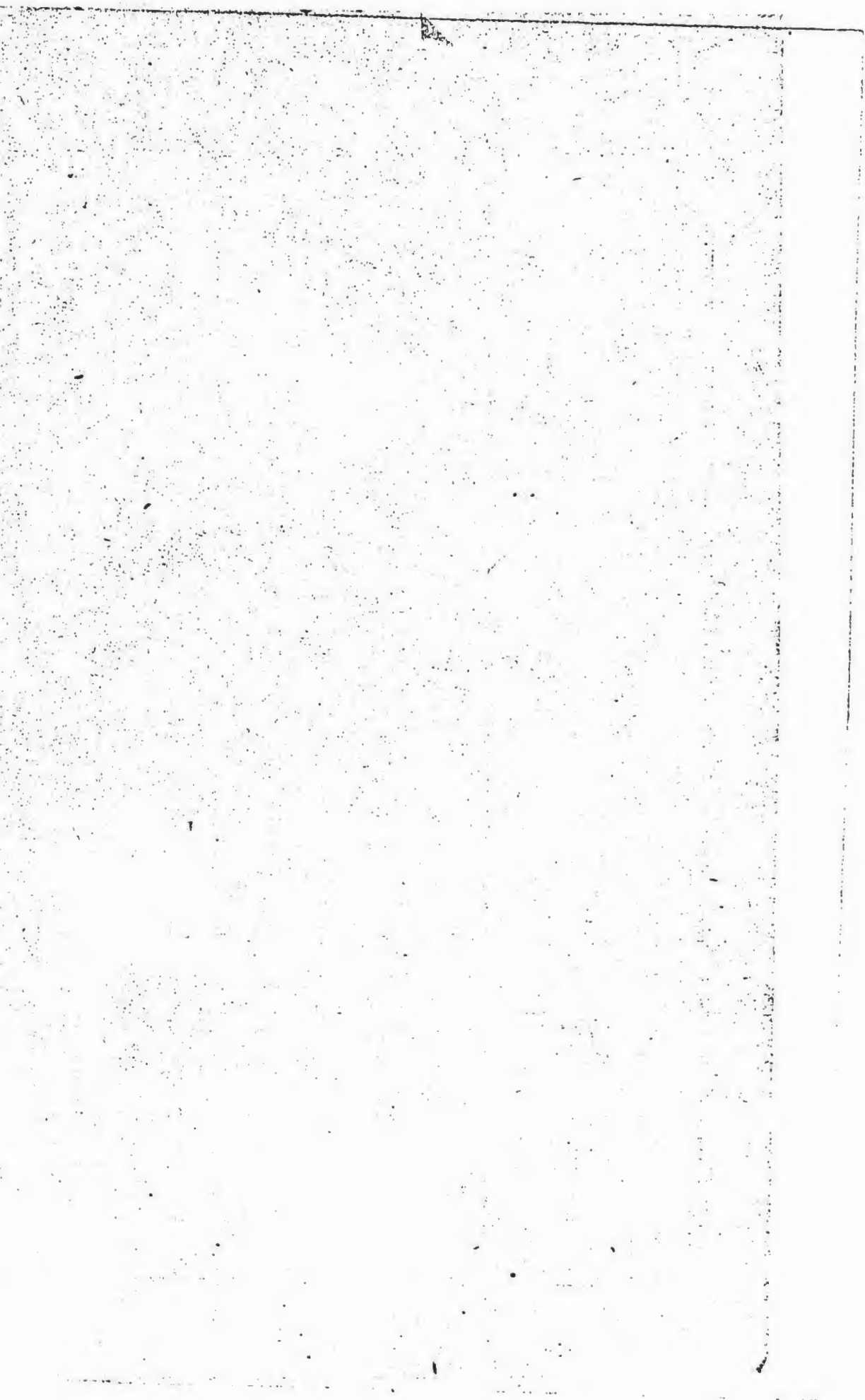
松丁夫三郎  
丸岡桂枝  
校訂

# 國文大觀

2

物語部貳  
源氏物語下

板倉屋書房



松下大三郎  
丸岡桂

校訂

# 國文大觀

2

物語部貳  
源氏物語下

板倉屋書房



224487

若菜上

朱雀院の帝ありしみゆきの後、そのころほひより例ならず惱み渡らせ給ふ。もとよりあつし  
くおはしますうちこの度は物心細くおぼしめされて年比もおこなひのほい深さをささい  
の富のおはしましたしつる程はよろづ憚り聞えさせ給ひて今までおぼしとどこほりつるを、猶  
そのかたに催すにやあらむ世に久しかるまじき心地なむするしなどのたまはせてさるべき  
御心まうけどもせさせ給ふ。御子達は春宮をおき奉りて女宮達なむ四所おはしましたしける。そ  
の中に藤壺と聞えしは先帝の源氏にぞおはしましたしける。また坊と聞えさせし時参り給ひて  
高さ位にも定まり給ふべかりし人の、取り立てたる御うしろみも坐せず、母方もそのまじと  
なく物はかなき更衣ばらにてもものし給ひければ御まじらひの程も心細げにて、大後の内侍  
のかみを参らせ奉り給ひて傍にならぶ人なくもてなし聞え給ひなどせしほどにけおされ  
て、帝も御心の中にいとほしきものには思ひ聞えさせ給ひながら、おりるさせ給ひにしかば  
かひなく口惜しくて、世の中を怨みたるやうにてうせ給ひにし、その御腹の女三宮をあまた  
の御中にすぐれて悲しきものに思ひかしづき聞え給ふ。その程御年十三四ばかりにおはす。  
今はとそむきすてやまごもりまなむ後の世にたちとまりて誰をたのむかげにて物し給はむ  
とすらむと、唯この御事をうしろめたくおぼしなげく。西山なる御寺造りはて、移ろはせ

給はむほどの御いそぎをせさせ給ふにそへて、又この宮の御もぎのことをおぼしいそがせ給ふ。院の内にやんどなくおぼす御たから物御調度どもをば更にもいはず、はかなき御遊物まで少しゆゑある限をば唯この御かたにと渡し奉らせ給ひて、そのつぎつぎをなむことみこたちには、御そらふんどもありける。春宮は、かゝる御なやみに添へて世をそむかせ給ふべき御心づかひになむとさかせ給ひて渡らせ給へり。母女御も添ひ聞えさせ給ひて参り給へり。すぐれたる御おぼえにしもあらざりしかど、宮のかくておはします御すくせの限なくめてたければ、年比の御物語細やかに聞えかはさせ給ひけり。宮にもよろづの事世を保ち給はむ御心づかひなど聞え知らせ給ふ。御年のほどよりはいとよくおとなびさせ給ひて、御後見ども、此方彼方かるがるしからぬなからひに物し給へば、いとうしろやすく思ひ聞えさせ給ふ。「この世にうらみ残ることも侍らず。女宮達のあまた残りともまる行くさきを思ひやるなむさらぬ別にもほだしなりぬべかりける。さきさき人のうへに見聞きしにも、女は心よりほかにあはあはしく人におとしめらるゝすくせあるなむいと口惜しく悲しき。いづれをも思ふやうならむ御世には、さまたまにつけて御心とどめておぼし尋ねよ。その中にうしろみなどあるはさる方にも思ひゆづり侍り。三の宮なむいはけなきよはひにて唯一人をたのもしきものとならひて、うち捨てゝむ後の世にたゞよひさすらへむこといとどうしろめたく悲しく侍り」と、御目おしのごひつゝ聞え知らせ給ふ。女御にも心うつくしきさまに聞え告げさせ給ふ。されど母女御の人よりはまさりて時めき給ひしに、皆いどみかはし給ひし

程、御なからひともえうるはしからざりしかば、その名残にてげに今はわざとにくしとはなぐとも、誠に心とどめて思ひうしろみむまではおぼさずもやとぞ推し量らるゝかし。朝夕にこの御事をおぼし歎く。年暮れ行くまゝに、御惱み誠に重くなりまさらせ給ひてみすのとも出でさせ給はず、御ものゝけにて時々惱ませ給ふこともありつれど、いとかくうちへをやみなささまにはおはしまさざりつるを、この度は猶限なりとおぼしめしたり。御位を去らせ給へれど、猶その世にたのみそめ奉り給へる人々は今も懐かしくめてたき御有様を心やり所に参り仕うまつり給ふかぎりは心をつくして惜み聞え給ふ。六條院よりも、御とぶらひまばまばあり、みづからも参り給ふへきよし聞しめして院はいといたく喜び聞えさせ給ふ。中納言の君参り給へるをみすの内に召し入れて御物語こまやかなり。「故院の上の今はのさざみにあまた御遺言ありし中にこの院の御こと今の内の御ことなむとりわきてのたまひおさしを、おぼやけとなりてことかぎりありければ内々の心よせは變らずながらはかなさこそあやまりに心おかれ奉ることもありけむと思ふを、年頃ことにふれてその恨み残し給へる氣色をなむ漏らし給はぬ。さかしき人といへど身の上になりぬればことたがひて心動き、必ずそのむくい見え、ゆがめることなむいにしへだに多かりける。いかならむをりにかその御心ばへほころぶべからむと世の人もおもむけ疑ひけるを、つひに忍び過ぐし給ひて春宮などにも心をよせ聞え給ふ。今はた又なく親しかるへき中となりむつびかはし給へるも限なく心には思ひながら、本性のあるかなるに添へてこの道の間に立ちまじり、かたくななる



さまにやとて、なかなかよそのことに聞え放ちたるさまにて侍る。内の御事はかの御遺言違へず仕らまつりおきてしかば、かく末の世のあきらけき君としてきし方の御ちもてぶせをもおこし給ふ、ほいのごどいと嬉しくなむ。この秋の行幸の後、いにしへのこととり添へてゆかしくおぼつかなくなむおぼえ給ふ。たいめんに聞ゆべきことじも侍り。必ず自らとぶらひものし給ふべきよし催し申し給へ」などうちまほたれつゝのたまはす。中納言の君、「過ぎ侍りにけむかたは、ともかくも思ふ給へわき難く侍り。年まかり入り侍りておほやけにも仕らまつり侍るあひだ世の中の事を見給へまかりありく程には、大小のことにつけても内々のさるべき物語などのついでにもいにしへのうれはしき事ありてなむなど、うちかすめ申さるゝ折は侍らずなむ。かくおほやけの御うしろみを仕らまつりさして静なる思ひをかなへむと、ひとへに籠り居し後は、何事をも知らぬやうにて故院の御ゆるごんの事も仕らまつらず、御位に坐しましゝ世には齡の程も身のうつはものも及ばず、かしこきかみの人々多くて、その志をとげて御覽せらるゝこともなかりき。今かくまつりごとをさりて静におはします比ほひ心のうちをも隔なく、参りうけたまはらまほしきを、さすがに何となく所せき身のまそほひにてものづから月日を過ぐすこと、なむ折々歎き申し給ふ」など奏し給ふ。二十にもまだ僅なる程なれどいとよく整ひすぐしてかたちも盛んにほひていみじく清らなるを、御目にとりめてうちまもらせ給ひつゝ、このもて煩はせ給ふ姫宮の御うしろみにこれをやなど人知れずおぼしよりけり。「おほさあとのわたりに今は住みつかれにたりとな年頃

心得ぬさまに聞きしがいとほしかりしを、耳やすきものからさすがに妬く思ふことこそあれ」とのたまはする御氣色を、いかにのたまはすることにかとあやしく思ひ廻らすに、この姫宮をかくおぼしあつかひてさるべき人あらばあづけて心安く世をも思ひ離ればやとなむおぼしのたまはすると、ちのづから漏り聞き給ふたよりありければさやうのすぢにやとは思ひよれどふと心得顔にも何にかはいらへ聞えさせむ。「唯はかばかしくも侍らぬ身にはよるべもさぶらひ難くのみなむ」とばかり奏して止みぬ。女房などは覗きて見聞えて、「いとありがたくも見え給ふかたちよういかな。あなめでた」など集りて聞ゆるを、ちいしらへるは、「いでざりともかの院のかばかりにおはせし御有様にはえなすらへきこえ給はざめり。いと目もあやにこそ清らに物し給ひしか」なといひまろふを聞しめして「誠にかれはいとさま異なりし人ぞかし。今は又その世にもねびまさりて光るとはこれにいふべきにやと見ゆるにほひなむいと加はりになる。うるはしだちてはかばかしかたに見ればいつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを、又打ち解けてたはぶれごとをもいひ亂れ遊べばそのかたにつけては似るものなくあいぎやうづきなつかしくうつくしきことのならびなきこそ世にありがたけれ。何事にもささの世推し量られて珍らかなる人の有様なり。宮の内におひ出て、帝王のかぎりなく悲しきものにし給ひ、さばかりなでかしづき身にかへておぼしたりしかど、心のまゝにもちごらすひげして二十がうちには納言にもならずなりにさかし。ひとつあまりてや宰相にて大將かけ給へりけむ。それに、これはいとこよなく進みにためるは次々の

このおぼえのまさるなめりかし。誠にかしこきかたのさへ心もちるなどはこれもをさをさ劣るまじくあやまりてもおよすげまさりたる覺をいと殊なめり」などめでさせ給ふ。「姫宮のいと美しげにて若く何心なき御有様なるを見奉り給ふにも、見はやし奉りかつは又かたおひならむことをば見隠し教へ聞えつべからむ人の後安からむにあづけ聞えばや」など聞え給ふ。おとなしき御乳母ども召し出でて、御もぎの程の事などのたまはするついでに、「六條のおとこの、式部卿のみこのむすめおぼしたてけむやうにこの宮を預かりてはぐまむ人もがな。たゞ人の中にはあり難し。内には中宮さぶらひ給ふ。次々の女、定ともいとやんごとなき限物せらるゝにはかばかしさうしろみなくてさやうのまじらひいとなかなかならむ。この權中納言の朝臣の一人ありつる程に打ちかすめてこそ心みるべかりけれ。若けれどいとさやうさくにおひさきたのもしげなる人にぞあめるを」とのたまはす。「中納言はもとよりいとまめ人にて、年頃もかのわたりに心をかけてほかさまに思ひうつるふべくも侍らざりけるに、その思ひかなひては、いとゆるぐかた侍らじ。かの院こそなかなか猶いかなるにつけても人をゆかしくおぼしたる心は絶えずものせさせ給ふなれ。その中にもやんごとなき御願ひ深くて前齋院などを今に忘れがたくこそ聞え給ふなれ」と申す。「いでそのふりせぬあだけこそはいと後めたけれ」とはのたまはすれど、げにあまたのなかにかゝづらひてめざましかるべき思ひはありとも、猶やがて親さまに定めたるにて、さもや譲り置き聞えましなどもおぼしめすべし。「誠に少しも世づきてあらせむと思はむ女子もたらば同じ

くはかの人のあたりにてこそは、ふればはせまほしけれ。いくばくならぬこの世のあひだはさばかり心ゆく有様にてこそすぐさまほしけれ。われ女ならば同じはらからなりとも必ずむつびよりなまし。若かりし時などさなむおぼえし。まして女のあざむかれむはいとことわりぞや」とのたまはせて、御心のうちにかんの君の御こともおぼし出でたるべし。この御うしろみどものなかに、おもおもしき御乳母のせうと左中辨なるかの院の親しき人にて年比仕うまつるありけり。この宮にも心よせことにてさぶらへば、参りたるにあひて物語するついでに「上なむまかじか御氣色ありて聞え給ひしをかの院にをりあらば漏し聞えさせ給へ。御子達は一人おはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心よせ奉り、何事につけても御うしろみし給ふ人あるはたのもしげなり。上を置き奉りて又真心に思ひ聞え給ふべき人もなければ、おのれは仕うまつるとも何ばかりの宮仕にかあらむ。我が心ひとつにしもあらでおのづから思の外のこともおはしまし、かるがるしき聞えもあらむ時にはいかさまにかは煩しからむ。御覽ずる世にとまかくもこの御事定りたらば仕うまつりよくなむあるべき。賢きすぢと聞ゆれど女はいとすぐせ定めがたくおはしますものなれば、よろづになげかしくかく夥多の御中に取りわき聞えさせ給ふにつけても、人の猜みあべかめるをいかでちりもすす奉らじ」と語らふに、辨「いかなるべき御ことにかあらむ。院は怪しきまで御心ながく、かりにても見そめ給へる人は御心とまりたるをも、又さしも深からざりけるをも、方々につけて尋ねとり給ひつゝ、數多つどへ聞え給へれど、やんごとなくおぼしたるはかぎり

ありて、ひとかたなめればそれにことよりて、かひなげなる住まひし給ふ方々こそは多かめるを、御すぐせありて若しさやうにおはしますやうもあらば、いみじき人と聞ゆとも立ち並びておしたち給ふことは得あらじところは推し量らるれど、猶いかゞと憚らるゝ事ありてなむ覺ゆる。さるはこの世のさかえ末の世に過ぎて身に心もとなきことはなきを、女のすぢにてなむ人のもどきをもおひ我が心にも飽かぬこともあるとなむつねにうちうちのすさびごとにもおぼしのたまはするに、げにおのれらが見奉るにもさなむおはします。かたがたにつけて御かげに隠し給へる人皆その人ならず、立ち下れるさには物し給はねど、限あるたゞ人どもにて院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。それに同じくは實にさもおはしますばいかにたぐひたる御あはひならむ」と語らふを、乳母又ことのついでに「然々なむなにかしの朝臣にほのめかし侍りしかば、かの院には必ずうけひき申させ給ひてむ、年比の御ほ意かなひておぼしぬべきことなるを、こなたの御ゆるし誠にありぬべくは傳へ聞えむとなむ申し侍りしを、いかなるべきことにかは侍らむ、ほどほどにつけてひとのきはさはおぼしわさまへつゝ、ありがたき御心さまにものし給ふなれど、たゞ人だに又かゝづらひ思ふ人たちならびたることは人の飽かぬことにし侍るめるを、めざましきこともや侍らむ、御うしろみ望み給ふ人々は數多ものし給ふめり。よくおぼしめし定めてこそよく侍らめ。限なき人と聞ゆれど今の世のやうとては皆ほがらかにあるべかしく、世の中を御心とすぐし給ひつべきもおはしますべかめるを、姫宮はあさましく覺束なく心もとなくのみ見

えさせ給ふにさぶらふ人々は仕うまつるかぎりこそ侍らめ。大方の御心おきてに老たがひ聞えてさかしきまも人もなびき侍ふこそたよりあることには侍らめ。取り立てたる御うしろみものし給はざらむは猶心細きわざになむ侍るべき」と聞ゆ。「まか思ひたどるによりなむ。御子達の世づきたる有様はうたてあはあはしきやうにもあり。又高きさはといへども女は男に見ゆるにつけてこそくやしげなることもめざましき思ひも、おのづからうちまじるものなめれど、かつは心苦しく思ひ亂るゝを、又さるべき人に立ちおくれ頼むかげどもに別れぬるのち心を立て、世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて世に許さるまじき程のことをば思ひ及ばぬものとならひたりけむ。今の世にはすきずきしく亂りがはしきことも、るゝに觸れて聞ゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく降れるきはのすきものどもになほたちあざむかれて、なき親のおもてをふせ影を辱むるたぐひ多く聞ゆる、いひもて行けば皆おなじことなり。程々につけて宿世などいふなることは知りがたきわざなればよろづにうしろめたくなむ。總て悪しくも善くもさるべき人の心に許し置きたるまゝにて世の中を過ぐすは宿世宿世にて後の世に衰へあるときもみづからのおやまちにはならず。ありへてこよなきさいはひあり、めやすきことになるをりは、かくてしもあしからざりけりと見ゆれど、なほたちまちにふと打ち聞きつきたる程は、親に知られずさるべき人も許さぬに心づからの忍びわざし出てたるなむ、女の身にはますことなきさずと覺ゆるわざなる。なほなほしきたゞ人のなからひにてだに

あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを思ふ心より外にも見え宿世の程定められむなむ、いとかるがろしく身のもてなしありさまおしはからるゝことなるを、怪しく物はかなき心さまにやと見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなし聞ゆるはさやうなる事の世にもり出てむといと愛きことなり」など、見捨てまつり給はむのちの世をうしろめたげに思ひ聞えさせ給へれば、いよいよ煩はしくおもひあへり。「今すこしものをも思ひ知り給ふ程まで見過ぐさむとこそは年頃念じつるを、深きほ意も遂げずなりぬべき心地のするに思ひ催されてなむ。かの六條のおとゞはげにさりともものゝ心えてうしろ安き方はこよなかりなむを、かたがたに數多ものせらるべき人々を知るべきにもあらずかし。とてもかくても人の心からなり。のどかにおち居て大かたの世のためしとも、うしろ安き方は並びなくものせらるゝ人なり。さらでよろしかるべき人誰ばかりかはあらむ。兵部卿宮人がらはめやすしかし。同じすぢにてこと人とわかまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめく程に、重き方おかれて少しかるびたる覺えや進みにたらむ。なほさる人はいとたのもしげなくなむある。又大納言の朝臣の家づかさのぞむなる、さるかたにもめめやかなるべきことにはあなれどさすがにいかにぞや。さやうにおしなべたるきは、猶めざましくなむあるべき。昔もかやうなるえらひには何事も人にことなる覺えあるに、ことよりてこそありけれ。唯ひとへにまたなく用ゐむばかりを、賢きことに思ひ定めむはいと飽かず口惜しかるべきわざになむ。右衛門督のまたにわぶな

るよし、ないしのかみのものせられしその人ばかりなむ、位など今少しものめかしき程になりなば、などかはとも思ひよりぬべきを、また年いと若くむげにかろびたる程なり。高き志深くてもめずみにて過ぐしつゝいたくまづまり思ひあがれる氣色人にはぬけてさえなどもこともなく遂には世のかためとなるべき人なれば、行く末もたのもしけれど、猶又この爲にと思ひはてむにはかぎりぞあるや」と萬におぼし煩ひたり。かやうにもおぼしよらぬ姉宮達をばかけても聞えなやまし給ふ人もなし。怪しく内々にのたまはする御さゝめきごともの、おのづからことひろごりて心を盡す人々多かりけり。おほきおとともこの衛門督の今まで一人のみありて御子達ならずはえじと思へるを、かゝる御定めども出て來たなる折に、さやうにもおもむけ奉りて召しよせられたらむ時、いかばかり我が爲にもめんぼくありて嬉しからむとおぼしのためひて、内侍のかんの君にはかの姉の北の方して傳へ申し給ふなりけり。よろづかぎりなき言の葉を盡して奏せさせ御氣色たまはらせ給ふ。兵部卿宮は左大將の北の方を聞えはづし給ひて聞き給ふらむ所もあり。かたほならむことはとえり過ぐし給ふにいかゞは御心の動かざらむ。限なくおぼしいられたり。藤大納言は年比院のべたうにて親しく仕らまつりて侍ひなれにたるを、御山籠りし給ひなむ後、より所なく心ぼそかるべきを、この宮の御うしろみにことよせてかへりみさせ給ふべく、御氣色せちにたまはり給ふなるべし。權中納言もかゝることどもを聞き給ふに、人づてにもあらずさばかりおもむけさせ給へりし御氣色を見奉りてしかば、おのづからたよりにつけて漏らし聞き召さする事も



あらば、よももてはなれてはあらじかしと心時めきもしつべけれど、女君の今はと打ち解けて頼み給へるを年比つらきにもことづけつべかりしほどだに、ほかざまの心もなくて過ぐしてしを、あやにくに今更に立ちかへりにはかにものをや思はせ聞えむ。なのめならずやんどなき方にかゝづらひなば、何事も思ふまゝならで左みぎに安からずは、我が身も苦しくこそはあらめ。もとよりすすきすすきしからぬ心なれば、思ひまづめつゝ打ち出でねど、さすがにほかざまに定まりはて給はむもいかにぞや覺えて耳はとまりけり。春宮にもかゝる事ども聞し召してさしあたりたる只今のことよりも後の世のためしともなるべきことなるをよくおぼしめし廻らすべきことなり。人がらよろしとてもたゞ人はかぎりあるを、なほ志かおぼしたつことならばかの六條院にこそ親ざまに譲り聞えさせ給はめとなむ、わざとの御せうそこにはあらねど、御氣色ありけるを、まち聞かせ給ひてもげにさることなり。いとよくおぼしのためはせたりといよいよ御心だゝせたまひて、まづかの辨してぞかつがつあないつたへ聞えさせ給ひける。この宮の御ことかくおぼし煩ふさまはさきさまも皆聞き置き給へれば、「心苦しき御事にもあなるかな。さはありとも院の御世ののこりすくなしとて、こゝに又いくばく立ち後れ奉るべきとてかその御うしろみの事をば受け取り聞えむ。げに次第をあやまたぬにて今まばしの程も残りともまるかぎりあらば、大かたにつけてはいづれの御子達をもよそに聞き放ち奉るべきにもあらねど、又かくとりわきて聞きおき奉りてむをば殊にこそはうしろみ聞えめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなりや」とのたまひて

「ましてひとへに頼まれ奉るべきすぢにむつびなれ聞えむことはいとなかなかに打ち續き、世を去らむべきさみ心苦しくみづからのためにも淺からぬほどしになむあるべき。中納言などは年若くかるがるしきやうなれど行く先遠くて人がらも遂におほやけの御うしろみともなりぬべきおひざきなめれば、さもおぼしやらむになどかこよなからむ。されどいといたくまめだちて思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせ給ふにやあらむ」などのたまひてみづからはおぼしはなれたるさまなるを、辨はおぼろげの御定めにもあらぬをかくのたまへばいとほしくも口惜しくも思ひて、うちうち覺え立ちにたるさまなど委しく聞ゆれば、さすがに打ちゑみつゝいと悲しく奉り給ふ御子なめればあながちにかくきし方行く先のたどりも深きなめりかしな。唯内にこそ奉り給はめ。やんごとなきまづの人々おはずといふことはよしなきことなり。それにさはるべきことにもあらず。必ずさりとして末の人恐なるやうもなし。故院の御時に、大后の坊の始の女御にていきまき給ひしかどむげの末に参り給へりし、入道宮にまばしはおされ給ひにきかし。この御子の御母女御こそはかの宮の御はらからにもものし給ひけめ。かたちもさしつぎにはいとよしといはれ給ひし人なりしかばいづかたにつけてもこの姫宮おしなべてのきはにはよもおはせじを」などいぶかしくは思ひ聞え給ふべし。』年も暮れぬ。朱雀院には御心地猶をこたるさまにもおはしまさねば萬あわたしくおぼし立ちて、御もぎのことおぼしいそぐさま、さし方行くさきありがたげなるまでいづくしくのゝしる。御まつらひはかへ殿の西面に御几帳よりはじめてこの綾錦をばませ

させ給はず、もろこしの後の飾をおぼしやりて麗しくことごとしく輝くばかりとのへさせ給へり。御腰ゆひにはおほきおとどをかねてより聞えさせ給へりければ、ことごとしくおはする人にて参りにくくおぼしけれど、院の御事を昔より背き申し給はねば参り給ふ。今二所のおとど達そののこりの上達部などは、わりなきさはりあるもあながちにためらひ助けつゝ参り給ふ。御子達八人殿上人はた更にもいはず、内春宮も残らず参りつどひていかめしき御いそぎの響きなり。院の御事はこの度こそとぢめなれとみかど春宮を初め奉りて心苦しく聞し召しつゝ、藏人所をさめどのゝからものども多く奉らせ給へり。六條院よりも御とぶらひいとこちたし。贈物ども人々の祿尊者の大臣の御引出物など、かの院よりぞ奉らせ給ひける。中宮よりも御さうぞく櫛の箱心ことにてうせさせ給ひて、かのむかしの御ぐしあげの具故あるさまに改めくはへてさすがにもとの心ばへもうしなはず、それと見せて、その日の夕つ方奉らせ給ふ。宮の権のすけ、院の殿上にも侍ふを御使にて、姫宮の御方に参らすべくのたまはせつれどかゝることぞ中にありける。

「さしながら昔を今につたふれば玉のをぐしぞかみさびにける」。院御覽じつけて哀におぼし出でらるゝことどもありけり。あえものけしうはあらじと譲り聞え給へる程、げにおもだゝしきかんざしなれば、御返りも昔のあはれをばさし置きて、

「さしつぎにみるものもが萬世をつげのをぐしのかみさぶるまで」とぞ喜び聞え給へる。御心地いと苦しきを念じつゝおぼしおこしてこの御いそぎはてぬれば三日すぐして遂

に御ぐしおろし給ふ。よろしき程の人の上にてだに今はとてさまかはるは悲しげなるわざなれば、ましていと哀げに御方々もおぼしまどふ。内侍のかんの君はつと侍ひ給ひていみじくおぼしいりたるをこしらへかね給ひて、子を思ふ道はかぎりありけり、かく思ひしみ給へるわかれの堪へ難くもあるかなとて、御心亂れぬべけれど、あながちに御けうそくにかゝり給ひて、山の座主より始めて御いむことの阿闍梨三人さぶらひてほふぶくなど奉る程、この世を別れ給ふ御作法いみじく悲し。今日は世を思ひすましたる僧達などだに涙も得とゞめねば、まして女宮達女御更衣こゝらの男女かみまもゆすりみちて泣きとよむに、いと心あわたゞしう、かゝらでまづやかなる所にやがて籠るべく覺しまうけるほ意だかひておぼしめさるゝも、唯この幼き宮にひかされてとおぼしのたまはず。内より始め奉りて御とぶらひのまげさいと更なり。六條院も少し御心地よろしくと聞き奉らせ給ひて参り給ふ。御たうばりのみふなどこそ皆同じごとありぬの帝とひとしく定まり給へれど、まことの太上天皇の儀式にはうけばり給はず。世のもてなし思ひ聞えたるさまなどは心ことなれど、殊更にそぎ給ひて、例のことごとしからぬ御車に奉りて上達部などさるべきかぎり車にてぞ仕うまつり給へる。院にはいみじく待ち悦び聞えさせ給ひて、苦しき御心をおぼしつよりて御對面あり。麗しささまならず唯おはします方におましよそひくはへて入れ奉り給ふ。かはり給へる御有様見奉り給ふに、さし方行くさきかきくれて悲しくとゞめがたくおぼさるれば、とみにもえためらひ給はず。故院におくれ奉りしころほひより世の常なく思ひ給へられしかばこの

方の本意深く進み侍りにしを心弱く思ふ給へてたゆたふことのみ侍りつゝ、つひにかく見奉りなし侍るまでおくれ奉りぬる心のぬるさを恥しく思ふ給へらるゝかな。身にとりてはことにもあるまじく思ふ給へたち侍るをりをりあるを、更にいと忍びがたきこと多かりぬべきわざにこそ侍りけれ」となくさめがたくおぼしたり。院も物心ほそくおぼさるゝに得心づよからず打ちまほたれ給ひつゝいにしへ今の御物語いと弱げに聞えさせ給ひて、「今日か明日かと覺え侍りつゝ、さすがに程經ぬるを打ちたゆみて、深きほ意のはしにてもとけずなりなむことと思ひおこしてなむ。かくても残りの齡なくばおこなひの志もかなふまじけれどまづかりにてもものどめおきて念佛をだにと思ひ侍る。はかばかしからぬ身にても世にながらふること唯このこゝろざしにひきとゞめられたると思ふ給へ知られぬにしもあらぬを今までつとめなきをこたりをだに安からずなむ」とて、おぼしおきてたるさまなど委しくのたまはする序に「女御子たちを數多うち捨て侍りなむ、心苦しき中にも又思ひ譲る人なきをば取りわきてうしろ見煩ひ侍る」とてまほにはあらぬ御氣色を心苦しと見奉り給ふ。御心のうちにもさすがにゆかしき御有様なればおぼしすぎしがたくて「げにたゞ人よりもかゝるすぢは、わたくしざまの御後見なきは口惜しげなるわざになむ侍りける。春宮かくておはしませばいとかしこき末の世のまうけの君と天の下のたのみ所にあふき聞えさするを、ましてこの御事と聞え置かせ給はむことは、ひとこととしておろそかにかろめ申し給ふべきには侍らねば、更に行く先の事おぼし惱むべきにも侍らねど、げにことかぎりあればおほやけと

なり給ひ世の政御心にかなふべしとはいひながら、女の御ためになればかりのけざやかなる御心よせあるべきにも侍らざりけり。すべての女の御ためにはさまざま誠の御後見とすべきものは猶さるべきすぢに契をかはし、えさらぬことにはぐくみ聞ゆる御まもりめ侍るなむ後ろ安かるべきことに侍るを、なほ志ひてのちの世の御疑残るべくばよろしきに思し選びて忍びてさるべき御あづかりを定め置かせ給ふべきになむ侍る」と奏し給ふ。「さやうに思ひよると侍れどそれもかたきことになむありける。いにしへのためしを聞き侍るにも世をたもつさかりのみこにだに人を選びてさるさまのことを志給へるたぐひ多かりけり。ましてかく今はとこの世を離るゝきはにてことごとしく思ふべきにもあらねど、又志かすつる中にも捨てがたきことありてさまざまに思ひ煩ひ侍る程に病は重りゆく。又とりかへすべきにもあらぬ月日の過ぎ行けば、心あわたしくなむ。かたはらいたきゆづりなれどこのいはけなき内親王ひとりとりわきてはぐくみおぼしてさるべきよすがをも御心におぼし定めて預け給へと聞えまほしきを、權中納などのひとり物しつる程に進みよるべくこそありけれ。おほいまうちぎみにせんせられてねたく覺え侍る」と聞え給ふ。「中納言の朝臣まめやかなる方は、いとよく仕うまつりぬべく侍るを何事もまだ淺くてたどり少くこそ侍らめ、かたじけなくとも深き心にて後見聞えさせ侍らむに、おはします御かげに變りてはおぼされしを、唯行く先短くて仕うまつりさすことや侍らむと、疑はしき方のみなむ心苦しく侍るべき」とうけひき申し給ひつ。夜に入りぬればあるじの院方もまらうどの上達部達も、皆御

前にて御あるじのこと、さうじものにてうるはしからずなまめかしくせさせ給へり。院の御前にせんかうのかけばんに御鉢など昔に變りて參るを人々涙おしのごひ給ふ。哀なるすぢのことどもあれどうるさければかゝず。夜ふけてかへり給ふ。祿どもつぎつぎに賜ふ。別當大納言も御送に參り給ふ。あるじの院は、今日の雪にいとゞ御風くはゝりてかき亂り惱ましくおぼさるれどこの宮の御事聞え定めつるを心安くおぼしけり。六條院はなま心苦しうさまざまおぼし亂る。紫の上もかゝる御定めなどかねてもほのぎゝ給ひけれど、さしもあらじ、前齋院をもねんごろに聞え給ふやうなりしかど、わざともおぼし遂げずなりにしをなどおぼして、さることやあるともとひ聞え給はず何心もなくおぼするにいとほしく、この事をいかにおぼさむ、我が心はつゆも變るまじく、さることあらむにつけてはなかなかいとゞ深さこそまさらめ、見定め給はざらむ程いかに思ひ疑ひ給はむなど安からずおぼさる。今の年比となりてはましてかたみにへだて聞え給ふことなく、あはれなる御中なれば、まばし心に隔て残したることあらむもいぶせきを、その夜は打ち休みてあかし給ひつ。又の日雪打ち降り空の氣色も物哀に過ぎにし方行く先の御物語聞えかはし給ふ。「院のたのもしげなくなり給ひにたる御とぶらひに參りて哀なる事どものありつるかな。女三の宮の御ことをいと捨てがたげにおぼしてまかまかなむのたまはせつけしかば、心苦しくて得聞えいなびずなりにしを、ことごとしくぞ人はいひなさむかし。今はさやうのこともうひうひしくすさまじく思ひなりにたれば、入づてに氣色ばませ給ひしには、とかく遁れ聞えしを、對面のついで

に心ふかきさまなることゞもをのたまひつゞけしには、えすくずしくもかへさひ申さて  
なむ。深き御山ずみにうつろひ給はむ程にこそは、わたし奉らめ。あぢきなくや思さるべき。  
いみじきことありともさだめある世に變ることは更にあるまじきを、心なおき給ひよ。か  
の御ためこそ心苦しからめ。それもかたはならずもてなしてむ。たれもたれものどかにて過  
ぐし給はゞ」など聞え給ふ。はかなき御すさびごとをだにめざましきものにおぼして心安か  
らぬ御心ざまなれば、いかゞおぼさむとおぼすに、いとつれなくて「哀なる御ゆづりにこそ  
はあなれ。こゝにはいかなる心を置き奉るべきにか。めざましくかくてはなど咎めらるまじ  
くは心安くても侍りなむを、かの母女御の御かたさまにても疎からずおぼしかずまへてむ  
や」と、ひげし給ふを、「あまりかう打ち解け給ふ御ゆるしもいかなればとうしろめたくこそ  
あれ。誠はさだにおぼし許して我れも人も心得てなだらかにもてなし過ぐし給はゞ、いよいよ  
よあはれになむひがこと聞えなどせむ。人のこと聞き入れ給ふな。すべて世の人のくちとい  
ふものなむ、たがいひ出づることゝもなく、おのづから人のなからひなど打ちほゝゆがみ思  
はずなる事出でくるものなめるを、心ひとつにまづめてありさまにまたがふなむよき。まだ  
きに騒ぎてあいなき物恨みし給ふな」といよいよよくをしへ聞え給ふ。心のうちにも、かく空よ  
り出で來にたるやうなることにてのがれ給ふかたなきをにくげにも聞えなさじ。我が心に  
憚り給ひ諫むることに隨ひ給ふべきおのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかる  
べき方なきものからをこがましく思ひむすぼゝるゝさま世の人にもり聞えじ、式部卿宮の



大北の方常にうけはしげなることゞもをのたまひ出でつゝ、あぢきなき大將の御ことにてさへ怪しく恨みとねみ給ふなるを、「かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせ給はむなど、おいらかなる人の御心といへどいかでかはかばかりのくまはなからむ。今はさりとものみ我が身を思ひあがりうらなくて過しける世の人笑へならむことをまたには思ひつゞけ給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり。』年もかへりぬ。朱雀院には、姫宮六條院にうつろひ給はむ御いそぎをし給ふ。聞え給ひつる人々いと口惜しくおぼしなげく。内にも御心ばへありて聞え給ひける程に、かゝる御定めを聞き召しておぼしとまりにけり。さるは今年ぞ四十ぢになり給ひければ、御賀のことおほやけにも聞き召し過ぐさず、世の中のいとなみにてかねてより響くを、ことのわづらひ多く、嚴めしきとは昔より好み給はぬ御心にて皆かへさひ申し給ふ。正月廿三日子の日なるに左大將殿の北の方若菜まぬり給ふ。かねて氣色も漏し給はでいといたく忍びておぼし設けたりければ俄にて得諫め返し聞え給はず。忍びたれどさばかりの御いさほひなれば、渡り給ふ儀式などいとひききことなり。南のおとゞの西のはなちいでにおましよそふ。屏風かべしろより始め新しく拂ひまつらはれたり。麗しくいしなどは建てず御地敷四十枚御志とね脇息などすべてその御具どもいと清らにせさせ給へり。螺鈿の御厨子二よろひに御衣箱四つすゑて、夏冬の御さう束、かうご、薬の箱、御視、ゆするつき、かゝげの箱などやうのもの、うちうちさよらを盡し給へり。御かさしの臺にはぢんまたんを作り、珍しきあやめを盡し、同じきかねをも色づかひたしたる心ばへあり今めか

しく、かんの君物のみやび深くがどめき給へる人にてめなれぬさまに志なし給へり。大かたのことをば殊更に事々しからぬ程なり。人々参りなど志給ひておましに出て給ふとてかんの君に御對面あり。御心のうちには古おぼし出づることもさまさまなりけむかし。いと若く清らにてかく御賀などいふことはひがかぞへにやと覺ゆるさまのなまめかしく人のおやげなくおはしますを、珍しく年月へだて、見奉り給ふはいと恥しけれど猶げざやかなるへだてもなくて御物語聞えかはし給ふ。幼き君もいと美しくて物し給ふ。かんの君は打ち續きても御覽せられじとのたまひけるを大將のかゝる序にだに御覽せさせむとて、二人同じやうに振分髪の何心なき直衣姿どもにておはす。「過ぐるよはひもみづからの心にはことに思ひ咎められず、唯昔ながらの若々しき有様にて改むることもなきを、かゝる未々のもよほしになむなまはしたなきまで思ひ知らるゝ折も侍りける。中納言のいつしかと設けたなるをうとうとしく思ひ隔てゝまだ見せずかし。人より殊に數へとりける今日の子の日こそ猶うれたけれ。まばしは老を忘れても侍るべきを」と聞えたまふ。かんの君もいとよくねびまさりものものしきけさへ添ひて見るかひあるさまし給へり。

「若葉さすのべの小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな」とせめておとなび聞え給ふ。沈の折敷四つして御若葉さまばかりまゐれり。御かはらけ取り給ひて、

「小松原すゑのよはひにひかれてや野べのわかなも年をつむべき」など聞えかはし給ひて上達部あまた南の廂につき給ふ。式部卿宮は参りにくゝおぼしけれど、御せうそこありけ

るにかく親しき御なからひにて心あるやうならむもびんなくて日たけてぞ渡り給へる。大將のしたり顔にてかゝる御なからひにうけばりてもやし給ふも、げに心やましげなるわざなめれど御うまごの君達はいづかたにつけても立ちてさふやくしたまふ。このよそえだ、をりひづものよとち中納言をはじめ奉りてさるべきかぎりとり續け給へり。御かはらけくたり若菜の御羨參る。御前には沈のかけはん四つおほんつきどもなつかしく今めきたる程にせられたり。朱雀院の御藥のこと猶たひらぎはて給はぬにより樂人などは召さず。御笛などおほきおととのその方はとゝのへ給ひて、世の中にこの御賀より又珍しく清らを盡すべきことあらじとのたまひて勝れたるねのかぎりをかねてよりおほし設けたりければ忍びやかに御遊あり。とりどりに奉る中に和琴はかのおととの第一に秘し給ひける御琴なり。さるものゝ上手の心を留めてひき鳴らし給へるねいとならびなきを、ことひとは掻きたてにくゝし給へば、右衛門督のかたくいなぶるをせめ給へば、げにいとおもしろくをさをさ劣るまじくひく。何事も上手のつぎといひながらかくしも得つがぬわざどかしと心にくゝ哀に人々おほす。しらべに従ひてあとある手ども定まれるもろこしのつたへどもはなかなか尋ね知るべき方あらはなるを、心にまかせて唯掻き合せたるすがゝきに、萬の物の音とゝのへられたるは、たへにおもしろく怪しきまでひく。父おとゝはことのをもいとゆるにはりていたうくだして調べ響き多く合せてぞ掻きならし給ふ。これはいとわらくかにのぼるねのなつかしく愛敬づきたるを、いとかうしもは聞えざりしをと御子達も驚き給ふ。琴は兵部

卿宮ひき給ふ。この御琴は宜陽殿の御物にて代々に第一の名ありし御琴を故院の末つ方一品宮好み給ふことにてたまはり給へりけるを、この折の清らを盡し給はむとするためおとゞの申し給はり給へる御つたへつたへをおぼすに、いと哀に昔のことも戀しくおぼし出でらる。御子も多ひ泣きえ留め給はず。御氣色とり給ひてきんは御前にゆづり聞えさせ給ふ。物の哀にえ過し給はで珍しきもの一つばかりひき給ふにことごとしからねど限なくおもしろき夜の御遊なり。さうがの人々みはしに召してすぐれたる聲のかぎり出してかへり聲になる。夜の更け行くまゝに物のまらべどもなつかしく變りて青柳遊び給ふ程げにねぐらの鶯驚きぬべくいみじくおもしろし。わたくしごとこのさまにまなし給ひて祿などいときやうざくに設けられたりけり。曉にかんの君かへり給ふ、御贈物などありけり。「かう世を捨つるやうにて明し暮すほどに年月のゆくへも知らず顔なるをかう數へ知らせ給へりけるにつけては心ほそくなむ。時々は老いやまさると見給ひくらべよかし。かくふるめかしき身の所せきに、思ふに従ひてたいめなきもいと口惜しくなむ」など聞え給ひて哀にもをかしくも思ひいで聞え給ふとなきにしもあらねば、なかなかほのかにかく急ぎ渡り給ふを、いと飽かず口惜しくぞおぼされける。かんの君も誠の親をばさるべき契ばかりに思ひ聞え給ひて、ありがたくこまやかなりし御心ばへを、年月にそへてかく世に住みはて給ふにつけてもおろかならず思ひ聞え給ひけり。かくて二月の十餘日に朱雀院の姫宮六條院に渡り給ふ。この院にも御心まうけ世の常ならず若菜參りし西の放ちいでに御帳たて、其方の一二の對渡殿かけ

て女房のつぼねまでこまかにまつらひ磨かせ給へり。内に参り給ふ人の作法をまねびてかの院よりも御調度などはこぼる。渡り給ふ儀式いへば更なり、御送に上達部など數多参り給ふ。かのけいし望み給ひし大納言も安からず思ひながらさぶらひ給ふ。御車よせたる所に院わたり給ひておろし奉り給ふほどなども例には違ひたる事どもなり。たゞ人におはすれば萬の事がぎりありてうちまゐりにも似ず。婿の大君といはむにも、ことたがへて珍しき御中のあはひどもになむ。三日が程はかの院よりもあるじの院方よりも厳めしく珍しきみやびを盡し給ふ。對の上もことに觸れてたゞにもおぼされぬ世の有様なり。げにかゝるにつけてもこよなく人に劣りけたるゝこともあるまじけれど、又ならぶ人なくならひ給ひて華やかにおひさき遠くあなづりにくきげはひにてうつろひ給へるに、なまはしたなくおぼさるれどつれなくのみもてなして、御わたりのほどももろ心にはかなきこともまいて給ひていらうたげなる御有様をいとゞありがたしと思ひ聞え給ふ。姫宮はげにまだいとちひさくかたなりにおはする内にもいといはけなき御氣色してひたみちに若び給へり。かの紫のゆかり尋ねとり給へりしをりおぼし出づるに、かれはざれていふかひありしを、これはいといはけなくのみ見え給へば、よかめり、にくげにおしたちたることなどはあるまじかめりとおぼすものから、いとあまり物のはえなき御さまかなと見奉り給ふ。三日が程は夜がれなく渡り給ふを、年比さもならひ給はぬ心地に忍ぶれどなほ物哀なり。御ぞどもなどいよいよたきしめさせ給ふものから打ち眺めてものし給ふ氣色いみじくうたげにをかし。などて萬の事

ありとも又人をばならべて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりきにける我がをこたりにかゝることも出てくるぞかし、若けれど中納言をばえおぼしかけずなりぬめりしをと、われながらつらくおぼし續けらるゝに涙ぐまれて「今夜ばかりはことわりと許し給ひてむな。これよりのちのとだえあらむこそ身ながらも心づきなかるべけれ。又さりとてかの院に開し召さむことよ」と思ひ亂れ給へる御心のうち苦しげなり。少しほゝゑみて「みづからの御心ながらだに得定め給ふまじかなるをましてことわりもなにも何處にとまるべきにか」といふかひなげにとりなし給へる、恥しうさへ覺え給ひてつらづゑをつきてよりふし給へれば、御硯を引きよせて、

「めに近くうつればかはる世の中を行くすゑとほくたのみけるかな」。ふるることなど書きませ給ふを取りて見給ひてはかなきことなれど、げにとことわりにて、

「命こそたゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬ中のちぎりを」とみにも得渡り給はぬを「いとかたはらいたきわざかな」とそゝのかし聞え給へばなよゝかにをかしき程にえならず句ひて渡り給ふを見出し給ふもいとたゞにはあらずかし。年比さもやあらむと思ひしことども、今はとのみもてはなれ給ひつゝ、さらばかうにこそはと打ち解けゆく末に、ありありてかく世のさゝみゝもなのめならぬ事の出でさぬるよ。思ひ定むべき世の有様にもあらざりければ今より後もうしろめたうぞおぼしなりぬる。さこそつれなくまぎらはし給へどさぶらふ人々も、思はずなる世なりや、數多ものし給ふやうなれど何方も皆こなたの御け

はひにはかたさり憚るさまにて過ぐし給へばこそことなかなだらかにもあれ、おしたちてかばかりなる有様にけたれても得過ぐし給はじ、又さりとはかなきことにつけても安からぬことのあらむ折々、必ず煩はしき事ども出できなむかしなどおのがじ、打ち語らひなげかしげなるを、露も見知らぬやうにいとけはひをかく物語などし給ひつゝ夜更くるまておはす。かう人のたゞならずいひ思ひたるも聞きにくしとおぼして「かくこれかれ數多物し給ふめれど御心にかなひて今めかしくすぐれたるきはにもあらずと、めなれてさうざうしくおぼしたりつるに、この宮のかく渡り給へるこそめやすけれ。猶わらはごゝるのうせぬにやあらむ、我れもむつび聞えてあらまほしきを、あいなくへだてあるさまに人々やとりなさむとすらむ。ひとしき程劣りざまなど思ふ人にこそたゞならず耳だつこともおのづから出で來るわざなれ。辱く心苦しき御ことなめればいかで心おかれ奉らじとなむ思ふ」などのたまへば、中務中將の君などやうの人々めをくはせつゝ、「あまりなる御思ひやりかな」などいふべし。昔はたゞならぬさまにつかひならし給ひし人どもなれど年比はこの御方にさぶらひて皆心よせ聞えたるなめり。こと御方々よりもいかにおぼすらむ。もとより思ひ見馴れたる人々はなかなか心やすきをなどおもむけつゝとぶらひ聞え給ふもあるを、かくおしはかる人こそなかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものをなどてかさのみは思ひ惱まむなどおぼす。あまり久しきよひるも例ならず人や咎めむと心のおに、おぼして入り給ひぬれば、御ふすままりぬれど、實にかたはら寂しきよなよなへにけるも猶たゞならぬ心地すれ

どかの須磨の御別の折をおぼし出づれば、今はとかけはなれ給ひても、唯同じ世のうち聞き奉らましかばと我が身までのことはうち置きあたらしく悲しかりし有様ぞかし。さてそのまぎれに我も人も命堪へずなりなましかばいふかひあらまし世かはとおぼしなほす。風打ち吹きたる夜のけはひ冷やかにてふとも寝入られ給はぬを近くさぶらふ人々怪しとや聞かむとうちもみじろぎ給はぬも猶いと苦しげなり。夜深さとの聲の聞えたるも物哀なり。わざとつらしとはあらねどかやうに思ひ亂れ給ふけにや、かの御夢に見え給ひければ、打ち驚き給ひていかにと心騒がし給ふにとりのね待ち出て給へれば、夜ふかさも知らずがほに急ぎ出で給ふ。いといはけなき御有様なれば乳母たち近く侍ひけり。妻戸押し開けて出で給ふを見奉りおくる。明けくれの空に雪の光見えておぼつかなし。名残までとまれる御にほひ、やみはあやなしとひとりごたる。雪は所々消え残りたるがいと白き庭のふとけぢめ見えわかれぬ程なるに、猶残れる雪と忍びやかに口ずさみ給ひつゝ、御格子打ち叩き給ふも久しくかゝることなかりつるならひに、人々もそらねをしつゝやゝまたせ奉りてひきあげたり。「こよなく久しかりつる身もひえにけるは、おぢ聞ゆる心のおろかならぬにこそあめれ。さるは罪もなしや」とて御ぞひきやりなどし給ふに、少しぬれたる御ひとへの袖をひき隠して、うらもなくなつかしきものから打ち解けてはたあらぬ御用意などいと耻しげにをかし。限なき人と聞ゆれどかたかめる世をとおぼしくらべらる。萬いにしへのことをおぼし出でつゝ、解け難き御氣色を恨み聞え給ひてその日は暮し給へれば、えわたり給はで寢殿には御



せうそこをぞ聞え給ふ。今朝の雪に心地あやまりていとなやましく侍れば心やすき方にた  
めらひ侍るとあり。御めのとさ聞えさせ侍りぬとばかりことばに聞えたり。殊なることなの  
御返りやおぼす。院に聞し召さむこともいとほし、この頃ばかりつくろはむとおぼせど、  
えさもあらぬを、さは思ひしことぞかしあな苦しとみづから思ひつゞけ給ふ。女君も思ひや  
りなき御心かなと苦しがり給ふ。今朝は例のやうに大殿籠り起きさせ給ひて宮の御方に御  
文奉れたまふ。殊に恥しげもなき御さまなれど御筆などひきつくろひてまろき紙に、

「中みちをへだつる程はなけれども心みだるゝけさの泡ゆき」。梅につけ給へり。人めし  
て「西の渡殿より奉らせよ」とのたまふ。やがて見出して端近く坐します。白き御どもを着  
給ひて花をまさぐり給ひつ。友まつ雪のほのかに残れる上に打ち散りそふ空をながめ給へ  
り。鶯の若やかに近き紅梅の末にうち鳴きたるを、袖こそ匂へと花をひき隠して御簾押し上  
げて眺め給へるさま、夢にもかゝる人の親にて重き位と見え給はず、若うなまめかしき御さ  
まなり。御返り少し程経る心地すれば入り給ひて女君に花を見せ奉り給ふ。「花といはゞか  
くこそ匂はましけれな。櫻にうつしては又ちりばかりも心わく方なくやあらまし」などのた  
まふ。「これも數多にうつろはぬ程目とまるにやあらむ。花の盛にならべて見ばや」などのた  
まふに御かへりあり。紅の薄葉にあざやかに押し包まれたるを、胸つぶれて御手のいと若  
きをまばし見せ奉らてあらばや、隔つとはなけれどあははしきやうならむは、人のほどか  
たじけなしとおぼすに、ひき隠し給はむも心おき給ふべければ、かたそばひろげ給へるを、

まじり目に見おこせて添ひふし給へり。

「はかなくてうはのそらにぞ消えぬべき風にたゞよふ春のあわ雪」。御手げにいと若く幼げなり。さばかりの程になりぬる人はいとかくはおはせぬものをと目とまれど見ぬやうに紛はして止み給ひぬ。こと人の上ならばさこそあれなどは忍びて聞え給ふべけれど、いとほしくて、「唯心安くを思ひなし給へ」とのみ聞え給ふ。今日は宮の御方に晝わたり給ふ。心こゝとに打ちけさうし給へる御有様今見奉る女房などはまして見るかひありと思ひ聞ゆらむかし。御乳母などやうのおひしらへる人々ぞ、いでやこの御有様一所こそめでたけれ、めざましきことはありなむかしと、打ちまぜて思ふもありけり。女宮はいとらうたげに幼きさまにて御志つらひなどのことごとしくよだけて麗しきにみづからは何心もなく物はかなき御程にて、いと御ぞがちにみもなくあえかなり。ことに恥ぢなどもし給はず唯ちごのおもぎらひせぬ心地して心やすく美しきさまし給へり。院のみかどは雄々しくよくよかなる方の御さえなどこそ心得なく坐しますと世人思ひためれ。をかしきすぎなまめきゆゑゆゑしき方は人にまさり給へるを、などてかくおいらかにおほしたて給ひけむ。さるはいと御心留め給へるみこと聞きしをと思ふもなまくちをしけれどにくからず見奉り給ふ。唯聞え給ふまゝになよなよと靡き給ひて御いらへなどをも覺え給ひけることはいはけなく打ちのたまひ出て、えみはなたず見え給ふ。昔の心ならましかばうたて心おとりせましを今は世の中を皆さまさまに思ひなだらめて、とあるもかゝるもさは離るゝことはかたきものなりけり、とりど

りにこそおほうはありけれ、よその思ひはいとあらまほしき程なりかしとおぼすに、さしならびめかれず見奉り給へる年比よりも對の上の御ありさまぞ猶ありがたくわれながらもおぼしたてけりとおぼす。一夜のほどあしたのまま戀しく覺束なくいとゞしき御志のまさるを、などかく覺ゆらむとゆゝしきまでなむ。院のみかどは月のうちにみ寺にうつろひ給ひぬ。この院に哀なる御せうそことも聞え給ふ。姫宮の御ことは更なり、煩はしくいかに聞く所やなど憚り給ふ事なくともかくも唯御心にかけてもてなし給ふべくぞたびたび聞え給ひける。されど哀にうしろめたく幼くおはするを思ひ聞え給ひけり。紫の上にも御せうそことにあり。「幼き人の心なきさまにてうつろひものすらむを、罪なくおぼし許して、後見給へ尋ね給ふべき故もやあらむとぞ。

そむきにしこの世にのこる心こそいる山みちのほだしなりけれ。やみをえはるけて聞ゆるもをこがましくや」とあり。おとゞも見給ひて、「哀なる御せうそこをかしてまり聞え給へ」とて御使にも女房してかはらけさし出させ給ひてまひさせ給ふ。御返りはいかゞなど聞えにくくおぼしたれどことごとしくおもしろかるべき折のことならねば、唯心をのべて、

「背く世のうしろめたくはさがりがたきほどしをまひてかけな離れそ」などやうにぞあめりし。女のさう東に細長添へてかづけ給ふ。御手などのいとめてたきを院御覽じて何事も恥しげなめるあたりに、いはけなくて見え給ふらむといと心苦しうおぼしたり。今はとて女御更衣達などおのがじゝ別れ給ふも哀なることなむ多かりける。ないしのかんの君は故きさ

いの宮のおはしまし、二條の宮にぞ住み給ふ。姫宮の御事を置きてはこの御事をなむ願みがちにみかどもおぼしたりける。尼になりなむとおぼしたれどかゝるきほひには慕ふやうに心あわたゞしと諫め給ひて、やうやう佛の御事など急がせ給ふ。六條のおとゞは哀に飽かずのみおぼしてやみにし御あたりなれば年比も忘れがたういかならむをりに對面あらむ、今一度あひ見てその世の事も聞えまほしくのみおぼし渡るをかたみに世のきゝ耳も憚り給ふべき身の程に、いとほしげなりし世のさわぎなどもおぼし出でらるれば萬につゝみ過ぐし給ひけるを、かうのどやかに給ひて世の中を思ひまづまり給ふらむころほひの御有様、いよいよゆかしく心もとなければあるまじきことゝはおぼしながら大かたの御とぶらひにことつけて哀なるさまに常に聞え給ふ。若々しかるべき御あはひならねば御返りも時々につけて聞えかはし給ふ。昔よりはこよなくうち具し整ひはてにたる御けはひを見給ふにも猶忍びがたくて、昔の中納言の君のもとにも心深きことゝもを常にのたまふ。かの人のせうとなる和泉のささの守を召しよせて若々しくいにしへにかへりて語らひ給ふ。「人づてならで物ごしに聞えまらすべきことなむある。さりぬべく聞えなびかしていみじく忍びて參らむ。今はさやうのありきも所せき身のほどにおぼろげならず忍ぶべきことなれば、そこにも又人にはもらし給はじと思ふにかたみにうしろ安くなむ」との給ふ。かんの君「いでや世の中を思ひ知るにつけても昔よりつらき御心をこゝら思ひつめつる年ごろのはてに、哀に悲しき御事をさし置きていかなる昔語をか聞えむ。實に人は漏り聞かぬやうありとも心

のとはむこそいと恥しかるべけれ」と打ち歎き給ひつゝ猶更にあるまじきよしをのみ聞ゆ。いにしへわりなかりし世にだに心かはし給はぬことにしもあらざりしを、實に背き給ひぬる御ためうしろめたきやうにはあれど、あらざりしことにもあらねば今しもげざやかにきよまはりて立ちにし我が名今さらに取り返し給ふべきにやとおぼしおこして、この志の道の森を道のまゐるべにてまうで給ふ。女君には、東の院にもする常陸の君の日比煩ひて久しくなりけるを物騒しきまぎれにとぶらはねばいとほしくてなむ。晝などげざやかにわたらむもびんなきを夜の間に忍びてとなむ思ひ侍る。人にもかくとも知らせじ」と聞え給ひていといたく心けさうし給ふを例はさしも見えぬあたりを、あやしと見給ひて思ひあはせ給ふこともあれど、姫宮の御事の後は何事もいと過ぎぬる方のやうにはあらず、少し隔つる心添ひて見知らぬやうにておはす。その日は寢殿へも渡り給はて御文書きかはし給ふ。たきものなどに心を入れて暮し給ふ。よひ過してむつまじき人の限四五人ばかり網代車のむかし覺えてやつれたるにて出て給ふ。和泉の守して御せうそこ聞え給ふ。かく渡りおはしましたるよしさゝめき聞ゆれば、驚き給ひて怪しくはいかやうに聞えたるにかとむつがり給へどをかしやかにて返し奉らむにいとびんなう侍らむとて、あながちに思ひめぐらして入れ奉る。御とぶらひなど聞え給ひて「唯こゝもとに物ごしにても、更に昔のあるまじき心などは残らずなりにけるを」と、わりなく聞え給へばいたくなげくなげくぬざり出て給へり。さればよ猶げぢかさはとかつおぼさる。かたみにおぼろげならぬ御みじろきなればあはれも少

からず。ひんがしの對なりけり、辰巳のかたの廂にすゑ奉りてみさうじのまりはかためたれば、「いと若やかなる心地もするかな。年月のつもりをも紛れなく數へらるゝ心ならひに、かくおぼめかしきはいみじうつらくこそ」と恨み聞え給ふ。夜いたく更け行く。玉藻に遊ぶましの聲々などあはれに聞えて、まめまめと人め少なき宮の内の有様にさも移り行く世かなとおぼしつゝくるに平仲がまねならねど誠に涙もろになむ。昔に變りておとなおとなしくは聞え給ふものから、これをかくてやとひき動かし給ふ。

「年月をなかにへだて、逢坂のさもせきがたくおつるなみだか」。女、

「涙のみせきとめがたきまみづにて行き逢ふ道はやく絶えにき」などかけはなれ聞え給へど、いにしへをおぼし出づるも誰により多うはさるいみじきこともありし世のさわぎぞと思ひ出で給ふに、實に今一度の對面はありもすべかりけりとおぼしよわるも、もとよりづしやかなる所はおはせざりし人の、年比はさまざまに世の中を思ひ知り、きし方をくやしくおぼやけわたくしのことに觸れつゝ數もなくおぼし集めて、いといたく過し給ひにたれど、昔覺えたる御對面にその世の事も遠からぬ心地して得心づよくもてなし給はず。猶らうらうしく若うなつかしくて一方ならぬ世のつゝましさをも哀れをも思ひ亂れて歎きがちにてもものし給ふ氣色など、今始めたらむよりも珍しく哀にて明け行くもいと口惜しくて出で給はむ空もなし。朝ぼらけのたゞならぬ空に百千鳥の聲もいとうらゝかなり。花は皆散り過ぎて名残かすめる梢の淺緑なるこたち、昔藤の宴し給ひしこの頃のことなりけむかしとお

ぼし出づるに、年月のつもりにける程もその折のことかきつゞけ哀におぼさる。中納言の君の見奉り送るとて妻戸押し開けたるに立ちかへり給ひて「この藤よいかに染めけむ色にか。猶えならぬ心添ふにほひにこそ。いかでかこの影は立ち離るべき」とわりなくいでがてにおぼしやすらひたり。やまぎはよりさし出づる日の花やかなるにさしあひ、目も輝く心地する御さまのこよなくねび加はり給へる御けはひなどを珍しく程経ても見奉るはましてよのつねならず覺ゆれば、さる方にもなどか見奉り過し給はざらむ、御宮仕にもかぎりありてきはことに離れ給ふこともなかりしを、故宮のよろづに心を盡し給ひ、よからぬ世のさわぎにかるがるしき御名さへ響きて、やみにしよなど思ひ出でらる。名残おほく残りぬらむ御物語のとぢめにはげに残りあらせまほしきわざなめるを、御身を心にえ任せさせ給ふまじく、こゝらの人目もいと恐しくつゝまじければ、やうやうさしあがり行くに心あわたしく、廊のとに御車さしよせたる人々も忍びてこわづくり聞ゆ。人召してかの咲きかゝりたる花一枝折らせ給へり。

「まづみしも忘れぬものをこりずまに身をなげつべきやどの藤波」。いといたくおぼし煩ひてよりぬ給へるを心ぐるしう見奉る。女君も今さらにはいとつゝましくさまさまに思ひ亂れ給へるに花のかげは猶なつかしくて、

「身をなげむふちもまことの淵ならでかけじやさらにこりずまの波」。いと若やかなる御ふるまひを心ながらも許さぬことにおぼしながら關守のかたからぬたゆみにや、いとよく

語らひ置き出て給ふ。そのかみも人よりこよなく心とめて思ふ給へりし御志ながらはつかにて止みにし御なからひにはいかでか哀も少からむ。いみじく忍び入り給へる御ねくれのさまを待ちうけて女君さばかりならむと心得給へれどおぼめかしくもてなしておはす。なかなか打ちふすべなどし給へらむよりも心苦しく、などかくしも見放ち給へらむとおぼさるれば、ありしよりげに深き契をのみ長き世をかけて聞え給ふ。かんの君の御ことも又もらすべきならねど、いにしへの事も知り給へれば「まほにはあらねど物ごしにはつかなりつる對面なむのこりある心地する。いかでひとめ咎めあるまじくもて隠して今一度も」と語らひ聞え給ふ。打ち笑ひて「今めかしくもなりかへる御有様かな。昔を今に改めくはへ給ふほど中空なる身のため苦しく」とてさすがに涙ぐみ給へるまみのいとらうたげに見ゆるに「かう心安からぬ御氣色こそ苦しけれ。唯おいらかにひきつみなどして教へ給へ。隔あるべくもならはし聞えぬを思はずにこそなりにける御心なれ」とて、よろづに御心とり給ふほどに何事も得残し給はずなりぬめり。宮の御方にもとみにえ渡り給はず、こしらへ聞えつゝおはします。姫宮は何ともおぼしたらぬを御うしろみどもぞ安からず聞えける。煩はしうなど見え給ふ氣色ならば其方もまして心苦しかるべきををいらかに美しき翫びぐさに思ひ聞え給へり。桐壺の御方はうちはへえ罷て給はず、御暇のありがたければ心安くならひ給へる若き御心にいと苦しくのみおぼしたり。夏比なやましくし給ふを頼にも許し聞え給はねばいとわりなしとおぼす。珍しきさまの御心地にぞありける。まだいとあえかなる御程にいと



ゆゝしくぞ誰も誰もおぼすらむかし。辛うじてまかて給へり。姫宮のおはしますおとゞのひんがし面に御方はまつらひたり。明石の御方今は御身に添ひて出て入り給ふもあらまほしき御宿世なりかし。對の上こなたに渡りて對面し給ふついでに「姫宮にも中の戸あけて聞えむ。かねてよりもさやうに思ひしかど、序なきにはつゝましきをかゝる折に聞えなれば心安くなむあるべき」とおとゞに聞え給へばうちゑみて「思ふやうなる御語らひにこそはあなれ。いと幼げに物し給ふめるをうしろやすく教へなし給へかし」とゆるし聞え給ふ。宮よりも明石の君の恥しげにてまじらはむをおぼせば御ぐしすましひきつくるひておはする。たぐひあらじと見え給へり。おとゞは宮の御方に渡り給ひて「夕がたかの對に侍る人のまげいさに對面せむとて出てたつついでに近づき聞えさせまほしげにもものすめるを、ゆるしてかたらひ給へ。こゝろなどはいとよき人なり。まだわかかわかしくて御あそびがたきにもつきなからずなむ」などきこえ給ふ。「はづかしうこそはあらめ。何事をか聞えむ」とおいらかにのたまふ。「人のいらへはことにまたがひてこそはおぼし出でめ。隔て置きてなもてなし給ひそ」とこまかにをしへ聞え給ふ。御中うるはしくて過し給へとおぼすあまりに、何ごゝろなき御ありさまを見顯されむも恥しく味氣なけれどさのたまはむを心隔てむもあいなしとおぼすなりけり。對にはかく出でたちなどしたまふものからわれよりかみの人やはあるべき、身のほどのものはかなきさまを見え置きたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつゞけられてうちながめ給ふ。手習などするにも、おのづからふることも物おもはしきすぢのみか

ゝるゝを、さらばわが身には思ふことありけりとみづからぞおぼし知らるゝ。院わたりたまひて宮女御の君などの御ありさまどもをうつくしうもおぼしするかなとさまさま見たてまつり給へる御めうつしには年ごろめなれたまへる人のおぼろげならむがいとかくおどろかるべきにもあらぬをなほたぐひなくこそはと見たまふ。ありがたきことなりかし。あるべきかぎりけ高うはづかしげにとゝのひたるに添ひて、はなやかにいまめかしくにほひなまめきたるさまさまのかをりも取りあつめめてたきさかりに見えたまふ。こぞより今年はまさり昨日より今日はめづらしくつねにめなれぬさまの志たまへるを、いかでかくともありけむとおぼす。打ち解けとりつる御手習を硯の志たにさし入れ給へれど、見つけ給ひて引きかへし見たまふ。手などのいとわざとも上手と見えでらうらうしくうつくしげに書きたまへり。「身にちかく秋やさぬらむ見るまゝに青葉の山もうつろひにけり」とある所に目とゞめ給ひて、

「水鳥の青ばゝ色もかはらぬをばぎの志たこそけしきことなれ」など書き添へつゝすさび給ふ。ことに觸れて心苦しき御氣色のしたにはおのづからもりつゝ見ゆるをことなくけち給へるもありがたく哀におぼさる。今夜は何方にも御暇ありぬべければかのしのび所にいとわりなく出て給ひにけり。いとあるまじきことゝいみじくおぼし返すにもかなはざりけり。春宮の御方はおちの母君よりもこの御方をばむつまじきものに頼み聞え給へり。いと美しげにおとなびまさり給へるを思ひ隔てずかなしと見奉り給ふ。御物語などいと懐しく

聞えかはし給ひて中の戸あけて宮にも對面し給へり。いと幼げにのみ見え給へば心やすく  
ておとなおとなしく親めきたるさまに昔の御すぢをも尋ね聞え給ふ。中納言の乳母といふ  
召し出で、「同じかざしを尋ね聞ゆればかたじけなけれど、わかぬさまに聞えさすれどつい  
でなくて侍りつるを、今よりは疎からずあなたなどにも物し給ひて怠らむとをば驚かしな  
ども物し給はむなむ嬉しかるべき」などのたまへば、「たのもしき御かげどもにさまさまにお  
くれ聞え給ひて心細げにおはしますめるを、かゝる御ゆるし侍るめればますことなくなむ  
思ひ給へられける。背き給ひにし上の御心むけも唯かくなむ、御心隔て聞え給はずまだいは  
けなき御有様をもはぐ、み奉らせ給ふべくぞ侍るめりし。うちうちにもさなむ頼み聞えさ  
せ給ひし」など聞ゆ。「いとかたじけなかりし御せうそこの後はいかでとのみ思ひ侍れど、何  
事につけても數ならぬ身なむ口惜しかりける」と、安らかにおとなびたるけはひにて宮にも  
御心につき給ふべく繪などのことひ、なの捨て難きさま、若やかに聞え給へば、實にいと若  
く心よげなる人かなとをさなき御心ちには打ち解け給へり。さて後は常に御文かよひなど  
してをかしき遊びわざなどにつけても疎からず聞えかはし給ふ。世の中の人もあひなうか  
ばかりになりぬるあたりのことはいひあつかふものなれば、「初めつ方は對の上いかにおほ  
すらむ。御覺えいとこの年比のやうには坐せじ。少しは劣りなむ」などいひけるを、今少し  
深き御志かくてしもまさるさまなるを、それにつけても又安からずいふ人々あるに、かくに  
くげなくさへ聞えかはし給へばことなほりてめやすくなむありける。神無月に對の上院の

御賀に嵯峨野の御堂にて薬師佛供養し奉り給ふ。いかめしきことはせちに諫め申し給へば忍びやかにとおぼしおきてたり。佛、さやうばこ、ちすのととのへまことの極樂ぞ思ひやらる。最ぞう王經金剛磐若す命經などいとゆたけき御いのりなり。上達部いと多く参り給へり。御堂のさまちもしろくいはむかたなく紅葉のかげわけ行く野邊の程より始めてみものなるにかたへはさほひ集り給ふなるべし。霜がれ渡れる野原のまゝに馬車の行き通ふ音きげく響きたり。御ず經われもわれもと御方々いかめしくせさせ給ふ。二十三日を御としみの日にてこの院はかくすさまなく集ひ給へるうちに我が御わたくしの殿とおぼす、二條院にてその御まうけはせさせ給ふ。御さうぞくをはじめ大かたのことども、皆こなたにのみし給ふを、御方々もさるべきことどもわけつゝ望み仕うまつり給ふ。對どもは人の局々にしたるを拂ひて、殿上人諸大夫院司志も人までのまうけいかめしくせさせ給へり。寢殿のはなちいてを例のまつらひてらでんのいし立てたり。おとどの西の間に御ぞの机十二たて、夏冬の御よそひ御ふすまなど例の如く、紫の綾のおほひども麗しく見え渡りてうちの心はあらはならず。御前に置物の机二つ唐の地のすそこの覆ひしたり。かざしの臺は沈のけそくこがねの鳥、銀の枝に居たる心ばへなど淑景舎の御あづかりにて、明石の御方のせさせ給へるゆゑふかく心ことなり。後の御屏風四帖は式部卿宮なむせさせ給ひける。いみじくつくして例の四季の繪なれど珍しき泉水だん伊などめなれずおもしろし。北の壁にそへて置物の御厨子ふたよろひたて、御調度も例のことなり。南の廂に上達部、左右の大臣、式部卿宮をはじめ

奉りて次々はまして参り給はぬ人なし。舞臺の左うに樂人のひらばりうちてにしひんがしにとんじき八十ぐ、祿の唐櫃四十續けて立てたり。未の時ばかりに樂人まゐる。萬歳樂皇慶など舞ひて日暮れかゝるほどに、高麗のらんじやうして落蹲の舞ひ出でたるほど、猶常のめなれぬ舞のさまなれば舞ひはつる程に權中納言衛門督おりていりあやをほのかに舞ひて紅葉のかげに入りぬる名殘飽かず興ありと人々おぼしたり。いにしへの朱雀院の行幸に青海波のいみじかりし夕思ひ出で給ふ人々は權中納言衛門督の又劣らず立ち續き給ひにける、世々のおぼえありさまかたち用意などもをさを劣らず、つかさくらゐはやゝ進みてさへこそなどよはひの程をも數へて猶さるべきにて昔よりかくたち續きたる御なからひなりけりとめてたく思ふ。あるじの院も哀に涙ぐましくおぼし出でたることども多かり。夜に入りて樂人ども罷り出づ。北のまんどころの別當ども人々ひきゐて祿の唐櫃によりてひとつづ取りてつぎつぎたまふ。白きものどもを品々かづきて山ぎはより池のつゝみ過ぐる程のよそめは千年をかねてあそぶ鶴の毛衣に思ひまがへらる。御遊始まりてまたおもしろし。御ことどもは春宮よりぞとのへさせ給ひける。朱雀院より渡り参れる琵琶きん、内より賜はり給へる箏の御琴など皆昔覺えたる物のねどもにて珍しく弾き合せ給へるに、何の折にも過ぎにし方の御有様うちわたりなどおぼし出でらる。故入道の宮おはせましかばかゝる御賀など我こそ進み仕うまつらましか、何事につけてかは志をも見え奉りけむと飽かず口惜しくのみ思ひ出で聞え給ふ。内にも故宮のおはしまさぬことを、何事にもはえなくさうざ

うしくおぼさるゝにこの院の御事をだに例の跡あるさまのかしこまりを盡しても得見せ奉らぬを世と共に飽かぬ心地し給ふも今年はこの御賀にことつけてみゆきなどもあるべくおぼしおきてけれど「世の中のわづらひならむこと更にせさせ給ふまじくなむ」といなび申し給ふこと度々になりぬれば口惜しくおぼしとまりぬ。まはすの二十日あまりのほどに中宮まかてさせ給ひて今年のものこの御いのりに奈良の京の七大寺に御誦經、布四千段、この近き都の四十寺に絹四百疋をわかちてせさせ給ふ。ありがたき御はぐみをおぼし知りながら、何事につけてかは深き御志をも顯はし御覽せさせ給はむとて、父宮母御息所のおはせまし御ための志をも取り添へおぼすに、かうあながちにおほやけにも聞え返させ給へばことども多く留めさせ給ひつ。四十の賀といふことはさささきを聞き待るにも残のよはひ久しきためしなむ少かりけるを、この度は猶世のひびき留めさせ給ひて、誠に後にたらむことを數へさせ給へ」とありけれどもおほやけざまにて猶いと嚴めしくなむありける。宮の坐します町の寢殿に御まつらひなどしてさささきにことに變らず。上達部の祿など大きやうにならずらへてみ子達には殊に女のさうぞく、非參議の四位、まうちきんだちなど、たゞの殿上人には白き細長一かさねこしざしなどまで次々にたまふ。御さう東限なく清らを盡して名高き帯みはかしなど、故前坊の御方ざまにて傳はり参りたるも又哀になむ。ふるき世のひとつのものとも名ある限は、皆つとひ参る御賀になむあめる。昔物語にも物得させたるを、かしこきことには數へ續けたれど、いとうるさくてこちたき御なからひのことどもはえぞかぞへ

あへ侍らぬや。内にはおぼしそめてし事どもをむげにやはとて中納言にぞつけさせ給ひてける。そのころの右大將やまひして辭し給ひけるを、この中納言に御賀の程よろこびくはへむとおぼし召して俄になさせ給ひつ。院も喜び聞えさせ給ふものからいとかく俄にあまるよろこびをなむいちはやさ心地し侍る」と卑下し申し給ふ。丑寅の町に御志つらひ設け給ひてかくろへたるやうに志なし給へれど、今日は猶かたことに儀式まさりて所々の饗などもくらづかさごくそうゐんより仕うまつらせ給へり。とんじきなどおほやけざまにて頭中將宣旨承りて御子達五人、左右のおとゞ大納言一人、中納言三人、宰相五人、殿上人は例の、内、春宮、院残りすくなし。おまし御調度どもなどはおほきおとゞ委しくうけ給はりて仕うまつらせ給へり。今日は仰事ありてわたり参り給へり。院もいとかしこく驚き申し給ひて御ざにつき給ひぬ。もやのおましに向へておとゞの御ざあり、いと清らにもものしくふとりてこのおとゞを今さかりのまうとくと見え給へる。あるじの院は猶いと若き源氏の君に見え給ふ。御屏風四帖に内の御手誓かせ給へるからの綾のうすだんに志た糸のさまなどおろかならむやは。おもしろき春秋のつくりゑなどよりもこの御屏風の墨つきの輝くさまは目も及ばず、思ひなしさへめてたくなむありける。置物の御厨子ひきものふきものなど藏人所よりたまはり給へり。大將の御いきほひもいとかめしくなり給ひにたれば打ち添へて今日の作法いことなり。御馬四十疋左右のうまづかさ六衛府の官人かみより次々にひきと、のふる程日暮れはてぬ。例の萬歳樂賀皇恩などいふ舞氣色ばかり舞ひておとゞの渡り給へ

るに珍しくもてはやし給へる御遊に皆人心をいれ給へり。琵琶は例の兵部卿宮何事にも世にかたき物の上手に坐していとになし、お前にきんの御こと、おとど和琴ひき給ふ。年比添ひ給ひにける御耳の聞きなしにや、いと優に哀におぼさるれば、さんも御手をさをさかくし給はず、いみじきねども出づ。昔の御物語どもなど出てきて今はたかゝる御なからひに何方につけても聞え通ひ給ふべき御むつびなど心よく聞え給ひて御みき數多たびまゐりて物のおもしろさも滞りなく御ゑひなきども得とどめ給はず。御贈物にすぐれたる和琴一つ好み給ふこま笛そへて紫檀の箱ひとよろこひにからの本どもこのさうの本など入れて御車におひて奉れ給ふ。御馬どもむかへ取りて右のつかさども高麗の樂してのゝしる。六衛府の官人の祿ども大將たまふ。御心ととぎ給ひて嚴めしきことどもはこのたびとどめ給へれど内、春宮、一院、后宮次々の御ゆかりいつくしき程いひ知らず見え渡ることなれば猶かゝる折にはめでたくなむ覺えける。大將の唯一所おはするをさうさうしくはえなき心地せしかど、數多の人にすぐれ、おぼえことに人がらもかたはらなきやうに物し給ふにも、かの母北の方の伊勢の御息所との恨深く挑みかはし給ひけむほどの御すくせどもの行くへ見えたるなむさまざまなりける。その日の御さう東どもなど此方の上なむ志給ひける。祿ども大かたのとをぞ三條の北の方は急ぎ給ふめりし。折ふしにつけたる御いとなみうちうちのもの、清らをも此方には唯よそのことのみ聞き渡り給ふを何事につけてかはかゝるものものしき數にもまじらひ給はましと覺えたるを、大將の君の御ゆかりにいとよくかずまへられ給へり。年



かへりぬ。桐壺の御方近づき給ひぬるにより正月朔日より、御ず法ふだんにせさせ給ふ。てらてらやしろやしろの御いのりはた數も知らず。おとゞの君ゆゑしきことを見給へてしかばかゝる程のことはいと恐しきものにおぼしまみたるを、對の上などのさることま給はぬは口惜しくさうざうしきものから嬉しくおぼさるゝに、まだいとあえかなる御程にいかにおはせむとかねておぼしさわぐに、二月ばかりより怪しく御氣色かはりて惱み給ふに御心どもさわぐべし。おんみやうしども、所をかへてつゝしみ給ふべく申しければ、外のさしはなれたらむは覺束なしとて、かの明石の御町の中の對に渡し奉り給ふ。此方は唯おほきなる對二つ、廊どもなむめぐりてありけるに御修法のだんひまなくぬりて、いみじきげんざども集ひてのゝしる。母君この時に我がすくせをも見ゆべきわざなめればいみじき心を盡し給ふ。かの大尼君も今はこよなきほけ人にてぞありけむかし。この御有様を見奉るは夢の心地していつしかと參り近づきなれ奉る。年比この母君はかうそひさぶらひ給へど、昔のことなどまほにしも聞え知らせ給はざりけるを、この尼君喜びにえ堪へず、參りてはいと涙がちにふるめかしきことどもをわなゝき出でつゝ語り聞ゆ。始つかたは怪しくむつかしき人かなと打ちまもり給ひしかど、かゝる人ありとばかりはほの聞き置き給へれば、なつかしくもてなし給へり。生れ給ひしほどのことおとゞの君のかの浦におはしましたりし有様、今はとて京へ上り給ひしに誰も誰も心をまどはして、今はかぎりかばかりの契にこそはありけれと歎かしきを、若君のかくひきたすけ給へる御すくせのいみじく悲しきことゝほろほろと泣

けば、げに哀なりける昔のことを、かく聞かせざらましかば覺束なくとも過ぎぬべかりけりとおぼして打ち泣き給ふ。心のうちには、我が身はげにうけばりていみじかるべききははあらざりけるを對の上の御もてなしにみがかれて人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり。身をば又なきものに思ひてこそ宮仕のほどにもかたへの人々をば思ひけち、こよなき心おごりをばまつれ、世の人はまたにいひ出づるやうもありつらむかしなどおぼし知りはてぬ。母君をばもとよりかく少しおぼえ降れるすぢと知りながら、生れ給ひけむ程などをば、ある世ばなれたるさかひにてなども知り給はざりけり。いとあまりおほどき給へるけにこそは。怪しくおぼおぼしかりけることなりや。かの入道の今は仙人の世にも住まぬやうにて居たなるを聞き給ふも心苦しうなど、かたがたに思ひ亂れ給ひぬ。いと物哀にながめておはするに御方参り給ひて日中の御加持に此方彼方より参り集ひ物騒がしくのゝしるにお前にとに人もさぶらはず尼君所えていと近くさぶらひ給ふ。「あな見苦しや、短き御几帳ひきよせてこそ侍ひ給はめ。風などさわがしくておのづからほころびのひまもあらむに、くすしなどやうのさましていとさかり過ぎ給へりや」などなまかたはらいたく思ひ給へり。よしめきとしてふるまふとは覺ゆめれども、まうまうに耳もおぼおぼしかりければ、あゝとかたぶきてゐたり。さるはいとさいふばかりにもあらずかし。六十五六のほどなり。尼姿いとかはらかにあてなるさまして目つやゝかに泣きはれたる氣色の怪しく昔思ひ出でたるさまなれば胸打ちつぶれて「こだいのひがごともや侍りつらむ。よくこの世の外のやうなるひが

おぼえどもにとりませつゝ怪しき昔のことども出でまうてきつらむはや。夢の心地こそ老侍れ下し、うちほゝゑみて見奉り給へば、いとなまめかしく清らにて例よりいたく老づまり、物おぼしたるさまに見え給ふ。我が子とも覺え給はずかたじけなきにいとほしきことども聞え給ひて、おぼし亂るゝにや、今はかばかりと御位を極め給はむ世に聞えも知らせむとこそ思へ、口惜しくおぼしすつべきにはあらねど、いといとほしく心おとり老給ふらむと覺ゆ。御加持はてゝまかてぬるに、御くだものなど近くまかなひなしこればかりをだにといと心苦しげに思ひて聞え給ふ。尼君はいとめてたううつくしく見奉るまゝにも、涙はえとどめず、顔はゑみみて口つきなどは見苦しくひろごりたれど、まみのわたり打ち老ぐれてひそみ居たり。あなかたはらいたとめくはずれど聞きも入れず。

「老の波かひある浦に立ちいで、老ほたるゝあまを誰かとかめむ。昔の世にもかやうなるふる人は、罪ゆるされてなむ侍りける」ときこゆ。御硯なる紙に、

「老ほたるゝあまを浪路のまるべにてたづねも見ばや濱のとまやを」。御方も待忍び給はて、うち泣き給ひぬ。

「世を捨てゝあかしの浦にすむ人も心のやみははるけしもせじ」など聞え紛はし給ふ。別れけむ曉のことも夢のうちにおぼし出でられぬを、口惜しくありけるかなとおぼす。彌生の十餘日のほどにたひらかに生れ給ひぬ。かねてはあどろあどろしくおぼし騒ぎしかど痛く惱み給ふこともなくて男御子にさへおはすれば限なくおぼすさまにておとこも御心おちる

給ひぬ。此方はかくれの方にて唯けぢかき程なるに、いかめしき御うぶやしなひなどのうち  
まきりひゞきよとほしき有様、げにかひある浦と尼君のためには見えなれど、儀式なきやう  
なれば渡り給ひなむとす。對の上も渡り給へり。まろき御さうぞくし給ひて人の親めきて若  
宮をつと抱き居給へるさまいとをかし。みづからかゝると知り給はず、人の上にも見習ひ  
給はねばいと珍らかに美しくしと思ひ聞え給へり。むつかしげにおはする程を絶えず抱きと  
り給へば、まことのをば君は唯まかせ奉りて、御湯殿のあつかひなどを仕う奉り給ふ。春宮  
の宣旨なる内侍のすけぞ仕うまつる。御むかへゆにありたち給へるもいとあはれにうちう  
ちのことほのまりたるに、少しかたほならばいとほしからましを、あさましくけだかく  
げにかゝる契ことにも給ひける人かなと見聞ゆ。その程の儀式などもまねびたてむに  
いと更なりや。六日といふに例のおとどに渡り給ひぬ。七日の夜うちよりも御うぶやしなひ  
のことあり。朱雀院のかく世を捨て、おはします御かはりにや、藏人所より頭辨、宣旨うけ  
たまはりて珍らかなるさまに仕うまつれり。祿のきぬなど又中宮の御方よりも、おほやけご  
とにはたちまさりいかめしくせさせ給ふ。次々のみ子達大臣の家々そのころのいとなみに  
てわれもわれもと清らを盡して仕うまつり給ふ。おとどの君もこの程のごとくもは例のや  
うにもとそがせ給はて、世になく響きこちたき程にうちうちの名まめかしくこまかなるみ  
やびのまねび傳ふべきふしは目もとまらずなりにけり。おとどの君も若宮を程なく抱き奉  
り給ひて、大將の數多まうけたなるを今まで見せぬがうらめしきにかくらうたき人を添へ

奉りたるとうつくしみ聞え給ふはことわりなりや。日々に物をひき延ぶるやうにおよすけ給ふ。御めのとなど心知らぬはとみにめさて、さぶらふ中にまな心すぐれたるかぎりをえりて仕うまつらせ給ふ。御方の御心おきてのらうらうしくけだかく大どかなるものゝさるべき方には卑下してにくらかにもうければらぬなどを譽めぬ人なし。對の上はまほならぬどみえかはし給ひてさばかり許しなくおぼしたりしかど、今は宮の御とくにいとむつましくやんごとなくおぼしなりになり。ちごうつくしみま給ふ御心にてあまがつなど御手づから作りそくりおはするもいとわかわかし。明暮この御かしづきにてすぐし給ふ。かのこだいの尼君は若宮をえ心のとがに見奉らぬなむ飽かずおぼえける。なかなか見奉りそめて戀ひ聞ゆるにぞ命もえたふまじかりける。かの明石にもかゝる御こと傳へ聞きて、さるひじり心地にもいと嬉しく覺えければ、今なむこの世のさかひを心安くゆきはなるべきとでしどもにひいて、この家をば寺になしてあたりの田などやうのものは皆その寺のことにまおきて、この國のおくの郡に人も通ひ難く深き山あるをとしごろもまめおきながらあしこに籠りなむ後又人には見え知らるべきにもあらずと思ひて、唯少しの覺束なき事残りければ、今までながらへけるを今はさりとともと佛神を頼み申してなむうつろひける。この近きとしごろとなりては京にことなることならで、人も通はし奉らざりつ。これよりくだし給ふ人ばかりにつけてなむ、ひとくだりにても尼君にさるべき折ふしのこともかよひける。思ひ離るゝ世のどぢめにふみ書きて御方に奉れ給へり。「このとしごろは同じ世の中のうちにめぐらひ侍りつ

れど、何かはかくながら身をかへたるやうに思ひ給へなすつゝ、させることなき限は聞えう  
け給はらず、かなぶみ見給へるは目のいとまいりて、念佛もけだいなするやうにやくなうてな  
む御せうそこも奉らぬを、つてにうけ給はれば若君は春宮に参り給ひて男宮生れ給へるよ  
しをなむ深く悦び申し侍る。その故は自らかくつきなき山伏の身に、今更にこの世のさかえ  
を思ふにも侍らず。過ぎにし方の年比、心ぎたなく六時のつとめにも唯御事を心にかけては  
ちすの上の露の願ひをばさし置きてなむ念じ奉りし。我、おもと生れ給はむとせしその年の  
二月のその夜の夢に見しやう、みづからすみの山を右の手に捧げたり、山の左右より月日の  
光さやかにさし出で、世をてらす、みづからは山のしもの蔭に隠れてその光にあたらす、山  
をば廣き海に浮べ置きて、小き船に乗りて西の方をさして漕ぎ行くとなむ見侍りし。夢さめ  
てあしたより數ならぬ身に頼む所出てきながら何事につけてかさるいかめしきことをば待  
ち出でむと心の中に思ひ侍りしを、そのころよりはらまれ給ひにしこなた、俗の方の書を見  
侍りしにも又内教の心を尋ぬる中にも夢を信ずべき事多く侍りしかば賤しきふところのう  
ちにも辱く思ひいたづき奉りしかど、力及ばぬ身に思ひ給へかねてなむ、かゝる道におもむ  
き侍りにし。又この國のことにまづみ侍りて老の波更に立ち返らじと思ひとぢめて、この浦  
に年比侍りしほども若君を頼むことに思ひ聞え侍りしかばなむ心ひとつに多くのぐわんを  
たて侍りし。そのかへり申したひらかに思ひのごと時に逢ひ給ふ。若君國の母となり給ひ  
て、願ひみち給はむ世に住吉の御社をはじめはたし申し給へ。更に何事をか疑ひ侍らむ。こ

のひとつの思ひ近き世にかなひ侍りぬれば、遙に西の方十萬億の國隔てたる九ぼんの上の望は疑なくなり侍りぬれば、今は唯むかふるはちすを待ち侍るほどその夕まで、水草きよき山の末にてつとめ侍らむ」とてなむ、まかりいりぬる。

「ひかりいでむ曉ちかくなりけり今を見しよの夢がたりする」とて月日かきたり。「命終らむ月日も更にな老ろしめしと、いにしへより人のそめ置きける藤衣にも、何かやつれたまふ。唯我が身は變化のものとおぼしなして老法師のためにはくどくをつくり給へ。この世の樂みに添へても後の世を忘れ給ふな。願ひ侍る所にだにいたり侍りなば必又對面も侍りなむ。さばのほかの岸に到りてとくあひ見むとをまほせ」、さてかの社にたて集めたるぐわん文どもをおほきなるぢんのふばこにふんじ籠めて奉りたり。尼君にはことごとくに書かず。「唯この月の十四日になむ草のいほり罷り離れて深き山に入り侍りぬる。かひなき身をば熊狼にもせし侍りなむ。そこにはなほおもひしやうなる御世を待ち出て給へ、あきらかなる所にて又對面はありなむ」とのみあり。尼君この文を見てかの使の大とこに問へば、「この御文書き給ひて三日といふになむかの絶えたる峰にうつろひ給ひにし。なにがしらもかの御おくりに麓まではさぶらひしかど、皆かへし給ひて僧一人、わらは二人なむ御供にさぶらはせ給ふ。今はと世を背き給ひしをりを悲しきとちめと思ふ給へしかどのこり侍りけり。年比おこなひのひまひまによりふしながらかさならし給ひしきんの御琴琵琶とりよせ給ひて、かいらべ給ひつゝ佛にまかり申し給ひてなむ御堂にせにふま給ひしさらぬものども、多

くは奉り給ひて、そののこりをなむ御弟子ども六十餘人なむ親しきかぎりさぶらひける、ほ  
どにつけて皆そぶんし給ひて、猶しのこりをなむ京の御料とて送り奉り給へる。今はとてか  
き籠り遙けき山の雲霞にまじり給ひにし空しき御跡にとまりて、悲び思ふ人々なむ多く侍  
るしなど、この大とこもわらはにて京より下りたりし人の老法師になりてとまれるいと哀に  
心ぼそしと思へり。佛の御弟子のさかしきひじりだに鶯の峯をばたどとしからず頼み聞  
えながら猶薪つさける世のまどひは深かりけるを、まして尼君の悲しと思ふ給へることか  
ぎりなし。御方は南のおとこにおはするを、かゝる御せうそこなむあるとありければ忍びて  
渡り給へり。重々しく身をもてなして、おぼろけならては通ひあひ見給ふこともかたきを、  
哀なることなむと聞きて覺束なければ打ち忍びてものし給へるにいとみじく悲しげなる  
氣色にて居給へり。火近く取りよせてこの文を見給ふにげにせきとめむ方ぞなかりける。よ  
その人は何とも目とゞむまじきことのまづ昔さし方のこと思ひ出て戀しと思ひ渡り給ふ心  
にはあひ見て過ぎはてぬるにこそはと見給ふにいみじくいふかひなし。涙をえせきとめず、  
この夢がたりをかつは行くさき頼もしく、さらばひが心にて我が身をさしもあるまじきさ  
まにあこがらし給ふと、中ごろ思ひたゞよはれしことはかくはかなき夢にたのみをかけて  
心高くものし給ふなりけりとかつが思ひ合せ給ふ。尼君久しくためらひて「君の御徳には  
嬉しくおもだゝしきことをも身にあまりてならびなく思ひ侍り。哀にいぶせき思ひもすぐ  
れてこそ侍れ。數ならぬ方にもながらへし都を捨てゝかしこにまづみ居しをだに世の人



に違ひたる宿世にもあるかなと思ひ侍りしかど、生ける世に行きはなれ隔たるべき中の契とは思ひかけず、同じはちすに住むべき後の世のたのみをさへかけて年月を過しきて俄にかく覺えぬ御事出てきて背きにし世に立ち返りて侍る。かひある御事を見奉り喜ぶものから片つ方には覺束なく悲しきことの打ち添ひて絶えぬをつひにかくあひ見ず隔てながらこの世を別れぬるなむ口惜しく覺え侍る。世にへし時だに人に似ぬ心ばへにより世をもてひがむるやうなりしを若きどち頼みならひておのおのはまたなく契りおきてければかたみにいと深くこそ頼み侍りしか。いかなればかく耳に近き程ながらかくて別れぬらむといひつゞけていと哀にうちひそみ給ふ。御方もいみじく泣きて「人にすぐれむ行くさきのことも覺えずや。數ならぬ身には何事もげざやかにかひあるべきにもあらぬものから、哀なる有様に覺束なくてやみなむのみこそ口惜しけれ。よろづのことさるべき人の御ためとこそ覺え侍れ。さて堪へ籠り給ひなば世の中も定なきにやがてきえ給ひなばかひなくなむ」とて、よもすがら哀なる事どもをいひ明し給ふ。「昨日もおとこの君のあなたにありと見置き給ひてしを、俄にはひかくれたらむもかるしきやうなるべし。身ひとつは何ばかりも思ひ憚り侍らず、かくそひ給ふ御ためなどのいとほしきになむ、心に任せて身をももてなしにくかるべき」とて曉に歸り渡り給ひぬ。「若宮はいかゞ坐します。いかでか見奉るべき」とても泣きぬ。「今見奉り給ひてむ女御の君もいと哀になむ覺し出でつゝ聞えさせ給ふめる。院も事のついでにもし世の中思ふやうならばゆゝしきかねごとなれど尼君その程までながらへ給はなむ

とのたまふめりき。いかに思すとにかあらむ」とのたまへば、またうち参みて「いでやさればこそ様々ためしなきすくせにこそ侍れ」とて喜ぶ。このふばこは持たせて参うのほり給ひぬ。宮よりとく参り給ふべきよしのみあれば「かく思したることわりなり。珍らしきとさへそひていかに心もとなくおぼさるらむ」と紫の上もの給ひて、若宮忍びて参らせ奉らむの御心づかひま給ふ。御息所は御いとまの心安からぬにこり給ひて、かゝるついでにまばしあらまほしくおぼしたる、程なき御身にさる恐しきとをま給へれば、少しおも瘦せほそりていみじくなまめかしき御さまし給へり。「かくためらひ難くおはする程つくろひ給ひてこそは」など御方などは心苦しがり聞え給ふをちとどは「かやうにおも瘦せて見え奉り給はむもなかなか哀なるべきわざなり」などのたまふ。對の上などの渡り給ひぬる夕つ方まめやかなるに御方お前に参り給ひてこのふばこ聞え知らせ給ふ「思ふさまに適ひはてさせ給ふまではとり隠して置きて侍るべけれど、世の中定めがたければうしろめたさになむ。何事をも御心とおぼしはずまへざらむこなた、ともかくもはかなくなり侍りなば必ずしも今はのとちめを御覽せらるべき身にも侍らねば、猶うつしごゝろうせず侍る世になむはかなきことをも聞えさせおくべく侍りけると思ひ侍りて、むつかしくあやしき跡なれど、これも御覽せよこの御願文は近きみづしなどに置かせ給ひて必ずさるべからむ折に御覽じてこのうちのことどもはせさせ給へ。疎き人にはなもらせ給ひそ。かばかりと見奉り置きつればみづからも世をそむき侍りなむと思ふ給へなり行けば、よろづ心のどかにも覺え侍らず。對の上の御心

おろかに思ひ聞えさせ給ふな。いとありがたく物し給ふ深き御氣色を見侍れば、身にはこよなくまさりて長き御世にもあらなむとぞ思ひ侍る。もとより御身に添ひ聞えさせむにつけても、つゝまじき身の程に侍ればゆづり聞えそめ侍りにしをいとかうしも物し給はじとなむ、としごろは猶世の常に思ふ給へ渡り侍りつる。今はさし方行くさきうしろ安く思ひなりにて侍り「などいと多く聞え給ふ。涙ぐみて聞きおはす。かくむつまじかるべきおまへにも常に打ち解けぬさまし給ひて、わりなく物づゝみしたるさまなり。このふみの詞いとうたてこはくにくげなるさまを、みちのくにながみにて年経にければさばみあつこえたる五六枚に、さすがにかうにいと深くまみたるに書き給へり。いと哀とおぼして御ひたひがみのやうやうぬれゆく御をばめあてになまめかし。院は姫宮の御方におはしけるを、中の御さうじよりふと渡り給へればえしもひきかくさて御几帳を少しひきよせてみづからはたかくれ給へり。「若宮は驚き給へりや。時の間も戀しきわざなりけり」と聞え給へば御息所はいらへも聞え給はねば、御方「對に渡し聞え給ひつ」と聞え給ふ。「いとあやしや、あなたにこの宮をらうじ奉りてふところを更に放たずもてあつかひ、人やりならずきぬも皆濡してぬぎかへがちなめる、かるがるしくなどかく渡し奉り給ふ。こなたに渡りてこそ見奉り給はめ」との給へば「いとうたて思ひぐまなき御事かな。女におはしまさむだにあなたにて見奉り給はむこそよく侍らめ。まして男は限なしと聞えさすれど心やすく覺え給ふを、たはぶれにてもかやうに隔てがまじきとなさかしがり聞えさせ給ひそ」と聞え給ふ。打ち笑ひて「御中ともにまか

せて見放ち聞ゆべきなきなりな。隔てゝ今はたれもたれもさし放ちさかしらなどのたまふこそをさなけれ。まづはかやうにはひかくれてつれなくいひちとし給ふめりかし」とて御几帳をひきやり給へればもやの柱によりかゝりていと清げに心はづかしげなるさましてものし給ふ。ありつる箱も惑ひかくさむもさまあしければさておはするを「なその箱ぞ深き心あらむけさう人の長歌詠みてふんじこめたる心地こそすれ」とのたまへば「あなうたてや今めかしくなりかへらせ給ふめる御心ならひに聞き知らぬやうなる御すさびごともこそ時々出てくれ」とてほゝゑみ給へれど物哀なりける御氣色どもあるければ、あやしとうちかたぶき給へるさまなれば煩しくて「かの明石の岩屋より忍びて侍りし御いのりの巻じゆ又まだしきぐわんなどの侍りけるを御心にも知らせ奉るべきをりあらば御覽じ置くべきやとて侍るを只今はついでなくて何にかはあけさせ給はむ」と聞え給ふに、實に哀なるべき有様ぞかしとちぼして、いかに行ひまして住み給ひにたらむ。命長くてこゝらのとしごろつとむる罪もこよなからむかし。世の中によしあるさかしき方々の人として見るにも、この世にそみたる程のにぎり深きにやあらむ、かしこき方こそあれ、いとかぎりありつゝ及ばざりけりや。さもいたり深くさすがに氣色ありし人の有様かな。ひじりだちこの世離れがほにもあらぬものから、またの心は皆あらぬ世にかよひ住み渡るところ見えしか。まして今は心苦しきほどしもなく思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば忍びていとあはまほしくこそ」との給ふ。「今はかの侍りし所をもすて鳥の音聞えぬ山にとなむ聞き侍る」と聞ゆれば「さらばその遺言な

なりな、せうそこはかよはし給ふや。尼君いかに思ひ給ふらむ。親子の中よりも又さるさまの契は殊にこそ添ふべけれ」とて打ち涙ぐみ給へり。「年のつもりに世の中の有様をとかく思ひ知り行くまゝに、怪しく戀しく思ひ出でらるゝ人の御有様なれば、深き契のなからひはいかに哀ならむ」などのたまふ序に、この夢がたりもおぼし合するともやと思ひていと怪しき梵字とかいふやうなるあとに侍るめれど、御覽じ留むべきふしもやまじり侍るとてなむ。今はとて別れにしかども、猶こそ哀は残り侍るものなりけれ」とて、さまよく打ち泣き給ふ。とり給ひて「いとかしこく猶ほればれしからずこそあるべけれ。手などもすべて何事もわざというそくにまつべかりける人の、唯この世なる方の心おきてこそすくなかりけれ。かの先祖のおとどはいと賢くありがたき志を盡しておほやけに仕うまつり給ひける程に、ものゝたがひめありてそのむくいにかく末はなきなりなど人いふめりしを、女子の方につけたれど、かくていとつぎなしといふべきにはあらぬもそこらのおこなひのゑるしにこそあらめ」など涙おしのごひ給ひつゝ、この夢のわたりに目とゞめ給ふ。怪しくひがひがしくすゞろに高き志ありと人もとがめ、またわれながらもさるまじきふるまひをかりにてもするかなと思ひしことは、この君の生れ給ひし時に契深く思ひ知りにしかと、目の前に見えぬあなたのこと、覺束なくこそ思ひ渡りつれ、さらばかゝるたのみありてあながちには望みしなりけり、よこさまにいみじきめを見漂ひしもこの人ひとりのためにこそありけれ、いかなるぐわんをか心に起しけむとゆかしければ、心の内に拜みてとり給ひつ。これは又具して奉るべ

きもの侍り。今又聞え知らせ侍らむ」と女御には聞え給ふ。そのついでに「今はかくいにしへの事をもたどり知り給ひぬれど、あなたの御心ばへをちるかに覺しなすな。もとよりさるべき中えさらぬむつびよりも横ざまのなげの哀をもかけ、ひとことの心よせあるはおぼろげのことにもあらず。ましてこゝになどさぶらひなれ給ふを、みるみるも初めの志かはらず深くねんごろに思ひ聞えたるを、いにしへの世のたとへにもさこそはうはべにははぐみげなれど、らうらうしきたどりあらむもかしこさやうなれど、猶あやまりても我がためまたの心ゆがみたらむ人を、さも思ひよらずうらなからむためは引き返し哀にいかでかゝるにはと、罪得がましきにも思ひなほる事もあるべし。おぼろげの昔の世のあだならぬ人は違ふべし。さしもあるまじきことにかどかどしく癖をつけ、あいさやうなく人をもてはなるゝ心あるはいと打ち解けがたく思ひくまなきわざになむあるべき。多くはあらねど人の心のとあるさまかゝるおもむきを見るに、ゆゑよしといひさまさまに口惜しからぬきはの、心ばせあるべかめり。皆おのちの得たる方ありて取る所なくもあらねど、又とりたてゝ我がうしろみに思ひ、まめまめしく選び思はむにはありがたきわざになむ、唯誠の心のくせなく、善き事はこの對をのみなむ、これをぞおひらかなる人といふべかりけるとなむ思ひ侍る。よしとて又あまりひたゝけて頼もしげなきもいと口惜しや」とばかりの給ふに、かたへの人は思ひやられぬかし。「そこにこそ少し物の心得て物し給ふめるを、いとよくむつびかはしてこの御

うしろみをも同じ心にて物し給へ」など忍びやかにの給ふ。「のたまはせねどいとありがたき御けしきを見奉るまゝに明暮のことくさに聞え侍る。めざましきものになどおぼし許さざらむにかうまで御覽じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまでかずまへのたまはずればかへりてはまばゆくさへなむ、數ならぬ身のさすがにきえぬは世のきゝみゝもいと苦しくつゝましく思ふ給へらるゝを、罪なきさまにもてかくされ奉りつゝのみこそ」と聞え給へば、「その御ためには、何の志かはあらむ。唯この御有様をうちそひても得見奉らぬ覺束なさに譲り聞えらるゝなめり。それも又とりもちて、けちえんになどあらぬ御もてなしともに萬の事なめにめやすくなればいとなむ思ひなく嬉しき。はかなきことにて物心得ずひがひがしき人はたちまじらふにつけて、人のためさへからきことありかし。さなほし所なく誰も物し給ふめれば心安くなむ」とのたまふにつけても、さりやよくこそ卑下しにけれなど思ひ續け給ふ。對へ渡り給ひぬ。「さもいとやんごとなき御志のみまさるめるかな。げにはた人よりことにかくしも具し給へる有様のことわりと見え給へるこそめてたけれ。宮の御方うはべの御かしづきのみめてたくて渡り給ふことも得なのめならざるはかたじけなきわざなめりかし。同じすぢにはおほすれど今一きは、心苦しくとしりうごち聞え給ふにつけても、我がすくせはいとたけくぞ覺え給ひける。やんごとなきだにおほすさまにもあらざる世に、まして立ちまじるべき覺えにしあらねば、すべて今はうらめしきふしもなし。唯かのを籠りにたるやまずみを思ひやるのみぞ哀に覺束なき。尼君も唯福地の園に種まきと

やらなりしひこととを打ち頼みて、後の世を思ひやりつゝ、眺め居給へり。大將の君はこの姫君の御事を思ひ及ばぬにしもあらざりしかば、目に近くおはしますをいとたゞにも覺えず、大かたの御かしづきにつけてこなたにはさりぬべきをりをりに參りなれ、おのづから御けはひ有様も見聞き給ふに、いと若くおほどき給へる一すぢにてうへの儀式はいかめしく世のためしにまつばかりもてかしづき奉り給へれど、をさをさげさやかに物深くは見えず。女房などもおとなおとなしきは少く若やかなるかたち人のひたぶるに打ち華やぎざればめるはいと多く、數知らぬまで集ひさぶらひつゝ、物思ひなげなる御あたりとはいひながら、何事もどやかに心まづめたるは心の中のあらはにしも見えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも又更にこゝちゆきけにとゞこほりなかるべきにしも打ちまじればかたへの人にひかれつゝ、同じけはひもてなしになだらかなるを、唯あけくれはいはけたるみあをびたはぶれに心入れたるわらはべのありさまなど、院はいとめにつかず見給ふことゞもあれどひとつさまに世の中をおほしのためはぬ御本性なれば、かゝるかたをもまかせてさこそはあらまほしからめと、御覽じ許しつゝ、いましめとゝのへさせ給はず。さうじみの御有様ばかりをばいとよく教へ聞え給ふに少しもてつけ給へり。かやうのことを大將の君もげにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意氣色のこゝらの年經ぬれど、ともかくももり出て見え聞えたる所なくまづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をもけたず、身をもやんごとなく心にくゝもてなし添へ給へることゝ見し面影も忘れ難くのみなむ思ひ出でられ



ける。我が御北の方も哀と覺す方こそ深けれ、いふかひあり勝れたるらうらうじさなど物し給はぬ人なり。おだしきものに今はとめなるゝに、心ゆるびて猶かくさまさまにつどひ給へる御有様どものとりどりにをかしきを、心ひとつに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は人の御ほどを思ふにも限なく心ことなる御ほどに、取りわきたる御けしきにしもあらず、人目のかぎりばかりにこそと見奉り知るにわざとおほけなき心にしもあらねど、見奉る折ありなむやど、ゆかしく思ひ聞え給ひけり。衛門のかんの君も院に常に参り親しくさぶらひ馴れ給ひし人なれば、この宮をちゝみかどのかしづきあがめ奉り給ひし御心おきてなどくはしく見奉り置きて、さまざまの御定めありし比ほひより聞えより、院にもめざましとはおぼしめたまはせずと聞きしを、かくことさまになり給へるはいと口惜しく胸いたきこゝちすれば、猶得思ひ離れずそのをりより語らひつきにける、女房のたよりに御有様なども聞き傳ふるを慰めに思ふぞはかなかりける。對の上の御けはひには猶おされ給ひてなむと世の人もまねび傳ふるを聞きては、かたじけなくともさるものは思はせ奉らざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめと常にこの小侍従といふ御ちぬしをもいひはげまして世の中定めなきを、おとどの君もとより本意ありておほしおきてたる方に趣き給はゞとたゆみなく思ひありきけり。『三月ばかりの空うらゝかなる日六條院に兵部卿宮、衛門督など参り給へり。おとど出て給ひて御物語などし給ふ。』まづかなる住まひはこの頃こそいといつれづれにまぎるゝとなかりけれ。おほやけわたくしにことなしや。何わざしてかは暮すべき』などの給ひ

て、「今朝大將の物しつるは何方にぞ、いとさうざうしきを、例の小弓射させて見るべかりけり。このむめるわかざどいも見えつるを、ねたういでやしぬる」と問はせ給ふ。大將の君は丑寅の町に人々數多して、まりもてあそばして見給ふときこしめして、「みだりがはしきとのさすがに目さめてかどかどしきぞかし。いづらこなたにいとて御せうそこあれば参り給へり。わかきんだちめく人々多かりけり。「鞠持たせ給へりや誰々か物しつる」との給ふ。「これかれ侍りつ此方へまかでむや」との給ひて、寢殿のひんがしおもて桐壺は若宮具し奉りて参り給ひにし頃なればこなたはかくろへたりけり。やりみずなどのゆきあひはれてよしあるかゝりの程をたづねて立ち出づ。おほきおほいどの、君達、頭辨、兵衛佐、大夫の君など過したるも又かたなりなるもさまざまに人よりまさりて好み物し給ふ。やうやう暮れかゝるに風吹かずかしこき日なりと興じて辨の君もえ静めず立ちまじれば、おとど「辨官もえをさめあへざめるを、上達部なりとも若きふづかさたちはなどか亂れ給はざらむ、かばかりのよはひにては怪しく見すぐす口惜しく覺えしわざなり。さるはいときやうぎやうなりや、このことのさまよ」などのたまふに、大將もかんの君も皆ちり居てえならぬ花の影にさまよひ給ふ。夕ばへいと清けなり。をさをささまよくまづかならぬ亂れごとなめれど所から人がらなりけり。故ある庭の木立のいたく霞籠めたるにいろのひも解き渡る花の木ども、わづかなるもえぎのかげにかくはかなきことなれど善き悪しきけぢめあるをいとみつゝ我れも劣らじと思ひ顔なる中に、衛門督のかりそめに立ちまじり給へる足もとにならぶ人なかりけ

り。かたちいときよげになまめきたるさましたる人の用意いたくして、さすがにみだりがはしきをかしく見ゆ。みはしのまにあたれる櫻の蔭によりて人々花の上も忘れて心に入れたるを、おとゞも宮もすみの高欄に出て、御覽す。いとらうある心ばへども見えて數多くなり行くに上らうも亂れてかうぶりのひたい少しくつろぎたり。大將の君も御位の程思ふこそ例ならぬ亂りがはしさかなと覺ゆれ。見る目は人よりけに若くをかしげにて櫻のなほしのやゝなえたるにさしぬきのすそつかた少しふくみて氣色ばかりひきあげ給へり。かるがるしくも見えず、物清げなるうちとけ姿に花の雪のやうに降りかゝれば打ち見上げてまをれたる枝少し押し折りてみはしの中のまの程に居給ひぬ。かんの君つゞきて「花亂りがほしく散るめりや。櫻はよぎてこそ」などの給ひつゝ宮の御前の方をまりめに見れば例のごとにをさまらぬけはひどもしていろいろこぼれ出でたるみすのつまづますきかげなど、春のたむけのぬさぶくろにやと覺ゆ。御几帳どもまどけなくひきやりつゝ人げ近く世づきてぞ見ゆるに、からぬこのいと小さくをかしげなるをすこしおほきなる猫の追ひ續きて俄にみすのつまより走り出づるに人々おびえ騒ぎてそよそよとみじろきさまよふけはひどもきぬの音なひ耳かしましき心ちす。猫はまだよく人にもなつかぬにや、つないと長くつきたりけるを物にひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこじろふ程にみすのそばいとあらはにひきあげられたるをとみにひきなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々も心あわたゞしげにてものおぢしたるけはひどもなり。几帳のきは少し入りたる程にうちき姿にて立ち給

へる人あり。端より西の二の間のひんがしのそばなれば紛れ所もなくあらはに見入れらる。紅梅にやあらむ濃き薄き、すぎすぎにあまた重りたるけぢめ、はなやかに草紙のつまのやうに見えて櫻の織物のほそながなるべし、御くしのすをまでげざやかに見ゆるは絲をよりかけたるやうになびきてすそのふさやかにそがれたるいと美しげにて七八寸ばかりぞ餘り給へる。御ぞのすそがちにいとほそくさゝやかにて姿つき髪のかゝり給へるそばめいひまらずあてにらうたげなり。夕かげなればさやかにらず奥暗き心地するもいと飽かず口をし。鞠に身をなぐる若公達の花のちるを惜しみもあへぬ氣色どもを見ると、人々あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫のいたくなければ見返り給へるおもゝちもてなしなどいとおいらかにて若くうつくしの人やとふと見えたり。大將いとかたはらいたけれどはひよらむもなかなかいとかるがるしければ、唯心を得させてうちまはぶき給へるにぞやをらひき入り給ふ。さるは我がこゝちにもいと飽かぬこゝちし給へど猫のつなゆるしつれば心にもあらず打ちなげかる。ましてさばかり心をまめたる衛門督は胸つとふたがりて誰ばかりにかはあらむこゝらの中にゐるさうちきすがたよりも人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど心にかゝりて覺ゆ。さらぬ顔にもてなしたれどまさにもとゞめじやと大將はいとほしくおぼさる。わりなきこゝちのなぐさめに猫を招きよせてかきいだきたればいとかうばしくてらうたげに打ちなくもなつかしく思ひよそへらるゝぞすぎすぎしきや。おとゞ御覽じおこせて「上達部のざいとかるがるしや、こなたにこそ」とて對の南面に入り給へれば皆そなたに參

り給ひぬ。宮も居直り給ひて御物語し給ふ。つぎつぎの殿上人はすのこにわらうだめしてわざとなくつばいもちひ、なし、かうじやうのものどもさまざまに箱の蓋どもにとりませつゝあるを若き人々をばれとりくふ。さるべきからものばかりして御かはらけまるる。衛門督はいといたく思ひまめりて、やゝもすれば花の木に目をつけてながめやる。大將は心知りに怪しかりつる御簾のすきかけ思ひ出づる事やあらむと思ひ給ふ。いと端近なりつる有様をかふに、かゝればこそ世のおぼえの程よりは内々の御志ぬるきやうにはありけれと思ひ合せて猶うちとの用意多からず、いはけなきはらうたきやうなれどうしろめたきやうなりやと思ひおとさる。宰相の君は萬の罪をもをさをさたどられず覺えぬ物のひまよりほのかにもそれと見奉りつるにも、我が昔よりの志のゑるしあるべきにやと契嬉しき心地して、飽かずのみおぼゆ。院は昔物語をいひ給ひて「おほきおとこの萬の事にたちならびてかちまけのさだめし給ひし中に鞠なむ得及ばずなりにし、はかなきことは傳へあるまじけれど、ものゝすぢは猶よなかりけり。いとめも及ばずかしくこそ見えつれ」とのたまへば、うちほゝみみて「はかばかしき方にはぬるく侍る家の風のさしも吹き傳へ侍らむに、後の世のため、殊なることなくこそ侍りぬべけれ」と申し給へば、「いかでか、何事も人に異なるけぢめをばまぶれ給ふ。御さまの匂ひやかに清らなるを見奉るにも、かゝる人にならひていかばかりのこ

とにか、心をうつす人は物し給はむ、何事につけてか哀と見許し給ふばかりはなびかし聞ゆべきと、思ひめぐらすに、いとこよなく御あたりはるかなるべき身の程も思ひ知らるれば胸のみふたがりてまかて給ひぬ。大將の君ひとつ車にて道のほど物語し給ふ。「猶このごろのつれづれにはこの院に参りてまぎらはすべきなり、今日のやうならむいとまのひま待ちつけて花のをりすぐさず参れとの給ひつるを、春をしみがてら月の内に小弓持たせて参り給へ」と語り契る。おのおの別るゝ道の程物語給うて宮の御事の猶いはまほしければ「院には猶この對にのみ物せさせ給ふなめりなかの御覺えのことなるなめりかし。この宮いかにおぼすらむ。みかどのならびなくならはし奉り給へるに、さしもあらで具し給ひにたらむこそ心苦しけれ」とあいなくいへば「たいだいしきこと、いかでかさはあらむ。こなたはさまかはりておほしたて給へるむつびのけぢめばかりにこそあべかめれ、宮をばかたかたにつけて、いとやんごとなく思ひ聞え給へるものを」と語り給へば「いであななかま給へ。皆聞きて侍る、いといとほしげなる折々あなるをやさるは世におしなべたらぬ人の御おぼえをありがたきわざなりや」といとほしがる。

「いかなれば花に木づたふ鶯のさくらをわきてねぐらとはせぬ。春の鳥の櫻ひとつにとまらぬ心よ、あやしと覺ゆることをかしと口ずさびにいへば、いであなあぢきなものあつかひや、さればよと思ふ。

「みやま木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色にあくべき。わりなきことひたお

もむきにのみやは」といらへて、煩しければことにいはずなりぬ。ことごとにいひまぎらはしておのおのわかれぬ。かんの君は猶おほいどのゝひんがしの對にひとりずみにてぞものし給ひける。思ふ心ありてとしごろかゝるすまひをするに人やりならずさうざうしく心ほそきをりをりあれど、我が身かばかりにてなどか思ふことかなはざらむとのみ心おごりするに、この夕べよりくしいたく物おもはしくていかならむをりに又さばかりにてもほのかなる御ありさまをだに見む、ともかくもかきまぎれたるきはの人こそ、かりそめにもたはやすき物いみ、かたゝがへのうつろひもかるがるしきにものづからともかくも物のひまをうかゞひつくるやうもあれなど、思ひやる方なく深き窓のうちに何にばかりのことにつけてかかく深き心ありけりとだに知らせ奉るべきと、胸いたくいふせければ、小侍従がり例の文やり給ひて、「一日の風にささはれて、みかきが原をわけ入りてはべりしに、いとゞいかに見おとし給ひけむ、その夕よりみだりごゝちかきくらしあやなくけふをながめくらし侍る」など書きて、

「よそに見てをらぬなげきはまげれどもなごり戀しき花のゆふかけ」とあれど侍従は一日の心も知らねば、唯世の常のながめにこそはと思ふ。おまへに人まげからぬ程なればこの文をもて参りて「この人のかくのみ忘れぬものにことゝひものし給ふこそ煩はしく侍れ。心苦しげなる有様も見給へあまる心もやそひ侍らむと、みづからの心ながら知りがたくなむ」とうち笑ひて聞ゆれば「いとうたてあることをもいふかな」と何心もなげにのたまうて文ひ

ろげたるを御覽す。見もせぬといひたる所をあさましかりしみをすのつまをおぼし合せらるゝに、御おもて赤みておととのさばかりことのついでごとくに大將に見え給ふな、いはけなき御有様なめればちのづからとりはづして見奉るやうもありなむと、いましめ聞え給ふをおぼし出づるに、大將のさることありしと語り聞えたらむ時いかにあはめ給はむと、人の見奉りけむ事をばおぼさで、えはぐかり聞え給ふ心のうちぞをさなかりける。常よりも御さしいらへなければすさまじくまひて聞ゆべきことにもあらねばひき忍びて例のかく「一日はつれなし顔をなむ、めざましうとゆるし聞えざりしを、見ずもあらぬやいかにあなかけかけしや」とはやりかに走り書きて、

「今さらになろにないでそ山櫻およばぬ枝にこゝろかけきと。かひなきことを」とあり。

## 若菜下

ことわりと思へどうれたくもいへるかな、いでやなぞかく異なる事なきあへまらひばかりをなぐさめにては、いかゞすぐさむ、かゝる人づてならでひとことをものたまひ聞ゆる世ありなむやと、思ふにつけても大方にては惜しくめでたしと思ひ聞ゆる院の御ためなまゆがむ心やそひにたらむ。つごもりの日は人々數多參り給へり。なまものうくすどろはしけれど、そのあたりの花の色をも見てや慰むと思ひて參り給ふ。殿上ののりゆみ二月とありしを



過ぎて三月はた御き月なれば口惜しと人々思ふに、この院にかゝるまとのあるべしと聞き傳へて例のつどひ給ふ。左右大將さる御なからひにて参り給へばすけたちなどいどみかはして、小弓とのたまひしかどかちゆみの勝れたる上ずどもありければ召し出て、射させ給ふ。殿上人ども、つきづきまきかぎりは皆まへしりへの心こまどりにかたわきて、暮れゆくまゝに今日にとぢむる霞の氣色もあわたしく、亂るゝ夕風に花のかげいとゞ立つことやすからず。人々いたく忍ひすぎ給ひてえんなるかけものどもこなたかなた人々の御心見えぬべきを、柳の葉をも、たびあてつべきとねりどものうけはりていとるむじんなりや。すこしこゝしき手つきどもをこそいとませめとて、大將だちより始めており給ふに、衛門の督人よりけながめをまつゝ物し給へば、かのかたはし心知れる御めには見つけつゝなほいとけしきことなり。煩しきこと出て來べきよにやあらむと我さへ思ひつきぬるこゝちす。この君達御中いとよしさるなからひといふ中にも心かはしてねんごろなればはかなきことにても物思はしくうち紛るゝことあらむをいとほしく覺え給ふ。みづからもおとゞを見奉るにけちそろしくまばゆくかゝる心はあるべきものか、なのめならむにてだにけしからず、人にてんつかるべきふるまひはせじと思ふものを、ましておほけなきことと思ひわびてはかもありし猫をだにえてしがな、思ふこと語らふべくはあらねどかたはらさびしきなきさめにもなつけむと思ふに、物ぐるほしういかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける。女御の御方に参りて物語など聞えまぎらはし心みる、いと奥深く心はづかしき御もてな

しにてまほに見え給ふこともなし。かゝる御なからひにだにけどほくならひたるを、ゆくりかに怪しくはありしわざどかしとは、さすがにうち覺ゆれど、おぼろげに志めたる我が心から淺くも思ひなされず。春宮に参り給ひて、ろなうかよひ給へる所あらむかしと目とめて見奉るに匂ひやかになどはあらぬ御かたちなれどさばかりの御有様はた、いとことにてあてになまめかしくおはします。うちの御猫の數多ひきつれたりけるはらからどもの所々にあがれて、この宮にも参れるがいとをかしげにてありくを見るにまづ思ひ出でらるれば、六條の院の姫宮の御方に侍る猫こそいと見えぬやうなる顔して、をかしうはべりしか、はつかになむ見給へし」と啓し給へば、猫わざとらうたくせさせ給ふ御心にてくはしく問はせ給ふ。「から猫のこのにたがへるさましてなむ侍りし。同じやうなるものなれど心をかしく人なれたるは怪しくなつかしきものになむ侍る」などゆかしくおぼさるばかり聞えなし給ふ。さこそし召しおきて桐壺の御方より傳へて聞えさせ給ひければ参らせ給へり。げにいと美しげなる猫なりけりと人々けうずるを、衛門督は尋ねむとおぼしたりきと御けしきを見置きて、日比へて参り給へり。わらはなりしより朱雀院のとりわきておぼしつかはせ給ひしかば、御山すみにおくれ聞えては又この宮にも志たしう参り心よせ聞えたり。御琴など教へ聞え給ふとて御猫ども數多集ひ侍りにけり。「いづら好みし人か」と尋ねて見つけ給へり。いとらうたく覺えてかきなでつゝ居たり。宮もげにをかしさましたりけり。心なむまだなつきがたきは見馴れぬ人を知るにやあらむ、こゝなる猫どもことに劣らずかし」とのたま

へば、「これはさるわきまへ心もをさをさ侍らぬものなれど、その中にも心かしこきはものづからたましひ侍らむかし」など聞えて、「まさるどもさぶらふめるをこれは暫し賜はりあづからむ」と申し給ふ。心のうちにあながちにをこがましくかつは覺ゆ。つひにこれを尋ねとりてよるもあたり近くふせ給ふ。あけたてば猫のかしづきをしてなてやしなひ給ふ。ひとげ遠かりし心もいとよく馴れてともすればきぬのすそにまつはれ寄りふしむつるゝをまめやかにうつくしと思ふ。いといたくながめて端近く寄りふし給へるに、來てねうねうといとらうたげになけば、かきなでゝうたてもすゝむかなとほゝゑまる。

「戀ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなくねなるらむ」。これも昔の契にやと顔を見つゝのたまへば、いよいよらうたげになくをふところに入れて眺め居給へり。ごだちなどは「怪しく、俄なる猫のとさめくかな。かやうなるもの見入れ給はぬ御心に」と咎めけり。宮より召すにも參らせずとりこめてこれを語り給ふ。『左大將殿の北の方は大殿の君達よりも、右大將の君をばなむ昔のまゝにうとからず思ひ聞え給へり。心ばへのかどかどしくけちかくおはする君にて對面し給ふ時々もこまやかに隔てたる氣色なくもてなし給へれば、大將もまげいさなどのうととしく及びがたげなる御心さまのあまりなるにさまことなる御むつびにて思ひかはし給へり。男君今はましてかの初の北の方をもてはなればてゝ並びなくもてかしづき聞え給ふ。この御腹には男君達のかぎりなればさうさうして、かのまきばしらの姫君えてもてかしづかまほしくま給へど、おほぢ宮など更に許し給はず、こ

の君をだに人わらへならぬさまにて見むと覺しの給ふ。みこの御おぼえいとやんごとなくうちにもこの宮の御心よせいとこよなくて、このことと奏し給ふことをばえそむき給はず心ぐるしきものに思ひ聞え給へり。大方も今めかしくおはする宮にてこの院大殿にさしつぎ奉りては、人も参り仕うまつり、世の人もおもく思ひ聞えけり。大將もさる世のおもしとなり給ふべききたかたなれば、姫君の御おぼえなどてかはかるくはあらむ。聞え出づる人々ことに觸れて多かれどおぼしもさだめず。衛門督をさも氣色ばまばとおぼすべかめれど、猫には思ひおとし奉るにや、かけても思ひよらぬぞ口惜しかりける。母君のあやしく猶ひがめる人にて世の常のありさまにもあらずもてけち給へるを口惜しきものにおぼして、まゝはの御あたりをば心つけてゆかしく思ひて、今めきたる御心さまにぞ物し給ひける。兵部卿の宮猶一所のみおはして、御心につけておぼしける事どもは、皆たがひて世の中もすさまじく人わらへにおぼさるゝに、さてのみやはあまえて過ぐすべきと覺してこのわたりに氣色ばみより給へれば大宮、何かはかしづかむと思はむ女子をば宮仕へにつぎてはみ子達にこそは見せ奉らめ、たゞ人のすくよかになほなほしきをのみ今の世の人のかしくする志ななきわざなり」とのたまひて、いたくも惱まし奉り給はずうけひき申し給ひつ。御子あまりうらみどころなきをさうざうしとおぼせど大方のあなづりにくきあたりなればえしもいひ過ぐし給はでちはしましそめぬ、いとなくかしづきさこえ給ふ。大宮は女ごあまた物し給ひて、さまざま物なげかしき折々多かるに物こりもしぬべけれど猶この君のことの思ひ放

ち難く覺えてなむ、母君は怪しきひがものに年比にそへてなりまさり給ふ。大將はた我がことに従はずとておろかに見捨てられたればいとなむ心苦しきとて、御志つらひをもたぢる御手づから御覽じいれよろづにかたじけなく御心に入れ給へり。宮はうせ給ひにける北の方を世と共に戀ひ聞え給ひて唯むかしの御有様に似奉りたらむ人を見むとおぼしけるに、悪しくはあらぬとさまかはりてぞ物し給ひけるとおぼすに、口惜しくやありけむ通ひ給ふさまいと物うげなり。大宮いと心づきなきわざかなとおぼし歎きたり。母君もさこそひがみ給ひつれどうつしごゝろ出でくる時は口惜しくうき世と思ひはて給ふ。大將の君もさればよいといたく色めき給へる御子をと、初より我が御心にゆるし給はざりしとなればにやものしと思ひ給へり。かんの君もかくたのもしげなき御さまを近く聞き給ふには、さやうなる世の中を見ましかばこなたかなたにかにおぼし見給はましなどなまをかしくも哀にもおぼし出でける。そのかみもけぢかく見聞えむとは思ひよらざりきかし、唯なさけなさけしう心深きさまにのたまひわたりしを、あへなくあはつけきやうにや聞きおとし給ひけむといとはづかしく、年比もおぼしわたることなれば、かゝるあたりにて聞き給はむことも心づかひせらるべくなどおぼす。これよりもさるべきことはあつかひきこえ給ふ。せうとの君だちなどしてかゝる御氣色も知らずがほにくからずきこえまつはしなどするに心苦しくもてはなれたる御心はなきにおほ北の方といふさがなものと常に許しなく怨じ聞え給ふ。「御子達はのどかにふたごゝろなくて見給はむをだにこそ華やかならぬ慰めには思ふべけれ」と

むつかり給ふを宮も漏り聞き給ひては、いと聞きならぬことかな、昔いと哀と思ひし人を  
おきても猶はかなき心のすさびは絶えざりしかどかうきびしき物えんじは殊になかりしも  
のを、心づきなくいと昔を戀ひ聞え給ひつゝふるさとにうちながめがちにのみおはしま  
す。さいひつゝもふたとせばかりになりぬればかゝるかたにめなれて唯さるかたの御中に  
てすぐし給ふ。はかなくて年月も重りて内のみかど御位につかせ給ひて十八年にならせ給  
ひぬ。次の君とならせ給ふべき御子おはします。物のほえなきに世の中はかなく覺ゆるを  
心安く思ふ人々にも對面しわたくしざまに心をやりてのどかにすぐさまほしくなむと、年  
比おぼしのたまはせつるを、日比いと重く惱ませ給ふことありて俄にありぬさせ給ひぬ。世  
の人あかずさかりの御世をかくのがれ給ふことゝ惜み歎けど春宮もおとなびさせ給ひにた  
ればうちつぎて世の中のみつりごとなど殊に變るけぢめもなかりけり。おほきおとちぢ  
の表奉りてこもり居給ひぬ。世の中の常なきにより、かしこきみかどの君も位を去り給ひぬ  
るに、年ふかき身のかうぶりをかけむ何か惜しからむとおぼしのたまひて左大將右大臣に  
なり給ひてぞ世の中のまつりごとつからまつり給ひける。女御の君はかゝる御世をも待ち  
つけ給はでうせ給ひにければ限ある御位を得給へれど物のうしろのこゝちしてかひなかり  
けり。六條の女御の御腹の一の宮ばうに居給ひぬ。さるべきことかねて思ひしかどさしあた  
りては猶めでたく目驚かるゝわざなりけり。右大將の君大納言になり給ひて例の左に移り  
給ひぬ。いよいよあらまほしき御なからひなり。六條院はあり居給ひぬる冷泉院の御つぎお

はしまさぬを飽かず御心の中におぼす。同じすぢなれと思ひなやましき御事なくてすぐし給へるばかりにつみは隠れて末の世まではえ傳ふまじかりける御すくせ口惜しくさうざうしくおぼせど人にのたまひ合せぬことなればいぶせくなむ。春宮の女御は御子達あまた數そひ給ひて、いとど御おぼえならびなし。源氏のうちつゞきさきに居給ふべきことを世の人あかず思へるにつけても冷泉院の后は故なくてあながちにかくしおき給へる御心をおぼすに、いよいよ六條院の御ことを年月にそへて限なく思ひきこえ給へり。院のみかどおぼしめし、やうにみゆきも所せからで渡り給ひなどしつゝかくてしも實にめてたくあらまほしき御有様なり。姫宮の御ことはみかど御心留めて思ひきこえ給ふ。大方の世にも遍くもてかしづかれ給ふを、たいの上の御勢にはえまさり給はず、年月ふるまゝに御中いとうるはしくむつび聞えかはし給ひていさゝかあかぬことなくへだても見え給はぬものから「今はかうおぼざうのすまひならでのどやかに行ひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと見はてつる心地するよはひにもなりにけり。さりぬべきさまにおぼし許してよ」とまめやかにきこえ給ふをりをりあるを「あるまじくつらき御ことなり。みづから深きほいあることなれどとゞまりてさうざうしく覺え給ひ、ある世に代らん御有様のうしろめたさによりこそなからふれ、遂にその事とげなん後にともかくもおぼしなれ」などのみさまたげ聞え給ふ。女御の君唯こなたをまことの御親にもてなし聞え給ひて、御かたはかくれがの御うしろみにて卑下しものし給へるしもぞなかなかゆくさきたのもしげにめてたかりける。尼君もやゝもすれば堪

へぬよろこびの涙ともすれば落ちつゝ目をさへのごひたゞして命長き嬉しげなるためしに  
なりて物し給ふ。すみよしの御ぐわんかつがつはたし給はむとて春宮の女御の御いのりに  
まうで給はむとて、かの箱あけて御覽すればさまごまのいかめしきことども多かり。年ごと  
の春秋のかぐらに必ず長き世のいのりを加へたるぐわんどもげにかゝる御勢ならてははた  
し給ふべき事ども思ひおきてざりけり。唯走り書きたるおもむきのさえさしくはかばか  
しく佛神も聞き入れ給ふべき言の葉あきらかなり。いかでさるやまぶしのひじりこゝろに  
かゝる事どもを思ひよりけむと哀におほけなくも御覽す。さるべきにて暫しかりそめに身  
をやつしける昔の世のおこなひびとにやありけむなどおぼしめぐらすにいとゞかるがるし  
くもおぼされざりけり。この度はこの心をは顯し給はず唯院のものまうでにて出て立ち給  
ふ。うらづたひの物さわがしかりしほどそこらの御ぐわんども皆はたし盡し給へれども、猶  
世の中にかくおはしましてかゝるいろのさかえを見給ふにつけても神の御たすけは忘  
れ難くて對の上もぐし聞えさせ給ひてまうでさせたまふ。ひゞき世の常ならずいみじくこ  
とどもそぎ捨てゝ世のわづらひあるまじくとはぶかせ給へどかぎりありければめづらかに  
よそほしくなむ、上達部もおとゞふた所を置き奉りては皆つかうまつり給ふ。まひびとは衛  
府のすけどものかたち清げにたけだちひとしきかぎりをえらせ給ふ。このえらびに入らぬ  
をばはぢに憂へ歎きたるすきものどもありけり。へいじうも石清水賀茂の臨時の祭などに  
召す人々の道々のことにすぐれたるかぎり整へさせ給へり。加はりたる二人なむこのゑづ



かさの名高きかぎりを召したりける。御神樂のかたにはいと多く仕うまつれり。内、春宮、院の殿上人かたがたに分れて心寄せつかうまつる。數も知らずいろいろにつくしたる上達部の御馬くら、馬ぞひ、ずるじん、こどねりわらは、つぎつぎのとねりなどまで整へ飾りたる見物またなきさまなり。女御殿對の上はひとつに奉りたり。次の御車には明石の御かた尼君忍びて乗り給へり。女御の御めのと心知りにて乗りたり。かたがたのひとだまひ上の御方の五つ女御殿の五つ明石の御あがれのみつ、目もあやに飾りたるさうぞく有様いへば更なり。さるは尼君をば同じくは老の浪のまわのぶばかりに人めかしくてまうでさまむと院はのたまひけれどこの度はかく大方のひびきに、立ちまじらむもかたはらいたし、もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらばと御方はまづめ給ひけるをのこりの命うしろめたくてかつがつ物ゆかしがりてまたひ參り給ふなりけり。さるべきにてもとよりかく匂ひ給ふ御身どもよりもいみじかりけるちぎりあらはに思ひ知らるゝ人の御有様なり。十月中の十日なれば神のいがきにはふくずも色かはりて松の下もみぢなどおとにのみ秋を聞かぬかほなり。とどごとしきこまもろこしのがくよりもあづまあそひの耳なれたるはなつかしくおもしろく浪風の聲に響きあひてさる小高き松風に吹き立てたる笛のねも外にて聞くまらべには變りて身にまみ、琴にうち合せたるひやうしもつゞみを離れてとゝのへとりたる方おどろおどろしからぬもなまめかしくすごうおもしろく所からはまして聞えけり。やまあぬにすれる竹のふしは松の緑に見えまがひかざしの花のいろいろは秋の草にことなるけぢめ分れて何

事にも目のみまがひいろふ。もとめこはつる末に若やかなる上達部はかたぬぎてあり給ふ。にほひもなく黒き上のきぬにすあうがさねえびぞめの袖を俄に引きほころばしたるに、紅深きあこめの袂のうちまぐれたるに氣色ばかりぬれたる松はらをば忘れて紅葉の散るに思ひわたる。見るかひ多かるすかたどもにいと白くかれたる萩を高やかにかざして唯一返りまひて入りぬるはいとおもしろく飽かずぞありける。おとゞ昔のことおぼし出でられ中比まづみ給ひし世のありさまも目の前のやうにおぼさるゝに、そのよのことうち亂れ語り給ふべき人もなければ、ちじのおとゞをぞ戀しく思ひ聞え給ひける。入り給ひて二の車に忍びて、

「誰かまた心を知りてすみよしの神世を経たる松にことゝふ」。御たゝうがみに書き給へり。尼君うち志をれたるかゝる世を見るにつけてもかのうらにて今はと別れ給ひしほど女御の君のおはせし有様など思ひ出づるもいとかたじけなかりける身のすくせの程を思ふ。世を背き給ひし人も戀しくさまさまに物悲しきをかつはゆゝしとこといみして、

「すみのえをいけるかひある渚とは年經るあまも今日や知るらむ」。おそくはびんなからむとたゞうち思ひけるまゝなりけり。

「昔こそまづ忘れねすみよしの神のまゐるしを見るにつけても」とひとりごちけり。よひとよ遊び明し給ふ。二十日の月遙にすみて海のおもておもしろく見えわたるに霜のいとこちたうおきて松原も色まがひて、よろづの事そとろ寒くおもしろさも哀さも立ち添ひたり。

對の上常の垣根のうちながら時々につけてこそ興ある朝夕のあそびに耳ふり目なれ給ひけれ。みかどよりとの物見をさをさし給はず。ましてかくみやこの外のありきはまだ習ひ給はねば珍しくをかしく思さる。

「すみのえの松に夜ふかくおく霜は神のかけたるゆふかつらかも」。たかむらのあそんのひらの山さへといひける雪のあしたをおぼしやれば祭の心うせ給ふまゐるしにやといよいよたのもしくなむ。女御の君

「神人の手にとりもたる榊葉にゆふかけ添ふるふかき夜の霜」。中務の君、

「はふり子がゆふうちまがひおく霜はげにいちじるき神のまゐるしか」。つぎつぎ數知らず多かりけるを何せむにかは聞きおかむ。かゝるをりふしの歌は例の上手めき給ふ男達もなかなかいでぎえして松の干とせより離れて今めかしきことしなればうるさくてなむ。ほのぼのと明け行くに霜はいよいよ深くてもとすゑもたどたどしままでゑひ過ぎにたる神樂おもてどものおのが顔をは知らで、おもしるきことに心はまみて、庭火もかけまめりたるになほまざいまざいと榊葉を取り返しつゝ、祝ひ聞ゆる御世の末思ひやるぞいとせしきや。萬の事あかずおもしるきままにちよをひとよになさまほしきよの何にもあらで明けぬればかへる浪にきほふも口惜しく若き人々おもふ。松原にはるばると立てつゞけたる御車どもの風に打ちなびくしたすだれのひまひまもときはのかげに花の錦を引き加へたと見ゆるに、うへのきぬのいろいろけぢめおきてをかしきかけばん取りつゞきて物参りわたすをぞ

しもびとなどは目につきてめでたしとは思へる。尼君の御前にもせんかうのをしきにあをにびのおもておりてさうじものを参るとて目ざましき女のすくせかなとおのがじはまりうごちけり。詣てたまひし道はことごとしくて煩はしき神だからさまさまに所せげなりしをかへさは萬のせうえうを盡し給ふ。言ひ續くるもうるさくむつかしき事どもなれば、かゝる御有様をもかの入道の聞かず見ぬ世にかけ離れ給へるのみなむあかさざりける。難きとなりかし。まじらはましも心苦しくや。世の中の人これをためしにて心高くなりぬべきころなめり。萬の事につけてめであさみ世のことぐさにて明石の尼君とぞさいはひびとにいひける。かのちじの大殿の近江の君はすぐろくうつ時の詞にも明石の尼君明石の尼君とぞ幸ひ乞ひける。入道のみかどはあこなひをいみじくし給ひてうちの御事をも聞き入れ給はず、春秋の行幸になむ昔思ひ出でられ給ふこともまじりける。姫宮の御事をのみぞ猶えおぼしはなただこの院をば猶大方の御うしろみに思ひ聞え給ひてうちうちの御心よせあるべくそうせさせ給ふ。二品になり給ひてみふなどまさる、いよいよ花やかに御勢そふ。對の上かく年月にそへてかたがたにまさり給ふ御おぼえに我が身はたゞ一所の御もてなしに人には劣らねどもあまり年積りなばその御心ばへも遂に衰へなむ。さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがなとたゆみなくおぼしわたれどさかしきやうにやおぼさむとつゝまれて、はかばかしくもえ聞え給はず。うちのみかどさへ御心よせことに聞え給へばおろかに聞かれ奉らむもいとほしくて渡り給ふ事やうやういとしきやうになりゆく。さるべき事ことわりとは思ひな

がら、さればよとのみ安からずおぼされけれど猶つれなく同じさまにて過し給ふ。春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたに取りわきてかしづき奉り給ふ。その御あつかひになむつれづれなる御よがれのほども慰め給ひける。いづれもわかずうつくしく悲しと思ひ聞え給へり。夏の御方はかくとりどりなる御うまごあつかひを羨みて大將の君のないしのすけばらの君を切に迎へてぞかしづき給ふ。いとをかしげにて心ばへもほどよりはざれおよすげたればおとどの君もらうたがり給ふ。少なき御つぎとおぼし、かど末にひろごりてこなたかなたいと多くなり添ひ給ふを今は唯これをつくしみあつかひ給ひてぞつれづれもなくさめ給ひける。右の大とのの参り仕うまつり給ふこといにしへよりもまさりて、親しく今は北の方もおとなびはて、かの昔のかけがけしきすぢ思ひはなれ給ふにや、さるべき折もわたり給ひつゝ對の上にも御對面ありて、あらまほしく聞えかはし給ひけり。姫宮のみぞ同じさまに若くおほどきておはします。女御の君は今はおほやげさまに思ひはなち聞え給ひてこの宮をばいと心苦しく幼からむ御むすめのやうに思ひはぐ、み奉り給ふ。朱雀院の今はむげに世近くなりぬる心地して物心ほそきを更にこの世の事顧みじと思ひ捨つれど、對面なむ今一度あらまほしきを、もしうらみのこりもこそすれ、ことごとしきさまならで渡り給ふべく聞え給ひければ、おとどもげにさるべきことなり、かゝる御氣色なからむにてだに進み参り給ふべきをましてからまち聞え給ひけるが心苦しきこと、参り給ふべき事おぼしまうく。ついでなくすまじきさまにてやははひわたり給ふべき、なにわざをしてか御覽せさせ給

ふべきとおぼしめぐらす。このたびたり給はむ年若菜などてうじてやとおぼしてさまざまの御法服のこと、いもひの御まうけのまつらひ何くれとさまことに變れる事どもなれば、人かばまひびと樂人などを、心ことに定めすぐれたるかぎりを整へさせ給ふ。右大殿の御子どもふたり、大將の御子ないしのすけばらの加へて三人、又ちひささ七つよりかみのは皆殿上せさせ給ふ。兵部卿の宮のわらはそんわうすべてさるべき宮達の御子ども、家のこの君達皆えらび出て給ふ。殿上の君達もかたちよく同じき舞の姿も心ことなるべきを定めて數多の舞のまうけをせさせ給ふ。いみじかるべきたびのこと、てみなひと心を盡し給ひてなむ。道々の物の師上手いとまなきころなり。宮はもとよりきんのおんことをなむ習ひ給ひけるをいと若くて院にもひき別れ奉り給ひにしかば覺束なく思して「參り給はむついでにかの御琴の音なむ聞かまほしき。さりともしきんばかりはひき取り給ひつらむ」とまりうごとに聞え給ひけるを内にも聞し召して「げにさりともしきはひことならむかし。院の御前にて手つくし給はむついでに參りて聞かばや」などの給はせけるをおとどの君も傳へ聞き給ひて「年比さりぬべきついでごとには教へ聞ゆることもあるを、そのけはひはげに優り給ひにたれど、まだ聞し召し所あるものふかきてにはおよばぬを何心もなくて參り給へらむついでに聞し召さむとゆるしなくゆかしがらせ給はむはいとはしたなかるべきことにも」といとおぼしてこのころぞ御心留めて教へ聞え給ふ。しらべ殊なるて二つ三つおもしろきだいこくと

もの四季につけて變るべきひびき空のさむさぬるさをとのへ出で、やんごとなかるべき手のかぎりを取り立て、教へ聞え給ふに、心もとなくおはするやうなれどやうやう心得給ふまゝにいとよくなり給ふ。晝はいと人志げく猶ひとたびもゆしあんずる暇も心あわたゞしければよるよるなむまづかにことの心もまめ奉るべきとて對にもその比は御暇聞え給ひて明暮教へ聞え給ふ。女御の君にも對の上にもさんは習はし奉り給はざりければこのをりをさをさ耳なれぬ手ども彈き給ふらむをゆかしとおぼして女御もわざとありがたき御暇を唯暫しと聞え給ひてまかで給へり。御子二所おはするを又もけしきはみ給ひていつゝきはかりにぞなり給へればかみわざなどにことつけておはしますなりけり。十一月すぐしては參り給ふべき御せうそこうちまきりあれどかゝるついでにかくおもしろきよるよるの御遊をうらやましく、などて我に傳へ給はざりけむとつらく思ひ聞え給ふ。冬の夜の月は人にたがひてめで給ふ御心なればおもしろき夜の雪の光にをりに合ひたる手どもひき給ひつゝさぶらふ人々も少しこの方にほのめきたるに御琴どもとりどりにひかせて遊びなどし給ふ。年の暮れつかたは對などにはいそがしくこなたかなたの御いとなみにおのづから御覽じ入るゝことどもあれば春のうららかならむ夕などにいかでこの御琴のね聞かむとのたまひわたるに年返りぬ。院の御賀まづおほやけよりせさせ給ふ。ことどもいとこちたきにさしあひてはびんなくおぼされて少しほどすぐし給ふ。二月十餘日と定め給ひて樂人まひ人など参りつゝ御あそび絶えずあり。この對に常にゆかしうする御琴のねいかでこの人々のさう

琵琶のねも合せて女樂てゝろみさせむ、只今の物の上手どもこそ更にこのわたりの人々の御心志らひどもにまさらね、はかばかしく傳へ取りたることはをさをさなけれど、何事もいかに心知らぬことあらじとなむ、幼きほどに思ひしかば世にある物の師といふかぎり、又高き家々のさるべき人の傳へどもを殘さず試みし中にいと深くはづかしきかなと覺ゆるきはの人なむなかりし。そのかみよりも又この比の若き人々のざれよしめきすぐすにはたあさくなりたるべし。きんはたまして更にまねぶ人なくなりたりとか。この御琴のねばかりだに傳へたる人をさをさあらじ」とのたまへば何心なく打ちゑみて嬉しくかくゆるし給ふ程になりけるとおぼす。廿一二ばかりになり給へど猶いといみじくかたなりにきびはなる心地してほそくあえかに美しくのみ見え給ふ。「院にも見え奉り給はで年經ぬるをねびまさり給ひにけりと御覽ずばかり用意くはへて見え奉り給へ」とことに觸れて教へ聞え給ふに、げにかゝる御うしろみなくてはましていはけなくおはします御有様かくれなからましと人々も見奉る。正月二十日ばかりになれば空もをかしき程に風ぬるくふきて御前の梅も盛になりゆく。大方の花の木ども、皆氣色ばみ霞み渡りにけり。「月たゞば御いそぎ近く物騒がしからむにかきあはせ給はむ御琴のねもしがくめきて人のいひなさむを、このころ靜なるほどに試み給へ」とてきん殿にわたし奉り給ふ。御供にわれもわれもと物ゆかしがりてまう上らまほしがれどこなたに遠きをばえりとゞめさせ給ひて少しねびたれどよしあるかぎりえりてさぶらはせ給ふ。わらはへはかたちすぐれたる四人赤色に櫻のかざみ薄色の織物の



あこめうきもんのうへの袴、紅のうちたるさまもてなしすぐれたるかぎりを召したり。女御の御方にも御志つらひなどいと改れる比の曇りなきにおのおのいとましく盡したるよそひどもあざやかに二なし。童は青色にすあうのかざみ、からあやのうへの袴、あこめは山吹なるからのきを同じさまに整へたり。明石の御方はことごとしからて紅梅ふたり櫻ふたり、あをしのかぎりにてあこめ濃く薄くうちめなどえならで着せ給へり。宮の御方にもかくつどひ給ふべく聞きたまひてわらはべの姿ばかりは殊につくろはせ給へり。あをにに柳のかざみ、えびぞめの袖など殊にこのましく珍らしきさまにはあらねど大方のけはひのいかめしく氣高きことさいへどならびなし。ひさしの中の御さうじをはなちてこなたかなた御几帳ばかりをけぢめにて中の間は院のおはしますべきおましよそひたり。今日の柏子合せにはわらはべを召さむとて右おほい殿の三郎、かんの君の御はらの兄君さうの笛、左大將の御太郎横笛と吹かせてすのこにさぶらはせ給ふ。内には御志とねども並べて御琴どもまゐりわたす。ひし給ふ御琴どもうるはしきこんぢの袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方に琵琶、紫の上にわごん、女御の君にさうの御琴、宮にはかくことごとしき琴はまだえひき給はずやと危くて例の手ならし給へるをぞ調べて奉り給ふ。笙の御琴はゆるぶとなけれど、猶かく物に合する折の調べにつけてことちのたちど亂るゝものなり。よくその心まらひ整ふべきを女はえはりまづめじを猶大將をこそ召し寄せつべかめれ。「この笛吹どもまだいと幼げにて柏子とゝのへむ頼つよからず」と笑ひ給ひて「大將こなたに」と召せば御かたが

たはづかしく心づかひしておはす。明石の君を放ちてはいづれも皆捨て難き御弟子どもなれば御心加へて大將の聞き給はむになんなかるべくとおぼす。女御は常にうへのきこし召すにも物に合せつゝひきならし給へばうしろやすきを和琴こそいくばくならぬまらべなれどあとさだまりたることなくてなかなか女のとどりぬべけれ、春の琴のねは皆かき合するものなるを亂るゝ處もやとなまいとほしくおぼす。大將いといたく心げさうして御前のことごとしくうるはしき御心みあらむよりも今日の心づかひは殊にまさりて覺え給へばあざやかなる御直衣、かうにまみたる御ども袖いたくたきまめて引きつゝろひて參り給ふほどくれはてにけり。ゆるあるたそがれ時の空に花はこぞのふる雪思ひ出でられて枝もたわむばかり咲き亂れたり。ゆるらかに打ち吹く風にえならず匂ひたるみすの内のかをりも吹き合せて鶯さそふつまにまつべくいみじきおとこのあたりのにほひなり。みすの下より箏の御琴のすそ少しさし出で、「かるがるしきやうなれどこれが緒整へて調べ試み給へ。こゝに又うとき人の入るべきやうもなきを」とのたまへば打ちかしてまりて給はり給ふほどようい多くめやすくていちこちでうの聲にはちの緒を立てゝふとも調べやらでさぶらひ給へば「猶かきあはせばかりは手ひとつすさまじからでこそ」とのたまへば「更に今日の御遊のさしいらへにまじらふばかりの手づかひなむ覺えず侍りけるを」と氣色ばみ給ふ。「さもあるとなれど女樂にえことませでなむ遁げにけるとつたはらむ名こそ惜しけれ」とて笑ひ給ふ。調べはてゝをかしき程に掻き合せばかり弾きて參らせ給ひつ。この御まごの君達のいと

美しきとのゐすがたどもにて吹き合せたる物のねどもまだ若けれどおひさきありていみじくをかしげなり。御琴どもの調べども整ひはて、搔き合せ給へるほどいづれとなき中に琵琶はすぐれて上手めきかみさびたる手づかひすみはて、おもしろく聞ゆ。和琴に大將も耳留め給へるになつかしくあいぎやうづきたる御つまおとに搔き返したるねの、珍しく今めきて更にこのわざとある上手どものおどろおどろしく搔き立てたるしらべ調子に劣らずにぎはしく、やまとごとにもかゝる手ありけりと聞き驚かる。深き御らうの程あらはに聞えておもしろきにおと、御心おちゐていとありがたく思ひ聞え給ふ。さうの御琴は物のひまひまに心もとなく漏りいづる物のねがらにてうつくしげになまめかしくのみ聞ゆ。きんは猶若き方なれど習ひ給ふさかりなればたどしからずいとよく物に響き合ひていうになりにける御琴のねかなと大將聞き給ふ。ひやうしとりてさうがし給ふ。院も時々扇うちならして加へ給ふ御聲昔よりもいみじくおもしろく少しふつゝかにもものしきけそひて聞ゆ。大將も聲いとすぐれ給へる人にて夜の静になり行くまゝにいふかぎりなくなつかしき夜の御遊なり。月心もとなきころなればとらうこなたかなたにかけて火よき程にともさせ給へり。宮の御方をのぞき給へれば人よりけにちひさく美しげにて唯御ぞのみある心ちす。にほひやかなる方はおくれて唯いとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の僅にしたり始めたらむ心地して、鶯の羽風にも亂れぬべくあえかに見え給ふ。櫻のほそながにみぐしは左みぎよりこぼれかゝりて柳の糸のさましたり。これこそは限なき人の御有様

なめれと見ゆるに女御の君は同じやうなる御なまめき姿の今少しにほひ加はりてもてなし  
けはひ心にくくよしあるさまし給ひてよく咲きこぼれたる藤の花の夏にかゝりてかたはら  
に並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞし給ふ。さるはいとふくらかなる程になり給ひてなやまし  
く覺え給ひければ御琴も推しやりてけうそくにおしかゝり給へり。さゝやかによびかゝ  
り給へるに、御けうそくは例の程なればおよびたる心地して殊更にちひさく作らばやと見  
ゆるぞいと哀げにおはしける。紅梅の御ぞに御ぐしのかゝりはらはらと清らにてほかけの  
御姿世になく美しげなるに紫の上はえびぞめにやあらむ、色濃きこうちき、うすすはうの細  
長に御ぐしのたまれるほどちたくゆるらかにおほきさなどよき程にやうだいあらまほし  
く、あたりにほひ満ちたる心地して、花といはゞ櫻にたとへても猶物よりすぐれたるけはひ  
殊に物し給ふ。かゝる御あたり明石はけおさるべきをいとさしもあらずもてなしなど氣  
色ばみはづかしく心のそこゆかしきさましてそこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳  
の織物の細長もえぎにやあらむ、小袷着てうすものゝ物はかなげなる引きかけて、殊更ひげ  
したれどけはひ思ひなしも心にくく、あなづらはしからず。こまの青地の錦の端さしたるし  
とねにまほにもゐて琵琶をうち置きて唯氣色ばかりひきかけてたをやかたつかひなしたる  
ばちのもてなし、音を聞くよりも又ありがたくなつかしくて五月まつ花たちばなの花も實  
もくしておしをれるかをり覺ゆ。これもかれも打ち解けぬ御けはひどもを聞き見給ふに大  
將もいと打ちゆかしく覺え給ふ。對の上の見し折よりもねびまさり給へらむありさまゆか

しきにまづ心もなし、宮をば今少しのすくせ及ばましかば我が物にても見奉りてまし。心のいとぬるきぞくやしきや、院はたびたびさやうにおもむけて去りうごとにもなたまはせけるをど、ねたく思へど少し心安き方に見え給ふ御けはひに、あなづり聞ゆとはなけれどいとしも心は動かざりけり。この御かたをば何ごとも思ひ及ぶべき方なくけ遠くて年比過ぎぬれば、いかてか唯大方に心よせあるさまをも見え奉らむとばかりの口惜しく歎しきなりけり。あながちにあるましくおほけなき心などは更に物し給はず、いとよくもてをさめ給へり。夜更け行く風のけはひひやゝかなり。臥まちの月はつかにさし出でたる心もとなしや。「春のおぼろ月夜よ、秋の哀はたかうやうなる物のねに蟲の聲より合せたる、たゞならずこよなく響きそふ心地すかし」とのたまへば大將の君「秋の夜の隈なき月には萬の物のとゞこほりなきに琴笛の音もあきらかに澄める心地はし侍れど猶殊更に作り合せたるやうなる空の氣色花の露もいろいりめ移ろひ心ちりてかぎりこそ侍れ。春の空のたどたどしき霞の間より朧なる月かげに靜に吹き合せたるやうには、いかてか笛のねなども艶に澄みのぼりはてなむ。女は春をあはれむとふるき人のいひ置き侍りける、げにさなむ侍りける。なつかしくものゝとゝのほることは春の夕暮こそことに侍りけれ」と申し給へば「いなこのさだめよ。いにしへより人のわきねたることを末の世にくだれる人のえあきらめはつまじくこそ。物のまらべごくのものどもはしもげにりちをば次のものにしたるはさもありかし」などの給ひて「いかに只今いうそくのおぼえたかきその人かの人ぞせんなどにて度々試みさせ給ふにすぐれ

たるは數少くなりためるをそのこのかみと思へる上手どもいくばくえまねび取らぬにやあらむ。このかくほのかなる女たちの御中にひきませたらむにきは離るべくこそ覺えぬ。年比かくうもれてすぐすに耳なども少しひがひがしくなりたるにやあらむ。口惜しうなむ怪しく人のざえはかなくとりすることども、物のはえありてまさる所なる。その御前の御あそびなどにひときざみにえらばるゝ人々、それかれといかにぞ」とのたまへば大將「それをなむとり申さむと思ひ侍りつれどあきらかならぬ心のまゝにおよすげてやはと思ひ給ふる。のぼりての世を聞き合せ侍らねばにや、衛門督のわごん、兵部卿の宮の御琵琶などをこそこの比珍らかなるためしに引き出で侍るめれ。げにかたはらなきを、こよひうけたまはるものゝ音どもの皆等しく耳驚き侍れば、猶かくわざともあらぬ御あそびとかねて思ひ給へたゆみける心の騒ぐにや侍らむ、さうがなどいと仕うまつりにくゝなむ。和琴はかのおとゞばかりこそかく折につけてこしらへなびかしたるねなど、心にまかせて掻き立て給へるはいとことにもものし給へ。をさをさは離れぬものに侍るめるを、いとかしこく整ひてこそ侍りつれ」とめて聞え給ふ。「いとささことごとしきさははあらぬをわざとうるはしくも取りなさるゝかな」とてまたり顔にほゝゑみ給ひけり。「けしうはあらぬ弟子どもなりかし。琵琶はしもこゝに口入るべきことまじらぬを、さいへど物のけはひことなるべし。覺えぬ所にて聞き始めたりしに珍しき物の聲かなとなむ覺えしかど、その折よりは又こよなくまさりにたるをや」とせめてわれがしこに唧ちなし給へば女房などは少しつきしろふ。「萬の事道々につけ

て習ひまねばゞ、ごえといふもの孰れもきはなく覺えつゝ、我が心にあくべきかぎりなく習ひとらむとはいと難けれど、何かはそのたどり深き人の今の世にをさをさなければかたはしをなだらかにまねびえたらむ人、さるかたかどに心をやりてもありぬべきを、きんなむ猶煩はしく手ふれにくきものにはありける。この事は誠にあとのまゝに尋ねとりたる昔の人はあめつちをなびかしおにがみの心をやはらげ萬の物のねのうちに従ひてかなしひ深きものもよろこびにかはり賤しく貧しきものも高き世にあらたまりたからにあづかり世にゆるさるゝたぐひ多かりけり。この國にひき傳ふる始つかたまで深くこの事を心得たる人は多くの年を知らぬ國にすぐし身をなきになしてこのことをまねび取らむと惑ひてだに志うるは難くなむありけるを、げにはたあきらかに空の月星をうごかし時ならぬ霜雪を降らせくもいかづちをさわがしたるためし、あがりたる世にはありけり。かく限りなきものにてそのまゝに習ひとる人のありがたく世の末なればにや、いづこのかたはしにかはあらむ。されど猶おにがみの耳とゞめかたぶきとめにけるものなればにやなまなまにまねびて思ひかなはぬたぐひありける。のちこれをひく人によからずとかいふなんをつけてうるささまゝに今はをさをさ傳ふる人なしとかいひと口惜しきことにこそあれ。さんのねをはなれては、何事をか物をとゝのへまるるべとはせむ。げに萬の事衰ふるさまは易くなりゆく世の中に一人出て離れて心を立てゝもろこしこまこの世に惑ひありき親子を離れむことは世の中にひがめるものになりぬべし。などかなのめにて猶この道をかよはしまるばかりのはしをば知

りおかざらむ。煮らべひとつに手をひきつくさむことだにはかりもなきものなり。いはむや多くの煮らべ煩はしきこく多かるを、心にいりしさかりには世にありとあり、こゝに傳はりたる譜といふものゝかぎりを遍く見合せて、後々は師とすべき人もなくてなむ好み習ひしかど、猶あがりての人には當るべくもあらじをや。ましてこの後といひては傳はるべき末もなき、いと哀となむ」などのたまへば大將げにいと口惜しく恥しと覺す。「この御子達の御中に思ふやうにおひ出で給ひ物し給はゞその世になむそもさまでながらへとまるやうあらばいくばくならぬ手のかぎりもとどめ奉るべき。二宮今より氣色ありて見え給ふを」などのたまへば明石の君はいとおもだしく涙ぐみて聞き居給へり。女御の君は、さうの御琴をば上にゆづり聞えて寄りふし給ひぬればあづまをおとどの御前に参りて少しけちかき御あそびになりぬ。かづらきあそび給ふ華やかにおもしろし。おとどをりかへし謠ひ給ふ御聲譬へむかたなくあいぎやうづきめてたし。月やうやうさしあがるまゝに、花のいろかもてはやされてげにいと心にくき程なり。箏の琴は女御の御つまおとはいとらうたげになつかしく母君の御けはひ加はりてゆのねふかくいみじくすみて聞えつるを、この御手づかひは又さま變りてゆるらかにおもしろく聞く人たゞならず。すゞろはしきまであいぎやうづきりんのてなどすべてさらけいとかどある御琴のねなり。かへり聲に皆調べかはりてりちの搔き合せども懐しく今めきたるにきんは五箇の煮らべあまたの手の中に心とどめて必ずひき給ふべき五六のはちをいとおもしろくすまして弾き給ふ。更にかたほならずいとよくすみて聞



ゆ。春秋よろづの物にかよへるまらべにて通はしわだしつゝ、彈き給ふ心まらひ教へ聞え給ふさまたがへずいとよく辨へ給へるを、いとうつくしくおもだしく思ひ聞え給ふ。この君達のいと美しく吹き立て、せちに心入れたるをらうたがり給ひて、「ねぶたくなりならむに、こよひのあそびは長くはあらではつかなる程にと思ひつるを、とゞめ難き物のねどものいづれともなきを聞きわく程の耳とからぬたどたどしさにいたくふけにけり。心なきわざなりや」とてさうの笛吹く君にははらけさし給ひて御ぞ脱ぎてかづけ給ふ。横笛の君には、こなたより織物の細長に、袴などごとしからぬさまに氣色ばかりにて、大將の君には宮の御方よりさかづきさし出で、宮の御さうぞくひとくだりかづけ奉り給ふを、おとゞ「あやしや、物の師をこそまづは物めかし給はめ。うれはしきとなり」との給ふに、宮のおはします御几帳のそばより御笛を奉る。うち笑ひ給ひてとり給ふ。いみじきこまぶえなり。少し吹きならし給へば皆立ち出て給ふほどに、大將立ちとまり給ひて、御子の持ち給へる笛を取りていみじくおもしろく吹き立て給へるがいとめでたく聞ゆれば、いづれもいづれも皆御手をはなれぬものゝつたへつたへ、いとになくのみあるにてぞ、我が御さえのほどありがたくおぼし知られける。大將殿は、君達を御車に乗せて月の澄めるにまかて給ふ。道すがら箏の琴のかはりていみじかりつる音も耳につきて戀しく覺え給ふ。我が北の方は、故大宮の教へ聞え給ひしかど、心にもまめ給はざりしほどにわかれ奉り給ひにしかばゆるらかにも引き取り給はで男君の御前にては耻ぢて更にひき給はず。何事も唯おいらかに打ちおほどきた

るさまして子どもあつかひをいとまなくつぎつぎ給へば、をかしき所もなく覺ゆ。さすがに腹悪しくて物ねたみ打ちまたる、あいぎやうづきて美しき人さまにぞ物し給ふめる。院は對へわたり給ひぬ。うへはとまり給ひて、宮に御物語など聞え給ひて曉にぞ渡り給へる。日高うなるまで大殿ごもれり。「宮の御琴の音はいとうるせくなりけりな。いかゞ聞き給ひし」と聞えたまへば、「初めつかたあなたにてほの聞きしはいかにぞやありしを、いとこよなくなりにけり。いかてかはかくことごとなく教へ聞え給はむには」といらへ聞え給ふ。「さかし、てをとるとる愚東なからぬ物の師なりかし。此彼にもうるさく煩はしくていとまいるわざなれば教へ奉らぬを、院にも内にもきんはさりとも習はし聞ゆるむとのたまふと聞くがいとほしく、さりともさばかりの事をだにかく取りわきて御うしろみにとあづけ給へるまゝ、その世にはいとまもありがたくて、心長閑に取りわき教へ聞ゆることなどもなく、近き世にも何となく次々まぎれつゝすぐして、聞きあつかはぬ御琴のねの、いてばえまたりしも面ぼくありて、大將のいたく傾ぶき驚きたりし氣色も思ふやうに、嬉しくこそありしかしなど聞え給ふ。かやうのすぢも今は又おとなおとなしく宮達の御あつかひなど取り持ちてま給ふさまもいたらぬことなく、すべて何事につけてももどかしくたどとしきとまじらず、ありがたき人の御有様なればいとかく具しぬる人は世に久しからぬためしもあなるを、ゆゑしきまで思ひ聞え給ふ。ささまなる人の有様を見集め給ふまゝに、取り集めたら

ひたることは、誠にたぐひあらじとのみ思ひ聞え給へり。今年は三十七にぞなりたまふ。見奉り給ひし年月のことなども哀におぼし出でたるついでに「さるべき御いのりなど常より取り分きて今年は慎み給へ。物騒しくのみありて、思ひ至らぬことしもあらむを、猶おぼしめぐらしておぼきなる事ども老給はゞおのづからせさせてむ。故僧都の物し給はずなりにたるこそいと口惜しけれ。大方にて打ちたのまむにも、いとかしこかりし人をいなどの給ひ出づ。自らはをさなくより、人に異なるさまにてことごとしくおひ出で、今の世のおぼえありさま、來し方にたぐひなくなむありける。されど又世にすぐれて悲しきめを見る方も人にはまさりけりかし。まづは思ふ人にさまざま後れ残りともまれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多くあぢきなくさるまじきことにつけてもあやしく物おもはしく、心にあかず覺ゆるとそひたる身にてすぎぬれば、それにかへてや思ひしほどよりは今までもながらなるならむとなむ思ひ知らる。君の御身には、かのひとふしのわかれよりあなたこなた物思ひとて、心亂り給ふばかりのことあらじとなむ思ふ。后といひ、ましてそれより次々はやんどとなき人といへど、皆必ず安からぬ物思ひそふわざなり。高きまじらひにつけても心みだれ人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親のまどのうちながらすぐし給へるやうなる心やすきことはなし。そのかたは人に勝れたりけるすぐせとはおぼしまるや。思の外にこの宮のがく渡り物し給へるこそはなまぐるしかるべけれど、それにつけてはいとゞ加ふる志のほどを、御みづからの上なればおぼし知らずやあらむ。物の心も深く知り給ふめれば、さり

ともとなむ思ふ」と聞え給へば、「の給ふやうに物はかなき身には過ぎにたるよその覺えは  
あらめど、心に絶えぬ物なげかしさのみうち添ふや、さはみづからのいのりなりける」とて  
残り多げなるけはひはづかしげなり。「まめやかにはいとゆくさきすくなき心地するを、今  
年もかくまらず顔にてすぐすはいとうしろめたくこそ、さきさきも聞ゆることいかで御ゆ  
るしあらば」と聞え給ふ。「それはしもあるまじきことになむ。さてかけ離れ給ひなむ世に残  
りては何のかひかあらむ。唯かく何となくて過ぐる年月なれど、明暮のへだてなき嬉しさの  
みこそますことなく覺ゆれ。猶思ふさま殊なる心の程を見はて給へ」とのみ聞え給ふを例  
のことゝ心やましくて涙ぐみ給へる氣色をいと哀と見奉り給ひて、萬に聞えまぎらはし給  
ふ。「多くはあらねど、人の有様のとりどりに口惜しくはあらぬを、見知りゆくまゝに誠の  
心ばせのおいらかにおちゐたること、いと難きわざなりけれとなむ思ひはてにたる。大將の  
母君を幼かりし程に見そめて、やんごとなくさらぬすぢには思ひしを、常になかよからず隔  
ある心地して止みにしこそ、今思へばいとほしくやくもあれ。又我があやまちにのみも  
あらざりけりなど心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしくおもりにてそのことの飽かぬ  
かなと覺ゆることもなかりき。唯いとあまり亂れたる所なく、すすしく少しさかすとや  
いふべかりけむと思ふにはたのもしく見るには煩はしかりし人さまになむ。中宮の御母御  
息所なむさまことに心深くなまめかしきためしにはまづ思ひ出でらるれど、人見えにく、  
苦しかりしさまになむありし。怨むべきよしぞげにことわりと覺ゆるふしを、やがて長く思

ひつめて深くゑんぜられしこそいと苦しかりしか。心ゆるびなくはづかしくてわれも人もうちたゆみ朝夕のむつびをかはさむには、いとつゝまじき所のありしかば、打ちつけては見おとさるゝことやなどあまりつくろひし程にやがて隔たりし中ぞかし。いとあるまじき名をたちて身のあはあはしくなりぬるなげきを、いみじく思ひまめ給へしがいとほしく、實に人がらを思ひしも我が罪ある心地して止みにしなくさめに中宮をかくさるべき御契とはいひながら、取りたてゝ世のそしり人のうらみをも知らず心よせ奉るを、あの世ながらも見なほされぬらむ。今もむかしもなほざりなる心のすさびにいとほしくやしきことも多くなむとさし方の人の御うへ少しづゝのたまひ出で、「内の御方の御うしろみは、何ばかりの程ならずとあなづりそめて心安きものに思ひしを、猶心の底見えすきはなく深き所ある人になむ。うはべは人になびきおいらかに見えながら、打ち解けぬ氣色またにこもりてそこはかとなく耻しき所こそあれ」との給へば「こと人は見ねば知らぬを、これはまほならねどおのづから氣色見る折々もあるに、いと打ち解けにくく、心はづかしき有様あるきを、いとたとしへなきうらなさを、いかに見給ふらむとつゝまじけれど、女御はおのづからおぼし許すらむとのみ思ひてなむ」との給ふ。さばかりめざましと心おき給へりし人を今はかくゆるして見えかはしなどし給ふも、女御の御ためのまごゝるなるあまりぞかしとおぼすに、いとありがたければ「君こそはさすがにくまなきにはあらぬものから、人によりことに従ひいとよく二すぢに心づかひはま給ひけれ。更にこゝら見れど御有様に似たる人はなかりけり。い

と氣色こそ物し給へ」とほゝゑみて聞え給ふ。宮にいとよくひき取り給へりしことの悦び聞えむとて夕つかたわたり給ひぬ。我に心おく人やあらむともおぼしたらず、いといたく若びてひとへに御ことに心入れておはす。「今はいとまゆるして打ち休ませ給へかし。物の師は心ゆかせてこそ。いと苦しかりつる日比のまるしありて、うしろ安くなり給ひにけり」とて御ことどもおしやりて、大殿ごもりぬ。對には例のおはしまさぬ夜はよひぬま給ひて、人々に物語など讀ませて聞き給ふ。かく世のたとひにいひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色ごのみ、一心ある人にかゝづらひたる女、かやうなる事をいひ集めたるにも遂による方ありてこそあめれ、怪しくうさてもすぐしつる有様かな、げにのたまひつるやうに、人よりことなるすぐせもありける身ながら、人の忍び難く飽かぬことにする物思ひはなれぬ身にてや止みなむとすらむ、味氣なくもあるかな、と思ひつゞけて、夜更けて大殿籠りぬる曉方より御胸を惱み給ふ。人々見奉りあつかひて「御せうそこ聞えさせむ」と聞ゆるを、「いとびんないこと」とせし給ひて堪へ難きをおさへて明し給ひつ。御身もぬるみて御心地もいと悪しけれど、院もとみにわたり給はぬ程かくなむとも聞えず。女御の御方より御せうそこあるに、「かくなやましくてなむ」と聞え給へるに驚きてそなたより聞え給へるに胸つぶれて急ぎわたり給へるにいと苦しげにておはす。「いかなる御心地ぞ」とて探り奉り給へば、いとあつくおはすれば昨日聞え給ひし御つゝしみのすぢなどおぼし合せ給ひていとおそろしくおぼさる。御かゆなどこなたに參らせたれど御覽じも入れず。日一日添ひおはして萬に見奉り

嘆き給ふ。はかなき御くだものをだにいと物うくま給ひて、起きあがり給ふこと絶えて日比へぬ。いかならむとおぼし騒ぎて、御いのりども數知らず始めさせ給ふ。僧めして御かぢなどせさせ給ふ。そこところともなくいみじく苦しうまたまひて、胸は時々おこりつゝ煩ひ給ふさま堪へ難く苦しげなり。さまざまの御つゝしみ限なけれど、まるしも見えず。重しと見れどもものづからをこたるけぢめあらばたのもしきを、いみじく心ほそく悲しと見奉り給ふに、ことごとおぼされねば御賀の響もまづまりぬ。かの院よりもかく煩ひ給ふよし聞し召して、御とぶらひいとねんごろにたびたび聞え給ふ。同じさまにて二月も過ぎぬ。いふかざりなくおぼし歎きて試に所をかへ給はむとて二條院に渡し奉り給ひつ。院の内ゆすり満ちて思ひ歎く人々多かり。冷泉院もさこし召しなげく。この人うせ給はゞ院も必ず世を背く御ほい遂げ給ひてむと、大將の君なども心盡して見奉りあつかひ給ふ。御ずほふなどは、大方のをばさるものにて、取り分きて仕うまつらせ給ふ。聊物おぼしわくひまには、「聞ゆる事をさも心うく」とのみ怨み聞え給へど「限ありて別れはて給はむよりも目の前に我が心と篋して給はむ御有様を見ては、更に片時たふまじくのみ惜しく悲しかるべければ、昔よりみづからぞかゝるほい深さを、とまりてさうざうしくおぼされむ心苦しさにひかれつゝすぐすを、さかさまに打ち捨て給はむとやおぼす」とのみ惜み聞え給ふに、げにいとたのみがたげによりわりつゝ限のさまに見え給ふ折々多かるを、いかさまにせむとおぼし惑ひつゝ宮の御方にもあからさまにわたり給はず。御琴ども、凄まじくて皆ひき込められ、院のうちの人々は皆

あるかぎり二條院につどひ参りて、この院には火をけちたるやうにて唯女どちおはして人ひとり御けはひなりけりと見ゆ。女御の君もわたり給ひて諸共に見奉りあつかひ給ふ。「たゞにもおはしまさで物のけなどいと恐しきを早く参り給ひね」と苦しき御心地にも聞え給ふ。若宮のいと美しうておはしますを見奉り給ひてもいみじくなき給ひて「おとなび給はむを、え見奉らずなりなむと忘れ給ひなむかし」とのたまへば、女御せきあへず悲しとおぼしたり。「ゆゝしくかくなおぼしそ。さりともしうは物し給はじ。心によりなむ人はともかくもある。おきてひろさうつはものにはさいはひも其に隨ひ、せばき心ある人はさるべきにて、高き身となりてもゆたかにゆるる方はおくれ、急なる人は久しく常ならず、心ぬるくなだらかなる人は長きためしなむ多かりける」など佛神にもこの御心ばせのありがたく、罪かろきさまを申しあきらめさせ給ふ。みずほふのあざりたち夜居などにも近く侍ふかぎりのやんごとなき僧などはいとかくおぼし惑へる御けはひを聞くに、いとみじく心苦しければ心を起して祈り聞ゆ。少しよろしきさまに見え給ふとき、五六日うちませつゝ、又おもり煩ひ給ふこと、いつとなくて月日を経給へば猶いかにおはすべきにか、よかるまじき御心地にやとおぼしなげく。御ものゝけなどいひ出て来るもなし。惱み給ふさまそこはかと見えず。唯日に添へてよわり給ふさまにのみ見ゆれば、いともいとも悲しくいみじくおぼすに御心のいとまもなげなり。まことに衛門督は中納言になりなきかし。今の御世にはいと親しくおぼされていと時の人なり。身のおぼえまざるにつけても思ふ事のかなはぬうれば



しさを思ひ侘びて、この宮の御姉の二宮をなむえ奉りてける。下臈の更衣腹におはしましければ心やすき方まじりて思ひ聞え給へり。人がらもなべての人に思ひなずらふればはひこよなくおはすれどもとより志みにし方こそ猶深かりけれ。慰め難きをばすてにて人目に咎めらるまじきばかりにもてなし聞え給へり。猶かの志たの心忘られず小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍従のめのとのむすめなりけり。そのめのとの姉ぞこのかんの君の御めのとなりければ早くより氣近く聞き奉りて、まだ宮幼くおはしまし、時よりいと清らになむおはします。みかどのかしづき奉り給ふさまなど聞きおき奉りてかゝる思ひもつきそめたるなりけり。かくて院も離れおはします程人め少く志めやかならむを推し量りて小侍従を迎へ取りつゝ、いみじうかたらふ。「昔よりかく命もたふまじく思ふことをかゝる親しきよすがありて、御有様を聞き傳へ堪へぬ心の程をも聞き召させてたのもしきに、更にその志るしななければいみじくなむつらき。院の上だにかくあまたにかけかけしくて、人におされ給ふやうにて一人大殿籠るよなよな多く、つれづれにてすぐし給ふなりなど人の奏しけるついでにも、少し悔いおぼしたる御氣色にて、同じくはたゞ人の心安さうしるみを定めむにはまめやかに仕うまつるべき人をこそ、定むべかりけれとのたまはせて、女二の宮のなかなかうしろやすく行く末ながきさまにて物し給ふなることとのたまはせけるを傳へ聞きしにいとほしうも口惜しうもいかゞ思ひ亂るゝ。げに同じ御すぢとは尋ね聞えしかど、それはそれとこそ覺ゆるわざなりけれ」と、打ちうめぎ給へば小侍従は「いであなおほけな。それをそれ

とさし置き奉り給ひて、又いかやうに限なき御心ならむ」といへばうちほゝゑみて「さこそは物はありません。宮にかたじけなく聞えさせ及びけるさまは院にも内にも聞し召しけり。などてかはさてもさぶらはざらましとなむことの序にはのたまはせける。いでやたゞ今すこのの御いたはりあらましかば」などいへば「いと難き御となりや。御すくせとかいふ事侍るなるをもとにて、かの院のことに出で、ねんごろに聞え給ふに立ち並び妨げ聞えさせ給ふべき御身のおぼえとやおぼされし。この頃こそ少しものものしく御ぞの色も深くなり給へれ」といへばいふかひなくはやりかなる口ごはさに、えいひはて給はで「今はよし、過ぎにし方をば聞えじや。唯かくありがたきものゝひまに氣近きほどにて、この心の中に思ふことのは少し聞えさせ給ふべくたばかり給へ。いとおほけなき心はすべてよし見給へ。いと恐しければ思ひ離れて侍り」との給へば「これよりおほけなき心はいかゞはあらむ。いとむくつけき事もおぼしよりけるかな。何しに参りつらむ」とはちぶく。「いてあな聞きにく、あまりこちたく物をこそいひなし給ふべけれ。世はいと定なきものを女御后もあるやうありて物し給ふたぐひなくやは。ましてその御有様よ、思へばいとたぐひなくめでたけれどもちうちには心やましきことも多かるらむ。院のあまたの御中に又ならびなきやうにならばし聞え給ひしに、さしもひとしからぬきはの御方々にたちまじり、めざましげなることもありぬべくこそ。いと善く聞き侍りや。世の中はいと常なきものをひとときはに思ひ定めてはしたなくつきどりなることなのたまひそよ」とのたまへば「人におとされ給へる御有様とてめ

てたき方に改め給ふべきにやは侍らむ。これは世の常の御有様にも侍らざめり。唯御うしろみなくて、たゞよはしくおはしまさむよりは、おやさまにと譲り聞え給ひしかばかたみにさこそ思ひかはし聞えさせ給ひためれ。あいなき御おとしめごとになむ」とはてははらだつを萬にいひこしらへて「誠はさばかり世になき御有様を見奉りなれ給へる御心に、數にもあらず怪しきなれすがたを、打ち解けて御覽せられむとは更に思ひかけぬことなり。唯ひとことものごしにて聞え知らずばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらむ。神佛にも思ふ事申すは罪あるわざかは」といみじきちかごとをまつゝの給へば、暫しこそいとあるまじきことにいひかへしけれ、物深からぬ若人は人のかく身にかへていみじく思ひの給ふを、えいなびはてど「もしさりぬべき隙あらばばかり侍らむ。院の坐しまさぬ夜は御帳のまはりに人多く侍らひて、おましのほとりにさるべき人必ずさぶらひ給へば、いかなる折をかはひまを見つけ侍るべからむ」と侘びつゝ参りぬ。いかにいかにと日々に責められこうじてさるべき折伺ひつけて、せうそこまおこせたり。悦びながらいみじくやつれ忍びておはしぬ。誠に我が心にもいとけしからぬことなれば、氣近くなかなか思ひ亂るゝこともまさるべきまては思ひもよらず。唯いとほのかに御ぞのつまばかりを見奉りし春の夕の飽かず世と共に思ひ出でられ給ふ御有様を少し氣近くて見奉り、思ふ事をも聞え知らせてはひとくだりの御返しなどもや見せ給ひ、哀とやおぼし知るとぞ思ひける。四月十餘日ばかりのことなり、みとぎあすとして齋院に奉り給ふ女房十二人、ことに上臈にはあらぬわかびとわらはべな

ど、おのがじ、物縫ひけさうなどまつ、物見むと思ひ設くるもとどりに暇なげにて、御前のかたまめやかに人まげからぬ折なりけり。近く侍ふあぜちの君も時々かよふ、源中將せめて呼びいださせければ、おりたるまに、唯この侍従ばかり近くはさぶらふなりけり。善きをりと思ひて、やをら御帳のひんがしおもての、おましの端にすゑつ。さまでもあるべきことなりやは。宮は何心もなく大殿ごもりにけるを、近く男のけはひのすれば院のおはするとおぼしたるに、打ちかしてまりたる氣色見せてゆかのまもに抱きおろし奉るに、物におそはるゝかと、せめて見上げ給へればあらぬ人なりけり。怪しくも知らぬ事どもをぞ聞ゆるやあさましくむくつけくなりて人召せど近くもさぶらはねば聞きつけて參るもなし。わなきさ給ふさま、水のやうに汗もながれて物も覺え給はぬ氣色いと哀にらうたげなり。「數ならねどいとかうしもおぼし召さるべき身とは思ふたまへられずなむ。昔よりおほけなき心の侍りしをひたぶるに籠めて止み侍りなましかば、心の中にくたしてすぎぬべかりけるを、なかなか漏し聞えさせて、院にも聞し召されにしをこよなくもて離れても、のたまはせざりけるにたのみをかけそめ侍りて、身の數ならぬひときはに、人より深き志を空しくなし侍りぬること、動し侍りにし心なむ、よろづ今はかひなき事と思ふ給へ返せど、いかばかりまみ侍りにけるにか、年月にそへて口惜しくもつらくもむくつけくも哀にもいろに深く思ふ給へまさるに、せきかねてかくおほけなきさまを御覽せられぬるもかつはいと思ひやりなくはづかしければ、罪重き心も更に侍るまじ」といひもてゆくに、この人なりけりとおぼすに、

いとめざましく恐しくてつゆいらへもま給はず。いとことわりなれど「世にためしなき事に  
も侍らぬを珍らかになさけなき御心ばへならば、いと心うくてなかなかひたぶるなる心も  
こそつき侍れ。哀とだにの給はせばそれを承りて罷てなむ」とよろづに聞え給ふ。よその思  
ひやりはいつくしく物なれて見え奉らむもはづかしく推し量られ給ふに、唯かばかり思ひ  
つめたるかたはし聞え知らせて、なかなかかけかけしき事はなくて止みなむと思ひしかど、  
いとさばかり氣高う耻しげにはあらでなつかしくらうたげにやはやはとのみ見え給ふ。御  
けはひのあてにいみじく覺ゆることぞ人に似させ給はざりける。さかしく思ひまづむる心  
も失せて、いづちもいづちもゐてかくし奉りて我が身も世にふるさまならず跡絶えて止み  
なばやとまで思ひみだれぬ。唯いさゝかまどろむとしもなき夢に、この手ならし、猫のいと  
らうたげに打ちなきて來たるを、この宮に奉らむとて我がゐて來たると覺えしを、何しに  
奉りつらむと思ふ程におどろきていかに見えつるならむと思ふ。宮はいとあさましくうつ  
つとも覺え給はぬに胸ふたがりておぼしおぼるゝを、「猶かく遁れぬ御すくせの淺からざり  
けるとおぼしなせ。みづからの心ながらもうつしごゝろにはあらずなむ覺え侍る」。かの覺  
えなかりしみすのつまを猫のつなびきたりし夕のことも聞えてたり。實にさはたありけ  
むよと口惜しくちぎり心うき御身なりけり。院にも今はいかてかは見え奉らむと、悲しく  
心細くていとをさなげに泣き給ふをいとかたじけなく哀と見奉りて人の御涙をさへのごふ  
袖はいとゞ露けさのみまさる。明けゆく氣色なるに出てむかたなくなかなかなり。「いかゞ

はし侍るべき。いみじくにくませ給へば又聞えさせむ事もありがたきを、唯ひとこと御聲を聞かせ給へ」と、萬に聞えなやますもうるさくわびしくて物の更にはれ給はねば「はてはてはむくつけくこそなり侍りぬれ。又かゝるやうはあらじ」といとうしと思ひ聞えて「さらばふよなめり。身をいたづらにやはなしはてぬ。いと捨て難きによりてこそかくまでも侍れ。こよひにかぎり侍りなむもいみじくなむ。つゆにても御心ゆるし給ふさまならば、それにかへつるにても捨て侍りなまし」とて搔き抱き出づるに、はてはいかにしつるぞとあきしがまだあきながらあるに、まだあけぐれの程なるべし。ほのかに見奉らむの心あればかうしをやをら引きあげて「かういとつらき御心にうつしごゝろも失せ侍りぬ。少し思ひのどめよとおぼされば哀とだにの給はせよ」とおどし聞ゆるをいと珍らかなりとおぼして、物もいはむとし給へどわなゝかれて、いとわかわかしき御さまなり。たゞあけに明け行くに「いと心あわたゞしくて、哀なる夢がたりも聞えさすべきをかくにくませ給へばこそ。さりとも今おぼしあはする事も侍りなむ」とてのどかならず立ち出づる明けくれ、秋の空よりも心づくしなり。

「あきて行く空も知られぬあけくれにいつくの露のかゝる袖なり」。ひき出で、うれへ聞ゆれば、出でなむとするに少し慰め給ひて、

「あけくれの空にうき身は消えな、む夢なりけりと見てもやむべく」とはかなげにの給

ふ。御聲の若くをかしげなるを聞きさすやうにて出てぬる、たましひはまことに身を離れてとまりぬる心ちす。女宮の御許にもまうて給はて大殿へぞ忍びておはしぬる。打ちふしたれどもあはず。見つる夢のさだかにあはむことも難きをさへ思ふに、かの猫のありしさまいと戀しと思ひ出でらる。さてもいみじきあやまちしつる身かな、世にあらむことをまばゆくなりぬれと、恐しくそらはづかしき心地してありきなどもし給はず。女の御ためは更にもいはず、我が心地にもいとあるまじき事といふ中にもむくつけく覺ゆれば、思ひのまゝにもえまぎれありかず。みかどの御めをも取り過ちてことの聞えあらむに、かばかり覺えむことゆゑは身のいたづらにならむことも苦しくおぼゆまじ、老かいちじるき罪にはあたらずとも、この院にめをそばめられ奉らむことはいと恐しくはづかしくおぼゆ。かぎりなき女と聞ゆれど、少し世づきたる心ばへまじり、上はゆゑありこめかしきにも従はぬまたの心添ひたるこそ、とあることかゝることのうちなびき心かはし給ふたぐひもありけれ。これは深き心もおほせねどひたおもむきに物おぢし給へる御心にたゞ今しも人の見聞きつけたらむやうに、まばゆくはづかしくおぼさるれば、あかき所にだにえらざり出て給はず、いと口惜しき身なりけりと、みづから思し知るべし。「惱しげになむ」とありければおとと聞き給ひていみじく御心を盡し給ふ御事にうち添へて、又いかにと驚かせ給ひてわたり給へり。そこはかと苦しげなることも見え給はず、いといたくはぢらひまめりてさやかに見合せ奉り給はぬを、久しくなりぬるたえまをうらめしくおぼすにやといとほしくて、かの御心地のさまなど

聞え給ひて「今はのとぢめにもこそあれ、今さらにおろかなるさまを見えおかれじとてなむいはけなかりし程よりあつかひそめて見放ちがたければかう月比よろづを知らぬさまにすぎし侍るぞ、おのづからこの程すぎば見なほし給ひてむ」など聞え給ふ。かく氣色も知り給はぬもいとほしく心苦しくおぼされて、宮は人知れず涙ぐましくおぼさる。かんの君はましてなかなかなる心地のみ増りて起き臥し明し暮し侘び給ふ。祭の日などは物見に争ひ行く君達かきつれていひそゝのかせど、なやましげにもてなしてながめ臥し給へり。女宮をばかしてまりおきたるさまにもてなし聞えて、をさをさ打ち解けても見え奉り給はず。我方に離れ居ていとつれづれに心ほそくながめ給へるに、わらはべのもたるあふひを見給ひて、

「くやしきぞつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかざしならぬに」と思ふもいとかなかなかなり。世の中静ならぬ車の音などをよその事に聞きて人やりならぬつれづれに暮し難くおぼゆる、女宮もかゝる氣色のすさまじさも見知られ給へば、何事とは知り給はねど耻しくめざましきに物思はしくぞおぼされける。女房など物見に皆出て、人ずくなにのどやかなれば打ちながめて、筆の琴なつかしくひきまざぐりておはするけはひも、さすがにあてになまめかしけれど、同じくば今ひときは及ばざりけるすくせよとなほおぼゆ。

「もろかづら落葉を何にひろひけむなほむつまじきかざしなれども」と書きすさび居たりいとなめげる煮りうごとなりかし。おとこの君は生まれまれ渡り給ひてえふとも立ちかへり給はずまづ心なくおぼさるゝに、絶え入り給ひぬとて人参りたれば更に何事もおぼしわ



かれず御心もくれて渡り給ふ。道の程の心もとなきに、げにかの院はほとりのおほぢまで人  
たち騒ぎたり。殿の内泣きのしるけはひいとまがまがし。我にもあらで入り給へれば「日  
比はいさゝかひま見え給へるを、俄になむかくおはします」とて侍ふかぎりは我も後れ奉ら  
じと惑ふさまどもかぎりなし。みずほふどもの壇こぼち僧などもさるべきかぎりこそまか  
でね、ほろほろと騒ぐを見給ふに、更に限にこそはとおぼしはつるあさましさに何事かはた  
ぐひあらむ。「さりともものゝけのするにこそあらめ。いとひたぶるにな騒ぎ」と静め給ひ  
て、いよいよいみじきぐわんどもを立てそへさせ給ふ。勝れたるけんざどものかぎり召し集  
めて、「限ある御命にてこの世つき給ひぬとも只今暫しのどめ給ひ不動尊の御もとのちかひ  
あり、その日敷をだにかけ留め奉り給へ」と、かしらよりまことに黒烟を立て、いみじき心  
を起して加持し奉る。院も、只今一度目を見合せ給へ、いとあへなく限なりつらむ程をだに、  
え見ずなりにけることの悔しく悲しきをと、おぼし惑へるさま、とまり給ふべきにもあらぬ  
を見奉る心ちども唯推しはかるべし。いみじき御心のうちを佛も見奉り給ふにや、月比更  
に現れ出でぬ物のけちひささ童にうつりてよばひのしる程に、やうやう生さいて給ふ  
にも嬉しくもゆゝしくもおぼし騒がる。いみじくてうぜられて「人は皆さりぬ。院一ところ  
の御耳に聞えむ。おのれを月比てうじ侘びさせ給ふがなさけなくつらければ、同じくはおぼ  
し知らせむと思ひつれど、さすがに命もたふまじく身を碎きておぼし惑ふを見奉れば、今こ  
そかくいみじき身をうけたれ、いにしへの心の残りてこそかくまでも参り來たるなれば、物

の心苦しさをを見すぐさで遂に現れぬること更に知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、唯昔見給ひしもの、けのさまと見えたり。あさましくむくつけしとおぼしまみにしことの變らぬもゆゝしければ、この童の手をとらへて引きすゑてさま悪しくもせさせ給はず、「誠にその人か。善からぬ狐などいふなるものゝたはぶれたるか。なき人のおもてぶせなることいひ出づるもあなるを、たしかなるなのりせよ。又人の知らざらむことの心にゑるく思ひ出でられぬべからむをいへ。さてなむいさゝかにても信ずべき」とのたまへば、ほろほろといたくなきて、

「我が身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君は君なり。いとつらしつらし」と泣きさけぶものから、さすがに物はぢしたるけはひ變らず、なかなかいと疎ましく心うければ、物いはせじとおぼす。「中宮の御事にてもいと嬉しくかたじけなしとなむ天かけりても見奉れど、道ことになりぬればこの上までも深く覺えぬにやあらむ。猶みづからつらしと思ひ聞えし心のまふなむとまるものなりける。その中にも生きての世に人よりおとしおぼし捨てしよりも、思ふどちの御物語のついでに心よからずにくかりし有様をのたまひいでたりしなむいとうらめしく、今はたゞなきにおぼし許して、こと人のいひおとしめむをだに省き隠し給へとこそ思へど、うち思ひしばかりにかくいみじき身のけはひなればかく所せきなり。この人を深く憎しと思ひ聞ゆることはなけれど、まもりつよくいと御あたり遠き心地してえ近づきまゐらず、御聲をだにほのかに聞き侍る。よし今はこの罪かるむばかりの

わざをせさせ給へ。ずほふどきやうとのしるとも身には苦しくわびしきほのほとのみま  
つはれて更に尊きことも聞えねばいと悲しくなむ。中宮にもこのよしを傳へ聞え給へ。ゆめ  
御宮仕のほどに人ときしろひそねむ心つかひ給ふな。齋宮におはしまし、比ほひの御罪か  
ろむべからむくどくのことを必ずせさせ給へ。いとくやしきことになむありけるなどいひ  
つゞけれど、ものゝけに向ひて物語し給はむもかたはらいたければ、ふうじこめて上をば又  
こと方に忍びて渡し奉り給ふ。かくうせ給ひにけりといふ事世の中に満ちて、御とぶらひに  
聞え給ふ人々あるをいとゆゝしくおぼす。今日のかへさ見に出て給ひける上達部など歸り  
給ふ道に、「かく人の中せばいといみじき事にもあるかな。生けるかひありつるさいはひ  
との光失ふ日にて雨はそぼふるなりけり」とうちつけごとま給ふ人もあり。又「かくたらひ  
ぬる人は必ずえ長からぬことなり。何を櫻にといふふるごともあるはかゝる人のいと世  
にながらへて世のたのしみを盡さば傍の人苦しからむ。今こそ二品宮はもとの御おぼえあ  
らはれ給はめ。いとほしげにおされたりつる御覺えを」などうちさゝめきけり。衛門督昨日  
いと暮し難かりしを思ひて、今日は御弟ども左大辨頭宰相など奥の方に乘せて見給ひけり。  
かくいひあへるを聞くにも胸打ちつぶれて「何かうき世に久しかるべき」と打ちずじ獨りご  
ちて、かの院へ皆参り給ふ。たしかならぬ事なればゆゝしくやとて、唯大方の御とぶらひに  
参り給へるに、かく人の泣きさわげば誠なりけりと打ち騒ぎ給へり。式部卿の宮も渡り給ひ  
て、いといたく覺しほれたるさまにてぞ入り給ふ。人々の御消そこも申し傳へ給はず。大

將の君涙をのどひて立ち出て給へるに、「いかにいかに。ゆゑしきさまに人の申しつれば、信じ難きとにてなむ、唯久しき御惱を承り歎きて参りつる」などの給ふ。「いと重くなりて月日經給へるをこの曉より絶えいり給へりつるを、ものゝけのまわざになむありける。やうやういさ出て給ふやうに聞きなし侍りて今なむ皆人心まづむめれど、まだいとたのもしげなしや。心苦しきことにこそ」とて誠に痛く泣き給へる氣色なり。目も少し腫れたり。衛門督、わがあやしき心ならひにや、この君のいとさしも親しからぬ繼母の御ことを、いたく心まめ給へるかなと目をととむ。かくこれかれ参り給へる由聞し召して「重きびやうざの俄にとぢめつるさまなりつるを、女房などは心もえをさめず亂りがはしく騒ぎ侍りけるに、みづからもえのどめず、心あわたしき程にてなむ。殊更になむ斯物し給へるよるこびは聞ゆべき」とのたまへり。かんの君は胸つぶれてかゝるをりのらうらうならずはえ参るまじく、けはひはづかしく思ふも心の中ぞ腹ぎたなかりける。かくいさ出て給ひての後しも恐しくおぼして、又々いみじき法どもをつくしてくはへ行はせ給ふ。うつしびとにてだにむくつけかりし人の御けはひの、まして世かはりあやしきものゝさまになり給へらむをおぼしやるに、いと心うければ中宮をあつかひ聞え給ふさへぞこのをりは物うくいひもてゆけば、女の身は皆同じ罪深きもとゐぞかしたなべて世の中いとはしく、かの又人も聞かざりし御中のむつものがたりに少し語り出て給へりしことをいひ出でたりしに、誠とおぼし出づるにいと煩はしくおぼさる。御ぐしおろしてむとせちにおぼしたれば、忌むことの力もやとて御いたゞきま

るしばかりはさみて五かいばかりうけさせ奉り給ふ。御戒の師いむことの勝れたるよし佛に申すにも哀に尊きことまじりて人わろく御傍にそひ居給ひて涙おしのごひ給ひつゝ佛をもろごゝろに念じ聞え給ふさま、世にかしこくおはする人もいとかく御心惑ふことにあたりてはえまづめ給はぬわざなりけり。いかなるわざをしてこれを救ひかけ留め奉らむとのみよるひるおぼし歎くに、ほればれしきまで御顔も少しおもやせ給ひにたり。五月などは、ましてはればれしからぬ空の氣色に、えさはやぎ給はねど、ありしよりは少しよろしきさまなり。されど猶絶えず惱みわたり給ふ。ものゝけの罪救ふべきわざ、日ごとに法華經一部づつ供養せさせ給ふ。何くれと尊きわざせさせ給ふ。御まくらがみ近くて不斷のみ讀經聲尊きかぎりして讀ませ給ふ。あらはれそめては折々悲しげなることどもをいへど、更にこのものゝけさはてず、いとゞあつき程は息も絶えつゝいよいよよわり給へばいはむ方なくおぼし歎きたり。なきやうなる御心ちにもかゝる御氣色を心苦しく見奉り給ひて世の中になくなりなむも我が身には更に口惜しきとのこるまじけれど、かくおぼし惑ふめるに、空しく見なされ奉らむがいと思ひぐまなかるべければ、思ひ起して御ゆなどいさゝかまるるけにや、六月になりてぞ時々御ぐしもたげ給ひける。珍しく見奉り給ふにも猶いとゆゝしくて、六條院にはあからさまにもえ渡り給はず。姫宮は怪しかりしことをおぼし歎きしより、やがて例のさまにもおはせず、惱ましく志給へど、ちどろちどろしくはあらず、立ちぬる月より物聞し召さていたくあをみそこなはれ給ふ。かの人はいわりなく思ひあまる時々は、夢のやうに見

奉りけれど、宮はつきせずわりなき事におぼしたり。院をいみじくおぢ聞え給へる御心に、有様も人のほども、ひとしくだにやはある。いたくよしめきなまめきたれば大方の人目にこそなべての人には優りてめでらるれ、幼くよりさるたぐひなき御有様にならひ給へる御心にはめざましくのみ見給ふ程に、かく惱みわたり給ふは哀なる御すくせにぞありける。御めのと達見奉り咎めて「院のわたらせ給ふこともいとたまさかなるを」とつぶやき怨み奉る、かく惱み給ふと聞し召してぞわたり給ふ。女君はあつくむつかしとて、御ぐしすまして少しさはやかにもてなし給へり。臥しながらうちやり給へりしかばとみにもかはかねど、露はかり打ちふくみまよふすぢもなくていと清らにゆらゆらとしてあをみおとろへ給へるしも、色はさをにまろく美しげにすきたるやうに見ゆる御はだつきなど世になくらうたげなり。もぬけたる蟲のからなどのやうにまだいとたゞよはしげにおはす。年比すみ給はて少し荒れたりつる院のうちたとしへなくせばげにさへ見ゆ。昨日今日かくもの覺え給ふひまにて心ことにつくろはれたるやうみづせんざいのうちつけに心よげなるを見出し給ひても哀に今まで經にけるをおもほす。池はいと涼しげにてはちすの花の咲さわたれるに、葉はいと青やかにて露さらさらと玉のやうに見えわたるを「かれ見給へ。おのれひとりも涼しげなるかな」とのたまふに、起きあがりて見出し給へるもいとめづらしければ「かくて見奉るこそ夢の心ちすれ。いみじく我が身さへかざりと覺ゆる、をりをりのありしはや」と涙をうけてのたまへば、みづからも哀とおもほして、

「消えとまるほどやはふべきたまさかに蓮の露のかゝるばかりを」との給ふ。

「契りおかむこの世ならでもはちす葉に玉る露のこゝろへだつな」。出て給ふかたざまは物うけれど、内にも院にも聞し召さむ所あり。惱み給ふと聞きても程經ぬるをめに近きに心を惑はしつるほど見奉ることもをさをさなかりつるに、かゝる雲間にさへやは、絶えこもらむとおぼし立ちてわたり給ひぬ。宮は御心のおに、見え奉らむもはづかしくつゝましくおぼすに、物など聞えたまふ御いらへも聞え給はねば、日ごろのつもりをさすがにさりげなくつらしとおぼしけると心苦しければ、とかくこしらへ聞え給ふ。おとなびたる人召して御心ちのさまなど問ひ給ふ。「例のさまならぬ御心ちになむ」と煩ひ給ふ御ありさまを聞ゆ。「あやしくほどへて珍しき御事にも」とばかりのたまひて御心のうちには年比經ぬる人々だにも、さることなきを、ふちやうなる御ことにもやとおぼせば、ことにもかくものたまひあへしらひ給はて唯打ち惱み給へるさまのいとらうたげなるをあはれと見奉り給ふ。辛うじておぼし立ちて渡り給ひしかばふともえ歸りたまはて、二三日おはするほど、いかにいかにと後めたくおぼさるれば、御文をのみ書き盡し給ふ。「いつの間にも御言の葉にかあらむ。いでややすからぬ世をも見るかな」と若君の御あやまちを知らぬ人はいふ。侍從ぞかゝるにつけても胸うちさわぎける。かの人もかく渡り給へりと聞くに、おほけなく心あやまりしていみじき事どもを書き續けておこせ給へり。對にあからさまに渡り給へる程に、人まなりければ忍びて見せ奉る。「むつかしき物見するこそいと心うけれ。心地のいと悪

しきにいとて臥し給へれば、「猶たゞこのはしがきのいとほしげに侍るぞや」とて廣げたれば人の参るにいと苦しくて御几帳ひき寄せて去りぬ。いと胸つぶるゝに院入り給へば、えよくもかくし給はで、御志とねの下にさしはさみ給ひつ。夜さりつかた二條院へわたり給はむとて御暇聞え給ふ。「こゝにはけしうはあらず見え給ふを、まだいとたゞよはしげなりしを見捨てたるやうに思はるゝも今更にいとほしくてなむ。ひがひがしく聞えなす人ありともゆめ心あき給ふな。今見なほし給ひてむ」と語らひ給ふ。例はなまいはけなきたはぶれどなども打ち解け聞え給ふを、いたくまめりてさやかにも見合せ奉り給はぬを、唯世のうらめしき御氣色と心え給ふ。晝のちましにうち臥し給ひて御物語など聞え給ふほどに暮れにけり。少し大殿ごもり入りにけるに、ひぐらしの花やかになくに驚き給ひて、さらば道たどたどしからぬ程にとて、御ぞなど奉りなほす。「月まちとともいふなるものを」といと若やかなるさましてのたまふはにくからずかし。そのまにもとやおぼすと心苦しげにおぼして立ちとまり給ふ。

「夕露に袖ぬらせとや日ぐらしの鳴くをさくさくあきてゆくらむ」。かたなりなる御心にまかせていひ出で給へるもらうたければ、ついで「あな苦しや」とうち歎き給ふ。

「まつさともいかゞ聞くらむかたがたに心さわがすひぐらしの聲」などおぼしやすらひで、猶なさけなからむも心苦しければとまり給ひぬ。まづ心なくさすがに眺められ給ひて御くだものばかり参りなどして大殿ごもりぬ。まだ朝すゞみの程に渡り給はむとて疾く起き



給ふ。よべのかはほりをおとしてこれは風ぬるくこそありけれとて御扇おき給ひて、きのふうたゝねま給へりしおましのあたりを立ちとまりて見給ふに、御志とねの少しまよひたるつまより淺緑の薄葉なる文の押し卷きたる端見ゆるを、何心もなく引き出て、御覽するに男の手なり。かみのかなどいとえんにことさらめきたる書きざまなり。ふたかさねにこまごまと書きたるを見給ふに、まぎるべき方なくその人の手なりけりと見給ひつ。御鏡など開けて參らする人は猶見給ふ文にこそはと、心も知らぬ小侍従見つけて、昨日の文の色と見るに、いとみじく胸つぶつぷとなる心ちす。御かゆなどまゐる方に目も見やらず、いでさりともそれにはあらじ、いとみじくさる事はありなむや、かくし給ひてけむと思ひなす。宮は何心もなく、まだ大殿ごもれり。あないはけな、かゝるものをちらし給ひて我ならぬ人も見つけたらましかばとおぼすも心おとりして、さればよいとむげに心にくき所なき御有様を後めたしとは見るかしとおぼす。出て給ひぬれば人々少しあがれぬるに、侍従よりて「昨日の物はいかにせさせ給ひてし。けさ院の御覽じつる文のいろこそ似て侍りつれ」と聞ゆれば、あさましとおぼして涙のたゞいできに出てくれば、いとほしきものからいふかひなの御さまやと見奉る。「いづくにかは置かせ給ひてし。人々の參りしに事あり顔に近くさぶらはじと、さばかりのいみをだに心の鬼にさり侍りしを、いらせ給ひしほどは少し程經侍りにしをかくさせ給ひつらむとなむ思ふ給へし」と聞ゆれば、「いさとよ、見し程に入り給ひしかばふともえおきあへて、さしはさみしを忘れにけり」とのたまふにいと聞えむかたなし。より

て見れどいづくのかはあらむ。「あないみじ。かの君もいと痛くおぢ憚りて氣色にても漏り聞かせ給ふことあらばとかしこまり聞え給ひしものを、ほどだに經ずかゝることの出でまうて來るよ、すべていはけなき御有様に人にも見えさせ給ひければ、年比さばかり忘れがたく怨みいひわたり給ひしかど、かくまで思う給へし御ことかは。たが御ためにもいとほしく侍るべきこと」とはゞかりもなく聞ゆ。心やすく若くおはすれば馴れ聞えたるなめり。いらへも志給はてたゞなきにのみぞ泣き給ふ。いとなやましげにて露ばかりの物も聞し召さねば、かく惱しくせさせ給ふを見おき奉り給ひて、今はをこたりはて給ひにたる御あつかひに心を入れ給へることゝ、つらく思ひいふ。おとゞはこの文の猶怪しくおぼさるれば人見ぬ方にて打ち返しつゝ見給ふ。さぶらふ人々の中にかの中納言の手に似たる手して書きたるかとまでおぼしよれど、言葉づかひさらさらとまがふべくもあらぬことどもあり。年を経て思ひわたりけることのためさかにほいかなひて心安からぬすぢを書き盡したることばいと見所ありて哀なれど、いとかくさやかにほくべしや、あたらし人の文をこそ思ひやりなく書きけれ、おちちることもこそと思ひしかば、昔かやうにこそまかなるべきをりふしにも、こそぎつゝこそ書きまぎらはしゝか、人の深き用意は難きわざなりけりと、かの人の心をさへ見おとしたまひつ。さてもこの人をばいかゞもてなし聞ゆべき、珍しきさまの御心地もかゝることのまぎれにてなりけり、いであな心うや、かく人づてならずうきことをるるありしなから見奉らむよと、我が御心ながらもえ思ひなほすまじく覺ゆるを、なほざりのすさび

と始より心を留めぬ人だに又ことさまの心わくらむと思ふは、心づきなく思ひ隔てらるゝを、ましてこれはさまことにおほけなき人の心にもありけるかな、みかどのみめをもあやまつたぐひ昔もありけれど、それは又いふかたことなり。宮づかへといひて我も人も同じ君になれ仕うまつる程に、おのづからさるべき方につけても、心をはしそめ物のまぎれ多かりぬべきわざなり。女御更衣といへど、とあるすぢかゝる方につけてかたほなる人もあり、心ばせ必ず重からぬうちまじりて思はずなることもあれど、おほろげの、さだかなるあやまち見えぬ程はさてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬまぎれありぬべし。かくばかり又なきさまにもてなし聞えて内々の志ひくかたよりもいつくかたじけなきものに思ひはぐゝまむ人をおきてかゝることは更にたぐひあらじとつまはじきせられ給ふ。みかどと聞ゆれどたゞすなほにおほやけさまの心ばへばかりにて宮仕の程も物すさまじきに、志深き私のねぎごとになびき、おのがじゝ哀をつくし見すぐし難き折のいらへをもいひそめ、おねむに心かよひそむらむなからひは、同じけしからぬすぢなれど、よるかたありや、我が身ながらもさばかりの人に心わけ給ふべくは覺えぬをと、いと心づきなけれど又氣色に出すべき事にもあらずなどおほし亂るゝにつけて、故院の上もかく御心にはまろしめしてや知らず顔をつくらさせ給ひけむ、思へばその世のことこそはいと恐しくあるまじきあやまちなりけれと近きためしをおほすにぞ、戀の山路はえもどくまじき御心まじりける。つれなしづくり給へど、物思し亂るゝさまのまゐるければ、女君消え残りたるいとほしみにわ

たり給ひて、人やりならず心苦しう思ひやり聞え給ふにやとおぼして、「心地はよろしくなり  
にて侍るを、かの宮の惱しげにおはすらむに疾く渡り給ひにしこそいとほしけれ」と聞え給  
へば「さかし。例ならず見え給ひしかど異なる心地にもおはせねばおのづから心のどかに思  
ひてなむ。内よりは度々御使ありけり。今日も御文ありつとか。かの院のいとやんごなく聞  
えつけ給へれば上もかくおぼしたるなるべし。少しおろかになどもあらむは、こなたかなた  
おぼさむことのいとほしきぞや」とてうめき給へば「内の聞し召さむよりもみづからうらめ  
しと思ひ聞え給はむこそは心苦しからめ。われはおぼし咎めずともよからぬさまに聞えな  
す人々必ずあらむと思へば、いと苦しくなむ」などのたまへば、「實にあながちに思ふ人のた  
めには煩はしきよすがなれど、萬にたどり深きこととやかやくやとおほよそ人の思はむ心さ  
へ思ひめぐらさるゝを、これはたゞ國王の御心やおき給はむとばかりを、はゞからむは浅き  
心地ぞしける」とほゝゑみてのたまひまぎらはす。「渡り給はむことは諸共にかへりてを、心  
のどかにあらむ」とのみ聞え給ふを「こゝには暫し心安くて侍らむ。まづ渡り給ひて人の御  
心も慰みなむ程にを」と聞えかはし給ふ程に日ごろ経ぬ。姫宮はかく渡り給はぬ日比のふる  
も人の御つらさにのみおぼすを、今は我が御をこたりうちまぜてかくなりぬるとおぼすに、  
院も聞し召しつけていかにおぼし召さむと世の中つゝましくなむ。かの人もいみじげにの  
みいひわたれども小侍従も煩はしく思ひ歎きて「かゝることなむありし」と告げてければい  
とあさましくいつの程にさること出てきけむ、かゝることはありふればおのづから氣色に

ても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとどつゝましく、空にめつきたるやうに覺えてしを、ましてさばかり違ふべくもあらざりし事どもを見給ひてけむ、耻しくかたじけなくかたはらいたきに、朝夕すゞみもなき比なれど身も志むる心地していはむかたなく覺ゆ。年比まめごとにもあだごとにも召しまつはし参りなれつるものを、人よりはこまやかにおぼしめたる御氣色の哀になつかしきをあさましくおぼけなき物に、心おかれ奉りてはいかでは目をも見合せ奉らむ、さりとしてかきたえほのめき参らざらむも人めあやしくかの御心にもおぼし合せむことのいみじさなど安からず思ふに、心地もいとなやましくてうちへも参らず。さして重き罪には當るべきならねど身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよとかつは我が心もいとつらく覺ゆ。いでやまづやかに心にくきけはひ見え給はぬわたりぞや、まづはかのみすのはさまもさるべきことかは、かるがるしと大將の思ひ給へる氣色見えさかしなど今ぞ思ひおはする。まひてこの事を思ひさまたむと思ふかたにてあながちになんづけ奉らまほしきにやあらむ、よきやうとてもあまりひたおもむきにおほどかにあてなる人は世の有様も知らず、かつさぶらふ人に心おき給ふこともなくて、かくいとほしき御身のためも人のためもいみじきことにもあるかなとかの御事の心苦しさも思ひ放たれ給はず。宮はいとらうたげにて惱みわたり給ふさまの猶いと心苦しかく思ひはなち給ふにつけては、あやにくにうきにまぎれぬ戀しさの苦しくおぼされるれば、渡り給ひて見奉り給ふにつけても胸いたくいとほしくおぼさる。御いのりなどさまさまにせさせ給ふ。大方のことは

ありしにかはらず、なかなかいたはしくやんごとなくもてなし聞ゆるさまをまし給ふ。氣近  
くうち語らひ聞え給ふさまはいとこよなく御心隔たりてかたはらいたければ、人目ばかり  
をめやすくもてなしておぼしのみ亂るゝに、この御心のうちしもぞ苦しかりける。さること  
見きともあらはし聞え給はぬに、みづからいとわりなくおぼしたるさまも心をさなし。いと  
かくおはするけぞかし。よきやうといひながらあまり心もとなく後れたる頼もしげなきわ  
ざなりとおぼすに、世の中なべてうしろめたく女御のあまりやはらかにおびれ給へるこそ、  
かやうに心かけ聞えむ人はまして心亂れなむかし。女はかうはるけ所なくなよびたるを人  
もあなづらはしきにや、さるまじきにふと目とまり心強からぬあやまちはま出づるなりけ  
りとおぼす。右のおとこの北の方の取り立てたるうしろみもなく幼くより物はかなさよに  
さすらふるやうにて生ひ出て給ひけれど、かどかどしくらうありて我も大方にはおやめき  
しかど、にくき心のそはぬにしもあらざりしをなだらかにつれなくもてなしてすぐし、この  
おとこのさるむきんの女房に心合せて入り來たりけむにもけざやかにも離れたるさまを  
人にも見え知られ、殊更に許されたる有様にまなして我が心と罪あるにはなさずなりにし  
など、今思へばいかにかどあることなりけり、契深き中なりければ長くかくてたもたむこと  
はとてもかくても同じことあらましもものから心もてありしことども世の人と思ひ出ては少  
しかるがるしき思ひ加はりなまし、いといたくもてなしてしわざなりとおぼし出づ。二條の  
ないしのかんの君をば猶絶えず思ひ出て聞え給へど、かくうしろめたきすぢのことさきも

のにおぼしまりて、かの御心よわさも少しかるく思ひなされ給ひけり。遂に御ほ意のごとし給ひてけりと聞き給ひては、いと哀に口惜しく御心動きてまづとぶらひ聞え給ふ。今なむとだににほはし給はざりけるつらさをあさからず聞え給ふ。

「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦にもしほたれしも誰ならなくに。さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて今まで後れ聞えぬる口惜しさをおぼし捨てつとも、さり難き御系かうのうちにはまづこそはと哀になむ」など多く聞え給へり。疾くおぼし立ちにしことなれどこの御さまたげにかゝづらひて人にはまかあらはし給はぬことなれど、心のうちあはれに、昔よりつらき御契をさすがにあさましくもおぼし知られぬなどかたがたにおぼし出でらる。御かへり今はかくしも通ふまじき御文のとぢめとおぼせば哀にて心とめて書き給ふ墨つきなどいとをかし。「常なき世とは身ひとつにのみ知り侍りにしを後れぬとのたまはせたるになむ。げに、

あま船にいかゞは思ひおくれけむあかしの浦にいさりせし君。系かうにはあまねき方にてもいかゞは」とあり。濃きあをにびの紙にてまきみにさし給へる、例のことなれどいたくすぐしたる筆づかひ猶ふりがたくをかしげなり。二條院におはします程にて女君にも今はむげに絶えぬることにて見せ奉り給ふ。「いといたくこそはづかしめられたれ。げに心づきなしや。さまざまに心ぼそき世の中の有様をよく見すぐしつるやうなるよ。なべての世の事にてもはかなく物をいひかはし、時々によせて哀をも知り故をもすぐさず、よそながらのむ

つひかはしのべき人は、齋院とこの君とこそは残ありつるを、かく皆背きはて、齋院はたいみじうつとめてまぎれなくおこなひにまみ給ひにたなり。猶こゝらの人の有様を聞き見る中に、深く思ふさまにさすがに懐しきことのかの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。女ごをおほし立てむことよ、いと難かるべきわざなりけり。すぐせなどいふらむものは目に見えぬわざにて親の心にまかせがたし。おひたらむ程の心づかひはなほ力いるべかめり。よくこそあまたかたがたに心を亂るまじきちぎりなりけれ。年深くいたらざりしほどにさうざうしのわざや。さまざまに見ましかばとなむ歎かしきをりをりありし。若宮を心しておほしたて奉り給へ。女御は物の心を深く知り給ふ程ならてかく暇なきまじらひをし給へば、何事も心もとなきかたにぞ物し給ふらむ。御子達なむなほあくかぎり人にてんつかるまじくて世をのどかにすぐし給はむにうしろめたかるまじき心ばせつけまほしきわざなりける。かぎりありてとざまかうざまのうしろみまうくるたゞ人はおのづからそれにも助けられぬるを「など聞え給へば」はかばかしきさまの御うしろみならずとも世にながらへむかぎりは見奉らぬやうあらじと思ふを、いかならむ」とて猶物を心ばそげにてかく心に任せて行ひをもとゞこほりなく志給ふ人々をうらやましく思ひ聞え給へり。「かんの君にさま變り給へらむさうぞくなどまだ立ちなれぬほどはとふらふべきを、けさなどはいかにぬふ物ぞ。それせさせ給へ。一くだりは六條のひんがしの君にもものしつけむ。うるはしき法服だちてはうたて見る目もけうとかるべし。さすがにその心ばへ見せてを」など聞え給ふ。あをにびのひと



くだりをこゝにはせさせ給ふ。つくもどころの人召して忍びてあまの御具どものさるべきはじめのたまはず。御まとね、うはむしろ、屏風、几帳などのこともいと忍びてわざとがましく急がせ給ひける。かくて山のみかどの御賀も延びて秋とありしを、八月は大將の御き月にてがくそのこと行ひ給はむにびんなかるべし。九月は院の太后の隠れ給ひにし月なれば十月にとおぼしまうくるを、姫宮いたく惱み給へばまたのびぬ。衛門督の御あづかりの宮なむその月には参り給ひける。おほきおとゞ居立ちていかめしくこまかに物のきよら、ぎしきをつくし給へりけむ。かんの君もその序にぞ思ひ起して出て給ひける。猶なやましく例ならず病づきてのみすぐし給ふ。宮もうちへて物をつゝましくいとほしとのみおぼし歎くけにやあらむ、月多く重なり給ふまゝにいと苦しげにおはしませば、院は心うしと思ひ聞え給ふ方こそあれ、いとらうたげにあえかなるさましてかく惱みわたり給ふを、いかにおはせむとなげかしくてさまさまにおぼしなげく。御いのりなど今年はまぎれ多くてすぐし給ふ。御山にもきこし召して、らうたく戀しと思ひ聞え給ふ。月比かくほかほかにて渡り給ふこともをさをさなきやうに人の奏しければいかなるにかと御胸つぶれて、世の中も今更にうらめしくおぼして對の方の頼ひける比は猶そのあつかひにと聞し召してだになまやすからざりしを、その後なほり難く物し給ふらむはその比ほびんなきことや出て來たりけむ、みづから知り給ふことならねど善からぬ御うしろみどもの心にていかなることかありけむ、うちわたりなどのみやびをかはずべきなからひなどにも、けしからずうきこといひ出づるたぐひ

も聞ゆかしとさへおぼしよるも、こまやかなることおぼし捨てし世なれど、猶この道は離れ難くて、宮に御文こまやかにてありけるを、おとゞ坐します程にて見給ふ。「覺束なくてのみ年月のすぐるなむ哀なりける。惱み給ふなるさまはくはしく聞きし後ねんずのついでにも思ひやらるゝはいかゞ。世の中さびしく思はずなることありとも忍びすぐし給へ。うらめしげなる氣色などおぼろけにて見知り顔にほのめかす、いとまなおくれたるわざになむ」など教へ聞え給へり。いといとほしく心苦しく、かゝる内々のあさましきをばさこし召すべきにはあらで、我がをこたりにほいなくのみ聞きおぼすらむことをとばかりおぼしつゞけて「この御かへりをばいかゞ聞え給ふ。心苦しき御せうここにまるこそいと苦しけれ。思はずに思ひ聞ゆることありともおろかに人の見咎むばかりはあらじとこそ思ひ侍れ。たが聞えたるにかあらむ」とのたまふに、はぢらひて背き給へる御姿もいとらうたげなり。いたくおも瘦せて物思ひくし給へるいとゞあてにをかし。「いとをさなき御心ばへを見置き給ひていたくうしろめたがり聞え給ふなりけりと思ひ合せ奉れば、今より後もよろづになむかうまでもいかで聞えじと思へど。うへの御心にそむくときこし召すらむこと安からずいふせきを、こゝにだに聞え知らせてやはとてなむ。いたりすくなくたゞ人の聞えなすかたにのみよるべかめる御心には、唯おろかにあさきとのみおぼし、又今はこよなくさだすぎにたる有様もあなづらはしくめなれてのみ見なし給ふらむも、方々に口惜しくもうれたくも覺ゆるを、院のおはしまさむ程は猶心をさめてがのおぼしおきてたるやうありけむさださびとをも同じ

くならずらへ聞えていたくなかるめ給ひそ。いにしへよりほいふかきみちにもたどりうすか  
るべき女がたにだに皆思ひ後れつゝいとぬるき事多かるを、みづからの心には何ばかり思  
ひ迷ふべきにはあらねど、今はと捨て給ひけむ世のうしろみに譲りおき給へる御心ばへの  
哀に嬉しかりしを、引き續き争ひ聞ゆるやうにて、同じさまに見捨て奉らむことのあへなく  
覺されむにつゝみてなむ。心苦しと思ひし人々も今はかけとどめらるゝほだしばかりなる  
も侍らず。女御もかくて行く末は知り難けれど御子達數をひ給ふめればみづからの世だに  
のどけくはと見おきつべし。その外はたれもたれもあらむに従ひて諸共に身を捨てむも惜  
しかるまじき齡どもになりたるを、やうやうすゞしく思ひ侍る。院の御世ののこり久しく  
もおはせじ。いとあづしくいととなりまさり給ひて、物心ほそげにのみおぼしたるに、今更  
に思はずなる御名もり聞えて御心亂り給ふな。この世はいと安し。ことにもあらず。後の世  
の御道の妨げならむも罪いとおそろしからむなど、まほにそのこととはあかし給はねどつ  
くづくと聞え續け給ふに、涙のみ落ちつゝ、我にもあらず思ひまみておはすれば、我もうち泣  
き給ひて人のうへにてももどかしく聞き思ひしふる人のさかしらよ、身に變ることにと、  
いかにうたてのおきなやとむつかしくうるさき御心をふらむと、耻ぢ給ひつゝ御祝ひき寄せ  
給ひて手づから押し摺り紙取りまかなひ書かせ奉り給へど、御手もわなゝきてえ書き給は  
ず。かのこまかなりし返事はいとかくしもつゝまず通はし給ふらむかしとおぼしやるに、い  
とにくければよろづの哀もさめぬべけれど、ことばなど教へ書かせ奉り給ふ。参り給はむこ

とはこの月かくて過ぎぬ。二の宮の御いきほひことにて参り給ひけるをふるめかしき御身  
ざまにて立ちならび顔ならむもはゞかりある心ちしけり。霜月はみづからの御忌月なり。年  
のをはりはないと物さわがし。又いとこの御姿も見苦しく待ち見給はむをと思ひ侍れど、  
さりとしてさのみ延ぶべきことにやは。むつかしく物おぼし亂れずあきらかにもてなし給ひ  
てこのいたくも瘦せ給へるつくろひ給へ」などいとらうたしとさすがに見奉り給ふ。衛門督  
をば何さまの事にもゆゑあるべきをりふしには必ず殊更にまつはし給ひつゝのたまはせあ  
はせしを絶えてさる御せうそこもなし。人あやしと思ふらむとおぼせど、見むにつけてもい  
とどほれぼれしきかたはづかしく見むにはまた我が心もたゞならずやとおぼし返されつゝ、  
やがて月比参り給はぬをもとがめなし。大方の人は猶例ならず惱みわたりて院にはた御遊  
などなき年なればとのみ思ひわたるを大將の君、ぞあるやうあることなるべし、すきものは  
定めて我が氣色とりしとは忍ばぬにやありけむと思ひよれど、いとかくさだかに残りな  
きさまならむとは思ひより給はざりけり。十二月になりけり。十餘日と定めてまひどもな  
らし殿の内ゆすりてのゝしる。二條院の上はまだわたり給はざりけるをこの試樂によりてぞ  
えまづめはてと渡り給へる。女御の君も里におはします。このたびの御子は又男にてなむお  
はしましける。すぎすぎいとをかしげにておはするを、明暮もてあそび奉り給ふになむ過ぐ  
るよはひのゑるし嬉しくおぼされける。試樂に右大臣殿の北の方もわたり給へり。大將の君  
丑寅の町にてまづうちうちに調樂のやうに、明暮遊びならし給ひければかの御かたはる前

のものは見給はず。衛門督をかゝることの折もまじらはせざらむはいとはえなくさうざう  
しかるべき。うちにも人怪しとかたぶきぬべきことなれば参り給ふべきよしありけるを、重  
く煩ふよし申して参らず。さるはそこはかと苦しげなる病にもあらざなるを、思ふ心のある  
にやと心苦しくおぼして取りわきて御せうそこつかはす。「ちゝおとゝもなどかかへさひ申  
されける。ひがひがしきやうに院にも聞し召さむを、おどろおどろしき病にもあらず。助け  
て参り給へ」とそゝのかし給ふにかく重ねてのたまへれば苦しと思ふ思ふ参りぬ。上達部な  
どもまだ集ひ給はぬ程なりけり。例の氣近き御簾の内に入れ給ひてもやの御簾おろしてお  
はします。實にいといたくやせやせにあをみて例もほこりに花やぎたる方は弟の君達に  
はもてけたれていと用意ありがほにまづめたるさまぞことなるを、いとまづめてさぶら  
ひ給ふさま、などかは御子達の御傍にさし並べたらむに更にとがあるまじきを、たゞことの  
さまの誰も誰もいと思ひやりなきこそいと罪許しがたけれなど、御目とまれどさりげなく  
いとなつかしく「そのことゝなくて對面もいと久しくなりにけり。月比はいろいろのびやう  
ざをのみあつかひ、心のいとまなきほどに院の御賀のためこゝに物し給ふみこのほふじ仕  
うまつり給ふべくありしを、つきづき滞ることまげくてかく年もせめつれば、え思ひのごと  
くもしあへでかたのごとくなむ。いもひの御鉢参るべきを、御賀などいへばことごとしきや  
うなれど、家に生ひ出づるわらはへの數多くなりけるを御覽せさせむとて舞などならは  
しはじめし、そのことをだにわたさむとて拍子とゝのへむこと、又誰にかはと思ひめぐらし

かねてなむ、月比とぶらひものし給はぬうらみも捨てしける」とのたまふ。御氣色のうらなきやうなるものからいとやはづかしきに、顔の色違ふらむと覺えて御いらへもとみにえ聞えず。「月比かたがたにおぼし惱む御こと承り歎き侍りながら、春の比ほひより例もわづらひ侍る。みだりかくびやうといふもの所せく起り煩ひ侍りてはかばかしくふみたつる事も侍らず月比に添へて沈み侍りてなむ、内などにも參らず世の中跡絶えたるやうにてこもり侍る。院の御齡たり給ふ年なり。人よりさだかに數へ奉り仕うまつるべきよし、致仕のおとと思ひおよび申されしを、かうぶりをかけ車をしまし捨てし身にて進み仕うまつらむにつくところなし、げに下臈なりとも同じこと深き所侍らむ、その心御覽せられよともよほし申さるゝことの侍りしかば、重き病をあひ助けてなむ參りてはべし。今はいよいよいとかなるさまにおぼしすましていかめしき御よそひを待ち受け奉り給はむこと願はしくもおぼすまじく見奉り侍りしを、事どもをばそがせ給ひて靜なる御物語の深き御願ひかなはせ給はむなむ優りて侍るべき」と申し給へば、いかめしく聞きし御賀のことを女二の宮の御方さまにはいひなさぬもらうありとおぼす。「唯かくなむことそぎたるさまに世の人はあさく見るべきを、さはいへど心えて物せらるゝに、さればよとなむいとと思ひなられ侍る。大將はちほやけがたはやうやうおとなぶめれど、かやうになさけびたる方はもとよりまなぬにやあらむ。かの院何事も心および給はぬことはをさをさなきうちにも、がくのかたの事は御心留めでいとかしこく知り整へたまへるをさこそおぼし捨てたるやうなれ。靜に聞き召し

すまさむこと今しもなむ心づかひせらるべき。かの大將と諸共に見入れて舞の童部の用意心ばへよく加へ給へ。物の師などいふものは唯我が立てたることこそあれ。いと口惜しさものなりなどいと懐しくの給ひつくるを、嬉しきものから苦しくつゝましくてことづくなにてこの前を疾く立ちなむと思へば、例のやうにこまやかにあらでやうやうすべり出てぬ。ひんがしのおととにて大將のつくろひ出し給ふ樂人舞人のさうぞくのことなど又々行ひ加へ給ふ。あるべきかぎりいみじく盡し給へるにと委しき心まらびそふもげにこの道はいと深き人にぞものし給ふめる。今日はかゝるこゝろみの日なれば御方々物見給はむに見所なくはあらせじとて、かの御賀の日は赤きまらつるばみに、えびぞめのまたがさねを着るべし。今日は青色にすはうがさね、樂人三十人今日はまらがさねを着たり。辰巳の方の釣殿につゞきたる廊をかくそにして山の南のそばより御前に出つる程せんゆうかといふもの遊びて雪のたゞいさゝかちるに春のとなり近く梅の氣色見るかひありてほゝゑみたり。廂の御簾の内に坐しませば、式部卿の宮右のおととばかりさぶらひ給ひて、それよりまもの上達部はすのこにわざとならぬ日のことにて御あるじなど氣近き程に仕うまつりなしたり。右の大殿の四郎きみ大將殿の三郎きみ兵部卿宮のそんわうの君だち二人はまんざいらくまだいとちひさき程にていとらうたげなり。四人ながらいづれとなくたかき家の子にてかたちをかしげにかしづき出でたる思ひなしもやんごとなし。又大將の御子のないしのすけばらの二郎きみ式部卿の宮の兵衛の督といひし、今は源中納言の御子皇應、右の大い殿の三郎き

み陵王、大將殿の太郎さみ落蹲、さてはたいへいらく喜春樂などいふ舞どもをなむ、同じ御  
なからひのきんだちちとなたちなど舞ひける。暮れゆけば御簾あげさせ給ひて物の興まさ  
るにいとうつくしき御うまごの君達のかたちすがたにて舞のさまも世に見えぬ手を盡し  
て、御師ども、おのおの手のかぎりを教へ聞えけるに、深きかどかどしさを加へて珍らかに  
舞ひ給ふを、いづれをもいとらうたしとおぼす。老い給へる上達部たちは皆涙おとし給ふ。  
式部卿の宮も御うまごをおぼして御鼻の色づくまでまほたれさせ給ふ。あるじの院「過ぐる  
齡にそへてはゑひなきこととめ難きわざなりけれ。衛門督心とめてほゝゑまるゝいと  
心恥しや。さりとも今暫しならむさかさまにゆかぬ年月よ、老いはえ遁れぬわざなり」とて  
うち見やり給ふに、人よりけにまめだちくつして誠に心地もいと惱ましければ、いみじき事  
もめもとまらぬ心地する人をしもさしわきて空酔ひまつゝかくの給ふ。たはぶれのやうな  
れどいとと胸つぶれてさかづきのめぐりくるも頭いたく覺ゆれば氣色ばかりにてまぎらは  
すを御覽じとがめて持たせながらたびたびまひ給へばはしたなくても煩ふさま、なべて  
の人に似ずをかし。心地かき亂りて堪へがたければまだ事もはてぬに罷て給ひぬるまゝに、  
いといたく惑ひて、例のいととろおどろしき酔にもあらぬを、いかなればかゝるならむ、  
つゝましと物を思ひつるにけののぼりぬるにや、いとさいふばかりおくすべき心よわさと  
は覺えぬを、いふかひなくもありけるかなとみづから思ひ知らる。まばしのゑひの惑ひにも  
あらざりけり。やがていといたく煩ひ給ふ。おとと母北の方おぼしさをわきてよそよそにてい



と覺束なしとて殿にわたし奉り給ふを、女宮のおぼしたるさま又いと心ぐるし。事なくてす  
ぐす月日は心のどかにあいなだのみしていとしもあらぬ御志なれど今はと別れ奉るべきか  
どでにやと思ふは哀に悲しく、後れて思し歎かむことのかたじけなきをいみじと思ふ。母御  
息所もいとみじく歎き給ひて「世の事として親をばなほさるものにおき奉りてかゝる御  
なからひはとあるをりもかゝるをりも離れ給はぬこそ例のことなれ。かく引き別れてたひ  
らかに物し給ふまでもすぐし給はむが心づくしなるべきことを、暫しこゝにてかくて試み  
給へ」と御傍に御几帳ばかりを隔て、見奉り給ふ。「ことわりや、數ならぬ身にて及び難き御  
なからひになまじひに許され奉りてさぶらふまるしには長く世に侍りてかひなき身の程も  
少し人とひとしくなるけぢめをもや御覽せらるゝところ思ふ給へつれいといみじくかくさ  
へなり侍れば深き志をだに御覽じはてられずやなり侍りなむと思ふ給ふるになむ、とまり  
がたき心地にもえゆきやるまじく思ひ給へらるゝ」など、かたみになき給ひてとみにもえわ  
たり給はねば、又母北の方うしろめたくおぼして、「などかまづ見えむとは思ひ給ふまじき。  
われは心地も少し例ならず心ぼそきときはあまたの中にまづ取りわきてゆかしくも頼もし  
くもこそ覺え給へ。かくいと覺束なきこと」と怨み聞え給ふも又いとことわりなり。人より  
さきなりけるけぢめにや取りわきて思ひならひたるを今に猶悲しく去給ひて暫しも見えぬ  
をば苦しきもに去給へば、心地のかくかぎりに覺ゆるをりしも見え奉らざらむ罪深くいぶ  
せかるべし。「今はとたのみなく聞かせ給はゞいと忍びて渡り給ひて御覽せよ。必ず又對面

給はらむ。怪しくたゆくおろかなる本性にてことにふれておろかにおぼさるゝ事ありつらむこそくやしく侍れ。かゝる命の程を知らて行く末長くのみ思ひ侍りける事となくなく渡り給ひぬ。宮はとまり給ひていふ方なくおぼしこがれたり。大殿に待ち受け聞え給ひてよろづにさわぎ給ふ。さるはたちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず、月比物などを更に参らざりけるにいととはかなきかうじなどをだにふれ給はず、唯やうやう物に引きいるゝやうに見え給ふ。さるときのいうそくのかくものし給へば世の中惜みあたらしがりて御とぶらひに参り給はぬ人なし。内よりも院よりも御とぶらひまば聞えつゝ、いみじく惜みおぼし召したるにも、いとゞしき親達の御心のみ惑ふ。六條院にもいと口惜しきわざなりとおぼし驚きて、御とぶらひに度々ねんごろに父おとゞにも聞え給ふ。大將はましていとよき御中なれば氣近く物し給ひつゝ、いみじく歎きありき給ふ。御賀は廿五日になりけり。かゝる時のやんごとなき上達部の重く煩ひ給ふに、おやはらからあまたの人々さるたかき御なからひのなげきまをれ給へる比ほひぞ物すさまじきやうなれど、月々に滞りつることだにあるを、さて止むまじきことなればいかでかはおぼしとゞまらむ、女宮の御心のうちをぞいとほしく思ひ聞えさせ給ふ。例のごじふじのみずきやう又かのおはします御寺にもまかびるさなの。

柏木

衛門のかんの君かくのみ惱みわたり給ふこと猶をこたらで年もかへりぬ。おとど北の方おぼし歎くさまを見奉るに去ひてかけはなれなむ命かひなく罪おもかるべきことを思ふ。心はこゝろとして又あながちにこの世に離れがたく惜み留めまほしき身かは、いはけなかりし程より思ふ心ことにて何事をも人には今一きはまさらむとおほやけわたくしのことにふれてなのめならず思ひのぼりしかど、その心かなひ難かりけりとひとつふたつのふじごと  
に身を思ひおとしてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて後の世のおこなひに  
ほい深くすゝみにしを親たちの御うらみを思ひて野山にもあくがれむ道の重きほだしなる  
べく覺えしかば、とどまからうさまに紛らはしつゝすぐしつるを、遂に猶世に立ちまふべくも  
覺えぬ物思ひの一方ならず身にそひにたるはわれより外に誰かはつらき、心づからもてそ  
こなひつるにこそあめれと思ふに恨むべき人もなし。神佛をもかこたむ方なきはこれ皆さ  
るべきにこそあらめ、たれも千年の松ならぬ世はつひにとるべきにもあらぬを、かく人にも  
少しうち忍ばれぬべき程にてなげの哀をもかけ給ふ人あらむをこそはひとつ思ひにもえぬ  
るまるしにはせめ、せめてながらへばおのづからあるまじき名をもたち、我も人も安からぬ  
みだれ出て來るやうもあらむよりは、なめしと心お給へらむあたりにもさりともおぼし

ゆるいてむかし、萬の事今はのとぢめには皆消えぬべきわざなり、又ことさまのあやまちしなれば年比物のをりふしごとになつはしならひ給ひにしかたの哀も出てきなむなど、つれづれに思ひ續くるもうちかへしいとあぢきなし。などかく程もなくまなしつる身ならむとかきくらし思ひ亂れて枕もうきぬばかり人やりならずながしそへつゝ、いさゝかひまありとて人々立ちさり給へる程に、かしこに御文奉れ給ふ。「今はかぎりになりにて侍る有様はおのづからさとし召すやうも侍らむを、いかゞなりぬるとだに御耳とゞめさせ給はぬもことわりなれど、いとらくも侍るかな」と聞ゆるに、いみじうわなゝけば思ふこともみなかさして、

「今はとてもえむ煙もむすぼへれ絶えぬおもひのなほや残らむ。哀とだにのたまはせよ。心のどめて人やりならぬ闇に惑はむ道の光にも志侍らむ」と聞え給ふ。侍従にもこりずまに哀なる事どもを言ひおこせ給へり。「みづからも今一たびいふべき事なむある」との給へれば、この人もわらはよりさるたよりに参り通ひつゝ、見奉りなれたる人なればおほけなき心こそうたて覺え給ひけれ。今はと聞くはいとかなしうてなくなく、猶この御かへり誠にこれをとぢめにもこそ侍れ」と聞ゆれば、我も今日か明日かの心ちして物心ほそければ大方の哀ばかりは思ひ知らるれど、いと心うきこと、思ひこりにしかばいみじうなむつゝ、ましき」とて更にかい給はず。御心の本性の強くづしやかなるにはあらねど耻しげなる人の御けしきの折々にまほならぬがいと恐しうわびしきなるべし。されど御視などまかなひて責め聞ゆ

ればまぶまぶに書い給ふをとりて忍びてよひのまぎれにかしこに参りぬ。おとどはかしこ  
きおこなひ人葛城山よりさうじ出でたる、待ちうけ給ひて加持参らせむとま給ふ。みずほふ  
どきやうなどもいとおどろおどろしうさわぎたり。人の申すまゝにさまさまひじりだつげ  
んざなどの、をさをさ世にも聞えず深き山に籠りたるなども、弟の君だちをつかはしつゝ  
尋ねめす、にけにく、心づきなき山伏どもなどいと多くまゐる。頼ひ給ふさまのそこはか  
となく物を心ほそく思ひてねをのみ時々はなき給ふ。陰陽師なども多くは女の靈とのみ占  
ひ申しければさることやとおほせど、更にもものけの顯れ出でくるもなきに、おもほしわ  
づらひてかゝる隈々をも尋ね給ふなりけり。このひじりもたけたかやかにまぶしつべだま  
しくて、荒らかにおどろおどろしく陀羅尼讀むを「いであなにくや、罪の深き身にやあらむ、  
陀羅尼の聲高きはいとけおそろしくていよいよまぬべくこそ覺ゆれ」とて、やをらすべり出  
で、この侍従と語らひ給ふ。おとどはさもまり給はず「ちやすみたると」人々来て申させ給  
へば、さおほして忍びやかにこの聖と物語ま給ふ。おとなび給へれど猶花やぎたるところつ  
きて物わらひし給ふおとどの、かゝるものどもと向ひ居てこの頼ひそめ給ひし有様、何とも  
なくうちたゆみつゝおもひ給へること「誠にこのものけあらはるべく念じ給へ」などこま  
やかに語らひ給ふもいと哀れなり。「かれ聞き給へ。何の罪ともおほしやらぬに占ひよりけ  
む女の靈こそ誠にさる御まうの身にそひたるならば、いとほしき身もひきかへやんごとな  
くこそなりぬべけれ。さてもおほけなき心ありてさるまじきあやまちをひき出で、人の御

名をもたて身をもかへりみぬたぐひ昔の世にもなくやはありけると思ひなほすに、猶けはひわづらはしう、かの御心にかゝる咎を老られ奉りて世にながらへむこともいとまばゆく覺ゆるはげにことなる御光なるべし。深きあやまちもなきに見合せ奉りし夕のほどよりやがてかきみだり惑ひそめにしたましひの身にもかへらずなりにしを、かの院の内にあくがれありかば結びとゞめ給へよ」などいとよわけにからのやうなるさまして泣きみ笑ひみ語らひ給ふ。宮も物をのみはづかしうつゝましうおぼしたるさまを語る。さてうちおめりおもやせ給へらむ御さまの面影に見奉る心ちして思ひやられ給へば、げにあくがるゝたまやゆき通ふらむなどいとゞしき心ちにも亂るれば「今さらにこの御ことよ、かけても聞えじ。この世はかうはかなくて過ぎぬるを長き世のほだしにもことと思ひなむ。いといとほしき心苦しき御ことをたひらかにとだにいかで聞きおい奉らむ。見し夢を心ひとつに思ひ合せて又語る人もなきがいみじういふせくもあるかな」などとりあつめ思ひまみ給へるさまの深きを、かつはいとうたて恐しう思へと哀はたえまのばすこの人もいみじうなく。おそくめして御返り見給へば、御手も猶いとほかなげにをかきさほどに書き給ひて「心苦しうきゝながらいかてかは、唯おしはかり、残らむとあるは、

立ちそひて消えやまなましうきことを思ひみだるゝ煙くらべに。おくるべうはとばかりあるを哀にかたじけなしと思ひたまふ。「いでやこの煙ばかりこそはこの世の思ひいでならめ。はかなくもありけるかな」と、いとゞなきさまさり給ひて御返りふしながらうちやすみ

つゝ書い給ふ。言の葉のつゞきもなくあやしき鳥の跡のやうにて、

「行くへなき空のけふりとなりぬとも思ふあたりをたちははなれじ。夕はわきて詠めさせ給へ。答め聞えさせ給はむ人めをも今は心やすくおぼしなりてかひなき哀をだにも絶えずかけさせ給へ」などかさみたりて心あめ苦しさまさりければ「よしいたう更けぬさきに歸り参りたまひてかく限のさまになむとも聞え給へ。今更に人あやしと思ひあはせむを、我が世の後さへ思ふこそ苦しけれ。いかなる昔の契にていとかゝることしも心にきみけむ」となくなくぬざり出て給ひぬれば、例はむごにむかへすゑてすゞるごとをさへいはせまほしうま給ふをことずくなにてもと思ふが哀なるに、えもいでやらず。御有様をめのともし語りていみじう泣きまどふ。おとどなどの覺したる氣色ぞいみじきや。「昨日今日少し宜しかりつるをなどかいと弱げには見え給ふ」とさわぎ給ふ。「何か猶とまり侍るまじきなめり」と聞え給ひてみづからもない給ふ。宮はこのくれの方より惱ましうま給ひけるをその御氣色と見奉りまりたる人々さわぎみちておとどにも聞えたりければ驚きて渡り給へり。御心のうちには、あなくちをしや、思ひまじる方なくて見奉らましかば珍しく嬉しからましとおぼせど、人には氣色漏らさじとおぼせば、げんざなどめしみずほふはいつとなく不慚にせらるれば、僧どもの中にげんあるかぎり皆参りて加持まゐりさわぐ。夜ひと夜惱みあかさせ給ひて日さしあがる程に生れ給ひぬ。男君ときゝ給ふに、かく忍びたることのあやにくにいちぢるき顔つさにてさしいて給へらむこそ苦しかるべけれ、女こそ何となくまされ、數多の人の見

ぬものなればやすけれとおぼすに、又かく心苦しきうたがひまじりたるにては心やすき方に物し給ふもいとよしかし、さてもあやしや、我が世と共に恐しと思ひし事のむくいなめり、この世にてかく思ひかけぬことにむかはりぬれば後の世の罪も少しかるみなむやとおぼす。人はたまらぬことなればかく心ことなる御はらにて末に出ておはしたるおぼえ、いみじかりなむと思ひいとなみ仕うまつる。御うぶやの儀式いかめしうおどろおどろし。御方々さまさまにまいて給ふ御うぶやしなひ、世のつねのをしきついかさね、たかつきなどのころばへも、殊更に心々いとましさ見えつゝなむ。五日の夜は中宮の御方よりこもちの御前のも女房の中にもまなまに思ひあてたるきはきは、おほやけごとと厳めしうせさせ給へり。御粥、とんじき五十具、所々の饗、院の下部、廳の召次所、なにかのくまゝていかめしうせさせ給へり。宮づかさ大夫よりはじめて院の殿上人みな参れり。七夜はうちよりそれもおほやけさまなり。致仕のおとどなど心殊に仕うまつり給ふべきに、この比は何事もおぼされておぼさうの御とぶらひのみぞありける。宮達上達部などあまた参り給ふ。大かたの氣色も世になきまでかしづき聞え給へどおとど御心のうちに心苦しとおぼすことありていたうももてはやし聞え給はず御あそびなどはなかりけり。宮はさばかりひわづなる御さまにていとむくつけうならはぬことの恐しう思されけるに、御ゆなども聞しめさず、身の心うきことをかゝるにつけてもおぼし入れば、さばれこの序にも死なばやとおぼす。おとどはいとよう人目をかざりおぼせど又むつかしげにおはするなどを、とりわきても見奉り給はずなどあ



れば、老いさらへる人などは「いでやあるかにも坐しますかな。珍しうさし出て給へる御有様のかばかりゆゝしきまでにおはしますを」とうつくしみ聞ゆれば、かた耳に聞き給ひてさのみこそはおぼし隔つることもまさらめと、怨めしう我が身つらくて尼にもなりなばやの御心つきぬ。よるなどもこなたには大殿籠らず、書つ方などをさしのぞき給ふ。「世の中のはかなきを見るまゝに行く末短かう物心ほそくて行ひがちになりにて侍れば、かゝる程のらうがはしき心ちするにより、得参りこぬを、いかゞ御心ちはさはやかにおぼしなりになりや。心苦しうこそ」とて御几帳のそばよりさし覗き給へり。御ぐしもたげ給ひて「猶えいきたるまじき心ちなむ侍るを、かゝる人は罪もおもかなり。尼になりてもしそれにやいきとまると試み又なくなるとも罪を失ふことにもやとなむ思ひ侍る」と常の御けはひよりはいとおとなびて聞え給ふを、「いとうたてゆゝしき御事なり。などてかさまではおぼす。かゝることはさのみこそおそろしかなれど、さてながらへぬわざならばこそはあらめ」と聞え給ふ。御心のうちには誠にさもおぼしよりてのたまは、さやうにて見奉らむは哀なりなむかし、かつ見つゝもことにふれて心おかれ給はむが心苦しう、我ながらもえ思ひなほすまじうらき事うち交りぬべきを、おのづからおろかに人の見咎むることもあらむがいといとほしう、院などの聞しめさむとも我がをこたりにのみこそはならめ、御惱みにことづけてさもやなし奉りてましなど覺しよれど、又いとあたらしう哀にかばかり遠きみぐしのおひささを、まかやつさむとも心苦しければ「猶つよくおぼしなれ。けまうはおはせじ。かぎりを見ゆる人

もたひらかなるためし近ければさすがにたのみある世になむなど聞え給ひて御湯まわり給ふ。いといたう青みやせてあさましうはかなげにて打ち臥し給へる御さまおほどきうつくしげなれば、いみじきあやまちありとも心弱く許しつべき御さまかなと見奉り給ふ。山のみかどは珍しき御事たひらかなりと聞し召して哀にゆかしうおもほすに、かく惱み給ふよしのみあれば、いかに物し給ふべきにかと御おこなひも亂れておぼしけり。さばかり弱り給へる人の物をさこしめさて日比經給へばいとたのもしげなくなり給ひて年比見奉らざりし程よりも院のいと戀しく覺え給ふを、またも見奉らずなりぬるにやといたうなき給ふ。かく聞え給ふさまさるべき人して傳へ奏せさせ給ひければ、いと堪へがたう悲しとおぼして、あるまじき事とはおぼし召しながら世にかくれて出てさせ給ふ。かねてさる御せうそこともなくて俄にかく渡りおはしまいたればあるじの院驚きかしくまり聞え給ふ。「世の中をかへりみすまじう思ひ侍りしかど、猶惑ひさめがたきものはこの道の間になむ侍りければ、行ひもけだいでもしおくれさきだつ道のだら理のまゝならで別れなばやがてこの恨もやかたみに残らむと、あぢきなさなさにこの世のそしりをばまらてかくものし侍り」と聞え給ふ。御かたちことにてなまめかしうなつかしきさまにうち忍びやつれ給ひてうるはしき御法服ならず、すみぞめの御姿、あらまほしう清らなるもうらやましく見奉り給ひ、例のまづ涙おとし給ふ。「わづらひ給ふ御さま殊なる御惱みにも侍らず、唯月比弱り給へる御有様に、はかばかしう物なども参らぬつもりにやかく物し給ふにこそ」など聞え給ふ。「かたはら痛きおまし

なれども」とて御帳の前に御褥まゐりて入れ奉り給ふ。宮をもとかう人々つくろひ聞えてゆかの志もにちろし奉る。御几帳少しおしやらせ給ひて「夜居の加持の僧などの心ちすれどまだげんつくばかりの行ひにもあらねばかたはら痛けれど唯覺束なく覺え給はむさまをさながら見給ふべきなり」とて御目おしのごはせ給ふ。宮もいと弱げにない給ひて「生くべうも覺え侍らぬをかくおはしましたる序に尼になさせ給ひてよ」と聞え給ふ。「さる御ほ意あらばいと尊きことなるをさすがに限らぬ命のほどにて行く末とほき人はかへりてことのみだれあり、世の人に誘らるゝやうありぬべきことになむ、猶憚りぬべき」などのたまはせておとこの君に「かくなむすゝみのたまふを、今はかぎりのさまならば片時のほどにてもそのたすけあるべきさまにてとなむ思ひ給ふる」とのたまへば「日比もかくなむのたまへど、さけなどの人の心たぶらかしてかゝる方にすゝむるやうも侍るなるをどとぎゝも入れ侍らぬなり」と聞え給ふ。「ものゝけの教へにてもそれにまけぬとて悪しかるべき事ならばこそはゝからめ。よわりになる人の限とて物し給はむことを聞きすぐさむは後のくい心苦しうや」とのたまふ。御心のうちにはかぎりなうしろやすくゆづり置きし御事をうけとり給ひてさしも志深からず、我が思ふやうにはあらぬ御氣色を事にふれつゝ、年比開しめしおほしつめけること色に出で、恨み聞え給ふべきことにもあらねば、世の人の思ひいはむ所も口惜しうおぼしわたるに、かゝる折にもてはなれなむも何かは人わらへに世を恨みたる氣色ならで、さもあらざらむ大かたのうしろみには猶頼まれぬべき御おきてなるを、唯預け置

き奉りしあるしには思ひなして、にくげに背くさまにはあらずとも、御そらぶんに廣くおも  
じろき宮給はり給へるを繕ひて住ませ奉らむ、わがおはします世にさる方にては後めたか  
らずさゝおき、又かのちとゞもさゝいふともいとおるかにはよも思ひ放ち給はじし、その心ばへ  
をも見はてむなどおもほしとりて、「さらばかく物したる序にいむことうけ給はむをだに結  
縁にせむかし」とのたまはず。おとゞの君うしとおぼす方も忘れてこはいかなるべき事ぞと  
悲しく口惜しければ得堪へ給はず、「うちに入りてなとかういく世しも侍るまじき身をふり  
捨て、かうはおぼしなりにけるぞ。猶もばし心をまづめ給ひて御湯まわり物などをまきこ  
しめせ。たふとき事なりとも御身弱うては行ひもま給ひてむや。かつはつくるひ給ひてこ  
そ」と聞え給へど頭ふりて、いとつらうのたまふとおぼしたり。つれなくてうらめしとおぼ  
すこともありけるにやと見奉り給ふにいとほしう哀なり。とかく聞えかへさひおぼしやす  
らふ程に夜明けがたになりぬ。かへり入らむに道も晝ははしたなかるべしといそがせたま  
ひて御いのりに侍ふ僧の中にやんごとなう尊き限召し入れて御ぐしおろさせ給ふ。いとさ  
かりに清らなる御ぐしをそぎすて、いむことうけ給ふ。さはふ悲しく口惜しければおとゞ  
はえ忍びあへ給はずいみじうない給ふ。院はたもとよりとりわきてやんごとなう人よりも  
すぐれて見奉らむとおぼし、を、この世にはかひなきやうになし奉るも飽かず悲しければ、  
うち志ほたれ給ひて「かくてもたひらかにて同じうはねんずをも勤め給へ」と聞えおき給  
ひて、明けはてぬに急ぎ出でさせ給ひぬ。宮は猶よわう消えいるやうにし給ひてはかばかし

うもを見奉らず物なども聞え給はず。おとども「夢のやうに思ひ給へ亂るゝ心まどひにかう昔覺えたるみゆきのかしこまりをもえ御覽せられぬらうがはしさは殊更に参り侍りて」など聞え給ふ。御送に人々参らせ給ふ。「世の中のけふかあすかに覺え侍りし程に、又来る人もなくてたゞよはむことの哀にさり難う覺え侍りしかば、御返意にはあらざりけめど、かく聞えつけて年比は心安く思ひ給へつるを、もしもいきとまり侍らばさまことにかはりて人繁き住まひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかへ離れたらむ有様も又さすがに心ほそかるべくや。さまにまたがひて猶おぼし放つまじくなむ」と聞え給へば、「更にかくまで仰せらるゝなむかへりて耻しう思ひ給へらるゝみだり心ち、とかく亂れ侍りて何事も得辨へ侍らず」とてげにいと堪へがたげにおぼしたり。後夜の御加持に御ものゝけ出て来て「かうぞあるよ。いとかしこう取りかへしつと一人をばおぼしたりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなむ日比侍らひつる。今は歸りなむにとてうち笑ふ。いとあさましう、さはこのものゝけのこゝにも離れざりけるにやあらむとおぼすに、いとほしう悔しうおぼさる。宮少しいき出て給ふやうなれど猶頼みかたげにのみ見え給ふ。侍ふ人々もいといふかひなく覺ゆれど、かうてもたひらかにだにおはしまさばと念じつゝ、みずほふまたのべてたゆみなく行はせなどよろづにせさせ給ふ。かの衛門督はかゝる御事を聞き給ふに、いと消え入るやうに去給ひてむげに頼む方すくなうなり給ひにたり。女宮の哀に覺えたまへばこゝに渡り給はむことは今更にかるがるしきやうにもあらむを、上もおとどもかくつ

とそひおはすればおのづからとりはづして、見奉り給ふやうもあらむに、味氣なしとおぼして「かの宮にとかくして今一度まうてむ」とのたまふを更に許し聞え給はず。誰にもこの宮の御事を聞えつけ給ふ。初より母御息所はをさをさ心ゆき給はざりしを、このおとこのぬたちねんごろに聞え給ひて志深かりしにまけ給ひて、院にもいかゞはせむとおぼし許しけるを、二品の宮の御事をおもほし亂れける序に、なかなかの宮は行くさきうしろやすくまめやかなるうしろみまうけ給へりとのたまはすと聞き給ひしをかたじけなく思ひ出づ。かくて見捨て奉りぬるなめりと思ふにつけてはさまざまにいとほしけれど、心より外なる命なれば堪へぬ契うらめしうて、おぼし歎かれむが心苦しきこと「御志ありてとぶらひ物せさせ給へ」と母上にも聞え給ふ。「いであなゆゝし。後れ奉りてはいくばく世にふべき御身とて、かうまで行くさきの事をばのたまふ」とて泣きにのみなき給へばえ聞えやり給はず、左大辨の君にぞ大方の事どもは委しう聞えつけ給ふ。心ばへのどかに善くおはしつる君なれば、弟の君達も又末々のわかきは親とのみ頼み聞え給へるに、かう心ぼそうのたまふを悲しと思はぬ人なく、殿のうちの人もなげく。おほやけもをしみ口をしがらせ給ふ。かくかざりと聞しめして俄に權大納言になさせ給へり。よろこびに思ひおこして今一たびも参り給ふやうもやあるとおぼしのたまはせけれど、更にえためらひやり給はで、苦しき中にもかしこまり申し給ふ。おとこのもかく重き御おぼえを見給ふにつけても、いよいよ悲しうあたらしとおぼし惑ふ。大將の君常にいと深う思ひ歎きとぶらひ聞え給ふ。御悦にもまづまうて給へり。この

おはする對のほとりこなたのみかどは馬車たちこみ人さわがしうさわぎみちたり。ことしとなりては起きあがる事もをさをさ給はねば重々しき御さまに亂れながらはえ對面し給はて思ひつゝ、弱りぬる事と思ふに口をしければ「猶こなたに入らせ給へ。いとらうがはしきさまに侍る罪はおのづからおぼし許されなむ」とて臥し給へる枕がみのかたに僧などおぼし出し給ひて入れ奉り給ふ。早うよりいさゝか隔て給ふことなくむつびかはし給ふ御中なれば別れむことの悲しく戀しかるべきなげき、おやはらからの御思ひにも劣らず。今日はよろこびとて心ちよげならましをと思ふにいと口惜しうかひなし。「などかくたのもしげなくはなり給ひにける。今日はかゝる御よろこびに聊すくよかにもやとこそ思ひ侍りつれ」とて、几帳のつまをひきあげ給へれば「いと口惜しうその人にもあらずなりにて侍りや」とて、ゑばうしばかりおし入れて、少し起きあがらむと志給へどいと苦しげなり。白きさぬども、懐しうなよゝかなるを數多かさねてふすまひさかけて臥し給へり。おましのあたり物清げにけはひかうばしう心にくゝぞすみなじ給へる。うちとけながら用意ありと見ゆ。重く煩ひたる人はおのづから髪ひげも亂れ物むづがしきけはひもそふ業なるを瘠せさらほひたるしもしよいよ老ろうあてはかなるけして、枕をそばたてゝ物など聞え給ふけはひいとよわげに息も絶えつゝ、あはれげなり。「久しう煩ひ給ふ程よりは殊にいたうもそこなはれ給はざりけり。常の御かたちよりもなかなかまさりてなむ見え給ふ」とのたまふものから涙おしのごひて「後れ先だつ隔なくとこそ契り聞えしがいみじうもあるかな。この御心ちのさ

まを何事にておもり給ふとだにえ聞きわき侍らず。かく親しきほどながら覺東なくのみな  
どのたまふに「心には重くなるけぢめも覺え侍らず。そこぞと苦しきこともなければたち  
まちにかうも思ひ給へざりし程に、月日も經てよわり侍りにければ、今はうつしごゝろも  
せたるやうになむをしげなき身をさまさまにひきとどめらるゝ。いのりぐわんなどのちか  
らにや、さすがにかゝづらふもなかなか苦しう侍れば心もてなむ急ぎたつ心ちの志侍る。さ  
らばこの世のわかれざりがたきことはいと多うなむ。親にも仕うまつりさして今更に御心  
どもを惱まし、君に仕うまつる事もなかばの程にて身をかへりみるかたはたましてはかば  
かしからぬ恨をとどめつる大方の歎きをばさるものにて又心のうちに思ひ給へ亂るゝこと  
の侍るを、かゝるいまはのささみにて何かは漏すべきと思ひ侍れど、獨忍びがたきことを誰  
にかはうれへ侍らむ。これかれ數多ものすれどさまさまなることにて更にかすめ侍らむも  
あいなしかし。六條院にいさゝかなる事のたがひめありて月比心のうちにかしこまり申す  
ことなむ侍りしを、いとほ意なう世の中心ほそ思ひなりて病ひづきぬとおぼえ侍りしに、  
めしありて院の御賀のがくそのこゝろみの日まゐりて御氣色を給はりしに、猶ゆるされぬ  
御心ばへあるさまに御まゑりを見奉り侍りて、いとゞ世にながらへむこともはゞかり多う  
覺えなり侍りてあぢさなう思ひ給へしに心のさわぎをめて、かくまづまらずなり侍りぬる  
になむ、人かすにはおぼし入れざりけめど、いはけなう侍りし時より深く頼み申す心の侍り  
しを、いかなるさうげんなどのありけるにかと、これなむこの世のうれへにて残り侍りけ



れば、ろなうかの後の世のさまたげにもやと思ひ給ふるを、事のついで侍らば御耳とてめてよろしうあきらめ申させ給へ。なからむうしろにもこのかうじ許されたらむなむ御徳に侍るべき」などのたまふまゝに、いと苦しげにのみ見えまさればいみじうて、心の中に思ひ合する事どもあれどもさしてたしかにはえしも推しはからず、「いかなる御心の鬼にかは。更にさやうなる御氣色もなく、かくおもひ給へる由をも聞き驚き歎き給ふ事がざりなうこそ口をしがり申し給ふめりしか。などかくおぼす事あるにては今まで隔てのこい給ひつらむ。こなたかなたあきらめ申すべかりけるものを、今はいふかひなしや」ととりかへさまほしく悲しくおぼさる。「げにいさゝかも隙ありつるをりに聞えうけ給はるべうこそ侍りけれ。されどいとかう今日明日としもやはと、みづからながらまらぬ命のほどを思ひのどめ侍りけるもはかなくなむ。この事は更に御心よりもらし給ふまじ。さるべき序侍らむ折には御用意くはへ給へとて聞えおくになむ。一條に物し給ふ宮ことにふれてとぶらひ聞え給へ。心苦しきさまにて院などにも聞しめされ給はむをつくろひ給へ」などのたまふ。いはまほしき事は多かるべけれど心ちせむ方なくなりければ、出でさせ給ひねと手かき聞え給ふ。加持まゐる僧ども近う参り、上おとどなどおはし集まりて人々も立ちさわげば、なくなき出で給ひぬ。女御をば更にも聞えずこの大將の御方などもいみじう歎き給ふ。心おきてのあまねく人のこのかみ心に物し給ひければ、右の大殿の北の方もこの君をのみぞむつまじきものに思ひ聞え給ひければ、よろづ思ひなげき給ひて御いのりなどとりわきてせさせ給ひけれ

ど、やむくすりならねばかひなきわざになむありける。女宮にも遂にえ對面し聞え給はであ  
わの消えいるやうにてうせ給ひぬ。年比またの心こそねんごろに深くもなかりしか、大かた  
にはいとあらまほしくもてなしかしづき聞えてけなつかしう心ばへをかしううちとけぬさ  
まにてすぐい給ひければつらきふしもことになし。唯かく短かりける御身にてあやしくな  
べての世すさまじく思ひたまふなりけりと思ひ出でたまふに、いみじうておぼし入りたる  
さまいと心ぐるし。御息所もいみじう人わらへに口惜しと見奉り歎き給ふ事かぎりなし。  
おとゞ北の方などはましていはむかたなく、われこそさきだゝめ、世のことわりなうつらい  
ことゝ、こがれ給へど何のかひなし。尼宮はおほけなき心もうたてのみ覺されて世になが  
れとしもおぼさゞりしを、かくなど聞き給ふはさすがにいと哀なりかし。若君の御ことをさ  
ぞと思ひたりしもげにかゝるべき契にてや、思の外に心うき事もありけむとおぼしよるに  
さまさま物心ぼそうて打ちなかれ給ひぬ。三月になれば空の氣色も物うらゝかにてこの君  
いかの程になり給ひていとまろう美しくしう、程よりはおよすげて物語など志給ふ。おとゞわ  
たり給ひて「御心ちはさはやかになり給ひにたりや。いでやいとかひなくも侍るかな。例の  
御ありさまにてかく見なし奉らましかばいかに嬉しう侍らまし。心うくおぼしすてけるこ  
と」と涙ぐみて恨み聞え給ふ。日々に渡り給ひて今しもやんごとなく限なきさまにもてな  
し聞え給ふ。御いかにもちひ參らせ給はむとて、かたち殊なる御さまを人々「いかに」など聞  
えやすらへど、院わたらせ給ひて「何か女に物し給はゞこそ同じすぢにていまいましくもあ

らめ」とて南面にちひさきおましなどよそひて参らせ給ふ。御乳母いと花やかにさうぞきて御前の物いろいろにつくしたるこものひわりごの心ばへどもを内にもとももとの心をまらぬことなればとりちらし何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりやとおぼす。宮もおき居給ひてみぐしのすゑの所せうひろごりたるをいと苦しとおぼして、ひたひなどなてつけておはするに、几張をひきやりて居給へばいと耻しうてそむき給へるいとちひさうほそり給ひて御ぐしはをしみ聞えて長うそぎたりければうしろはことにけぢめも見え給はぬ程なり。すぎすぎ見ゆるにび色の御ども黄がちなる今やう色など着給ひて、まだありつかぬ御かたはらめかくてもうつくしき子どもの心ちしてなまめかしうをかしげなり。「いであな心う。墨染こそ猶いとうたて目もくるゝ色なりけれ。かやうにても見奉ることはたゆまじきぞかしと思ひ慰め侍れど、ふりがたうわりなき心ちする涙の人わろさを、いとから思ひすてられ奉る身のとがに思ひなすも、さまざまに胸いたう口惜しうなむ。取り返すものにもがなや」と打ち歎き給ひて「今はとて覺しはなれば、誠に御心といとひすて給ひけると耻しう心うくなむ覺ゆべき。猶哀とおぼせ」と聞え給へば「かゝるさまの人は物の哀もあらぬものときゝしを、ましてもとより知らぬ事にていかゞは聞ゆべからむ」とのたまへば「かひなのことや。おぼしまる方もあらむものを」とばかりのたまひさして若君を見奉り給ふ。御乳母たちはやんごとなくめやすき限數多きぶらふ。召しいて、仕らまつるべき心おきてなどの給ふ。「哀のこりすくなき世におひ出のべき人にこそ」とて抱きとり給へばいと心安く

うちゑみてつぶつと肥えて白ううつくし。大將などの御ちごおひほのかにおぼし出づるには似給はず、女御の宮たちはた父みかどの御かたさまにわうげづきて氣高うこそおはしませ、殊にすぐれてめてたうしもおはせず。この君いとあてなるにそへてあいぎやうづきまみのかをりてゑみがちなるなどをいと哀と見給ふ。思ひなしにや猶いとようおぼえたりかし。只今ながらまなこのどかに耻かしきさまもやうはなれてかをりをかしき顔さまなり。宮はさしもおぼしわかず人はた更に老らぬことなれば唯一所の御心のうちにのみぞ哀はかなかりける人の契かなと見給ふに、大方の世のさだめなさもおぼし續けられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日はこといみすべき日をとおしのごひ隠し給ひて「老づかに思ひて嘆くに堪へたり」とうちぢ給ふ。五十八を十とりすてたる御齡なれど末になりぬる心ら老給ひていと物哀におぼさる。なんぢが父にとも諫めまほしうおぼしけむかし。この事の心老れる人女房の中にもあらむかし、老らぬこそねたけれ、をこなりと見るらむと安からずおぼせど我が御咎めあるとはあへなむ、ふたついはむには女の御爲こそいとほしけれなどおぼして、色にもいだし給はず、いと何心なう物語して笑ひ給へるまみ口つきのうつくしきも心老らざらむ人はいかゞあらむ。猶いとよく似通ひたりけりと見給ふに、親たちの子だにあれかしとなし給ふらむにもえ見せず。人老れずはかなきかたみばかりをとどめ置きてさばかり思ひあがりおよすげたりし身を心もてうしなひつるよと、哀にをしければめざましと思ふ心もひさかへしうちなかれ給ひぬ。人々すべり隠れたる程に宮の御許により給ひて「この人

をばいかゞ見給ふや。かゝる人を捨て、背きはて給ひぬべき世にやありける。あな心う」と  
おどろかし聞え給へば顔うち赤めておはす。

「たが世にかたねはまきしと人とはいかゞ岩根の松はこたへむ。哀なり」など忍びて聞  
え給ふに、いらへもなうてひれふし給へり。ことわりとおほせばきひても聞え給はず、いか  
におほすらむ、物深うなどはおはせねど、いかでかはたゞにはと推し量り聞え給ふもいと心  
苦しうなむ。大將の君はかの心にあまりてほのめかし出でたりしを、いかなる事にかありけ  
む、少し物覺えたるさまならましかばさばかりうち出でそめたりしに、いとよう氣色を見て  
ましを、いふかひなきとぢめにてをりあしういぶせうあはれにもありしかなど、面影忘れが  
たくてはらからの君達よりもまひて悲しと覺え給ひけり。女宮のかく世を背き給へる有様  
おどろおどろしきなやみにもあらですかやかにおほし立ちける程よ、又さりとも許し聞え  
給ふべきことかは、二條のうへのさばかり限にてなくなく申し給ふと聞きしを、いみじきこ  
とにおほして遂にかくかけとぢめ奉り給へるものをなど、取り集めて思ひくなくに、猶昔よ  
り絶えず見ゆる心ばへえ忍ばぬ折々もありきかし、いとようもてまづめたるうはべは人よ  
りけに用意あり、のどかに何事をこの人の心の中に思ふらむと、見る人も苦しきまでありし  
かど、少しよわき所つきてなよび過ぎたりしけぞかし、いみじくともさるまじき事に心をみ  
だり、かくしも身にかふべき事にやありける、人の爲にもいとほしう我が身はたいたづら  
にやなすべき、さるべき昔の契といひながらいとかるがるしう味氣なきことなりかしなど

心ひとつに思へど、女君にだに聞え出て給はず、さるべきついでなうて院にもまた聞え出て給はざりけり。さるはかゝる事をなむかすめしと申し出で、御氣色も見まほまかりけり。父おとゞ母北の方は涙のいとまなくおぼしまづみて、はかなく過ぐる日數をもまり給はず、御わざの法服御さうぞく、なにくれの急ぎをも君達御方々とりどりになむせさせ給ひける。經佛のおきてなども左大辨の君せさせ給ふ。七日七日の御ずきやうなども人の聞えおどろかすにも「われになきかせそ。かくいみじと思ひ惑ふに、なかなか道さまたげにもこそ」とてなきやうに覺しほれたり。一條の宮にはまして覺束なくて別れ給ひにし恨さへそへて、日比ふるまゝに廣き宮のうち人げすくなう心ぼそげにて、親しく使ひならし給ひし人は猶參りとぶらひきこゆ。好み給ひし鷹、馬などその方のあづかりども、皆つく所なう思ひうんじてかすかに出入を見給ふも、ことにふれて哀はつきぬものになむありける。もてつかひ給ひし御調度ども、常にひき給ひし琵琶和琴などの緒もとりはなちやつされて音を立てぬもいとらもれいたきわざなりや。御前の木立いたうけぶりて花は時を忘れぬ氣色なるを詠めつゝものがなしく、侍ふ人々もにび色にやつれつゝ寂しう徒然なる晝つ方、さき華やかに追ふ音してこゝにとまりぬる人あり。「あはれ故殿の御けはひとこそうち忘れて思ひつれ」とて泣くもあり。大將殿のおはしたるなりけり。御せうそこ聞えいれ給へり。例の辨の君、宰相などのおはしたるとおぼしつるをいとはづかしげに清らなる御もてなしにて入り給へり。もやの廂におましよそひて入れ奉る。おしなべたるやうに人々のあへまらひ聞えむはかたじけ

なきさまの志給へれば御息所ぞたいめし給へる。いみじきことを思ひ給へ歎く心はさるべき人々にも越えて侍れど限あれば聞えさせやる方なうて世の常になり侍りにけり。いまはの程にもものたまひ置く事侍りしかばおろかならずなむ。誰もものどめ難き世なれば、後れ先だつ程のけぢめには思ひ給へ及ばむにまたがひて深き心の程をも御覽せられにしがなとなむ。神わざなどまげき比ほひ私の志にまかせて、つくづくと籠り居侍らむも、例ならぬ事なりければ立ちながらはたなかなかに飽かず思ひ給へらるべうてなむ日比はすぐし侍りにける。おとどなどの心を亂り給ふさま見聞き侍るにつけても親子の道のやみをばさるものにて、かゝる御中らひの深く思ひとゞめ給ひけむ程を推し量り聞えさするにいと盡きせずなむ」とてまばまばおしのごひ鼻打ちかみ給ふ。あざやかに氣高きものから懐しうなまめいたり。御息所も鼻聲になり給ひて「哀なるとはその常なき世のさがにこそは、いみじとても又類ひなき事にやはと、年積りぬる人はまひて心づようさまし侍るを、更におぼし入りたるさまのいとゆゑしきまでまばしも立ち後れ給ふまじきやうに見え侍れば、すべていと心うかりける身の今までながらへ侍りてかくかたがたにはかななき世の末の有様を見給へすぐすべきにやといとまづ心なくなむ。おのづから近き御なからひにて聞き及ばせ給ふやうも侍りけむ。初めつかたよりをさをさうけひき聞えざりし御ことを、おとどの御心むけも心苦しう院にもよろしきやうにおぼしゆるいたる御氣色などの侍りしかば、更にみづからの心おきての及ばぬなりけりと思ひ給へなしてなむ見奉りつるを、かく夢のやうなることを見給ふ

るに思ひ給へあはずれば、みづからの心の程なむ同じうは強うもあらがひ聞えましをと思ひ侍るに猶いとくやしう、それもかやうにしも思ひより侍らざりきかし。御子達はおぼろげの事ならず、悪しくも善くも、かやうに世づき給ふことはえ心にくからぬことなりとふるめき心には思ひ侍りしを、いづかたにもよらず中空にうき御すくせなりければ、何かはかゝる序にけぶりにも紛れ給ひなむは、この御身のため人ぎゝなどは殊に口をしかるまじけれど、さりとても志かすかやかにえ思ひまづむまじう悲しう見奉り侍るに、いと嬉しう淺からぬ御とぶらひの度々になり侍るめるを、ありがたうもと聞え侍るも、さらばかの御契ありけるにこそはと思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど、今はとてこれかれにつげおき給ひける御ゆるごんの哀なるになむ。憂きにも嬉しきせは交り侍りけり」とていといたうない給ふけはひなり。大將もとみにえためらひ給はず「怪しういとこよなくおよすげ給へりし人の、かゝるべうてや、この二三年のこなたなむいたうまめりて物心細げに見え給ひしかば、あまり世のことわりを思ひまり物深うなりぬる人のすみすぎてかゝるためし心うつくしからず、かへりてはあざやかなる方のおぼえうすらぐものなりとなむ、常にはかばかしからぬ心に諫め聞えしかば心あさしと思ひ給へりし、萬よりも人にまさりてげにかのおぼし歎くらむ御心のうちのかたじけなけれど。いと心苦しうも侍るかな」など懐しうこまやかに聞え給ひて、やゝ程経てぞ出て給ふ。かの君は五六年の程のこのかみなりしかど猶いと若やかになまめきあいだれて物し給ひし。これはいとすくよかに重々しく雄々しきけはひ



して顔のみぞいと若う清らなること人にすぐれ給へる。若き人々は物悲しさも少し紛れて見出し奉る。御前近き櫻のいとおもしろきを今年ばかりはとうち覺ゆるもいまいましさすぢなりければ「あひ見むことは」と口ずさびて、

「時しあればかはらぬ色に匂ひけりかたえ枯れにし宿の櫻も」。わざとならず誦じなして立ち給ふに、いととう、

「この春は柳のめにぞ玉はぬくささちる花のゆくへまらねば」と聞え給ふ。いと深きよしにはあらねど今めかしうかどありとはいはれ給ひし更衣なりけり。げにめやすき程の用意なりけりと見給ふ。致仕の大殿にやがて参り給へれば君達あまた物し給ひて「こなたに入らせ給へ」とあれば、おとこの御いでのかたに入り給へり。ためらひて對面せ給へり。ふりがとう清げなる御かたちいたう瘠せ衰へて御髭などもとりつくろひ給はねば、まげりて親のけうよりもげにやつれ給へり。見奉り給ふよりいと忍びがたければあまりにをさまらず亂れ落つる涙こそはしたなけれと思へばせめてぞかくし給ふ。おとこのもとりわきて御中よく物し給ひしと見給ふに、たゞふりに降り落ちてえとゞめ給はず、つきせぬ御事どもを聞えかはし給ふ。一條の宮にまうでたりつる有様など聞え給ふ。いとゞしく春雨かと思ゆるまで軒の雫にことならずぬらしそへ給ふ。たゞうがみにかの柳のめにぞとありつるをかい給へるを奉り給へば目も見えずやとおしまぼりつゝ見給ふ。うちひそみつゝ見給ふ御さま例は心強うあざやかにほこりかなる御氣色名残なく人わろし。さるは殊なることなかめれど、こ

の玉はぬくとあるふしのげにとおぼさるゝに心亂れて久しうえためらひ給はず。「君の御母君のかくれ給へりし秋なむ、世に悲しきことのきはには覺え侍りしを、女は限ありて見る人すくなうとあるともかゝることもあらはならねば、かなしびもかくろへてなむありける。はかばかしからねどおぼやけも捨て給はずやうやう人となりつかさくらゐにつけてあひ頼む人々おのづから次々に多うなりなどして、驚き口惜しがるるゐにふれてあるべし。かう深き思ひはその大方の世のおぼえもつかさ位もおもほえず、唯ことなることなかりしみづからのありさまのみこそ堪へがたく戀しかりけれ、何ばかりの事にてかは思ひさますべからむ」と、空を仰ぎてながめ給ふ。夕暮の雲の氣色にび色にかすみて花の散りたる梢どもをも今日ぞ目とゞめ給ふ。この御たゝらがみに、

「木のまたの年ぬれてさかさまにかすみの衣きたる春かな」。大將の君、

「なき人もおもはざりけむうちすてゝ夕のかすみ君きたれとは」。辨の君、

「うらめしや霞のころも誰着よと春よりさきに花の散りけむ」。御わざなど世の常ならずいかめしうなむありける。大將殿の北の方をばさるものにて、殿は心ことにずきやうなども哀に深き心ばへを加へ給ふ。かの一條の宮にも常にとぶらひ聞え給ふ。卯月ばかりの空はそこはかとなう心ちよげにひとつ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、物思ふ宿は萬の事につけてまづかに心ぼそくくらしかね給ふに例の渡り給へる。庭もやうやう青み出づる若草見えわたり此處彼處のすなごうすき物のかくれのかたに蓬も所えがほなり。前栽に

心いれてつくろひ給ひしも心に任せてまげりあひひとむら薄もたのもしげにひろごりて蟲の音をむ秋思ひやらるゝより、いと物哀に露けてわけ入り給ふ。伊豫籠かけわたしてにびいろの几帳の衣がへしたるすきかげ涼しげに見えて、よきわらはのこまやかににばめるかざみのつま頭つきなどほの見えたり。をかしけれど猶目驚かるゝ色なりかし。今日はすのこに居給へばまねさし出でたり。いとかるらかなるおましなりとて、例の御息所驚かし聞ゆれど、この比なやましとてよりふし給へりとかく聞え紛はす程、御前のこだちども思ふことなげなる氣色を見給ふもいと物哀なり。柏木と楓との物よりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを、「いかなるちぎりにか。末あへるたのもしさよ」などの給ひて忍びやかにさしよりて、

「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと。御籠のとのへだてあるほどこそうらめしけれ」とてなげしにより居給へり。なよびすがたはたいといたうたをやぎけるをやとこれかれつきまろふ。このあへまらへ聞ゆる少將の君といふ人して、

「柏木にはもりの神はまさずとも人ならずべき宿の木末か」。「うちつけなる御言の葉になむ浅う思ひ給へなりぬる」と聞ゆれば、げにとおぼすに少しほゝゑみ給ひぬ。御息所少しぬざり出で給ふけはひすればやをらゐなほり給ひぬ。「うき世の中を思ひ給へまづむ月日のつもるけぢめにや、みだり心ちもあやしうほれぼれしうてすぐし侍るを、かく度々かさねさせ給ふ御とぶらひのいとかたじけなきに、思ひ給へおこしてなむ」とて、げに惱ましげなる

御けはひなり。「思ほしなげくは世のことわりなれど、又いとさのみはいかぢ。萬の事さるべきにこそは侍るめれ。さすがにかぎりある世になむ」となぐさめ聞え給ふ。この宮こそきしよりは心のおく見え給へ、哀げにいかにも人わらはれなることをとりそへておぼすらむと思ふもたゞならねば、いたう心とゞめて御有様も問ひ聞え給ひけり。かたちぞいとまほにはえ物し給ふまじけれど、いと見苦しうかたはらいたき程にだにあらずは、などて見るめにより人をもおもひあき又さるまじき心をも惑はすべきぞ、さまあしや、唯心ばせのみこそいひもてゆかむにはやんごとなかるべけれとおぼす。「今は猶昔におもほしなずらへて疎からずもてなさせ給へ」など、わざとけさうびてはあらねどねんごろに氣色ばみて聞え給ふ。直衣姿いとあざやかにてたけだちものしうそじろかにぞ見え給ひける。かのおとゞは萬の事なつかしうなまめき、あてに愛敬づき給へることのならびなきなり。これはを、まう華やかにあなきよらとふと見えたまふ。「にほひぞ人に似ぬや」とうちさゝめきて、「同じうはかやうにても出で入り給はましかば」など人々いふめり。「いうしやうぐんがつかに草はじめてあをし」とうち口ずさひて、それもいと近き世のことなれどさまざま近う遠う心みだるやうなりし世の中に高さも降れるもをしみあたらしがらぬはなきもうべうべしき方をばさるものにて怪しう情をたてたる人にぞ物し給ひければ、さしもあるまじきおほやけ人女房などの年ふるめきたるどもさへ戀ひかなしび聞ゆる。ましてうへには御遊などの折ごとさまづおぼし出でゝなむまのばせ給ひける。あはれ衛門督のといふことくさ、何事につけて

もいはぬ人なし。六條院にはまして哀とおぼし出づること月日にそへておほかり。この若君を御心ひとつにはかたみと見なし給へど、人の思ひよらぬことなればいとかひなし。秋つかたになればこの君ははひゐざりなど。

## 横 笛

故權大納言のはかなくらせ給ひにし悲しさを飽かず口をしきものに戀ひ忍び給ふ人おほかり。六條院にも大かたにつけてだに世にめやすき人のなくなるをば惜み給ふ御心に、ましてこれは朝夕またしく参り馴れつゝ人よりも御心留めおぼしたりしかば、いかにぞやおぼし出づることはありながら、あはれはおほく折々につけて忍び給ふ。御はてにもず經などとりわきさせ給ふ。よろづもおぼし給ひていはけなき御有様を見給ふにも、さすがにいみじく哀なれば御心のうちにまた心ざし給ひてこがね百兩をなむべちにせさせ給ひける。おとゞは心もおぼしめてぞかして喜び聞えさせ給ふ。大將の君もことごとくおぼくしたまふ。とりもちてねんごろに營み給ふ。かの一條の宮をもこの程の御志深くとぶらひ聞え給ふ。はらからの君達よりもまさりたる御心の程をいとかくは思ひ聞えざりきとおとゞうへも喜び聞え給ふ。なき跡にも世の覺えおもくものし給ひける程の見ゆるに、いみじうあたらしうのみおぼしこがるゝとつきせず。山のみかどは二の宮もかく人わらはれなるやうにてながめ給ふな

り。入道の宮もこの世の人めかしきかたはかけはなれ給ひぬれば、さまざまに飽かずおぼさるれど、すべてこの世をおぼしなやまじと忍び給ふ。御おこなひの程にも同じ道をこそはつとめ給ふらめなどおぼしやりて、かゝるさまになり給ひて後ははかなき事につけても絶えず聞え給ふ。御寺のかたはら近き林にぬき出でたるたかうな、そのわたりの山にほれるところなどの山里につけてはあはれなれば奉れ給ふとて、御文こまやかなるはしに「春の野山霞もたどたどしけれど、志深く堀り出させて侍るゑるしばかりになむ、

世をわかれ入りなむ道はおくるともおなじ所を君もたづねよ。いとかたきわざになむある」と聞え給へるを涙ぐみて見給ふほどに、おとゞの君わたり給へり。れいならず御前近きらいしどもをなぞあやしと御覽するに院の御文なりけり。見給へばいと哀なり。けふかあすかの心ちするを對面の心になはぬことなど、こまやかに書かせ給へり。このおなじ所の御ともなひを殊にをかしきふしもなきひじりごとばなれどげにさぞおぼすらむかし。われさへおろかなるさまに見え奉りて、いとゞ後めたき御思ひのそふべかめるを、いといとほしとおぼす。御返りつゝましげに書き給ひて御使には青にびの綾一かさね賜ふ。書きかへ給へりけるかみの御几帳のそばよりほの見ゆるをとりて見給へば、御手はいとはかなげにて、「うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそいれ」。うしろめたげなる御氣色なるに「このあらぬ所もとめ給へるいとうたて心うし」と聞え給ふ。今はまほにも見え奉り給はず、いとうつくしうらうたげたる御ひたひがみつらつきのをかしさ、唯ちごのや

うに見え給ひていみじうらうたきを見奉り給ふにつけては、などかうはなりにしことぞと  
罪えぬべくおぼさるれば、御几帳ばかり隔て、又いとこよなうけどほくうとうとしうはあ  
らぬ程にもてなし聞えてぞおはしける。若君は乳母の許にねたまへりける、起きてはひ出  
給ひて御袖をひきまつはれ奉り給ふさまいとうつくし。白きうすものにからの小紋の紅梅  
の御ぞの裾、いと長くまどけなげにひきやられて御身はいとあらはにてうしろのかざりに  
着なし給へるさまは、例のとなれどいとらうたげにまろくそびやかに柳をけづりてつくり  
たらむやうなり。かしらは露草して殊更に色どりたらむ心ちして口つきうつくしうにほひ、  
まみのびらかに耻しうかをりたるなどは猶いとよく思ひ出でらるれど、かれはいとかやう  
にきははなれたる清らはなかりしものをいかでかゝらむ。宮にも似奉らず今より氣高くも  
ものしうさまことに見え給へる氣色などは、我が御かゞみのかげにも似げなからず見な  
され給ふ。僅に歩みなどま給ふ程なり、このたかうなのらいしになにともまらず立ちよりて  
いとあわたゞしうとりちらしてくひかなぐりなどまたまへば「あならうがはしや。いとふび  
んなり。かれとりかくせ。くひものに目とゞめ給ふと物いひさがなき女房もこそいひなせ」  
とて笑ひ給ふ。かきいだき給ひて「この君のまみのいと氣色あるかな。ちひさきほどのちご  
を數多見ねばにやあらむ、かばかりの程は唯いはけなきものとのみ見しを、今よりいとけは  
ひことなるこそ煩はしけれ。女宮ものし給ふめるあたりにかゝる人おひ出で、心苦しきこ  
とたがためにもありなむかし。あはれそのおのおの、おひゆく末までは見もはてむとすら

むやは、花の盛はありなめど」とうちまもり聞え給ふ。「うたてゆゝしき御ことにも」と人々はきこゆ。御齒のちひ出づるにくひあてむとて、たかうなをつとにきりもちてまづくもよゝとくひぬらし給へば、「いとねぢけたる色ごのみかな」とて、

「うきふしも忘れずながらくれ竹のこはすてがたきものにぞありける」とゐてはなちてのたまひかくれどうち笑ひて何とも思ひたらず、いとそゝかしうはひおりさわぎ給ふ。月日にそへてこの君のうつくしうゆゝしきまでおひまさり給ふに、誠にこのうきふし皆おぼし忘れぬべし。この人のいでものし給ふべき契にてさる思の外の事もあるにこそはありけめ、遁れがたかなるわざどかすと少しはおぼしなほさる。みづからの御すくせも猶飽かぬことおほかり。數多つどへ給へる中にもこの宮こそはかたほなる思ひまじらず、人の御有様も思ふにあかぬ所なくともものし給ふべきを、かく思はざりしさまにて見奉ること、おぼすにつけてなむ、過ぎにし罪ゆるしがたく猶くちをしかりける。大將の君はかの今はのとぢめにとぢめしひとことを心ひとつに思ひ出でつゝ、いかなりしとぞとはいとまほしう、御氣色もゆかしきを、ほの心えて思ひよらるゝこともあれば、なかなかうち出で聞えむもかたはらいたくて、いかならむついでにこの事の委しき有様もあきらめ又かの人の思ひ入りたりしさまをも聞しめさせむと思ひわたり給ふ。秋の夕の物哀なるに一條の宮を思ひやり聞え給ひてわたり給へり。うちとけまめやかに御琴どもなどひき給ふ程なるべし。深くもえとりやらで、やがてそのみなみの廂にいれ奉りたまへり。端つかたなりつる人のぬざり入りつ



るけはひどもあるく、きぬのおとなひも大方のほひかうばしく心にくきほどなり。例の御息所對面し給ひて昔の物語ども聞えかはし給ふ。わが御との、明暮人まげく物さわがしく幼き君達などすだきあわて給ふにならひ給ひていと靜に物あはれなり。うちあれたる心ちすれどあてにけだかくすみなし給ひてせんざいの花ども蟲の音まげき野邊とみだれたるゆふばえを見わたし給ふ。わごんをひきよせ給へればりちにまらべられていとよく彈きならしたる、ひとがにまみてなつかしうおぼゆ。かやうなるあたりと思ひのまゝなるすき心ある人はまづむることなくて、さま悪しきけはひをもあらはし、さるまじき名をもたつるぞかしなど思ひ續けつゝ搔きならし給ふ。故君の常にひき給ひしことなりけり、をかしき手ひとつなどすこしひき給ひて「衰いと珍らかなるねにかきならし給ひしはや。この御ことにもこもりて侍らむかし。承りあらはしてしがな」との給へば「このをたえにし後より昔の御わらはあそびの名残をだに思ひ出て給はずなむなりにて侍るめる。院の御前にて女宮たちのとりの御こととも試みさこえ給ひしにもかやうの方はおぼめかしからず物し給ふとなむ定め聞え給ふめりしを、あらぬさまにほれほれしうなりてながめすぐし給ふめれば、世のうきつまにといふやうになむ見給ふる」と聞え給へば「いとことわりの御おもひなりや。かざりだにある」と打ちながめて琴はおしやり給へれば「かれなほさらば聲に傳はることもやと聞きわくばかりならさせ給へ。物むつかじう思ふ給へ沈める耳をだにあきらめ侍らむ」と聞え給ふを「まかつたはるなかのをはことにこそ侍らめ。それをこそ承らむと聞えつれ」とて

御簾のもと近くおしよせたまへど頼にしもうけひき給ふまじきことなればまひても聞え給はず。月さし出でて曇りなき空に羽根うちかはす雁がねもつらをはなれぬ、うらやましく聞き給ふらむかし。風のはだ寒く物哀なるにさとはれて箏の琴をいとほのかに掻き鳴し給へるもおくふかき聲なるにいと心とまりはてなかなかにもおもほゆれば、琵琶をとりよせていとなつかしきねに想夫戀をひき給ふ。「思ひおよびがほなるはかたはらいたけれど、これはことゝはせ給ふべくや」とてせちにすのうちをそゝのかし聞え給へどましてつゝまじきさしいらへなれば、宮は唯物のみあはれとおぼしつゝけたるに、

「ことに出で、いはぬをいふにまさるとは人にはぢたる氣色をぞみる」と聞え給ふにたゞすゑつかたをいさゝかひき給ふ。

「ふかき夜の哀ばかりはきゝわけごとことよりほかにえやはいひける」。他かずをかきさほどに、さるおほどかなる物のねがらに深き人の心煮めてひき傳へたる、おなじまらべの物といへど哀に心すごきものゝかたはしをかきならして止み給ひぬればうらめしきまでおぼゆれど「すきすきしさをさまたまにひき出で、も御覽せられぬるかな。秋の夜ふかし侍らむも昔のとがめやとはゝかりてなむ罷て侍りぬべかめる。又殊更に心してなむさぶらふべきをこの御琴どものまらべがへずまたせ給はむや、引き違ふことも侍りぬべき世なれば後めたくこそ」などまほにはあらねど打ちにほはしおきて出て給ふ。「今宵の御すきには人ゆるし聞えつべくなむありける。そこはかとなさいにしへがたりにのみまぎらはさせ給ひて、玉

のをにせむ心ちも志侍らぬ、残りおほくなむ」とて、御贈物に笛をそへて奉れ給ふ。「これになむ誠にふるきことも傳はるべく聞きおき侍りしを、かゝる蓬生にうづもるゝも哀に見給ふるを、御さきにさほはむ聲なむよそながらもいぶかしく侍る」と聞え給へば「似つかはしからぬ隨身にこそ侍るべけれ」とて見給ふに、これもげに世と共に身にそへてもあそびつゝ、みづからも、更にこれが音のかぎりはえ吹きとほさず、思はむ人にかで傳へてしがなと折々聞えごち給ひしを思ひ出て給ふに今少しあはれおほくそひて試に吹きならす。はん志きでうのなからばかり吹きさして「昔を忍ぶひとりごととはさても罪ゆるされ侍りけり。こればまばゆくなむ」とて出て給ふに、

「露まげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ蟲のこゑかな」ときこえいだし給へり。「横笛のまらべはことにかはらぬを空しくなりしねこそつきせね」。いでがてにやすらひ給ふに夜もいたく更けにけり。殿にかへりたまへれば格子などおろさせて皆寝給ひにけり。この宮に心かけ聞え給ひてかくねんごろがり聞え給ふぞなど人の聞えまらせければ、かやうに夜ふかし給ふもなまにくくて入り給ふをもきくきく寝たるやうにて物し給ふなるべし。「いもと我といさの山の」と聲はいとをかしてひとりごち謡ひて「こはなぞかくさしかためたる。あなうもれや、今夜の月を見ぬ里もありけり」とうめき給ふ。格子あげさせ給うて御簾まさあげなどし給ひて端近く臥し給へり。「かゝる夜の月に心やすく夢みる人はあるものか。少し出て給へ。あな心うなど聞え給へど心やましう打ち思ひて聞き忍び給ふ。君

達のいはけなくねをびれたるけはひなどこゝかしこにうちして女房もさしこみて臥したる、ひとげもにぎはしきにありつる所の有様思ひあはするにちほくかはりたり。この笛をうち吹き給ひつゝいかに名残もながめ給ふらむ、御琴どもはまらべ變らず遊び給ふらむかし、御息所も和琴の上手ぞかしなど思ひやりてふし給へり。いかなれば故君の唯大方の心ばへはやんごとなくもてなし聞えながらいと深き氣色なかりけむと、それにつけてもいといぶかしう覺ゆ。見おとりせむことこそいとほしかるべけれ、大方の世につけてもかぎりなく聞くことは必ずさであるかしなど思ふに、我が御中のうちけしきはみたる思ひやりもなくてむつびそめたる年月の程をかぞふるに、哀にいとかうおしたちておごりならひ給へる、ことわりに覺え給ひけり。少し寝入り給ひつる夢にかの衛門督唯ありしさまのうちきすがたにてかたはらにゐてこの笛をとりて見る、夢のうちにもなき人のわづらはしうこの聲をたづねてきたると思ふに、

「笛竹にふきよる風のごとならば末の世ながさねにつたへなむ。思ふかたことに侍りき」といふを、問はむと思ふ程に、若君のねおびれてなき給ふ御聲にさめ給ひぬ。この君いたくなき給ひてつだみなど志給へば乳母もあきさわざ上もおほとなぶら近くとりよせさせ給ひて耳ばさみしてそゝくりつくるひて抱きて居たまへり。いとよく肥えてつぶつぶとをかしげなる胸をあけてちなどくゝめ給ふ。ちごもいとうつくしうおはする君なれば白くをかしげなるに御ちはいとかはらかなるを心をやりてなぐさめ給ふ。男君もよりおはして「い

かなるぞ」などのたまふ。うちまさしちらしなどしてみだりがはしきに夢の哀もまされぬべし。「なやましげにこそ見ゆれ。今めかしき御有様の程にあくがれ給うて夜ふかき御月めに格子もあげられたれば、例のものゝけの入りたるなめり」など、いと若くをかしきかほしてかこち給へば、うちわらひて「あやしのものゝけのまるべや。まる格子あげずは道なくてげにえ入りござらまし。數多の人のおやになり給ふまゝに思ひいたりふかく物をこそのおたまひなりにたれ」とてうち見やり給へるまみのいとほかしげなれば、さすがに物ものたまはで「いで給ひね。見ぐるし」とてあきらかなるほかげをさすがに耻ぢ給へるさまもにくからず。まことにこの君なづみて泣きむつがり明し給ひつ。大將の君も夢おぼし出づるにこの笛のわづらはしうもあるかな、人の心とどめて思へりしものゝゆくべき方にもあらず、女の御傳へはかひなきをや、いかゞ思ひつらむ、この世にて數に思ひ入れぬこともかのいまはのとぢめに一念のうらめしきにも、もしは哀とも思ふにまつはれてこそは、長き世の間にも惑ふわざなれ、かゝればこそは何事にもまうはとどめじと思ふよなれなど、おぼしつゞけておたぎにすぎやうせさせ給ふ。又かの心よせの寺にもせさせ給ひて、この笛をばわざと人のさるゆる深きものにてひき出で給へりしを、たちまちに佛の道におもむけむも尊きことゝはいひながらあへなかるべしと思ひて六條院に參り給ひぬ。女御の御方におはしますほどなりけり、三の宮三つばかりにて中にうつくしくおはするを、こなたにぞ又とりわきておはしまさせ給ひける。走り出で給ひて「大將こそ宮いだき奉りてあなたへゐて坐せ」とみづか

らかしてまりていとまどけなげにのたまへばうち笑ひて「おはしませ。いかでか御簾の前をば渡り侍らむ、いとさやうさやうならむ」とて抱き奉りて居給へれば「人も見ず。まろが顔はかくさむ。なほなほ」とて御袖してさしかくし給へば、いとうつくしうてゐて奉り給ふ。こなたにも二宮の若君とひとつにまじりて遊び給ふを、うつくしう見ておはしますなりけり。すみの間のほどにおろし奉り給ふを、二宮見つけ給ひて「まろも大將に抱かれむ」との給ふを、二宮「あが大將をや」とてひかへ給へり。院も御覽じて「いとみだりかはしき御有様どもかな。おほやけの御近きまもりを、わたくしの隨身にりやうぜむと争ひ給ふよ。三宮こそいとさがなくおはすれ。常にこのかみにきほひ申し給ふ」と諫め聞えあつかひ給ふ。大將も笑ひて「二宮はこよなくこのかみ心に所さり聞え給ふ御心清くなむおはしますめる。御年のほどよりはおそろしきまで見えさせ給ふ」など聞え給ふ。うちゑみて、いづれをもいとうつくしと思ひ聞えさせ給へり。「見苦しうかるがるしきくぎやうの御座なり。あなたにこそ」とて渡り給はむとするに、宮たちまつはれて更にはなれ給はず。宮の若君は宮達の御つらにはあるまじきぞかしと御心のうちにおぼせどなかなかその御心ばへを母宮の御心の鬼にや思ひよせ給ふらむと、これも心のくせにいとほしう思さるれば、いとらうたきものに思ひかしづき聞え給ふ。大將はこの君をまだえよく見ぬかなとおぼして、御簾の隙よりさし出で給へるに、花の枝のかれて落ちたるをとりにて見せ奉りてまねき給へばはしりおはしたり。ふたあるのなほしのかぎりを着ていみじう白うひかりうつくしきこと御子達よりもこまかにをか

しげにてつぶつぶときよらなり。なまめとまる心もそひて見ればにや、まなこるなどこれは  
今すこし強うかどあるさままさりたれど、まじりのとぢめをかしうかをれる氣色などいと  
よく覺え給へり。口つきのことさらに華やかなるさましてうちゑみたるなど、わがめのうち  
つけなるにやあらむ、おとゞは必ず思しますらむと、いよいよ御氣色ゆかし。宮たちは思ひ  
なしこそけだかけれ、世の常のうつくしきちごどもと見え給ふに、この君はいとあてなるも  
のからさまことにをかしげなるを見くらべ奉りつゝ、いで哀若しうたがふゆゑもまことな  
らば、父おとゞのさばかり世にいみじう思ひほれ給ひて、こと名のり出でくる人だになきと  
かたみに見るばかりの名残をだにとゞめよかしとなきこがれ給ふに、聞かせ奉らざらむ罪  
えがましきなど思ふも、いでいかてさはあるべきことぞと猶心えず思ひよるかたなし。心ば  
へさへなつかしうあはれにてむつれ遊び給へばいとらうたくおぼゆ。對へわたり給ひぬれ  
ばのどやかに御物語など聞えておはする程に日も暮れかゝりぬ。よべかの一條の宮に詣て  
たりしにおはせし有様など聞えて給ひつるを、ほゝゑみてきゝおはす。哀なる昔のことか  
ゝりたるふしぶしはあへしらへなど去給ふに「かの想夫戀の心ばへはげにいにしへのため  
しにもひき出づべかりける折ながら、女はなほ人の心うつるばかりのゆゑよしをもおぼろ  
げにては漏らすまじうこそありけれと思ひまらるゝ事どもこそ多かれ。過ぎにし方の志を  
忘れずかく長き用意を人にまられぬとならば、おなじうは心ぎよくてとかくかゝづらひゆ  
かしげなきみだれなからむや。誰がためも心にくゝめやすかるべきことならむとなむ思ふ」

とのたまへば、さかし、人のうへの御をしへばかり心づよげにてかゝるすきはいてやと見奉り給ふ。「何のみだれか侍らむ。猶常ならぬ世の哀をかけそめ侍りにしあたりにも心みじかくはべらむこそなかなか世のつねの嫌疑ありがほに侍らめとてこそ。想夫戀は心とさしすぎてこといで給はむやにくきことに侍らまし。物の序にほのかなりしはをりからのよしづきてをかしうなむ侍りし。何事も人により事に随ふわざにこそ侍るべかめれ。よはひなどもやうやういたう若び給ふべき程にもものし給はず、またあざれがましくすきずきしき氣色などに物なれなどもま侍らぬに、うちとけ給ふにや、大かたなつかしうめやすき人の御有様になむ物し給ひける」など聞え給ふに、いとよきついでつくり出て、少し近く参りより給ひてかの夢がたりを聞え給へば、頓に物ものたまはて聞しめしておぼしあはすることどもあり。「その笛はこゝに見るべきゆるあるものなり。かれは陽成院の御笛なり。それを故式郡卿宮のいみじきものにま給ひけるをかの衛門督は童よりいとことなるねを吹き出でしにかんじてかの宮の萩の宴せられける日贈物にとらせ給へるなり。女の心は深くもたどりまらずまか物したるなゝり」などのたまひて、末の世のつたへは又いづかたにとかは思ひまがへむ、さやうに思ひなりけむかしなどおぼして、この君もいといたり深き人なれば思ひよることあらむかしとおぼす。その御氣色を見るにいとどはゞかりて頓にも打ち出できこえ給はねど、せめて聞かせ奉らむの心あれば、今しもことのついでに思ひ出でたるやうにおぼめかしうもてなして「今はとせし程にとぶらひにまかりて侍りしに、なからむ後のことどもいひ



置き侍りし中にまかまかなむ深くかしこまり申すよしを返す返すものし侍りしかば、いかなることにか侍りけむ、今にその故をなむえ思ひ給へより侍らねばおぼつかなく侍る」といとたどたどしげに聞え給ふに、さればよとおぼせど何かはそのほどのこと顯はしのたまふべきならねば、まばしおぼめかしくて「まか人のうらみとまるばかりの氣色は何のついでにかもり出でけむと、みづからもえ思ひ出でずなむ。さて今まづかにかの夢は思ひ合せてなむ聞ゆべき。よるかたらずとか、女房のつたへにいふことなり」とのたまひて、をさをさ御いらへもなければ、うちいできこえてけるを、いかにおぼすにかとつゝましくおぼしけるとぞ、

## 鈴 蟲

夏頃はちすの花の盛に入道の姫宮の御持佛どもあらはしいて給へる供養せさせ給ふ。このたびはおとこの君の御志にて御念誦堂の具どもこまかにとのへさせ給へるをやがてまつらはせ給ふ。はたのさまなどなつかしう心ことなる唐の錦をえらびぬはせ給へり。紫の上ぞいそぎせさせ給ひける。花づくゑのおほひなどをかしきめぞめもなつかしうきよらなる匂ひそめつけられたる心ばへめなれぬさまなり。よるの御帳のかたびらをよおもてながらあげて後の方に法華のまだらかけ奉りて、しろがねの花がめに高くことごとしき花の色をととのへて奉れり。みやうがうには唐の百歩のかうをたき給へり。あみだ佛、脇士の菩薩、おの

おのびやくだんして造り奉りたる、こまかに美しくしげなり。闕伽の具は例のきはやかにちひさくて、青き白き紫のはちすをとのへて、荷葉の方を合せたる名香、みちをかくしほろ、  
けてたきにほはしたるひとつかをりに匂ひあひていとなつかし。經は六道のすぢやうのた  
めに六部がせ給ひて、みづからの御持經は院ぞ御手づからかせ給ひける。これをだにこ  
の世の結縁にてかたみに導きかはし給ふべき心を願文に作らせ給へり。さては阿彌陀經唐  
の紙はもろくて朝夕の御てならしにもいかゞとて、かんやの人をめて殊に仰事給ひて、心  
ことにきよらにすかせ給へるに、この春の頃ほひより御心とゞめて急ぎかへせ給へるかひ  
ありてはしを見給ふ人々目もかゞやきまどひ給ふ。けかけたるかねのすぢよりも墨づきの  
上に輝くさまなどいとなむめづらかなりける。軸、表紙、箱のさまなどいへばさらなりか  
し。これは殊にぢんのけそくの机にすゑて、佛の御おなじ帳臺の上にかざられ給へり。堂か  
ざりはて、講師まうのぼりぎやうだうの人々参りつどひ給へば、院もあなたに出で給ふと  
て宮のおはします西の廂にのぞき給へれば、せばき心ちするかりのまつらひに所せくあつ  
げなるまで、ことごとしくさうぞきたる女房五六十人ばかりつどひたり。北の廂の簀子まで  
わらはべなどはさまよふ。火取どもあまたしてけぶたきまであふぎちらせば、さしより給ひ  
て、そらにたくはいづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ。富士の峯よりもげにくゆりみ  
ち出でたるはほいなきわざなり。かうぜちのをりは大方のなりをまづめてのどかに物の心  
もきゝわくべきことなれば、はゞかりなきさぬのおとなひ人のけはひまづめてなむよかる

べき」など、例の物ふかゝらぬ若人どもの用意をしへ給ふ。宮は人げにおされ給ひていとちひさくをかしげにてひれふし給へり。「若君らうがはしからむ。抱きかくし奉れ」などのたまふ。北のみさうじも取り放ちて御簾かけたり。そなたに人々はいれ給ふ。まづめて宮にも物の心まり給ふべきまたかたを聞えまらせ給ふ。いと哀に見ゆ。おましを譲り給へる佛の御まつらひ見やり給ふもさまたまに、「かゝる方の御營みをも諸共に急がむものとは思ひよらざりしことなり。よし後の世にだにかの花のなかのやどりに隔てなくとおもほせ」とて、うちなき給ひぬ。

「はちす葉をおなじうてなと契りおきて露のわかるゝけふぞ悲しき」と御硯にさしぬらして香染めなる御扇に書きつけ給へり。宮、

「へだてなく蓮の宿をちぎりても君がこゝろやすまじとすらむ」と書き給へれば、「いふかひなくもおもほしくたすかな」と打ち笑ひながら、猶哀と物をおもほしたる御氣色なり。例のみこたちなどもいとあまた参り給へり。御かたがたよりわれもわれもといとなみ出で給へる御ほうもちのありさま心ことに所せまきまで見ゆ。七僧の法服などすべて大方のこどもは皆紫の上せさせ給へり。綾のよそひにて袈裟の縫目まで見しる人は世になべてならずとめでけりとや。むつかしうこまかなる事どもかな。かうじのいとたふとく事の心を申してこの世にすぐれ給へる盛を厭ひはなれ給ひて、長きよゝにたゆまじき御契を法華經に結び給ふ。尊く深きさまをあらはして只今の世に才もすぐれゆだけきさまをいとこ心し

ていつゞけたる、いとたふとければ皆人々しほたれ給ふ。これはたゞ忍びて御念誦堂のはじめとおぼしたることなれど、内にも山のみかども聞しめして皆御使どもあり。みず經のふせなどいと所せきまでにはかになむことひろごりける。院にまうけさせ給へりける事どもそぐとおぼし、かど、世の常ならざりけるをまいて今めかしき事どもの加はりたれば、夕の寺におき所なげなるまで所せきいさほひになりてなむ僧どもはかへりける。今しも心苦しき御心そひてはかりもなくかしづき聞え給ふ。院のみかどはこの御そうぶんの宮に住みはなれ給ひなむも、つひのことにてめやすかりぬべく聞え給へど、よそよそにては覺束なかるべし。明暮見奉り聞えうけ給はらむことをこたらむにほいたがひぬべし。げにありはてぬ世いくばくあるまじけれど猶生ける限の志をだに失ひはてじ」と聞え給ひつゝかの宮をもいとこまかに清らにつくらせ給ふ。みふの物ども、國々のみさう、み牧などより奉るものどもはかばかしきさまのは皆かの三條の宮の御藏に納めさせ給ふ。又もたてそへさせ給ひて様々の御寶ものども院の御そうぶんに數もなく賜はり給へるなどあなたさまの物は皆かの宮に運びわたしこまかにいかめしうまおかせ給ふ。明暮の御かしづきそこの女房のことどもかみしものはぐ、みはおしなべて我が御あつかひにてなむ急ぎ仕うまつらせ給ひける。秋頃西の渡殿の前の中の塀の東のきはをおしなべて野につくらせ給へり。あかの棚などしてその方にまなさせ給へる御まつらひなどいとなまめきたり。御弟子にまたひ聞えたる尼ども御乳母ふる人どもはさるものにて、若きさかりのも心さだまりさる方にて世を盡しつ

べきかぎりはえりてなむなさせ給ひける。さるきほひにはわれもわれもときしろひけれど  
おとゞの君聞しめして「あるまじきことなり、心ならぬ人すこしもまじりぬればかたへの人  
苦しうあはあはしき聞えてくるわざなり」と諫め給ひて十餘人ばかりの程ぞかたちこと  
にてはさぶらふ。この野に蟲どもはなたせ給ひて風すこし涼しくなり行く夕暮に渡り給ひ  
て、蟲の音きゝ給ふやうにて猶思ひ離れぬさまを聞えなやまし給へば、例の御心はあるまじ  
きにこそあなれと偏にむつかしきことに思ひ聞え給へり。人目にこそ變ることなくもてな  
し給ひしが、うちにはうきをまゐり給ふ氣色あるくこよなう變りにし御心をいかで見え奉ら  
じの御心にておほうは思ひなり給ひにし御世のそむきなれば今はもてはなれて心やすき  
に猶かやうになど聞え給ふぞ、苦しうて人ばなれたらむ御住まひにもがなとおぼしなれど、  
およすけてえさもまひ申し給はず。十五夜の月のまだ影かくしたる夕暮に佛のお前に宮お  
はして端近うながめ給ひつゝ念誦ま給ふ。若き尼君たち二三人花奉るとてならずあかつき  
の音、水のけはひなど聞ゆる、さまかはりたるいとなみにそゝぎあへる、いと哀なるに例の  
わたり給ひて「蟲の音いとまげう亂るゝ夕かな」とて、われも忍びてうち誦じ給ふ。阿彌陀の  
だいずいとたふとくほのぼの聞ゆ。げに聲々聞えたる中に鈴蟲のふり出てたるほどはなや  
かにをかし。「秋の蟲の聲いづれとなき中に松蟲のなむすぐれたるとて、中宮の遙けき野邊  
を分けていとわざと尋ねとりつゝはなたせ給へる、まゐるく鳴きつゝふるこそすくなかなれ。  
名にはたがひて命の程はかなき蟲にぞあるべき。心にまかせて人聞かぬ奥山遙けき野の松

原に聲をしまぬもいとへだて心ある蟲になむありける。鈴蟲は心やすく今めいたるこそらうたけれ」などのたまへば、宮、

「大かたの秋をばうしとまりにしをふり捨てがたきすむしの聲」と忍びやかにのたまふ、いとなまめいてあてにおほどかなり。「いかにとかや。いて思の外なる御事にこそ」とて、「こゝろもて草のやどりをいとへどもなほすゝ蟲の聲ぞふりせぬ」など聞え給ひてさんの御琴召して珍しく弾き給ふ。宮御すゝひさをこたり給ひて御琴に猶心いれ給へり。月さし出で、いと華やかなる程も哀なるに空をうちながめて世の中さまざまにつけて、はかなく移り變る有様もおぼしつゞけられて、例よりも哀なる音にかきならし給ふ。今夜は例の御遊にやあらむとおしはかりて兵部卿の宮渡り給へり。大將の君殿上人のさるべきなど具して参りたまへれば、こなたにおはしますと御琴の音を尋ねてやがて参り給ふ。「いとつれづれにてわざと遊びとはなくとも、久しく絶えにたる珍しき物のねなど聞かまほしかりつるひとりごとをいとよう尋ね給ひける」とて宮もこなたにおましよそひて入れ奉り給ふ。うちのお前に今夜は月の宴あるべかりつるをとまりてさうざうしかりつるに、この院に人々参り給ふと聞き傳へて、これかれ上達部なども参り給へり。蟲の音のさだめを去給ひて御琴どもの聲々かきあはせておもしろき程に、「月見る宵のいつとても物哀ならぬをりはなき中に、今宵のあらたなる月の色にはげに猶我が世のほかまでこそよろづ思ひながさるれ。故權大納言何の折々にもなきにつけていと忍ばるゝことおほく、おほやけわたくし物の折へし

のほひうせたる心ちこそすれ。花鳥の色にも音にも思ひわきまへいふかひあるかたのいとうるさかりしものを」などのまたひ出て、みづからもかき合せ給ふ御琴の音にも袖ぬらし給ひつ。御簾の内にも耳とめてや聞き給ふらむと片つ方の御心にはおぼしながら、かゝる御遊の程にはまづ戀しう内などにもおぼし出でける。「今宵は鈴蟲のえんにて明してむ」とおぼしのたまふ。御かはらけふたわたりばかり参る程に冷泉院より御せうそこあり。御前の御あそび俄にとまりぬるを口をしがりて、左大辨、式部大輔、又人々ひきゐてさるべきかぎり参りたれば、大將などは六條院にさぶらひ給ふと聞しめしてなりけり。

「雲の上をかけはなれたるすみかにも物わすれぬ秋の夜の月。おなじくば」と聞え給へれば「なにばかり所せき身の程にもあらずながら今はのどやかにおはしますに、参りなることもをさをさなきを、ほいなきことにおぼしあまりて驚かさせ給へるかたじけなし」とて俄なるやうなれど参り給はむとす。

「月かけはおなじ雲居に見えながらわが宿からの秋ぞかはれる」。異なることなかめれど唯昔今の御有様のおぼし續けられけるまゝなめり。御使にさかづき賜ひて祿いと一なし。人々の御車次第のまゝにひきなほし、御前の人々立ちこみてまづかなりつる御あそびまぎれて出て給ひぬ。院の御車にみこ奉り、大將、左衛門督、藤宰相などおはしけるかぎり皆参り給ふ。直衣にてかろ、かなる御よそひどもなれば下襲ねばかり奉り加へて、月や、さしあがり更けぬる空おもしろきに、若き人々笛などわざとなく吹かせ給ひなどして忍びたる御まゐ

りのさまなり。麗はしかるべき折ふしは所せくよだけきざしきを盡してかたみに御覽せられ給ふ。又いにしへのたゞ人さまにおぼしかへりて、今宵はかるがるしきやうにふとかく参り給へれば、いたう驚き待ちよろこび聞え給ふ。ねびと一のひ給へる御かたはいよいよこともものならず、いみじき御盛のよを御心とおぼし捨て、まづかなる御有様に哀すくならず。その夜の歌どもからのもやまとのも心ばへ深うおもしろくのみなむ。例の事たらぬかたはしはまねぶもかたはらいたくてなむ。明方にふみなどかうじて疾く人々まかて給ふ。六條院は中宮の御方に渡り給ひて御物語など聞え給ふ。「今はかう静なる御住まひにまばまばも参りぬべく、何とはなければと過ぐる齡にそへて、忘れぬ昔の御物語などうけたまはり聞えまほしう思ひ給へるに、何にもつかぬ身の有様にてさすがにうひうひしく所せくも侍りてなむ。われより後の人々にかたがたにつけて後れ行く心ちし侍るもいと常なき世の心ぼそさののどめ難うおぼえ侍れば、世ばなれたる住まひにもやとやうやう思ひ立ちぬるを、のこりの人々の物はかなからむたゞよはし給ふなど、さきさきも聞えつけし心違へず覺しとてめて物せさせ給へ」などまめやかなるさまに聞えさせ給ふ。例のいとわかうちほどこかなる御けはひにて「九重のへだて深う侍りし年比よりもおぼつかなさのまさるやうに思ひ給へらるゝ有様を、いと思の外にむつかしうて、皆人のそむき行く世を厭はしう思ひなることも侍りながら、その心のうちを聞えさせうけ給はらねば何事もまづたのもしきかげには聞えさせならひていぶせく侍る」と聞え給ふ。「げにおほやけさまにては限ある折節の御里居もいとよ



う待ちつけ聞えさせしを、今は何事につけてかは御心に任せさせ給ふ御うつろひも侍らむ。定めなき世といひながらもさしていとほしきことなき人は、さはやかに背き離るゝもありがたう心やすかるべき程につけてだに、おのづから思ひかゝづらふほだしのみ侍るを、などかその人まねにきほふ御道心は、かへりてひがひがしうおしほかり聞えさする人もこそはべれ。かけてもいとあるまじき御事になむ」と聞え給ふを「深うもくみはかり給はぬなめりかし」とつらう思ひきこえ給ふ。故御息所の御身の苦しうなり給ふらむありさまいかなる煙の中に惑ひ給ふらむ、なきかげにても人にうとまれ奉り給ふ。御名のりなどの出てきたりけることかの院にはいみじう隠し給ひけるを、おのづから人の口さがなくて傳へきこしめしける後いと悲しういみじくて、なべての世のいとほしくおぼしなりて、かりにてもかのたまひけむ有様の委しう聞かまほしきを、まほにはえ打ち出て聞え給はて「唯なき人の御有様の罪輕からぬさまにほの聞くことの侍りしを、さるるあらはならでもおしはかりつべきことに侍りけれど、後れし程の衰ばかりを忘れぬことにて、物のあなた思ひ給へやらざりけるが物はかなさを、いかでよういひ聞かせむ人のすゝめをも聞き侍りてみづからだにかのほのほをもさまし侍りにしがなとやうやう積るになむ思ひまらるゝこともありける」などかすめつゝ、どのたまふ。げにさもおぼしぬべきこと、哀に見奉り給ひて「そのほのほなむ、誰も遁るまじきこと、まりながら朝露のかゝれるほどは思ひ捨てられ侍らぬになむ、目蓮が佛に近きひじりの身にてたちまちに救ひけむためしにもえつかせ給はざらむものから

玉のかんざし捨てさせ給はむも、この世にはうらみ残るやうなるわざなり。やうやうさる御志を止め給ひてかの御烟はるべきことをせさせ給へ。まか思ひ給ふること侍りながら物さわがしきやうに静なるほいもなきやうなるさまに明けくらし侍りつゝみづからのつとめにそへて今静にと思ひ給ふるもげにこそ心をさなきことなれなど、世の中なべてはかなく厭ひ捨てまほしきことを聞えかはし給へど、猶やつしにくき御身の有様どもなり。よべはうち忍びてかやすかりし御ありき今朝はあらはれ給ひて上達部なども参り給へるかぎり皆御おくり仕う奉り給ふ。春宮の女御の御有様のならびなくいつきたて給へるかひがひしさも大將のまたいと人に異なる御さまをも、いづれとなくめやすしとおぼすに、猶この冷泉院を思ひ聞え給ふ御志は勝れて深く哀にぞおぼえ給ふ。院も常にいぶかしう思ひ聞え給ひしに、御對面のまれにいぶせうのみおぼされけるにこそがされ給ひて、かく心安きさまにとおぼしなりにけるになむ。中宮ぞなかなか罷て給ふ事もいとかたうなりて、たゞ人の中のやうにならびおはしますに、今めかしうなかなか昔よりも華やかに御あそびをも志給ふ。何事も御心やれる有様ながら唯かの御息所の御事をおぼしやりつゝ行ひの御心すゝみにたるを、人のゆるし聞え給ふまじきことなれば功德のことをたてゝおぼしいとなみいとゞ心ふかう世の中をおぼしとれるさまになりまさり給ふ。六條院にももろ心に急ぎ給ひて御八講など行はせ給ふとぞ。

## 夕霧

まめ人の名をとりてさかしがり給ふ大將、この一條の宮の御有様をなほあらまほしと心にとめて、大方の人めには昔を忘れぬ用意に見せつゝいとねんどろにとぶらひ聞え給ふ。志たの心にはかくてはやむまじくなむ月月にそへて思ひまさり給ひける。御息所も哀にありがたき御心ばへにもあるかなと、今はいよいよ物寂しき御つれづれを絶えずおとづれ給ふに、慰むることどもおほかり。始よりけさうびても聞え給はざりしにひさかへしけさうばみなまめかむもまばゆし、唯深き志を見え奉りてうちとけ給ふをりもあらじやはと思ひつゝさるべきことにつけても宮の御けはひありさまを見給ふ。みづからなど聞え給ふことは更になし。いかならむついでに思ふことをもまほに聞えおぼせて人の御けはひを見むとおぼしわたるに、御息所ものけにいたう煩ひ給ひて、小野といふわたりに山里もたまへるにわたり給へり。はやうより御いのりの師にてもものけなどはらひ捨てけるりしの山ごもりもて里に出でじとちかひたるを、麓近くてさうじおろし給ふ故なりけり。御車よりはじめて御前など大將殿よりぞ奉れ給へる。なかなかまことの昔の近きゆかりの君達は、ことわざまげさちのがじゝのいとなみに紛れつゝ、えしも思ひいで聞え給はず。辨の君はた思ふ心なきにしもあらでけしきばみけるに、殊の外なる御もてなしにはゐてはまうてとぶらひ給はずな

りにたり。この君はいとかしこうさりげなく聞えなれ給ひにためり。ずほふなどせさせたまふと聞きて僧の布施淨衣などやうのこまかなるものをさへ奉れ給ふ。なやみ給へばえ聞え給はず。なべての宣旨書はものしと覺しぬべくことごとしき御さまなり」と人々聞ゆれば、宮ぞ御かへり聞え給ふ。御手はいとかしげにて唯ひとくだりなどおほどかなるかきさまことばもなつかしき所かきそへ給へるを、いよいよ見まほしう目とまりてまげう聞えかよひ給ふ。猶遂にあるやうあるべき御なからひなめりと北の方けしきとり給へれば、わづらはしくてまうでまほしうおぼせど、頓にえいで立ち給はず。八月中の十日ばかりなれば野邊の氣色もをかしき比なるに、山里の有様のいとゆかしければ「なにがしりしの珍しうおりたなるに、切に語らふべきとあり。御息所のわづらひ給ふなるもとぶらひがてらまうてむ」と大方にぞ聞えごちていで給ふ。ご前ことごとしからてまたしき限五六人ばかり狩衣にてさぶらふ。殊に深き道ならねど松が崎のおやまのいろなども、さるいはほならねど秋の氣色づきて、都に二なくとつくしたる家ゐには猶哀もけうもまさりてぞ見ゆるや。はかなき小柴垣もゆゑあるさまにまなして、假初なれどあてはかに住まひなし給へり。寢殿と覺しきひんがしの放出に修法のだんぬりて北の廂におはすれば西おもてに宮はおはします。御ものゝけむつかしとてとゞめ奉り給ひけれど、いかでか離れ奉らむと慕ひわたり給へるを、人にうつりちるを、おちて少しのへだてばかりにあなたには渡し奉り給はず、まらうどの居給ふべきところのなければ、宮の御方のすの前に入れ奉りて上らうだつ人々御せうそこ聞えつたふ。

「いとかたじけなくかうまでのたまはせ渡らせたまへるをなむもしかひなくなりはて侍り  
なば、このかしてまりをだに聞えさせでやと思ひ給ふるになむ、今志ばしかけとゞめまほし  
き心つき侍りぬる」と聞えいだし給へり。「渡らせ給ひし御送にもと思ひ給ひしを六條院に  
うけ給はりさしたる事侍りし程にてなむ、日比もそこはかとなく紛るゝこと侍りて思ひ給  
ふる心の程よりはこよなくおろかに御覽せらるゝことの苦しう侍るゝなど聞え給ふ。宮は奥  
の方にいと忍びておはしませどことごとしからぬ旅の御まつらひ浅きやうなるおましの程  
にて人の御けはひおのづからゐるし。いとやはらかに打ちみじろきなど志給ふ。御ぞのおと  
なひさばかりなゝりと聞き居給へり。心も空におぼえてあなたの御せうそこ通ふほど少し  
遠うへだゝるひまに例の少將の君などさぶらふ人々に物語など志給ひて、「かう参りきなれ  
承はることの年頃といふばかりになりけるを、こよなう物遠うもてなさせ給へるうらめ  
しさなむ、かゝるみすの前にて人づての御せうそこなどのほのかに聞え傳ふることよ、また  
こそならはね、いかにふるめかしきさまに人々ほゝゑみ給ふらむとはしたなくなむ。齡積ら  
ず軽らかなりしほどにほのすきたる方におもなれなましかばかううひうひしうも覺えざら  
まし。更にかばかりすくしくしうをれて年ふる人はたぐひあらし」との給ふ。「げにい  
とあなづりにくげなるさま志給へれば、さればよと、なかなかなる御いらへ聞え出てむは耻  
しう」などつきしるひて「かゝる御うれへ聞しめしゑらぬやうなり」と宮に聞ゆれば「みづか  
ら聞え給はざるかたはら痛さに代り侍るべきを、いと恐しきまで物し給ふめりしを見あ

つかひ侍りし程に、いとあるかなさかの心ちになりてなむ得聞えぬ」とあれば、「こは宮の御せうそこか」と居なほりて「心苦しき御なやみを、身にかふばかり歎き聞えさせ侍るも何のゆゑにか。かたじけなけれど物をおぼしめる御有様などはればれしき方にも見奉りなほし給ふまでは、たひらかに過ぐし給はむこそ誰が御ためにもたのもしきことには侍らめと推し量り聞えさするによりなむ。唯あなたさまにおぼしゆづりてつもり侍りぬる志をもまろしめされぬは、ほいなさ心ちなむ」と聞え給ふ。「げに」と人々も聞ゆ。日入りがたになりゆくに、空の氣色も哀にさりわたりて山の蔭はをぐらさ心ちするに、ひぐらし鳴きまきりてかさほにおふるなでしこの打ち靡さける色もをかしう見ゆ。お前の前裁の花どもは心に任せて亂れあひたるに水の音いと涼しげにて山おろし心すごく松の響木深く聞えわたされなどして、不斷の經よむ時かはりて鐘打ちならすにたつ聲もぬかはるもひとつにあひていとたふとく聞ゆ。所から萬のこと心ぼそう見なざるも哀に物思ひつゞけらる。出て給はむ心ちもなし。りしも加持する音して陀羅尼いとたふとくよむなり。いと苦しげにま給ふなりとて人々もそなたに集ひて大方もかゝるたび所に數多參らざりけるにいと人ずくなにて宮はながめ給へり。老めやかにて思ふ事も打ち出てつべき折かなと思ひ居給へるに、霧のたゞこの軒のもとまで立ち渡れば、まかでむ方も見えすなりゆくはいかゞすべき」とて、

「山里のあはれをそふる夕霧にたちいでむ空もなきこゝちして」ときこえ給へば、

「山がつのまがきをこめて立つ霧もこゝろそらなる人はとゞめず」。ほのかに聞ゆる御け

はひに慰めつゝ誠に歸るさ忘れはてぬ。中ぞらなるわざかな。家路は見えす、霧の離は立ちとまるべうもあらずやはせ給ふ。つきなき人はかゝることこそ「などやすらひて忍びあまりぬるすぢもほのめかし聞え給ふに、年比もむげに見知り給はぬにはあらねど知らぬがほにのみもてなし給へるを、かく言に出て、恨み聞え給ふをわづらはしうていとゞ御いらへもなければ、いたう歎きつゝ心のうちに又かゝる折ありなむやと思ひめぐらし給ふ。情ならあはつけきものには思はれ奉るともいかゞはせむ、思ひわたるさまをだにまらせ奉らむと思ひて人をめせば、御つかさのぞうよりかうぶりえたるむつまじき人を參れる。忍びやかにめしよせて「このりしに必ずいふべきことのあるを、護身などにいとまなげなめるを只今はうちやすむらむ。今夜このわたりにとまりてそやの志はてむ程にかの居たる方に物せむ。これかれ侍はせよ。隨身などのをのこともは栗栖野の庄近からむま草などとりかはせてこゝに人あまた聲なせそ。かうやうの旅寝はかるがるしきやうに人もとりなすべし」とのたまふ。あるやうあるべしと心得てうけたまはりて立ちぬ。「さて道いとたどしければこのわたりに宿かり侍る。おなじうはこのみすのもとに許されあらなむ。阿闍梨のある程までなむ」とつれなくのたまふ。例はかやうに長居してあざればみたる氣色も見え給はぬを、うたてもあるかなと宮は思せど、ことさらめきてかるらかにあなたにはひ渡り給はむもさまあしき心地して唯音せておはしますに、とかく聞えよりて御せうそこ聞えつたへにむざりいる人のかげにつきて入り給ひぬ。また夕暮の霧にとぢられて内は暗くなりたる程なり。

あさましうて見かへりたるに宮はいとむくつけうなり給ひて此の御さうじのとにゐざりいでさせ給ふをいとようたどりてひきとどめ奉りつ。御身は入りはて給へれど御ぞの裾の残りてさうじはあなたよりさすべき方なかりければひきたてさして水のやうにわなゝきおはす。人々もあされていかにすべきことも思ひえず。こなたよりこそさすがねなどもあれ、いとわりなくて荒々しくはえひきかなぐるべくはたものし給はねば、「いとあさましう思ひ給へよらざりける御心の程になむ」と泣きぬばかりに聞ゆれど「かばかりにてさぶらはむが人よりけにうとましうめざましうおぼさるべきにやは。數ならずとも御耳なれぬる年月も重りぬらむ」とていとのだやかにさまよくもてまづめて思ふ事を聞えまらせ給ふ。聞き入れ給ふべくもあらず。くやしうかくまでとおぼす事のみやるかたなければのたまはむことはたまして覺え給はず。「いと心うくわかわかしき御さまかな。人老れぬ心にあまりぬるすきずきしきつみばかりこそ侍らめ、これよりなれすぎたることは更に御心ゆるされては御覽せられじ。いかばかりちとにくだけ侍る思ひに堪へぬぞや。さりともものづから御覽じ知るふしも侍らむものを、まひておぼめかしうけうとうもてなさせ給ふめれば、聞えさせむ方なさにいかゞはせむ。心ちなくにくしとおぼさるともかうながら朽ちぬべきうれへを、さだかに聞えまらせ侍らむとばかりなり。いひまらぬ御氣色のつらきものからいとかたじけなければ」とてあながちに情深う用意し給へり。さうじをおさへ給へるはいと物はかなきかためなれどひきもあけず。「かばかりのけぢめをとまひて覺さるらむこそ哀なれ」とうち笑ひて



うたて心のまゝなるさまにもあらず。人の御有様のなつかしうあてになまめい給へること  
さはいへどことに見ゆ。世と共にものを思ひ給ふけにや、やせやせにあえかなる心ちしてう  
ちとけ給へるまゝの御袖のあたりもなよびかにけぢかうまみたるにほひなどとりあつめて  
らうたげにやはらかなる心ちま給へり。風いと心ほそう更け行く夜の氣色蟲の音も鹿のな  
くおとも瀧の音もひとつに亂れて艶なる程なれば、唯ありのあはつけ人だにねざめまぬべ  
き空の氣色を格子もさながら入りがたの月の山の端近きほどとめがたう物哀なり。「猶かう  
おぼしまらぬ御有様こそかへりては淺う御心の程まらるれ。かう世づかぬまでまれまれし  
き後やすきなどもたぐひあらじと覺え侍るを、何事にもかやすきほどの人こそかゝるをば  
まれものなど打ち笑ひてつれなき心つかふなれ。あまりこよなくおぼしおとしたるに、えな  
むまづめはつまじき心ちし侍る。世の中をむげにおぼしまらぬにしもあらじを」と萬に聞え  
せめられ給ひていかゞいふべきと侘しうおぼしめぐらす。世をまりたる方の心安きやうに  
折々ほのめかすもめざましう、げにたぐひなき身のうさなりやとおぼしつゞけ給ふに、まぬ  
べくおぼえ給うて、「うきみづからの罪を思ひまるとても、いとかうあさましきを、いかやう  
に思ひなすべきにかはあらむ」といほのかに哀げにない給ひて、

「われのみやうき世をまれるためしにてぬれそふ袖の名をくたすべき」と、のたまふとも  
なきを我が心につゞけて忍びやかに打ちずじ給へるもかたはらいたく、いかにいひつるこ  
とぞとおぼさるゝに「げにあしう聞えつかし」などほゝゑみ給へる氣色にて、

「大かたはわがぬれぎぬをさせずともくちにし袖の名やはかくるゝ。ひたぶるにおぼし  
なりぬかし」とて月あかき方にいざなひ聞ゆるもあさましとおぼす。心づようもてなし給へ  
どはかなうひきよせ奉りて「かばかりたぐひなき志を御覽じまりて心やすうもてなし給へ。  
御ゆるしあらでは更に更に」といときざやかに聞え給ふ程明けがた近うなりにけり。月くま  
なくすみわたりて霧にも紛れずさし入りたり。あさはかなる廂の軒はほどもなき心ちすれ  
ば、月のかほに向ひたるやうなる、あやしうはしたなくて紛はし給へるもてなしなどいはむ  
方なくなまめき給へり。故君の御事も少し聞えて、さまようのとやかなる物語をぞ聞え  
給ふ。さすがに猶かの過ぎにし方におぼしおとすをばうらめしげに恨み聞え給ふ。御心のう  
ちにも、かれは位などもまだ及ばざりけるほどながら誰も御ゆるしありけるに、おのづ  
からもてなされて見なれたまひにしを、それだにいとめざましき心のなりにしさまよ、まし  
てかうあるまじきことによるに聞くあたりにならず、おほ殿などの聞き思ひ給はむこ  
とよ、なべての世のをきは更にいはず、院にもいかにかに聞し召しおもほされむなど、はな  
れぬこゝかしの御心をおぼしめぐらすにいと口をしう、我が心一つにかうつよう思ふと  
も人の物いひいかならむ、御息所のまゝり給はざらむも罪えがましう、かく聞き給ひて心をさ  
なくとおぼしのたまはむもわびしければ、「明さでだに出で給へ」とやらひ聞え給ふより外  
のことなし。「あさましや、ことありがほにわけ侍らむ。朝露の思はむ所に猶さらばおぼし  
れよ。かうをこがましきさまを見え奉りてかしこうすかいやりつとおぼし離れむこそ、その

きは、心もえをさめあふまじう知らぬことごとく、けしからぬ心づかひもならひはじむべう  
思ひ給へよらるれ」とていと後めたくなかなかなれど、ゆくりかにあざれたることのまこと  
にならぬ御心ちなればいとほしう我が御みづからも心おとりやせむなどおぼいて、誰が  
御ためにもあらはなるまじき程の霧に立ちかくれて出て給ふ心ちそらなり。

「萩原や軒ばのつゆにそぼちつゝやへたつ霧をわけぞゆくべき。ぬれぎぬは猶えほさせ  
給はじ。かうわりなうやらはせ給ふ御心づからこそは」と聞え給ふ。げにこの御名のたけか  
らずもりぬべきを心のはむにだに口清うこたへむとおぼせば、いみじうもてはなれ給ふ。  
「わけゆかむ草葉の霧をかごとにて猶ぬれ衣をかけむと思ふ。めづらかなることかな」  
とあばめ給へるさまいとをかしうはづかしげなり。年比人にたがへる心ばせ人になりてさ  
まざまになさけを見え奉る名残なくうちたゆめすきずきさきやうなるがいとほしう心はづ  
かしげなれば、疎ならず思ひかへしつゝ、かうあながちに隨ひ聞えても後をこがましくやと  
さまさまに心亂れつゝ出て給ふ。道の露けさもいと所せし。かやうのありきならひ給はぬ心  
ちにをかしうも心づくしにおぼえつゝ、殿におはせば女君のかゝるぬれをあやしと咎め給  
ひぬべければ、六條院のひんがしのおとどにまうて給ひぬ。まだ朝霧もはれずましてかして  
にはいかにと覺しやる。例ならぬ御ありきありけりと人々はささめく。暫し打ち休み給ひて  
御ぞぬきかへたまふ。夏冬といときよらにまおき給へればかうの御唐櫃よりとうて、奉り  
給ふ。御かゆなどまわりて御前に参り給ふ。かしこに御文奉り給へれば御覽じもいれず、俄

にあさましかりし有様めざましうもはづかしうもおぼすに心づきなくて、御息所の漏りき  
ゝ給はむこともいとほづかしう又かゝることやとかけてまり給はざらむに、たゞならぬふ  
しにても見つけ給ひ、人の物いひかくれなき世なればおのづから聞きあはせて隔てけると  
おぼさむがいと苦しければ、人々ありしまゝに聞えもらさなむ、うしとおぼすともいかゞは  
せむとおぼす。親子の御中と聞ゆる中にも露へだてずぞ思ひかはし給へる。よその人はもり  
聞けども親にかくすたぐひこそは昔物語にもあめれど、さはたおぼされず。人々は何かはほ  
のかに聞き給ひてもことしもありがほにとかくおぼし亂れむ、まだきに心苦しなどいひ合  
せていかならむと思ふどちこの御せうそこのゆかしきをひきもあけさせ給はねば心もとな  
くて「猶むげに聞えさせ給はざらむも覺束なくわかかわかしきやうにぞ侍らむ」など聞えて、  
ひろげたれば「あやしう何心もなきさまにて人にかばかりにても見ゆるあはつけさの、みづ  
からのあやまちに思ひなせど、思ひやりなかりしあさましさも慰めがたくなむ。え見ずとを  
いへ」と殊の外にてよりふさせ給ひぬ。さるはにくげもなくいと心ぶかうかい給ひて、

「たましひをつれなき袖にとゞめおきて我が心から惑はるゝかな。ほかなるものはとか  
昔もたぐひありけりと思ひ給へなすにも、更に行きがたきみならずのみなむ」などいと多かめれ  
ど人はえまほにも見ず。例の氣色なるけさの御文にもあらざめれど猶え思ひはるけず。人々  
は氣色もいとほしきを歎しう見奉りつゝ、いかなる御ことにかはあらむ、何事につけてもあ  
りがたう哀なる御心さまはほどへぬれど、かゝるかたに頼み聞えては見おとりやし給はむ

と思ふもあやうくなどむつましようさぶらふかぎりはおのがどち思ひみだる。御息所もかけてまり給はず、ものゝけに頼ひ給ふ人はおもしと見れどさはやぎ給ふひまもありてなむ物おぼえ給ふ。晝つかた日中の御加持はてゝ阿闍梨ひとりとなりとまりて猶陀羅尼讀み給ふ。よろしう坐します悦びて、「大日如來そらごとま給はずばなどてかかくなにがしが心をいだして仕うまつる御す法にまゐるしなきやうはあらむ。あくらうはまふねきやうなれどごつしやうにまつはれたるはかなものなり」と聲はかれていかり給ふ。いとひじりだちすくすくしきりしにてゆくりもなく、「そよやこの大將はいつよりこゝには参り通ひ給ふぞ」といひ申し給ふ。御息所「さることも侍らず。故大納言のいとよき中にて語らひつけ給へる心たがへじと、この年比さるべきことにつけていとあやしくなむ語らひ物し給ふも、かくふりはへわづらふを、とぶらひにとて立ち寄り給へりければ辱く聞き侍りき」と聞え給ふ。「いであなかたは。なにがしにかくさるべきことにもあらず。けさごやにまうのぼりつるにかの西の妻戸よりいとうるはしき男の出で給へるを、霧ふかくてなにがしはえ見わい奉らざりつるを、この法師ばらなむ、大將殿の出で給ふなりけりよべも御車も歸してとまり給ひけると口々申しつる。げにいとかうばしきかのみちて頭痛さまでありつれば、げにさなりけりと思ひあはせ侍りぬる。常にいとかうばしう物し給ふ君なり。この事いと切にもあらぬことなり。人はいと有職にもし給ふ。なにかし等もわらはにもし給ひし時より、かの君の御ための事はすほふをなむ故大宮ののたまひつけたりしかば、一かうにさるべきと今に承はる所なれどい

とやくなし。本妻強くものし給ふ。さる時にあへるぞうるゐにていとやんどなし。若君達  
は七八人になり給ひぬ。えみこの君おし給はじ、又女人のあしき身をうけ長夜のやみにまど  
ふは唯かやらの罪によりなむ、さるいみじき報をもうくるものなる。人の御いかり出てきな  
ば長さほだしとなりなむ。もはらうけひかず」とかしらふりてたゞいひにひ放てば「いと  
あやしきことなり。更にさる氣色にも見え給はぬ人なり。萬心ちのまどひにしかばうちやす  
みて對面せむとてなむ暫し立ちとまり給へるとこゝなる御達いひしを、さやうにてとまり  
給へるにやあらむ。大かたいとまめやかにすくよかに物し給ふ人を」とおぼめい給ひながら  
心のうちに、さることもやありけむ、たゞならぬ御氣色は折々見ゆれど人の御さまのいと  
どかどしうあながちに人のそしりあらむことは省きすて、うるはしだち給へるに、容易く心  
ゆるされぬことはあらじとうちとけたるぞかし、人づくなにておはする氣色を見てはひ入  
りもやま給ひけむとおぼす。律師たちぬる後に小少將の君をめして「かゝることなむ聞きつ  
る。いかなりしことぞ。などかおのれにはさなむかくなむとは聞かせ給はざりける。さしも  
あらじとは思ひながら」とのたまへば、いとほしけれどありしやうを始より委しう聞ゆ。け  
さの御文のけしき宮もほのかにのたまはせつるやうなど聞え、「年比忍びわたり給ひける心  
のうちを聞えまらせむとばかりにや侍りけむ、ありがたう用意ありてなむ明しもはてし出  
で給ひぬるを、人はいかに聞え侍るにか」と律師とは思ひもよらで忍びて人の聞えけると思  
ふ。物ものたまはでいとく口をしとおぼすに涙ほろほろとこぼれ給ひぬ。見奉るもいと

とほしう、何にありのまゝに聞えつらむ、苦しき御心ちをいととおぼし亂るらむと悔しう思ひぬたり。「さうじはさしてなむ」と萬に宜しきやうに聞えなせど」とてもかくてもさばかりに何の用意もなくかるらかに人に見え給ひけむこそいといみじけれ。内々の御心ぎようおはすともかくまでいひつる法師ばらよからぬわらはべなどはまさにいひ残してむや。人にはいかにいひあらがひ、さもあらぬこといふべきにかあらむ。すべて心をさなきかぎりしもこゝに侍ひて、ともえのたまひやらす、いと苦しげなる御心ちに物をおぼし驚きたればいといとほしげなり。け高うもてなし聞えむとおぼいたるに、よづかはしうかるがるしき御名の立ち給ふべきを疎ならず覺し歎かる。「かう少し物覺ゆるひまに渡らせ給ふべう聞えよ。そなたへ参りくべけれど動くべうもあらでなむ。見奉らで久しうなりぬる心ちすや」と涙をうけてのたまふ。「参りてまかなむ聞えさせ給ふ」とばかりきこゆ。渡り給はむもとて御額髪のぬれまろかれたるひきつくりひ、單衣の御をほころびたる着かへなどま給ひても頓にもえうごい給はず。この人々もいかに思ふらむ、まだえまゝ給はて後にいさゝかも聞き給ふことあらむにつれなくてありしよとおぼし合せむも、いみじうはづかしければ又ふし給ひぬ。「心ちのいみじうなやましきかな。やがてなほらぬさまにもなりなばいとめやすかりぬべくこそ。あしのけののぼりたる心ちす」とおしくださせ給ふ。物をいと苦しうさまさまに覺すにはけをあげける。少將「うへにこの御事ほのめかし聞えける人こそはべけれ。いかなりしことぞ」と問はせ給へればありのまゝに聞えさせて「御さうじのかためばかりをなむ少し

ことをへてけさやかに聞えさせつる。もしさやうにかすめ聞えさせ給はゞ同じさまに聞えさせ給へ」と申す。歎い給へる氣色は聞え出でず。さればよといとわびしくて物ものたまはぬ、御枕よりまづくぞおつる。この事にのみもあらず身の思はずになりそめしよりいみじう物をのみ思はせ奉ること、生けるかひなく思ひつゞけたまひて、この人はかうてもやまとかくいひかゝづらひ出でむも、煩しう聞き苦しかるべうよろづに覺す。まいていふかひなく人のことによりていかなる名をくださましなど、少しおぼしなくさむる方はあれど、かばかりになりぬるたかき人のかくまでもすゞろに人に見ゆるやうはあらじかすと、すくせうくおぼしくして夕つ方ぞ「猶わたらせ給へ」とあれば、中の塗籠の戸あけあはせて渡り給へる。苦しき御心ちにもなのめならずかしこまりかしづき聞え給ふ。常の御さはふあやまたず、おさあがり給うて「いと亂りがはしく侍れば渡らせ給ふも心ぐるしうてなむ。この二日三日ばかり見奉らざりけるほどの年月の心地するも、かつはいとはかなくなむ。後必ずしも對面の侍るべきにも侍らざめり。又めぐり參るともかひやは侍るべき。思へば唯時のまに隔たりぬべき世の中をあながちにならひ侍りけるも悔しきまでなむ」などなき給ふ。宮も物のみ悲しうとりあつめおぼさるれば、聞え給ふこともなくて見奉り給ふ。物つゝみをいたうま給ふ本性にきははしうのたまひさはやぐべきにもあらねば耻しとのみ覺すに、いといとほしうて、いかなりしなども問ひ聞え給はず、大となふらなど急ぎ參らせて御臺などこなたにて參らせ給ふ。物聞しめさずときゝ給ひて、とかう手づからまかなひなほしなどま給へど觸れ給



ふべくもあらず。唯御心ちのよろしう見え給ふぞ胸すこしあき給ふ。かしこより又御文あり。「心まらぬ人しもとりにいれて大將殿より少將の君にとて御文あり」といふぞ又侘しきや。少將御文はとりつ。御息所「いかなる御文にか」とさすがに問ひ給ふ。人ぞれずおぼし弱る御心もそひてまたに待ち聞え給ひけるに、さもあらぬなめりとおぼすも心さわぎして「いでその御文なほ聞え給へ。あいなし。人の御名をよざまにいひなほす人はかたきものなり。そこに心ぎようおぼすとも、まかもちゐる人は少くこそあらめ。心うつくしきやうに聞えかよひ給ひて猶ありしまゝならむこそよからめ。あいなきあまえたるさまなるべし」とて召しよす。苦しけれど奉りつ。「あさましき御心のほどを見奉りあらはいてこそなかなかひたぶる心もつき侍りぬべけれ。

せくからにあさくぞ見えむ山川のながれての名をつゝみはてずは」とことばもおほかれど見もはて給はず。この御文もけざやかなる氣色にもあらでめざましげに心ちよがほに今宵もつれなきをいといみじとおぼす。かんの君の御心さまの思はずなりし時いとうしと思ひしかど、大方のもてなしは又ならぶ人なかりしかばこなたに力ある心ちしてなくさめしだに世に心もゆかざりしを、あないみじや、大殿のわたりに思ひのたまはむこと、思ひまみ給ふ。猶いかどのたまふと氣色をだに見むと、心ちのかき亂りくるゝやうにま給ふ。めをしまぼりてあやしき鳥の跡のやうに書き給ふ。「頼もしげなくなりにて侍る、とぞちひに渡り給へるをりにてそゝのかし聞ゆれど、いとはればれしからぬさまに物し給ふめれば、見給

へわづらひてなむ、

女郎花志をるゝ野邊をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけむ」とたゞかきさしておしひねりて出し給ひて臥し給ひぬるまゝに、いといたく苦しがり給ふ。御物のけのためけるにやと人々いひ騒ぐ。例のげんあるかぎりいと騒がしうのゝしる。「宮をば猶渡らせ給ひね」と人々聞ゆれど御身のうきまゝに後れ聞えじとおぼせばつとそひ給へり。大將殿はこの晝つ方より三條殿におはしにける。今宵立ちかへりまうで給はむにことしもありがほにまだきに聞き苦しがるべしなど念じ給ひて、いとなかなか年比の心もとなさよりもちへにも思ひかさねて歎き給ふ。北の方はかゝる御ありきの氣色ほのぎして心やましと聞き居給へるに老らぬやうにて君達もて遊びまぎらはしつゝ、我が晝のおましにふし給へり。宵過ぐる程にぞこの御返りもて参れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば頃にもとき給はで大となぶら近うとりよせて見給ふ。女君物隔てたるやうなれどいと疾く見つけ給ひてはひよりて御後よりとり給ひつ。「あさましうこはいかに志給ふぞ。あなけしからず。六條の東の上の御文なり。けさ風おこりてなやましげに志給へるを、院の御前に侍りて出づる程又もまうでずなりぬればいとほしさに今のまいかにと聞えたりつるなり。見給へよ、けさうびたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。年月にそへていたうあなづり給ふこそうれたけれ。思はむ所をむげにはぢ給はぬよ」と打ちうめきてをしみがほにもひこじろひ給はねばさすがにふとも見ても給へり。「年月にそふるあなづらはしさは御心ならひなべかめり」と

ばかり、かくうるはしだち給へるに憚りて若やかにをかきさましてのたまへばうち笑ひて「そはともかくもあらむ。世の常のことなり。又あらじかし。よろしうなりぬるをこのかくまがふ方なくひとつ所を守らへて物おぢしたる鳥のせうようのものゝやうなるはいかに人笑ふらむ。さるかたくなしきものにまもられ給ふは御ためにもたけからずや。あまたが中に猶きはまさり殊なるけぢめ見えたるこそよその覺えも心にくく我が心ちも猶ふりがたくをかききことも哀なるすぢもたえざらめ。かく翁のなにがしまもりけむやうにをれまどひたればいとぞ口をしき。いづこのはえかあらむ」とさすがにこの文の氣色なくをこづりとらむの心にて欺き申し給へば、いと匂ひやかにうち笑ひて「物のはえばえしさつくり出で給ふ程、ふりぬる人くるしや。いと今めかしくなりかはれる御氣色のすさまじさも見習はずなりにけることなればいとなむ苦しき。かねてよりならはし給はで」とかこち給ふもにくくもあらず。「俄にとおぼすばかりには何事か見ゆらむ。いとうたてある御心のくまかな。よからず物聞えまらする人ぞあるべき。怪しうもとよりまろをば許さぬぞかし。猶かの緑の袖のなごりあなづらはしきにことつけてもてなし奉らむと思ふやうあるにや。いろいろ聞きにくき事どもほのめくめり。あいなき人の御ためにもいとほしう」などのたまへど遂にあるべき事とおぼせばことにあらがはず。大輔の乳母いと苦しときゝて物も聞えず、とかくいひまろひてこの御文はひきかくし給ひつればせめてもあさりとらでつれなく大殿籠りぬれば胸はしりて、いかでとりてしがなと御息所の御文なめり。何事ありつらむと目もあはず思ひふし給へ

り。女君の寝給へるによべのおましのまたなどさりげなくて捜り給へどなし。隠し給へらむ程もなければいと心やましくて明けぬれど頓にも起き給はず。女君は君達におどろかされてゐざり出て給ふにぞ、われも今起き給ふやうにて萬にうかゞひ給へどえ見つけ給はず。女はかく求めむとも思ひ給へらぬをぞ、げにけさうなき御文なりけりと心にも入れねば君達のあわて遊びひくなつくりすゑて遊び給ふ。文よみ手ならひなどさまさまにいとあわたしくちひささちごはひかくりひきまろへばとりし文のとも思ひ出て給はず。男はこと事もおぼえ給はずかしこに疾く聞えむと覺すに、よべの御文のさまもえたしかに見ずなりにしかば見ぬさまならむもちらしてけると推し量り給ふべしなど思ひ亂れ給ふ。誰もたれも御だい参りなどして長閑になりぬる晝つかた思ひわづらひて「よべの御文は何事かありし。あやしう見せ給はて今日もとぶらひ聞ゆべし。なやましうて六條にもえ参るまじければ文をこそは奉らめ。何事かありけむ」との給ふがいとさりげなければ、文はをこがましうとりてけりとすさまじうてその事をばかけ給はず。「一夜の深山風にあやまち給へるなやましきななりとをかしきやうにかこち聞え給へかし」と聞え給ふ。「いでこのひがごとな常にのたまひそ。何のをかしきやうかある。世人になずらへ給ふこそなかなかはづかしけれ。この女房達もかつはあやしきまめさまをかくのたまふことほくゑむらむものを」とたはぶれごとにいひなして「その文よいづら」とのたまへどとみにもひき出て給はぬ程に猶物語など聞えてまばしふし給へる程に暮れにけり。ひぐらしの聲に驚きて、山のかげいかに霧ふたがりぬら

む、あさましや、今日この御返事をだにといとほしうて唯まらず顔に硯おしずりていかになしてしにかとりなさむとながめおはするおましの奥の少しあがりたる所を試みにひきあげ給へれば、これにさしはさみ給へるなりけりと嬉しうもをこがましうもおぼゆるに、うち急みて見給ふにかう心苦しきことなむありける。胸つぶれて、一夜のことを心ありて聞き給ひけるとおぼすに、いとほしう心苦しうよべだにいかにも思ひ明し給ひけむ、今日も今まで文をだにといはむ方なくおぼゆ。いと苦しげにいふかひなくかき紛はし給へるさまにて、おぼろげに思ひあまりてやはかく書き給へつらむ、つれなくて今宵のあけつらむといふべき方になければ女君ぞいとつらう心うき、すゑろにかくあたへかくしていでや我がならはしをやとさまさまに身もつらくすべて泣きぬべき心ちま給ふ。やがて出て立ちたまはむとするを、心やすく對面もあらざらむものから人もかくのたまふ、いかならむ、坎日にもありけるをもしたまやかに思ひゆるし給はゞ悪しからむ、猶よからむことをこそと、うるはしき心におぼしてまづこの御返しを聞え給ふ。「いとめづらしき御文をかたがた嬉しう見給ふにこの御とがめをなむ。いかに聞しめしたることにか。

秋の野の草のまげみは分けしかどかりねの枕むすびやはせし。あきらめ聞えさするもあやなけれどよべの罪はひたやごもりにや」とあり。宮にはいと多く聞え給ひてみまやにあしとき御馬にうつしおきて一夜のたいふをぞ奉れ給ふ。「よべより六條院にさぶらひて只今なむ罷てつるといへ」とていふべきやうさゝめき教へ給ふ。かしこにはよべもつれなく見え

給ひし御氣色を、忍びあへて後の聞えをもつゝみあへず恨み聞え給ひしをその御返りだに見えず。今日の暮れはてぬるをいかばかりの御心にかはともてはなれてあさましう心も碎けてよろしかりつる御心ち又いといたう惱み給ふ。なかなかさうじみの御心のうちには、このふしを殊に憂しとおぼし驚くべきとしなければ、唯覺えぬ人にうち解けたりし有様を見えしことばかりこそ口をしけれ、いとしもおぼしまぬをかくいみじうおぼいたるをあさましうはづかしうあきらめ聞え給ふ方なくて例よりも物はちま給へる氣色見え給ふを、いと心苦しう物をのみおぼしそふべかりけると見奉るも胸つとふたがりて悲しければ「今更にむつかしき事をば聞えじと思へど、猶御宿世とはいひながら思はずに心をさなくて人のもときをおひ給ふべきことを取り返すべき事にはあらねど、今よりは猶さる心ま給へ。數ならぬ身ながらも萬にはぐゝみ聞えつるを今は何事をもおぼしまり世の中のとさまかうさまの有様をもおぼしたどりぬべき程に見奉りおきつること、そなたさまは後安くこそ見奉りつれ。猶いといはけて強き御心おきてのなかりける事と思ひ亂れ侍るに、今暫しの命もとゞめまほしうなむ。たゞ人だに少しよろしくなりぬる女のひとふたりと見るためしは心うくあはつけきわざなるを、ましてかゝる御身にはさばかりおぼろげにて人の近づき聞ゆべきにもあらぬを思の外に心にもつかぬ有様と年比も見奉りなやみしかど、さるべき御宿世にこそは。院よりはじめ奉りておぼしなびき、この父おとゞにもゆるひ給ふべき御氣色ありしに、おのれ一人しも心をたてゝいかゞはと思ひよわり侍りし事なれど末の世までものしき

御有様を、我が御あやまちならぬに大空をかこちて見奉りすぐすを、いとかう人のため我がためよろづに聞きにくかりぬべき事の出できそひぬべきが、さてもよその御名をばおらぬ顔にてよのつねの御有様にだにあらばおのづからありへむにつけても慰む事もやと思ひなし侍るを、こよなう情なき人の御心にも侍りけるかな」とつぶつぶと泣き給ふ。いとわりなくおしこめての給ふを、あらがひはるけむ言の葉もなく唯打ち泣き給へるさまおほどかにらうたげなり。うちまもりつゝ「あはれ何事かは人に劣り給へる。いかなる御すくせにてやすからず物を深くおぼすべき契深かりけむ」などのたまふまゝにいみじう苦しう志給ふ。ものゝけなどもかゝるよわめに所うるものなりければ俄に消え入りてたゞひえにひえ入り給ふ。律師も騒ぎたち給うて願などたてのゝまり給ふ。深さちかひにて今は命を限りける山ごもりをかくまでおぼろげならず出て立ちて壇毀ちて歸り入らむとのめいぼくなく佛もつらく覺え給ふべきことを、心を起して祈り申し給ふ。宮の泣き惑ひ給ふ事いとことわりなりかし。かく騒ぐ程に大將殿より御文とりいれたるほのかに聞き給ひて、今宵もおはすまじきなめりとうち聞き給ふ。心うく世のためしにもひかれ給ふべきなめり、何に我さへさる言の葉を残しけむとさまざまおぼし出づるにやがて絶えいり給ひぬ。あいなくいみじといへばおろかなり。昔より物の氣には時々煩ひ給ふ。限と見ゆる折々もあれば例のごととりいれたるなめりとして加持参りさわげといまはの様は老るかりけり。宮はおくれじとおぼしいりてのとそひふし給へり。人々まゐりて「今はいふかひなし。いとかうおぼすともかぎりある道

には歸りおはすべき事にもあらず。慕ひきこえ給ふともいかてか御心にはかなふべき」とさ  
らなることわりを聞えて「いとゆゝしうなき御爲にも罪深きわざなり。今はさらせ給へ」と  
ひきうごかい奉れどすくみたるやうにて物も覺え給はず。修法の壇毀ちてほろほろといづ  
るにさるべきかぎりかたへこそ立ちとまれ、今はかぎりのさまいと悲しう心ほそし。所々の  
御とぶらひいつのまにかと見ゆ。大將殿も限なく聞き驚き給ひてまづ聞え給へり。六條院よ  
りも致仕の大殿よりもすべていとまげう聞えたまふ。山のみかども聞しめしていと哀に御  
文かいたまへり。宮はこの御せうそこにぞ御ぐしもたげ給ふ。「日比重く惱み給ふと聞きお  
たりつれど例もあつしうのみ聞き侍りつるならひにうちたゆみてなむ、かひなき事をばさ  
るものにて思ひ歎い給ふらむありさまおしはかるなむ哀に心苦しき。なべての世のことわ  
りに覺しなぐさめ給へ」とあり。目も見え給はねど御返しきこえ給ふ。常にさこそあらめと  
のたまひける事とて今日やがてをさめ奉るとて御甥の大和守にてありけるぞよろづにあつ  
かひ聞えける。骸をだにまばし見奉らむとて宮は惜み聞え給ひけれど、さてもかひあるべき  
ならねば皆急ぎたちてゆゝしげなる程にぞ大將殿おはしたる。「今日よりのち目ついてあし  
かりけり」など人ぎゝにはの給ひていともかなしう哀に宮のおぼし歎くらむことをおしは  
かり聞え給ひて「かくしも急ぎ渡り給ふべき事ならず」と人々いさめ聞ゆれどまひておはし  
ましぬ。程さへ遠くて入り給ふほどいと心すごし。ゆゝしげに引き隔てめぐらしたる儀式の  
かたは隠してこの西おもてに入れ奉る。大和守出てきてなくなくかしてまり聞ゆ。妻戸の簀



子におしかゝり給ひて女房よび出でさせ給ふに、あるかぎり心もをさまらず物覚えぬほどなり。かくわたり給へるにぞ聊なぐさめて少將の君はまゐる。物もえのたまひやらす、涙もろにおはせぬ心づよさなれど所のさま人のけはひなどをおぼしやるもいみじうて常なき世の有様の人のうへならぬもいと悲しきなりけり。やゝためらひて「よろしうをこたり給ふさまに承りしかば思ひ給へたゆみたりし程に夢もさむる程侍るなるを、いとあさましうなむ」と聞え給へり。おぼしたりしさまこれにおほくは御心も亂れにしぞかしとおぼすに、さるべきとはいひながらもいとつらき人の御契なればいらへをだに志給はず「いかに聞えさせ給ふとか聞え侍るべき。いとかるらかならぬ御さまにて、かくふりはへ急ぎ渡らせ給へる御心ばへをおぼしわかぬやうならむもあまりに侍りぬべし」と口々きこゆれば「たゞおしはかりて。われはいふべきとも覺えず」とて臥し給へるもことわりにて「只今はなき人と異ならぬ御有様にてなむ。渡らせ給へる由は聞えさせ侍りぬ」と聞ゆ。この人々もむせかへるさまなれば「聞えやるべき方もなきを今少し自らも思ひのどめ又まづまり給ひなむに参りこむ。いかにしてかくにはかにと、その御有様なむゆかしきことの給へば、まほにはあらねどかのおもほし歎きし有様をかたはしづゝ聞えて「かこち聞えさするさまになむなり侍りぬべき。今日はいと亂りがはしき心ちどものまどひに聞えさせたがふる事ども侍りなむ。さらばかくおぼし惑へる御心ちも限りあることにて少しまづらせ給ひなむ程に、聞えさせうけ給はらむ」とてわれにもあらぬさまなればのたまひ出づること口ふたがりて「げにこそ

闇に惑へる心ちすれ。猶聞え慰め給ひて聊の御返りもあらばなむなどのたまひおきて立ち  
煩ひ給ふもかるがるしうさすがに人さわがしければ歸り給ひぬ。今宵しもあらじと思ひつ  
る事どもものまたゝめいと程なくきはきはしきをいとあへなしと覺いて近き御さうの人々め  
しおほせてさるべき事ども仕うまつるべくおきて定めて出て給ひぬ。事の俄なればそぐや  
うなりつる事ども殿めしう人数などもそひてなむ。大和守もありがたき殿の御心おきてな  
ど悦びかしまりきこゆ。名残だになくあさましきことゝ宮はふしまろび給へどかひなし。  
親と聞ゆともいとかくはならはすまじきものなりけり。見奉る人々もこの御事を又ゆゝし  
う歎き聞ゆ。大和守のこりの事どもまたゝめて、「かく心ほそくてはえおはしまさじ。いと御  
心のひまあらじ」など聞ゆれど猶峯の煙をだにけぢかくて思ひ出て聞えむとこの山里に住  
みはてなむとおほいたり。御忌にこもれる僧は東面のそなたの渡殿もやなどにはかなき  
隔てまつゝかすかにゐたり。西の廂をやつして宮はおはします。明け暮るゝもおほしわかぬ  
ど月比へければ九月になりぬ。山おろしいとはげしう木の葉のかくろへなくなりて萬の事  
いとみじき程なれば、大方の空にもよほされてひるまもなくて覺し歎き、命さへ心にな  
はずといとはしういみじうおほす。さぶらふ人々も萬に物悲しう思ひまどへり。大將殿は日  
々にとぶらひ聞え給ふ。寂しげなる念佛の僧など慰むばかり萬の物を遣はしとぶらはせ給  
ひ、宮のお前には哀に心深き言の葉を盡して恨み聞え、かつはつきもせぬ御とぶらひを聞え  
給へど取りてだに御覽せず、すゞろにあさましきことをよわれる御心ちに疑ひなくおほし

老みて、消え失せ給ひにし事をおぼし出づるに、後の世の御罪にさへやなるらむと胸にみつ心地して、この人の御事をだにかけていへばいとどつらく心うき涙のもよほしにおぼさる。人々も聞え煩ひぬ。ひとくだりの御返りだになきを、老ばしは心惑ひの老給へるなどおぼしけるに、あまりに程經ぬれば悲しき事もかぎりあるを、などかかくあまり見老り給はずはあるべき、いふかひなく若々しきやうにとうらめしうことごとすぢに花や蝶やとかけばこそあらめ、我が心に哀と思ひ物歎かしきかたざまのことをいかにと問ふ人は睦しう哀にこそおぼゆれ、大宮のうせ給へりしをいと悲しとせちに思ひしに、致仕のおとこのさしも思ふ給へらず、ことわりの世の別れにおほやけおほやけしきさはふばかりの事をけうじ給ひしにつらく心づきなかりしに、六條院のなかなかねんごろに後の御事をも營み給ひにしが、我がかたざまといふ中にも嬉しう見奉りし、その折に故衛門督をば取りわきて思ひつきにしぞかし、人がらのいたう老づまりて物をいたう思ひとどめたりし心に哀もまさりて人より深かりしがなつかしう覺えしなど、つれづれと物をのみおぼしつゞけて明し暮し給ふ。女君猶この御中の氣色をいかなるにかありけむ、御息所とこそ文かよはしも細やかに老給ふめりしかなと思ひえがたくて、夕暮の空をながめ入りて臥したまへるところに若君してたてまつれ給へる、はかなき紙のはしに、

「哀をもいかに老りてかなぐさめむあるや戀しきなきやかなしき。おぼつかなきこそ心うけれ」とあればほゝゑみて様々にかく思ひよりてのたまふ。似げなのなきがよそへやとお

ぼす。いと疾くことなしびに、

「いづれとかわきてながめむ消えかへる露も草葉のうへと見ぬ世を。大方にこそ悲しけれ」とかい給へり。猶かく隔て給へること、露の哀をばさしおきてたゞならず歎きつゝおはす。猶かく覺束なくおぼしわびて又わたり給へり。御忌などすぐしてのどやかにとおぼし静めけれど、さてしも忍びはつまじう今はこの御なき名の何かはあながちにもつゝまむ、唯世づきてつひの思ひかなふべきにこそはと覺したちにければ、北の方の御思ひやりをあながちにもあらがひ聞え給はず、さうじみはつようおぼしはなるともかの一夜ばかりの御文をとらへ所にかこちてえしもすぎはて給はじとたのもしかりけり。九月十餘日、野山の氣色はふかく見まらぬ人だにたゞにやはおぼゆる、山風に堪へぬ木々の木末も峯の葛葉も心あわたゞしう争ひ散るまぎれに、たふとき讀經の聲かすかに念佛などの聲ばかりして人のけはひいと少なう、木枯の吹き拂ひたるに鹿は唯籬のもとにたゞずみつゝ、山田のひたにも驚かず色こき稻どもの中にまじりてうちなくもうれへがほなり。瀧の聲はいとゞ物思ふ人を驚かしがほに耳かしがましようとゞるきひゞく。叢の蟲のみぞより所なげになきよわりて枯れたる草の下よりりんだうのわれひとりのみ心ながうはひ出て、露けく見ゆるなど、皆例のこの比のとなれど折から所からにやいと堪へ難き程の物悲しさなり。例の妻戸のもとに立ちより給ひてやがて眺め出して立ち給へり。なつかしき程のなほしに色こまやかなる御ぞのうちめいとけうらにすきてかげよわりたる夕日のさすがに何心もなうさしきたるにま

ばゆげにわざとなく扇をさしかくし給へる手つき、女こそかうはあらまほしけれ、それだにかうはあらぬと見奉る。物思ひのなぐさめにまつべくゑましきかほのほひにて少將の君をとりわきてめしよす。篋子の程もなけれど奥に人やあらむと後めたくてえこまやかにも語らひ給はず。「猶近くてを、なはなら給ひそ、かく山深く分けいる志は隔て残るべくやは。霧もいと深しや」とてわざとも見入れぬさまに山の方をながめてなほなほと切にのたまへば、鈍色の几帳を簾垂のつまより少しおし出て、裾をひきそばめつゝ居たり。大和守の妹なれば離れ奉らぬうちに幼くよりおほしたて給ひければきぬの色いとこくてつるばみの喪ぎぬ一襲小袷着たり。「かく盡せぬ御事はさるものにて聞えむ方なき御心のつらさを思ひそふるに心魂もあくがれはてゝ見る人ごととに咎められ侍れば今は更に忍ぶべき方なし」といと多く恨みつゞけ給ふ。かの今はの御文のさまものたまひ出てゝいみじう泣き給ふ。この人もましていみじう泣きいりつゝ、「その夜の御返りさへ見え侍らずなりにしを今は限の御心にやがておぼしいりて暗うなりにし程の空の氣色に御心ちまどひにけるを、さるよわめに例のものゝけのひさいれ奉るとなむ見給へし。過ぎにし御事にもほどほど御心惑ひ給ひぬべかりし折々多く侍りしを、宮の同じさまにまづみ給ひしをこしらへ聞えむの御心づよさになむやうやう物覺え給ひし。この御歎をばお前には唯われかの御氣色にてあきれてくらさせ給ひし」などのどめがたげに打ち歎きつゝはかばかしうもあらずさこゆ。「そよや、そもあまりにおぼめかしういふかひなき御心ちなり。今はかたじけなくとも誰をかはよるべに思

ひ聞え給はむ。御山ずみもいと深き峯に世の中をおぼし絶えたる雲の中なめれば聞え通ひ給はむことかたし。いとかく心うき御氣色聞えまらせ給へ。萬の事さるべきにこそ。世にありへじとおぼすともまたがはぬ世なり。まづはかゝる御別れの御心になははゞあるべきことかは「など萬におほくの給へど、聞ゆべきこともなくて打ち歎きつゝ居たり。鹿のいといたく鳴くを「われおとらめや」とて、

「里とほみ小野の篠原わけてきてわれもまかこそ聲もをしまね」とのたまへば、

「ふぢごろも露けき秋の山人はまかのなく音にねをぞそへつる」。よからねど折からに忍びやかなるこわづかひなどをよろしう聞きなし給へり。御せうそことかう聞え給へど「今はかくあさましき夢の世を少しも思ひさます折あらばなむ、絶えぬ御とぶらひも聞えやるべき」とのみすくよかにいはせ給ふ。「いみじういふかひなき御心なりけり」と歎きつゝ歸り給ふ。道すがらも哀なる空を眺めて十三日の月いと花やかにさし出てぬればをぐら山もたどるまじうおはするに一條の宮はみちなりけり。いとどうちあばれて未申の方のくづれたるを見ればはるばるとおろしこめて人かげも見えず。月のみ遣水のおもてをあらはにすみなしたるに大納言こゝにてあそびなど志給ひし折々を思ひ出で給ふ。

「見し人のかげすみはてぬ池水にひとりやどもる秋の夜の月」とひとりごちつゝ殿におはしても月を見つゝ心は空にあくがれ給へり。「さも見苦しう、あらざりし御くせかな」と御達もにくみあへり。上はまめやかに心うくあくがれたちぬる御心なめり、もとよりさる方に

ならひ給へる六條院の人々をともしればめてたきためしにひき出てつゝ心よからずあひだ  
ちなきものに思ひ給へるわりなしや、われも昔よりまかならひなましかば人めもなれてな  
かなかすぐしてまし、世のためしにまつべき御心ばへと親はらからよりはじめ奉りめやす  
きあえものにま給へるを、ありありてすゑにはぢがましきことやあらむなど、いといたう歎  
い給へり。夜も明けがた近くかたみにうち解け給ふことなくてそむきそむきに歎きあかし  
て朝霧の晴間もまたず例の文をぞ急ぎ書きたまふ。いと心づきなしとおぼせどありしやう  
にもばひ給はず。いとこまやかにかきさてうち置きて嘯きたまふ。忍び給へどもりて聞きつけ  
らる。

「いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめてとかいひしひとこと。うへより落つる  
とやかいたまへらむ。おしつゝみて名残もいかでよからむ」など口ずさび給へり。人めして  
給ひつ。御返事をだに見つけてしがな、猶いかなることぞとけしき見まほしうおぼす。日た  
けてぞもて参れる。紫のこまやかなる紙すくよかにて小少將ぞ例の聞えたる。唯同じさまに  
かひなきよしを書きていとほしさにかのありつる御文に手習ひすさみ給へるをぬすみたる  
とて中にひきやりて入れたり。目には見給ひてけりとおぼすばかりの嬉しさぞいと人わろ  
かりける。そこはかとなく書き給へるを見つゞけ給へれば、

「朝夕になくねをたつるをの山は絶えぬなみだやおとなしの瀧」とやとりなすべからむ  
ふることなど物思はしげにかきみだり給へる御手など見所あり。人のうへなどにてかやう

のすき心思ひいらるゝはもどかしう現心ならぬとに見聞きしかど、身のうへにてはげにいと堪へがたかるべきわざなりけり、あやしや、などかうしも思ふらむと思ひかへし給へどえしもかなはず。六條院にも聞しめしていととおとなしう萬を思ひまづめ人のそしり所なくめやすくて過ぐし給ふをおもだしう我がいにしへ少しあざればみあだなる名をとり給ひしおもておこしに嬉しう覺しにたるを、いとほしういづ方にも心苦しき事のあるべきことさしはなれたるなからひにてだにあらでとおとなどもいかに思ひ給はむ、さばかりの事たどらぬにはあらじ、宿世といふもの通れわびぬる事なり、ともかくも口いるべきことならずとおぼす。女のためのみこそ何方にもいとほしけれとあいなく聞しめしなげく。紫の上にもきし方行く先のことおぼし出てつゝかうやうのためしを聞くにつけてもなからむ後うしろめたう思ひ聞ゆるさまをのたまへば、御顔うち赤めて心うくさまておくらかし給ふべきにやとおぼしたり。女ばかり身をもてなすさまも所せう哀なるべきものはなし。物の哀をもをかしきことを見知らぬさまにひきいりまづみなどすれば何につけてか世にふるはえはえしさも常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、大かた物の心をまらずいふかひなきものにならひたらむもおぼしたてけむ親もいと口をしかるべきものにはあらずや、心にのみこめて無言太子とか、法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに悪しき事善き事を思ひまりながらうづもれなむもいふかひなし、我が心ながらもよき程にはいかたもつべきぞとおぼしめぐらすにも今はたゞ女一の宮の御ためなり。大將の君参り給へるついであり



て思ひ給へらむ氣色もゆかしければ「御息所の忌はてぬらむな。昨日今日と思ふほどに三そ年よりあなたのことになる世にこそあれ。哀にあぢきなしや。夕の露のかゝる程のむさぼりよ。いかでこのかみそりて萬そむきすてむと思ふを、さもものどやかなるやうにても過ぐすかな。いとわろきわざなりや」とのたまふ。「誠にをしげなき人だにおのがじゝは離れ難く思ふ世にこそ侍るめれ」など聞えて「御息所の四十九日のわざなど大和守某のあさん一人あつかひ侍る、いと哀なるわざなりや。はかばかしきよすがなき人は生ける世のかぎりにてかゝる世の果こそ悲しう侍りけれ」と聞え給ふ。「院よりもとぶらはせ給ふらむ。かのみこいかに思ひ歎き給ふらむ。はやう聞きしよりはこの近き年頃事にふれてきゝ見るに、この更衣こそ口惜しからずめやすき人のうちなりけれ。大方の世につけて惜しきわざなりや。さてもありぬべき人のかううせゆくを院もいみじう驚きおぼしたりけり。かのみこそはこゝに物し給ふ入道の宮よりさしつぎにはらうたう老給ひけれ。人さまもよくおはすべし」とのたまふ。「御心はいかゞ物し給ふらむ。御息所はこともなかりし人のけはひ心ばせになむ。またしう打ち解け給はざりしかどはかなきとのついでにおのづから人の用意はあらはなるものになむ侍る」と聞え給ひて宮の御事もかけずいとつれなし、かばかりのすくよけ心に思ひそめてむこと諫めむにかなはじ、用ゑざらむものから我さかしにと出てむもあいなしとおぼして止みぬ。かくて御法事に萬とりもちてせさせ給ふ。ことの聞えおのづから隠れなければ大殿などにも聞き給ひてさやはあるべきなど、女がたの心あさきやうに、おぼしなすぞわりなき

や。かの日は昔の御心あれば君達もまかてとぶらひ給ふ。誦經など殿よりもいかめしうせさせ給ふ。これかれさまさま劣らず去給へれば時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。宮はかくて住みはてなむと覺したつことありけれど院に人のもらし奏しければ、「いとあるまじきことなり。げに數多とごまかうさまに身をもてなし給ふべき事にもあらねど、後見なき人なむ、なかなかさるさまにてあるまじき名をたち、罪えがましきときこの世後の世中空にもどかしき咎おふわざなる。こゝにかく世を捨てたるに三宮のおなじごと身をやつし給へる、すゑなきやうに人の思ひいふも捨てたる身に思ひなやむべきにはあらねど、必ずさしもやうのことゝ争ひ給はむもうたてあるべし。世のうきにつけて厭ふはなかなか人わろきわざなり。心と思ひとるかたありて今すこし思ひまづめ心すましてこそともかうも」と度々聞え給ひけり。このうきたる御名をぞ聞しめしたるべき、さやうのこの思はずなるにつけてうんじ給へるといはれ給はむことをおぼすなりけり。さりとて又あらはれてものし給はむもあはあはしう心づきなきことゝおぼしながら耻しとおぼさむもいとほしきを、何かはわれさへ聞きあつかはむとおぼしてなむこのすぢはかけても聞え給はざりける。大將も、とかくいひなしつるも今はあいなし、かの御心にゆるし給はむことはかたげなめり、御息所的心まりなりけりと人にはまらせむ、いかゞはせむ、なき人に少しあさき咎はおほせていつありそめしことどもなく紛はしてむ、さらがへりてけさうだち涙を盡しかゞづらはむもいとうひうひしかるべしと思ひ給ひて、一條にわたり給ふべき日その日ばかりと定めて大和

守めしてあるべきさはふのたまひ、宮のうちはらひまつらひ、さこそいへども女どちは草玄  
げう住みなし給へりしを、磨きたるやうにまつらひなして御心づかひなどあるべきさはふ  
めてたう壁代御屏風几帳おましなどまでおぼしよりつゝ大和守にのたまひてかの家にぞ急  
ぎつかうまつらせ給ふ。その日はわれおはしゐて御車御前など奉れ給ふ。宮は更に渡らじと  
おぼしのたまふを人々いみじう聞え大和守も「更にうけ給はらじ、心ほそく悲しき御有様を  
見奉りなげきこのほどの宮仕はたゆるに随ひて仕うまつりぬ。今は國のことも侍り罷り下  
りぬべし。宮の内の事も見給へゆづるべき人も侍らず。いとたいしいかにと見給ふる  
を、かく萬におぼしいとなむを、げにこの方にとりて思ひ給ふるには必ずしもおはしますま  
じき御有様なれど、さこそはいにしへも御心になはぬためし多く侍れ。一所やは世のもと  
きをもおはせ給ふべき。いと幼くおはしますことなり。たけうおぼすとも女の御心ひとつに  
我が御身をとりましため顧み給ふべきやうかあらむ。猶人のあがめかしづき給へらむに助  
けられてこそ深き御心のかしき御おきてもそれにかゝるべきものなれ。君達の聞えまら  
せ奉り給はぬなり。かつはさるまじき事をも御心どもに仕うまつりそめ給ひて」といひつゞ  
けて左近少將をせむ。あつまりてきこえこしらふるにいとわりなく、あざやかなる御ぞども  
人々の奉りかへさするもわれにもあらず、猶いとひたふるにそぎ捨てまほしうおぼさるゝ  
御ぐしをかき出て見給へば六尺ばかりにて少しほそりたれど人はかたはにも見奉らず。み  
づからの御心には、いみじのおとろへや、人に見ゆべき有様にもあらず、さまざまに心うき

身をとほしつゞけてまた臥し給ひぬ。「時たがひぬ。夜も更けぬべし」と皆さわぐ。時雨いと心あわだしう吹きまがひ、萬にものがなしければ、

「のぼりにし峯の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな」。心ひとつにはつよくおぼせどその比は御缺などやうのものは皆とりかくして人々のまもり聞えければ、かくもてさわがざらむにだに、何のをしげある身にてかをこがましう若々しきやうにはひき忍ばむ、人さゝもうたておずましかべさわさをとおぼせば、そのほいのごともま給はず。人々は皆急ぎたちておのちの櫛手箱唐櫃萬の物をはかばかしからぬ袋やうのものなれど皆さきだて、運びたれば一人とまり給ふべうもあらで、泣く泣く御車に乗り給ふものから、かたはらのみまもられ給ひてこち渡り給ひし時御心地の苦しきにも御ぐしかきなてつくろひおろし奉り給ひしをおぼし出づるに、目もきりていみじ。御はかしにそへて經箱をそへたるが御かたはらもはなれねば、

「戀しさのなぐさめがたきかたみにて涙にくもる玉のはこかな」。黒きもまだしあへさせ給はず。かの手ならし給へりし螺鈿の箱なりけり。誦經にせさせ給ひしをかたみにとゞめ給へるなりけり。浦島の子が心地なむ。おはしましつきたれば殿の内悲しげもなく人げ多くてあらぬさまなり。御車よせており給ふを更にふる里とおもほえず、疎まじううたておぼさるれば頼にもおり給はず。いと怪しう若々しき御さまかなと人々も見奉り煩ふ。殿はひんがしの對の南面を我が御方に假にまつらひてすみつきがほにおはす。三條殿には人々「俄にあさ

ましうなり給ひぬるかな。いつの程にありしとぞ」と驚きけり。なよゝかにをかしばめることを好ましからずおぼす人はかくゆくりかなることぞ打ちまじり給うける。されど年經にけることを音なく氣色ももらさて過ぐし給ひけるなりとのみ思ひなして、かく女の御心ゆるび給はぬと思ひよる人もなし。とてもかくても宮の御ためこそいとほしけれ。御まうけなどさまかはりて物のはじめゆゝしげなれど物まるらせなど皆まづまりぬるにわたり給ひて、少將の君をいみじうせめ給ふ。「御志まことにながうおぼされば今日明日を過ぐして聞えさせ給へ。なかなか立ちかへりて物おぼしまづみてなき人のやうにてなむふさせ給ひぬる。こしらへ聞ゆるをもつらしとのみおぼされれば何事も身のためこそ侍れ。いと煩はしう聞えさせにくくなむ」と聞ゆ。「いとあやしう推し量り聞えさせしには違ひていはけなく心得難き御心にこそありけれ」とて思ひよれるさま、人の御ためも我がためも世のもどきあるまじうのたまひ續ければ、「いでや只今は又いたづら人に見なし奉るべきにやと、あわたしき亂り心ちに萬思ひ給へわかれず。あが君とかくおしたちてひたぶるなる御心な遣はせ給ひぞ」と手をする。「いとまだまらぬよかな。にくゝめざましと人よりけに覺しおとすらむ身こそいみじけれ。いかで人にもことわらせむ」と、いはむ方なしと覺してのたまへば、さすがにいとほしうもあり。「まだまらぬはげに世づかぬ御心構へのけにこそはと、ことわりはげに何方にかはよる人侍らむとすらむ」と、少しうち笑ひぬ。かく心ごはけれど今はせかれ給ふべきならぬばやがてこの人をひきたて、推し量りにいり給ふ。宮はいと心うくなさ

けなくあはつけき人の心なりけりと、ねたくつらければ若々しきやうにはいひさわぐともとおぼして塗籠におましひとつまかせ給ひて内よりさして大殿ごもりにけり。これもいつまでにかは、かばかりに亂れ立ちにたる人の心どもはいと悲しう口をしうおぼす。男君はめざましうつらしと思ひ聞え給へどかばかりにては何のもてはなるゝことかはと、のどかにおぼして萬に思ひあかし給ふ。山鳥の心ちぞし給ひける。辛うじて明方になりぬ。かくてのみことゝいへばひたおもてなるべければ出で給ふとて唯聊のひまをだにといみじう聞え給へどいとつれなし。

「恨みわびむねあきがたき冬の夜にまたさしまさる關のいはかど。聞えむ方なき御心なりけり」となくなく出で給ふ。六條院にぞおはして休ひ給ふ。ひんがしのうへ「一條の宮渡し奉り給へることゝがの大殿わたりなどに聞ゆる、いかなる御事にかは」といとおほどかにの給ふ。御簾に御几帳をへたれどそばよりほのかには猶見え奉り給ふ。「さやうにも猶人のいひなしつべきとに侍り。故御息所はいと心強うあるまじきさまにいひはなち給ひしかど、がぎりのさまに御心ちの弱りけるに又見ゆづるべき人のなきや悲しかりけむ。なからむ後のうしろみにとやうなることの侍りしかばもとよりの志も侍りしとにてかく思ひ給へなりぬるをさまざまいかに人あつかひ侍らむかし。さしもあるまじきとをもあやしう人こそ物いひさがなきものにあれ」とうち笑ひつゝ「かのさうじみなむ、猶世にへじと深く思ひたちて尼になりなむと思ひむすぼしれ給ふれば、なにかはこなたかなたにきゝにくゝも侍るべ

きを、さやうに嫌疑はなれても、又かの遺言はたがへじと思ひ給へて唯かくいひあつかひ侍るなり。院のわたらせ給へらむにも事のついで侍らばかうやうにまねび聞えさせ給へ。ありありて心づきなき心つかふとおぼしのたまはむをはじかり侍りつれどげにかやうのすぢにてこそ人のいさめをもみづからの心にも随はぬやうに侍りけれ」と忍びやかに聞え給ふ。「人のいつはりによと思ひ侍りつるを誠にさるやうある御氣色にこそは。皆世の常のことなれど三條の姫君のおぼさむ事こそいとほしけれ。のどやかにならひ給うて」と聞え給へば、「らうたげにもものたまへなす姫君かな。いと鬼々しう侍るさがなものを」とて「などてかそれをもおろかにはもてなし侍らむ。かしこけれど御ありさまどもにてもおしはからせ給へ。なだらかならむのみこそ人はつひのとは侍るめれ。さがなくことがましきも暫しはなまむつかしう煩らはしきやうには憚らるゝことあれど、それにしも随ひはつまじきわさなれば事のかしう煩らはしきやうにはあきたしや。猶南のおとどの御心用こそさまざ亂れ出でさぬるのちわれも人もにくげにあきたしや。猶南のおとどの御心用こそさまざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそはめてたきものには見奉りはて侍りぬれ」などほめ聞え給へば、笑ひ給ひて「物のためしに引きいて給ふ程に身の人わろき覺えこそ顯はれぬべう。さてをかしきことは院のみづからの御くせをば人あらぬやうに聊あだあだしき御心づかひをばたいしとおぼいていませしめ申し給ふ、まううごとにも聞え給ふめるこそさかしたつ人のおのがうへまらぬやうに覺え侍れ」とのたまへば「さなむ常にこの道をしもいませしめ仰せらるゝ。さるはかしこそ御教ならでもいとよくをさめて侍る心をとてげにを

かしと思ひ給へり。お前に参り給へればかの事は聞しめしたれど何かはさゝがほにもと  
ぼいて唯うちまもり給へるに、いとめてたくさよらにこの比こそねびまさり給へる御盛な  
めれ。さるさまのすきごとを志給ふとも人のもどくべきさまも志給はず、鬼神も罪ゆるしつ  
べくあざやかに物清げに若う盛にほひをちらし給へり。物思ひまらぬわかうどのほどに  
はたおはせず、かたほなるところなうねびと、のほり給へることわりぞかし。女にてなどか  
めでざらむ、鏡を見てもなどかおごらざらむと我が御子ながらも覺す。日たけて殿には渡り  
給へり。入り給ふより若君たちすぎすぎうつくしげにてまつはれ遊び給ふ。女君は帳の内に  
ふし給へり。入り給へれど目も見あはせ給はず。つらさにこそはあめれと見給ふもことわり  
なれど、はゞかり顔にももてなし給はず。御ぞをひさやり給へれば「いづこととおはしつる  
ぞ。まろは早う志にき、常に鬼とのたまへば同じくはなりはてなむとて」とのたまふ。「御心  
こそ鬼よりけにもおはすれ。さまはにくげもなければ得うとみはつまじ」と何心もなういひ  
なし給ふも心やましうて「めでたきさまになまめい給へらむあたりもありふべき身にもあ  
らねばいづちもいづちもうせなむとす。猶かくだになおほし出でそ。あいなく年比を経ける  
だに悔しきものを」とて起きあがり給へるさまはいみじうあいぎやうづきてにほひやかに  
うち赤め給へる顔いとをかしげなり。「かく心幼げに腹立ちなし給へればにや、めなれてこ  
の鬼こそ今は恐しくもあらずなりにたれ。かうがうしきけをそへばや」と戯にいひなし給へ  
ば「何事いふぞとよ。おいらかに志に給ひね。まろも死なむ。見ればにくし、開けば愛ぎやう



なし、見捨て、死なむは後めたし」とのたまふにいとをかきさまのみまさればこまやかに笑ひて、「近くこそ見給はざらめ、よそにはなどか聞き給はざらむ。さても契深かなる世をまらせむの御心なり。俄にうち續くべかなるよみぢのいそぎはさこそは契り聞えしか」といとおれなく聞えて、何くれとこしらへ聞え慰め給へばいと若やかに心うつくしうらうたき心はたおはする人なればなほざりごと、見給ひながら、おのづからなごみつゝ物し給ふを、いと哀とおぼすものから心は空にて、かれもいと我が心をたて、つようものものしき人のけはひには見え給はねど、もし猶ほ意ならぬことにて尼になども思ひなり給ひなばをこがましうもあべいかなと思ふに、暫しはとだえおくまじうあわたしき心ちして暮れ行くまゝに、今日も御かへりだになきよとおぼして心にかゝりていみじうながめを志給ふ。昨日今日つゆも参らざりける、物聊参りなどしておはす。「昔より御ために志のおろかならざりしさま、おとこのつらくもてなし給ひしに、世の中のまれがましき名をとりしかど堪へ難きをねんじてこゝかしてすくみ氣色ばみしあたりを數多聞き過ぐし、有様は女だにさしもあらじとなむ、人ももどきし。今思ふにもいかてかはさありけむと、我が心ながらいにしへだに重かりけりと思ひまらるゝを、今はかくにくみ給ふともおぼしすつまじき人々と所せきまて數そふめれば御心ひとつにもてはなれ給ふべくもあらず。又よしみ給へや、命こそさだめなき世なれ」とてうち泣き給ふこともあり。女も昔の事を思ひ出で給ふに哀にもありがたかりし御中のさすがに契深かりけるかななど思ひ出でたまふ。なよびたる御ぞどもぬぎ給う

て心ことなるをとりかさねて、たきしめ給ひ、めでたうつくろひけさうして出て給ふを、ほかに見いだして忍び難く涙の出でくれば脱ぎとめ給へるひとへの袖をひきよせて、

「なる、身をうらみむよりは松島のあまの衣にたちやかへまし。猶うつし人にてはえすぐすまじかりけり」とひとりとごとのたまふを、立ちとまりて「さも心うき御心かな。

松島のあまのぬれぎぬなれぬとてぬぎかへつてふ名をたゞめやは」。うちいそぎていとなほなほしや。かしてには猶さし籠り給へるを、人々「かくてのみやは。若々しうけしからぬ聞えも侍りぬべきを、例の御有様にて、あるべき事をこそ聞え給はめ」など萬に聞えければ、さもある事とはおぼしなから今より後よその聞えをも我が御心の過ぎにし方をも心づきなくうらめしかりける人のゆかりとおぼしまりてその夜も對面し給はず。「戯れにく、珍らかなり」と聞え盡し給ふ。人もいとほしと見奉る。「聊も人心ちするをりあらむに忘れ給はずばどもかうも聞えむ。この御服の程は一筋に思ひ亂るゝことなくてだに過ぐさむとなむ深くおぼしのたまはするを、かくいとあやにくにまらぬ人なくなりぬめるを、猶いみじうつらきものに聞え給ふ」と聞ゆ。「思ふ心は又ことさまに後やすきものを、思はずなりける世かな」と打ち歎きて「例のやうにておはしまさば物ごしなどにも思ふことばかり聞えて、御心破るべきにもあらず。數多の年月をも過ぐしつべくなむ」などつきもせず聞え給へど「猶かゝるみだれにそへてわりなき御心なむいみじうつらき。人のきゝ思はむことも萬になのめならざりける身のうさをばさるものにて殊更に心うき御心がまへなり」と又いひかへし恨み

給ひつゝ遙にのみもてなし給へり。さりとしてかくのみやは、人の聞き漏さむこともことわりと、はしたなうこの人めもおぼえ給へば、うちうちの御心づかひはこのたまふさまになひてもまばしはなさけばまむ。世づかぬ有様のいとうたてあり、又かゝりとしてかきたえ参らずは人の御名いかゞはいとほしかるべき。ひとへに物をおぼしてをさなげなるこそいとほしけれ、なごこの人をせめ給へば、げにとも思ひ、見奉るも今は心ぐるしう辱うおぼゆるさまなれば、人かよはし給ふ塗籠の北の口より入れ奉りてけり。いみじうあさましうつらしと、さぶらふ人をもげにかゝる世の人の心なればこれよりまさるめを見せつべかりけりと、たのもしき人もなくなりはて給ひぬる御身を返す返す悲しうおぼす。男は萬におぼしきるべきことわりを聞え知らせ、言の葉おほう哀にもをかしうも聞え盡し給へど、つらく心つきなしとのみおぼいたり。「いとかういはむ方なきものにおぼされける身の程はたぐひなうはづかしければ、あるまじき心のつきそめけむも心ちなく悔しうおぼえ侍れど、とり返すものならぬうち何のたけき御名にかはあらむ。いふかひなくおぼしよはれ思ふにかなはぬ時身をなぐるためしも侍るなるを、唯かゝる心ざしをふかき淵になすらへ給ひて捨てつる身とおぼしなせ」と聞え給ふ。單衣の御ををひきくゝみてたけきことゝはねをなき給ふさまの心深くいとほしければ、いとうたて、いかなればいとかうおぼすらむ、いみじう思ふ人もかばかりになりぬれば、おのづからゆるぶ氣色もあるを、岩木よりけに靡き難きは契遠うてにくしなど思ふやうあなるを、さやおぼすらむと思ひよるに、あまりなれば心うくて三條の君

の思ひ給ふらむ事、いにしへも何心もなうあひ思ひかはしたりし世の事、年比今はとうらなきさまにうちたゆみとけ給へるさまを思ひ出づるも、我が心もて、いと味氣なう思ひ續けらるれば、あながちにもこしらへ聞え給はず歎きあかし給ひつ。かうのみまれがましうて出て入らむもあやしければ今日はとまりて心のどかに坐す。かくさへひたぶるなるをあさましと宮はおぼいて、いよいよ疎き御氣色のまさるを、をこがましき御心かなとかつはつらきものから哀なり。塗籠も殊にこまかなる物多うもあらでかうの唐櫃御厨子などばかり、あるはこなたかなたにかきよせてけぢかうまつらひてぞおはしける。内はくらさこちすれど、朝日さし出でたるけはひもり來たるに、うづもれたる御ぞひきやり、いとうたて亂れたるみぐしかきやりなどしてほの見奉り給ふ。いとあてに女しうなまめいたるけはひま給へり。男の御さまはうるはしだち給へる時よりも打ち解けて物し給ふは限もなうきよげなり。故君の殊なることなかりしだに心のかぎり思ひあがり御かたちまほにおはせずと、事の折に思へりし氣色をおぼしいづれは、ましてかういみじう衰へにたる有様をまばしにても見忍びなむやと思ふもいみじうはづかし。とさまかうさまに思ひめぐらしつ、我が御心をこしらへ給ふ。唯傍痛うこもかしこも人のきくおぼさむことの罪さらむかたなきに、をりさへいと心うければ慰めがたきなりけり。御手水御かゆなど例のおましの方に參れり。色ことなる御まつらひもいまいましきやうなれば、ひんがし面は屏風をたて、も屋のきはに香染の御几帳などことごとしきやうに見えぬもの沈の二階などやうのをたて、心ばへありてまつらひ

たり。大和守のまわざなりけり。人々もあざやかならぬ色の山吹、搔練、濃ききぬ、青鈍などを着かへさせ薄色のも、青朽葉などをとかくまぎらはして御だいはまゐる。女所にてまどけなく萬の事ならひたる宮のうちにあるさま心とどめて僅なる下人をもいひとへのこの人一人のみあつかひおこなふ。かくおぼえぬやんごとなきまらうどの坐すると聞きて、もと勤めざりけるけい司などうちつけに参りてまどころなどいふ方に侍ひて營みけり。かくせめて住みなれがほつくり給ふ程、三條殿かぎりなめりと、さしもやはとこそ、かつは頼みつれ、まめびとの心かはるは名残なくむと聞きしは誠なりけりと世をこゝろみはつる心地しで、いかさまにしてこのなめげさを見じとおぼしければ、大殿へ方たがへむとて渡り給ひにけるを、女御の御里におはする程などにたいめま給ひて、少し物思ひはるけ所に覺されて例のやうにも急ぎ渡り給はず。大將殿も聞き給ひて、さればよいと急に物し給ふ本性なり、このおとゞもはたおとなおとなしうのどめたる所さすがになく、いとひきりに花やい給へる人々にてめざまし見じ聞かじなどひがひがしき事どもまいて給ひつべきと驚かれ給ひて三條殿に渡り給へれば、君達もかたへはとまり給へれば、姫君たちさてはいとをさなきとをぞゐておはしにける。見つけて悦びむつれあるはうへを戀ひ奉りて愛へ泣き給ふを心苦しとおぼす。せうそこたびたび聞えて迎に奉れ給へど御かへりだになし。かくかたくなしうかがるしの世やとものしう覺え給へど、おとゞの見聞き給はむ所もあればくらしてみづから参り給へり。寢殿になむ坐すると例の渡り給ふ方は御達のみ侍らふ。若君達ぞ乳母にそ

ひておはしける。「今更にわかかしの御まじらひや、かゝる人をこゝかしこにおとしおき  
給ひてなど寢殿の御まじらひはふさはしからぬ御心のすぢとは年比見知りたれど、さるべ  
きにや、昔より心に離れがたう思ひ聞えて今はかくくたぐだしき人のかずかず哀なるをか  
たみに見すつべきにやは」とたのみ聞えける。「はかなきひとふしにかうはもてなし給ふべ  
くや」といみじうあばめ恨み申し給へば、「何事も今はとみあき給ひにける身なれば今はた  
なほるべきにもあらぬを、何かは」とて「あやしき人々は覺しすてずは嬉しうこそはあらめ」  
と聞え給へり。「なだらかの御いらへや。いひもていけば誰が名か惜しき」とてまひて渡り給  
へともなくてその夜は一人臥し給へり。あやしう中空なる比かなと思ひつゝ、君達を前にふ  
せ給ひて、かしこに又いかに覺し亂るらむさま思ひやり聞え、やすからぬ心づくしなればい  
かなる人かちやうなることをかしうおぼゆるらむなど物ごりしぬべう覺え給ふ。明けぬれば  
「人の見聞かむも若々しきを限とのたまひはてばさて試みむ。かしこなる人々もらうたげに  
戀ひ聞ゆめりしをえり残し給へるやうあらむとはみながらも思ひすてがたきを、ともかく  
ももてなし侍りなむ」とおどし聞え給へば、すがすがしき御心にてこの君達をさへや知らぬ  
所に率て渡し給はむとあやふし。「姫君をいざ給へかし見奉りにかく参りくることもはした  
なければ常にも参りこじ。かしこにも人々のらうたきをおなじ所にてだに見奉らむ」と聞え  
給ふ。まだいといはけなくをかしげにておはす。いと哀と見奉りたまひて「母君の御教にな  
かなひ給ひそ。いと心うく思ひとる方なき心あるはいと悪しきわざなり」と、いひまらせ奉

り給ふ。おとどかゝる事を聞き給ひて人わらはれなるやうにおぼし歎く。「志ばしはさても見給はておのづから思ふところ物せらるらむものを女のかくひきさりなるもかへりては軽く覺ゆるわざなり。よしかくいひそめつとならば何かはをれてふとしも歸り給ふ。おのづから人の氣色心ばへは見えなむ」とのたまはせてこの宮に藏人の少將の君を御使にて奉り給ふ。

「契あれや君を心にとどめおきてあはれと思ひうらめしときく。猶えおぼしはなたじ」とある御文を少將もておはしてたゞいりに入り給ふ。南面の簀子にわらうださし出て、人々の聞えにくし。宮はましてわびしとおぼす。この君は、中にいとかたちよくめやすきさまにてのどやかに見まはしていにしへを思ひ出てたる氣色なり。「参りなれにたる心ちしてうひうひしからぬにさも御覽じゆるさずもやあらむ」などばかりぞかすめ給ふ。「御返しいと聞えにくくてわれは更にえかくまじ」との給へば「御志もうたてわかわかしきやうに、せじがきはた聞にさすべきにやは」と集まりて聞にさすればまづ打ち泣きて、故上おはせましかばいかに心づきなしとおぼしながらも罪をかくい給はましと思ひ出て給ふに、涙の水莖にさきだつ心ちしてかきやり給はず。

「何ゆゑか世に數ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしともさく」とのみおぼしけるまゝに、かきもとぢめ給はぬやうにておしつゝみて出し給ひつ。少將は人々と物語して「時々さぶらふにかゝる御簾の前はたつきなき心ちし侍るを今よりはよすががある心ちして常に参

るべし。ないげなどもゆるされぬべき年比のまるしあらはれ侍る心地なむ志侍る」など氣色ばみおきて出て給ひぬ。いとゞしく心よからぬ御氣色あくがれまどひ給ふ程、大殿の君は日比ふるまゝにおぼし歎くことまげし。ないしのすけかゝる事を聞くに、われを世とともに許さぬものに給ふなるにかくあなづりにくきことも出てきにけるをと思ひて、文などは時々奉ればきこえたり。

「數ならば身にまられまし世のうさを人のためにもぬらす袖かな。なまけやけしとは見給へど物の哀なる程のつれづれにかれもいとたゞにはおぼえじとおぼすかた心ぞつきにける。

「人の世のうさを哀と見しかども身にかへむとは思はざりしを」とのみあるを、おぼしけるまゝと哀に見る。この昔御中だえの程には、このないしのすけこそ人まれぬものに思ひとめ給へりしかど、ことあらためて後はいとたまさかにつれなくなりまさり給ひつゝ、さすがに君達は數多になりにけり。この御腹には、太郎君、三郎君、四郎君、六郎君、おほい君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は、三の君、六の君、次郎君、五郎君とぞおはしける。すべて十二人が中にかたほなるなくいとをかしげにとりどりにおひ出て給ひける。内侍腹の君達しもなむかたちをかしう心ばせかどありて皆すぐれたりける。三の君、二郎君は、ひんがしのおとゞにぞとりわきてかしづき奉り給ふ。院も見なれたまひていとらうたく志給ふ。この御なからひのこといひやるかたなくとぞ。



## 御法

紫の上いたう煩ひ給ひし御こゝちの後、いとあつしくなり給ひてそこはかとなく惱み渡り給ふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月かさなればたのもしげなくいとあえかになりまさり給へるを、院のおもほし歎く事かぎりなし。まばしにても後れ聞え給はむことをばいみじかるべくおぼし、みづからの御心ちにはこの世に飽かぬことなくうしろめたきほだしたにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとゞめまほしき御命ともおぼされぬを、年比の御契かけはなれ思ひ歎かせ奉らむことのみぞ、人まれぬ御心のうちに物哀におぼされける。後の世のためにと尊き事どもを多くせさせ給ひつゝ、「いかで猶ほいあるさまになりてまばしもかゝづらはむ命の程はおこなひをまぎれなく」とたゆみなく覺しの給へど更にゆるし聞え給はず。さるは我が御心にもまかおぼしそめたるすぢなれば、かくねんごろに思ひ給へるついでに催されて、おなじ道にも入りなむとおぼせど、一度家を出て給ひなば假にもこの世を顧みむとはおぼしおきてず。後の世にはおなじ蓮の座を分けむと契りかはし聞え給ひてたのみをかけ給ふ御中なれど、こゝながらつとめ給はむ程は、おなじ山なりとも峰を隔てゝあひ見奉らぬすみかにかけはなれなむ事をのみおぼしまうけたるに、かくいとたのもしげなきさまに惱みあつゝ給へば、いと心苦しき御有様を今はとゆき離

れむきざみには捨てがたく、なかなか山水のすみか濁りぬべくおぼしとこほるほどに、唯  
うちあざへたる思ひのまゝの道心起す人々にはこよなうおくれ給ひぬべかめり。御ゆるし  
なくて心ひとつにおぼしたゝむもさまあしくほいなきやうなればこの事によりてぞ女君も  
うらめしく思ひ聞え給ひける。我が御身をも罪輕かるまじきにやと後めたくおぼされけり。  
年比わたくしの御願にて書かせ奉り給ひける法華經千部急ぎて供養し給ふ。我が御殿とお  
ぼす二條院にてぞし給ひける。七僧の法服などまなまな給はず。物の色縫ひ目よりはじめて  
清らなる事かぎりなし。大かた何事もいとかめしきわざどもをせられたり。ことごとしき  
さまにも聞え給はざりければ委しき事ども、まらせ給はざりけるに、女の御おきてにはい  
たりふかく佛の道にさへ通ひ給ひける御心の程を、院はいと限なしと見奉り給ひて大方の  
御志つらひ何かの事ばかりをなむ營ませ給ひける樂人舞人などのことは大將の君とりわき  
て仕うまつり給ふ。内、春宮、ささいの宮達をはじめ奉りて御方々こゝかしこに御誦經ほう  
もちなどばかりの事をうちま給ふだに所せきに、ましてその比この御いそぎを仕うまつら  
ぬ所なければいとこちたき事どもあり。いつの程にいとかくいろいろおぼしまうけしむ、げ  
にいそのかみの世々を経たる御願にやとぞ見えたる。花散里と聞えし御方、明石なども渡り  
給へり。南東の戸をあけておはします。寢殿の西の塗籠なりけり。北の廂に方々の御局ども  
はさうじばかりをへだてつゝまたり。やよひの十日なれば花盛にて空の景色などもうら  
かに物おもしろく、佛のおはすなる處の有様遠からず思ひやられて、ことなる深き心もなき

人さへ罪を失ひつべし。薪こるさんだんの聲もそこらつどひたるひゞきおどろおどろしきを、うち休みてきつまりたる程だに哀におぼさるゝを、ましてこの比となりて何事につけても心ぼそくのみおぼしまる。明石の御方に三宮して聞えたまへる。

「をしからぬこの身ながらもかぎりとして薪つきなむことのかなしさ」。御かへり心ぼそきすぢは後の聞えも心おくれたるわざにや、そこはかとなくぞあめる。

「薪こるおもひはけふをはじめにてこの世にねがふ法どはるけき」。夜もすがらたふときことにうちあはせたる鼓の聲絶えずおもしろし。ほのぼのと明け行く朝ぼらけ、霞の間より見えたる花のいろいろ猶春に心とまりぬべく匂ひわたりにて百千鳥のさへづるも笛の音に劣らぬ心ちして物の哀もおもしろさも残らぬ程に、陵王の舞ひて急になる程の末つかたの樂花やかに賑はしく聞ゆるに、皆人のぬぎかけたる物のいろいろなども物の折からにをかしうのみ見ゆ。み子達上達部の中にも、物の上手ども手のこさず遊び給ふ。かみしも心ちよげに興ある氣色どもなるを見給ふにもこのり少しと身をおぼしたる御心のうちには萬の事哀におぼえ給ふ。昨日例ならず起き居させ給へりし名残にやいと苦しうて臥し給へる、年比かゝる物の折ごとに参りつどひ遊び給ふ人々の御かたち有様のものがじゝのオども琴笛の音をも今日や聞き給ふべきとぢめならむとのみおぼさるれば、さしも目とまるまじき人の顔ども、哀に見渡され給ふ。まして夏冬の時につけたる遊び戯ぶれにもなまいどましきまいたの心はちのづから立ちまじりもすらすらめど、さすがに情をかはし給ふ方々は誰も久しくと

まるべき世にはあらざなれど、まづ我ひとり行くへまらずなりなむをおぼしつゞくるいみ  
じう哀なり。ことはてゝおのがじゝ歸り給ひなむとするも遠きわかれめきてをしまる。花散  
里の御かたに、

「絶えぬべき御法ながらぞたのまるゝ世々にと結ぶ中のちぎりを」。御かへり、

「結びおくちぎりは絶えじ大かたののこりすくなきみのりなりとも」。やがてこのついで  
に不斷の讀經懺法などたゆみなく尊き事どもをせさせ給ふ。御ず法はことなるまるしも見  
えて程經ぬれば、例の事になりてうちへさるべき所々寺々にてぞせさせ給ひける。夏にな  
りては例の暑さにさへいとゞ消え入り給ひぬべき折々多かり。その事とおどろおどろしか  
らぬ御心ちなれど、唯いとよわきさまになり給へれば、むつかしげに所せく惱み給ふ事もな  
し。さぶらふ人々もいかにおはしまさむとするにかと思ひよるにもまづかさくらしあたら  
しう悲しき御有様と見奉る。かくのみおはすれば中宮この院にまかてさせ給ふ。ひんがしの  
對におはしますべければこなたにはた待ち聞え給ふ。儀式など例に變らねどこの世の有様  
を見はてずなりぬるなどのみおぼせば、萬につけて物哀なり。名對面を聞き給ふにもその人  
かの人など耳とゞめて聞かれ給ふ。上達部などいと多く仕うまつり給へり。久しき御對面の  
とだえをめぐらしくおぼして御物語こまやかに聞え給ふ。院入り給ひて「今夜はすばなれた  
る心ちして無徳なりや。まかりやすみ侍らむ」とて渡り給ひぬ。起き居給へるを嬉しとおぼ  
したるもいとかなき程の御なくさめなり。「方々におはしましてはあなたに渡らせ給はむ

もかたじけなし。參らむことはたわりなくなりにて侍れば」とてまばしはこなたにおはすれば、明石の御方も渡り給ひて心深げにまづまりたる御物語ども聞えかはし給ふ。上は御心のうちにおぼしめぐらす事多かれどさかしげになからむ後などのたまひ出づることもし。唯なべての世の常なき有様をおほどかにことずくなゝるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、ことに出でたらむよりも哀に物心ほそき御氣色は老るう見えける。宮達を見奉り給うても「おのおの御行く末をゆかしく思ひ聞えけるこそかくはかなかりける身を惜む心のまじりけるにや」とて涙ぐみ給へる御顔の匂ひいみじうをかしげなり。などかうのみおぼしたらむとおぼすに中宮うち泣き給ひぬ。ゆゝしげになどは聞えなし給はず、物のついでなどにぞ「年比仕うまつりなれたる人々のことなるよるべなういとをしげなるはこの人かの人侍らずなりなむ後に御心とめて尋ねおもほせ」などばかり聞え給ひける。御讀經などによりてぞ例のわが御方に渡り給ふ。三宮はあまたの御中にいとをかしげにてありき給ふを、御心ちのひまには前にすす奉り給ひて人の聞かぬまに「まろが侍らざらむにおぼし出でなむや」と聞え給へば「いと戀しかりなむ。まろはうちの上よりも宮よりも母をこそまさりて思ひ聞ゆれ。おはせずば心ちむつかしかりなむ」とて目をすり紛はし給へるさまをかしければほゝゑみながら涙はおちぬ。「おとなになり給ひなばこゝに住み給ひてこの對の前なる紅梅と櫻とは花の折々に心留めてもてあそび給へ。さるべからむをりは佛にも奉り給へ」と聞え給へば、うちうなづきて御顔をまもりて涙の落つべかめれば立ちて

おはしぬ。とりわきておぼしたて奉り給へればこの宮と姫宮とをぞ見さし聞え給はむこと口惜しく哀におぼされける。秋待ちつけて世の中すこし涼しくなりては御心ちも聊さはやぐやうなれど猶ともすればかごとがまし。さるは身にまむばかりおぼさるべき秋風ならねど露けきをりがちにてすぐし給ふ。中宮は参り給ひなむとするを今まばしは御覽ぜよとも聞えまほしうおぼせども、さかしきやうにもありうちの御使の隙なきも煩しければさも聞え給はぬに、あなたにもえ渡り給はねば宮ぞ渡り給ひける。かたはらいたけれどげに見奉らぬもかひなしとて、こなたに御まつらひをことにせさせ給ふ。こよなう瘦せほそり給へれどかくてこそあてになまめかしきことの限なさもまさりてめでたかりけれと、きしかたあまりにほひ多くあざあざとかはせしさかりはなかなかこの世の花のかをりにもよそへられ給ひしを、限もなくらうたげにをかしげなる御さまにていと假初に世を思ひ給へる氣色似るものなく心苦しくすゞろに物がなし。風すごく吹き出でたる夕暮に前葎見給ふとて脇息により居給へるを院渡りて見奉り給ひて「今日はいとよく起き居給ふめるはこの御前にてはこよなく御心もはれはれしげなめりかし」と聞え給ふ。かばかりのひまあるをもいと嬉しと思ひ聞え給へる御氣色を見給ふも心苦しく、つひにいかにおぼしさわがむと思ふにあはれなれば、

「ちくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだる、萩のうは露」げにぞ折れかへりとまるべうもあらぬ花の露もよそへられたるをりさへ忍びがたきを、

「やゝもせばきえをあらそふ露の世におくれさきだつ程へずもがな」とて御涙をはらひあへ給はず。宮、

「秋風にまばしとまらぬ露の世をたれか草葉のうへとのみ見む」と聞えかはし給ふ。御かたちどもあらまほしく見るかひあるにつけてもかくて千年をすくすわさもがなとおぼさるれど、心にかなはぬことなればかけとめむ方なきぞ悲しかりける。「今は渡らせ給ひぬ。みだり心ちいと苦しくなり侍りぬ。いふかひなくなりける程といひながらいとなめげに侍りや」とて御几帳ひきよせて臥し給へるさまの常よりもいとたのもしげなく見え給へば、いかにおぼさるゝにかとて宮は御手をとらへ奉りてなく見奉り給ふに誠に消えゆく露の心ちして限に見え給へば、御誦經の使ども數も知らずたち騒ぎたり。さきさきも斯ていき出で給ふ折にならひ給ひて御ものゝけと疑ひ給ひて夜一夜さまさまのことを盡させ給へどかひもなく、明けはつる程に消えはて給ひぬ。宮も歸り給はでかくて見奉り給へるをかぎりなくおぼす。誰もたれもことわりの別れにてたぐひあることゝもおぼされず、珍らかにいみじく明けぐれの夢にまどひ給ふほどさらなりや、さかしき人おはせざりけり。さぶらふ女房などもあるかぎり更に物覺えたるなし。院はましておぼしまづめむ方なければ、大將の君近く参り給へるを御几帳のもとに呼び寄せ奉り給ひて「かく今はかぎりのさまなめるを、年比のほ意ありて思へる事かゝるささみにその思ひたがへて止みなむがいといとほしきを、御加持にさぶらふ大とこ達讀經の僧などの皆聲やめて出てぬなめるをさりともし立ちとまりても

のすべきもあらむ。この世には空しき心ちするを佛の御志るし今はかの暗き道のとぶらひだに頼み申すべきをかしらおろすべきよし物し給へ。さるべき僧誰かとまりたる」などのたまふ御けしき心づよくおぼしなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまにしみじくたへかね御涙のとまらぬをことわりに悲しく見奉り給ふ。「御ものゝけなどのこれも人の御心亂らむとてかくのみものは侍るを、さもやちはしますらむ。さらばとてもかくても御ほ意のことはよろしき事に侍るなり。一日一夜にても忌むことのまるしこそは空しからず侍るなれど、誠にいふかひなくなりはてさせ給ひて、後の御髪ばかりをやつさせ給ひても、ことなるかの世の御光ともならせ給はざらむものから、目の前の悲びのみまさるやうにて、いかゞ侍るべからむ」と申し給ひて御忌に籠り侍ふべき志ありてまかてぬ僧その人かの人などめしてさるべきことどもこの君ぞ行ひ給ふ。年比何やかやとおほけなき心はなかりしかど、いかならむ世にありしばかりも見奉らむ、ほのかにも御聲をだに聞かぬことなど心にも離れず思ひ渡りつるものを、聲は遂に聞かせ給はずなりぬるにこそはあめれ、空しき御からにても今一度見奉らむの志かなふべき折は只今より外にいかでかあらむと思ふに、つゝみもあへずなかれて女房のある限り騒ぎまどふを「あなかま、まばし」とまづめ顔にて御几帳のかたびらとを、物のたまふまぎれに引きあけて見給へば、ほのぼのと明け行く光もおぼつかなければ大となぶら近くかゝげて見奉り給ふに、あかず美しげにめてたう清らに見ゆる御顔のあたらしさに、この君のかく覗き給ふを見る見るあながちにかくさむの御心もおぼされぬなめり。



「かく何事もまだ變らぬ氣色ながら限りのさまは志るかりけるこそ」とて御袖を顔におしあて給へる程、大將の君も涙にくれて目も見え給はぬを志ひて志をりあけて見奉るに、なかなか飽かず悲しき事たぐひなきに誠に心まどひも志ぬべし。御髮の唯うちやられ給へる程こちたくきよらにてつゆばかり亂れたる氣色もなう艶々と美しげなるさまぞかぎりなき。火のいとあかきに御色はいと老ろく光るやうにてとかくうちまぎらはす事ありし、うつゝの御もてなしよりもいふかひなきさまに何心なくて臥し給へる御有様の飽かぬ所なしといはむも更なりや。なのめにだにあらざたぐひなきを見奉るに、死にいたるたまじひのやがてこの御からにとまらむとおもほゆるもわりなきことなりや。仕うまつりたる女房などの物おもほゆるもなければ、院を何事もおぼしわかれずおぼさるゝ御心ちをあながちにまづめ給ひて限りの御ことどもし給ふ。いにしへも悲しとおぼすことも數多見給ひし御身なれど、いとかうおりたちてはまだ知り給はざりけることを、すべてきしかた行くすゑたぐひなき心ちし給ふ。やがてその日とかくをさめ奉る。限りありける事なればからを見つゝもえ過ぐし給ふまじかりけるぞ心うき世の中なりける。はるばると廣き野の所もなく立ちこみて限りなくいかめしきさほふなれどいとはかなき烟にて程なくのぼり給ひぬるも例の事なれどあへなくいみじ。空をあゆむ心ちして人にかゝりてぞおはしましけるを見奉る人もさばかりいつかしき御身をと、物の心まらぬげすさへ泣かぬはなかりけり。御おくりの女房はまして夢路にまどふ心ちして車よりもまろび落ちぬべきをぞもてあつかひける。昔大將の君の御母君

うせ給へりし時の曉を思ひ出づるにもかれは猶物のおぼえけるにや、月のかほのあきらかに覺えしを今夜は唯くれ惑ひ給へる。十四日にうせ給ひてこれは十五日の曉なりけり。日はいと花やかにさしあがりて野邊の露もかくれたるくまなくて世の中おぼしつゝくるにいといとほしくいみじければ、おくるともいく世かはふべき。かゝる悲しさのまぎれに昔よりの御ほ意も遂げまほしくおもほせど、心よわき後のそしりをおぼせばこの程を過ぐさむとし給ふに胸のせきあぐるぞ堪へがたかりける。大將の君も御忌に籠り給ひてあからさまにもまかで給はず、明暮近くさぶらひて心苦しくいみじき御氣色をことわりに悲しく見奉り給ひて萬に慰め聞え給ふ。風野分だちて吹く夕暮に昔の事おぼしめて、ほのかに見奉りしものをと戀しく覺え給ふに、又かぎりの程の夢の心ちせしなど人知れず思ひつゞけ給ふに、堪へがたく悲しければ、人めにはさしも見えじとつゝみて阿彌陀佛阿彌陀佛とひき給はず、の數にまぎらはしてぞ涙の玉はもてけち給ひける。

「いにしへの秋の夕のこひしきにいまはと見えしあけくれの夢」ぞなごりさへうかりける。やんごとなき僧どもさぶらはせ給ひて、定まりたる念佛をばさるものにて法華經など誦せさせ給ふ。かたがたいとあはれなり。臥しても起きても涙のひるよなくさりふたがりて明し暮し給ふ。いにしへより御身の有様おぼしつゝくるに鏡に見ゆる影をはじめて人には異なりける身ながらいはけなき程より悲しく、常なき世を思ひあるべく佛などのすゝめ給ひける身を心づよくすぐして遂に來しかた行くさきもためしあらじと覺ゆる悲しさを見つる

かな、今はこの世に後ろめたき事残らずなりぬ、ひた道に行ひにおもむきなむにさはり所あるまじきを、いとかくをさめむ方なき心まどひにては、願はむ道にも入りがたくやとやしましきをこの思ひ少しなのめに忘れさせ給へと阿彌陀佛を念じ奉り給ふ。所々の御とぶらひうちをはじめ奉りて例の作法ばかりにはあらずいとまげく聞え給ふ。おぼしめしたる心のほどにはさらに何事も目にも耳にもとまらず、心にかゝり給ふ事あるまじけれど、人にほけほけしきさまに見えじ、今更に我が世の末にかたくなしく心弱きまどひにて世の中をなむ背きにけるとなかれとまらむ名をおぼしつゝ、むになむ、身を心に任せぬなげきをさへうちそへ給ひける。致仕のおとゝ哀をも折過し給はぬ御心にてかく世にたぐひなく物し給ふ人のはかなくらせ給ひぬることを口をしく哀におぼして、いとまばまば問ひ聞え給ふ。昔大將の御母上らせ給へりしもこの比のことぞかしとおぼし出づるにいと物悲しく、そのをりかの御身を惜み聞え給ひし人の多くもうせ給ひにけるかな、後れ先だつ程なき世なりけりやなど、まめやかなる夕暮にながめ給ふ。空の氣色もたゞならぬば御子の藏人の少將して奉り給ふ。哀なることなどこまやかに聞え給ひて、はしに、

「いにしへの秋さへ今のこゝちしてぬれにし袖に露どおきそふ」。をりからに萬のふる事おぼし出でられて何となくその秋の事戀しうかさあつめ、こぼるゝ涙をはらひもあへ給はぬまぎれに、御かへし、

「露けさはむかし今ともおもほえず大かた秋のよこそつらけれ。物のみ悲しき御心のま

「ならばまちとり給ひては心よわくも」と目留め給ひつべきおとこの御心ざまなればめやすきほどに」と度々のなほざりならぬ御とぶらひのかさなりぬる事」と悦び聞え給ふ。うすゞみとのたまひしよりは、今すこしこまやかにて奉れり。世の中にさいはひありめてたき人も、あいなる大かたの世にそねまれ、善きにつけても心のかぎりおごりて人のため苦しき人もあるを、あやしきまですゝなる人にもうけられ、はかなくまいて給ふことも何事につけても世にほめられ、心にくく折ふしにつけつゝ、らうらうしくありがたかりし人の御心ばへなりかし。さしもあるまじきおほよその人さへその比は風の音蟲の聲につけつゝ、涙おとさぬはなし。ましてほのかにも見奉りし人の思ひ慰むべき世なし。年比むつまじく仕うまつり馴れたる人々まばしも残れる命うらめしき事を歎きつゝ、尼になりこの世の外、山ずみなどに思ひたつもありけり。冷泉院のきさいの宮よりもあはれなる御せうそこ絶えず、盡させぬ事ども聞え給ひて、

「枯れはつる野邊をうしとやなき人の秋に心をとめてざりけむ。今なむことわり知られ侍りぬる」とありけるを、物おぼえぬ御心にもうちかへし置きがたく見給ふ。いふかひありをかしからむ方のなぐさめにはこの宮ばかりこそおはしけれと、聊物まざるゝやうにおぼしつゞくるにも涙のこぼるゝを、袖のいとまなくえかきやり給はず。

「のぼりにし雲ながらもかへり見よわれあきはてぬ常ならぬ世に。おしつゝみ給ひても」とばかりうち眺めておはす。すくよかにもおぼされず、われながら殊の外にほれほれし

くおぼし知らるゝ事多かるまぎらはしに女がたにぞおはします。佛のお前に人まげからずもてなしてのどやかにおこなひ給ふ。千年をももろともにとおぼしゝかど、限ある別ぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露もことことにまぎるまじく後の世をと、ひたみちにおぼしたつ事たゆみなし。されど人ぎゝをはゞかり給ふなむあぢきなかりける。御わざのことゝもはかばかしくのたまひ置きつることなかりければ、大將の君なむとりもちて仕うまつり給ひける。今日やとのみ我が身も心づかひせられ給ふをり多かるをはかなくてつもりけるも夢の心ちのみす。中宮などもおぼし忘るゝ時の間なく戀ひきこえたまふ。

## 幻

春の光を見給ふにつけてもいとゞくれ惑ひたるやうにのみ御心ひとつは悲しさのあらたまるべくもあらぬに、とには例のやうに人々参り給ひなすれど、御心地なやましきさまにもてなし給ひて御簾の内にもみおはします。兵部卿の宮わたり給へるにぞ、たゞうちとけたるかたにて對面し給はむとて御せうそきこえ給ふ。

「我が宿は花もてはやす人もなし何にか春のたづね來つらむ」。宮、うち涙ぐみ給ひて、「香をとめて來つるかひなく大方の花のたよりといひやなすべき」。紅梅の下に歩み出で給へる御さまのいとなつかしきにぞこれより外に見はやすべき人なくやと見え給へる。花

はほのかに開けさしつゝをかしき程のほひなり。御あそびもなく例に變りたること多かり。女房なども年比經にけるは墨ぞめの色こまやかにて、きつゝ悲しさも改めがたく思ひさますべき世なく戀ひ聞ゆるに、絶えて御方々にも渡り給はず、まぎれなく見奉るをなくさめにて慣れ仕らまつる。年比まめやかに御心留めてなどはあらざりしかど時々は見放たぬやうにおぼしたりつる人々も、なかなかかゝる寂しき御ひとりねになりては、いとおぼざうにもてなし給ひて夜の御とのゐなどにもこれかれと數多をおましのあたり引きさけつゝ侍らせ給ふ。つれづれなるまゝにいにしへの物語などお給ふ折々もあり。名残なき御ひじりごゝろの深くなり行くにつけても、さしもありはつまじかりける事につけつゝ、中比物うらめしうおぼしたる氣色の時々見え給ひしなどをおぼし出づるに、などてたはぶれにても又まめやかに心苦しきことにつけてもさやうなる心を見え奉りけむ、何事にもらうらうしうおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知り給ひながら怨じはて給ふことはなかりしかど、ひとわたりづゝはいかならむとすらむとおぼしたりしに、少しにても心を亂り給ひけむことのいとほしうくやしう覺え給ふさま胸よりも餘る心地し給ふ。その折のことの心をもまり、今も近う仕らまつる人々はほのぼの聞え出づるもあり。入道の宮の渡り始め給へりし程その折はしも色には更に出だし給はざりしかど、事にふれつゝあぢきなのわざやと思ひ給へりし氣色の哀なりし中にも、雪降りたりし曉に立ちやすらひて我が身もひえ入るやうに覺えて、空の氣色はげしかりしにいとなつかしうおいらかなるものから、袖のい

たう泣きぬらし給へりけるをひきかくしてせめてまぎらはし給へりし程の用意などを、夜もすがら夢にも又はいかならむ世にかとおぼし續けらる。曙にしも曹司におるゝ女房なるべし、「いみじうも積りにける雪かな」といふを聞きつけ給へる、唯その折の心地するに御傍のさびしきもいふ方なくかなし。

「うき世にはゆき消えなむと思ひつゝおもひの外に猶ぞほどふる」。例のまぎらはしには御てうづめして行ひ給ふ。うづみたる火起し出で、御火桶まるらす。中納言の君中將の君など御前近く御物語さこゆ。獨寢常よりもさびしかりつる夜のさまかな、かくてもいとよく思ひすましつべかりける世を、はかなくもかゝづらひけるかなとうち眺め給ふ。われさへうち捨てゝはこの人々のいと歎きわびむことの哀にいとほしかるべきなど見渡し給ふ。忍びやかにうち行ひつゝ經など讀み給へる御聲をよろしう思はむ事にてだに涙とまるまじきを、まして袖のまがらみせきあへぬまであはれにあけ暮に奉る人々の心地つきせず思ひ聞ゆ。「この世につけては飽かず思ふべきことをさをさあるまじうたかき身には生れながら又人よりもことに口惜しき契にもありけるかなと思ふこと絶えず。世のはかなく憂きををらさべく佛などのおきて給へる身なるべし。それを強ひて知らぬ顔にながらふればかく今はの夕近きすゑにいみじき事のとぢめを見つるに、宿世の程もみづからの心のきはも、のこりなく見はてゝ心やすきに今なむ露のほだしなくなりたるを、これかれかくてありしよりげにめならず人々の今はとて行き別れむ程こそ、今ひときはの心亂れぬべけれ。いとかなし

かし。わろかりける心の程かな」とて御目おし拭ひかくし給ふに、まぎれずやがてこぼるゝ御涙を見奉る人々ましてせきとめむかたなし。さてうち捨てられ奉りなむがうれはしさをおのちのち出でてまほしけれどさもえ聞えず、むせかへりてやみぬ。かくのみ歎き明し給へる曙、ながめくらし給へる夕暮などのまめやかなる折々は、かのおしなべてにはおぼしたらざりし人々を御前近くてかやらの御物語など志給ふ。中將の君とてさぶらふはまだちひさくより見給ひなれしを、いと忍びつゝ見給ひすぐさずやありけむ、いとかたはら痛きことに思ひて慣れも聞えざりけるを、かくうせ給ひて後は、その方にはあらず人より殊にらうたきものに心留めおぼしたりしものをとおぼし出づるにつけて、かの御かたみのすぢをぞ哀とおぼしたる。心ばせかたちなどもめやすくてうなゐまつに覺えたるけはひたゞならましよりはらうらうしと思ほす。疎き人には更に見え給はず、上達部などもむつまじき又御はらかなの宮達など常に參り給へれど、對面し給ふことをさをさなし。人に向はむ程ばかりはさかしく思ひまづめ、心をさめむと思ふとも月比にほけにたらむ身の有様、かたくなしきひがごとまじりて、末の世の人にもてなやまれむ後の名さへうたてあるべし。おぼれてなむ人も見えざなるといはれむも同じ事なれど、猶音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも見苦しきこと目の見るは、こよなくさはまさりてをこなりとおぼせば、大將の君などにだに御簾隔てしぞ對面し給ひける。かく心かはり志給へるやうに人のいひ傳ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはとねんじすぐし給ひつゝうき世をもえ背きやり給はず。御方々



に稀にもうちほのめき給ふにつけては、まづいとせき難き涙の雨のみふりまさればいとわりなくていづかたにも覺束なきさまにて過ぐし給ふ。きさいの宮はうちに參らせ給ひて三の宮をぞさうざうしき御なぐさめにはおはしまさせ給ひける。母ののたまひしかばとて對の御前の紅梅取りわきてうしろみありき給へるをいと哀と見奉り給ふ。二月になれば花の木どもの盛になるもまだしきも、木末をかしう霞み渡れるに、かの御かたみの紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覽す。

「植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らずがほにてきぬる鶯」とうそぶきありかせ給ふ。春深くなりゆくまゝに御前の有様にしへに變らぬをめで給ふ方にはあらねど、まづ心なく何事につけても胸いたうおぼさるれば大かたの世の外やうに鳥の音も聞えざらむ山のすゑゆかしのみいととなりまさり給ふ。山吹などの心地よげに咲きみだれたるもうちつけに露けくのみ見なされ給ふ。外の花は一重散りて八重咲く花櫻さかり過ぎて樺櫻はひらけ、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遅く疾き花の心をよくわきていろいろをつくし植ゑおき給ひしかば、時を忘れず匂ひ満ちたるに若宮「まるが櫻は咲きにけり。いかて久しく散らさじ。木のめぐりに几帳を立て、かたびらをあげずば風もえ吹きよらじ」とかしこう思ひえたりと思ひてのたまふ。顔のいと美しくしきにもうちゑまれ給ひぬ。「おほふばかりの袖もとめけむ人よりはいとかしこうおぼしより給へりかし」などこの宮ばかりをぞもてあそびに見奉り給ふ。「君になれ聞えむことものこり少しや。命といふもの今まばしかく

づらふべくとも對面はえあらしかし」とて例の涙ぐみ給へればいとものしとおぼして、母のたまひしことをまがまがしうのたまふとて、ふしめになりて御ぞの袖を引きまさぐりなどしつゝまぎらはしおはす。すみの間の高欄におしかりて御前の庭をも御簾の内をも見渡してながめ給ふ。女房などもかの御かたみの色がへぬもあり。例の色あひなるもあやなど花やかにはあらず、みづからの御直衣も色は世のつねなれど殊更にやつして無紋を奉れり。御老つらひなどもいとちろそかにこととぎて寂しく物心ぼそげにまめやかなれば、

「今はとてあらしやはてむなき人の心とめし春のかきねを」。人やりならずかなしうおぼさる。いとつれづれなれば入道の宮の御方に渡り給ふに、若宮も人に抱かれておはしまし。てこなたの若君と走り遊び花をしみ給ふ心ばへども深からず、いといはけなし。宮は佛の御前にて經をぞ讀み給ひける。何ばかり深うおぼしとれる御道心にもあらざりしかど、この世にうらめしく御心亂るゝ事もおはせず、のどやかなるまゝにまぎれなく行ひ給ひて一つ方に思ひはなれ給へるもいとうらやまし。かくあざへ給へる女の御志にだにおくれぬることゝ口惜しうおぼさる。あかの花の夕ばえしていとちもしろく見ゆれば、春に心よせたりし人なくて花の色すさまじくのみ見なさるゝを「佛の御かざりにてこそ見るべかりけれ」とのたまひて「對の前の山吹こそ猶世に見えぬ花のさまなれ。ふさの大ききなどよ志な高うなどはおきてざりける花にやあらむ。花やかににぎはしきかたはいとおもしろきものになむありける。植ゑし人なき春ともちらず顔にて常よりも匂ひかさねたることを哀に侍れ」とのたま

ふ。御いらへに「谷には春も」と何心もなく聞え給ふを、ことしもこそあれ心憂くもとおぼさるゝにつけては、その事のさらでもありなむかしと思ふに違ふふしなくてもやみにしかなと、いはけなかりし程よりの御有様をいへ何事ぞやありしとおぼし出づるには、まづそのをりかの折かどかどしうらうらうじう句ひ多かりし心さま、もてなし、言の葉のみ思ひ續けられ給ふに、例の涙のもろさはふとこぼれ出でぬるもいと苦し。夕暮の霞たどたどしうをかしき程なれば、やがて明石の御方に渡り給へり。久しうさしものぞき給はぬに覺えなき折なれば打ち驚かるれど、さまようけはひ心にくゝもてつけて、猶こそ人には優りたれと見給ふにつけては、又かうさまにはあらでこそ故よしをもてなし給へりしかとおぼしくらべらるゝにも面影に戀しう悲しさのみ増れば、いかにして慰むべき心ぞといとくらへ苦し。こなたにてはのどやかに昔物語などき給ふ。「人をあはれと心留めむはいとわるかるべきこと、いにしへより思ひえて、すべていかなる方にもこの世にまふとまるべきことなくと心づかひをせしに、大方の世につけて身のいたづらにはふれぬべかりし比ほひなど、とさまかうさまに思ひめぐらしゝに、命をもみづから捨つべく、野山の末にはふらかさむに殊なるさはりあるまじうなむ思ひなりしを末の世に今はかぎりの程近き身にてしもあるまじきほどし多うかゝづらひて、今まで過ぐしてけるが心弱うもどかしきことなど、さしてひとすぢの悲しさにのみはのたまはねど、おぼしたるさまのことわりに心苦しきをいとほしう見奉りて、大方の人めに何ばかり惜しげなき人だに心のうちのほだしおのづからおほう侍るなるを、まして

いかてかは心やすくもおぼし捨てむ。さやうにあざへたることはかへりてかるがるしきもどかしさなども立ち出て、なかなかなる事など侍るなるをおぼしたつ程にぶきやうに侍らむや。また遂に住みはてさせ給ふ方深う侍らむと思ひやられ侍りてこそ。古のためしなどを聞き侍るにつけても心に驚かれ思ふより違ふふしありて世を厭ふついでになるとか。それは猶わるきこと、こそ。猶まばしおぼしのどめさせ給ひて宮たちなどもおとなびさせ給ひまことに動きなかるべき御有様に見奉りなさせ給はむまでは亂れなく侍らむこそ、心やすくもうれしくも侍るべけれなどいとおとなびて聞えたるけしきいとめやすし。「さまで思ひのどめむ心深さを浅きに劣りぬべけれ」などのたまひて、昔より物を思ふことなど語り出で給ふ中に「故きさいの宮のかくれ給へりし春なむ、花の色を見ても誠に心あらばとおぼえし。それは大方の世につけてをかしかりし御有様をさなくより見奉りまみて、さるとおぼめのかなしさも人より殊におぼえしなり。みづからとりわく心ざしにしも物の哀はよらぬわざなり。年経ぬる人におくれて心をさめむかたなく忘れがたきも唯かゝる中のかなしさのみにはあらず。幼き程よりおぼしたてしありさま諸共に老いぬる末の世に打ち捨てられて、我が身も人の身も思ひつゞけらるゝ悲しさの堪え難きになむ。すべて物の哀も故あることもをかしきすぢも廣うおもひめぐらす。方々そふことの浅からずなるになむありけるなど夜更くるまで今昔の御物語にかくても明しつべき夜をとおぼしながらかへり給ふを女も物哀に思ふべし。我が御心にもあやしくもなりにけるかなとおぼしまらる。さても又例の御

行ひに夜中になりてぞ晝のおましいとかりそめにより臥し給ふ。つとめて御文奉り給ふに、  
「なくなくも歸りにしかな假の世はいづくもつひのとこよならぬに」。よべの御有様はう  
らめしげなりしかどいとかくあらぬさまにおぼしほれたる御氣色の心苦しさに、身の上は  
さしおかれて涙ぐまれ給ふ。

「雁がるし苗代水の絶えしよりうつりし花のかげをだに見ず」。ふりがたうよしある書き  
ざまにもなまめざましきものにおぼしたりしを、末の世にはかたみに心ばせを見まるとちに  
てうしろやすき方にはうちたのむべく思ひかはし給ひながら、またさりとてひたぶるにはた  
うちとけず、ゆゑありてもてなし給へりし心おきてを、人はさしも見知らざりきかしなどお  
ぼし出づ。せめてさうざうしき時はかやうに唯大方にうちほのめき給ふ折々もあり。昔の御  
ありさまには名残なくなりたるべし。夏の御方より御ころもがへの御装束奉り給ふとて、  
「夏衣たちかへてけるけふばかりふかき思ひもすゝみやはせぬ」。御かへし、

「羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいと悲しき」。祭の目いとつれづれ  
にて今日は物見るとて人々心地よげならむかしとてみ社のありさまなどおぼしやる。「女房  
などいかにさうざうしからむ。里に忍びて出て、見よかし」などのたまふ。中將の君ひんが  
しおもてにうたゝねまたるを歩みおはして見給へればいとさゝやかにをかきさまして起  
き上りたり。つらつき花やかに匂ひたる顔もてかくして少しふくだみたる髪のかゝりなど  
いとをかしげなり。紅のさばみたるけそひたる袴、くわんざう色のひとへいと濃き鈍色に黒

きなどうるはしからず重なりて、裳、唐衣もぬぎすべしたりけるをとかくひきかけなどするに、葵を傍に置きたりけるをとり給ひて「いかにとかや、この名こそ忘れにけれ」とのたまへば、

「さもこそはよるべの水にみ草るめけふのかざしよ名さへわする」とはぢらひて聞ゆ。げにといとほしくて、

「大かたは思ひ捨て、し世なれども葵はなほやつみをかすべき」など一人ばかりはおぼしはなたぬけしきなり。五月雨はいとどながめくらし給ふより外の事なくさうさうしきに、十餘日の月花やかにさし出てたる雲間のめづらしきに大將の君御前にさぶらひ給ふ。花たちばなの月かけにいときはやかに見ゆるかをりも追風なつかしければ千世をならせる聲もせなむとまたるゝほどに、俄に立ち出づるむら雲のけしきいとあやにくにておどろおどろしうふりくる雨にそひて、さと吹く風にとろろも吹きまどはして空くらき心地するに、窓をうつ聲などめづらしからぬふるごとをうち誦し給へるも折からにや。妹が垣根におとなはせまほしき御聲なり。「獨住みは殊にかはることなけれどあやしうさうさうしくこそありけれ。深き山住みせむにもかくて身をならはしたらむはことなう心すみぬべきわざなりけり」などのたまひて、「女房こゝにくだものなど参らせよ。男ども召さむもことごこしき程なり」などのたまふ。心にはたゞ空を眺め給ふ御氣色のつきせず心苦しければかくのみおぼしまぎれずは、御行ひにも御心すまし給はむことかたくやと見奉り給ふ。ほのかに見し御面影だ

に忘れがたし。ましてことわりぞかしと思ひ居給へり。昨日今日と思ひ給ふるほどに御はてもやうやう近うなり侍りにけり。いかやうにかおきておぼしめすらむと申し給へば「何ばかり世の常ならぬことをかはものせむ。かの志おかれたる極樂のまだらなどこの度なむ供養すべき。經などもあまたありけるをなにがし僧都皆その心くはしう聞き置きたなれば又加へてすべきことども、かの僧都のいはむに従ひてなむ物すべき」などのたまふ。「かやうのことどももとよりとりたて、おぼしおきてけるはうしろやすきわざなれどこの世にはかりそめの御契なりけりと見給ふにはかたみといふばかり留め聞え給へる人だにものし給はぬこそ口惜しう侍りけれ」と申し給へば、「それはかりそめならず、命ながき人々にもさやうなることの大方少かりけるみづからの口惜しさにこそ。そこにこそはかどはひろげ給はめ」などのたまふ。何事につけても忍びがたき御心よわさのつゝ、ましくて過ぎにしこといたうもの給ひ出でぬに、またれつる杜鵑のほのかにうち鳴きたるもいかにしりてかと、聞く人たゞならず。

「なき人を忍ぶるよひの村雨にぬれてやきつる山ほととぎす」。いとゞ空をながめ給ふ。大將、

「杜鵑さみにつてなむふるさとの花たちばなは今ぞさかりと」。女房など多くいひあつめたれどとゞめず。大將の君はやがて御とのゐに侍ひ給ふ。さびしき御獨寢の心苦しければ時々かやうに侍ひ給ふをおはせし夜はいとけどほかりし。おましのあたりのいたうも立ち離

れぬなどにつけて思ひ出でらるゝことどもおほかり。いと暑きころ涼しき方にてながめ給ふに、池の蓮の盛なるを見給ふにいかにおほかるなどまづおほし出でらるゝに、ほればれしくてつくづくとおほする程に日も暮れにけり。ひぐらしの聲はなやかなるに御前のなでしこの夕ばえを一人のみ見給ふには、實にぞかひなかりける。

「つれづれとわがなきくらす夏の日をかごとがましき蟲の聲かな」。螢のいとおほう飛びちがふも、「夕殿に螢とんで」と例のふるごとまかゝるすぢにのみ口なれ給へり。

「夜を志る螢を見てもかなしきは時ぞともなきおもひなりけり」。七月七日も例にかはりたることおほく、御あそびなどもし給はてつれづれに詠めくらし給ひて星合見る人もなし。まだ夜ふから一所起き居給ひて妻戸押しあげ給へるに前栽のつゆいとしげく渡殿の戸よりとほりて見渡さるればいて給ひて、

「七夕の逢ふせは雲のよそに見てわかれの庭につゆぞおきそふ」。風の音さへたゞならずなり行く比しも、御法事のいとなみにてついたち比はまぎらはしげなり、今まで經にける月日よとおほすにもあさされて明しくらし給ふ。御正日にはかみしもの人々皆いもひして、かの曼陀羅など今日ぞ供養せさせたまふ。例の宵の御おこなひに御手水まゐらす中將の君の扇に、

「君こふる涙はさほもなきものを今日をばなにのはてといふらむ」とかきつけたるをとりて見給ひて、



「人こふる我が身も末になりゆけどのこりおほかる涙なりけり」とかきそへ給ふ。九月になりて九日おほひたる菊を御覽じて、

「もろともにおきぬし菊の朝露もひとり袂にかゝるあさかな。神無月は大かたもしぐれがちなる比、いとどながめ給ひて夕暮の空の氣色などもえもいはぬ心ほそさにふりしかど」とひとりごちおはす。雲をわたる雁のつばさもうらやましくまもられ給ふ。

「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬたまのゆくへたづねよ。何事につけてもまぎれずのみ月日にそへておぼさる、五節などいひて世の中そこはかとなく今めかしげなる頃、大將殿の君達殿上し給ひて参り給へり。同じ程にて二人いとうつくしきさまなり。御をぢの頭中將藏人少將などをみにて青摺のすがたども清げにめやすくて、皆うち續きもてかしきつゝ諸共に参り給ふ。思ふ事なげなるさまどもを見給ふにいにしへあやしかりし日影のをりさすがにおぼし出でらるべし。

「宮人はとよのあかりにいそぐけふ日かけもしらでくらしつるかな。今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去り給ふべきほど近くおぼしまうくるに哀なることつきせず。やうやうさるべきことども御心のうちにおぼしつゞけて侍ふ人々にもほどほどにつけてものたまひなど、おどろおどろしく今なむ限りとまなし給はねど、近う侍ふ人々は御ほ意遂げ給ふべき氣色と見奉るまゝに、年の暮れゆくも心ほそう悲しきことかぎりなし。落ちとまりてかたはなるべき人の御文どもやればをしとおぼされけるにや、少しづくのこし給ひけるを、

物のついでに御覽しつけてやらせ給ひなどするに、かの須磨のよろほひ所々より奉り給ひけるもある中に、かの御手なるは殊にゆひあはせてぞありける。みづからまおき給ひけることなれど久しうなりにける世のこと、おぼすに、只今のやうなる墨つきなど實に千とせのかたみにまつべかりけるを見ずなりぬべきよとおぼせば、かひなくて疎からぬ人々二三人ばかり御前にてやらせ給ふ。いとかゝらぬほどのことにてだに過ぎにし人の跡と見るは哀なるを、ましていとどかさくらし、それとも見わかれぬまで降りおつる御涙の水莖に流れそふを人もあまり心よわしと見奉るべきが、かたはらいたうはしたなければおしやり給ひて、

「志での山越えにし人をまたふとて跡を見つゝもなほまどふかな」。さぶらふ人々もまほにはえひろげねど、それとほのぼの見ゆるに心惑ひどもおろかならず。この世ながら遠からぬ御別のほどをいみじとおぼしけるまゝにかい給へる言の葉、實にそのをりよりもせきあへぬ悲しさやらむかたなし。いとうたて、今ひときはの御心惑ひもめしく人わろくなりぬべければ、能くも見給はてこまやかに書き給へるかたはらに、

「かきつめて見るもかひなしもしほ草おなじ雲の烟とをなれ」とかきつけさせ給ひて皆やかせ給ひつ。御佛名も今年ばかりにこそはとおぼせばにや、常よりもことにさくぢやうの聲々などあはれにおぼさる。行く末ながきことを希ふも佛の聞き給はむことかたはらいたし。雪いたうふりてまめやかに積りにけり。導師のまかづるを御前にめしてさかづきなど常の作法よりもさしわかせ給ひて殊に祿などたまはす。年比久しくまゐり公にも仕うまつ

りて院にも御覽じ馴れたる御導師の頭はやうやう色かはりて侍ふも哀におぼさる。例の宮達上達部などあまた参り給へり。梅の花のわづかに氣色はじめて雪にもはやされたる程をかしきを、御あそびなどもありぬべけれど猶今年までは物の音もむせびぬべき心地し給へば時によりたるものうち誦じなどばかりぞせさせ給ふ。まことや導師の盃のついでに、

「春までの命もまらず雪のうちにいるづく梅をけふかざしてむ」。御かへし、  
「千世の春見るべき花といのりおきて我が身ぞ雪とともにふりぬる」。人々おほくよみおきたれど、もらしつ。その日ぞ出て給へる。御かたち昔の御光にも又おほくそひてありがたくめでたく見え給ふを、このふりぬるよはひの僧はあいなう涙もとどめざりけり。年暮れぬとおぼすも心ぼそきに若宮のなやはむに音たかゝるべきことなれどわざをせさせむと走りありき給ふもをかしき御ありさまを見ざらむこと、よろづに忍びがたし。

「物思ふと過ぐる月日もまらぬまに年も我が世もけふやつきぬる」。朔のほどのこと常よりことなるべくとおきてさせたまふ。みこたち大臣の御引出物品々の祿どもなど二なうおぼしまうけてとぞ。

## 匂宮

光かくれ給ひにしちかのみかけに立ちつぎ給ふべき人そこの御末々にありがたかりけ

り。おりのみかどをかけ奉らむはかたじけなし。當代の三宮そのおなじおとゞにておひ出で給ひし宮の若君とこの二所なむとりどりにきよらなる御名とり給ひてげにいとなべてならぬ御有様なめれどいとまばゆききはにはおはせざるべし。唯世の常の人ざまにめてたくあてになまめかしくおはするをもととして、さる御なからひに人の思ひ聞えたるもてなしありさまもいにしへの御ひびきけはひよりもやゝ立ちまさり給へるおぼえがらなむ、かたへはこよなういつくしかりける、紫の上の御心よせことにはぐゝみ聞え給ひしゆゑ。三宮は二條院におはします。春宮をばさるやんごとなきものにおき奉り給ひてみかどきささいみじく悲しうま奉りかしづき聞えさせ給ふ宮なれば、内ずみをせさせ奉り給へど、猶心安き故郷に住みよくま給ふなりけり。御元服ま給ひては兵部卿の宮と聞ゆ。女一宮六條院の南の町の東の對をそのよのまつらひを改めずおはしまして朝夕に戀ひ忍び聞え給ふ。二宮もおなじおとゞの寢殿を時々御やすみ所にま給ひて梅壺を御曹司にま給ひて右のおほい殿の中姫宮を得奉り給へり。つぎの坊がねにていとおぼえことにおもおもしろう人がらもすくよかになむものし給ひける。おほいとのお、御むすめはいとあまたものし給ふ。大姫君は春宮に参り給ひてまたきしろふ人なきさまにて侍ひ給ふ。そのつぎつぎ皆ついでのままにこそはと世の人と思ひきこえきさいの宮ものたまはすれど、この兵部卿宮はさしもおぼしたらず、我が御心よりおとらざらむことなどは凄じくもおぼしぬべき御氣色なめり。おとゞもなにか

はやうのものとさのみうるはしうはとまづめ給へど、又さる御氣色あらむをばもてはなれ  
てもあるまじうおもむけて、いといたうかしづき聞え給ふ。六の君なむそのころ少しわれは  
と思ひのぼり給へるみこたちかんだちめの御心つくすくさはひにもし給ひける。院かく  
れ給ひて後さまさま集ひ給へりし御方々なくなく遂におはすべきすみかどもにおのおのう  
つろひ給ひしに花散里と聞えしは東の院をぞ御そらぶんの所にて渡り給ひにける。入道の  
宮は三條の宮におはします。いまささきは内にのみさぶらひ給へば、院のうちさびしく人ず  
くなになりけるを、右のおとゞ人のうへにていにしへのためしを見聞くにも生けるかぎ  
りの世に心を留めてつくりまめたる人の家居の、名殘なくうちすてられて世のならひも常  
なく見ゆるはいと哀にはかなさ知らるゝを、我が世にあらむかぎりだに、この院あらさずほ  
とりの大路などひとかけかれはつまじうとおほしの給はせて、丑寅の町にかの一條の宮を  
渡し奉らせ給ひてなむ、三條殿と夜ごとに十五日づゝうるはしう通ひ住み給ひける。二條院  
とてつくりみがき六條院の春のおとゞとて世にのゝしりし玉のうてなも唯一人の御末のた  
めなりけりと見えて、明石の御方はあまたの宮達の御うしろみをしつゝあつかひ聞え給へ  
り。おほい殿はいづかたの御事をも昔の御心おきてのまゝに改めかはることなく、あまねき  
親心に仕うまつり給ふにも對の上のかやうにてとまり給へらましかは、いかばかり心をつ  
くして仕うまつり見え奉らまし、遂にいさゝかも取りわきて我が心よせと見知り給ふべき  
ふしもなくて過ぎ給ひにしことを、口惜しく飽かず悲しう思ひ出で聞え給ふ。天の下の入院

を戀ひ聞えぬなく、とにかくにつけても世はたゞ火をけちたるやうに何事もはえなきなげさをせぬ折なかりけり。まして殿の内の人々御方々宮達などは更にも聞えず、限なき御事をばさるものにてまたかの紫の上の御有様を心にまめつゝ萬の事につけて思ひ出でて聞え給はぬ時のまなし。春の花の盛はげに長からぬにしも覺えまざるものになむ。二品の宮の若君は院のきこえつけ給へりしまゝに冷泉院のみかどとりわきておぼしかしづき後の宮もみこたちなどおはせず心ぼそうおぼさるゝに、うれしき御うしろみにまめやかにたのみ聞え給へり。御元服なども院にてせさせ給ふ。十四にて二月に侍従になり給ふ。秋右近の中將になりて御たうばりの加階などをさへいづこの心もとなきにか急ぎ加へておとなびさせ給ふ。おはしますおとゞ近き對を曹司にまつらひなどみづから御覽じいれて若き人もわらはまもづかへまで勝れたるをえりとゝのへ、女の御氣色よりもまばゆく整へさせ給へり。上にも宮にもさぶらふ女房の中にもかたちよくあてやかにめやすきは皆うつし渡させ給ひつゝ、院の内を心につけてすみよくありよく思ふべくとのみわざとがましき御あつかひぐさにおぼされ給へり。故致仕のおほい殿の女御と聞えし御腹に女宮たゞ一所おはしけるをなむ限りなくかしづき給ふ御有様におとらず。後の宮の御おぼえの年月にまさり給ふけはひにこそは。などかさしもと見るまでなむ。母宮は今はたゞ御行をまづかに給ひて月ごととに御念佛、年に二度の御八講をりをりの尊き御いとなみばかりをま給ひてつれづれにおはしませばこの君の出で入り給ふをかへりては親のやうにたのもしきかけにおぼしたれば、いと哀にて院

にも内にも召しまつはし春宮も次々の宮達もなつかしき御あそびがたきにて伴ひ給へば、いとまなく苦しうていかて身をわけてしがなと覺え給ひける。をさな心地にほの聞き給ひしことのをりをりいぶかしうおぼつかなく思ひ渡れど問ふべき人もなし。「宮にはことの氣色にてもまりけりとおぼされむ。かたはらいたきすぢなれば世ともの心にかけていかなりける事にかは、何の契にてかうやすからぬ思ひ添ひたる身にしもなりいでけむ。ぜんげうたいしの我が身に問ひけむさとりをもえてしがな」とぞひとりごたれ給ひける。

「おぼつかな誰にとはましいかにしてはじめもはても知らぬ我が身ぞ」。いらふべき人もなし。事にふれて我が身につゝがある心地するもたゞならず物なげかしくのみ思ひめぐらしつゝ、宮もかく盛の御かたちをやつし給ひてなればかりの御道心にてか俄に赴き給ひけむ、かく思はずなりけることのみだれに必ず憂しとおぼしなるふしありけむ、人もまさにもり出てまらじやは、猶つゝむべきことの聞えによりわれには氣色をまらする人のなきなめりと思ふ。明暮勤め給ふやうなめれどはかもなくおほどき給へる女の御さとの程に蓮の露もあきらかに玉と磨き給はむことかたし、五つのなにがしも猶うしろめたきを、われこの御心地をたすけておなじうは後の世をだにと思ふ。かの過ぎ給ひにけむも安からぬおもひにむすぼゝれてやなどおしはかるに、世をかへても對面せまほしき心つきて元服はものうがり給ひけれどすまひはせず、ちのづから世の中にもてなされてまばゆきまで花やかなる御身のかざりも心につかずのみ思ひまづまり給へり。内にも母宮の御かたさまの心よせ深

くていと哀なるものにおぼされ、ささの宮はたもとよりひとつおとゞにて、宮達諸共に生ひ出て遊び給ひし御もてなしをさ改め給はず、末に生れ給ひて心苦しうおとなしうもえ見おかぬこと、院のおぼしのたまひしを思ひ出て聞え給ひつゝ、おろかならず思ひ聞え給へり。右のおとゞも我が御こどもの君達よりもこの君をばこまやかにやんごとなくもてなしかしづき奉り給ふ。むかし光君と聞えしはさるまたなき御おぼえながら、猜み給ふ人うちそひ母方の御後見なくなどありしに御心さまも物深く世の中をおぼしなだらめし程に、ならびなき御ひかりをばまばゆからずもてまづめ給ふ。遂にさるいみじき世のみだれも出でさぬべかりしをも事なく過ぐし給ひて後の世の御つとめもおくらかし給はず、よろづさりげなくて久しくのどけき御心おきてにこそありしか。この君はまだしきに世のおぼえいと過ぎて思ひあがりたることよなくなど物し給ふ。げにさるべくていとこの世の人とは造り出でざりける、假に宿れるかとも見ゆること添ひ給へり。顔かたちもそこはかといづこなむすぐれたるあなきよらと見ゆる所もなきが、たゞいとなまめかしく耻しげに心のおくおほかりげなるけはひ人に似ぬなりけり。かのかうばしさぞこの世のにほひならず、あやしきまでうちふるまひ給へるあたり遠く隔たる程のおひ風もまことに百歩の外も薫りぬべき心地まける。誰もさばかりになりぬる御有様のいとやつればみたゞありなるやはあるべき。ささまにわれ人にまさらむとつくるひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで打ち忍び立ちよらむも物のくまもさるさほのめさのかくれあるまじさにうるさがりてをさをさ取



りもつけ給はねどあまたの御唐櫃にうづもれたるかうのかども、この君のはいふよしもなき匂ひをくはへ、御前の花の木もはかなく袖かけたまふ梅の香は春雨の雫にもぬれ身に志むる人おほく、秋の野にぬしなき藤袴ももとのかをりはかくれてなつかしき追風ことをりなしからなむまさりける。かくあやしきまで人のとがむる香にきみ給へるを、兵部卿宮なむことごとよりもいとましくおぼして、それはわざと萬の勝れたるうつしをきめ給ひ朝夕のことわざにあはせいとなみ、お前の前裁にも春は梅の花園をながめ給ひ、秋は世の人のめづる女郎花さをしかのつまにすめる萩の露にもをさをさ御心うつしたまはず、老を忘るゝ菊に衰へ行く藤袴ものげなきわれもかうなどほいとすさまじき霜枯の比ほひまでおぼし捨てずなど、わざとめきて香にめづる思ひをなむ立て、このましうおはしける。かゝる程に少しなよびやはらぎすぎてすきたる方にひかれ給へりと世人は思ひ聞えたり。昔の源氏は常すべてかくたてゝその事とやうがはりきみ給へる方ぞなかりしかし。源中將この宮には常に参りつゝあそびなどにもきしるふものゝ音を吹き立て、げにいどましくも若きどち思ひかはし給ひつべき人のさまになむ。例の世人はにほふ兵部卿、かをる中將と聞きにくゝいひつゞけてその比よきむすめおはするやうごとなき所々は心ときめきに聞えごちなどき給ふもあれば、宮はさまさまにをかしうもありぬべきわたりをばのたまひよりて人の御けはひありさまをも氣色とり給ふ。わざと御心につけておぼすかたはことになかりけり。冷泉院の一宮をぞさやうにても見奉らばやかひありなむかしとおぼしたるは、母女御もいとあもく

心にくく物し給ふあたりにて、姫君の御けはひげにとありがたく勝れてよその聞えもおはしますに、まして少し近くもさぶらひなれたる女房などの委しき御有様の事にふれて聞え傳ふるなどもあるにいと忍びがたくおぼすべかめり。中將は世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なればなかなか心とめて行きはなれ難きおもひや残らむなど思ふに、煩しき思ひあらむあたりにかゝづらはむはつゝましくなど思ひ捨て給ふ。さしあたりて心にまむべきことのなき程さかしたつにやありけむ、人のゆるしなからむ事などはまして思ひよるべくもあらず。十九になり給ふ年三位の宰相にて猶中將もはなれ給はず、みかどさきの御もてなしにたゞ人にてははゞかりなきめてたき人のおぼえにてもなし給へど、心のうちには身を思ひみるかたありて物哀になどもありければ心にまかせてはやりかなるすきごとをさをさ好まず、萬の事もまづめつゝおのづからおよすげたる心さまを人にもまられ給へり。三宮年にそへて心をくだき給ふめる。院の姫宮の御あたりを見るにもひとつ院の内に明暮立ちなれ給へば、事にふれても人のありさまを聞え見奉るにげにいとなべてならず、心にくくゆゑゆゑしき御もてなし限なきを同じくはげにかやうならむ人を見むにこそ生ける限の心ゆくべきつまなれと思ひながら大方こそへだつることなくおぼしたれ。姫宮の御かたさまのへだてはこよなくけ遠くならはさせ給ふもことわりにわづらはしければあながちにも交らひよらず、若し心より外の心もつかばわれも人もいと悪しかるべきと思ひまゐりて物馴れよることなかりけり。我がかく人にめでられむとなり給へる有様なれ

ば、はかなくなげの詞をちらし給ふあたりもこよなくもてはなるゝ心なく靡きやすなるほどに、おのづからなほざりのかよひ所もあまたになるを人のためにことごとしくなともてなさず。いとよくまぎらはしそこはかとなく情なからぬ程のなかなか心やましきを思ひよれる人はいざなはれつゝ、三條の宮に参りあつまるはあまたあり。つれなきを見るも苦しげなるわざなめれど、絶えなむよりはと心ほそきに思ひわびて、さもあるまじききはの人々のはかなき契りにたのみをかけたる多かり。さすがにいとつかしう見所ある人の御ありさまなれば、見る人皆心にはからるゝやうにて見過ぐさる。宮のおはしまさむ世のかぎりは朝夕に御めかれず御覽せられ、見奉らむをだにと思ひのたまへば、右のおとゞもあまた物し給ふ御むすめたちを、一人一人はと心ざし給ひながらえことに出で給はず。さすがにゆかしげなきなからひなるをとほしなせど、この君達を置きて外にはなずらひなるべき人を求め出づべきよかはとおぼしわづらふ。やんごとなきよりもないしのすけばらの六の君はいとすぐれてをかしげに心ばへなどもたらひて生ひ出で給ふを、世のおぼえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心苦しうおぼして、一條の宮のさるあつかひぐさもたまへられてさうさうしきに迎へとりて奉り給へり。わざとはなくてこの人々に見せそめては必ず心留め給ひてむ、人の有様をも見知る人はことにこそあるべけれなどおぼして、いといつくしうはもてなし給はず、今めかしくをかしきやうに物ごのみせさせて人の心づけむたより多くつくりなし給ふ。のりゆみのかへりあるじのまうけ六條院にていと心ことに志給ひて

御子をもおはしまさせむの心づかひ給へり。その日みこたちおとなにおはするは皆さぶらひ給ふ。きさい腹のは孰ともなくけ高く清げにおはします。中にもこの兵部卿の宮はげにいと勝れてこよなう見えたまふ。四のみ子常陸の宮と聞ゆる更衣腹のは思ひなしにやけはひこよなう劣り給へり。例の左あながちに勝ちぬ。例よりは疾く事はて、大將まかて給ふ。兵部卿の宮常陸の宮后腹の五の宮とひとつ車にまねきのせ奉りて罷て給ふ。宰相中將はまけ方にて音なく罷て給ひにけるを、皇子達おはします御送に参り給ふまじや」と推し留めさせて御子の衛門督、權中納言、右大辨など、さらぬ上達部あまたこれかれにのりまじりいざなひ立て、六條院へおはす。道のやゝ程ふるに雪いさゝか散りて艶なるたそがれ時なり。物の音をかしき程に吹き立て遊びて入り給ふをげにこゝをおきていかならむ佛の御國にかはかやうのをり節の心やり所を求めむと見えたり。寢殿の南の廂に常のごと南むきに中少將つさわたり北むきに向へてゑがのみこ達上達部の御座あり。御かはらけなど始まりて物おもしろくなりゆくにもとめて舞ひてかよれる袖どもの打ちかへす羽風に御前近き梅のいといたく綻ひこぼれたるにほひのさとうち散りわたれるに、例の中將の御かをりのいとくもてはやされていひ知らずなまめかし。はつかにのぞく女房なども聞はあやなく心もとなき程なれど、香にこそげに似たるものなかりけれとめてあへり。おとゞもめてたしと見給ふ。かたちやういも常よりまさりて亂れぬさまにをさめたるを見て、「右のすけも聲くはへ給へや。いたうまらうとだゝしや」とのたまへばにくからぬほどに神のますなど。

## 紅梅

そのころ按察大納言と聞ゆるは故致仕のおとこの次郎なり。うせ給ひにし右衛門督のさしつぎよ。童よりらうらうしう花やかなる心ばへものし給ひし人にてなりのぼり給ふ。年月にそへてまいていと世にあるかひあり。あらまほしうもてなし御おほえいとやむごとなかりけり。北の方二人ものし給ひしを、もとよりのばなくなり給ひて、今ものし給ふは、後の大きおとこの御むすめまさき柱離れがたくま給ひし君を式部卿の宮にて故兵部卿の御子にあはせたて給へりしを、御子うせ給ひて後ち忍びつゝ通ひ給ひしかど、年月ふればえさしも憚り給はぬなめり。御子は故北の方の御腹にも二人のみぞおはしければさうざうしとて神佛に祈りて今の腹にぞ男君一人まうけ給へる。故宮の御かたみに女君一所おはす。隔てわかず何れをもおなじごとと思ひ聞えかはし給へるを、おのおの御方の人などはうるはしうもあらぬ心ばへうちまじり、なまくねくねしき事も出てくる時々あれど、北の方いとはればれしう今めきたる人にて罪なく取りなし、我が御方さまに苦しかるべき事をもなだらかに聞きなし、思ひなほし給へば聞きにくからでめやすかりけり。君達同じほどにすぎすぎおとなび給ひぬれば御裳など着せ奉り給ふ。七けんの寢殿廣く大きに造りて南面に大納言殿のおほい君、西に中の君、東に宮の御方と住ませ奉り給へり。大方にうち思ふ程は父宮のおはせぬ心苦しき

やうなれどこなたかなたの御寶物多くなとして内々の儀式有様など心にくくけだかくなどもてなしてけはひあらまほしうおはす。例のかくかしづき給ふ聞えありて次々に従ひつゝ聞え給ふ人おほく内春宮より御氣色あれど内には中宮おはします。いかばかりの人かはかの御けはひにならび聞えむ、さりとて思ひ劣りひげせむもかひなかるべし。春宮には左のおほい殿の女御並ぶ人なげにてさぶらひ給ふはさしるひにくけれどさのみいひてやは人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひたえては何のほいかはあらむと覺したちて參らせ奉り給ふ。十七八のほどにてうつくしうにほひ多かるこゝちし給へり。中の君もうちすがいてあてになまめかしうすみたるさまはまさりてをかしうおはすれば、たゞ人にてはあたらしう見せまうき御さまを兵部卿の宮のさもおぼしよらばなどおぼしたる。この若君をうちにてなど見つけ給ふ時はめしまどはしたはぶれがたきにま給ふ。心ばへありておく推し量らるゝまみひたひつきなり。「せうとを見てのみはえやまじと大納言に申せよ」などのたまひかくるを「さなむ」と聞ゆればうちゑみていとかひありと覺したり。「人におとらむ宮仕よりはこの宮にこそはよろしからむ女子は見せ奉らまほしけれ。心のゆくにまかせてかしづき見奉らむに命のびぬべき宮の御さまなり」とこの給ひながら、まづ春宮の御事をいそぎ給ひて春日の神の御ことわりも我が世にやもし出てきて故おとどの院の女御の御事を胸いたくおぼして止みにしなぐさめの事もあらなむと心のうちに祈りて參らせ奉り給ひつ。いと時めき給ふよし人々聞ゆ。かゝる御まじらひのなれ給はぬ程にはかばかしき御後見なくてはいかゞ

とて北の方そひてさぶらひ給ふは誠に限もなく思ひかしづき後見聞えたまふ。殿はつれづれなる心地して西の御かたはひとつに習ひ給ひていとさうさうしうながめ給ふ。東の姫君の疎々しくかたみにもてなし給はてよるよるは一所に御殿ごもりよろづの御ことならひはかなき御遊びわざをもこなたを師のやうに思ひ聞えてぞ誰も習ひ遊び給ひける。物はちを世のつねならずま給ひて母北の方にだにさやかにほをさをささし向ひ奉り給はず、かたはなるまでもてなし給ふものから心ばへけはひのうもれたるさまならず愛敬づき給へること。はた人よりもすぐれ給へり。かくうちまわりや何やと我がかたさまをのみ思ひ急ぐやうなるも心苦しきなどおぼして「さるべからむさまをおぼし定めての給へ。おなじこと、こそ仕うまつらめ」と母君にも聞え給ひけれど「更にさやうの世づきたるさま思ひたつべきにもあらぬ氣色なればなかなかならむとは心苦しかるべし、御宿世にまかせて世にあらむかぎりは見奉らむ、後ぞ哀にうしろめたけれど世をそむくかたにてもおのづから人笑へにあはつけき事なくて過ぐし給はなむ」などうちなきて御心ばせの思ふやうなることをぞ聞え給ふ。いづれもわかず親がり給へど御かたちを見ばやとゆかしうおぼしてかくれ給ふこそ心憂けれと恨みて、人知れず見え給ひぬべしやとのどきありき給へど絶えてかたそばをだにえ見奉り給はず。「上おはせぬほどは立ちかはりて参りくべきを疎々しくおぼしわくる御氣色なれば心うくこそ」など聞えてみすの前に居給へば御いらへなどほのかに聞え給ふ。御聲けはひなどあてにをかしうさまかたち思ひやられて哀に覺ゆる人の御ありさまなり。「君が御姫

君たちを人に劣らじと思ひおこれどこの君にえしも優らずやあらむ、かゝればこそ世の中  
廣きうちにはわづらはしけれ。たぐひあらじと思ふに優る方もおのづからありぬべかめり」な  
どいとゞいぶかしう思ひ聞え給ふ。「月比なにとなく物さわがしき程に御琴の音をだにうけ  
給はらで久しくなり侍りにけり。西の方に侍る人は琵琶を心に入れて侍る。さもまねび取り  
つべくや覺え侍るらむ、なまかたほにまたるに聞きにくき物の音がらなり。同じくは御心留  
めて教へさせ給へ、あきなはとりたてゝならふ物侍らざりしかど、そのかみ盛りなりし世に  
遊び侍りし力にや聞き知るばかりのわさまへは何事にもいとつきなくは侍らざりしを、う  
ちとけても遊ばさねど時々うけ給はる御琵琶の音なむ、むかし覺え侍る。故六條院の御傳に  
て左のおとゞなむこの比世に残り給へる。源中納言、兵部卿の宮、何事にも昔の人に劣るまじ  
ういと契りことに物し給ふ人々にてあそびの方は取りわきて心留め給へるを手づかひ少し  
なよびたるばち音なむ、おとゞには及び給はずと思ひ給ふるをこの御琴のねこそいと能く  
覺え給へれ。琵琶は押手志づやかなるをよきにするものなるにぢうさすほどばち音のさま  
かはりてなまめかしう聞えたるなむ、女の御事にてなかなかをかしかりける。いであそばさ  
むや御琴まゐれ」とのたまふ。女房などはかくれ奉るもをさをさなし。いと若き上臈だつが  
見え奉らじと思ふはしも、心にまかせてゐたれば「さぶらふ人さへかくもてなすが安から  
ぬ」と腹立ち給ふ。若君うちへ參らむとこのゐ姿にて參り給へる、わざとうるはしきみづら  
よりもいとをかしく見えていみじくうつくしとおぼしけり。麗景殿に御ことつけ聞え給ふ。



「ゆづりきこえて今宵もえ參るまじく、なやましくなむと聞えよ」とのたまひて「笛すこし仕  
うまつれ。ともすれば御前の御遊に召し出でらるゝ、かたはらいたしや。またいと若き笛を」  
とうちゑみて雙調ふかせ給ふ。いとをかしう吹い給へば、「けまうはあらずなりゆくは、この  
わたりにておのづから物にあはするけなり。猶かきあはせさせ給へ」とせめ聞え給へば苦し  
とおぼしたる氣色ながら爪弾きにいとよく合せて唯少しかきならし給ふ。かはぶえふつゝ  
かになれたる聲してこの東のつまに軒近き紅梅のいとおもしろく匂ひなるを見給ひて「お  
前の花心ばへありて見ゆめり。兵部卿の宮うちにおはすなり、一枝をりてまわれ。知る人ぞ  
まゐる」とて、あはれ光源氏のいはゆる御盛りの大將などにおはせしころ童にてかやうにて交  
らひなれ聞えしこそ世と共に戀しう侍れ。この宮達を世の人もいとこと思ひ聞え、げに人  
にめでられむとなり給へる御有様なれどもはしがはしにも覺え給はぬは猶たぐひあらじと  
思ひ聞えし心のなしにやありけむ。大方にて思ひ出で奉るも胸あく世なく悲しきを氣近き  
人のおくれ奉りていきめぐらふは、おぼろけの命長さならしかしとこそ覺え侍れ」など聞え  
出で給ひて物哀にすぐ思ひめぐらしまをれ給ふ。ついで忍びがたきにや花折らせて急  
ぎ參らせ給ふ。いかゞはせむ昔の戀しき御かたみにはこの宮ばかりこそは佛のかくれ給ひ  
けむ御名残には阿難が光放ちけむを二度出で給へるかとうたがふ。さかしきひじりのあり  
けるをやみにまどはるけどころに、聞えをかさむかして、

「心ありて風のにははす園の梅にまつうぐひすの間はずやあるべき」と紅の紙にわかや

ぎ書きて、この君の懐紙に取りませ押したくみて出したて給ふを、幼き心にいと馴れ聞えまほしとおもへば急ぎまゐり給ひぬ。中宮の上の御局より御とのゐどころに出で給ふほどなり。殿上人あまた御送にまゐる中に見つけ給ひて「昨日はなごいと疾くはまかてにし。いつ参りつるぞ」などのたまふ。「疾くまかて侍りにしくやしさに、まだ内におはしますと人の申しつれば急ぎまゐりつるや」とをさなげなるものから馴れ聞ゆ。「内ならで心やすき所にも時々はあそべかし。若き人どものそこはかこなくあつまる所ぞ」とのたまふ。この君召しはなちて語らひ給へば、人々は近うもまゐらず罷て散りなどしてまめやかになりぬれば「春宮にはいとま少しゆるされにためりな。いとまげうおもほしまどはすめりしを、時とられて人わろかめり」とのたまへば「まづはさせ給へりしこそ苦しかりしが、御前にはしも」と聞えさして居たれば「われをば人げなしと思ひはなれたるとな。ことわりなり。されど安からずこそ。ふるめかしき同じすぢにて東と聞ゆなるはあひ思ひ給ひてむやと忍びて語らひ聞えよ」などのたまふついでに、この花を奉ればうちゑみて「うらみて後ならましかば」とてうちも置かず御覽ず。枝のさま花房色も香も世の常ならず「園に匂へる紅の色にとられて香なむ白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこくとりならべても咲きけるかな」とて御心留め給へる花なればかひありてもてはやし給ふ。「今夜はとのゐなめり、やがてこなたにを」とめしこめつれば東宮にもえ参らず、花も耻しく思ひぬべくかうばしくて氣近くふせ給へるを若き心ちにはたぐひなくうれしくなつかしく思ひ聞ゆ。「この花のあるじはなど春宮にはう

つろひ給はざりし。知らず、心知らむ人になどこそ聞き侍りしか」など語り聞ゆ。大納言の御心ばへは我が方さまに思ふべかめれと聞き合せ給へど思ふ心は殊にまみぬれば、この返事けざやかにものたまひやらす、つとめてこの君のまかづるになほざりなるやうにて、

「花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過さましやは」。さて猶今は翁どもにさかしらせて忍びやかに」とかへすがへすの給ひて、この君も東のをばやんごとなくむつましう思ひましたり。なかなかこと方の姫君は見え給ひなどして例のはらからのさまなれど、童心地にいとおもりにあらまほしうおはする心ばへを、かひあるさまにて見奉らばやと思ひありくに春宮の御方のいと花やかにもてなし給ふにつけて、おなじことゝは思ひながらいと飽かず口惜しければ、この宮をだに氣近くて見奉らばやと思ひありくにうれしき花のついでなり。これは昨日の御返りなれば見せ奉る。「妬げにももの給へるかな。あまりすぎたる方に進み給へるを許し聞えず」と聞き給ひて左の大臣「われらが見奉るには、いとものまめやかに御心をさめ給ふこそをかしけれ、あだ人にせむにたらひ給へる御さまをまひてまめだち給はむも見所すくなくやならまし」などまりうごちて今日もまゐらせ給ふにまた、「もとつかのにほへる君が袖ふれば花もえならぬ名をやちらさむ。とすきずきしや。あなかしこ」とまめやかに聞え給へり。誠にいひならさむと思ふ所あるにやとさすがに御心とさめきま給ひて、

「花の香をにほはす宿にとめゆかば色にめづとや人のとがめむ」など猶心とけずいらへ

給へるを心やましと思ひ居給へり。北の方まかで給ひてうちわたりの事のためふ序に「若君の一夜とのゐして罷り出てたりしにほひのいとをかしかりしを人はなほと思ひしを宮のいとおもほしよりて、兵部卿の宮に近づき聞えにけり、うべわれをばすさめたりと氣色とり怨じ給ひしこそをかしかりしか。こゝに御せうそこやありし。さも見えざりしを」とのためへば「さかし。梅の花めて給ふ君なればあなたのつまの紅梅いとさかりなりしをたゞならで折り奉れたりしなり。移香はげにこそ心ことなれ、交らひま給はむ女などはさはえまめぬかな。源中納言はかうさまにこのましうはたき句はせて人香こそ世になけれ。怪しうさきの世の契りいかなりけるむくいにかとゆかしき事にこそあれ。同じ花の名なれど梅はおひ出でけむねこそ哀なれ。この宮などのめて給ふ、さることぞかし」など花によそへてもまづかけ聞え給ふ。宮の御方は物おぼし知る程にねびまさり給へれば何事も見知り聞き答め給はぬにはあらねど、人に見え世づきたらむ有様は更にもおぼしはなれたり。世の人も時による心ありてにや、さし向ひたる御方々には心をつくし聞えわび、今めかしきこと多かれどなたは萬につけ物まめやかに引き入り給へるを、宮は御ふさいのかたに聞き傳へ給うて、深ういかでとおぼしなりにけり。若君を常にまつはしよせ給ひつゝ忍びやかに御文あれど、大納言の君深く心がけ聞え給ひて、さも思ひたちての給ふことあらばと氣色とり心まうけま給ふを見るにいとほしうひき違へてかく思ひよるべくもあらぬ方にしもなげの言の葉を盡し給ふ。かひなげなることゝ北の方もおぼしのためふ。はかなき御かへりなどもなければま

けじの御心をひておもほしやむべくもあらず。何かは人の御ありさまなどかはさても見奉らまほしう、おひさき遠くなどは見えさせ給ふになど北の方おもほしよる時々あれど、いたう色めき給ひて通ひ給ふ。忍び所おほく八の宮の姫君にも御志あさからでいとまげうまかでありき給ふ。たのもしげなき御心のあだあだしさなども、いとつゝましければ、まめやかにおもほし絶えたるをかだじけなきばかりに忍びて母君ぞたまさかにさがしらがり聞え給ふ。

## 竹 河

これは源氏の御どうにも離れ給へりし後ちの大殿わたりにありける、わるごだちのおちとまり残れるが問はずがたりまおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれどかの女どものいひけるは、源氏の御末々にひがごとくもの交りて聞ゆるはわれよりも年の數積りぼけたりける人の、僻事にやなどあやしがりける何れかはまことならむ。内侍のかみの御腹に故殿の御子は男三人女二人なむ坐しけるを、さまざまにかしづきたてむ事をおぼしおきて年月の過ぐるも心もとながり給ひしほどに、あへなくうせ給ひにしかば、夢のやうにていつしかと急ぎおぼし、御宮仕もをこたりぬ。人の心時にのみよるわざなりければ、さばかり勢いかめしく坐せしおとくの御名残内々の御寶物らうじ給ふ所々、その方の衰へはなけれど大方の有様引

さかへたるやうに殿の内詰めやかになりゆく。かんの君の御近きゆかりそこらこそは世に  
ひろごり給へど、中々やんごとなき御なからひのもとよりも親しからざりしに故殿のなさ  
け少しおくれ、むらむらしさ過ぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふこともありけるゆか  
りにや誰にもえなつかしう聞え給はず。六條院にはすべて猶昔に變らず、かずまへ聞え給ひ  
て、うせ給ひなむ後の事ども書きおき給へる御そうぶんの文どもにも、中宮の御次に加へ奉  
り給へれば、右の大殿などはなかなかの心ありてさるべき折々音づれ聞え給ふ。男君達は  
御元服などまでおのおのおとなび給ひにしかば、殿おはせて後心もとなく哀なることもあ  
れどおのづからなり出て給ひぬべかめり。姫君達をいかにもてなし奉らむとおぼしみだる。  
うちにも必ず宮仕のほい深きよしをおとどの奏し置き給ひければ、おとなび給ひぬらむか  
しと年月を推し量らせ給ひて仰言絶えずあれど、中宮のいよいよならびなくのみなりまさ  
り給ふ御けはひにおされて、皆人無徳にもし給ふめる、末にまゐりて遙に目をそばめられ  
奉らむもわづらはしく、また人におとり数ならぬさまにて見むはた心づくしなるべきをお  
ぼしたゆたふ。冷泉院よりいとねんごろにおぼしのためはせて、かんの君の昔ほいなくて過  
ぐし給ひしつらさをさへとりかへし恨み聞え給ひて、「今はまいてさだすぎ、すさまじきあ  
りさまに思ひ捨て給ふとも後安き親になずらへてゆづり給へ」といとまめやかに聞え給ひ  
ければ、いかゞはあるべきことならむ、自らのいと口惜しき宿世にて思の外に心づきなしと  
おぼされにしかば、耻しうかたじけなきをこの世の末にや御覽じなほされましなど定めか

ね給ふ。かたちいとようおはする聞きありて心がけ申し給ふ人おほかり。右の大殿の藏人の少將とかいひしは三條殿の御腹にて兄君達よりもひきこしいみじうかしづき給ふ、人がらもいとをかしかりし君いとねんごろに申し給ふ。いづかたにつけてももてはなれ給はぬ御なからひなれば、この君達のむつびまゐり給ひなどするはけどほくもてなし給はず。女房にも氣近うなれよりつゝ思ふ事を語らふにもたよりありてよるひるあたりさらぬ耳がしがましさをうるさきものゝ心苦しきにかんの殿もおぼしたり。母北の方の御文もまばまば奉り給ふ。「いとかるびたる程に侍れどおぼしゆるすかたもや」となむ、おととも聞え給ひける。姫君をば更になとのさまにもおぼしおきて給はず、中の君をなむ今少し世の聞え輕々しからぬ程になすらひならばさもやとおぼしける。ゆるし給はずばぬすみもとつべくむくつけきまで思へり。こよなきことゝはおぼさねど女方の心ゆるし給はぬ事のまぎれあるは世の音ぎゝもあはつけきわざなれば聞えつく人をも「あなかしこ。あやまちひさいづな」などの給ふにくたされてなむ、わづらはしかりける。六條院の御末に朱雀院の宮の御腹に生れ給へし君、冷泉院に御子のやうにおぼしあしづく四位の侍従その比十四五ばかりにていとさびはにをさなかるべき程よりは心おきておとなおとなしくめやすく人にまさりたる生ひささまるく見え給ふを、かんの君は婿にても見まほしくおぼしたり。この殿はかの三條の宮といと近き程なれば、さるべき折々のあそび所に君達にひかれて見え給ふ時々あり。心にくさ女のおはする所なれば若き男の心づかひせぬなら見えまらがひさまよふ中にかたちのよき

はこのたちさらぬ藏人の少將、なつかしく心耻しげにてなまめいたる方はこの四位の侍従の御有様に似る人ぞなかりける。六條院の御けはひ近うと思ひなすがことなるにやあらむ。世の中にもものづからもてかしづかれ給へる人なり。若き人々は心ことにめてあへり。かんの殿も「げにこそめやすけれ」などのたまひてなつかしう物聞え給ひなごす。「院の御心ばへを思ひ出て聞えてなぐさむよなういみじうのみ思ほゆるを、その御かたみにも誰をかは見奉らむ。右のおとゞはことごとしき御ほどにて、ついでなき對面もかたきを」などのたまひてはらからのつらに思ひ聞え給へれば、かの君もさるべき所に思ひて参り給ふ。世の常のすきずきしさも見えず、いといたうまづまりたるをぞこゝかしこの若き人ども口惜しくさうざうしきことに思ひていひなやましけり。むつきのついでたちごろかんの君の御はらからの大納言高砂謠ひし夜、藤中納言、故大殿の太郎、まさばしらの一つ腹など参り給へり。右のおとゞも御子ども六人ながらひきつれておはしたり。御かたちよりはじめて飽かぬことなく見ゆる人の御有様おぼえなり、君達もささままいと清げにて年のほどよりはつかさくらぬも過ぎつゝ何事を思ふらむと見えたるべし。世と共に藏人の君はかしづかれたるさまことなれどうちまめりて思ふことありがほなり。おとゞは御几帳へだてゝ昔に變らず御物語聞え給ふ。「その事となくてまばまばもえうけたまはらず、年の數そふまゝに内参りよりほかのありきなどうひうひしくなりにて侍ればいにしへの御物語も聞えまほしき折々多く過ぐし侍るをなむ、若きをのこどもはさるべきことには召しつかはせ給へ。必ずその志御覽せられ



よといましめ侍る」など聞え給ふ。「今はかく世にふる數にもあらぬやうになりゆく有様をおぼしかずまふるになむ、過ぎにし御事もいと忘れがたく思ふ給へられける」と申し給ひけるついでに、院よりのたまはすることほのめかし聞え給ふ「はかばかしう後見なき人のまじらひはなかなか見苦しきをとかたかた思ひ給へなむわづらふ」と申し給へば「内に仰せらるゝことのあるやうにうけ給はりしを、いづ方に思ほし定むべきことにか、院はげに御位を去らせ給へるにこそさかり過ぎたる心地すれど、世にありがたき御ありさまはふりがたくのみおはしますめるをよろしうおひ出づる女子侍らましかばと思ひ給へよりながら、耻しげなる御中に交らふべきものゝ侍らでなむ口惜しう思ふ給へらるゝ。そもそも女一宮の女御は許し聞え給ふや、さきさきの人さやうのはゞかりにより滞る事も侍りし」と申し給へば「女御なむつれづれにのどかになりたる有様も同じ心にうしろみて慰めまほしきをなと、かのすゝめ給ふにつけていかゞなどだに思ふ給へよるになむ」と聞え給ふ。これかれこゝに集り給ひて三條の宮に参り給ふ。朱雀院の深き心物し給ふ人々六條院の方さまのもかたかたにつけて猶かの入道宮をばえよぎずまゐり給ふなめり。この殿の左近中將、右中辨、侍従の君などもやがておとゞの御供に出で給ひぬ。ひきつれ給へる勢ひことなり。ゆふつて四位の侍従参り給へり。そこらおとなしき若君達もあまたさまさまにいづれかはわろびたりつる。皆めやすかりつる中に立ち後れてこの君のたち出で給へる、いとこよなくめとまる心ちして例の物めでする若き人達は「猶異なりけり」などいふ。「この殿の姫君の御傍には

これをこそさしならべて見め」と聞きにくくいふ。げにいと若うなまめかしきさましてうちふるまひ給へる匂香などよのつねならず。姫君と聞ゆれど心おはせむ人はげに人よりはまさるなめりと見知り給ふらむかしとぞ覺ゆる。かんの殿御念誦堂におはして「こなたに」とのたまへば、ひんがしのはしより昇りて戸口の御簾の前に居給へり。お前近き若木の梅心もとなくつぼみて、鶯の初聲もいとおほどかなるに、いとすかせ奉らまほしきさまの志給へれば、人々はかなきことをいふにことずくなに心にくき程なるをねたがりて宰相の君と聞ゆる上臈のよみかけ給ふ。

「折りて見ばいとゞにほひもまさるやとすこし色めけ梅のはつ花」。口はやしと聞きて、「よそにてはもぎ木なりとやさだむらむまたに匂へる梅のはつはな。さらば袖ふれて見給へ」などいひすさぶに、まことは色よりもと口々ひきもうごかしつべくさまよふ。かんの君奥の方よりゐざり出て給ひて「うたての御達や耻しげなるまめ人をさへよくこそおもなけれ」と忍びてのたまふなり。まめ人とこそつげられたりけれ、いとくつしたる名かなと思ひ居給へり。あるじの侍從殿上などもまだせねば所々もありかておはしあひたり。せんかうの折敷二つばかりしてくだものさかづきばかりさしいて給へり。「おとどはねびまさり給ふまゝに故院にいとようこそ覺え奉り給へれ。この君は似給へる所も見え給はぬを、けはひのいとまめやかになまめいたるもてなしぞかの御若さかり思ひやらる。かうさまにぞおはしけむかし」など思ひ出て聞え給ひてうちまほたれ給ふ名残さへとまりたるかうばしさを

人々はめてくつがへる。侍従の君まめ人の名をうれたしと思ひければ二十餘日の比梅の花盛なるにほひすくなげにとりなされし、すきものならばさむかしとおぼして藤侍従の御許におはしたり。中門入り給ふ程に同じ直衣すがたなる人たてりけり。かくれなむと思ひけるをひきとめたれば、この常にたちわづらふ少將なりけり。寢殿の西面に琵琶箏の琴の聲するに心をまどはして立てるなめり。苦しげや、人のゆるさぬ事思ひはじめむは罪深かるべきわざかなと思ふ。琴の聲も止みぬれば「いざ志るべき給へ、まろはいとたどたどし」とて引きつれて、西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに梅がえをうをぶきて立ちよるけはひの、花よりも志るくざとうち句へれば、妻戸おしあけて人々あづまをいとよく掻き合せたり。女の琴にてりよの歌はかうしもあはせぬをいたしと思ひて、今ひとかへりありかへしうたふを、琵琶もなく今めかしう故ありてもてない給へるあたりぞかしと、心とまりぬれば今夜は少しうちつけてはかなしごとなどもいふ。内より和琴さしいでたり。かたみにゆづりて手觸れぬに、侍従の君してかんの殿「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひ給へると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。今夜は猶鶯にもさそはれ給へ」との給ひ出しければあまえて爪くふべきことにもあらぬをと思ひて、をさをさ心に入らず、かきわたし給へる氣色いとひきき多く聞ゆ。常に見奉りむつびざりし親なれど、世におはせずと思ふにいと心ほそきに、はかなきことの序にも思ひ出で奉るにいとなむあはれなる、大かたこの君はあやしう故大納言の御有様にいとようおぼえ、琴の音など唯それとこそ覺えつれとてない給ふも、ふるめい給ふ

まるしの涙もろさにや。少將も聲いとおもしろうてさきくさうたふ。さかしら心つきてうち過ぐしたる人もまじらねば、おのづからかたみにもよほされて遊び給ふに、あるじの侍従は故大臣に似奉り給へるにやかやうの方はおくれて盃をのみ進むれば「ことぶきをだにせむや」とはづかしめられて竹河をおなじ聲にいだしてまだ若けれどをかしうたふ、簾のうちよりかはらけさしいづ。「酔のすゝみては老のぶることもつゝまれず、ひがごとするわざとこそ聞き侍れ、いかにもてない給ふぞ」ととみにうけひかず。こうちきかさなりたるほそながの、人がなつかしうまみたるをとりあへたるまゝにかづけ給ふ。「何そもぞ」などさうどきて侍従はあるじの君にうちかづけていぬ。引きとどめてかづくれど「みづらまやにて夜更けにけり」とてにげにけり。少將はこの源侍従の君のかうほのめきよるめればみな人これにこそ心よせ給ふらめ、我が身はいとぐんじいたく思ひよわりてあぢきなうぞうらむる。

「人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜のやみ」。うちなげきてたてば内の火のかへし、

「をりからや哀もまらむ梅の花たゞかばかりにうつりしもせし」。あしたに四位の侍従のもとよりあるじの侍従のもとに「よべはいとみだりがはしかりしを、人々いかに見給ひけむと見給へ」とおぼしう假名がちにかきて、はしに、

「竹河のはしうちいでしひとふしに深き心のそこはまりさや」と書きたり。寢殿にもて参りてこれかれ見給ふ「手などもいとをかしうもあるかな。いかなる人今よりかくとゝのひ給

ふらむ。をさなくて院にもおくれ奉り母宮の志どけなうおふしたて給へれど、猶人には優るべきにこそはあめれ」とて、かんの君はこの君達の手など悪しきことを辱め給ふ。返事げにいと若く「よべは水うまやをなむ人々咎め聞ゆめりし。

竹河に夜をふかさじといそぎしもいかなるふしを思ひおかまし」。げにこのふしをはじめにて、この君の御曹司におはしてけしきばみよる。少將の推し量りしもしるく皆人心よせたり。侍従の君も若き心地に近きゆかりにて明暮むつびまほしう思ひけり。三月になりて咲く櫻あれば散りかひくもり、大方の盛なるころのどやかにおはする所にはまざるゝことなく端ちかなる罪もあるまじかめり。そのころ十八九の程にやおはしけむ、御かたちも心ばへもとりどりにぞをかしき。姫君はいとあざやかにけだかう今めかしきさま給ひてげにたゞ人にてみ奉らばにげなふぞ見え給ふ。櫻の細長山吹などの折にあひたる色あひの、なつかしき程に重りたるすそまで愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなどもらうらうじう心耻しきけさへそひ給へり。今一所は薄紅梅にみぐし色にて柳の絲のやうにたをたをと見ゆ。いとそびやかになまめかしうすみたるさましておもりに心深きけは優り給へれど、匂ひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。碁うち給ふとてさし向ひ給へるかんだしみぐしのかゝりたるさまどもいと見所あり。侍従の君けんそ給ふとて近う侍らひ給ふに、兄君達さしのぞき給ひて「侍従のおぼえこよなくなりけり。御碁のけんそ許されにけるをや」とておとなおとなしきさましてつゝ居給へば、お前なる人々とかう居なほる。中將、

宮仕のいそがしうなり侍る程に人におとりにたるはいと本意なきわざかなと愛へ給へば「辨官はまいて私の宮仕をこたりぬべきまゝにさのみやはおぼしすてむ」など申し給ふ。恭打ちさして耻らひておはさうずるいとをかしげなり。「内わたりなどまかりありきても故殿のおはしまさましかばと思ふ給へらるゝこと多くこそ」など涙ぐみて見奉り給ふ。廿七八の程に物し給へばいとよくとゝのひてこの御有様どもをいかでいにしへおぼしおきてしに違へずもがなと思ひ居給へり。お前の花の木どもの中にも匂ひまさりてをかしき櫻を折らせ「外には似ずこそ」などもてあそび給ふを「をさなくおはしまさうし時、この花はわがぞわがぞと争ひ給ひしを、故殿は姫君の御花ぞと定め給ふ。上は若君の御木とさだめ給ひしを、いとさはなきのゝしらねど安からず思ひ給へられしはや」とて「この櫻の老木になりけるにつけても過ぎにける齡を思ひ給へ出づれば、數多の人に後れ侍りにける身の愁もとめがたうこそ」など泣きみ笑ひみ聞え給ひて例よりはのどやかにおはす。人の婿になりて今は心まづかにも見え給はぬを花に心とめて物し給ふ。かんの君かくおとなしき人の親になり給ふ、御年の程思ふよりはいと若うきよげに猶盛の御かたちと見え給へり。冷泉院のみかどはおほくはこの御有様の猶ゆかしう昔戀しうおぼし出でられければ、何につけてかはとおぼしめぐらして姫君の御事をあながちに聞え給ふにぞありける。院へ参り給はむことはこの君達ぞ猶物のはえなき心地こそすべけれ。萬の事時につけたるをこそ世人もゆるすめれ。げにいと見奉らまほしき御ありさまはこの世にたぐひなくおはしますめれど盛ならぬ

心地ぞするや。琴笛の老らへ花鳥の色をも音をも時にまたがひてこそ人の耳にもとまるものなれ。「春宮はいかゞ」など申し給へば、「いざや始よりやんごとなき人のかたはらもなきやうにてのみ物し給ふめればこそ、なかなかにてまじらはむは胸いたく人笑はれなる事もやあらむとつゝましければ、殿おはせましかば行く末の御宿世宿世は知らず只今はかひあるさまにもてなし給ひてましを」などのたまひ出て、皆ものあはれなり。中將など立ち給ひて後君達はうちさし給へる碁うち給ふ。「昔より争ひ給ふ櫻をかけものにて三番に數ひとつ勝ち給はむ方に花をよせてむ」とたはぶれかはし聞え給ふ。くらうなれば端近うて打ちはて給ふ。御簾卷きあげて人々皆いどみねんじ聞ゆ。折しも例の少將、侍従の君の御曹司に來たりけるをうちつれて出て給ひにければ、大方人ずくなゝるに廊の戸のあきたるにやをら寄りて覗きけり。かううれしき折を見つけたるは佛などの顯はれ給へらむに参りたらむ心地するも、はかなき心になむ。夕ぐれの霞のまぎれはさやかならねど、つくづくと見れば櫻色のあやめもそれと見わきつ。げに散りなむ後のかたみにも見まほしくにほひ多く見え給ふを、いとどことざまになり給はむことわびしく思ひまさる。若き人々のうちとけたる姿どもゆふばえもをかしう見ゆ。右勝たせ給ひぬ。「高麗のらんさうおそしや」などはやりかにいふもあり。右に心よせ奉りて、「西のお前によりて侍る木を左になして年比の御あらそひのかゝればありつるぞかし」と右方は心地よげにはげまし聞ゆ。何事と知らねどをかしと聞きてさしいらへもせまほしけれど、うちとけ給へる折心地なくやはと思ひて出て、いぬ。またかゝる

まぎれもやと影にそひてぞうかゞひありきける。君達は花のあらそひをまつ、明し暮し給ふに、風荒らかに吹きたる夕つ方亂れおつるがいと口惜しうあたらしければまけ方の姫君、

「櫻ゆゑ風にこゝろのさわぐかな思ひぐまなき花と見るみる」。御かたの宰相君、

「咲くと見てかつは散りぬる花なればまくるを深きうらみとも見ず」と聞えたすくれば、右の姫君、

「風にちることは世のつね枝ながらうつろふ花をたゞにしも見じ。この御方のたいふの君、

「心ありて池の汀におつる花あわとなりても我がかたによれ」。勝方の童へおりて花の下にありきて散りたるをいとおほく拾ひてもてまわれり。

「大ぞらの風にちれども櫻花おのがものとぞかきつめて見る」。左のなれき、

「櫻花にほひあまたに散らさじと覆ふばかりの袖はありやは。心せばげにこそ見ゆめれなどいひをらす。かくいふに月日はかなく過ぐすも行く末うしろめたきをかんの殿はよろづにおぼす。院よりは御せうそこ日々により。女御うとうとしく覺しへだつるにや上はこゝに聞え疎むるなめり」といとにくげにおぼしのたまへば「たはぶれにも苦しうなむ。同じくはこの比のほどにおぼしたちね」などいとまめやかに聞え給ふ。さるべきにこそはおはすらめ、いとからあやにくにの給ふもかたじけなしなどおぼしたり。御調度などはそこらまおかせ給へれば人々のそうぞく何くれのはかなきことをぞ急ぎ給ふ。これを聞くに藏人の少



將はまぬばかり思ひて母北の方をせめ奉れば聞きわづらひ給ひて「いとかたはらいたきことにつけてほのめかし聞ゆるも、世にかたくなしき闇のまよひになむおぼし知る方もあらば推しばかりて猶慰めさせ給へ」などいとほしげに聞え給ふを、苦しうもあるかな」とうち歎き給ひて「いかなること、思ふ給へ定むべきやうもなきを、院よりわりなくのたまはするに思ひ給へ亂れてなむ。まめやかなる御心ならばこの程をおぼしまづめて慰め聞えむさまをも見給ひてなむ、世の聞えもなだらかならむ」など申し給ふも、この御まゐりすぐして中の君をとおぼすなるべし。さしあはせてはうたてまたりがほならむ、まだ位などもあさへたる程をなどおぼすに、男は更にまか思ひうつるべくもあらず。ほのかに見奉りて後は面影に戀しういかならむ折にとのみ覺ゆるも、かうたのみかゝらずなりぬるを思ひなげき給ふとかぎりなし。かひなきこともいはむとて、例の侍従の曹司にきたれば源侍従の文をぞ見居給へりける。ひきかくすを、さなめりと見て、うばひとりつ。事ありがほにやと思ひていたうも隠さず。そこはかとなくて唯世をうらめしげにかすめたり。

「つれなくて過ぐる月日をかぞへつゝ物うらめしき暮の春かな」。人はかうこそそのどやかにさまよくねたげなめれ、我がいと人わらはれなる心いられを、かたへはめなれてあなづりそめられたると思ふも胸いたければ、ことに物もいはれて例かたらふ中將のおもとの曹司のかたに行くも例のかひあらじかしとなげきがちなり。侍従の君はこの御返事せむとて上に参り給ふを見るにいと腹だゝしうやすからず。若き心ちにはひとへに物ぞ覺えける。あさ

ましままで恨み歎けばこのまへ申すもあまりたはぶれにく、いとほしといらへもをさをさせず。かの御碁のけんそせし夕暮のこともいひ出で、「さばかりの夢をだに又見てしがな。あはれ何をたのみにていきたらむ。かう聞ゆる事ものこり少なう覺ゆればつらさも哀といふことこそ誠なりけれ」とまめだちていふ。哀とていひやるべき方なきことなり。かの慰め給はむ御さま露ばかりうれしと思ふべき氣色もなければ、げにかの夕暮のけんそふなりけむに、いとどかうあやにくなる心は添ひたるならむとことわりに思ひて聞しめさせたらば、いとどいかにけしからぬ御心なりけりと疎み聞え給はむ心苦しと思ひ聞えつる心もうせぬ、いと後めたき御心なりけりとむかひびつければ、「いでやさばれや、今はかぎりの身なれば物恐しくもあらずなりにたり。さても負け給ひしこそいとほしかりしか、おいらかに召し寄せてめぐはせ奉らましかばこよなからましもものを」などいひて、

「いでやなぞ數ならぬ身にかなはぬは人にまけじの心なりけり」。中將うちわらひて、

「わりなしや弱きによらむ勝負をこゝろひとつにいかゞまかする」といらふるさへぞつらかりける。

「あはれとて手をゆるせかしいきまにを君にまかする我が身とならば」。泣きみ笑ひみ語らひ明す。またの日は卯月になりにつければはらからの君達のうちに参りさまよふに、いたうくつし入りて眺め居給へれば、母北の方は涙ぐみておはす。おとども院の聞しめす所もあるべし、何にかはおふなおふな聞き入れむと思ひてくやしう對面の序にもうち出で聞えずなり

にし。「みづから強ちに申さましかばさりともし違へ給はざらまし」などのたまふ。さて例の「花を見て春はくらしつ今日よりやまげさなげさの下にまどはむ」と聞え給へり。お前にてこれかれ上臈だつ人々この御懸想人のさまさまにいとほしげなるを聞え知らするなかに中将おもと「いさしにをといひしさまの、言にのみはあらず、心苦しげなりし」など聞ゆればかんの君もいとほしと聞き給ふ。おと北の方のおぼす所によりせめて人の御うらみ深くはと取りかへありておぼす、この御まゐりを妨げやうに思ふらむはしもめさましきこと限なきにても、たゞ人にはかけてあるまじきものに故殿のおぼしおきてたりしものを、院に参り給はむだに行末のはええしからぬをおぼしたる折しも、この御文とり入れて哀がる。御かへし。

「今日ぞまる空をながむる氣色にて花に心を移しけりとも」。「あないとほしき戯れにのみも取りなすかな」などいへど、うるさがりて書きかへず。九日にぞまゐりたまふ。右の大殿御車御前の人々數多奉り給へり。北の方もうらめしと思ひ聞え給へど年比もさもあらざりしに、この御事故まげう聞えかよひ給へるを、又かき絶えむうたてあればかづけものどもよき女のさうぞくあまた奉れ給へり。「あやしううつし心もなきやうなる人のありさまを見給へあつかふほどに、承り留むるともなかりけるを驚かさせ給はぬもうとうとしくなむとをありける。おいらかなるやうにてほのめかし給へるをいとほしと見給ふ。おととも御文あり「みづからも参るべき」と思ふ給へつるに慎む事の侍りてなむ、をのこともさうやくにとて

參らす。疎からず召し使はせ給へ」とて源少將兵衛佐など奉れ給へり。「情はおはすかし」とよろこび聞え給ふ。大納言殿よりも人々の御車奉れ給ふ。北の方は故おとこの御女まさばしらの姫君なればいづ方につけてもむつまじう聞え通ひ給ふべけれどさしもあらず。藤中納言はしもみづからおはして中將辨の君達諸共に事行ひ給ふ。殿のおはせましかばと萬につけて哀なり。藏人の君例の人にいみじき詞をつくして「今はかぎりと思ひ侍る命のさすがに悲しきを哀と思ふとばかりだに一言のたまはせば、それにかへ留められて暫しもながらへやせむなどあるを、もて参りて見れば姫君二所うち語らひていといたうくつし給へり。よるひる諸共にならひ給ひて中のとばかりへだてたる西東をだにいとよせきものに去給ひてかたみに渡り通ひおはするを、よそよそにならむことをおぼすなりけり。心ことにまたて引き繕ひ奉りたまへる御さまいとをかし。殿のおぼしのたまひしさまなどをおぼし出て、物哀なる折からにてとりて見給ふ。おとこの北の方のさばかり立ち並びてたのもしげなる御中になどかうすゞろごとを思ひいふらむとあやしきにも、かぎりとあるを、まことにやとおぼしてやがてこの御文のはしに、

「あはれてふ常ならぬ世のひとこともいかなる人にかくるものそは。ゆゑしきかたになむほのかに思ひ知りたる」と書き給ひて「かう言ひやれかし」とのたまふを、やがて奉れたるを限なうめづらしきにも折をおぼしとむるさへいと涙も留らず立ちかへり、「たが名はたゝじなどかごとがましくて、

「生ける世の志には心にまかせねば聞かてややまむ君がひとこと。塚の上にもかけ給ふべき御心の程と思ひ給へましかば、ひたみちにも急がれ侍らましをなどあるに、うたてもいらへを去てけるかな、書きかへてやりつらむよと苦しげにおぼして、物ものたまはずなりぬ。おとなわらはめやすき限をととのへられたり、大方の儀式などは内に参り給はましに變ることなし。まづ女御の御方に渡り給ひてかんの君は御物語など聞え給ふ。夜更けてなむ上に参り上り給ひける。后、女御など皆年比經てねび給へるにいと美しげにて盛りに見所あるさまを見奉り給ふはなどてかはおろかならむ。花やかに時めき給ふたゞ人だちて心安くもてなし給へるさましもぞ。げにあらまほしうめでたかりける。かんの君を暫しさぶらひ給ひなむと心留めて思しけるに、いと疾くやをら出で給ひにければ口をしう心うしとおぼしたり。源侍従の君をば明暮お前に召しまつはしつゝ、げに唯昔の光源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ人の御覺えなり。院の内にはいづれの御方にも疎からず馴れまじらひありき給ふ。この御方にも心よせあり顔にもてなしてまたにはいかに見給ふらむの心さへそひ給へり。夕暮の志めやかなるに藤侍従とつれてありくにかの御方の御前近く見やらるゝ五葉に藤のいとおもしろく咲きかゝりたるを、水のほとりの石に苔をむしるにてながめ居給へり。まほにはあらねど世の中うらめしげにかすめつゝかたらふ。

「手にかくるものにしあらば藤の花まつよりまさる色を見ましや」とて花を見上げたる景色などあやしく哀にふ苦しきもおもほゆれば、我が心にあらぬ世のありさまにほのめか

す。

「紫の色はかよへど藤の花こゝろにえこそまかせざりけれ」。まめなる君にていとほしと思へり。いと心惑ふばかりは思ひ入れざりしかど口をしうは覺えけり。かの少將の君はしもまめやかにいかにせましとあやまちもまつべく静めむ方なくむ覺えける。聞え給ひし人々中の君とうつろふもあり。少將の君をば母北の方の御怨によりさもやと思ほしてほのめかし聞え給ひしを絶えて音づれずなりにたり。院にはかの君達もまたしくもとよりさぶらひ給へど、この参り給ひて後をさをさ参らず。まれまれ殿上の方にさしのぞきても、あぢきならうにげてなむまかり出でける。内には故おととの志おき給へるさまことなりしをかく引き違へたる御宮仕を、いかなるにかとおぼして中將をめてなむのたまはせける。御氣色よろしからず。「さればこそ世の人の心のうちも傾きぬべきことなりとかねて申し、ことをおぼしとるかたことにて、かうおぼしたちにしかばともかくも聞えがたくて侍るに、かゝる仰言の侍るはなにがしらの身のためもあぢきなくむ侍る」といともものしと思ひて、かんの君を申し給ふ。「いざや只今かう俄にしも思ひたゞざりしを、あながちにいとほしうのたまはせしかば、後見なきまじらひの内わたりははしたなげなめるを、今は心やすき御有様なめるにまかせ聞えてと思ひよりしなり。誰もたれもびんなからむ事はありのまゝにもいさめ給はで、今ひさかへし右のおとゞもひがひがしきやうにおもむけてのたまふなれば苦しうなむ。これもさるべきにこそは」となだらかにのたまひて心もさわがい給はず「その昔の御す

くせは目に見えぬものなればかうおぼしのたまはするを、これは契り異なるともいかに  
奏しなほすべきことならむ。中宮を憚り聞え給ふとて院の女御をばいかゞ奉り給はむと  
する。後見や何やとかねておぼしかはすともさしもえ侍らじ。よし見聞き侍らむよう思へ  
ば、内は中宮おはしますとてことびとは交らひ給はずや、君に仕うまつることはそれが心や  
すきこそ昔より興あることにはまけれ。女御はいさゝかなることのたがひめありてよろし  
からず思ひ聞え給はむに、ひがみたるやうになむ世のさゝみも侍らむなど二所して申し  
給へば、かんの君いと苦しとおぼしぬ。さるは限りなき御思ひのみ月日に添へてまさる。七  
月より孕み給ひにけり。うち惱み給へるさまげに人のさまさまに聞え煩はすもことわりぞ  
かし。いかでかはかゝらむ人をなのめに見聞き過ぐしてはやまむとぞ覺ゆる。明暮御あそび  
をせさせ給ひつゝ侍従も氣近う召し入るれば御琴の音などは聞き給ふ。かの梅がえにあは  
せたりし中將のおもとの和琴も常に召し出でて、弾かせ給へば、聞きあはするにもたゞには  
覚えざりけり。その年かへりてをとこだうかせられけり。殿上の若人どもの中に物の上手多  
かる比ほひなり。その中にも勝れたるをえらせ給ひて、この四位の侍従右の歌頭なり。かの  
藏人の少將樂人の數の中にもありけり。十四日の月の花やかに曇りなきに御前より出て、冷  
泉院にまゐる。女御もこの御息所も上に御つぼねして見給ふ。上達部親王達ひき連れて参り  
給ふ。右の大殿致仕の大殿のぞうを離れてさらさらしう清げなる人はなき世なりと見ゆ。内  
のお前よりもこの院をばいとづかしうことに思ひ聞えて皆人用意を加ふる中にも、藏人

の少將は見給ふらむかしと思ひやりてまづ心なし。にほひもなく見苦しき綿花もかざす人がらに見わかれてさまも聲もいとをかしくぞありける。竹河謠ひてみはしのもとにふみよる程、過ぎにし夜のはかなかりし遊も思ひ出でられければ、ひがごともまづべくて涙ぐみけり。後の宮の御方にまゐれば上もそなたに渡らせ給ひて御覽ず。月は夜ふかうなるまゝに晝よりもはしたなう澄み昇りて、いかに見給ふらむとのみ覺ゆれば、ふむ空もなう漂ひありきてさかづきもさして一人をのみ咎めらるゝはめいぼくなくなむ。夜一夜所々にかきありきていと惱しう苦しくて臥したるに、源侍従を院より召したれば、「あなくなるし。まばし休むべきに」とむつかりながら参り給へり。御前の事どもなど問はせ給ふ。「かとうはうち過ぐしたる人のさきさきするわざを、選ばれたるほど心にくかりけり」とてうつくしとおぼしためり。ばんずんらくを御口ずさびにし給ひつゝ御息所の御方に渡らせ給へれば御供に参り給ふ。物見に参りたる里人多くて例よりも花やかにけはひ今めかし。渡殿の戸口に暫し居て聲聞き知りたる人に物などのたまふ。「一夜の月かげははしたなかりしわざかな。藏人の少將の月の光に輝きたりし氣色も桂の影にはづるにはあらずやありけむ。雲の上近くてはさしも見えざりき」など語り給へば人々哀と聞くもあり、「問はあやなきを月ばえ今少し心ことなりと聞えし」などすかしてうちより、

「竹河のその夜のことは思ひいづやまのぶばかりのふしはなけれど」とはかなきことなれど、涙ぐまるゝもげにいと淺くは覺えぬことなりけりとみづから思ひまらる。



「流れてのたのめむなしき竹河によはうきものと思ひまりにき」。物哀なる氣色を人々をかしがる。さるはおり立ちて人のやうにも侘び給はざりしかど、人さまのさすがに心苦しう見ゆるなり。「うち出て過ぐすこともこそ侍れ。あなかしこ」とて立つ程にこなたにと召し出づればはしたなき心地すれど參り給ふ。「故六條院のたうかあしたに女がたにてあそびせられける、いとちもしろかりきと右のおとゞの語られし。何事もかのわたりのさしつぎなるべき人かたくなりける世なりや。いと物の上手なる女さへ多く集りて、いかにはかなき事もをかしかりけむ」などおぼし遣りて、御琴ども調らべさせ給ひて箏は御息所琵琶は侍従にたまふ。和琴を弾かせ給ひてこのとのなどあそび給ふ。御息所の御琴の音まだかたなりなる所ありしを、いとよう教へない奉り給ひてけり。今めかしう爪音よくてうたごくのものなど上手にいとよく弾き給ふ。何事も心もとなく後れたることは物し給はぬ人なめり、かたちいとをかしかるべしと猶心とまる。かやうなる折多ければおのづから氣遠からず見なれ給ふ。うたてなれなれしうなどは恨みかけねど、折々につけて思ふ心の違へるなげかしさをかすむもいかゞおぼしけむ、知らずかし。卯月に女宮生れ給ひぬ。ことにけざやかなる物のはえもなきやうなれど、院の御氣色に隨ひて右の大殿よりはじめて御うぶやしなひを給ふ所々おほかり。かんの君つと抱きもちてうつくしみ給ふに、疾う參り給ふべきよしのみあればいかのほどにまゐり給ひぬ。女宮一所おはしますにいと珍しう美しうておはすればいとみじう覺したり。いとゞ唯こなたにのみおはします。女御がたの人々「いとかくらでありぬべき世

かなしとたゞならずいひ思へり。さうじみの御心どもは殊にかかるがるしく背き給ふにはあらねど、さぶらふ人々の中にくせぐせしきことも出て來などしつゝ、かの中將の君のさいへど人のこのかみにての給ひし事かなひて、かんの君もむげにかくいひひてのはていかならむ、人笑へにはしたなうもやもてなされむ、上の御心ばへは淺からねど年經てさぶらひ給ふ御かたがたよろしからず思ひ放ち給はゞ、苦しくもあるべきかなとおもほすに、内には誠にものしとおぼしつゝ、度々御けしきありと人の告げきこゆれば煩しくて、おほやけざまにてまじらはせ奉らむことをおぼしてないしのかみを譲り聞え給ふ。おほやけいとかたうし給ふことなりければ、年ごろかう覺しおきしかど得辭し給はざりしを、故おとこの御心をおぼして久しうなりにける。昔の例など引き出でゝその事かなひぬ。この君の御すくせにて年比申し給ひしはかたきなりけりと見えたり。かくて心安くて内ずみも志給へかしとおぼすにもいとほしう少將の事を母北の方のわざとのたまひしものを、たのめ聞えしやうにほのめかし聞えしもいかに思ひ給ふらむとおぼしあつかふ。辨の君して心美しきやうにおとこの聞え給ふ。「内よりかゝる仰言のあればさまさまにあながちなるまじらひのこのみと、世のさゝみゝもいかゞと思ふ給へてなむ煩ひぬる」と聞え給へば「内の御氣色はおぼし咎むるもことわりになむうけ給はる。おほやけごとにつけても宮づかへ志給はぬはさるまじきわざになむ。はやおぼし立つべきになむ」と聞え給へり。又この度は中宮の御氣色とりてぞ參り給ふ。おとこのおぼしあつかはせましかばおしけち給はざらましなど、哀なる事どもをなむ。姉君はかたち

など名だかうをかしげなりと聞し召しおきたりけるを、引き違へ給へるをなま心ゆかぬやうなれど、これもいとらうらうしく心にくゝもてなしてさぶらひ給ふ。さきのかんの君かたちをかへてむとおぼしたつを、かたがたにあつかひ聞え給ふ程に「おこなひも心あわたゞしうこそおぼされめ、今少しいづ方も心のどかに見奉りなし給ひてもどかしき所なくひたみちにつとめ給へ」と君達の申し給へばおぼしとゞこほりて、うちには時々忍びて参り給ふ折もあり。院には煩しき御心ばへのなほ絶えぬばさるべき折も更に参り給はず。いにしへを思ひ出でしがさすがに辱なう覺えしかしこまりに、人の皆ゆるさぬ事に思へりしをも知らずがほに思ひて参らせ奉りてみづからさへたはぶれにても若々しきことの世に聞えたらむこそいとまばゆく見苦しかるべけれとおぼせど、さるいみによりとはた御息所にも顯し聞えたまはねば我をむかしより故おとゞは取りわきておぼしかしづき、かんの君は若君を櫻のあらそひはかなき折にも心よせ給ひし名残におぼしおとしけるよと、うらめしう思ひ聞え給へり。院の上はたましていみじうつらしとぞおぼしの給はせける。「ふるめかしきあたりにし放ちて思ひおとさるゝもことわりなり」とうち語らひ給ひて哀にのみおぼしまさる。年比ありて又男御子産み給ひつ。そこらさぶらひ給ふ御方々にかゝることなくて年比になりけるをちろかならざりける御すくせなど世の人ちどろく。みかどまして限りなうめづらしとこの今宮をば思ひ聞え給へり。おりる給はぬ世ならましかばいかにかひあらまし、今は何事もはえなき世をいと口をしとなむおぼしける。女一宮を限りなきものに思ひ聞え給ひ

しを、かくさまさまうつくしうて數添ひ給へれば、珍らかなる方にていと殊に覺いたるをなむ、女御もあまりかうまでは物しからむと御心動きける。事に觸れてやすからずくねぐねしき事出て來などしておのづから御中も隔たるべかめり。世の事として數ならぬ人のなからひにも、もとよりことわりえたる方にこそあいなきおほよその人も心をよするわざなめれば、院の内の上下の人々いとやんごとなくて久しくなり給へる御方にのみことわりて、はかなき事にもこの御方さまをよからず取りなしなどするを、御せうとの君達も「さればよ悪しうやは聞えおきける」といと申し給ふ。心やすからず聞き苦しきまゝにかゝらでのどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし、限りなきさいはひなくて宮づかへのすぢは思ひよるまじきわざなりけりと、おほうへは歎き給ふ。聞えし人々のめやすくなりのはりつゝ、さてもおはせましにかたはならぬぞ數多あるや。その中に源侍従とていと若うひはづなりと見しは宰相の中將にて、にほふやかをるやと聞きにくくめでさわがるなる。げにいと人がらおもりに心にくきを、やんごとなき御子達ととの御むすめを、志ありてのたまふなるなども、聞き入れずなどあるにつけて「そのかみは若う心もとなきやうなりしかどめやすくねびまさりぬべかめり」などいひおはさうす。「少將なりしも三位の中將とかいひて覺えありかたちさへあらまほしかりきや」などなま心わろき仕うまつり人はうち忍びつゝ、「うるさげなる御有様よりは」などいふもありていとほしうぞ見えし。この中將は猶思ひそめてし心絶えず、うくもつらくも思ひつゝ左大臣の御むすめを得たれどをさをさ心もとめず、道のは

てなる常陸帯のと、手習にもことぐさにもするはいかに思ふやうのあるにがありけむ。御息所安げなき世のむつかしさに里がちになり給ひにけり。かんの君思ひしやうにはあらぬ御有様を口をしておぼす。内の君はなかなか今めかしう心やすげにもてなして、世にも故あり心にくきおぼえにてさぶらひ給ふ。左大臣うせ給ひて、右は左に藤大納言左大將かけ給へる右大臣になり給ふ。次々の人々なりあがりてこの薫中將は中納言に、三位の君は宰相になりてよろこびま給へる人々この御ざうより外に人なき比ほひになむありける。中納言の御よろこびにさきのないしのかんの君に参り給へり。御前の庭にて拜し奉り給ふ。かんの君對面ま給ひて「かくいと草深くなりゆく菫の門をよぎ給はぬ御心ばへにも、まづ昔の御こと思ひ出でられてなむ」など聞え給ふ。御聲のあてに愛敬づき聞かまほしう今めきたり。ふりがたくもちはするかな、かゝれば院の上は恨み給ふ御心絶えぬぞかし、今遂にことひき出で給ひてむと思ふ。「よろこびなどは心にはいとしも思ふ給へねども、まづ御覽せられにこそ参り侍れ。よぎぬなどのたまはするはおろかなる罪にうちかへさせ給ふにや」と申し給ふ。「今日はさだすぎにたる身の上など聞ゆべき序にもあらずとつゝみ侍れど、わざと立ちより給はむことはかたきを、對面なくてはたさすがにくだくだしきことになむ。院にさぶらはるゝがいといたう世の中を思ひみだれ中空なるやうにたゞよふを、女御をたのみ聞え又後の宮の御かたにもさりともおぼし許されなむと思ひ給へすぐすに、いつかたにもなめげに許さぬものにおぼされたれば、いとかたはらいたくて宮達はさてさぶらひ給ふ。このいと交らひ

にくげなるみづからはかくて心やすくだに眺めすぐい給へとてまかてさせたるを、それにつけても聞きにくくなむ。上にもよろしからずおぼしのたまはすなる序あらばほのめかし奏し給へ。とぞまかろうまにたのもしく思ひ給ひていだし立て侍りし程は、いづかたをも心やすくうちとけ頼み聞えしかど、今はかゝる事あやまりにをさなうおほやけなかりけるみづからの心をもどかしくなむ」とうち歎い給ふ氣色なり。「更にかうまで覺すまじき事になむ。かゝる御まじらひの安からぬ事は昔よりさることとなり侍りにけるを、位を去りて靜におはしまし、何事もけざやかならぬ御有様となりたるに誰もうちとけ給へるやうなれどおのちのうちうちにはいかゞいどましくもおぼす事もなからむ。人は何の咎と見ぬことも我が御身にとりてはうらめしくなむ。あいなき事に心を動し給ふこと女御後の常の御癖なるべし。さばかりのまぎれもあらじものとしてやはおぼし立ちけむ。唯なだらかにもてなして御覽じ過ぐすべきことに侍るなり。をのこの方にて奏すべきことにも侍らぬことになむ」といとすくすくしう申し給へば「對面の序にうれへ聞えむと待ちつけ奉りたるかひもなくあはの御ことわりや」とうち笑ひておはする。人の親にてはかばかしがり給へる程よりは、いと若やかにおほどいたる心ちす。御息所もかやうにぞおはすべかめる。宇治の姫君の心とまりて覺ゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかしの思ひ居給へり。ないしのかみもこの頃まかて給へり。こなたかなたすみ給へるけはひをかしく大方のどやかに紛ることなき御ありさまどものすのうち心耻しうおぼゆれば心づかひせられていとともてまづめやす

きを、おぼうへは近うも見ましかばとうちおぼしけり。大臣殿は唯この殿のびんがしなりけり。だい饗のえがの君達などあまたつどひ給ふ。兵部卿宮左のおほい殿ののりゆみのかへりだち、すまひのあるじなどにはおはしまし、を思ひて、今日のひかりとさうじ奉り給ひけれどもおはしまさず心にくもてかしづき給ふ。姫君達をさるは心ざしことにかでかと思ひ聞え給ふべかめれど、宮ぞいかなるにかあらむ御心もとめ給はざりける。源中納言のいとあらまほしうねびとのひ何事もおくれたる方なくものし給ふをおととも北の方も目とゞめ給ひけり。隣のかくのしりて行きちがふ車の音ささあふ聲々も昔のこと思ひ出でられてこの殿には物哀にながめ給ふ。「故宮うせ給ひてほどもなくこのおとゞの通ひ給ひし事いとあはつけいやうに、世人はもどくなりしかど、思ひも消えずかくてもものしたまふもさすがさる方にめやすかりけり。さだめなの世や。いづれにかよるべき」などのたまふ。左の大殿の宰相中将大饗のまたの日ゆふつけてこゝに参り給へり。御息所里におはすると思ふにいと心げさうそひて「おぼやけのかずまへ給ふよろこびなどは何ともおぼえ侍らず。わたくしの思ふとかなはぬなげきのみ年月にそへて思ふ給へはるけむ方なきと」と涙押しのごふもことさらめいたり。廿七八のほどのいと盛りに匂ひ花やかなるかたち給へり。「見苦しの君達の世の中を心のまゝにおごりてつかさくらるをば何ともおぼはず過ぐしいますからふや、故殿おはせましかばこゝなる人々もかゝるすさびごとにぞ心は亂らまし」とうち歎きたまふ。右兵衛督右大辨にて皆非参議なるをうれはしと思へり。侍従ときこゆめりしぞこのご

る頭中將ときこゆる。年よはひのほどはかたはならねど人におくるとなげき給へり。宰相はとかくつきづきしく。

### 橋 姫

その頃世にかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。母方などもやんごとなくものし給ひてすぢことなるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて世の中にはしたなめられ給ひけるまぎれに、なかなかいと名残なく御後見なども物うらめしき心々にて、かたがたにつけて世を背きさりつゝ、おぼやけわたくしにより所なくさしはなたれ給へるやうなり。北の方も昔の大 臣の御むすめなりける。哀に心ほそく親たちのおぼしおきてたりしさまなど思ひ出で給ふに、たとしへなきこと多かれど、深き御契のふたつなきばかりをうき世のなぐさめに、かたみにまたなく頼みかはし給へり。年比經るに御子もものし給はて心もとなかりければ、さうざうしくつれづれなるなぐさめに、いかでをかしからむちごもがなと、宮ぞ時々おぼしのためひけるに、珍しく女君のいと美しげなる生れ給へり。これをがぎりなく哀と思ひかしづき聞え給ふに、又さしつゞき氣色ばみ給ひてこのたびは男にてもなどおぼしたるに同じさまにてたひらかには志給ひながらいといたく煩ひてうせ給ひぬ。宮あさましくおぼし惑ふ。ありふるにつけていとはしたなく堪へがたきと多かる世なれど、見捨てがたく哀なる人の



御有様心ざまにかけとどめらるゝほだしにてこそすぐしきつれ、一人とまりていとどすさまじくもあるべきかな、いはけなき人々をも一人はぐゝみたてむほどかぎりある身にていとをこがましうひとわるかるべき事とおぼしたちて、ほいも遂げまほしう志給ひけれど見譲る人もなくて残しとどめむをいみじくおぼしたゆたひつゝ年月もふれば、おのおのおよまげまさり給ふ。さまかたちの美しうあらまほしきを明暮の御なぐさめにておのづからぞ過ぐし給ふ。後に生れ給ひし君をば侍ふ人々も「いでやをりふし心憂く」などうちつぶやきて心にに入れてもあつかひ聞えざりけれど、かぎりのさまにて何事もおぼしわかざりし程ながらこれをいと心苦しと思ひて、「唯この君をばかたみに見給ひて哀とおぼせ」とばかり唯ひとことなむ宮に聞え置き給ひければ、先の世の契もつらさをりふしなれどさるべきにこそはありけめと、今はと見えしまていと哀と思ひてうしろめたげにのたまひしをとおぼし出でつゝ、この君をしもいと悲しう奉り給ふ。かたちなむ誠にいと美しくしうゆゝしきまで物し給ひける。姫君は心ばせまづかによしある方にて見るめもてなしもけだかく心にくきさまぞ志給へる。いたはしくやんごとなきすぢは勝りていづれをもさまさまに思ひかしづき聞え給へど、かなはぬこと多く年月にそへて宮の内物さびしくのみなりまさる。侍ひし人もたづなき心地するに得忍びあへず、つぎつぎにまたがひてまかでちりつゝ、若君の御乳母もさるさわぎにはかばかしき人をしもえりあへ給はざりければ、程につけたる心あさゝにて幼きほどを見捨て奉りにければ唯宮ぞはぐゝみ給ふ。さすがに廣くおもしろき宮の、池山など

の氣色ばかり昔に變らでいといたうあれまさるをつれづれとながめ給ふ。けいしなどもむねむねしき人もなかりければとりつくろふ人もなきまゝに、草青やかにまげり軒の志のぶを所えがほに青み渡れる。折々につけたる花紅葉の色をも香をも同じ心にみはやし給ひしにこそ慰むことも多かりけれ、いとゞしくさびしくよりつかむ方なきまゝに、持佛の御飾ばかりをわざとせさせ給ひて明暮行ひ給ふ。かゝるほだしどもにかゝづらふだに思の外に口をしう、我が心ながらもかなはざりけるちざりと覺ゆるを、まいて何にか世の人めいて今さらにとのみ、年月にそへて世の中をおぼし離れつゝ、心ばかりはひじりになりはて給ひて故君のうせ給ひしこなたは例の人のさまなる心ばへなど戯ぶれにてもおぼし出で給はざりけり。いなどかさしも別るゝ程のかなしびは又世にたぐひなきやうにのみこそは覺ゆべかめれど、ありふればさのみやは。猶世の人になずらふ御心づかひをま給ひて、見苦しくたづきなき宮の内もおのづからもてなさるゝわざもや」と、人はもとき聞えて何くれとつきづきしく聞えごつことも類に觸れておほかれど聞し召し入れざりけり。御ねんずのひまひまにはこの君達をもてあそび、やうやうおよすげ給へば琴ならはし、碁うちへんつぎなどはかなき遊びわざにつけても、心ばへどもを見奉り給ふに、姫君はらうらうしく深くおもりに見え給ふ。若君はおほどかにらうたげなるさまして物づゝみまたるけはひいとうつくしうさまさまに坐す。春のうらゝかなる日影に池の水鳥どもの羽根うちかはしつゝおのがまゝさへづる聲などを常ははかなき事と見給ひしかどもつがひ離れぬを羨しくながめ給ひて君達に

御琴ども教へ聞え給ふ。いとをかしげに小き御程にとりどりかき鳴らし給ふ。物の音ども哀にをかしく聞ゆれば涙をうけ給ひて、

「うちすてゝつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたち後れけむ。心づくしなりや」と目おしのごひ給ふかたちいと清げにおはします宮なり。年比の御行ひに瘳せほそり給ひにたれどさてしもあてになまめきて、君達を冊き給ふ御心ばへに直衣のなえはめるを着給ひて若どけなき御さまいと恥しげなり。姫君御祝をやらひきよせて手習のやうに書きませ給ふを「これに書きたまへ。祝には書きつけざなり」とて紙奉り給へばはぢらひて書き給ふ。

「いかでかくすだちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりぞをぞる」。よからねどそのをりは哀なりけり。手はおひさき見えてまだよくもつゞけ給はぬ程なり。「若君も書き給へ」とあれば今少しをさなげに久しく書き出で給へり。

「なくなくもはねうちきする君なくばわれぞすもりになるべかりける」。御ぞどもなどなをばみて御前に又人もなくいと寂しくつれづれげなるに、さまざまいとらうたげにて物し給ふを哀に心苦しういかゞおぼさざらむ。經を片手にも給ひてかつ讀みつゝさうがをし給ふ。姫君に琵琶若君に箏の御琴を、まだをさなければ常合せつゝ習ひ給へば聞きにくくもあらでいとをかしく聞ゆ。父帝にも母女御にも疾くおくれ給ひてはかばかしき御後見のとりたてたる坐せざりければ、さえなど深くも得習ひ給はず。まいて世の中に住みつゝ御心おきてはいかてかは知り給はむ。たかき人と聞ゆる中にもあさましうあてにおほどかなる女

のやうにおはすれば、ふるき世の御寶物おほちちとゞの御そらぶん何やかやとつきすまじかりけれど行くへもなくはかなくうせはて、御調度などばかりなむわざとうるはしくて多かりける。参り侍ひ聞え心よせ奉る人もなし。つれづれなるまゝにうたづかさの物の師どもなどやうの勝れたるを召しよせつゝはかなき御遊に心を入れおひ出で給へればその方はいとをかしく勝れ給へり。源氏のおとゞの御弟八宮とぞ聞えしを、冷泉院の春宮におはしまし、時朱雀院の太后のよこざまにおぼし構へてこの宮を世の中にたちつき給ふべく我が御時もてかしづき奉り給ひけるさわぎに、あいなくあなたさまの御なからひにはさしはなたれ給ひにければいよいよかの御つきつきになりはてぬる世にてえまじらひ給はず。又この年比かゝるひじりになりはて、今はかぎりともろづをおぼし捨てたり。かゝる程に住み給ふ宮焼けにけり。いとゞしき世にあさましうあへなくてうつろひ住み給ふべき所のよろしきもなかりければ宇治といふ所によしある山里も給へりけるに渡り給ふ。思ひ捨て給へる世なれども今はと住み離れなむを哀におぼさる。あじろのけはひ近く耳かしがましき川のわたりにて静なる思ひにかなはぬ方もあれどいかゞはせむ。花紅葉水の流れにも心をやるたよりによせていとゞしくながめ給ふより外のことなし。かく絶え籠りぬる野山の末にも昔の人ものし給はましかばと思ひ出で聞え給はぬをりなかりけり。

「見し人も宿もけぶりになりにしをなとて我が身のきえのこりけむ」。生けるかひなくぞ覺してがるゝや。いとゞ山重なれる御すみかに尋ね参る人もなし。あやしきげすなど田舎ひ

たるやまがつどものみまれになれ参り仕うまつる。峯の朝霧晴る、折なくて明し暮し給ふに、この宇治山にひじりだちたる阿ざ梨住みけり。さえいとかしこくて世の覺えもかるからぬどをさをさおほやけごとにも出て仕へず籠り居たるに、この宮のかく近き程に住み給ひて寂しき御さまにたふときわざをせさせ給ひつゝ、法文などを讀み習ひ給へばたふとひ聞えて常にまゐる。年比學び知り給へる事どもの深き心を解き聞かせ奉り、いよいよこの世のかりそめにあぢきなきとを申し知らすれば「心ばかりにはちすの上に思ひのぼり濁なき池にも住みぬべきをいとかく幼き人々を見捨てむうしろめたさばかりになむえひたみちにかたちをもかへぬ」などへだてなく物語し給ふ。この阿ざ梨は冷泉院にも親しく侍ひて御經など教へ聞ゆる人なりけり。京に出でたるついでに参りて、例のさるべき文など御覽じて問はせ給ふともあるついでに「八宮のいとかしこく内教の御ざえさと深く物し給ひけるかな。さるべきにて生れ給へる人にや物し給ふらむ。心深く思ひすまし給へるほど誠のひじりのおきてになむ見え給ふ」と聞ゆ。「いまだかたちはかへ給はずや。ぞくひじりとかこの若き人々のつげたなる哀なる。となり」などの給はず。宰相の中將も御前に侍ひ給ひて、我こそ世の中をいとすさまじく思ひ知りながら行ひなど人に目留めらるゝばかりはつとめず、口惜しくて過しけれなど人知れず思ひつゝ、俗ながらひじりになり給ふ心のおきてやいかにと、耳留めて聞き給ふ。「出家の志はもとより物し給へるをはかなきことに思ひとゞこほり今となりては心ぐるしき女子どもの御うへをえ思ひ捨てぬとなむ歎き侍り給ふ」と奏す。さすがにも

のゝ音めづる阿ざ梨にて「げにはたこの姫君達のこと弾きあはせて遊び給へる、河波にさほひて聞え侍るはいともしろく極樂思ひやられ侍るや」とこだいにめづれば、帝ほゝゑみ給ひて「さるひじりのあたりにおひ出で、この世のかたざまはたどたどしからむとおしはからるゝを、をかしのことや、うしろめたく思ひ捨てがたくもて煩ひ給へらむを、もしまばしもおくれむほどは譲りやはし給はぬ」などどのたまはする。この院のみかどは十の御子にぞおはしける。朱雀院の故六條院にあづけ聞え給ひし入道の宮の御ためしをおぼし出で、かの君達をがな、つれづれなるあそびがたきになどうちおぼしけり。中將の君はなかなかみこの思ひすまし給へらむ御心ばへを對面して見奉らばやと思ふ心ぞ深くなりぬ。さて阿ざ梨のかへりいるにも「必ず参りて物習ひ聞ゆべくまづうちうちにも氣色給はり給へ」など語らひ給ふ。みかどは御ことづてにて「哀なる御住まひを入つてに聞くこと」など聞え給うて、「世をいとふ心は山にかよへどもやへたつ雲をさみやへだつる」。阿ざ梨この御使をさきにたてゝかの宮にまゐりぬ。なのめなるきはのさるべき人の使だにまれなる山陰にいと珍しく待ち喜び給ひて、所につけたるさかなしどしてさるかたにもてはやし給ふ。御かへし、「あとたえて心すむとはなけれども世をうち山にやどをこそかれ」。ひじりのかたをば卑下して聞えなし給へれば猶世に怨残りけるといとほしく御覽ず。阿ざ梨「中將の君の道心深げに物し給ふ」など語り聞えて「法文などの心得まほしき志なむいはけなかりしよはひより深く思ひながら得去らず世にありふるほどおぼやけわたくしにいとまなく明けくらし、わ

ざとち籠りて習ひ読み大方はかばかしくもあらぬ身にしも世の中をそむき顔ならむも憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ紛はしくてなむ過ぐしくるを、いとありがたき御有様をうけ給はり傳へしより、かく心にかけてなむ頼み聞えさするなどねんごろに申し給ひし」など語り聞ゆ。宮「世の中をかりそめのこと、思ひとり、いとほしき心のつきそむることも我が身にうれひある時、なべての世もうらめしう思ひ知るはじめありてなむ道心も起るわざなめるを、年若く世の中思ふにかなひ何事も飽かぬことはあらじと覺ゆる身のほどに、さはた後世をさへたどり知りたまふらむがありがたさ。こゝにはさべきにや。唯いとひ離れよと殊更に佛などのすゝめおもむけ給ふやうなる有様に、おのづからこそまづかなる思ひにかなひゆけど、のこり少き心地するにはかばかしくもあらで過ぎぬべかめるを、しかた行く末更に得たどる所なく思ひ知らるゝを、かへりては心耻しげなるのりの友にこそはものし給ふなれ」などのたまひてかたみに御せうそこかよひ自らもまうで給ふ。げに聞きしよりも哀に住まひ給へるさまより始めていとかりなる草のいほりに思ひなしことそぎたり。同じき山里といへどさるかたにて心とまりぬべくのとやかなるもあるを、いとあらましき水の音波の響に物忘れうちし、よるなど心解けて夢をだに見るべき程もなげにすぐ吹き拂ひたり。ひじりだちたる御ためにはかゝるしもこそ心とまらぬもよほしならめ、女君達何心地して過ぐし給ふらむ、世のつねの女しくなよびたる方はとほくやと推しはからるゝ御有様なり。佛の御方にはさうまばかりを隔てゝぞおはずべかめる。すき心あらむ人は

氣色ばみよりて人の御心ばへをも見まほしうさすがにいかゞとゆかしうもある御けはひなり。されどさるかたを思ひ離るゝ願ひに山深く尋ね聞えたるほいなくすぎずさしきなほざりごとを打ち出であざればまむもことにたがひてやなど思ひ返して、宮の御有様のいと哀なるをねんごろにとぶらひ聞え給ひ、たびたび参り給ひつゝ思ひしやうにうばそくながら行ふ山の深き心、法文などわざとさかしげにはあらでいとよくのたまひまらす。ひじりだつ人ざえある法師などは世におほかれどあまりこははしうけ遠げなるまうとくの僧都僧正のきは、世にいとまなくさすくにて物の心をとひあらはさむもことごとしく覺え給ふ。又その人ならぬ佛の御弟子の忌むことを保つばかりのたふとさはあれどけはひいやしくことばだみてこちなげにもなれたるいとものしくて、晝はおほやけごととに暇なくなどしつゝ、まめやかなるよひの程け近き御枕上などに召し入れ語らひ給ふにも、いとさすがに物むづかしくなどのみあるを、いとあてに心苦しきさましてのたまひ出づる言の葉も同じ佛の御教をも耳近きたとひにひきませ、いとこよなく深き御さとりにはあらねどよき人は物の心をえたまふ方のいとことに物し給うければ、やうやう見馴れ奉り給ふたびごとに常に見奉らまほしうて、いとまなくなどしてほどふる時は戀しうおほえ給ふ。この君のかくたふとがり聞え給へれば冷泉院よりも常に御せうそなどありて、年比おとにもをさをさ聞え給はず、いみじく寂しげなりし御すみかにやうやう人め見る時々あり。をりふしにとぶらひ聞え給ふこといかめしうこの君もまづさるべきことにつけつゝをかしきやうにもまめやかなる



さまにも心よせ仕う奉り給ふこと三年ばかりになりぬ。秋の末の方四季にあてつゝ給ふ御念佛を、この河づらはあじろの浪もこのごろはいと耳かしかましく静ならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂にうつろひ給ひて七日のほど行ひ給ふ。姫君達はいと心ぼそくつれづれまさりてながめ給ひけるころ、中將の君久しく参らぬかなと思ひ出て聞え給うけるまゝに、有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出でたちて、いと忍びて御供に人などもなくやつれておはしけり。河のこなたなれば船などもわづらはて御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに霧ふたがりて道も見えぬ繁木の中をわけ給ふに、いとあらまじき風のきほひにほるほると落ち亂るゝ木の葉の露の散りかゝるもいとひやくかに人やりならずいたくぬれ給ひぬ。かゝるありきなどもをさをさならひ給はぬ心地に心ぼそくをかしくおぼされけり。

「山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな。やまがつの驚くもうるさしとてずるじんの音もせさせ給はず、柴の籬をわけつゝそこはかとなき水の流れどもをふみしだく駒の足音も猶忍びてと用意し給へるに、かくれなき御にほひぞ風にまたがひて、ぬし知らぬかとおどろくねざめの家々ぞありける。近くなるほどにその事とも聞き別れぬ物の音どもいとすゞげに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くをついでなくて御子の御さんの音の名高きも得聞かぬぞかし、よき折なるべしと思ひつゝ入り給へば、琵琶の聲のひびきなりけり。わうしきでうにまらべて世の常のかきあはせなれど所がらにや耳馴れぬ心地して、搔き返すばちの音も物清げにおもしろし。箏の琴哀になまめいたる聲してたえだえ聞ゆ。ま

ばし聞かまほしきに忍びたまへど、御けはひまるく聞きつけて、とのゐびとめくをのこなまかたくなしき出て來たり。「まかまかなむ籠り坐します御せうそこをこそ聞えさせめ」と申す。「何かは、まか限りある御行ひの程を紛はし聞えさせむにあいなし。かくぬれぬれ参りていたづらに歸らむうれへを姫君の御方に聞えて哀とのたまはせばなむ慰むべき」とのたまへば、見にくき顔うちゑみて「申させ侍らむ」とてたつを「まばしや」と召しよせて「年比人づてにのみ聞きてゆかしく思ふ御ことの音どもを嬉しきをりかな。暫し少したち隠れて聞くべきものゝくまありや。つきなくさし過ぎて参りよらむほど皆ことやめ給ひては、いとほいなからむ」とのたまふ。御けはひ顔かたちのさるなほなほしき心地にもいとめてたくかたじけなく覺ゆれば「人さかぬ時は明暮かくなむあそばせど、まも人にも都のかたより参りたちまじる人侍る時は音もせさせ給はず。大かたかくて女君達おはしますことをばかくさせたまひ、なべての人に知らせ奉らじとおぼしのたまはする」と申せば、うち笑ひて「味氣なき御ものかくしなり。まか忍び給ふなれど皆人ありがたき世のためしに聞き出づべかめるを」とのたまひて「猶老るべせよ。われはすきずきしき心などなき人ぞ。かくておはしますらむ御有様のあやしくげになべてに覺え給はぬなり」とこまやかにの給へば「あなかしこ、心なきやうに後の聞えや侍らむ」とてあなたのお前ははたけのすいがいまこめて皆へだてことなるを、教へよせ奉れり。御供の人は西の廊によびすゑてこのとのゐあへしらふ。あなたに通ふべかめる透垣の戸を少し押し明けて見給へば、月をかしき程にきり渡れるをながめて、す

だれを少し短く巻き上げて人々居たり。簀子にいと寒げに身ほそくなえばめる童一人同じさまなるおとななど居たり。内なる人ひとり柱に少し居かくれて琵琶を前に置きてばちを手まさぐりにまつゝ居たるに、雲がくれたりつる月の俄にいと明くさし出てたれば「扇ならでこれしても月はまねきつべかりけり」とてさしのぞきたる顔いみじくうたげにほひやかなるべし。そひふしたる人は琴の上にかたぶきかゝりて「入る日をかへすばちこそありけれ。さまことにも思ひ及び給ふ御心かな」とてうち笑ひたるけはひ今少しおもりによしづきたり。「及ばすともこれも月に離るゝものかは」など、はかなきことをうち解けのたまひかはしたる御けはひども、更によそに思ひやりしにはにず、いと哀になつかしうをかし。昔物語などに語り傳へて若き女房などの讀むをも聞くに、必ずかやうのとをいひたるさしもあらざりけむとにくゝおしはからるゝを、げに哀なるものゝくまあるべき世なりけりと心うつりぬべし。霧の深ければさやかに見ゆべくもあらず。又月さし出でなむと覺すほどに奥の方より「人坐す」と告げ聞ゆる人やあらむ、簾垂おろして皆入りぬ。驚き顔にはあらずなごやかにもてなしてやをらかくれぬるけはひどもきぬの音もせず、いとなよゝかに心苦しうていみじうあてにみやびかなるを哀と思ひ給ふ。やをらたち出で、京に御車ゐて参るべく人走らせ給ひつ。ありつるさぶらひに折あしく参り侍りにけれどなかなかうれしく思ふこと少し慰めてなむ。「かくさぶらふよし聞えよ。いたうぬれにたるかごとも聞えさせむかし」とのたまへば参りてきこゆ。かく見えやまぬらむとはおぼしもよらでうちとけたりつる

事どもを聞きやし給へらむといひみじくはづかし。怪しくかうばしく匂ふ風の吹きつるを思ひかけぬほどなれば驚かざりける心ちぞさよと心も惑ひてはぢぢはさうず。御せうそこなどつたふる人もいとうひうひしき人なめるを、をりからにこそ萬のこともと思ひてまだ霧のまきれなればありつる御簾の前にあゆみ出て、つい居給ふ。山里びたる若人どもはさしいらへむ言の葉も覚えて、御志とねさし出づるさまもたどしげなり。「この御簾の前にははしたなく侍りけり。うちつけに淺き心ばかりにてはかくも尋ね参るまじき山のかげぢに思ひ給ふるを、さまことにこそ。かく露けきたびをかさねてはさりととも御覽じ知るらむとなむたのもしう侍る」といとまめやかにのたまふ。若き人々のなだらかに物聞ゆべきもなく消え返りかゞやかしげなるもかたはらいたければ、女ばらの奥深きをおこし出づる程久しくなりてわざとめいたるも苦しうて「何事も思ひ知らぬありさまにて、知りかほにもいかゞは聞ゆべき」といとよしありてあてなる聲してひき入りながらほのかにのたまふ。「かつ知りながらうきを知らず顔なるも世のさがと思ひ給へ知るを、ひとところしもあまりおぼめかせ給へらむこそ口惜しかるべけれ。ありがたう萬を思ひすましたる御住まひなどにたぐひ聞えさせ給ふ御心のうちは何事も涼しくおしはかられ侍れば、猶かく忍びあまり侍る深さ淺さのほどもわかせ給はむこそかひは侍らめ。世の常のすきすきしきすぢにはおぼし召し放つべくや。さやうのかたはわざとすゝむる人侍るとも靡くべうもあらぬ心強さになむ、おのづから聞し召しあはするやうも侍りなむ。つれづれとのみ過ぐし侍る世の物語も聞

えさせ所に頼み聞えさせ、又かく世離れてながめさせ給ふらむ御心のまぎらはしにもさしも驚かさせ給ふばかり聞えなれ侍らばいかに思ふさまに侍らむなど多くのたまへば、つしましくいらへにくく、ておこしつるおい人の出できたるにぞ譲り給ふ。たとしへなくさし過して「あなかたじけなや。かたはらいたきおましのおさまにも侍るかな。御簾の内にぞ若き人々はものゝほど知らぬやうにこそ」など考たゝかにいふ聲のさだすぎたるもかたはらいたく君達はおぼす。いと怪しく世の中に住まひ給ふ人の數にもあらぬ御有様にてさもありぬべき人々に、とぶらひかずまへ聞え給ふも見え聞えずのみなりまさり侍るめるに、ありがたき御志のほどは數にも侍らぬ心にもあさましきまで思ひ給へ聞えさせ侍るを、若き御心地にもおぼし知りながら聞えさせ給ひにくきにや侍らむ」といひとつ、みなく物馴れたるもなまにくきものからけはひいたう人めきてよしある聲なれば「いとたづきも知らぬ心地しつるにうれしき御けはひにこそ。何事もげに思ひ知り給ひけるたのみこよなかりけり」とて寄り居給へるを几帳のそばより見れば、曙のやうやうものゝ色わかるゝにげにやつし給へると見ゆる狩衣姿のいとぬれまめりたるほどうたてこの世の外のにほひにやと怪しきまでかをりみちたり。このおい人はうち泣きぬ。「さしすぎたる罪もやと思ひ給へ忍ぶれど、哀なる昔の御物語のいかならむ序にうち出て聞えさせかたはしをもほのめかしゑろしめさせむと、年比ねんずのついでにもうちませ思ひ給へわたるるしにや嬉しきをりに侍るを、まだきにおぼしれたる涙にくれてえこそ聞えさせ侍らね」とうちわなゝく氣色誠にいみじく物

悲しと思へり。大かたさだすぎたる人は涙もろなるものとは見聞き給へどいとかうしも思へるも怪しうなり給ひて「こゝにかく参ることはたびかさなりぬるを、かく哀知り給へる人もなくてこそ露けき道のほどに一人のみそぼちつれ。うれしきついでなめるをことなのこい給ひそかし」とのたまへば、「かゝる序しも侍らじかし。また侍るとも夜のまのほど知らぬ命の頼むべきにも侍らぬを、さらば唯かゝるふるもの世に侍りけりとばかりまろしめされ侍らなむ。三條の宮に侍ひし小侍従ははかなくなり侍りにけるとほのかに聞き侍りし。そのかみ睦じう思ひ給へしおなじほどの人多くうせ侍りにける世の末に、逆なる世界より傳はりまうできてこの五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る。えまろしめさじかし。この頃藤大納言と申すなる御このかみの、衛門督にてかくれ侍りにしは、ものゝついでなどにやかの御上とて聞し召し傳ふることも侍らむ。すぎ給ひていくばくも隔たらぬ心地のみし侍る。そのをりの悲しさもまだ袖のかわくをり侍らず思ひ給へらるゝを、手を折りて數へ侍ればかくおとなしくならせ給ひにける。御よはひの程も夢のやうになむ。かの故權大納言の御乳母に侍りしは辨が母になむ侍りし。朝夕に仕うまつり馴れ侍りしかば人数にも侍らぬ身なれど人に知られず御心よりはたあまりけることをりをりうちかすめのたまひしを、今は限になり給ひにし御病の末つ方召しよせていさゝかのたまひおくことなむ侍りしを聞し召すべき故なむひとこと侍れどかばかり聞え出で侍るにのこりをとおぼし召す御心侍らばのどかになむ聞し召しはて侍るべき。若き人々もかたはらいたくさしすぎたりとつきじろ

ひ侍るめるもことわりになむ」とてさすがに打ち出でずなりぬ。あやしく夢がたりかんなきやうのものゝ間はすがたりするやうに珍らかにおぼさるれど哀に覺束なくおぼし渡ることのすぢを聞ゆればいとちゆかしけれど、げに人めも老げし、さしぐみにふる物語にかゝづらひて夜を明しはてむもこちごちしかるべければ「そこはかと思ひわくことはなきものからいにしへのことゝ聞き侍るも物哀になむ。さらば必ずこのこり聞かせ給へ。霧晴れゆかばはしたなかるべきやつれをおもなく御覽じ咎められぬべきさまなれば思ひ給ふる心の程よりは口惜しうなむ」とて立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の聲かすかに聞えて霧いと深くたちわたれる峯の八重雲思ひやるへたて多く哀なるに、猶この姫君達の御心のうちども心苦しう何事をおぼし残すらむ、かくいとちよく給へるもことわりぞかしなどおぼす。

「あさぼらけ家路も見えずたづねこし横のを山は霧こめてけり。心ぼそくも侍るかな」とたちかへりやすらひ給へるさまを都の人のめなれたるだに猶いとことに思ひ聞え侍るをまいていかゞは珍しう見ざらむ。御かへり聞え傳へにくげに思ひたれば例のいとつゝましげにて、

「雲のゐる峯のかけぢを秋霧のいとゞへだつるころにもあるかな。少しうち歎き給へる氣色淺からず哀なり。何ばかりをかしきふしは見えぬあたりなれど實に心苦しきこと多かるにもあかうなり行けばさすがにひたおもてなる心地して「なかなかなるほどに承りさしつること多かるのこりは今少しおもなれてこそは怨み聞えさすべかめれ。さるはかく世の

人めいてもてなし給へば思はずに物おぼしわかざりけりと、うらめしうなむ」とてとのゐびとが去つらひたる西面におぼしてながめ給ふ。「あじろは人さわがしげなり。されどひをもよらぬにやあらむすさまじげなる氣色なり」と御供の人々見知りていふ。あやしき船どもに柴刈り積みおの何となき世のいとなみどもに行きかふさまどものはかなき水の上に浮びたる、誰も思へば同じことなる世のつねなさなり。我はうかばず玉の臺にまづけき身と思ふべき世かはと思ひつゞけらる。硯召してあなたに聞え給ふ。

「はし姫の心をくみてたかせさす棹のまづくにそぞぬれぬる。ながめ給ふらむかし」とてとのゐびにもたせ給へり。寒げにいらゝぎたる顔してもて參る。御かへし紙のかなどおぼろげならむは恥しげなるを、疾きをこそはかゝるをりはとて、

「さしかへる宇治の川をさ朝夕のまづくや袖をくたしはつらむ。身さへうきて」といとをかしげに書き給へり。まほにめやすく物し給ひけりと心とまりぬれど御車ゐて參りぬと人々さわがし聞ゆればとのゐびとばかりを召しよせて「かへり渡らせ給はむほどに必ず參るべし」などのたまふ。ぬれたる御ぞどもは皆この人にぬぎかけ給ひてとりにつかはしつる御直衣に奉りかへつ。おい人の物語心にかゝりておぼし出でらる。思ひしよりはこよなくまさりておほどかにをかしかりつる御けはひども面かげに添ひて、猶思ひ離れがたき世なりけりと心弱く思ひ知らる。御文奉り給ふ。けさうだちてもあらず、白き色紙のあつごえたるに筆はひきつくるひえりて墨つき見所ありて書き給ふ。「うちつけなるさまにやとあいなく留



め侍りて、のこり多かるも苦しきわざになむ。かたはし聞え置きつるやうに今よりは御簾の前も心やすくおぼし許すべくなむ。御山ごもりはて侍らむ日數もうけ給はりおきていぶせかりし霧のまよひもはるけ侍らむ」などいとすくよかに書き給へる。左近のぞうなる人御使にて「かのおい人尋ねて文もとらせよ」とのたまふ。とのゐ人がさむげにてさまよひしなど哀におぼしやりて大きなるひわりごやうのもの數多せさせ給ふ。又の日の御寺にも奉り給ふ。山ごもりの僧どもこのごろの嵐にはいと心ほそく苦しからむを、さておはしますほどの布施給ふべからむとおぼしやりて絹綿など多かりけり。御行はて、出で給ふあしたなりければ行ひ人どもに綿絹袈裟衣などすべてひとくだりの程づゝあるかぎりの大とこたちになまふ。とのゐ人かの御ぬぎすてのえんにいみじきかりの御ぞどもえならぬ白き綾の御ぞのなよなよといひ知らず匂へるをうつしきて、身をはたえかへぬものなれば似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められめてらるゝなむなかなかとろせかりける。心にまかせて身を安くもふるまはれず、いとむくつけきまで人の驚くにほひを失ひてばやと思へど、所せき人の御うつりがにてえもすゝぎすてぬぞあまりなるや。君は姫君の御返事いとめやすくこめかしきををかしく見給ふ。宮にも「かく御せうそこありき」など人々聞えさせ御覽ぜさすれば「何かは。けさうだちてもてない給はむもなかなかうたてあらむ。例の若き人に似ぬ御心ばへなめるを、なからむ後などひとことうちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」などのたまひけり。御みづからもさまさまの御とぶらひの山の岩屋に餘りして

となどのたまへるに、まうてむとおぼして、三の宮のかやうにおくまりたらむあたりのみまさりせむこそをかしかるべけれとあらましごとくにだにのたまふものを。聞えはげまして御心さわがし奉らむとおぼして、のどやかなる夕暮に参り給へり。例のさまざまなる御物語聞えかはし給ふついでに宇治の宮のこと語り出で、見し曉のありさまなどくはしく聞え給ふに、宮いとせちにをかしとおぼいたり。さればよと御氣色を見ていとと御心動きぬべくいひつゞけ給ふ。「さてそのありけむ返事はなどか見せ給はざりし。まるならましかば」と怨み給ふ。「さかし。いとさまざま御覽すべかめる端をだに見せ給はぬ。かのわたりはかくいともうもれたる身にひきこめてやむべきけはひにも侍らねば必ず御覽せさせばやと思ひ給ふれど、いかてか尋ねよらせ給ふべき。かやすきほどこそすかまほしくはいとよくすきぬべき世に侍りけれ。うちかくろへつゝ多かめるかな。さるかたに見所ありぬべき女の物思はしきうち忍びたるすみかも山里めいたるくまなどにおのづから侍るべかめり。この聞えさするわたりはいとよづかぬひじりざまにてこちこちしうぞあらむと年比は思ひあなづり侍りて耳をだにこそ留め侍らざりけれ。ほのかなりし月影の見劣りせずばまほならむはや。けはひ有様はたさばかりならむをぞあらまほしきほどと覺え侍るべき。ななど聞え給ふ。はてはてはまめだちていとねたく、おぼろげの人に心移るまじき人のかく深く思へるを、おろかならじとゆかしうおぼすことかぎりなくなり給ひぬ。「猶又々よく氣色見給へ」と人をすゝめ給ひて限りある御身のほどのよだけさをいとほしきまで心もとなしとおぼしたれば、をかしくて「い

てやよしなくぞ侍る。まばし世の中に心とゞめじと思ひ給へるやうある身にてなほざりごと  
ともつゝましう侍るを、心ながらかなはぬ心つきそめなばおほきに思ひにたがふべきこと  
なむ侍るべき」と聞え給へば「いであなたごととし。例のおどろおどろしきひじりことば見  
はてしかな」とて笑ひ給ふ。心のうちにはかのふる人のほのめかし、すぢなどのいとどら  
ち驚かされて物哀なるにをかしと見ることもめやすしと聞くあたりも何ばかり心にもとま  
らざりけり。十月になりて五六日のほどに宇治へまうで給ふ。「あじろをこそこの頃は御覽  
せめ」と聞ゆる人々あれど「何かはそのひをむしにあらそふ心にてあじろにもよらむ」とそ  
ぎ捨て給ひて、かろらかに綱代車にてかたりの直衣指貫ぬはせて殊さらび着給へり。宮待ち  
喜び給ひて所につけたる御あるじなどをかしうまなし給ふ。暮れぬれば大となぶら近くて、  
さささき見さし給へる文どもの深きなど、阿闍梨もさうじちろして義などいはせ給ふ。うち  
もまどろまず。河風のいとあらましきに木の葉の散りかふおと水のひゞきなど哀もすぎて  
物恐しく心ほそき所のさまなり。明けがた近くなりぬらむと思ふ程に、ありし志のゝめ思ひ  
出でられて、琴の音の哀なることのついでつくり出て、「ささのたび霧にまどはされ侍りし  
曙にいと珍しきものゝ音ひと聲うけたまはりしのこりなむ、なかなかにいといぶかしう飽  
かず思ひ給へらるゝ」など聞え給ふ。「色をも香をも思ひ捨てし後昔聞きしことも皆忘れ  
てなむ」とのたまへど、人召してきんとりよせて、「いとつきなくなりたりや。まるべする物  
の音につけてなむ思ひ出でらるべかりける」とて琵琶めしてまらうどにそゝのかし給ふ。と

りて去らば給ふ。「更にほのかに聞き侍りし同じものとも思ひ給へられざりけり。御琴の響がらにやとこそ思ひ給へしか」とて心とけてもかきたて給はず。「いであなさがなや。まか御耳とまるばかりのてなどはいづくよりか此處までは傳はりこむ。あるまじき御事なり」とてきんかきならし給へると哀に心凄し。かたへは峯の松風のもてはやすなるべし。いとたどたどしげにおぼめき給ひて心ばへある手ひとつばかりにてやめ給ひつ。「このわたりに覺えなくて折々ほのめく箏の琴の手こそ心得たるにやと聞く折侍れど心留めてなどもあらで久しぶなりにけりや。心にまかせて各かきならすべかめるは河波ばかりやうち合すらむ。ろなうものゝようにすばかりのはうしなどもとまらじとなむ覺え侍る」とて「かきならし給へ」と彼方に聞え給へど「思ひよらざりしひとごとを聞き給ひけむだにある物をいと片はならむ」とひきいりつゝ皆聞き給はず。度々そゝのかし聞え給へどとかく聞えずまひてやみ給ひぬればいと口惜しう覺ゆ。そのついでにもかく怪しう世づかぬ思ひやりにてすぐす有様どもの思の外なることなど恥しうおぼいたり。「人にだにいかで知らせじとはぐゝみすぐせど今日明日とも知らぬ身ののこりすくなさにさすがに行く末遠き人はおちあふれてさすらへむこと、これのみこそげに世を離れむきはのほだしなりけれ」と打ち語らひ給へば心苦しう見奉り給ふ。「わざとの御後見だちはかばかきすぢに侍らずともうとうとしからずおぼし召されむとなむ思ひ給ふる。まばしもながらへ侍らむ命のほどはひとこともかく打ち出で聞えさせてむさまをたがへ侍るまじくなむなど申し給へば「いと嬉しきこと」とおぼし

の給ふ。さて曉方宮の御行し給ふほどにかのちい人召し出て、あひ給へり。姫君の御後見にて侍はせ給ふ。辨の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬほどなれどみやびかに故あるけはひしてもものなど聞ゆ。故權大納言の君の世とともに物を思ひつゝ病づきはかなくなり給ひにし有様を聞え出で、泣くことかぎりなし。げによその人の上と聞かむだに哀なるべきふる事どもをまして年比覺東なくゆかしういかなりけむ事のはじめにかと佛にもこのことをさだかに知らせ給へと念じつるゑるしにや、かく夢のやうに哀なる昔がたりを覺えぬついでに聞きつけつらむとおぼすに涙とどめがたかりけり。「さてもかくその世の心知りたる人も残り給へりけるを珍らかにも恥しうも覺ゆることのすぢに猶かくいひ傳ふるたぐひやまたもあらむ。年ごろかけても聞き及ばざりけるを」との給へば、小侍従と辨とはなちて又知る人侍らじ。ひとことにても又こと人にまねび侍らず。かくものはかなく數ならぬ身のほどに侍れど、よるひるかの御かけにつき奉りて侍りしかば、おのづから物の氣色をも見奉りそめしに御心よりあまりておぼしける時々唯二人の中になむ、たまさかの御せうそこの通ひも侍りし。かたはらいたければ委しく聞えさせず。今はのとぢめになり給ひていさゝかのためひおく事の侍りしを、かゝる身には置き所なくいぶせく思ふ給へ渡りつゝ、いかにしてかは聞し召し傳ふべきと、はかばかしからぬねんずのついでにも思ひ給へつるを、佛は世におはしましけりとなむ思ふ給へ知りぬる。御覽せさすべきものも侍り。今は何かは焼きも捨て侍りなむ。かく朝夕のきえを知らぬ身のうち捨て侍りなば落ち散るやうもこそといとう

しろめたく思ひ給ふれど、この宮わたりにも時々ほのめかせ給ふを待ち出て奉りしかば少したのもしく、かゝるをりもやと念じ侍りつる力出でまうてきてなむ。更にこれはこの世の事にも侍らじ」となく細かに、生れ給ひける程のともよく覺えつゝ聞ゆ。「空しうなり給ひしさわぎに母に侍りし人はやがて病づきてほども經ず隠れ侍りにしかば、いと思ひ給へ沈み藤衣もたちかさね悲しきことを思ひ給へしほどに、年比よからぬ人の心をつけたりけるが人をはかりごちて西の海のはてまでとりもてまかりにしかば、京のことさへ跡絶えてその人もかしこにてうせ侍りにし後十年あまりにてなむあらぬ世の心地してまかりのぼりたりしを、この宮は父方につけて童より参り通ふ故侍りしかば今はかう世にまじらふべきさまにも侍らぬを、冷泉院の女御どの、御かたなどこそは昔聞きなれ奉りしわたりにて参りよるべく侍りしかどはしたなく覺え侍りてえさし出て侍らでみやまがくれのくちきになりにて侍るなり。小侍従はいつかうせ侍りにけむ。そのかみの若盛りと見侍りし人は數少くなり侍りにける。末の世に多くの人に後るゝ命を悲しく思ひ給へてこそさすがにめぐらひ侍れしなど聞ゆるほどに例の明けはてぬ。「よしさらばこの昔物語はつきすべうなむあらぬ。又人聞かぬ心安き所にて聞えむ。侍従といひし人はほのかに覺ゆるは五つ六つばかりなりし程にや。俄に胸を病みてうせにきとなむ聞く。かゝる對面なくば罪重き身にて過ぎぬべかりける」となどのたまふ。さゝやかにおしまさあはせたるほぐどものかびくさきを袋にぬひ入れたる取り出て奉る。「御前にてうしなはせ給へ、我猶生くべくもあらずなりになり

とのたまはせてこの御文をとり集めて給はせたりしかば小侍従に又あひ見侍らむついでに  
さだかに傳へ參らせむと思ひ給へしを、やがて別れ侍りにしも私事には飽かず悲しうなむ  
思ひ給ふる」と聞ゆ。つれなくてこれはかくい給ひつ。かやうのふる人はとはずがたりにや  
怪しきことのためしにいひ出づらむと苦しくおぼせど、かへすがへすもちらさぬよしをち  
かひつる、さもやと又思ひ亂れ給ふ。御粥こはいひなど參り給ふ。「昨日はいとまの日なりし  
を今日はずちの御物忌もあきぬらむ。院の女一宮惱み給ふ御とぶらひに必ず參るべければ  
かたがたいとまなく侍るを又この比過ぐして山の紅葉散らぬさきに參るべき」よし聞え給  
ふ。「かくまばまばたちよらせ給ふひかりに、山の蔭も少し物あきらむる心地してなむ」な  
ど、よろこび聞えたまふ。歸り給ひてまづこの袋を見給へば唐の浮線綾を縫ひて上といふ文  
字をうへに書きたり。細き組して口の方をゆひたるに、かの御名の封つきたり。あくるも恐  
しうおぼえ給ふ。いろいろの紙にてたまさかに通ひける御文の返事五つ六つである。さては  
かの御手にて「病は重くがぎりになりたるに又ほのかにも聞えむことかたくなりぬるを  
ゆかしう思ふことはそひにたり。御かたちも變りておはしますすらむがさまさま悲しき」こと  
をみちのくにかみ五六枚につぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて、

「めの前にこの世をそむく君よりもよそにわかるゝたまぞ悲しき」。またはしに「めづら  
しく聞き侍る二葉のほどもうしろめたう思ひ給ふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人まれずいはねにとめし松のおひすゑ」。かきさしたるやうに

いと亂りがはしくて「侍従の君に」と上には書きついたり。まみといふ蟲のすみかになりてふるめきたるかびくさしながらあとは消えず。唯今書きたらむにもたがはぬ言の葉どものごまごまとさだかなるを見給ふにげに落ち散りたらましかばとうしろめたういとほしきことどもなり。かゝること世にまたあらむやと心ひとつにいと物思はしきとひて、内へ参らむとおぼしつるも出てたゝれず。宮の御前に参り給へればいと何心もなく若やかなるさまし給ひて経讀み給ふを恥ぢらひてもてかくし給へり。何かはしりにけりとも知られ奉らむなど心にこめてよろづに思ひ居たまへり。

### 椎 本

二月の二十日のほどに兵部卿の宮初瀬にまうで給ふ。ふるき御願なりけれどおぼしもたゝで年頃になりけるを、宇治のわたりの御中やどりのゆかしさに、多くはもよほされ給へるなるべし。うらめしといふ人もありける里の名の、なべてむつまじうおぼさるゝ故もはかなしや。上達部いとあまた仕うまつり給ふ。殿上人などはさらにもいはず世に残る人少く仕うまつれり。六條院よりつたはりて右の大殿まり給ふ所は、河よりをちにいと廣くおもしろくであるに、御まうけさせさせ給へり。おとどもかへさの御迎へに参り給ふべくおぼしたるを俄なる御物忌の重く懐み給ふべく申したれば、え参らぬよしかしこまり申し給へり。宮、な



ますさまじとおぼしたるに、宰相の中將、今日の御迎へに参りあひ給へるになかなか心やすくて、かのわたりのけしきも傳へよらむと御心ゆきぬ。おとゞをばうちとけて見えにく、ことごとしきものに思ひ聞え給へり。御子の公達、右大辨、侍從の宰相、權中將、頭少將、藏人の兵衛佐など皆さぶらひ給ふ。帝后も心ことに思ひ聞え給へる宮なれば大かたの御おぼえもいとかぎりなく、まいて六條院の御かたさまはつきづきの人も、皆私の君に心よせ仕うまつり給ふ。所につけたる御しつらひなどをかしうきなして、碁すぐろくたぎのばんどもなとり出で、心々にすさびくらし給ひつ。宮はならひ給はぬ御ありきに惱ましくおぼされて、こゝにやすらはむの御心も深ければ、うちやすみ給ひて夕つ方を御琴などめして遊び給ふ。例のかう世ばなれたる所は水の音ももてはやして、物の音すみまざる心地して、かのひじりの宮にも唯さしわたる程なれば、追風に吹き來るひびきを聞き給ふに、昔の事おぼし出でられて、「笛をいとをかしくも吹きとほしたるかな。誰ならむ。昔の六條院の御笛の音聞きしはいとをかしげに愛敬づきたるねにこそ吹き給ひしか。これは澄みのほりて、ことごとしきけのそひたるは、致仕のおとゞの御ぞうの笛の音にこそ似たなれ」などひとりごちおはす。「哀に久しくなりにけるや。かやうの遊などもせて、あるにもあらでずぐし來にける年月の、さすがに多く算へらるゝこそかひなけれ」などのたまふついでにも、姫君たちの御有様あたらしく、かゝる山ふところひき籠めては、止まずもがなとおぼし續けらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひよるまじかめり、まいて今やうの心淺

からむ人をばいかでかはなどおぼし亂れて、つれづれとながめたまふ。所は春の夜もいと明しがたきを、心やり給へる旅寝のやどりはゑひのまぎれにいと疾う明けぬる心地して、飽かず歸らむことを宮はおぼす。はるばるとかすみ渡れる空に、散る櫻あれば今ひらけそむるなどいろいろ見渡さるゝに、河ぞひ柳のおきふし靡く水かけなどおろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ人はいと珍しく見捨て難しとおぼさる。宰相はかゝるたよりをすぐさずかの宮に詣うてばやとおぼせど、あまたの人めをよきて一人漕ぎ出て給はむふなわたりのほども輕らかにやと思ひやすらひ給ふほどに、かれより御文あり。

「山風にかすみ吹きとく聲はあれどへだて、見ゆるをちのまら波」。さうにいとをかしう書き給へり。宮おぼすあたりと見給へばいとをかしくおぼいて、「この御かへりは我せむことて、

「をちこちのみぎはの波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の河風」。中將はまうて給ふ。あそびに心入れたるきんだちさそひて、さしやり給ふほど、酣醉樂遊びて、水にのぞきたる廊に造りおろしたる橋の心ばへなど、さる方にいとをかしうゆるある宮なれば、人々心して船よりおり給ふ。こゝはまたさまことに、山ざとびたる網代屏風などの、ことさらにことそぎて見所ある御まつらひを、さる心ちしてかきはらひいといたうまなし給へり。いにしへのねなど、いとになきひききものどもをわざとまうけたるやうにはあらでつぎつぎひき出で給ひて、壹越調のこゝろに櫻人遊び給ふ。あるじの宮の御きんをかゝるついでにと人々思ひ給

へれど、箒のことをぞ心にもいれずをりをかきあはせ給ふ。耳なれぬけにやあらむ、いと物深くおもしろしと若き人々思ひまみたり。所につけたるあるじいとをかしうま給ひて、よそに思ひやりし程よりは、なま孫王めく賤しからぬ人あまた、おほきみ四位のふるめきたるなど、かく人め見るべきをりと、かねていとほしがり聞えけるにや、さるべきかぎり参りあひて、瓶子とる人もきたなげならず、さる方にふるめきてよしよしうもてなし給へり。まらうどたちは、御むすめたちのすまひ給ふらむ御有様思ひやりつゝ、心つくす人もあるべし。かの宮はまいてかやすきほどならぬ御身をさへ處せくおぼさるゝを、かゝる折にだにと忍びかね給ひて、おもしろき花の枝を折らせ給ひて、御供にさぶらふ上わらはのをかしきして奉り給ふ。

「山櫻にほふあたり尋ねきておなじかざしを折りてけるかな。野をむつまじみ」とやありけむ。御かへりはいかてかはなど、聞えにく、おぼしわづらふ。「かゝるをりのこと、わざとがましくもてなし、程の經るもなかなかにくきことになむま侍りし」などふる人ども聞ゆれば、中の君にぞ書かせ奉り給ふ。

「かざしをる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春のたび人。野をわきてしも」といとをかしげにらうらうしく書き給へり。げに河風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音どもおもしろく遊び給ふ。御迎に藤大納言、仰言にて参り給へり。人々あまた参り集ひ、物さわがしくてさほひ歸り給ふ。若き人々飽かずかへりみのみせられける。宮は又さるべきついでしてとお

ぼす。花さかりにて、四方の霞もながめやる程の見所あるに、からのもやまとのも歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。物さわがしくて思ふまゝにもえいひやらすなりにしを飽かず宮はちぼして、まるべなくても御文は常にありける。宮も「猶聞えたまへ。わざとけさうだちてももてなざし。なかなか心時めきにもなりぬべし。いとすき給へるみこなればかゝる人など聞き給ふが、猶もあらぬすさびなめり」とそゝのかし給ふ。時々中の君ぞ聞え給ふ。姫君はかやうのこと、たはぶれにももてはなれ給へる御心深さなり。いつとなく心ぼそき御有様に、春のつれづれはいと暮し難くながめ給ふ。ねびまさり給ふ御さまかたちどもいよいよまさり、あらまほしくをかしまもなかなか心苦しう、かたほにもおはせましかばあたらしくをしき方の思ひは薄くやあらましなど明暮おぼしみだる。姉君廿五、中の君廿二にぞなり給ひける。宮は重く愼み給ふべき年なりけり。物心ぼそくおぼして、御おこなひ常よりもたゆみなく志給ふ。世に心とゞめ給はねば出でたちいそぎをのみおぼせば、涼しき道にも赴き給ひぬべきを、唯この御事どものいとほしく、かぎりなき御心づよさなれど、必ず今はと見捨て給はむ御心は亂れなむと、見奉る人もおしはかりきこゆるを、おぼすさまにはあらずともなのめにさても人ぎくちをしかるまじう、見ゆるされぬべききは人の、まごゝろにうしろみ聞えむなど思ひより聞ゆるあらば知らずがほにてゆるしてむ、ひととこゝろ世に住みつき給ふよすがあらば、それを見ゆづる方に慰めおくべきを、さまで深き心に尋ね聞ゆる人もなし。まれまれははかなきたよりにすきごと聞えなどする人、また若々しき人

の心のすさびに、物まうての中やどり、ゆきさきのほどのなほざりごとに氣色ばみかけて、さがにかくながめ給ふ有様などおしはかりあなづらはしげにもてなすはめざましうて、なげのいらへをだにせさせ給はず。三宮ぞなほ見では止まじとおぼす御心深かりける。さるべきにやおはしけむ。宰相の中將その秋中納言になり給ひぬ。いとどにほひまさり給ふ。世のいなみに添へてもおぼすこと多かり。いかなることといふせく思ひ渡りし年比よりも心苦しうて、過ぎ給ひにけむいにしへさまの思ひやらるゝに、罪輕くなり給ふばかり、おこなひもせまほしくなむ、かのおい人をば哀なるものに思ひおきて、いちじるささまならず、とかくまぎらはしつゝ心よせとぶらひ給ふ。宇治にまうて、久しうなりにけるを思ひ出て、参り給へり。七月ばかりになりけり。都にはまだ入りたゝぬ秋の氣色を音羽の山近く風の音もいとひやゝかに横の山邊も僅に色づきて、猶尋ね來たるにをかしう珍しうおぼゆるを、宮はまいて例よりも待ち喜び聞え給ひて、この度は心ほそげなる物語いと多く申し給ふ。「なからむ後この君達をさるべきものゝたよりもとぶらひ、思ひ捨てぬものにかずまへ給へ」などおもむけつゝ聞え給へば、「ひとことにて承りおきてしかば更に思ふ給へをこたるまじくなむ。世の中に心をとめじとはぶき侍る身にて、何事もたのもしげなきおひさきのすくなさになむ侍れど、さる方にてはめぐらひ侍らむかぎりは、變らぬ志を御覽じ知らせむとなむ思ふ給ふる」など聞え給へば、いとうれしとおぼいたり。夜深き月のあきらかにさし出て、山のは近き心ちするに、ねんずいとあはれに志給ひて昔物がたり志給ふ。「この頃の世はいか

となりたらしむ。くちうなどにてかやうなる秋の月に、御前の御あそびのをりにさぶらひあひたる中に、物の上手とおぼしきかぎりとりどりにうちあはせたる拍子などことごとしきよりも、よしありとおぼえある女御更衣の御つぼねつぼねの、おのがじ、はいどましく思ひうはべのなさをかはすべかめるを、夜深さほどの人のけしめりぬるに、心やましくかいしらべ、ほのかにほころび出でたる物の音など聞き所あるが多かりしかな。何事にも女はもてあそびのつまにしつべく、物はかなきものから人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば罪の深さにやあらむ。子の道のやみを思ひやるにも、をのこはいとしも親の心のみださずやあらむ。女はかぎりありていふかひなき方に思ひ捨つべきにも、猶いと心苦しかるべきなど大方のことにつけてのたまへる、いかゞとおぼさざらむと心苦しく思ひやらるゝ御心のうちなり。すべて誠にまか思ひ給へすてたるけにや侍らむ。みづからのことにては、いかにもいかにも深う思ひ知る方の侍らぬを、げにはかなきことなれど、聲にめづる心こそ背きがたきことに侍りけれ。さかしうひじりだつ迦せうもさればや立ちて舞ひ侍りけむ」など聞えて、飽かず一聲聞きし御琴の音を、せちにゆかしがり給へば、うとうとしからぬはじめにもとやおぼすらむ、御みづからあなたに入り給ひてせちにそゝのかし聞え給ふ。箏の琴をぞいとほのかに、掻きならして止み給ひぬる。いとゞ人のけはひも絶えて哀なる空のけしき、所のさまにわざとなき御あそびの心に入りて、をかしうおぼゆれど、うちとけてもいかでかはひきあはせ給はむ。「おのづからかばかりならしめつるのこりは、よごまれるどち

にゆづり聞えてむ」とて、宮は佛の御前に入り給ひぬ。

「我なくて草のいほりは荒れぬともこのひとことは枯れじとぞ思ふ。かゝる對面も、この度や限ならむと物心ほそきに忍びかねて、かたくなしきひがごと多くもなりぬるかな」とてうちなき給ふ。まらうど、

「いかならむ世にかかれせむ長さよのちざり結べる草のいほりは。すまひなどおほやけごとどもまざれ侍る頃過ぎてさぶらはむ」など聞え給ふ。こなたにてかの問はずがたりのふる人めし出で、のこり多かる物語などせさせ給ふ。入り方の月は隈なくさし入りてすきかげなまめかしきに、君達もおくまりておはす。世の常のけさうびてはあらず、心深う物語のどやかに聞えつゝものし給へば、さるべき御いらへなど聞えたまふ。三宮はいとゆかしうおほいたる物をと、心のうちには思ひ出でつゝ、我が心ながら猶人にはことなりかし、さばかり御心もてゆるび給ふことのさしもいそがれぬよ、もてはなれてはたあるまじき事とはさすがにおほえず、かやうにて物をも聞えかはし、をりふしの花紅葉につけてあはれをもなさけをもかよはすにくからず物し給ふあたりなれば、すぐせことにてほかさまにもなり給はむはさすがに口惜しかるべくりやうじたる心ちしけり。また夜深きほどに歸り給ひぬ。心ほそくのこりなげにおほいたりし御けしきを思ひ出で聞え給ひつゝ、騒しき程過してまうてむとおほす。兵部卿の宮もこの秋のほどに紅葉見におはしまさむと、さるべきついでをおぼしめぐらす。御文は絶えず奉り給ふ。女はまめやかに思すらむとも思ひ給はねば、煩しく

もあらではかなきさまにもてなしつゝ折々に聞えかはし給ふ。秋深くなり行くまゝに、宮はいみじう物心ほそくおぼえ給ひければ、例の静なる所にて念佛をもまぎれなくせむとおぼして、君達にもさるべき事聞え給ふ。「世の事としてつひの別を遁れぬわざなめれど、思ひ慰む方ありてこそ悲しさをもさますものなめれ。又見ゆづる人もなく心ほそげなる御有様どもをうちすてゝむがいみじきこと。されどもさばかりの事に妨げられて長き世の間にさへ惑はむがやくなさ。かつ見奉るほどだに思ひすつる世を、さりなむうしろの事知るべきことにはあらねど、我が身ひとつにあらず、過ぎ給ひにし御おもてぶせにかかるるしき心どもつかひ給ふな。おぼろげのよすがならで人のことにうちなびきこの山里をあくがれ給ふな。たゞかう人に違ひたるちぎりことなる身とおぼしなして、こゝに世をつくしてむと思ひとり給へ。ひたふるに思ひしなせばことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女はさる方に堪へ籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを、おはざらむなむよかるべき」などは世に片時もながらふべきとおぼすに、かく心ほそきさまの御あらしごと、いふかたなき御心まどひどもになむ。心のうちにこそ思ひ捨て給ひつらめど、明暮御傍にならはい給ひて、俄に別れ給はむはつらき心ならねど、げにうらめしかるべき御有様になむありける。あす入り給はむとての日は例ならずこなたかなたなずみありき給ひて見給ふ。「いとものはかなくかりそめのやどりにてすぐい給ひける御住ひのありさまを、なからむ後いかにして



かは若き人の堪へ籠りてはすぐい給はむいと涙ぐみつゝねんずま給ふさまいと清げなり。おとなびたる人々召し出でて、「うしろやすく仕うまつれ。何事ももとよりかやすく世に聞えあるまじきさはの人は、末のおとろへも常の事にてまぎれぬべかめり。かゝるきはになりぬれば人は何とも思はざらめど、口惜しうてさすらへむ契かたじけなくいとほしきことなむ多かるべき。物さびしく心ほそき世を経るは例のことなり。生れたる家のほどおきてのまゝにもてなしたらむなむ、きゝみゝにも我が心ちにもあやまちなくはおほゆべき。にぎはゝしく人かずめかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめかろがるしく善からぬ方にもてなし聞ゆな」などのたまふ。まだ曉に出て給ふとてもこなたに渡り給ひて、「なからむ程心ほそくなおほしわびそ。心ばかりはやりて遊びなどはま給へ。何事も思ひにえかなふまじき世をなほほしいれそ。など顧みがちにて出て給ひぬ。ふた所いと心ほそく物思ひ續けられて、起き臥しうち語らひつゝ、「ひとりひとりなからましかばいかでか明しくらさまし。今ゆくすゑも定めなき世にて若し別るゝやうもあらばなど泣きみ笑ひみ、たはぶれごとまめごともし心に慰めかはして過し給ふ。かの行ひ給ふ三昧今日はてぬらむといつしかと待ち聞え給ふ夕暮に、人まゐりて「今朝よりなやましうてなむえ参らぬ。風かとてもかくつくろふともものする程になむ。さるは例よりも對面心もとなきを」と聞え給へり。胸つぶれていかなるにかとおほし歎き御ぞども綿厚くていそぎさせ給ひて奉れなどし給ふ。二三日はあり給はず、いかにいかにと人奉り給へど「殊におどろおどろしくはあらず。そ

こはかとなく苦しうなむ。少しもよろしうならば今ねんじて」などことばにて聞え給ふ。阿闍梨つとさぶらひて仕うまつりけり。「はかなき御なやみと見ゆれどかぎりのたびにもおはしますらむ。君達の御事何かおぼし嘆くべき。人は皆御宿世といふものことごとなれば御心にかゝるべきにもおはしますさず」といよいよおぼし離るべきことを聞え知らせつ、「今さらにな出て給ひそ」と諫め申すなりけり。八月二十日のほどなりけり。大方の空の氣色もいとゞしきころ、君たちは朝夕霧の晴るゝ間もなくおぼし嘆きつゝながめ給ふ。有明の月のいと華やかにさし出て、水のおもてもさやかに澄みたるを、そなたの部あげさせて見出し給へるに、鐘の聲かすかに響きて明けぬなりと聞ゆるほどに人きて、「この夜中ばかりになむうせ給ひぬる」となくなく申す。心にかけていかには絶えず思ひ聞え給へれど、うち聞き給ふにはあさましく物おぼえぬ心地して、いとゞかゝることに涙もいづちかいにけむ、たゞうつぶし臥し給へり。いみじきことも見る目の前にて覺束ながらぬこそ常のことなれ。覺束なさをひて、おぼし歎くことことわりなり。まばしにても後れ奉りて世にあるべきものとおぼしならばぬ御心地どもにて、いかでかは後れじと泣きまづみ給へど、かぎりある道なりければ何のかひなし。阿闍梨年頃契り置き給ひけるまゝに後の御事もよろづに仕うまつるべき人になり給へらむ御さまかたちをだに今一度見奉らむ」とおぼしのたまへど、今更になてふさることかは侍るべき。日頃も又逢ひ見給ふまじきことを聞え知らせつれば、今はましてかたみに御心とゞめ給ふまじき御心づかひを習ひ給ふべきなり」とのみ聞ゆ。おはしましけ

る御有様を聞き給ふにも、阿ざ梨のあまりさかしきひじり心をにくくつらしとなむおぼしける。入道の御ほいは昔より深くおはせしかど、かう見ゆづる人なき御事どもの見捨てがたきを、生けるかぎりは明暮え去らず見奉るを、世に心ぼそき世のなぐさめにも、おぼし離れ難くてすくい給へるを、かぎりある道にはさきだち給ふも、慕ひ給ふ御心も、かなはぬわざなりけり。中納言殿には聞き給ひて、いとあへなく口惜しく、今一度心のどかにて聞ゆべかりける事多う残りたる心地して、大方世の有様思ひつゞけられていみじう泣い給ふ。またあひ見むこと難くやなどのたまひしを、猶常の御心にも朝夕のへだて知らぬ世のはかなさを、人よりけに思ふ給へりしかば、耳なれて昨日今日と思はざりけるを、かへすがへす飽かず悲しくおぼさる。阿ざ梨のもとにも、君達の御とぶらひもこまやかに聞え給ふ。かゝる御とぶらひなどまた音づれ聞ゆる人だになき御有様なれば、物おぼえぬ御心地どもにも、年頃の御心ばへのあはれなめりしなどをも思ひ知り給ふ。世の常の程の別れだにさしあたりては、又類ひなきやうにのみ皆人の思ひ惑ふものなめるを、慰む方なげなる御身どもにていかやうなる心地どもも給ふらむとおぼしやりつゝ、のちの御わざなどあるべき事ども推しはかりて阿ざ梨にもとぶらひ給ふ。こゝにもおひ人どもにことよせて御誦經などの事も思ひやり聞えたまふ。あけぬ夜の心地ながら九月にもなりぬ。野山の氣色まして袖の時雨を催しがちに、ともすれば争ひ落つる木の葉の音も、水のひびきも、涙の瀧もひとつものゝやうにくれ惑ひて、「かうてはいかてか限あらむ御命もまはしめぐらひ給はむ」とさぶらふ人々は心ぼ

そくいみじく慰め聞えつゝ思ひ惑ふ。こゝにも念佛の僧さぶらひて、おはしましゝ方は佛をかたみに見奉りつゝ、時々参り仕うまつりし人々の、御忌に籠りたるかぎりはあはれに行ひてすぐす。兵部卿宮よりも度々とぶらひ聞えたまふ。さやうの御返りなど聞えむ心地も去給はず。おぼつかなければ、中納言にはかうもあらざるを我をば猶思ひ放ち給へるなめりとうらめしくおぼす。紅葉の盛に、文など作らせ給はむとて出て立ち給ひしを、かくこのわたり御せうえうびんなき頃なれば、おぼしとまりて口惜しくなむ。御忌もはてぬ。限あれば涙もひまもやとおぼしやりて、いと多く書きつゞけ給へり。時雨がちなる夕つかた、

「をじかなく秋の山里いかならむ小萩がつゆのかゝるゆふぐれ。只今の空の氣色をおぼし知らぬがほならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野邊もわけてながめらるゝ比になむ」などあり。「げにいとあまり思ひ知らぬやうにてたびたびになりぬるを、猶聞え給へ」など、中の君を例のそゝのかして書かせ奉りたまふ。今日までながらへて硯など近くひき寄せて見るべきものとは思ひし、心憂くも過ぎにける日數かなとおぼすに、又かきくもり物見えぬ心地し給へば、おしやりて、猶えこそ書き侍るまじけれ。やうやうかう起きるられなどし侍る。げに限ありけるにこそとおぼゆるもうとましう心憂くて」とらうたげなるさまに泣きまをれておはするもいと心苦し。夕暮の程より來ける御使、宵すこし過ぎてぞ來たる。「いかでか歸り参らむ。今夜は旅寝して」といはせ給へど、「立ちかへりこそ参りなめ」といそげば、いとほしうて我さかしう思ひまづめ給ふにあらねど、見わづらひ給ひて、

「涙のみさりふたがれる山里はまがきに鹿ぞもろごゑになく」。黒き紙に夜の墨つきもたどたどしければ、ひきつくろふ所もなく筆に任せておし包みて出し給ひつ。御使は、木幡山のほども雨もよにいと恐しげなれど、さやうの物おぢすまじきをえり出て給ひけむ、むつかしげなるさゝのくまをこまひきとゞむる程もなくうちはやめて片時に参りつきぬ。おまへに召しても、いたくぬれて参りたれば祿たまふ。さきさき御覽せしにはあらぬ手の、今少しおとなびまさりてよしづきたる書きざまなどを、いづれかいつれならむとうちも置かず御覽じつ、とみにもおほとのごもらねば、一待つとて起きおはしまし、又御覽するほどの久しきは、いかばかり御心にまむことならむ」と、御前なる人々さゝめさきこえて、にくみ聞ゆ。ねふたければなめり。まだ朝霧深きあしたにいそぎ起きて奉り給ふ。

「朝霧に友まどほせる鹿の音を大かたにやはあはれとも聞く。もろごゑは劣るまじくこそ」とあれど、あまりなさけだゝむもうるさし。ひと所の御蔭にかくろへたるをたのみ所にてこそ何事も心やすくして過しつれ、心より外にながらへて、思はずなることのまぎれつゆにてもあらば、うしろめたげにのみおぼしおくめりし、なき御たまにさへきづやつけ奉らむと、なべていとつゝまじう恐しうて聞え給はず。この宮などをばかろらかにおしなべてのさまにも思ひ聞え給はず。なげの走りかい給へる御筆づかひ、言の葉もをかしささまになまめき給へる御けはひをあまたは見知り給はねど、これこそはめてたきなめれと見給ひながら、そのゆゑゆゑしくなさけある方に、ことをませ聞えむもつきなき身の有様ともなれば、何かたゞ

かゝる山ぶしだちて過してむとおぼす。中納言殿の御返りばかりは、かれよりもまめやかなるさまに聞え給へば、これよりもいとけうとげにはあらず聞え通ひ給ふ。御いみはてもみづからまうで給へり。東の廂のくだりたる方にやつれておはするに、近うたち寄り給ひて、ふる人召し出でたり。闇に惑ひ給へる御あたりいとまばゆく匂ひ満ちて入りおはしたれば、かたはらいたうて御いらへなどをたにえ志給はねば、「かやうにはもてない給はて昔の御心むけに従ひ聞え給はむさまならむこそ、聞えうけたまはるかひあるべけれ。なよび氣色ばみたるふるまひをならひ侍らねば、人づてに聞え侍るは言の葉も續き侍らず」とあれば、「あさましう今までながらへ侍るやうなれど、思ひさまさむ方なき夢に惑はれ侍りてなむ、心より外に空のひかり見侍らむもつゝましうて、端近うもえみじろき侍らぬ」と聞え給へれば、「ことゝいへば限なき御心の深さになむ。月日のかげは御心もて、はればれしくもていてさせ給はゞこそ罪も侍らめ。行く方もなくいぶせうおぼえ侍り。又おぼさるらむはまばしをもあきらめ聞えまほしくなむ」と申し給へば、「げにこそいとたぐひなげなめる御有様を、慰め聞え給ふ御心ばへの淺からぬ程」など人々聞えまらす。御心地にもさこそいへ、やうやう心まづまりてよろづ思ひ知られたまへば、昔さまにてもかうまで遙けき野邊を分け入り給へる志なども思ひ知り給ふべし。少しゐざりより給へり。おぼすらむさま、又のたまひ契りしことなど、いとこまやかになつかしういひて、うたて雄々しきけはひなどは見え給はぬ人なれば、けうとくすゞろはしくなどはあらねど、知らぬ人にかく聲を聞かせ奉り、すゞろに

たのみ顔なることなども、ありつる日比を思ひ續くるもさすがに苦しうてつゝましけれど、ほのかにひとことなどいらへ聞え給ふさまの、げによるづ思ひほれ給へるけはひなれば、いと哀と聞き奉り給ふ。黒き几帳のすきかげのいと心苦しげなるに、ましておはすらむさま、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、

「色かはるあさぢを見ても墨染にやつるゝ袖をおもひこそやれ」とひとりごとのやうにのたまへば、

「色かはる袖をばつゆのやどりにて我が身ぞさらにおきどころなき。はつるゝいと」と末はいひけちて、いとみじく忍び難きはひにて入り給ひぬなり。ひきとどめなどすべき程にもあらねば飽かずあはれにおぼゆ。おい人ぞこよなき御かはりに出て来て、昔今をかきあつめ、悲しき御物語ども聞ゆる。ありがたくあさましき事ども見たる人なりければ、かうあやしう衰へたる人ともおぼし捨てられず、いとなつかしう語らひ給ふ。「いはけなかりし程に故院に後れ奉りて、いみじう悲しきものは世なりけりと思ひ知りにはしかば、人となり行くよはひにそへてつかさくらる世の中のにほひも何ともおぼえずなむ。唯かうまづやかなる御住ひなどの心にかなひ給へりしを、かくはかなく見なし奉りつるにいよいよいみじく、かりそめの世思ひ知らるゝ心も催されにたれど、心苦しうてとまり給へる御事どもほだしなど聞えむはかけがけしきやうなれど、ながらへてもかの御事あやまたず、聞えうけたまはらまほしきになむ。さるは覚えなき御ふる物語さゝしより、いと世の中に跡とめむとも

おぼえずなりになりや」とうち泣きつゝのたまへば、この人はましていみじく泣きてえも聞えやらず。御けはひなどの唯それかとおぼえ給ふに、年比うち忘れたりつるいにしへの御事をさへ取り重ねて聞えやらむ方もなくおぼゝれ居たり。この人はかの大納言の御めの子にて、父はこの姫君達の母北の方の、母方のをぢ、左中辨にてうせにけるが子なりけり。年比遠き國にあくがれ、母君もうせ給ひて後かの殿には疎くなり、この宮には尋ねとりてあらせ給ふなりけり。人もいとやんごとなからず、宮仕なれにたれど心地なからぬものに宮もおぼして、姫君達の御うしろみだつ人になし給へるなりけり。むかしの御事は年比かく朝夕に見奉りなれ心隔つるくまなく思ひ聞ゆる君達にも、ひとことうち出て聞ゆるついでなく忍びこめたりけれど、中納言の君はふる人の問はずがたり皆例の事なれば、おしなべてあはあはしうなどはいひひろげずとも、いと恥しげなめる御心どもには聞き置き給へらむかしと推しはからるゝに、妬くもいとほしくもおぼゆるにぞ、又もてはなれてはやまじと思ひよらるゝつまにもなりぬべき。今は旅寝もすゞるなる心地して歸り給ふにも、これやかざりのなどのたまひしを、などかさしもやはとうちたのみて又見奉らずなりにけむ秋やはかはれる。あまたの日數も隔てぬ程におはしにけむ方も知らず、あへなきわざなりや。殊に例の人めいたる御志つらひなく、いとことそぎ給ふめりしかど、いと物清げにかき拂ひあたりをかしくもてない給へりし御住ひも、大とこたち出ていり、こなたかなたひき隔てつゝ御念誦の具どもなどを變らぬさまなれど、佛は皆かの寺に移り奉りてむとすと聞ゆるを聞き給ふにも、か



ゝるさまの人かげなどさへ絶えはてむ程とまりて思ひ給はむ心地どもをくみ聞え給ふも、いと胸痛うおぼしつゞけゝる。「いたく暮れ侍りぬ」と申せば、ながめさして立ち給ふに、雁なきてわたる。

一秋霧のはれぬ雲にいとゞしくこの世をかりといひみらすらむ。兵部卿の宮に對面し給ふ時は、まづこの君達の御事をあつかひぐさにま給ふ。今はさりとも心やすきをおぼして、宮はねんごろに聞え給ひけり。はかなき御返りも聞えにく、つゞましき方に女がたはおぼいたり。世にいといたうすき給へる御名のひろごりて好ましく艶におぼさるべかめるも、かういとうづもれたる葎の下よりさし出てたらむてつきも、いかにうひうひしくふるめきたらむなど、思ひくつし給へり。さてもあさましうて明し暮さるゝは月日なりけり。かく頼み難かりける御世を昨日今日とは思はて、唯大かた定なきはかなさばかりを明暮のことに聞き見しかば、我も人も後れさきだつ程しもやはへむなどうち思ひけるよ、きし方を思ひ續くるも、何のたのもしげなる世にもあらざりけれど、唯いつとなくのどかに眺めすぐし、物恐しくつゞましきこともなくて經つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人かげもうちつれこわづくれば、まづ胸つぶれて物恐しく侘しう覺ゆることさへそひにたるが、いみじう堪へ難きこと、二所うち語らひつゞほすよもなくてすぐしたまふに年も暮れにけり。雪霰ふりまゝくころはいづくもかくこそはある風の音なれど、今始めて思ひいらむ山住の心地し給ふ。女ばらなど、「あはれとしはかはりなむとす。心ほそく悲しきことを、改まるべき春待

ち出でししがな」と心をけたずいふもありがたきことかなと聞き給ふ。向ひの山にも時々  
御念佛に籠り給ひし故こそ、人もまゐりがよひしか、阿闍梨もいかゞと大方にまれに音づれ  
聞ゆれど、今は何しにかはほのめき参らむ、いと人目の絶えはつるもさるべきことと思ひ  
ながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりしやまがつもおはしまさて後たまさかにさしのぞき  
参るは、めづらしく覺え給ふ。この比の事とてたきこのみ拾ひて参る山人どもあり。阿闍  
梨のむろより炭などやうの物奉るとて、「年比に習ひ侍りにける宮仕の、今はとて絶え侍ら  
むが心ぼそきになむ」と聞えたり。必ず冬ごもる山風防ぎつべき綿きぬなど遣しを、おぼ  
し出で、やり給ふ。法師ばらわらはべなどののぼり行くも見えみ見えみいと雪深きを、泣  
く泣く立ち出で、見送り給ふ。「みぐしなどおろい給うてもさる方にておはしまさしかば  
かやうに通ひ参る人もおのづから繁からまし。いかに哀に心ぼそくとも、あひ見奉ること絶  
えて止ま、しやは」などかたらひ給ふ。

「君なくて岩のかげ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る」。中の君、

「奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば。うらやましくぞまたもふり  
そふや」。中納言の君は、新しき年はふとしもえとぶらひ聞えざらむと覺しておはしたり。雪  
もいとと所せきによろしき人だに見えずなりにたるを、なのめならぬけはひしてかろしか  
に物し給へる心ばへの、浅うはあらず思ひ知られ給へれば、例よりはみいれておましなどひ  
きつくるはせ給ふ。墨染ならぬ御火桶、物の奥なる取り出で、塵かき拂ひなどするにつけ

ても、宮の待ち喜び給ひし御氣色などを人々も聞え出づ。たいめし給ふことをばつゝましくのみおぼいたれど、思ひくまなきやうに人の思ひ給へれば、いかゞはせむとて聞え給ふ。うちとくとはなけれど、さきさきよりは少し言の葉續けて、物などのたまへるさまいとめやすく心恥しげなり。かやうにてのみはえすぐしはつまじと思ひなり給ふも、いとうちつけなる心かな。猶移りぬべき世なりけりと思ひ居給へり。「宮のいとあやしく恨み給ふことの侍るかな。哀なりし御一ことを承り置きしさまなど、事の序にもや漏し聞えたりけむ。又いと隈なき御心のさがにて推し量り給ふにや侍らむ。こゝになむともかくも聞えさせなすべきとたのむを、つれなき御氣色なるはもてそこなひ聞ゆるぞと度々怨じ給へば、心より外なる事と思ひ給へれど、里のまゐるべいとこよなうもえあらがひ聞えぬを、何かはいとさしももてなし聞え給ふらむ。すい給へるやうに人は聞えなすべかめれど、心の底怪しう深うおはする宮なり。なほざりごとなどのたまふわたり、心がらうて靡きやすなるなどを珍しからぬものに思ひおとし給ふにやとなむ聞くことも侍る。なに事にもあるに従ひて心をたつる方もなく、おどけたる人こそ、唯世のもてなしに従ひてとあるもかゝるものめに見なし少し心に違ふふしあるにもいかゞはせむ、さるべきぞなども思ひなすべかめれば、なかなか心長きためしになるやうもあり、くづれそめては、龍田の川の濁る名をもけがし、いふかひなく名残なきやうなることなども皆うちまじるめれ。心の深くまみ給ふべかめる御心さまにかなひ、事に背くこと多くなどもし給はざらむをば、更にかろがるしくはじめをばり違ふやうなる

ことなど見せ給ふまじき氣色になむ。人の見奉り知らぬことをいとよう見聞えたるを、もし似つかはしくさもやとおぼしよらば、そのもてなしなどは心のかぎり盡して仕うまつりてむかし。御中道のほどみだりあしてそいたからめ」といとまめやかにていひ續け給へば、我が御みづからの事とはおぼしもかけず、人の親めきていらへむかしとおぼしめぐらし給へど、猶いふべき言の葉もなき心ちして、「いかにとかはかけがけしげにのたまひ續くるに、なかなか聞えむことも覺え侍らて」とうち笑ひ給へるも、おいらかなるものからけはひをかしう聞ゆ。「必ず御自ら聞しめしおふべき事とも思ひ給へず。それは雪を踏み分けて参り來たる志ばかりを御覽じわかむ。御このかみ心にても過ぐさせ給ひてよかし。かの御心よせは又ことにぞはべかめる。ほのかにのたまふさまもはべめりしを、いさやそれも人のわき聞え難きことなり。御かへりなどはいづかたにかは聞え給ふ」と問ひ申し給ふに、ようぞたはぶれにも聞えざりける、何となけれどかうのたまふにもいかに恥しう胸つぶれましと思ふに、え答へやり給はず。

「雪ふかき山のかけはし君ならでまたふみ通ふあとを見ぬかな」と書きてさし出し給へれば、「御ものあらがひこそなかなか心おかれ侍りぬべけれ」とて、

「つら」とちこまふみまなく山河を渡るべしがてらまづや渡らむ。さらばしも、かげさへ見ゆるるも浅うは侍らじ」と聞え給へば、思はずにものしうなりて殊にいらへ給はず。けざやかにいと物遠くすゝみたるさまには見え給はねど今やうの若人達のやうにえんげに

ももてなさて、いとめやすくのどかなる心ばへならむとぞ推し量られ給ふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれと思ふに違はぬ心地し給ふ。事に觸れて氣色ばみよるも知らずがほなるさまにのみもてなし給へば、心恥しうて昔物語などを物まめやかに聞え給ふ。「暮れはてなば雪いと空もとぢぬべう侍り」と御供の人々こわづくれば、かへり給ひなむとて「心苦しう眺めくらさる御住ひのさまなりや。唯山里のやうにいと静なる所の、人も行きまじらぬ所に侍るを、さもおぼしかげはいかに嬉しく侍らむ」などのたまふも、いとめでたかるべきことかなと片耳に聞きてうち忍む女ばらのあるを、中の君は、いと見苦しういかにさやうにはあるべきぞと見聞き居給へり。御くだものよしあるさまにてまゐり、御供の人々にもさかななどめやすき程にて、かはうけさし出させ給ひけり。かの御うつりがもてさわがれし殿居人ぞ、かづらひげとかいふつらつき心つきなくてある、はかなの御たのもし人やと見給ひて、召し出でたり。「いかにぞ、おはしまさて後心ぼそからむ」など問ひ給ふ。うちひそみつゝ心よわけになく。「世の中に頼むよるべも侍らぬ身にて、一所の御かげに隠れて三十餘年を過し侍りにければ、今はまして野山にまじり侍らむも、いかなる木の本をかはたのむべく侍らむ」と申して、いと人わろげなり。おはしまし、方あけさせ給へれば、塵いたう積りて佛のみぞ花のかざり衰へず行ひ給ひけりと見ゆる。御床など取りやりてかさ拂ひたり。ほいをも遂げばと契り聞えしこと思ひ出て、「立ちよらむかけと頼みし椎がもと空しき床になりけるかな」とて柱により居給へる

をも、若き人々はのぞきてめて奉る。日暮れぬれば近き所々にみさうなど住らまつる人々に、みまぐさとり遣りける。君も知り給はぬに田舎びたる人々、おどろおどろしくひき連れ参りたるを、あやしうはしたなきわざかなと御覽すれど、ちい人にまぎらはし給ひつ。大方かやうに仕らまつるべく、仰せ置きて出て給ひぬ。『年かはりぬれば空の氣色うららかなるに、みぎはの氷解けわたるにつけても、かうまでながらへけるもありがたくもと眺め給ふ。ひじりの坊より、「雪消えに摘みて侍るなり」とて澤の芹峯の蕨など奉りたり。いもひの御臺に参れる。』所につけては、かゝる草木のけしきに從ひて、行きかふ月日の来るしも見ゆるこそをかしけれ』など人々のいふを、何のをかしきならむと聞き給ふ。

「君がをる峯のわらびと見ましかば知られやせまし春の来るしも」。

「雪深きみぎはこのせり誰がためにつみかはやさむ親なしにして」などはかなきことをうち語らひつゝ明けくらし給ふ。中納言殿よりも、宮よりも折すぐさず訪らひ聞え給ふ。うるさく何となき事多かるやうなれば例の書きもらしたるなめり、花ざかりの頃、宮かざしをおぼし出で、そのをり見聞き給ひし君達なども、「いとゆゑありしみこの御佳ひを、またも見ずなりにしこと」など大方のあはれを口々聞ゆるに、いとゆかしうおぼされたり。

「つてに見し宿の櫻をこの春はかすみへだてず折りてかざしむ」と心をやりてのたまへりけり。あるまじきことかなと見給ひながらいとつれづれなる程に、見所ある御文の、うはべばかりをもてけたじとて、

「いづくとか尋ねて折らむ墨染に霞こめたるやどのさくらを」。猶かくさしはなちてつれなき御氣色の見ゆれば、誠に心うしとおぼしわたる。御心に餘り給ひては、唯中納言を、とざまかうさまに責め恨み聞え給へば、をかしと思ひながら、いとうけばりたる後見顔にうちいらへ聞えて、あだめいたる御心さまをも見顯す時々は、「いかでかかゝらむには」など申し給へば、宮も御心づかひを給ふべし。「心にかなふあたりをまだ見つけぬ程どや」とのたまふ。おほい殿の六の君をおぼし入れぬこと、なまうらめしげにおとゞもおぼしたりけり。されどゆかしげなきなからひなるうちにも、おとゞのことごとしく煩しくて何事のまぎれをも見咎められむがむつかしきと、おたにはのたまひてすまひ給ふ。その年三條の宮焼けて、入道宮も六條院にうつろひ給ひ、何くれと物騒しきにまぎれて、宇治のわたりを久しう音づれ聞え給はず。まめやかなる人の御心は又いとことなりければ、いとどかにおのがものとはうち頼みながら、女の心ゆるび給はざらむかぎりはあさればみなさけなきさまに見えじと思ひつゝ、昔の御心忘れぬ方を深く見知り給へとおぼす。その年常よりも暑さを人々わぶるに、河づら涼しからむはやと思ひ出で、俄にまうで給へり。朝すゞみの程に出で給ひければ、あやにくにさしくる日影もまばゆくて宮のおはせし西の廂に殿居人召し出で、おはす。そなたのもやの佛の御まへに、君達ものし給ひけるを、けぢかゝらじとて、我が御方にわたり給ふ。御けはひ忍びたれどおのづからうちみじろき給ふ程近く聞えければ、猶あらじにこなたに通ふさうじのはしの方にかけてがねまたる所に、穴の少しあきたるを見置き給へり

ければ、とに立てたる屏風をひきやりて見給ふ。こゝもとに几帳をそへ立てたる、あな口をしと思ひてひきかへるをりしも、風の簾垂をいたう吹きあぐべかめれば、「あらはにもこそあれ。その御几帳おし出で、こそ」といふ人あなり。をこがましきもの、嬉しうて見給へば、高きも短きも、几帳をふたまのすに押し寄せて、このさうじに向ひて、あきたるさうじよりあなたにとほらむとなりけり。まづ一人たち出で、几帳よりさしのぞきて、この御供の人のとかう行きちがひ涼みあへるを見給ふなりけり。濃きにび色のひとへに、くわさうの袴のもてはやしたる、なかなかさまかはりて、花やかなりと見ゆるは、着なし給へる人がらなめり。帯はかなげにまなして、珠數ひき隠しても給へり。いとそびやかに、やうだいをかしげなる人の、かみうちきに少したへぬ程ならむと見えて、未まで塵のまよひなく、つやつやとこちたう美しくしげなり。かたはらめなどあならうたげと見えて、匂ひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一宮もかうさまにぞおはすべきとほの見奉りしも思ひくらべられてうちなげかる。またぬざり出で、かのさうじはあらはにもこそあれと見おこせ給へる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらむとおぼゆ。頭つきかんざしのほど、今少しあてになまめかしきさまなり。「あなたに屏風も添へて立て、侍りつ。急ぎてしものぞき給はじ」と若き人々何心なくいふあり。「いみじうもあるべきわざかな」とて、うしろめだけにおざり入り給ふ程、け高う心にくきけはひ添ひて見ゆ。黒さはせ一かさね同じやうなる色あひを着給へれど、これはなつかしうなまめきて、哀げに心苦しうおぼゆ。髪さばらかなる程に落ちたる



なるべし、末少しほそりて、色なりとかいふめるひすぬだちていとをかしげにいとをよりか  
けたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ちたまへる手つき、かれよりもほそさま  
さりてやせやせなるべし。立ちたりつる君もさうじ口に居て、何事にかあらむ、こなたを見  
おこせて笑ひたる、いとあいぎやうづきたり。

## 總 角

あまた年耳なれ給ひにし河風も、この秋はいとはしたなく物悲しくて、御はての事急がせ給  
ふ。大方のあるべかしきことどもは、中納言殿、阿闍梨などを仕うまつり給ひける。こゝには  
法服の事、經のかざり、こまかなる御あつかひを、人の聞ゆるに従ひて營み給ふも、いともの  
はかなくあはれに、かゝるよその御後見なからましかばと見えたり。みづからも詣て給ひて  
いまはと脱ぎ捨て給ふ程の御とぶらひあさからず聞え給ふ。阿闍梨もこゝに參れり。みやう  
がうの絲ひき亂りて、「かくても經ぬる」などうち語らひ給ふほどなりけり。結びあげたるた  
ゝりのすだれのつまより几帳のほころびにすきて見えければ、その事と心得て「我が涙をば  
玉にぬかなむ」とうちずし給へり。伊勢のごもかうこそはありけめとをかしう聞ゆるも、う  
ちの人は聞き知りがほにさしいらへ給はむもつゝましくて、物とはなしにとか貫之がこの  
世ながらの別をだに心ほそきすぢにひきかけ、むをなど、げにふることで人の心をのぶる

たよりなりけるを思ひ出て給ふ。御願文つくり、經ほとけ供養せらるべき心ばへなど書き出で給へる硯のついでに、まらうと、

「あげまきに長さちぎりを結びこめおなじ所によりもあはなむ」と書きて見せ奉り給へば、例のとうるさければ、

「ぬきもあへずもろき涙の玉のをに長さちぎりをいかゞむすばむ」とあれば、「あはずはなにを」とうらめしげに眺め給ふ。自らの御うへは、かくそこはかとなくもてけちて恥しげなるに、すかすかともえのたまひよらて、宮の御事をぞまめやかに聞え給ふ。さしも御心に入るまじきことを、かやうの方に少しすゝみ給へる御本性にて聞えそめ給ひけむ、まけじたましひにやととざまかうざまにいとよくなむ御氣色見奉る。「誠にうしろめたうはなるまじげなるを、などかうあながちにしももてはなれ給ふらむ。世の有様などおぼしわくまじくは見奉らぬを、うたて違々しくのみもてなさせ給へば、かばかりうらななくたのみ聞ゆる心に違ひてうらめしくなむ。ともかくもおぼしわくらむさまなどを、さはやかにうけ給はりにしがな」といともめだちて聞え給へば、「違へ聞えじの心にてこそは、かうまであやしき世のためしなる有様にてへだてなくもてなし侍れ。それをちぼしわかざりけるこそは、淺き事もまじりたる心地すれ。げにかゝる住ひなどに心あらむ人は思ひ残すことあるまじきを、何事にも後れそめにけるうちにこのたまふめるすぢは、いにしへも更にかけて、とあらばかゝらばなど行く末のあらまじごとにとりませでのたまひ置く事もなかりしかば、猶かゝるさまに

て世づきたる方を思ひ絶ゆべくおぼしおきてけるとなむ思ひ合せ侍れば、ともかくも聞えむ方なくて、さるは少し世ごもりたるほどにてみやまがくれには心苦しう見え給ふ人の御うへを、いとかく朽木にはなしはてずもがなと人知れずあつかはしうおぼえ侍れば、いかなるべき世にかあらむ」とうち歎きて物思ひ亂れ給ひけるけはひいとあはれげなり。けざやかにおとなびてもいかでかはさかしがり給はむとことわりにて、例のふる人召し出でて、ぞ語らひ給ふ。「年頃は唯後の世さまの心ばへにて進み参りそめしを、物心ほそげにおぼしなるめりし御末の頃ほひ、この事どもを心に任せてもてなし聞ゆべくなむのたまひ契りてしを、おぼしおきて奉り給ひし御有様どもには違ひて、御心ばへどものいとあやにくに物つよげなるはいかにおぼし置きつる方の事なるにや」と疑はしき事さへそひてなむ。おのづから聞き傳へ給ふやうもあらむ。いとあやしき本性にて、世の中に心をまむる方なかりつるを、さるべきにてやかうまでも聞えなれにけむ。世の人もやうやういひなすやうあるべかめるに、同じうは昔の御事も違へ聞えず、我も人も世の常に心とけて聞え通はじやと思ひよるは、つきなかるべき事にてもさやうなるためしなくやはある」などのたまひ續けて、「宮の御事をもかう聞ゆるにうしろめたらはあらじとうちとけ給ふさまならぬはうちうちにさりとも思ほしむけたる事のさまあらむ。猶いかにいかに」とうち眺めつゝのたまへば、例のわろびたる女房などは、かゝる事にはにくきさかしらもいひませてことよがりなどもすめるを、いとはあらず、心の中には、あらまほしかるべき御事どもをと思へど、「もとよりかく人に違ひ

給へる御くせどもに侍ればにや、いかにもいかにも世のつねになにやかやなどおもひより  
給へる御氣色になむ侍らぬ。かくてさぶらふこれかれも、年比だに何のたのもしげある木の  
本のかくろへも侍らざりき。身を捨て難く思ふかぎりはほどほどにつけてまかてちり、昔の  
ふるさずぢなる人も、多く見奉りすてたるあたりに、まして今は暫しも立ちとまり難げに侘  
び侍りつゝ、おはしまし、世にこそ限ありてかたほならむ御有様はいとほしくもなど、こた  
いなる御うるはしさにおぼし滞りつれ。今はかう又たのみなき御身どもにて、いかにもいか  
にも世に靡き給へらむと、あながちに譏り聞えむ人は、かへりて物の心をも知らずいふかひ  
なき事にてこそはあらめ。いかなる人かいとかうて世をばすぐしはて給ふべき。松の葉をす  
きてつとむる山伏だに生ける身の捨て難さによりてこそは、佛の御教をも道々別れては行  
ひなすなれ、などやうの善からぬ事を聞え知らせ、若き御心ども亂れ給ひぬべき事多く侍る  
めれど、たわむべくもものし給はず、中の君をなむいかで人めかしうもあつかひなし奉らむ  
と思ひ聞え給ふべかめる。かく山深う尋ね聞えさせ給ふめる御志の、年經て見奉りなれ給へ  
るけはひも疎からず思ひ聞えさせ給ひ、今はとさまかうさまにこまかなるすぢに聞え通ひ  
給ふめるに、かの御方をさやうに趣けて聞え給はゞとなむおぼすべかめる。宮の御文など侍  
るめるは更にまめまめしき御事ならじと侍るめる」と聞ゆれば、「あはれなる御一言を聞き  
置き奉りにしかば、露の世にかゝづらはむかぎりは、聞え通はむの心あれば、いづかたにも  
見え奉らむ。同じ事なるべきを、さまではた、おぼしよるなる、いと嬉しき事なれど、心の引  
くかたなむかばかり思ひ捨つるよに猶とまりぬべきものなりければ、改めてさはえ思ひ直

すまじくなむ。世の常になよびかなるすぢにもあらずや。只かように物隔て事のこいたるさまならずさしむかひてとにかくに定めなき世の物語を隔なく聞えて、つゝみ給ふ御心の隈残らずもてなし給はむなむはらからなどのさやうにむつまじき程なるもなくて、いとさうざうしくなむ。世の中の思ふ事のあはれにもをかしようもうれはしようも、時につけたる有様を心にこめてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづきなくおぼゆるに疎かるまじう頼み聞ゆる。きさいの宮はたなれなれしうさやうにそこはかとなき思のまゝなるくだくだしさを、聞えふるべきにもあらず。三條の宮は親と思ひ聞ゆべきにもあらぬ御わかかしさなれど、限あればたやすくなれ聞えさせずかし。その外の女はすべていと疎くつゝましよう恐しようおぼえて心からよるべなく心ぼそきなり。なほざりのすさびにてもけさうだちたることはいとまばゆくありつかず、はしたなきこちごちしさにて、まいて心にまめたる方のごとは、うち出づることも難くてうらめしうもいぶせくも思ひ聞ゆる氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限なくかたくなしきわざなれ。宮の御事も、さりともあしざまには聞えじと任せてやは見給はぬなどいひ居給へり。おい人はた、かばかり心ぼそきにあらまほしげなる御有様を、いとせちにさもあらせ奉らばやと思へど、いづかたも恥しげなる御有様どもなれば思のまゝにはえ聞えず。今宵はとまり給ひて物語などのどやかに聞えまほしうてやすらひ慕し給ひつ。あざやかならず物恨みがちなる御氣色やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしうてうちとけて聞え給はむ事も、いよいよ苦しけれど、大方にてはありがたうあはれなる人の御

心なれば、こよなうもてなし難うて對面をたまふ。佛のおはする中の戸をあけて、みあかしの火けざやかにかゝげさせてすだれに屏風をそへてぞおはする。とにもおほとなぶら参らすれど、「惱しうてむらいなるを、あらはに」など諫めてかたはらふし給へり。御くだものなどわざとはなくまなして参らせ給へり。御供の人々にも、ゆゑゆゑしきさかななどして出させ給へり。らうめいたる方に集りて、このおまへは人げ遠くもてなして、まめじめと物語聞え給ふ。うちとくべうもあらぬものから、懐しげにあいぎやうづきて物のたまへるさまの、なのめならず心に入りて思ひいらるゝもはかなし。かくほどもなきものゝへだてばかりをさはり所にて、覺束なく思ひつゝ過ぐす心おどさの、あまりをこがましうもあるかなと思ひ續けらるれど、つれなくて大方の世の中のことども、あはれにもをかしうもさまざま聞く所多く語らひ聞え給ふ。内には人々近うなどのたまひおきつれど、さしももてはなれ給はざらなむと思ふべかめれば、いとしもまもり聞えず、さしきつゝ皆よりふして、佛の御とし火もかゝぐる人もなし。物むつかしうて忍びて人めせど驚かず、「心地のかき亂りなやましう侍るを、ためらひて曉方にも又聞えむ」とて入り給ひなむとする氣色なり。「山路分け侍りつる人はましていと苦しけれど、かう聞えうけ給はるに慰めてこそ侍れ。うち捨てゝ入らせ給ひなばいと心ぼそからむ」とて屏風をやを押しあけて入り給ひぬ。いとむくつけうてなからばかり入り給へるに、引きとどめられて、いみじうねたう心憂ければ、「へだてなきとはかゝるをやいふらむ。珍らかなるわざかな」とあばめ給へるさまのいよいよをかしけれ

ば「隔てぬ心を更におぼしわかねば、聞え知らせむとぞかし。珍らかなりともいかなる方におぼしよるにかはあらむ。佛の御前にてちかごともたて侍らむ。うたて、なおぢさせ給ひと。御心破らじと思ひそめて侍れば、人はかくしも推し量り思ふまじかめれど、世に違へるまれものにて過ぐし侍るぞや」とて心にくきほどなるほかけに、みぐしのこぼれかゝりたるをかきやりつゝ見給へば、人の御けはひ思ふやうにかをりをかしげなり。かう心ぼそあさましき御すみかに、すいたらむ人はさはり所あまるじげなるを、我ならで尋ね來る人もあらましかば、さてや止みなまし、いかに口惜しきわざならましときし方の心のやすらひさへあやふくおぼえ給へど、いふかひなく憂しと思ひて、泣き給ふ御氣色のいとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるびし給ふ折もありなむと思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへ聞え給ふ。「かゝる御心の程を思ひよらであやしきまで聞えなれにたるを、ゆゝしき袖の色など見顯し給ふ心あさゝに、みづからのいふかひなさも思ひ知らるゝに、様々慰む方なく」と恨みて、何心もなくやつれ給へる墨染のほかけを、いとはしたなく侘しと思ひ惑ひ給へり。いとかうしもおぼさるゝやうこそはと、はづかしきに聞えさせむ方なし。「袖の色を引きかけさせ給ふはしもことわりなれど、こゝら御覽じなれぬる志のまゐるしには、さばかりのいみおくべく、今始めたる事めきてやはおぼさるべき。なかなかなる御わきまへ心になむ」とてかの物の音聞きし有明の月かげより始めて、折々の思ふ心の忍び難くなりゆくさまをいと多く聞え給ふに、恥しうもありけるかなと疎ましう、かゝる心ばへ

ながらつれなくまめだち給ひけるかなと聞き給ふ事おほかり。御傍なるみじかき几帳を佛の御方にさし隔て、かりそめにそひふし給へり。みやうがうのいとかうばしく匂ひて、まきみのいと華やかに薫れるけはひも、人よりはけに佛をも思ひ聞え給へる御心にてわづらはしく、墨染の今更に折ふし心いられたるやうに、あはあはしう思ひそめしに違ふべければ、かゝるいみなからむ程にこの御心にも、さりとも少したわみ給ひなむなどせめてのどかに思ひなし給ふ。秋の夜のけはひはかゝらぬ所だにちのづからあはれ多かるを、まして峰の嵐も籬の蟲も心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に時々さしいらへ給へるさま、いと見所多くめやすし。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと氣色とりて皆いりぬ。宮のたまひしさまなどおぼし出づるに、げにながらへば心の外にかくあるまじき事も見るべきわざにこそはと物のみ悲しうて、水の音に流れそふ心地ま給ふ。はかなく明けがたになりけり。御供の人々おきてこわづくり、馬どものいばゆるをも、旅のやどりのあるやうなどに人の語るをおぼしやられてをかしうおぼさる。光見えつる方のさうじを押しあげ給ひて空のあはれなるを諸共に見給ふ。女も少しるざり出て給へるに、程もなき軒の近さなれば、まのぶの露もやうやう光り見えもて行く。かたみにいとえんなるさまかたちどもを、「何とはなくて唯かやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世の有様を聞え合せてなむすぐさまほしき」といとなつかしきさまして語らひ聞え給へば、やうやう恐しさも慰みて、「かういとはしたなからて物隔て、など聞えば、誠に心のへだては更にあるまじくなむ」と



いらへ給ふ。あかくなりゆき村鳥の立ちさまよふ羽風近う聞ゆ。夜深きあしたの鐘の音かすかにひびく。今だにいと見苦しきをといとわりなう恥しげにおぼしたり。「ことありがほに朝露もえ分け侍るまじ。又人はいかじ推し量り聞ゆべき。例のやうになだらかにもてなさせ給ひて、唯世に違ひたる事にて、今より後もたゞかやうにまなさせ給ひてよ。世にうしろめたき心はあらじとおぼせ。かばかりあながちなる心の程も、あはれとおぼし知らぬこそかひなけれ」と出て給はむの氣色もなし。あさましうかたはならむとて「今より後は。さればこそ。もてなし給はむまゝにあらむ。今朝はまた聞ゆるに隨ひ給へかし」とていとすべなしとおぼしたれば、「あなくるしや。暁のわかれやまだ知らぬことにてげに惑ひぬべきを」となげきがちなり。庭鳥もいづかたにかあらむ、ほのかにおとなふに、都思ひいでらる。

「山里のあはれまらるゝ聲々にとりあつめたるあさぼらけかな」。女君、

「鳥の音も聞えぬ山とおもひしを世にうきことは尋ねきにけり」。さうじ口まで送り奉り給ひて、よべ入りし戸口より出て、ふし給へれどまどろまれず。名残戀しうて、いとかく思はましかば、月頭も今まで心のどかならましやなど、かへらむことも物憂くおぼえ給ふ。姫君は人の思ふらむとのつゝましきに、とみにもうちふされ給はで、たのもしき人なくて世を過ぐす身の心うきを、ある人どもよからぬこと、何やかやとつきづきに隨ひつゝいひ出づめるに、心よりほかの事ありぬべきよなめりとおぼし廻らすにはこの人の御けはひ有様のうとましくはあるまじく、故宮もさやうなる心ばへあらばとをりをりのたまひおぼすめり

しかど、みづからは猶かくて過ぐしてむ、我よりはさまかたちも盛に、あたらしげなる中の君を、人なみなみに見なしたらむこそ嬉しからめ、人のうへになしては心の至らむかぎり思ひ後見てむ、みづからのうへのもてなしは、又誰かは見あつかはむ、この人の御さまのなめ、うち紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃の志るしにうちゆるぶ心もありぬべきを、恥しげに見えにくき氣色も、なかなかいみじうつゝましきに、我が世はかくて過ぐしはて、むと思ひつゞけてねなきがちにて明し給へるに、名残いと惱ましければ中の君のふし給へる奥の方にそひふし給ふ。例ならず人のさゝめさし氣色もあやしとこの君はおぼしつゝね給へるに、かくておはしたれば、うれしくて御ぞひき着せ奉り給ふに、所せき御うつりがまざるべくもあらずくゆるかゝる心地すれば、殿居人がもてあつかひけむ思ひ合せられて、誠なるべしといとほしうてねぬるやうにて物ものたまはず。まらうどは辨のちもとよび出で給ひてこまかに語らひ置き、御せうこそすくしくしう聞えおきて出で給ひぬ。あげまきをたはぶれにとりなしゝも心もてひろばかりのへだても、對面まつるとやこの君もおぼすらむと、いみじう耻しければ、心地あしとて悩み暮し給ひつ。人々「日は残なくなり侍りぬ。はかばかしうはかなき事をだに又仕うまつる人もなきに、折悪しき御悩みかな」と聞ゆ。中の君くみなどしはて給ひて、「心ばなどは、えこそ思ひより侍らぬ」とせめて聞え給へば、暗うなりぬるまぎれに、起き給ひて諸共にむすびなど志給ふ。中納言殿より御文あれど「今朝よりいと惱しうなむ」とて人づてにぞ聞え給ふ。「さも見苦しう、わかわかしうおはす」と人々

つぶやき聞ゆ。御ぶくなどはてし、脱ぎ捨てたまへるにつけても「片時も後れ奉らむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日のほどをおぼすに、いみじう思の外なる身のうさ」と泣きまづみ給へる御さまどもいと心苦しげなり。月頃くらうならはし給へる御姿、うすにびにていとなまめかしうて中の君はげにいと盛にて、美しくしげなるにほひまさり給へり。御ぐしなどすましつくろはせて見奉り給ふに、世の物思忘るゝ心ちしてめでたければ、人知れず思ふさまにかなひて、人に見え給はむにさりともちかちとりしては思はずやあらむとたのもしう嬉しうて、今は又見ゆづる人もなく、親心にかしづきたてゝ見聞え給ふ。かの人はずみ聞え給ひし藤の衣も改め給へつらむ、なが月もまづ心なくて又おはしたり。「例のやうに聞えむ」と又御せうそこあるに、「心あやまりして、煩しうおぼゆれば」ととかう聞えずまひて對面し給はず。「思の外に心憂き御心かな。人もいかに思ひ侍らむ」と御文にて聞え給へり。「今はとて脱ぎ捨て侍りし程の心まどひに、なかなかまづみ侍りてなむ聞えぬ」とあり。恨み侘びて、例の人召してよろづにのたまふ。世にあらぬ心ほそさのなぐさめにはこの君をのみ頼み聞えたる人々なれば、思ひにかなひ給ひて世の常のすみかにうつろひなどし給はむを、いとめてたかるべき事にいひあはせて、「唯入れ奉らむ」と皆語らひ合せけり。姫君その氣色をば深う見まじ給はねど、かうとりわきて人めかしなづけ給ふめるに、うちとけてうしろめたき心もやあらむ、昔物語にも心もてやは、とあるかゝることもあめる、うちとくまじきは人の心にこそあめれと思ひより給ひて、せめてうらみふかくはこの君をおし出て

む、劣りざまならむにてだにさても見そめてはあさはかにはもてなすまじき心なめるを、ま  
してほのかにも見そめては慰みなむ、ことに出で、はいかてかは、ふとさる事をまちとる人  
のあらむ、ほいになむあらぬとうけひく氣色のなかなるは、かたへは人の思はむ事をあいな  
う、淺き方にやなどつゝみ給ふならむと覺しかまふるを、氣色だに知らせ給はずば、罪もや  
えむと身をつみていとほしければ、よろづにうち語らひて、「昔の御おもむけも、世の中をか  
く心ほそうて過ぐしはつとも、なかなか人わらへにかるがるしき心つかふななどのたまひ  
おきしを、おはせし世の御ほだしにて行ひの御心を亂りし罪だにいみじかりけむを、今はと  
てさばかりのたまひし一言をだにたがへじと思ひ侍れば、心ほそくなどもことに思はぬを  
この人々のあやしう心ごはきものにくむめるこそいとわりなけれ。げにさのみやうのも  
のと過ぐし給はむも、明け暮るゝ月日にそへても、御事をのみこそあたらしう心苦しう悲し  
きものに思ひ聞ゆるを、君だに世の常にもてなし給ひて、かゝる身の有様もおもだしく慰  
むばかり見奉りなさばや」と聞え給へば、いかにおぼすにかと心憂くて「ひと所をのみやは、  
さて世にはて給へとは聞え給ひけむ。はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、數そひた  
るやうにこそおぼされためりしか。心細き御なぐさめには、かう朝夕に見奉るよりいかなる  
方にか」となま怨めしく思ひ給へれば、げにといとほしうて、「猶これかれうたてひがひがし  
きものにいひ思ふべかめるにつけて思ひ亂れ侍るぞや」といひさし給ひつ。暮れ行くに、まら  
うどはかへり給はず。姫君いとむつかしとおぼす。辨參りて、御消息ども聞え傳へて、恨み給

ふを、ことわりなるよしを、つぶつと聞ゆれば、いらへも告給はずうち歎きていかにもて  
なすべき身にかは、ひと所おはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれ奉りて、宿  
世といふなる方につけて身を心ともせぬよなれば、皆例のことにてこそは人わらへになる  
とがをも隠すなれ、あるかぎりの人は年つもりさかしげにおのが老しは思ひつゝ、心をやり  
て似つかはしげなる事を聞えまらずれど、こははかばかしきことかは、入めかしからぬ心ど  
もにて、唯一方にいふにこそはと見給へば、引き動しつばかりきこえあへるも、いと心憂くう  
とましうてだうぜられ給はず。同じ心に何事も語らひ聞え給ふ。中の君はかゝるすぢには今  
少し心もえず、おほどかにて何とも聞きいれ給はねば、あやしうもありける身かなと唯奥  
ざまに向きておはす。「例の色の御ぞども、奉りかへよ」などそゝのかし聞えつゝ皆さる心す  
べかめる氣色を、あさましく、げに何のさはり所かはあらむ、ほどもなくてかゝる御住ひの  
かひなき、山なしの花ぞのがれむ方なかりける。まらうどは、かくけきように、これかれにも  
口入れさせず、忍びやかにいつありそめけむことゝもなく、もてなしてこそと思ひそめける  
事なれば、御心ゆるし給はずば、いつもいつもかくてすぐさむとおぼしのたまふを、このお  
い人のおのが老し語らひてけきようにさゝめきなどす。さはいへど深からぬけにや、老いひ  
がめるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫君おぼし煩ひて、辨が参れるにのたまふ。「年比も人に  
似ぬ御心よせとのみのたまひわたりしを聞きおき、今となりてはよろづにのこりなく頼み  
聞えて、あやしきまでうちとけにたるを、思ひしにたがふさまなる御心ばへのまじりて恨み

給ふめるこそわりなけれ。世に人めきてあらまほしき身ならばかゝる御ことをも何かはもてはなれても思はまし。されど昔より思ひ離れそめたる心にていと苦しきを、この君のさかり過ぎ給はむも口惜しげに、かゝる住ひもたゞこの御ゆかりに所せくのみおぼゆるを、誠に昔を思ひ聞え給ふ志ならば、同じ事に思ひなし給へかし。身をわけたる心のうちは皆ゆづりて見奉らむ心地なむすべき。猶かやうによろしげに聞えなされよ」とはぢらひたるものからあるべきさまをのたまひつゞくれば、いとあはれと見奉る。「さのみこそはさきさまも御氣色を見給ふればいとよく聞えさすれど、さはえ思ひ改むまじき。兵部卿宮の御うらみ深さまさるめれば、又となたさまにいとよくうしろみ聞えむ」となむ聞え給ふ。「それも思ふやうなる御事どもなり。二所ながらおはしまして、ことさらにいみじき御心盡してかしづき聞えさせ給はむには、えしもかく世にありがたき御事どもさしつどひ給はざらまし。かしこけれどかくいとたつきなげなる御有様を見奉るに、いかになりはてさせ給はむとうしろめたう悲しうのみ見奉るを、後の御心は知りがたけれど、うつくしくめでたき御すくせどもにこそおはしましけれとなむかつかつ思ひ聞ゆる。故宮の御ゆるごん違へじとおぼしめす方はことわりなれど、それはさるべき人のおはせず、まなほどならぬ事やおはしまさむとおぼして誠め聞えさせ給ふめにこそ。この殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば、一所をうしろ安く見置き奉りていかにうれしからましと折々のたまはせしものを、ほどほどにつけて思ふ人に後れ給ひぬる人は、高きもくだれるも心の外にあるまじきさまにさすらふ類ひだに

こそ多く侍るめれ。それ皆例の事なめればもどきいふ人も侍らず。ましてかくばかりことさらにも作り出でまほしげなる人の御有様に、志深うありがたげに聞え給ふをあながちにも離れさせ給ひて、おぼしおきつるやうに行ひのほいとげ給ふとも、さりとして雲霞をやは「などすべてこと多く申し續くれれば、いとにくく心づきなくおぼして、ひれふし給へり。中の君もあいなくいとほしき御氣色かなと見奉り給ひて、諸共に例のやうにおほとのごもりぬ。うしろめたういかにもてなさむとおぼえ給へど、ことさらめきてさしこもりかくろへ給ふべき物の隈だになき御住ひなれば、なよかにかにをかしき御ぞうへに引き着せ奉り給ひて、まだけはひあつき程なれば少しまるびのきて臥し給へり。辨はのたまひつるさまを、まらうどに聞ゆ。いかなればいとかうしも世を思ひ離れ給ふらむ、ひじりだち給へりしあたりにて常なきものに思ひ知り給へるにやとおぼすに、いと我が心に通ひておぼゆれば、さかしたちにくくもおぼえず。」「さらば物ごしなどにも今はあるまじき事におぼしなるにこそはあなれ。今夜ばかりおほとのごもるらむあたり、忍びてたばかれ」とのたまへば、心して人とくまづめなど、心知れるどちは思ひかまふ。宵少し過ぐるほどに風の音荒らかにうち吹くに、はかなきさまなる語などはひしひしとまざる、音に、人の忍び給へるふるまひは、え聞きつげ給はじと思ひて、やをら導きつる。同じ所におほとのごもれるを、うしろめたしと思へど、常のことなれば、ほかほかにともいかゞ聞えむ。御けはひをもたどしからず、見奉り給へつらむと思ひけるに、うちもまどろみ給はねば、ふと聞き給ひてやをら起き出で給ひぬ。

いと疾くはひ隠れ給ひぬるに、何心もなく寝入り給へるをいとほしく、いかにするわざ  
ぞと胸つぶれて諸共に隠れなばやと思へど、さもえ立ちかへられてわななくわななく見給  
へば、火のほのかなるにうちき姿にていとなれがほに、几帳のかたびらをひきあげて入りぬ  
るを、いみじういとほしく、いかにおぼえ給はむと思ひながら、あやしき壁のつらに屏風を  
立てたるうしろのむつかしげなるに居給ひぬ。あらましごとにてだにづらしと思ひ給へる  
を、まいていかにめづらかにおぼし疎まむといと心苦しきにも、すべてはかばかしきうしろ  
みなくて落ちとまる身と物悲しきを思ひ續け給ふに、今はとて山に登り給ひし夕の御さま  
など只今の心地していみじく戀しく悲しくおぼえ給ふ。中納言は一人ふし給へるを、心しけ  
るにやと嬉しくて心ときめきし給ふに、やうやうあらざりけりと見る。今少し美しくくらう  
たげなる氣色はまさりてやとおぼゆ。あさましげにあきれ惑ひ給へるを、げに心も知らざり  
けりと見ゆればいとほしくもあり、又おしかへして隠れ給へらむつらさのまめやかに心  
うくねたければ、これをもよそのものとはえ思ひ離れまじけれど、猶ほいの遣はむ口惜しく  
て、うちつけにあさかりけりともおぼえ奉らじ。このひとふしは猶過ぐして遂にすくせのか  
れずは、こなたさまにならむも何かはこと人のやうにやはと思ひさまして、例のをかしくな  
つかしきさまに語らひてあかし給ひつ。若い人どもはまそじつと思ひて、中の君はいづこに  
かおはしますらむ、怪しきわざかなとたどりあへり。「さりともあるやうあらむ」などいふ。  
「大方例の見奉るに、皺のぶる心ちしてめでたくあはれに見まほしき御かたち有様を、など



ていともてはなれては聞え給ふらむ。何かこれは世の人のいふめる、恐しき神ぞつき奉りつらむ」と齒はうちすきて、あいぎやうなげにいひなす女あり。又「あなまがまがし。なぞのものがつかせ給はむ。たゞ人に遠くておひ出でさせ給ふめれば、かゝる事にもつきづきしげにもてなし聞え給ふ人もなくおはしますに、はしたなくおぼさるゝにこそ。今おのづから見奉りなれ給ひなば思ひ聞え給ひてむ」など語らひて、「とくうちとけて思ふやうにておはしまさなむ」といふいふ寢入りて、いびきなどかたはらいたくするもあり。逢ふ人からにしもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬるこゝちしていづれとわくべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心ちして、「あひおぼせよ。いと心憂くつらき人の御さま見習ひ給ふなよ」など、のちせを契りて出て給ふ。我ながらあやしく夢のやうにおぼゆれど、猶つれなき人の御氣色、今一度見はてむの心に思ひのどめつゝ、例の出ていふし給へり。辨参りていとあやしく、「中の君はいづくにおはしますらむ」といふを、いと恥しく思ひかけぬ御心地にいかなりけむことにかと思ひいふし給へり。昨日のたまひし事をおぼしいて、姫君をつらしと思ひ聞え給ふ。明けにける光につきてぞ壁の中のきりぎりすはひいで給へる。おぼすらむことのいとほしければ、かたみに物もいはれ給はず。ゆかしげなう心憂くもあるかな、今より後も心ゆるびすべくもあらぬ世にこそと思ひ亂れ給へり。辨はあなたに参りて、あさましかりける御心つよさを聞き顯して、いとあまりふかく人にくかりけること、いとほしくおもほれ居たり。「きし方のつらさは猶残りあるこゝちして、よろづに思ひ慰め

つるを、今夜なむ誠に恥しく身も投げつべき心ちする。捨てがたくおとし置き奉りたまへり  
けむ心苦しさを思ひ聞ゆる方こそ、又ひたぶるに身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけかけしき  
すぢは、いづかたにも思ひ聞えじ。愛さもつらさも、かたがたに忘れ給ふまじくなむ。宮な  
どの恥しげなく聞え給ふめるを、同じくは高くと思ふ方を殊に物し給ふらむと心得はてつ  
れば、いとゞことわりに耻しくて又参りて人々に見え奉らむこともねたくなむ。よしかくを  
こがましき身の上、また人にだに洩らし給ふな」と念んじ置きて、例よりも急ぎ出て給ふ。  
「誰が御ためもいとほしく」とさゝめきあへり。姫君もいかにしつることぞ、もしおろかなる  
心も物し給はゞと、胸つぶれて心苦しければ、すべてうちあはぬ人々のさかしらをにくしと  
おぼす。さまざま思ふ給ふに、御文あり。例よりは嬉しとおぼえ給ふもかつはあやし。秋の氣  
色も知らずがほに、青き枝のかたえは、いとこくもみぢしたるを、

「おなじえをわきてそめける山姫にいづれかふかき色ととはゞや」。さばかり恨みつる氣  
色もなくことずくなにことそぎておしつゝみ給へるを、そこはかたなくもてなして止みな  
むとなめりと見給ふも心さわぎて、耳かしがましう「御かへり」といへば、聞え給へとゆづら  
むもうたておぼえて、さすがに書きにくく思ひ亂れ給ふ。

「山姫のそむることろはわかねどもうつろふ方やふかきなるらむ」。ことなしひに書き給  
へるがをかく見えければ、猶え念んじはつまじくおぼゆ。身をわけてなどゆづり給ふ氣色  
は度々見えしかど、うけひかぬにわびてかまへ給へるなめり、そのかひなくかくつれなから

むも、いとほしくなさせなきものに思ひ置かれて、いよいよはじめの思ひかなひ難くやあらむ、とかく言ひ傳へなどすめる、おい人の思はむ所もかるがろしく、とにかくに心を染めけむだに悔しく、かばかりの世の中を思ひすてむの心に、みづからもかなはざりけりと人わろく思ひ知らるゝを、ましておしなべたるすきものゝまねに、同じあたりに戻す返す漕きめぐらむ、いと人わらへなる棚なし小船めきたるべしなどよもすがら思ひ明し給ひて、まだ有明の空もをかしき程に、兵部卿宮の御方に參り給ふ。三條の宮焼けにし後は、六條院にぞうつろひ給へれば近くては常に參り給ふを、宮もおぼすやうなる御心地し給ひけり。紛るゝことなく、あらまほしき御住ひに、おまへの前裁外には似ず、同じき花のすがたも木草の靡きさまも、ことに見なされて、遣り水にすめる月の影さへ繪に書きたるやうなるに、思ひつるもしるく起きおはしましけり。風につきて吹き來るにほひのいとしくうちかをるに、ふとそれと驚かれて、御直衣奉り亂れぬさまに引き繕ひて出て給ふ。はしをのぼりもはずつゝ居給へれば、猶うへになどものたまはて、高欄により居給ひて世の中の御物語聞えかはし給ふ。かのわたりのことをも物のついでにおぼし出で、よるづに恨み給ふもわりなしや。みづからの心にだにかなひがたきと思ふ思ふ、さもおはせなむと思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかにあるべきさまなど申し給ふ。あけぐれの程あやにくに霧わたりて空のけはひひやゝかなるに、月は霧に隔てられて木の下も暗くなまめきたり。山里のあはれなるありさま思ひいで給ふ。宮「このごろの程に。必ずおくらかし給ふな」と語らひ給ふを猶煩しが

れば、

「女郎花さけるおほ野をふせぎつゝ心せばくやまめをゆふらむ」とたはぶれ給ふ。

「霧ふかきあしたのはらの女郎花こゝろをよせて見る人ぞみる。なべてやは」などねたまし聞ゆれば「あなかしこまし」とはてはては腹立ち給ひぬ。年頃かくのたまへど、人の御有様をいかならむとらしめたく思ひしに、かたちなども見おとし給ふまじく推し量らるゝ心ばせの、ちかおとりするやうもやなどぞあやうく思ひ渡りしを、何事も口惜しくは物し給ふまじかめりと思へば、かのいとほしくうち思ひたばかり給ふ有様も違ふやうならむもなさけなきやうなるを、さりとてさはたえ思ひ改むまじくおぼゆれば、まづゆづり聞えて、いづ方の恨をもおはじなどまたに思ひ構ふる心をも知り給はて、心せばくとりなし給ふもをかしけれど「例のかるらかなる御心さまに、物思はせむこそ心苦しかるべけれ」などおやかたになりて聞え給ふ。「よし見給へ。かばかり心にとまることなむまだなかりつる」などいとまめやかにの給へば、「かの心どもにはさもやとうち靡きぬべき氣色は見えずなむ侍る。仕うまつりにくき宮仕にこそ侍れや」とて、おはしますべきやうなどこまかに聞えまらせ給ふ。廿六日彼岸のはてにてよき日なりければ、人知れず心づかひしていみじく忍びてゐて奉る。ささいの宮など聞しめし出で、はかゝる御ありきいみじくせいし聞え給へばいと煩しきを、せちにおぼしたる事なれば、さりげなくともてあつかふもわりなくなむ。ふなわたりなども所せければ、ことごとしき御やどりなども借り給はず。そのわたりいと近きみさ

うの人の家にいと忍びて宮をばおろし奉り給うておはしぬ。見咎め奉るべき人もなければ、殿居人は僅に出でありくにも、氣色しらせじとなるべし、例の中納言殿おはしますとてけいめいしあへり。君だちなま煩はしく聞き給へど、うつろふ方ことにほはし置きてしかばと姫君はおぼす。中の君は思ふ方ことなめりしかばさりとと思ひながら、心愛かりし後はありしやうに姉君をも思ひ聞え給はず、心おかれて物し給ふ。何やかやと御せうをこのみ聞え通ひていかなるべき事にかと人々も心苦しがる。宮をば御馬にて、暗きまぎれにおはしますせ給うて、辨召し出で、「こゝもとに唯一言聞えさすべきことなむ侍るを、おぼし放つさま見奉りてしに、いと恥しけれどひたやごもりにてえやむまじきを、今志ばしふかしてを、ありしさまには導き給ひてむや」など、うらもなく語らひ給へば、いづかたにも同じ事にこそはと思ひて参りぬ。さなむと聞ゆれば、さればよ思ひ移りにけりと嬉しくて、心おちゐて、かの入り給ふべき道にはあらぬ廂のさうじをいとよくさして對面し給へり。「一言聞えさすべきが又人聞くばかりの、しらむはあやなきを、いさゝかあけさせ給へ。いといふせし」と聞え給へど、「かくてもいとよく聞えぬべし」とて、あけ給はず。今はとうつろひなむをたじならじとていふべきにや、何かは例ならぬ對面にもあらず、人にくゝいらへて、夜もふかさじなど思ひてかばかりも出で給へるに、障子のなかより御袖をとらへて引きよせていみじううらむれば、いとうたてもあるわざかな、何に聞きいれつらむとくやしうむつかしけれど、こしらへて出してむとおぼして、こと人と思ひわき給ふまじきさまにかすめつゝ語らひ給へ

る心ばへなどいとあはれなり。宮は教へ聞えつるまゝに、一夜の戸口によりて扇を鳴し給へば、辨も参りて導き聞ゆ。ささぎもなれにける道のしるべ、をかしとおぼしつゝ、いり給ひぬるをも、姫君は知り給はでこしらへいれてむとおぼしたり。をかしうもいとほしくもおぼえて、うちうち心も知らざりける恨みおかれむも罪さり所なき心地すべければ、「宮の慕ひ給ひつれば、え聞えいなびで、こゝにおはしつる。音もせてこそ紛れ給ひぬれ。このさかしたつめる人や、かたらはれ奉りぬらむ。なかぞらに人わらへにもなり侍りぬべきかな」とのたまふに、今少し思ひよらぬことの、めもあやに心づきなうなりて、「かうよろづに珍らかなりける御心の程を知らで、いふかひなき心をさなさも見え奉りにけるをこたりに、おぼしあなづるにこそは」といはむ方なく思ふ給へり。「今はいふかひなし。ことわりは返す返す聞えさせても、あまりあらばつみもひねらせ給へ。やんごとなき方におぼしよるめるを、すぐせなどいふめるもの更に心になはぬものに侍るめれば、かの御志はことに侍りけるをいとほしく思ひ給ふるに、かなはぬ身こそおき所なく心憂く侍りけれ。猶いかゞはせむにおぼしよわりね。このみさうじのかためばかりいと強きも、誠に物清く推し量り聞ゆる人も侍らじ。まるべといざなひ給へる人の御心にも、まさにかく胸ふたがりて明すらむとはおぼしなむや」とてさうじをも引き破りつべき氣色なれば、いはむ方なく心づきなけれどこしらへむと思ひまづめて、「こののたまふすぐせといふらむ方は目にも見えぬことにて、いかにもいかに思ひたどられず、まらぬ涙のみきりふたがる心地してなむ。こはいかにもてなし給ふ

ぞと夢のやうにあさましきに、後の世のためしにいひいづる人もあらば、昔物語などに殊更にをこめきて作り出でたるものゝたとひにこそはなりぬべかめれ。かくおぼしかまふる心のほどをも、いかなりけるとかは推し量り給はむ。猶いとかくおどろおどろしう心憂くなとりあつめまどはし給ひそ。心よりほかにながらへば少し思ひのどまりて聞えむ。心地も更にかきくらすやうにていとなやましきを。こゝにうちやすまむ。許し給へといといみじく侘び給へば、さすがにことわりをばいと能くのたまふが心恥しくらうたくおぼえて、「あが君、御心に従ふことの類ひなければこそかくまでかたくなしくなり侍れ。いひまらずにく、疎ましきものにおぼしなすめれば、聞えむ方なし。いとゞ世に跡とゞむべくなむおぼえぬ」とて、「さらばへだてながらも聞えさせむ。ひたふるになうちすてさせ給ひそ」とて、許し奉り給へれば、はひいりてさすがに入りもはて給はぬを、いとあはれと思ひて、「かばかりの御けはひをなぐさめにて、明し侍らむ。ゆめゆめ」と聞えてうちもまどろまず。いとゞしき水の音に目もさめて、夜半の嵐に山鳥の心ちして明しかね給ふ。例の明け行くけはひに鐘の聲など聞ゆ。いぎたなくて出て給ふべき氣色もなきよと、心やましくこわづくり給ふも、げにあやしきわざなり。

「まるべせし我やかへりて惑ふべきこゝろもゆかぬあけぐれの道。かゝるためし世にありけむや」とのたまへば、

「かたかたにくらすこゝろを思ひやれ人やりならぬ道にまどは」とほのかにのたまふ

を、いと飽かぬ心地すれば、「いかにこよなう隔たりて侍るめれば、いとわりなうこと」などよろづに恨みつゝ、ほのぼのと明けゆくほどに、よべの方より出で給ふなり。いとやはらかにふるまひなし給へるにほひなど、えんなる御心げさうにはいひまらずまめ給へり。ねび人どもはいとあやしく心を難く思ひ惑はれけれど、さりともあしざまなる御心あらむやはと慰めたり。暗き程にと急ぎ歸り給ふ。道の程もかへるさはいと遙けくおぼされて、心安くもえ行き通はざらむことの、かねていと苦しきを、夜をや隔てむと思ひ惱み給ふなめり。また人さわがしからぬ朝の程にもはしつきぬ。廊に御車よせており給ふ。ことやうなる女車のさましてかくろへ入り給ふに、皆わらひ給ひて、「おろかならぬ宮仕の御志となむ思ひ給ふる」と申し給ふ。まるべのをこがましさをば、いと妬くてうれへも聞え給はず。宮はいつしかと御文奉り給ふ。山里には誰もたれもうつゝの心地ま給はず思ひ亂れ給へり。様々におぼしまへけるを、色にも出し給はざりけるよとうとましようつらく姉君をば思ひ聞え給ひて、目も見あはせ奉り給はず。知らざりしさまをも、さはさはとはえあきらめ給はで、ことわりに心苦しく思ひ聞え給ふ。人々もいかに侍りしことにかなど、御氣色見奉れど、おぼしほれたるやうにてたのもし人のおはすれば、あやしきわざかなと思ひあへり。御文もひきときて見せ奉り給へど、更に起きあがり給はねば、「いと久しくなりぬ」と御つかひわびけり。

「世のつねに思ひやすらむ露ふかき道のさゝ原わきてきつるも」。書きなれ給へる墨つきなどのことさらにえんなるも、大かたにつけて見給ひしは、をかしうおぼえしを、後めたう物



思はしうて我さかし人にて聞えむもいとつしましければ、まめやかにあるべきやうをいみじくせめて書かせ奉り給ふ。志をん色の細長ひとかさねに、みへがさねの袴具してたまふ。御使苦しげに思ひたれば、つゝませて供なる人になむ送らせ給ふ。ことごとしき御使にもあらず、例奉れ給ふうへわらははなり。殊更に人に氣色もらさじとおぼしければ、よべのさかしがりしおい人のしわざなりけりともものしくなむ聞しめしける。その夜もかのしるべきそひ給へど、「冷泉院に必ず侍ふべき事侍れば」とてとまり給ひぬ。例のことにはふれてすさまじげによをもてなすとにくくおぼす。いかゞはせむ、ほいならざりし事とて、おろかにやはと思ひよわり給ひて、御しつらひなどうちあはぬすみかのさまなれど、さる方にをかしくしなして待ち聞え給ひけり。遙なる御中道を、急ぎおはしましたりけるも、嬉しきわざなるぞかつはあやしき。さうじみは我にもあらぬさまにて、つくろはれ奉りたまふまゝに、濃き御ぞのいたくぬるれば、さかし人もうちなきつゝ、「世の中に久しくもおぼえ侍らねば、明暮のながめにも唯御事をのみなむ心苦しう思ひ聞ゆるに、この人々もよかるべきさまのこと、聞きにくきまでいひしらすめれば、年経たる心どもには、さりとも世のことわりをも知りたらずむはかばかしくもあらぬ心ひとつをたて、かうでのみやは見奉らむと思ひなるやうもありしかと、只今かく思ひもあへず恥しきことどもに亂れ思ふべくは更に思ひかけ侍らざりしに、これやげに人のいふめる遁れ難き御契なりけむ。いとこそ苦しけれ。少しおぼし慰みなむに、知らざりしさまをも聞えむ。にくしとなおぼしいりそ、罪もぞ得給ふ」とみぐしをな

でつくろひつゝ聞え給へば、いらへも志給はねど、さすがにかくおぼしのたまふが、げにうしろめたく悪しかれともおぼしおきてじを、人わらへに見苦しきことそひて、見あつかはれ奉らむがいみじきを、よろづに思ひ居給へり。さる心もなくあきれ給へりしけはひだになべてならずをかしかりしを、まいて少し世の常になよび給へるは御志もまさるに、たはやすく通ひ給はざらむ山道のはるけさも、胸いたきまでおぼして、心深げにかたらひたのため給へど、あはれともいかにとも思ひわき給はず。いひまらずかしづくもの、姫君も、少し世の常の人げ近く親せうとなどいひつゝ、人のたゝずまひをも見なれ給へるは、物の恥しさもなめめにやあらむ。家にあがめ聞ゆる人ことなけれ、かく山ふかき御あたりなれば、人に遠く物深くてならひ給へるこゝちに、思ひかけぬ有様のつゝましく耻しく、何事も世の人に似ずあやしう田舎びたらむかしとはかなき御いらへにてもいひ出でむ方なくつゝみ給へり。さるはこの看しもぞらうらうしくかどある方のにほひはまさり給へる。三日にあたる夜は、「もちひなむ参る」と人々の聞ゆれば、殊更にさるべき祝ひのことにこととはとおぼして、御前にてせさせ給ふもたどしう、かつはおとなになりておきて給ふも、人の見るらむこと憚られて、おもてうち赤めておはするさま、いとをかしげなり。このかみ心にや、のどかにけ高さものかから、人のためあはれになさけなさけしうぞおはしける。中納言殿より、「よべ参らむと思ひ給へしかど、宮仕のらうも志るしなげなめる世に、思う給へ恨みてなむ。今夜はさうやくもやと思ひ給へれど、殿居所のはしたなげに侍りし、亂り心地いと安からでやすらはれ侍

る」と、みちのくに紙においつき書き給ひて、まうけのものどもこまやかに縫ひなどもせざりけるいろいろうおしまきなどしつゝ、みぞ櫃あまたかけごにいでて、おい人のもとに、人々の料にとて賜へり。宮の御方にさぶらひけるに従ひていと多くもえとり集め給はざりけるにやあらむ、たゞなる絹綾など、またには入れかくしつゝ、御料とおぼしき二くだり、いと清らにしたるを、單衣の御ぞの袖に、こだいのことなれど、

「さよ衣きてなれきとはいはずともかごとばかりはかけずしもあらじ」とおどし聞え給へり。こなたかなたゆかしげなき御ことを、恥しういと見給ひて、御かへりもいかゞ聞えむとおぼし煩ふほど、御使かたへはにげかくれにけり。あやしきまも人をひかへてぞ御かへしたまふ。

「へだてなき心ばかりはかよふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ」。心あわたゞしく思ひ亂れ給へる名残に、いとゞなほなほしきをおぼしけるまゝと、待ち見給ふ人は唯あはれにぞ思ひなされ給ふ。宮はその夜内に参り給うて、えまかて給ふまじげなるを、人知れず御心もそらにておぼし歎きたるに、中宮猶かくひとりおはしまして世の中にすい給へる御名のやうやう聞ゆる、猶いと悪しき事なり。何事も物好ましく立てたる心なつかひ給ひそ。上もうしろめたげにおぼしの給ふ」と里すみがちにおはしますを諫め聞え給へば、いと苦しとおぼして、御殿居所に出て給ひて御文かきて奉れ給へる。名残もいたくうちながめておはしますに中納言の君参り給えり。そなたの心よせとおぼせば例よりも嬉しうて、「いかゞすべき、い

とかく暗くなりぬめるを心も亂れてなむ」と歎しげにおぼしたり。能く御氣色を見奉らむとおぼして、「日ごろ經てかく參り給へるを、今夜さぶらはせ給はて急ぎまかて給ひなむ、いとよろしからぬことにや、おぼし聞えさせ給はむ。臺盤所の方にてうけたまはりつれば、人知れず煩はしき宮仕のしるしに、あいなきかんだうや侍らむと顔の色違ひ侍りつる」と申し給へば、「いと聞きにく、ぞおぼしのたまふや。多くは人のとりなすことなるべし。世にとがめあるばかりの心は、何事にかはつかふらむ。すべて所せき身の程こそなかななるわざなりけれ」とて、誠にいとほしくさへおぼしたり。いとほしう見奉り給ひて、「同じ御さわがれにこそはおはすなれ。今夜の罪にはかはり聞えさせて、身をもいたづらになし侍りなむかしこはたの山に馬はいかゞ侍るべき。いとゞもの、聞えやさはり所なからむ」と聞え給へば、たゞくれにくれて更けにける夜なれば、おぼしわびて御馬にて出て給ひぬ。「御供にはなかなかつかふまつらじ、御うしろみをとてこの君は内にさぶらひ給ふ。中宮の御方に參り給へれば、「宮は出て給ひぬなり。あさましくいとほしき御さまかな。いかに人見奉らむ。上きこしめしてはいさめ聞えぬがいふかひなきとおぼしのたまふこそわりなけれ」とのたまはす。あまた宮達のおとなびと、のひ給へど、大宮はいよいよ若くをかしきけはひなむまさり給ひける。女一宮もかくぞおはしますべかめる。いかならむ折にかかばかりにても物近く御聲をだに聞え奉らむとあはれにおぼゆ。すいたる人の思ふまじき心づかふらむも、かうやうなる御なからひの、さすがにけ遠からずいたりたちて心にはぬ折の事ならむかし、我が心

のやうに、ひがひがしき心のたぐひやは又世にあべかめる、それだに猶動きとめぬるあたりはえこそ思ひたへねと思ひ居給へり。さぶらふかぎりの女房のかたち、心ざまいづれとなくわろびたるなくめやすくとりどりにをかしき中にも、あてにすぐれて目にとまるあれど、更に更に亂れそめじの心にていときすくにもてなし給へり。殊更に見えまらがふ人もあり。大方恥しげにもてまづめ給へるあたりなれば、うはべこそ心ばかりもてまづめたれ、心々なる世の中なりければ、色めかしげにすゝみたるまたの心もりて見ゆるもあるを、さまざまにかしくもあはれにもあるかなと、立ちても居ても唯常なき有様を思ひありき給ふ。かしこには、中納言殿の、ことごとしげにいひなし給へりつるを、夜更くるまでおはしまさで御文のあるを、さればよと胸つぶれておはするに、夜中近うなりてあらまじき風のきほひにいとまなめかしく清らにて匂ひおはしたるも、いかゞおろかにおほえ給はむ。さうじみも聊かうち靡きて思ひ知り給ふことあるべし。いみじくをかしげにさかりと見えて、引きつくるひ給へるさまは、まして類ひあらじはやおほゆ。さばかりよき人をおほく見給ふ御目にだに、けしうはあらずとかたちよりはじめて多くちかまさりしたりとおほさるれば山里のよい人どもは、まして口つきにくげにうちゑみつゝ、「かくあたらしき御有様を、なのめなるきは人の見奉り給はましかばいかに口惜しからまし。思ふやうなる御すくせ」と聞えつゝ、姫君の御心を、あやしくひがひがしくもてなし給ふを、もどきくちひをみ聞ゆ。盛り過ぎたるさまどもにあざやかなる花のいろいろ似つかはしからぬをさしぬひきつゝ、ありつかずとりつく

ろひたる姿どもの、罪ゆるされたるもなきを見渡され給ひて、姫君、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見ればやせやせになりもてゆくを、おのがじ、はこの人ども、われあしとやは思へる、うしろではまらず顔にひたひ髪をひきかけつゝ、色どりたる顔づくりをよくしてうちふるまふめり、我が身にては、まだいとあれがほどにはあらず、目も鼻もなほしとおぼゆるは心のなしにやあらむとうろめたくて、見出して臥し給へり。恥か上げならむ人に見えむことはいよいよかたはらいたく、今年二年あらば衰へまさりなむ、はかなげなる身の有様をと、御手つきのほそやかにかよわくあはれなるをさしいて、も世の中を思ひつゞけ給ふ。宮はありがたかりつる御いとまの程をおぼしめぐらすに、猶心やすかるまじきことにこそはといと胸ふたがりておぼえ給ひける。大宮の聞え給ひしさまなど語り聞え給ひて、「思ひながらとだえあらむを、いかなるにかとおぼすな。夢にてもおろかならむにかくまでも参りくまじきを、心のほどやいかゞと疑ひて、思ひ亂れ給はむが心苦しさに、身を捨てゝなむ。常にかくはえ惑ひありかじ。さるべきさまにて近くわたし奉らむ」といと深く聞え給へど、絶え間あるべくおぼさるらむは、おとに聞きし御心の程さるきにやと心おかれ、我が御ありさまからさまさま物歎しくてなむありける。明けゆくほどの空に妻戸押しあげ給ひて諸共にいざなひ出で、見給へば、霧わたれるさま所からのあはれ多くそひて、例のまばつむ船のかすかに行きかふ、跡の白浪めなれずもあるすまひのさまかなと、色なる御心にはをかしくおぼしなさる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御かたちのまほに美しく

げにて、かぎりなくいつきすゑたらむ姫君もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの我が方さまのいとつくしきぞかし、こまやかなるにほひなどうちとけて見まほしうなかなかなる心ちす。水の音なひなつかしからず、宇治橋のいと物ふりて見え渡さるゝなど、霧晴れ行けばいとあらましき岸のわたりを、「かゝる處にいかで年をへ給ふらむ一などうち涙ぐまれ給へるをいと恥しと聞き給ふ。男の御さまのかぎりなくなまめかしく清らにて、この世のみならず契りたのめ聞え給へば、思ひよらざりしこと、は思ひながら、なかなかのめなれたりし中納言の恥しさよりはとおぼえ給ふ。かれは思ふかたことにていといたくすみたる氣色の見えにく、恥しげなりしに、よそに思ひ聞えしはましてこよなく遙に、一くだりかき出で給ふ御返しだにつゝ、ましくおぼえしを、久しうとだえ給はむは心ほそからむと思ひならるゝも、我ながらうたてと思ひまり給ふ。人々いたくこわづくりもよほし聞ゆれば、京におはしまさむ程、はしたなからぬ程にといと心あわたゞしげにて、心より外ならむ夜がれを、かへすがへすのたまふ。

「中絶えむものならなくにはし姫のかたしく袖や夜はにぬらさむ」。出でがてに立ち返りつゝやすらひ給ふ。

「たえせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき」。ことには出でぬど物なげかしき御けはひ限なくおぼされけり。若き人の御心にまみぬべく、類ひすくなげなるあさげの姿を見送りて、名残とまれる御移り香なども人知れず物あはれなるは、ざれたる御

心かな。今朝どもの、あやめも見ゆる程にて人々のぞきて見奉る。「中納言殿は、なつかしく恥しげなるさまぞをひ給へりける。思ひなしの今ひときはにや、この御さまはいとことに」などめで聞ゆ。道すがら心苦しかりつる御氣色をおぼしいてつゝ、立ちもかへりなまほしくさまあしきまでおぼせど、世の聞えを忍びて歸らせ給ふほどに、えたはやすくも紛れさせ給はず、御文は明くる日ごとにあまたかへり奉らせ給ふ。おろかにはあらぬにやと思ひながら、おぼつかなき日數の積るをいと心づくしに見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しくもあるかなと姫君はおぼし歎かるれど、いとゞこの君の思ひまづみ給はむによりつれなくもてなして、みづからだに猶かゝること思ひ加へじといよいよふかくおぼす。中納言の君も待ち遠にぞおぼすらむかしと思ひやりて、我があやまちにいとほしくて宮を聞えおどろかしつゝ絶えず御氣色を見給ふに、いといたくもほしいれたるさまなれば、さりとともとうしろやすかりけり。九月十日の程なれば、野山の氣色も思ひやらるゝに、時雨めきてかきくらし空のむら雲おそろしげなる夕暮、宮いとゞまづ心なくながめ給ひて、いかにせむと御心ひとつを出て立ちかね給ふをり、推し量りて参り給へり。「ふるの山里いかならむとちどろかし聞え給ふ。いと嬉しとおぼして、諸共にいざなひ給へば、例のひとつ御車にておはす。分け入り給ふまゝにぞまいて眺め給ふらむ心のうちいとゞ推し量られ給ふ。道のほども唯この事の心苦しきを語りひ聞え給ふ。たそがれ時のいみじく心ほそげなるに、雨は冷やかにうちそいぎて秋はつる氣色のすぎきに、うちまめりぬれ給へるにほひどもは、世のものに似ずえん



にてうちつれ給へるを、やまがつどもはいかゞ心惑ひもせざらむ。女ばら日ごろうちつぶや  
きつる名残なくゑみさかえつゝおましひきつくりひなどす。京にさるべき所々に行きちり  
たるむすめどもめひだつ人二三人尋ねよせて參らせたり。年ごろあなづり聞えける心あさ  
き人々、珍らかなるまらうど、思ひ驚きたり。姫君もをり嬉しく思ひ聞え給ふに、さかしら  
人のそひ給へるぞ恥しくもありぬべくなまわづらはしう思へど、心ばへののどかに物深く  
ものし給ふを、げに人はかうは坐せざりけりと見あはせ給ふにありがたしと思ひまらる。宮  
を所につけてはいとことにかしづき入り奉りて、この君はあるじがたに心やすくもてなし  
給ふものから、まだまらうとの、かりそめなる方に出しはなち給へればいとからしと思ひ  
給へり。恨み給ふもさすがにいとほしくて物ごしに對面し給ふ。「たはぶれにくくもあるか  
な。かくてのみや」といみじく恨み聞え給ふ。やうやうことわりまり給ひにたれど、人の御う  
へにても物をいみじく思ひまづみ給ひて、いとどかゝる方を愛きものに思ひはて、猶ひた  
ぶるに、いかでがくうちとけしあはれと思ふ人の御心も必ずつらしと思ひぬべきわざにこ  
そあめれ、我も人も見おとさず心違はで止みにしがなと思ふ心づかひ深くし給へり。宮の  
御有様なども問ひ聞え給へば、かすめつゝ、さればよとおほしくのたまへば、いとほしくて、  
おぼしたるさま、氣色を見ありくやうなど語り聞え給ふ。例よりは心うつくしう語らひて、  
「猶かく物思ひ加ふる程少し心地も鎮まりて聞えむ」とのたまふ。人にくく、けどほくはもて  
はなれぬものから、さうじのかためもいとつよし。まひて彼らむをばつらくいみじからむと

おぼしたれば、おぼさるゝやうこそあらめ、かるがるしくことさまに靡き給ふことは、はた世にあらじと、心のどかなる人はさはいへどよく思ひまづめ給ふ。「唯いと覺束なく物隔てたるなむ胸あかぬ心ちするを、ありしやうにて聞えむ」とせめたまへど「常よりも我が俤に恥づるころなれば、うとましと見給ひてむも、さすがに心苦しきはいかなるにか」とほのかにうち笑ひ給へるけはひなど、あやしうなつかしうおぼゆ。「かゝる御心にたゆめられ奉りて、つひにいかなるべき身にかとなげきがちにて、例の遠山鳥にて明けぬ。宮はまだ旅ねなるらむともおぼさで、「中納言のあるじがたに心のどかなる氣色こそうらやましけれ」とのたまへば、女君あやしと聞き給ふ。わりなくおはしましては程なくかへり給ふが飽かず苦しきに、宮も物をいみじくおぼしたる御心のうちを知り給はねば女がたには、又いかならむ人わらへにやと思ひなげき給へば、げに心づくしに苦しげなるわざかなと見ゆ。京にもかくろへて渡り給ふべき所もさすがになし。六條院には、左のおほいとこの片つ方に住み給ひて、さばかりいかでかとおぼしたる六の君の御事をおぼしよらぬになまうらめしと思ひ聞え給ふべかめり。すきすきしき御さまとゆるしなくそしり聞え給ひて、うちわたりにも愛へ聞え給ふべかめれば、いよいよおぼえなくて、出しす多給はむもはゞかることとおほかりなべてにおぼす人のきは、宮仕のすぢにてなかなか心やすげなり。さやうのなみなみにはおぼされず。若し世の中うつりて、帝きさいのおぼしおきつるまゝにもおはしまさば、人よりたかささまにこそなさまめなど、只今はいと華やかに、御心にかゝり給へるまゝに、もてな

さむ方なく苦しかりけり。中納言は、三條の宮つくりはてし、さるべきさまにて渡し奉らむとおぼす。げにたゞ人は心やすかりけり。かくいと心苦しき御氣色ながら安からず忍び給ふからに、かたみに思ひ惱み給ふべかめるも心苦しくて、忍びてかくかよひ給ふよしを中宮などもにも漏し聞しめさせて、まばしのさわがれはいとほしくとも女がたの御ためは咎もあらじ、いとかく夜をだに明し給はぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせ奉らばやなど思ひて、あながちにもかくろへず、ころもがへなどはかばかしく、誰かはあづからむなどおぼして、御帳のかたびらかべしろなど、三條の宮つくりはてしわたり給はむ心まうけにまおかせ給へるを、まづさるべきやうなむなどいと忍びて聞え給ひて奉れ給ふ。さまざまなる女房のさうぞく、御めのとなどにもものたまひつゝ、わざともせさせ給ひけり。十月一日ごろ「あじろもをかしきほどならむ」とそゝのかし聞え給ひて、紅葉御覽すべう申し給ふ。親しき宮人ども殿上人のむつまじくおぼすかぎりいと忍びてとおぼせど、所せき御いきほひなればおのづからことひろごりて、左のおほいとのお宰相の中將も参り給ふ。さてはこの中納言殿はかりぞ上達部は仕うまつり給ふ。たゞ人はおほかり。「かしこにはるなう中やどりま給はむを、さるべきさまにおぼせ。ささの春も花見に尋ね参りしこれかれ、かゝるたよりにことよせて、時雨のまぎれに見奉り顯すやうもぞ侍る」などこまやかに聞え給へり。みすかけかへ、こゝかしかきはらひ、岩がくれに積れる紅葉の朽葉少しはるけ、遣水のみ草はらはせなどぞま給ふ。よしあるくだものさかななどさるべき人なども奉れ給へり。かつはゆかしげなけれ

どいかゞはせむ、これもさるべきにこそはと思ひゆるして心まうけし給へり。船にてのほりくんだり漕ぎめぐりおもしらく遊び給ふも聞ゆ。ほのぼの有様見ゆるを、そなたに立ち出て、若き人々見奉る。さうじみの御有様はそれと見わかねども、紅葉をふきたる船のかざりの錦と見ゆるに、聲々ふき出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。世の人の靡きかしづき奉るさま、かく忍び給へる道にもいと殊にいづくしきを見給ふにも、げに七夕ばかりにてもかゝる彗星の光をこそ待ち出でめなどおぼえたり。文作らせ給ふべき心まうけに博士などもさぶらひけり。たそがれどきに、御船さしよせてあそびつゝ文つくり給ふ。紅葉をうすくこくかざして海仙樂といふものを吹きておのおの心ゆきたる氣色なるに、宮はあふみの海の心地して、をち方人のうらみかにとのみ御心そらなり。時につけたる題出してうそぶさずしあへり。人のまよひすこしまづめておはせむと中納言もおぼして、さるべきやうに聞え給ふほどに、内より中宮のおほせごとにて、宰相の兄の衛門の督ことごとしき隨身ひきつれてうるはしさまして参り給へり。かうやうの御ありきは志のび給ふとすれどものづからことひろごりて、後のためしにもなるわざなるを、おもおもしき人数あまたもなくて俄におはしましにけるを聞しめしおどろきて、殿上人あまた具して参りたるにはしたなくなりぬ。宮も中納言も苦しとおぼして物の興もなくなりぬ。御心のうちをばあらずゑひみだれて遊びあかしつ。今日はかくてとおぼすに、又宮の大夫さらぬ殿上人などあまた奉り給へり。心あわたしくして口をしくかへり給はむそらなし。かしこには御文をぞ奉れ給

ふ。をかしやかなることもなく、いとまめだちておぼしけることどもをこまごまと書き續け給へれど、人めまげうさわがしからむにとて御かへりなし。數ならぬ有様にてはめでたき御あたりにもまじらはむかひなきわざかなといとどおぼしき給ふ。よそにて隔たる月日は覺束なさもことわりにさりともなどなくさめ給ふを、近き程にのゝまりおはして、つれなくすぎ給ふなむつらくも口惜しくも思ひ亂れ給ふ。宮はましていぶせくわりなしとおぼすことかぎりなし。あじろのひをも心よせ奉りていろいろの木の葉にかきませもてあそぶを、まも人などはいとをかしきことに思へば、人に従ひつゝ心ゆく御ありきに、みづからの御心地は胸のみつとふたがりて空をのみながめ給ふに、このふる宮のこずゑはいとことにおもしろく、常磐木にはひまじれる蔦の色なども物ふかげに見えてとほめさへすごげなるを、中納言の君もなかなかたのめ聞えけるをうれはしきわざかなとおぼゆ。こぞの春御供なりし君達は花の色を思ひ出て、後れてこゝに眺め給ふらむ心細さをいふ。かう忍び忍びに通ひ給ふとほのぎゝたるもあるべし、心まらぬもまじりて、大かたにとやかくやと人の御うへはかゝる山がくれなれどおのづから開ゆるものなれば、「いとをかしげにこそ物し給ふなれ。箏の琴上手にて、故宮の明暮遊びならはし給ひければ」などくちぢちにいふ。宰相中將、「うつぞやも花のさかりにひとめ見し木の本さへや秋はさびしき」、あるじ方と思ひていへば、中納言、

「櫻こそ思ひまらすれさきにほふ花もみぢもつねならぬ世を」。衛門督、

「いづこよりあきはゆきけむ山里の紅葉のかけはすぎうきものを」。宮の大夫、  
「見し人もなき山里の岩がきにこゝろながくもはへるくずかな」。中においゑらひてうち  
なき給ふ。御子の若くおはしける世のことなど、思ひ出づるなめり。宮、

「秋はてゝさびしさまさる木のもとをふきなすぐしと峯の松風」とていたう涙ぐみたま  
へるを、ほのかに知る人は、げにふかくおぼすなりけり。今日のたよりを過ぐし給ふ御心苦  
しさと見奉る人あれど、ことごとしく引き續きてえおはしましよらず。つくりける文どもの  
おもしろき所々うちずじ、やまと歌もことにつけて多かれど、かやうのゑひなきのまぎれに  
ましてはかばかしき事あらむやは。かたはし書きとゞめてだに見苦しくなむ。彼處には過ぎ  
給ひぬるけはひを、遠うなるまで聞ゆるさきの聲々たゞならずおぼえ給ふ。心まうけまつる  
人々もいと口惜しとおもへり。姫君はまして猶音に聞く月草の色なる御心なりけり。ほのか  
に人のいふを聞けば「男といふものはとらごとをこそいとよくすなれ。思はぬ人をおもひが  
ほにとりなす言の葉多かるもの」とこの人数ならぬ女ばらの昔物語にいふを、さるなほなほ  
しき中にこそはけしからぬ心あるもまじるらめ、何事もすぢことなるきはになりぬれば、人  
の聞き思ふことつゝましう所せかるべきものと思ひしはさしもあるまじきわざなりけり。  
あだめき給へるやうに故宮も聞き傳へ給ひてかうやうにけ近き程までは、おぼしよらざり  
しものを、あやしきまで心深げにのたまひわたり、思の外に見奉るにつけてさへ、身の憂さ  
を思ひそふるがあぢきなくもあるかな、かう見劣りする御心を、かつはかの中納言もいかに

思ひ給ふらむ、こゝにも殊に耻かしげなる人はうち交らねど、おのおの思ふらむが人わらへにをこがましき事と思ひ亂れ給ふに、心地も違ひていと惱しうおぼえ給ふ。さうじみはたまさかに對面し給ふ時、限なく深きことをたのめ契り給へれば、さりともこよなうはおぼし變らじと、覺束なきもわりなきさばかりこそは物し給ふらめと、心の中に思ひ慰め給ふかたあり。程經にけるが思ひ入られ給はぬにしもあらぬに、なかなかにてうち過ぎ給ひぬるを、つらうも口惜しうもおもほゆるに、いとゞ物あはれなり。忍びがたき御氣色なるを、人なみなみにもてなして、例の人めきたる住ひならば、かうやうにもてなし給ふまじきをなど、姉君はいとゞしくあはれと見奉り給ふ。我も世にながらへばかうやうなる事見つべきにこそはあめれ、中納言の、とざまかうざまにいひありき給ふも、人の心を見むとなりけり、心ひとつにもてはなれて思ふともこしらへやる限こそあれ、或人のこりずまにかゝる筋の、ことをのみいかでと思ひたれば、心より外に遂にもてなされぬべかめり、これこそは返す返すもさる心ちして、世をすぐせとのたまひおきしは、かゝる事もやあらむのいさめなりけれ、さもこそは憂き身どもにてさるべき人々にも後れ奉らめ、やうのものと人わらへなる事を添ふる有様にて、なき御影をさへ惱し奉らむがいみじさ、猶我だにさる物思ひにまづまず、罪なるといと深からぬさきにいかでなくなりなむとおぼし沈むに、心ちも誠に苦しければ、物も露ばかり參らず、たゞなからむ後のあらましごとを明暮思ひ續け給ふに物心ぼそくて、この君を見奉り給ふもいと心苦しう、我にさへ後れ給ひていかにいみじう慰むる方なからむ、あた

らしくをかしきさまを、明暮のみものにて、いかで人々しうも見なし奉らむと思ひあつかふをこそ、人知れぬ行く先のたのみにも思ひつれ、限なき人にもし給ふとも、かばかり人わらへなるめを見てむ人の、世の中に立ちまじり、例の人さまにて經給はむは、類ひ少く心憂からむなどおぼし續くるに、いふかひもなく、この世には聊思ひ慰む方なくて過ぎぬべき身どもなめりと、心ぼそくおぼす。宮は立ちかへり、例のやうに忍びてと出て立ち給ひけるを、「内にかゝる御忍びごとにより山里の御ありきもゆくりかにおぼし立つなりけり。かるがるしき御有様と、世人もまたに譏り申すなり」と衛門督の漏し申し給ひければ、中宮も聞しめし歎き、うへもいとゆるさぬ御氣色にて、大方心に任せ給へる御里住みのあしきなりけりときびしき事ども出て来て、内につと侍らはせ奉り給ふ。左の大臣殿の六の君をうけひかずおぼしたることなれど、おしたちて參らせ給ふべく皆定めらる。中納言殿聞き給ひてあいなく物を思ひありき給ふ。我があまりことやうなるぞや、さるべき契やありけむ、みこのうしろめたしとおぼしたりしさまもあはれに忘れがたく、この君達の御有様はひもことなる事なくて、世に衰へ給はむことの惜しくもおぼゆるあまりに、人々しうもてなさばやとあやしきまでもてあつかはるゝに、宮もあやにくにとりもちてせめ給ひしかば、我が思ふかたはことなるにゆづらるゝ有様もあいなくて、かくもてなしてしを思へばくやしくもありけるかな、いづれも我が物にて見奉らむに咎むべき人もなしかし、取り返すものならねどをこがましう心ひとつに思ひ亂れ給ふ。宮はまして御心にかゝらぬをりなく戀しううしろめたし



とおぼす。「御心につきておぼす人あらばこゝにまゐらせて、例ざまにのどやかにもてなし給へ。すぢことに思ひ聞えたまへるに、かるびたるやうに人の聞ゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と大宮は明暮聞え給ふ。時雨いたくしてのどやかなる日、女一宮の御方に参り給へれば、お前に人多くもさぶらはず、まめやかに御繪など御覽する程なり。御几帳ばかり隔て、御物語聞え給ふ。限もなくあてにけだかきものから、なよびかにをかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひ聞え給ひて、又この有様になすらふ人世にありなむや、冷泉院の姫君ばかりこそ、御おぼえの程内々の御けはひも心にくく、聞ゆれど、うちいでむ方もなくおぼしわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなる方の劣り聞ゆまじきぞかしなどまづ思ひ出づるに、いと戀しさまさるなぐさめに御繪どものあまたちりたるを見給へば、をかしげなる女繪どもの、戀する男のすまひなどかきませ、山里のをかしき家居など心々に世の有様書きたるを、よそへらるゝこと多くて御目とまり給へば、少し聞え給ひて、かしこへ奉らむとおぼす。在五が物語を書きて、妹にきん教へたる所の、人のむすばむといひたるを見て、いかとおぼすらむ、少し近く参りより給ひて、「いにしへの人もさるべき程は隔なくこそならはして侍りけれ。いとうとうとしうのみもてなさせ給ふこそ」と忍びて聞え給へば、いかなる繪にかとおぼすに、おしまきよせてお前にさし入れ給へるを、うつぶして御覽するみぐしのうち靡きてこぼれ出でたるかたそばばかりほのかに見奉り給ふが、飽かずめでたく、少し物のへだてたる人と思ひ聞えましかばとおぼすに、忍びがたくて、

「若草のねみむものとは思はねどもすぼゝれたるこゝちこそすれ」。お前なりつる人々は、この宮をば殊にはぢ聞えて物のうしろにかくれたり。ことしもこそあれ、うたて怪しとおぼせば、物ものたまはず。ことわりにてうらなくものをといひたる姫君も、ざれてにくくおぼさる。紫のうへのとりわきてこの二所をばならはし聞え給ひしかば、あまたの御中に隔なく思ひかはし聞え給へり。世になくかしづき聞え給ひて、さぶらふ人々もかたほに少しあかぬ所あるははしたなげなり。やんごとなき人の御むすめなどもいと多かり。御心のうつろひやすきは、珍しき人々にはかなく語らひつきなどま給ひつゝ、かのわたりをおぼし忘るゝ折なきものから、音づれ給はて日ごろ經ぬ。待ち聞え給ふ所は、絶間遠き心ちして、猶かうなめりと心ぼそうながめ給ふに、中納言おはしたり。なやましげにま給ふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心ち惑ふばかりの御惱みにもあらねど、ことつけて對面し給はず。驚きながら遙けき程を參り來つるを、猶かのなやみ給ふらむ御あたり近くとせちに覺束なかり聞え給へばうち解けてすまひ給へる方のみすの前に入れ奉る。いとかたはらいたさわざと苦しがり給へど、けにくくはあらて、御くしもたげ御いらへなど聞え給ふ。宮の御心も行かて、おはし過ぎにし有様など語り聞え給ひて、「のどかにおぼせ。心いられてな恨み聞え給ひそ」など教へ聞え給へば、「こゝにはともかくも聞え給はざめり。なき人の御いさめは、かゝる事にこそと見侍るばかりなむいとほしかりける」とて泣き給ふ氣色なり。いと心苦しう、我さへ恥しき心ちして「世の中はともかくてもひとつぎまにてすぐす事難くなむ侍るを、いか

なる事をも御覽じ知らぬ御心どもには、偏にうらめしなどおぼすこともあらむを、強ひておぼしのどめよ。うしろめたらうは世にあらじとなむ思ひ侍る」など人の御上をさへあつかふも、かつはあやしくおぼゆ。よるよるはましていと苦しげにま給ひければ、疎き人の御けはひの近きも中の君の苦しげにおぼしたれば、「猶例のあなたに」と人々聞ゆれど、「ましてかく煩ひ給ふほどの覺束なさを、思ひのまゝに參りきていだし放ち給へれば、いとわりなくなむ。かゝる折の御あつかひも誰かはかばかしく仕うまつる」など辨のおもとに語らひ給ひて、みずほふども始むべきことなどのたまふ。いと見苦しう殊更にもいとほしき身をと聞き給へど、思ひぐまなくのたまはむもうたてあれば、さすがにながらへよと思ひ給へる心ばへもあはれなり。又のあしたに、「少しもよろしくおぼさるや。昨日ばかりにてだに聞えさせむ」とあれば、「日比ふればにや、今日はいと苦しうなむ。さらばこなたに」と言ひ出し給へり。いとあはれにいかに物し給ふべきにかあらむ、ありしよりはなつかしき御氣色なるも胸つぶれておぼゆれば、近うまかてよろづの事を聞え給ふ。「苦しうてえ聞えず、少しためらむ程に」とて、いとかすかにあはれなるけはひを、限なう心苦しうて歎き居給へり。さすがにつれづれとかくておはしがたければいとうしろめたけれどかへり給ふ。「かゝる御住まひは猶苦しかりけり。處去り給ふにことよせてさるべき處にうつろはし奉らむ」など聞えおきて、阿闍梨にも、御いのり心に入るべくのたまひ知らせて出で給ひぬ。この君の御供なる人の、いつしかとこゝなる若き人を語らひよりたるありけり。おのがまゝの物語に、「かの宮の

御忍びありき制せられ給ひて、内にのみ籠りおはしますこと、左の大臣殿の姫君をなむあはせ奉り給ふべかなるを、女方は年比の御ほいなれば、おぼし滞ることなくて、年の内にありぬべかなり。宮はまぶまぶにおぼして、うちわたりにもたゞすぎがましき事に御心を入れて、みかどきさいの御いましめにまづまり給ふべくもあらざめり。我が殿こそ猶あやしう人に似給はず、あまりまめにおはしまして、人にはもてなやまれ給へ。こゝにかく渡り給ふのみなむ、めもあやにおぼろけならぬこと、人申す「なとかたりけるを」さこそいひつれ」など人々の中にて語るを聞き給ふにも、いと胸ふたがりて、今はかぎりこそあなれ、やんごとなき方に定まり給はぬほどの、なほざりの御すさびにかくまでおぼしけむを、さすがに中納言などの思はむ所をおぼして、言の葉のかぎり深きなりけりと思ひなし給ふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いと身の置所なき心地して、志をれふし給へり。よわき御心ちは、いと世に立ちとまるべうもおぼえず、恥しげなる人々にはあらねど、思ふらむところ苦しければ聞かぬやうにてね給へるを、姫君、物思ふ時のわざと聞きしうたゝねの御さまの、いとらうたげにて、かひなを枕にてね給へるに、御ぐしのたまりたる程など、ありがたう美しくしげなるを見やりつゝ、親の諫めし言の葉も、返す返す思ひ出でられ給ひて悲しければ、罪深くなる底にはよもまづみ給はじ、いづくにもいづくにもおはすらむ方にむかへ給ひてよ、かういみじく物思ふ身どもをうちすて給ひて、夢にだに見え給はぬよと思ひ續け給ふ。夕暮の空の氣色いとすぐくまぐれて、木の下吹きはらふ風の音などたとへむかたなく、さしかた

行くさき思ひ續けられてとひふし給へるさま、あてにかぎりなく見え給ふ。白き御ぞに、髪はけづることま給はで程經ぬれど迷ふすぢなくうちやられて、日ごろに少し青み給へるしもなまめかしさまさりて、ながめ出し給へるまみひたひつきのほども、見知らむ人に見せまほし。ひるねの君風のいと荒きに驚かされて起きあがり給へり。山吹薄色など花やかなる色あひに、御顔は殊更にそめにほはしたらむやうに、いとをかしうはなばなとして聊物思ふべきさまもま給へらず。「故宮の夢に見え給へる、いと物おぼしたるけしきにて、このわたりにこそほのめき給へれ」と語り給へれば、いとしく悲しさそひて、「うせ給ひて後、いかで夢にも見奉らむと思ふを、更にこそ見奉らね」とて二所ながらいみじう泣き給ふ。このごろ明暮思ひ出で奉れば、ほのめきもやおはすらむ、いかでおはすらむ處に尋ね參らむ、罪深げなる身どもにてと、後の世をさへ思ひやり給ふ。人の國にありけむ香の煙ぞいとえまほしくおぼさる。いと暗なるほどに、宮より御使あり。をりは少し物思ひ慰みぬべし。御方はとみにも見給はず。「猶心うつくしくおいらかなるさまに聞え給へ。かうてはかなうもなり侍りなば、これより名残なき方にもてなし聞ゆる人もや出でこむとうしろめたきを、まれにもこの人の思ひ出で聞え給はむに、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ頼まれ侍る」と聞え給えば、「おくらさむとおぼしけるこそいみじう侍れ」と、いよいよ顔を引き入れ給ふ。「限あれば片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひ侍るぞや。明日知らぬ世のさすがになげかしきも、誰がために惜しき命にか

は」とておほとなぶら参らせて見給ふ。例のこまやかに書き給ひて、

「ながむるは同じ雲井をいかなればおほつかなさをそふる時雨ぞ」。かく袖ひづるなどいふこともやありけむ。耳なれにたるを、猶あらじことゝ見るにつけてもうらめしさまさり給ふ。さばかり世にありがたき御ありさまかたちを、いとどいかに人にめてられむと、好しくえんにもてなし給へれば、若き人の心よせ奉り給はむもことわりなり。程経るにつけても戀しう、さばかり所せきまで契り置き給ひしを、さりともいとかくては止まじと思ひ直す心ぞ常にそひける。「御かへり今夜参りなむ」と聞ゆれば、これかれそゝのかし聞ゆれば、たゞひとことなむ。

「あられふる深山のさとは朝夕にながむる空もかきくらしつゝ」。かくいふは神無月のつごもりなりけり。月もへだゝりぬるよと宮はまづ心なくおぼされて、今夜今夜とおぼしつゝ、さはりおほみなる程に、五節など疾く出てきたる年にて、うちわたり今めかしくまざれがちにて、わざともなけれどすぐい給ふ程に、あさましう待ちどほなり。はかなう人を見給ふにつけても、さるは御心にはなるゝ折なし。左の大臣殿のわたりの事、大宮も猶「さるのどやかなる御うしろみをまうけ給ひて、その外の尋ねまほしうおぼさるゝ人あらば参らせておもおもしくもてなし給へ」と聞え給へど、「暫しさ思ふ給ふるやう」など聞えすまひ給ひて、誠につらさめはいかてか見せむなどおぼす御心を知り給はねば、月日にそへて物をのみおぼす。中納言も、見しほどよりはかるびたる御心かな、さりともと思ひ聞えけるもいとほ

しく心からおぼえつゝ、をさをさ参り給はず、山里にはいかにいとぶらひ聞え給ふ。この月となりては、少しよろしうおはすと聞き給ひけるに、おほやけわたくし物さわがしきころにて、五六日人も奉り給はぬに、いかならむと打ち驚かれて、わりなきことの繁さをうち捨て、まうで給ふ。ずほふは怠りはて給ふまでとのたまひ置きけるを、よろしくなりにけるとて、阿闍梨をも返し給ひければ、いと人ずくなにて、例のおい人出てきて御ありさま聞ゆ。「そこはかといたき處もなく、おどろおどろしからぬ御惱みに物をなむ更に聞き召さぬ。もとより人に似給はず、あえかにおはしますうちに、この宮の御事出て來にし後、いと物おぼしたるさまにて、はかなき御くだものだに御覽じいれざりしつもりにや、あさましく弱くなり給ひて更に頼むべくも見え給はず、世に心憂く侍りける身の命の長さにて、かゝる事を見奉れば、まづいかで先だち聞えなむと、思ふ給へいりて侍り」といひもやらす泣くさまことわりなり。「などか斯とも告げ給はざりける。院にも内にもあさましう事繁きころにて、日ごろも聞えざりつる覺束なさ」とてありし方に入り給ふ。御枕がみ近くて物聞え給へど、御聲もなきやうにてえいらへ給はず。「かく重くなり給ふまで、誰も誰も告げ給はざりけるがつらう思ふに、かひなき事」と恨みて、例の阿闍梨、大方世にまゐるしありと聞ゆる人のかざり、あまたさうじ給ふ。御修法どきやう明るる日より始めさせ給はむとて、とのひとあまた参り集ひ、かみしもの人立ち騒ぎたれば心ほそさの名残なくたのもしげなり。暮れぬれば、例のあなたにと聞えて、御湯づけなど参らせむとすれど、近くてだに見奉らむとて、南の

廂は僧の座なれば、東おもでの今少しけ近き方に屏風など立てさせて入り居給ふ。中の君苦しとおぼしたれど、この御中を猶もてはなれ給はぬなりけりと皆思ひて、疎くももてなし隔て奉らず。そやよりはじめて、法華經を不斷讀ませ給ふ。聲たふときかぎり十二人していとたふとし。火はこなたの南のまにともして内はくらさに、几帳をひきあげて少しすべり入りて見奉り給へば、おい人ども二三人ぞさぶらふ。中の君はふと隠れ給ひぬれば、いと人ずくなに心ぼそくてふし給へるを、「などか御聲をだに聞かせ給はぬ」とて、御手をとらへて驚かし聞え給へば、「心地にはおぼえながら物いふがいと苦しくてなむ。日ごろ音づれ給はざりつれば、覺束なくて過ぎ侍りぬべきにやと口惜しうこそ侍りつれ」と息の志たにのたまふ。かくまたれ奉りつる程まで、参りこざりけることゝて、さくりもよよとなき給ふ。御ぐしなど少しあつくぞおはしける。「何の罪なる御心ちにか、人の歎きおふこそかくはあなれ」と御耳にさしあて、物をおほく聞え給へば、うるさうも恥しうもおぼえて、顔をふたぎ給へり。いとよなよなとあえかにて臥し給へるを、空しう見なしていかなる心ちせむと胸もひしけておぼゆ。「日ごろ見奉り給へらむ御心地も、安からずおぼされつらむ。今夜だに心安くうちやすませ給へ。とのゐ人さぶらふべし」と聞え給へば、うしろめたけれど、さるやうこそはとおぼして、少ししどき給へり。ひたおもてにはあらねどはひよりつゝ見奉り給へば、いと苦しく恥しけれど、かゝるべき契こそありけめとおぼして、こよなうのどやかかにうしろやすき御心を、かの片つかたの人に見くらべ奉り給へばあはれとも思ひ知られにたり。空しくなりな



む後の思ひ出にも、心ごはく思ひぐまなからじとつゝみ給ひて、はしたなくもえおし放ち給はず。夜もすがら人をそゝのかして、御湯など參らせ奉り給へど、露ばかりまゐる氣色もなし。いみじのわざや、いかにしてかはかけとゞむべきと、言はむ方なく思ひ居給へり。不斷經の曉がたの、居かはりたる聲のいとたふとときに、阿闍梨もよゐにさぶらひてねぶりたる、うち驚きて陀羅尼よむ。おいかれにたれどいとくうづきてたのもしう聞ゆ。「いかゞ今夜はおはしましつらむ」など聞ゆるついでに故宮の御事など聞え出で、鼻まばしばうちかみて「いかなる所におはしますらむ。さりととも涼しき方にぞと思ひやり奉るを、さいつころの夢になむ見えおはしまし。俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば心とまることなかりしを、聊うち思ひしことに亂れてなむ。唯まばしねがひの處を隔たれるを思ふなむいとくやしき。すゝむるわざせよ」とさだかに仰せられしを、たちまちに仕うまつるべきことのおぼえ侍らねば、堪へたるにまたがひておこなひ志侍る。法師ばら五六人して、なにがしの念佛なむ仕うまつらせ侍る。さては思ひ給へえたること侍りて常不經をなむつかせ侍る」など申すに君もいみじう泣き給ふ。かの世にさへ妨げ聞ゆらむ罪の程を、苦しき心地にもいと消え入りぬばかりおぼえ給ふ。いかでかのまだ定まり給はざらむ先にまうて、同じ所にもと聞きふし給へり。阿闍梨はとずくなにて立ちぬ。この常不經そのわたりの里々京までありさけるを、曉の嵐にわびて阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、中門のもとに居て、いとたふとくつく、ゑかうの末つ方の心ばへいとあはれなり。まらうどもこなたに進みたる御心

にて、あはれ忍ばれ給はず、中の君せちにおぼつかなくて奥の方なる几帳のうしろにより給へるけはひを聞き給ひて、あざやかに居なほり給ひて「不經の聲はいかゞ聞かせ給ひつらむ。おもおもしき道には行はぬことなれど、たふとくこそはべりけれ」とて、

「志もさゆる汀の千鳥うちわびてなく音悲しきあさぼらけかな」とことばのやうに聞え給ふ。つれなき人の御けはひにもかよひて、思ひよそへらるれど、いらへにくゝて、辨してぞ聞え給ふ。

「あかつきの霜うちはらひなく千鳥物思ふ人のこゝろをやしる」。似つかはしからぬ御かはりなれどゆゑなからず聞えなす。かやうのはかなしごとものつゝましげなるものから、なつかしうかひあるさまに取りなし給ふものを、今はとて別れなばいかなる心地せむと思ひ惑ひ給ふ。宮の夢に見え給ひけむさまおぼし合するに、かう心苦しき御有様どもをあまがけりてもいかに見給ふらむと推しはかられて、おはしまし、御寺にも御誦經せさせ給ふ。所々に御いのりの使出したてさせ給ふ。公にも私にも、御暇のよし申し給ひて、祭、祓よろづにいたらぬことなく給へど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ何のまるしも見えず。みづからもたひらかにあらむと佛をも念じ給はゞこそあらめ、猶かゝるついでにいかでうせなむ、この君のかくそひゐて残なくなりぬるを、今はもてはなれむかたなし、さりとてかうおろかならず見ゆめる心ばへの、見おとりして、我も人も見えむが、心安からずうかるべきこと、もし命まひてとまらば、病にことつけてかたちをもかへてむ、さてのみこそ長き心をも

かたみに見はつべきわざなれと思ひまみ給ひて、とあるにてもかゝるにても、いかでこの思ふこととしてむとおぼすを、さまでさかしき事はえうち出で給はで中の君に「心地のいよいよたのもしげなくおぼゆるを、いむことなむいと志るしありて、命のぶる事と聞きしを、さやうに阿閼梨にのたまへ」と聞え給へば、皆泣きさわざて、いとあるまじき御ことなり、かくばかりおぼし惑ふめる中納言殿もいかゞあへなきやうに思ひ聞え給はむと似げなき事に思ひて、たのもし人にも申しつがねば、口惜しうおぼす。かく籠り居給へれば、聞きつぎつゝ御とぶらひにふりはへ物し給ふ人もあり。おろかにおぼされぬこと、見奉れば、殿人志たしきけいしなどは、おのちのよろづの御いのりをせさせ歎きさこゆ。とよのあかりは今日ぞかしと京思ひやり給ふ。風いたう吹きて雪の降るさまあわたゞしう荒れ惑ふ。みやこにはいとかししもあらずかすと、人やりならず心ぼそうて、疎くて止みぬべきにやと思ふちぎりはつらけれど、恨むべうもあらず。なつかしうらうたげなる御もてなしを、唯まばしにても、例になして思ひつる事ども語らはゞやと思ひ續けてながめ給ふ。光もなく暮れはてぬ。

「かさくもり日かげも見えぬ奥山に心をくらすころにもあるかな。たゞかくておぼすをたのみに皆思ひ聞えたり。例の近き方に居給へるに、御几帳などを風のあらはに吹きなせば、中の君奥に入り給ふ。見苦しげなる人々も、かゞやさかくれぬる程に、いと近うよりて、「いかゞおぼさる」。心地に残すことなく念じ開ゆるかひなく、御聲をだに聞かずなりにたればいとこそ侘しけれ。おくらかし給はゞいみじうつらからむ」とことなく聞え給ふ。

物おぼえずなりにたるさまなれど、顔をばいとよくかくし給へり。「よろしきひまあらば、聞えまほしき事も侍れど、たゞ消え入るやうにのみなりゆくは口惜しきわざにこそ」といとはれと思ひ給へるけしきなるに、いよいよせきとどめ難くて、ゆゑしうかく心ほそげに思ふとは見えじとつゝみ給へど、聲もをしまれず。いかなるちぎりにて限なく思ひ聞えながらつらき事多くて別れ奉るべきにか、少し憂きさまをだに見せ給はむ思ひさますふしにもせむとまもれど、いよいよあはれげにあたらしくをかしき御有様のみ見ゆ。かひななどともと細うなりてかげのやうに弱げなるものから、色あひ變らず白う美しくしげになよなよとして、白き御ぞどものなよびかななるに、ふすまを押しやりて、中に身もなきひなをふせたらむ心地して、御ぐしはいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたるきはのつやつやとめてたうをかしげなるも、いかになり給ひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが惜しき事たぐひなし。こゝら久しくなやみてひきもつくろはぬけはひの、心とけず恥しげに、限なうもてなしさまよふ人にもおほうまさりてこまかに見るまゝに、たましひもまづまらむ方なし。「つひにうち捨て給ひては世にまばしもとまるべきにもあらず。命若しかぎりありてとまるべうとも深き山にさすらへなむとす。唯いと心苦しうて、とまり給はむ御事をなむ思ひ聞ゆる」と、いらへさせ奉らむとてかの御事をかけ給へば、顔かくし給ふ御袖を少し引きなほして「かくはかなかりけるものを、思ひぐまなきやうにおぼされたりつるもかひなければ、このとまり給はむ人を、同じ事と思ひ聞え給へとほのめかし

聞えしに、違へ給はざらましかば、うしろ安からましとこれのみなむうらめしきふしにて、  
とまりぬべくおぼえ侍る」とのたまへば、「かくいみじう物思ふべき身にやありけむ。いかに  
もいかにもことさまに、この世を思ひかゝづらふ方の侍らざりつれば、御おもむけに隨ひ聞  
えずなりにし。今なむくやしう心苦しうもおぼゆる。されども後めたくな思ひ聞え給ひそ  
などこしらへて、いと苦しげにまたまへば、修法の阿闍梨どもめし入れさせ、さまさまにげ  
んあるかぎりして加持參らせ給ふ。我も佛を念せさせ給ふことかぎりなし。世の中を殊更に  
厭ひ離れねど、すゝめ給ふ佛などのいとかくいみじきものは思はせ給ふにやあらむ。見るま  
ゝに物の枯れ行くやうにて消えはて給ひぬるはいみじきわざかな。引きとゞむべき方なく、  
あしずりもまづべく、人のかたくなしと見むこともおぼえず、かぎりを見奉り給ひて、中の  
君の後れじと思ひ惑ひ給へるさまもことわりなり。あるにもあらず見え給ふを、例のさかし  
き女ばら、今はいとゆゝしきことゝ引きさけ奉る。中納言の君は、さりともいかにかゝる事  
あらじ、夢かとおぼして、おほとなぶらを近うかゝげて見奉り給ふに、隠し給ふ顔も、唯寢給  
へるやうにて變り給へる所もなくうつくしげにてうち臥し給へるを、かくながらむかしか  
らのやうにても見るわざならましかばと、思ひ惑はる。今はのことゞもする、御ぐしをかき  
やるに、さとうちにほひたる、たゞありしながらのほひに、なつかしうかうばしきもあり  
がたう、何事にてこの人を少しもなのめなりしと思ひさまさむ、誠に世の中を思ひ捨てはつ  
るまゐるべならば、恐しげにうきことの悲しさも、さめぬべきふしをだに見つけさせ給へと佛

を念じ給へど、いとゞ思ひのどめむ方なくのみあれば、いふかひなくて、ひたぶるに煙にだ  
になしはてゝむとおもほして、とかく例の作法どもするぞあさましかりける。空を歩むやう  
にたゞよひつゝ、限のありさまさへはかなげにて、煙も多くむすぼれ給はずなりぬるもあ  
へなしとあきれてかへり給ひぬ。御いみに籠れる人かず多くて、心ぼそさは少し紛れぬべけ  
れど、中の君は人の見思ふらむことも恥しき身の心うさを思ひ沈み給ひて、又なき人に見え  
給ふ。宮よりも御とぶらひいと繁く奉れ給ふ。思はずにつらしと思ひ聞え給へりしけしきも  
おぼしなほらで止みぬるをおぼすに、いと愛き人の御ゆかりなり。中納言、かく世のいと心  
愛く覺ゆるついでにほい遂げむとおぼさるれど、三條の宮のおぼさむ事にはゞかり、この君  
の御事の心苦しさに思ひみだれて、かののたまひしやうにて、かたみにも見るべかりける  
ものを、またの心は身を分け給へりとも、うつろふべくはおぼえざりしを、かう物思はせ奉  
るよりは唯うち語らひて、盡させぬなくさめにも見奉り通はましものをなどおぼす。かりそ  
めに京にも出て給はず、かき絶え慰む方なくて籠りおはするを、世の人もおろかならず思ひ  
給へることゝ見聞きて、うちよりはじめ奉りて、御とぶらひ多かり。はかなくて日ごろは過  
ぎ行く。七日々々の事どもいとたふとくせさせ給ひつゝ、おろかならずけうじ給へど、かぎ  
りあれば、御ぞの色のかはらぬを、かの御方の心よせわきたりし人々の、いとくろう着かへ  
たるをほの見給ふも、

「くれなるにおつる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり」。ゆるし色のこぼりと

けぬると見ゆるを、いとどぬらしそへつゝながめ給ふさま、いとなまめかしう清げなり。人々のぞきつゝ見奉りて、「いふかひなき御事をばさるものにて、この殿のかく見習ひ奉りて、今はとよそに思ひ聞えむこそあたらしう口惜しけれ。思の外なる御すくせにもおはしけるかな。かく深き御心の程を、かたかたに背かせ給へるよ」と泣きあへり。「この御方には、昔の御かたみに今は何事も聞え承らむとなむ思ひ給ふる。うとうとしくおぼし隔つな」と聞え給へど、萬の事うき身なりけりと物のみつゝましくて、まだ對面して物など聞え給はず。この君はけざやかなる方に今少しこめき、け高くおはするものから、なつかしうにほひある心ざまだ劣り給へりけると、事にふれておぼゆ。雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめくらしして、世の人のすさまじきことにいふなる、まはすの月夜の曇りなくさしいでたるを、すだれ卷きあげて見給へば、向ひの寺の鐘の聲、枕をそばだて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

「おくれじと空ゆく月をまたふかなつひにすむべきこの世ならねば」。風のいとほげしければ葎おろさせ給ふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月かげにいとちもしろし。京の家のかぎりなくとみかくも、えかうはあらぬはやとおぼゆ。僅にいき出で、ものし給はまししかば諸共に聞えましと思ひつゞくるぞ、胸よりあまる心ちする。

「戀ひわびてまぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡をけなまし」。なかばなる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身もなげむとおぼすぞ心ぎたなきひじり心なりける。人々近う呼びい

て給ひて御物語などせさせ給ふけはひなどのいとあらまほしう、のどやかに心深きを、見奉る人々、若きは心にまめてめてたしと思ひ奉る。老いたるは口惜しういみじき事をいとゞ思ふ。御心地の重くならせ給ひしことも、唯この宮の御事を思はずに見奉り給ひて、人わらへにいみじとおぼすめりしを、さすがにかの御かたには、かく思ふとまられ奉らじと唯御心ひとつに世を恨み給ふめりしほどに、はかなき御くだものをも聞しめしいれず、たゞよわりになむ弱らせ給ふめりし。うはべにはなにはばかりことごとしく物深げにももてなさせ給はて、またの御心のかぎりなく、何事もおぼすめりしに、故宮の御いましめにさへ違ひぬること、あいなう人の御うへをおぼし惱みそめしなり」と聞えて、折々にのたまひしことなど語りいでつゝ、誰も誰も泣き惑ふこと盡せず。我が心から、あぢきなきことを思はせ奉りけむことゝとりかへさまほしく、なべての世もつらさに、念誦をいとあはれにま給ひて、まどろむ程なくあかし給ふに、まだ夜深き程の雲のけはひいと寒げなるに、人々聲あまたして、馬のおとさきこゆ。何人かは、かゝるさ夜中にゆきをわくべきと、大とこたちも驚き思へるに、宮かりの御ぞにいたうやつれて、ぬれぬれ入り給ふなりけり。うちたゞき給ふさま、さなゝりと聞き給ひて、中納言はかくろへたる方に入り給ひて忍びておはす。御いみは日數残りたりけれど、心もとなくおぼしわびて、夜一夜ゆきに惑はされてぞおはしましける。日ごろのつらさも紛れぬべき程なれど對面ま給ふべき心ちもせず。おぼし歎きたるさまの恥しかりしを、やがて見なほされ給はずなりにしも、今より後の御心あらたまらむはかひなかるべく思



ひまみて物し給へれば、誰も誰もいみじうことわりを聞きまらせつゝ、物ごしにてぞ日ごろのをこたり盡せずのたまふをつくつくと聞き居給へる。れこもいとあるがなきかにて、後れ給ふまじきにやと聞ゆる御けはひの心苦しさを、後めたういみじと宮もおぼしたり。今日は御身を捨てゝとまり給ひぬ。物ごしならてといたくわび給へど、「今少し物おぼゆる程にて侍らば」とのみ聞え給ひてつれなきを、中納言も氣色聞き給ひて、さるべき人めし出て、「御有様にたがひて心淺きやうなる御もてなしの、昔も今も心うかりける月ごろの罪は、さも思ひ聞え給ひぬべきことなれど、にくからぬさまにこそかうがへ奉り給はめ。かやうなる事まだ見知らぬ御心にて苦しうおぼすらむ」など、忍びてさかしがり給へば、いよいよこの君の御心も恥しうて、え聞え給はず。「あさましう心憂くおはしけり。聞えしさまをもむげに忘れ給ひけること」ともろかならず歎きくらし給へり。よるの氣色いと烈しき風の音に、人やりならず歎きふし給へるもさすがにて、例の物へだてゝ聞え給ふ。ちどのやしろをひきかけて、行くさま長きことを契り聞え給ふも、いかでかくくちなれ給ひけむと心憂けれど、よそにてつれなき程の疎ましさを、あはれに人の心もたをやぎぬべき御さまを、ひとかたにもえうとみはつまじかりけりと、唯つくづくと聞き給ひて、

「きしかたを思ひいづるもはかなきを行く末かけてなにたのむらむ」とほのかにのたまふ。なかなかいぶせう心もとなし。

「行く末をみじかきものと思ひなばめのまへにだにそむかざらなむ。何事もいとかうみ

るほどなき世を、罪深くなまほしなむ」とよろづにこしらへ給へど、「心地もなやましくなむ」とて、入り給ひにけり。人の見るらむもいと人わろくて歎きあかし給ふ。恨みむもことわりなるほどなれど、あまりに人にくもつらき涙のおつれば、ましていかに思ひつらむと、さまざまあはれにおぼしき。中納言のあるじがたに住みなれて、人々安らかによびつかひ人もあまたして、物参らせなど志給ふを、あはれにもをかしうも御覽す。いといたう瘁せ青みほれば、しきまで物を思ひたれば、心苦しと見給ひて、まめやかにとよらひ給ふ。ありしさまなどかひなきことなれどこの宮にこそは聞えめと思へど、うち出てむにつけてもいと心よわくかたくなしく見え奉らむにはどかりてことずくなり。ねをのみ泣きて日數経にければ顔がはりのまたるも、見苦しはあらでいよいよ物清げになまめいたるを、女ならば必ず心うつりなむと、おのがけしからぬ御心ならひにおぼしよるもなまうしろめたかりければ、いかで人のそしりをもうらみをもはぶきて、京にうつろはしてむとおぼす。かくつれなきものからうちわたりにも聞し召して、いとあしかるべきにおぼしわびて、今日のかへらせ給ひぬ。おろかならず言の葉をつくし給へど、つれなきは苦しきものをとひとふしを思しおらせまほしくて心とけずなりぬ。年のくれがたにはかゝらぬ所だに、空の氣色例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪にうち眺めつゝ、明し暮し給ふ心地、つさせず夢のやうなり。御わざもいかめしうせさせ給ふ。宮よりも御誦經などちたきまでとよらひ聞え給ふ。かくてのみやは新しき年さへなげきすぐさむ、こゝかしてにも覺束なくて、閉ぢ籠り給へる

ことを聞え給へば、今はとてかへり給はむ心ちもたとへむかたなし。かくおはしならひて、人まげかりつる名残なくならむを、思ひわぶる人々、いみじかりし折のさしあたりて悲しかりしさわぎよりもうちまづまりていみじくおぼゆ。時々をりふしをかしやかなる程に聞えかはし給ひし年ごろよりも、かくのどやかにて過ぐし給へる日ごろの御ありさまはひのなつかしく、なさけぶかうはかなきことにもまめなるかたにも、思ひやり多かる御心ばへを、今は限に見奉りさしつること、おぼれあへり。かの宮よりは、「猶かう参りくることもいと難きを思ひわびて、近うわたい奉るべきことをなむ、たばかり出てたる」と聞え給へり。ささいの宮聞しめしつけて、中納言もかくおろかならず思ひほれてゐたなるは、げにおしなべて思ひがたうこそは誰もおぼさるらめと心苦しがり給ひて、二條院の西の對にわたい給ひて、時々も通ひ給ふべく忍びて聞え給ひければ、女一宮の御方にことよせて、おぼしなるにやとおぼしながら、覺束なかるまじきは嬉しくてのたまふなりけり。さななりと中納言も聞え給うて、三條の宮つくりはて、渡い奉らむことを思ひしものを、かの御かはりになずらへても、見るべかりけるをなど、ひきかへし心ほそし。宮のおぼしよるめりしすぢはいと似げなきことに思ひはなれて、大かたの御うしろみは我ならては又誰かはとおぼすや。

早 蕨

やぶしわかねば、春の光を見給ふにつけても、いかでかくながらへにけむ月日ならむと夢のやうにのみおぼえ給ふ。行きかふ時々随ひ花鳥の色をもねをも同じ心におきふし見つゝ、はかなきことをももとすゑをとりていひかはし、心ほそき世のうさもつらさもうち語らひ合せ聞えしにこそ慰む方もありしか、をかきことあはれなるふしをも、聞き知る人もなきまゝに、よろづかきくらし、心ひとつを碎きて、宮のちはしまさずなりにし悲しさよりも、やうちまさりて戀しく侘しきに、いかにせむと明け暮るゝも知らず惑はれ給へど、世にとまらるべきほどは限あるわざなりければ、まなれぬもあさまし。阿闍梨のもとより、「年あらたまりては何事かおはしますらむ。御いのりはたゆみなく仕うまつり侍り。今はひと所の御ことをなむやすからず念じ聞えさする」など聞えてわらびつくづくしをかきこに入れて、「これはわらはべの供養じて侍る初穂なり」とて奉れり。手はいとあしうて、歌はわざとがましくひき放ちてぞ書きたる。

「君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬはつわらびなり。御前によみ申さしめ給へ」とあり。大事と思ひまはして詠み出しつらむとおぼせば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりにさしもおぼされぬなめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましげに書き盡し給

へる人の御文よりは、こよなくめとまりて涙もこぼるれば、返事かゝせ給ふ。

「この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰のさわらび」。使に祿とらせさせ給ふ。いと盛にほひ多くおはする人のさまさまの御物思ひに少しうちおも痔せ給へるしも、いとあてになまめかしき氣色まさりてむかし人にもおぼえ給へり。並び給へりし折はとりどりにて更に似給へりとも見えざりしを、うち忘れてはふとそれかとおぼゆるまで通ひ給へるを、中納言殿の、からをだに留めて見奉るものならましかばと、朝夕に戀ひ聞え給ふめるに、同じくは見え奉り給ふ御すくせならざりけむよと、見奉る人々は口惜しがる。かの御あたりの人の通ひくるたよりに、御有様は絶えず聞きかはし給ひけり。盡せずおぼれ給ひて新しき年ともいはず、いやめになむなり給へると聞き給ひてもげにうちつけの心淺さは物し給はざりけりと、いとゞ今ぞ哀も深く思ひ知らるゝ。宮はおはしますことのいと所せくありがたければ、京にわたし聞えむとおぼし立ちにたり。内宴など物騒しき頃すくして、中納言の君、心に餘ることをも又誰にかは語らはむとおぼし侘びて兵部卿の宮の御方に参り給へり。まめやかなる夕暮なれば宮うちながめ給ひて端近くぞおはしましける。箒の御琴掻きならしつゝ、例の御心よせなる梅の香をめでおはする。まづえを押し折りて参り給へるにほひのいとえんにめでたきを、折をかしうおぼして、

「折る人の心にかよふ花なれやいろには出でずまたにほへる」とのたまへば、  
「見る人にかごとよせける花のえを心してこそ折るべかりけれ。わづらはしく」と戯ぶれ

交し給へり。いとよき御あはひなり。こまやかなる御物語どもになりては、かの山里の御こととをぞまづはいかにと宮は聞え給ふ。中納言も過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし、折々につけてあはれにもをかしうも泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞え出て給ふに、ましてさばかり色めかしう涙もろなる御くせは、人の御上にてさへ袖もまぼるばかりになりて、かひがひしくぞあひまらひ聞え給ふめる。空の氣色もはた、げにぞあはれ知りかほに霞みわたれる。よるになりて烈しう吹き出づる風の氣色まだ冬めきていと寒げに、おほとなぶらも消えつゝ、闇はあやなきたとたどしさなれど、かたみにきゝさし給ふべくもあらず、盡せぬ御物語を、えはるけやり給はて、夜もいたう更けぬ。世にためしありがたかりける中のむつびを、いでさりともしとのみはあらざりけむと残りありげに問ひなし給ふぞわりなき御心ならひなめるかし。さりながらも物に心え給ひて、歎かしき心のうちもあきらむばかり、かつはなぐさめ、又あはれをもさまし、さまさまに語らひ給ふ御さまのをかしきにすかされ奉りて、げに心に餘るまで思ひむすぼゝることども、少しづつ語り聞え給ふぞこよなく胸のひまあく心ちし給ふ。宮もかの人近く渡し聞えてむとする程の事ども語らひ聞え給ふを、いと嬉しきことにも侍るかな。あいなくみづからのあやまちとなむ思ひ給へらるゝ。飽かぬむかしの名残をまた尋ねべきかたも侍らねば、大方には何事につけても心よせ聞ゆべき人となむ思ひ給ふるを、もしびんなくやおぼし召さるべき」とて、かのこと人とな思ひわきそと譲り給ひし心おきてをも、少しは語り聞え給へど、い

はせの森のよぶこ鳥めいたりし世のことは残したりけり。心のうちにはかく慰め難きかたみにも、げにさてこそかやうにあつかひ聞ゆべかりけれと悔しき事やうやうまさり行けど、今はかひなきものゆゑ、常にかうのみ思はゞあるまじき心もこそ出でくれ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむと思ひはなる。さてもおはしまさむにつけても、誠に思ひうしろみ聞えむかたは又誰かはとおぼせば、御わたりの事ども心まうけさせ給ふ。かしこにもよきわか人わらはなどもとめて人々は心ゆきがほに急ぎ思ひたれど、今はとてこのふしみをあらしはてむもいみじう心ぼそければ救かれ給ふ事盡せぬを、さりとても又せめて心ごはく、堪へ籠りてもたけかるまじく、淺からぬ中の契も絶えはてぬべき御住ひをいかにおぼしえ給ふぞとのみ恨み聞え給ふも、少しはことわりなれば、いかゞすべからむと思ひ亂れ給へり。ささらぎのついたちごろとあれば、程近くなるまゝに花の木どものけしきばむも残りゆかしく、峯の霞のたつを見すてむこともおのがとよにてだにあらぬ旅寝にて、いかにほしたなく人わらはれることもこそなど、萬につましく心ひとつに思ひ明し暮し給ふ。御ぶくもかぎりあることなれば脱ぎすて給ふに、みとぎも淺き心ちぞする。おやひと所は見奉らざりしかば戀しきこともおもほえず、その御かはりにもこの度の衣を深く染めむと心にはおぼしのたまへど、さすがにさるべきゆゑもなきわざなれば他かず悲しきことかぎりなし。中納言殿より御車ごぜんの人々はかせなど、奉れ給へり。

「はかなしやかすみの衣たちしまに花のひもとくをりも來にけり」。げにいろいろいと清

らにて奉れ給へり。御わたりの程のかづけものどもなど、ことごとしからぬものから品々こまやかにおぼしやりつゝいとおほかり。折につけては忘れぬさまなる御心よせのありがたく、「はらからなども、えいとかうまてはちはせぬわざぞ」など人々は聞えしらす。あざやかならぬふる人どもの心には、かゝる方を心にしめて聞ゆ。若き人々は「時々も見奉りならひて、今はとことざまになり給はむをさうさうしくいかに戀しく覺えさせ給はむ」と聞えあへり。みづからは渡り給はむこと、明日とてのまだつとめておはしたり。例のまらうどぬの方におはするにつけても、今はやうやう物馴れて、我こそは人よりさきにかうやうにも思ひをめしかなど、ありしさまのたまひし心ばへを思ひ出でつゝ、さすがにかけはなれ、殊の外になどははしたなめ給はざりしを、我が心もてあやしうも隔たりにしかなと胸いたく思ひつゞけられ給ふ。かいまみせしさうじの穴も思ひ出でらるればよりて見給へど、このうちをばおろし籠めたればいとかひなし。うちにも人々思ひ出で聞えつゝうちひそみあへり。中の君はまして催さるゝ御涙の川にあすのわたりもおぼえ給はず、ほれぼれしげにて眺め臥し給へるに「月頃のつもりもそこはかとなければいぶせく思ひ給へらるゝを、かた端もあきらめ聞えさせて慰め侍らばや。例のはしたなく、なさし放たせ給ひそ。いとゞあらぬ世の心地し侍り」と聞え給へれば、「はしたなしと思はれ奉らむとしも思はねど、いさや心ちも例のやうにもおぼえず、かき亂りつゝいとゞはかばかしからぬひがごとくもやとつゝましようてなむ」と心苦しげにおぼいたれど、「いとほし」などこれかれ聞えて、中のさうじの口にて對面し給



へり。いと心はづかしげになまめきて、又この度はねびまさり給ひにけりと目も驚くまでにほひ多く、人にも似ぬ用意などあなめてたの人やとのみ見え給へるを、姫君は面影さらぬ人の御事をさへ思ひ出て聞え給ふに、いとあはれと見奉り給ふ。「つきせぬ御物語なども、今日はこのいみすべくや」などいひさしつゝ、「渡らせ給ふべき所近く、この頃過ぐしてうつろひ侍るべければ、夜中曉とつきづきしき人のいひ侍るめる、何事の折にも疎からずおぼしの給はせば、世に侍らむかぎりは聞えさせうけ給はりて、すぐさまほしうなむ侍るを、いかゞはおぼし召すらむ。人の心さまざまに侍る世なればあいなくやなど、一方にもえこそ思ひ侍らね」と聞え給へば、「宿をばかれじと思ふ心深く侍るを、近くなどのたまはするにつけても、よろづに亂れ侍りて聞えさせやるべき方もなくなむ」と、所々いひけちて、いみじくものあはれと思ひ給へるけはひなど、いとようおぼえ給へるを、心からよそのものに見なしつるといとくやしく思ひ給へれど、かひなければそのよの事かけてもいはず、忘れにけるにやと見ゆるまでけざやかにもてなし給へり。御まへ近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見すぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば、まして春やむかしのと心を惑はし給ふどちの御物語にをりあはれなりかし。風のさと吹きいるゝに、花の香もまらうどの御にほひも、橘ならねどむかし思ひ出でらるゝつまなり。つれづれのまきはしにも世のうきなくさめにも心といめてあそび給ひしものをなど心にあまり給へば、

「見る人もあらしにまよふ山里にむかしおぼゆる花の香をする」。いふともなくほのかに

てたえだえ聞えたるを、懐しげにうちずしなして、

「袖ふれし梅はかはらぬにほひにてねごめうつろふ宿やことなる」。堪へぬ涙をさまよくのごひかくしてこと多くもあらず「又も猶かやうにてなむ何事も聞えさせよるべき」など聞え置きて立ち給ひぬ。御わたりにあるべき事ども人々にのたまひおく。このやどもりに、かの髭がちの殿居人などはさぶらふべければ、このわたりの近きみさうどもなどに、その事どもものたまひあづけなどまめやかなる事どもをさへ定め置き給ふ。辨ぞかやうの御供にも思ひかけず、長き命いとつらくおぼえ侍るを、人もゆゝしく思ふべければ、今は世にあるものとも人に知られじとてかたちも變へてけるを、強ひて召し出で、いとあはれと見給ふ。例の昔物語などせさせ給ひて、「こゝには猶時々は参り來べきを、いとたづきなく心ぼそかるべきを、かくて物し給はむは、いと哀に嬉しかるべきことになむ」などえもいひやらす泣き給ふ。「いとふにはへてのび侍る命のつらく、又いかにせよとてうち捨てさせ給ひけむとすらめしくなべての世を思ひ給へまづむに罪もいかに深く侍らむ」と思ひける事どもをうれへかけ聞ゆるも、かたくなしけれど、いとよく言ひ慰め給ふ。いたくねびにたれど昔清げなりける名残をそぎ捨てたれば、額のほどさま變れるに少し若くなりて、さる方にみやびかなり。思ひわびてはなどかゝるさまにもなし奉らざりけむ、それにのぶるやうもやあらまし、さてもいかに心深く語らひ聞えてあらましなど一方ならずおぼえ給ふに、この人さへうらやましければ、かくろへたる几帳を少し引きやりてこまやかにぞ語らひ給ひける。むげに

思ひぼけたるさまながら、物うちいひたる氣色用意口をしからずゆるゑありける人の名残と見えたり。

「さきに立つ涙の川に身をなげば人におくれぬいのちならまし」とうちひとみ聞ゆ。「それもと罪深かなることこそ。かの岸にいたること、などかさしもあるまじき事にて深き底に沈みすぐさむもあいなし。すべて空しく思ひとるべき世になむ」などのたまふ。

「身を投げむ涙の川にまづみても戀しきせせに忘れしもせじ」。いかならむ世に少しも思ひ慰むることありなむと、はてもなき心ちし給ふ。かへらむ方もなく眺められて日も暮れにけれど、すゞろに旅寝せむも人の咎むることやとあいなければかへり給ひぬ。おもほしのたまへるさまをかたりて、辨はいと慰め難くくれ惑ひたり。皆人は心ゆきたる氣色にて物ぬひいとなみつゝ、老いゆがめるかたちも老らずつろひさまよふに、いよいよやつして、

「人は皆急ぎたつめる袖のうらにひとりもしほをたるゝあまかな」とうれへ聞ゆれば、  
「まほたるゝあまの衣にことなれやうきたる浪にぬるゝわが袖。世にすみつかむこともいとありがたかるべきわざとおほゆれば、さまに隨ひてこゝをばあれはてじとなむおもふを、さらば對面もありぬべけれど、暫しのほども心ほそくて立ちとまり給ふを見おくに、いと心もゆかずなむ。かゝるかたちなる人も必ずひたぶるにしも堪へ籠らぬわざなめるを、猶世のつねに思ひなして時々も見え給へ」など、いとなつかしう語らひ給ふ。昔の人のもてつかひ給ひしさるべき御調度どもなどは、皆この人にとゞめ置き給ひて、「かく人より深く

思ひまづみ給へるを見れば、さきの世もとりわきたる契もやものし給ひけむと思ふさへ、むつましくあはれになむ」とのたまふに、いよいよわらはべの戀ひて泣くやうに心をさめむ方なくおぼれ居たり。皆かきはらひよろづとりしためて御車ども寄せて、御ぜんの人々四位五位いとおほかり。御みづからもいみじうおはしまさまほしけれど、ことごとしくなりてなかなかあしかるべければ、唯忍びたるさまにもてなして心もとなくおぼさる。中納言殿よりも、ご前の人々數もほく奉れ給へり。大かたの事をこそ宮よりはおぼし置きつめれ。細やかなるうちうちの御あつかひは唯この殿より思ひよらぬことなくとぶらひ聞え給ふ。日暮れぬべしと、内にもとにも催し聞ゆるに心あわたしう、いづちならむと思ふにもいとはかなく悲しとのみおぼえ給ふに、御車に乗る。たいふの君といふ人のきこゆ。

「ありふればうれしきせにも逢ひけるを身をうぢ河になげてましかば」。うちゑみたるを、辨の尼の心ばへにこよなうもあるかなと心づきなう見給ふ。今ひとり、

「過ぎにしが戀しきことも忘れねど今日はたまづもゆくこゝろかな」。いづれも年経たる人々にて皆かの御かたをば心よせまほしく聞えためりしを、今はかく思ひ改めてこといみするも心うの世やおぼえ給へば物もいはれ給はず、道のほどはるけくけはしき山路のありさまを見給ふにぞ、つらさにのみ思ひなされし人の御中のかよひを、ことわりのたえまなりけりと少しおぼし知られける。七日の月のさやかにさし出でたる影をかしく霞みたるを見給ひつゝ、いと遠きにならず苦しければうちながめられて、

「ながむれば山よりいで、行く月も世にすみわびて山にこそ入れ」。さまかはりてつひに  
いかならむとのみ危く行く末うしろめたきに、年頃何事をか思ひけむとぞとりかへさまほ  
しきや。宵うち過ぎてぞおはしつきたる。みもまらぬさまに目も輝くこゝちする殿づくり  
の、三つば四つばなる中にひき入れて、みやいつしかと待ちおはしましければ、御車のもと  
に自ら寄らせ給ひておろし奉り給ふ。御志つらひなどあるべきかぎりして、女房のつぼねつ  
ぼねまで御心とめさせ給ひけるほどまろく見えて、いとあらまほしげなり。いかばかりの  
ことにかと見え給へる御有様の、俄にかく定まり給へば、おぼろげならずおぼさるゝことな  
めりと、世の人も心にく、思ひ驚きけり。中納言は三條の宮に、この廿よ日のほどに渡り給  
はむとてこの頃は日々におはしつゝ見給ふに、この院近きほどなれば、けはひも聞かむとて  
夜更くるまでおはしけるに、奉り給へるご前の人々かへり参りて有様など語り聞ゆ。いみじ  
う御心に入りてもてなし給ふなるを聞き給ふにも、かつは嬉しきものから、さすがに我が心  
ながらをこがましく胸うち潰れて「物にもがなや」と返す返すひとりごたれて、

「まなてるやにほのみづらみに漕ぐ船のまほならねどもあひ見しものを」とぞいひくた  
さまほしき。左のおほ殿は、六の君を宮に奉り給はむことこの月にとおぼし定めたりける  
に、かく思ひの外の人をこの程よりさきにとおぼし顔にかしづきすゑ給ひて離れおはすれ  
ば、いと物しげにおぼしたりと聞き給ふもいとほしければ、御文は時々奉り給ふ。おん裳着  
のこと、世に響きて急ぎ給へるをのべ給はむも人わらへなるべければ、廿餘日に着せ奉り給

ふ。同じゆかりに珍しげなくともこの中納言をこそ人に譲らむが口惜しきに、さもやなして  
まし、年頃人志れぬものに思ひけむ人もなくなして物心ほそくながめ居給ふなるをなど  
おぼしよりて、さるべき人して氣色とらせ給ひけれど、世のはかなさを目に近く見しにいと  
心愛く身もゆゝしくおぼゆれば、いかにもいかにもさやうの有様は物うくなむとすさまじ  
げなるよし聞き給ひて、いかてかこの君さへおふなおふなこと出づることを、物愛くはもて  
なすべきぞと恨み給ひけれど、親しき御中らひながらも、人さまのいと心はづかしげに物し  
給へば、え強ひても聞え動かし給はざりけり。花盛の程二條院の櫻を見やり給ふに、ぬしなき  
宿のとまづ思ひやられ給へば、「心やすくや」などひとりごちあまりて、宮の御許に参り給へ  
り。こゝがちにおはしまし着きていとようすみ馴れ給ひにたれば、めやすのわざやと見奉る  
ものから、例のいかにぞや覺ゆる心のそひたるぞあやしきや。されどじちの御心ばへはいと  
あはれに後やすくぞ思ひ聞え給ひける。何くれと御物語聞えかはし給ひて、夕つかた宮はう  
ちへ参り給はむとて、御車のさうぞくして人々多く参り集まりなどすれば、立ち出て給ひて  
對の御方へ参りたまへり。山里のけはひひきかへて御籠の内心にくゝ住みなして、をかしげ  
なるわらはのすきかげほのみゆるして御せうそこ聞え給へれば、御櫛さし出て、昔の心志  
れる人なるべし、出て来て御返りきこゆ。「朝夕のへだてもあるまじう思ひ給へらるゝほど  
ながら、その事となくて聞えさせむも、なかなかなれしきことがめもやとつゝみ侍る程  
に、世の中變りにたる心ちのみぞし侍るや。おまへの梢も霞へだてゝ見え侍るに、あはれな

る事多くも侍るかな」と聞えて、うち眺めて物し給ふけしき心苦しげなるを、げにおはせましかば、覺束なからず行きかへり、かたみに花の色鳥の聲をも折につけつゝ少し心ゆきてすぐしつべかりける世をなどおぼし出づるにつけては、ひたぶるに堪へ籠り給へりし住ひの心ほそさよりも飽かず悲しう口惜しきことぞいとまさりける。人々も「世の常にうとうとしくなもてなし聞え給ひそ。かぎりなき御心のほどをば、今しもこそ見奉り知らせ給ふさまをも見え奉らせ給ふべけれ」など聞ゆれど、人づてならずふとさし出て聞えむ事の猶つゝましきを、やすらひ給ふ程に、宮出て給はむとて御まかり申しに渡り給へり。いと清らにひき繕ひけさうじ給ひて見るかひある御さまなり。中納言はこなたになりけりと見給ひて、「などかむげにさし放ちては出しす多給へる。御あたりにはあまりあやしと思ふまでうしろやすかりし心よせを、我がためはをこがましきこともやと覺ゆれど、さすがにむげにへだて多からむは罪もこそうれ。近やかにて昔物語もち語らひ給へかし」など聞え給ふものから「さはありともあまり心ゆるびせむも又いかによや。疑はしきまの心にもぞあるや」とうち返しのたまへば、一かたならずわづらはしけれど、我が御心にもあはれ深く思ひまられにし人の御心を、今しもおろかなるべきならねば、かの人も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御かはりとなずらへ聞えて、かう思ひ知りけりと見え奉るふしもあらばやとはおぼせど、さすがにとやくやくと方々にやすからず聞えなし給へば、苦しうおぼされけり。

寄生

その頃藤壺と聞ゆるは故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞えさせし時人よりさきに参り給ひにしかば、むつまじう哀なる方の御思ひはことに物し給ふめれど、そのまゝるじと見ゆるふしもなくて年経給ふに、中宮には宮達さへあまたこゝらおとなび給ふめるに、さやうのとも少なくて唯女宮一所をぞ持ち奉り給へりける。わがいと口惜しう人におされ奉りぬる宿世歎かしく覺ゆるかはりに、この宮をだにいかて行末の心も慰むばかりにて見奉らむとかしづき聞え給ふことおろかならず。御かたちもいとをかしくおはすれば帝もらうたきものに思ひ聞えさせ給へり。女一宮を世にたぐひなきさまにもてかしづき聞えさせ給ふに、おほかたの世のおぼえこそ及ぶべうもあらね、うちうちの御有様はをさをさ劣らず。父おとこの御いきほひいかめしかりし名残いたく衰へねば、殊に心もとなきことなどなくて、侍ふ人々のなりすがたよりはじめたゆみなく時々につけつゝとのへ好みて、今めかしくゆゑゆゑしきさまにもてなし給へり。十四になり給ふ年、御裳着せ奉り給はむとて春よりうちはじめて、ことごとくおぼし急ぎて何事もなべてならぬさまにとおぼしまうく。いにしへより傳はりたりける寶物ども、この折にこそはと捜し出でつゝいみじく營み給ふに、女御夏頃ものゝけに煩ひ給ひていとほかなくうせ給ひぬ。いふかひなく口惜しきことを内



にもおぼし歎く。心ばへなさけなさけしく懐しき所おはしつる御方なれば殿上人ども、「こよなくさうざうしかるべきわざかな」と惜み聞ゆ。大方さるまじききはの女官などまで忍び聞えぬはなし。宮はまして若き御心ちに心ほそく悲しくおぼし入りたるを、聞し召して心苦しう哀に思し召さるれば御ななぬか過ぐるまゝに忍びて参らせ給へり。日々に渡らせ給ひつゝ見奉らせ給ふ。黒き御ぞにやつれておはするさまいとゞらうたげにあてなる氣色まさり給へり。御心ざまもいとよくおとなび給ひて母女御よりも今少しまづやかにおもひかなる所はまさり給へるを、うしろ安くは見奉らせ給へど、誠には御母方とても後見と頼ませ給ふべきをぢなどやうのはかばかしき人もなし。僅に大藏卿すりのかみなどいふは女御にもこと腹なりけり。殊に世の覺えおもりかにもあらずやんごとなからぬ人々をたのもしうにておはせむに、女は心苦しき事多かりぬべきこそいとほしけれなど、御心ひとつなるやうにおぼしあつかふも安からざりけり。お前の菊うつろひはてと盛なる頃空の氣色も哀にうちまぐるゝにも、まづこの御方に渡らせ給ひて昔のことなど聞えさせ給ふに、御いらへなどもおほどかなるものからいはけなからずうち聞えさせ給ふをうつくしく思ひ聞えさせ給ふ。かやうなる御さまを見知りぬべからむ人のもてはやし聞えむもなかはあらざらむ。朱雀院の姫宮を六條院に譲り聞え給ひしをりの定めどもなどおぼし出づるに暫しはいでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなましと聞ゆる事どもありしかど、源中納言の人より異なるありさまにてかく萬を後見奉るにこそ、そのかみの御おぼえ衰へずやんごとなきさまに

てはながらへ給ふめれ、さらずば御心より外なる事ども出でてきておのづから人にかろめられ給ふこともやあらましなどおぼしつゝけて、ともかくも御覽する世にや思ひ定めましとおぼしよるには、やがてその序のまゝにこの中納言より外によろしかるべき人またなかりけり。宮達の御傍にさし並べたらむに何事もめざましくはあらじを、もとより思ふ人もたりとて聞きにくき事などうちますまじうはたあめるを、遂にはさやうの事なくてしもえあらし、さらぬささにさもやほのめかしてましなど折々おぼしめしけり。御基などうたせ給ふ。暮れ行くまゝに時雨をかしき程に花の色も夕ばえしたるを御覽じて、人めして「唯今殿上に誰々か」と問はせ給ふに「中務のみこ、かんづけのみこ、中納言源の朝臣さぶらふ」と奏す。「中納言の朝臣こなたに」と仰せごとありて、参り給へり。げにかく取りわきて召し出づるもかひありて遠く薫れる匂ひより始め人に異なるさま給へり。「今日のまぐれ常より殊に長閑なるを、遊などすさまじき方にていとつれづれなるを、いたづらに日を送るたはぶれにてもこれなむよかるべき」とて碁盤召し出で、御碁のかたきに召しよす。いつもかやうにけ近くならしまつはし給ふにならひたれば、さにこそはと思ふに、「よきのりものはありぬべけれど、かるがるしくはえ渡すまじきを何をかは」などのたまはする御氣色いかゞ見ゆらむ、いとゞ心づかひして侍ひ給ふ。さてうたせ給ふに三番にかずひとつ負けさせ給ひぬ。「ねたきわざかな」とて「まづ今日はこの花一枝ゆるす」とのたまはすれば、御いらへ聞えさせでおりておもしろき枝を折りて参り給へり

「世のつねの垣根にほふ花ならば心のまゝに折りて見ましを」と奏し給へる、用意あさからず見ゆ。

「霜にあへず枯れにし園の菊なれど残の色はあせずもあるかな」とのたまはず。かやうに折々ほのめかさせ給ふ御氣色を人づてならずうけ給はりながら例の心のくせなればいそがしくしも覺えず。いでや本意にもあらずさまたまにいとほしき人々の御ことどもをもよく聞き過ぐしつゝ年經ぬるを今さらにひきりやうのものゝ世にかへり出でむ心ちすべきこと思ふもかつはあやしや。殊更に心を盡す人だにこそあなれとは思ひながら、后腹におはせばしもと覺ゆる心のうちぞあまりおほけなかりける。かゝる事を左大臣殿ほの聞き給ひて、六の君はさりとこの君にこそはまぶまぶなりともまめやかに恨みよらば遂にはえいなびはてじとおぼしつるを、思のほかなる事出できぬべかめりと妬くおぼされければ、兵部卿の宮はた、わざとにはあらねど折々につけつゝをかしきさまに聞え給ふ事絶えざりければ、さばれなほざりの御すきにはありともさるべきにて御心とまるやうもなかなからむ。水もるまじく思ひ定むともなほなほしきさはにくだらむはたいと人わろく飽かぬこゝちすべしなどおぼしなりになり。女ごうしろめたげなる世の末にてみかどだに婿もとめ給ふめる世にましてたゞ人のさかりすぎむもあいなしなどそまらほしげにのたまひて、中宮にもまめやかに恨み申し給ふこと度かさなりければ、きこしめし煩ひて「いとほしくかくおふなふな思ひ心ざして年へたまひぬるをあやにくに遁れ聞え給はむもなさせなきやうならむ。

みこたちは御後見からことともかくもあなれ、うへの御世も末になり行くとのみおぼし  
たまふめるをたゞ人こそひとかたにさだまりぬれば又心をわけむこともかたげなめれ。そ  
れだにかのおとゞのいとまめだちながらこなたかなたうらやみなくもてなしてものし給は  
ずやはある。ましてこれは思ひおきて聞ゆることもかなはゞあまたも侍はむになどかあら  
む」など例ならずことつゞけてあるべかしう聞えさせ給ふに、我が御心にももとよりもては  
なれてはたおぼさぬことなればあながちにはなどてかはあるまじきさまにも聞えさせ給は  
む、唯いとことうるはしげなるあたりにとりこめられて心安くならひ給へるありさまの所  
せからむことをなまぐるしくおぼすに物うきなれど、げにこのおとゞにあまりゑんぜられ  
てむもあいなからむなどやうやうおぼしよわりになるべし。あだなる御心なればかの  
あぜちの大納言の紅梅の御方をもなほおぼしたえず、花紅葉につけてものたまひ渡りつゝ、  
いづれをもゆかしうはおぼされけり。されどその年は變りぬ。女二宮も御ぶくはてぬればい  
とゞ何事にかは憚り給はむ。「さも聞え出でばとおぼし召したる御けしきになむ」と告げ聞  
ゆる人々もあるを、あまりまらず顔ならむもひがひがしうなめげなりなどおぼしおこして、  
さるべきたよりしてけしきばみ聞え給ふをりもあるに、はしたなきやうはなどてかは  
あらむ。その程におぼし定めたなりとつてにも聞きみづから御氣色をも見れど、心のうちに  
は猶飽かて過ぎ給ひにし人の悲しさのみ忘らるべき世なくおぼゆれば、うたてかく契深く  
物し給ひける人のなどてかはさすがにうとくてはすぎにけむと心得難く思ひ出でらる。口惜

しきまななりともかの御ありさまに少しも覺えたらむ人は心もとまりなむかし。昔ありけむ香の烟につけてだに今ひとたび見奉るものにもがなとのみ覺えて、やんごとなき方さまにいつしかなどは急ぐ心もなし。左のおほい殿には急ぎたちて八月ばかりにと聞え給ひてけり。二條院の對の御方には聞き給ふに、さればよ、いかでかは數ならぬ有様なめれば、必ず人笑へに憂き事出てこむものぞとは思ふおもふ過しつる世ぞかし、あだなる御心と聞き渡りしをたのもしげなく思ひながら、めに近くては殊につらげなることも見えず哀に深き契をのみし給へるを、俄にかはり給はむほどいかゞはやすき心地はすべからむ、たゞ人のなからひなどのやうにいとしも名残なくなどはあらずとも、いかにやすげなきこと多からむ、猶いと憂き身なめれば遂には山住みに歸るべきなめりなどおぼすにも、やがて跡絶えなましよりは山がつの待ち思はむも人笑へなりかし、かへすがへすも故宮のたまひ置きしことにたがひて草のものとおかれにける心かるさを恥しうもつらくも思ひ知られ給ふ。故姫君のいとまどけなくものはかなきさまにのみ何事をも思しのたまひしかど、心の底のつしやかなる所はこよなくもおはしけるかな、中納言の君の今に忘らるべき世なく歎き渡り給ふめれど、若し世におはせましかば又かやうにおぼす事もありもやせまし、それをいとふかういかでさはあらしと思ひ入り給ひてとざまかうさまにもて離れむことをおぼしてかたちをもかへてむとし給ひしぞかし、必ずさるさまにてぞおはせまし、今思ふに、いかにおもりかなる御心おきてならまし、なき御かけども、我をばいかにこよなきあはつけさと見給ふらむ

と恥しう悲しくおぼせど、何かはかひなきものからかゝるけしきをも見え奉らむと忍びかへしつゝ聞きも入れぬさまにてすぐし給ふ。宮は常よりも哀になつかしうおきふし語らひ契りつゝ、この世のみならず長きことをのみぞたのめ聞え給ふ。さるはこのさつきばかりより例ならぬさまに惱しうし給ふこともありけり。こちたく苦しがりなどはし給はねど常よりも物參ることいとゞなくふしてのみおはするを、まださやうなる人の有様などよくも見知り給はねば、たゞあつき頃なればかくおはするなめりとぞおぼしける。さすがに怪しとおぼし咎むることもありて「もしいかなるぞ。さる人こそさやうには惱むなれ」などのたまふ折もあれど、いと恥しうま給ひてさりげなくのみもてなし給へるを、さし過ぎ聞え出づる人もなければたしかにも得知り給はず。八月になりぬればその日などほかよりぞ傳へ聞き給ふ。宮は隔てむとはあらねどいひ出でむ程心苦しういとほしくおぼされてさものたまはぬを女君はそれさへぞ心變く覺え給ふ。忍びたることもあらず世の中なべて知りたることをその程などだにのたまはぬことゝ、いかゞうらめしからざらむ。かく渡り給ひにし後はことなることなければうち参り給うてもよるとまはることにし給はず、こゝかしこの御よがれなどもなかりつるを、俄にいかにも思ひ給はむと心苦しきまぎらはしに、この頃は時々御とのゐとて参りなどし給ひつゝかねてよりならばし聞え給ふをも唯つらき方にのみぞ思ひおかれ給ふべき。中納言殿もいとほしきわざかなと聞き給ふに、花ごゝろにおはする宮なれば哀とはおぼすともいまめかしきかたに必ず御心うつろひなむかし、女がたもい

とまたゝかに物し給ふわたりにてゆるびなく聞えまつはし給はゞ月頃もさもならひ給はで待つ夜おほく過し給はむこそ哀なるべけれなど思ひよるにつけても、あいなしや、我が心よ何しにゆづり聞えけむ、昔の人に心をまめてし後大方の世をも思ひ離れて住みはてたりしかたの心も濁りそめしかば、唯かの御事をのみとさまかうさまには思ひながらさすがに人の心許されであらむことは始より思ひしほいなかるべしと憚りつゝ、唯いかにして少しも哀と思はれてうち解け給へらむ氣色をも見むと行くさきのあらましごとのみ思ひ續けしに、人は心にもあらずもてなしてさすがに一かたにてもえさし放つまじう思ひ給へるなくさめに、同じ身ぞといひなしてほいならぬかたにおもむけ給ひしが妬くうらめしかりしかば、まづその心おきてをたがへむとて急ぎせしわざぞかしなど、あながちにめしう物ぐるほしくゐてありきたばかり聞えしほど思ひ出づるもいとけしからざりける心かなと返す返すぞくやしき、宮もさりとともその程の有様思ひ出で給はゞわが聞かむ所をも少しは憚り給はじやと思ふに、いでや今はそのをりのことなどかけてものたまひ出でざめりかし。猶あだなるかたに進み移りやすなる人は、女のためのみにもあらず、たのもしげなくかるがるしきこともありぬべきなめりかしなどにくく思ひ聞え給ふ。わが誠にあまりひとかたにまみたる心ならひに人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし、かの人をむなしう見奉りなしてし後おもふには、帝の御むすめをたまはむとおぼしおきつるも嬉しくもあらず、この君をえましかばとおぼゆる心の月日にそへてまさるも唯かの御ゆかりと思ふに思ひ離れがたきぞ

かし、はらからといふ中にも限なく思ひかはし給へりしものを今はとなり給ひにしはてにもとまらむ人を同じことと思へとて萬は思はずなることもなし、唯かの思ひおきてしさまをたがへ給へるのみなむ、口惜しううらめしきふしにてこの世には残りぬべきとのたまひしものを、あまがけりてもかやうなるにつけてはいとゞつらしとや見給ふらむなど、つくづくと人やりならぬひとりね志給ふよなよなは、はかなき風の音にもめのみさめつゝさしかた行くさきの人の上さへあぢきなき世を思ひめぐらし給ふ。なげのすさみに物をもいひふれけぢかくつかひならし給ふ人々の中には、おのづからにくからずおぼさるゝもありぬべけれど、誠には心とまるもなきことをさはやかなれ、さるはかの君達のほどに劣るまじきさはの人々も、時世に随ひつゝ衰へて心細げなる住まひするなどを尋ねとりつゝあらせなどいと多かれど、今はと世を背きはなれむ時この人こそとりたてゝ心とまるほだしになるばかりのことはなくて過ぐしてむと思ふ心づかひ深かりしを、いでさもわろくわが心ながらぬぢけてもあるかななど、常よりもやがてまどろまず明し給へるあしたに、霧のまがきより花のいろいとおもしろく見えわたる中に、朝顔のはかなげにてまじりたるを猶殊にめとまる心ちし給ふ。あくるまささてとか常なき世にもなずらふるが心苦しきなめりかし。格子もあげながらいとかりそめにうち臥しつゝ明し給へば、この花の開くる程をも唯一人のみぞ見給ひける。人召して、「北の院に参らむに、ことごとしからぬ車さしいださせよ」とのたまへば「宮は昨日よりうちになむおはしますなる。よべ御車ゐてかへり侍りにき」と申す。さ



ばれ、かの對の御方の惱み給ふなるとぶらひ聞えむ。今日はうちに參るべき日なれば日たけぬさきに」とのたまひて御さうぞくし給ふ。出て給ふまゝにおりて花の中にまじり給へるさまも殊更にえんだち色めきてももてなし給はねど、怪しうたゞうち見るになまめかしう耻しげにていみじうけしきだつ色ごのみどもになずらふべくもあらず、おのづからをかしうぞ見え給ひける。朝顔をひきよせ給ふに、露いたうこぼる。

「けさのまの色にやめでむおく露の消えぬにかゝる花とみるみる。はかな」などひとりこちてをりても給へり。女郎花をばみすぎてぞ出て給ひぬる。明けはなるまゝに霧たちみちたる空をかしきに、女どちはまどけなくあさいし給へらむかし、格子妻戸などうちたゞきこわづくらむこそうひうひしかるべけれ、あさまだきまたき來にけりと思ひながら、人めして中門のあきたるより見せ給へば「み格子ども皆まゐりて侍るべし。女房のけはひなどし侍りつ」と申せば、おりて霧のまぎれにさまよく歩み入り給へるを、宮の忍びたる所より歸り給へるにやと見るに、露にうちまめり給へるかをり例のいとさまことに匂ひくれば猶めざましうおほすかし。「心をあまりをさめ給へることにくけれ」などあいなく若き人々などは聞えあへり。驚きがほにもあらずよきほどに打ちとよめきて御志とねさし出でなどするさまもいとめやすし。「これに侍へと許させ給ふほどは人々しきこゝちすれど、猶かゝるみすのまへにさし放たせ給へるうれはしさになむまばまも得さぶらはぬ」とのたまへば「さらばいかゞは侍るべからむ」と聞ゆ。北おもてなどやうのかくれぞかし。「かゝるふるびとなど

のさぶらはむにことわりなるやすみどころはそれもまた唯御心なれば愛へ聞ゆべきにも侍  
らずにとてなげしにおしかりて坐すれば、例の人々「猶あしこもとになどそじのかし聞  
ゆ。もとよりけはひはやりかに雄々しくなどは物し給はぬ人がらなるをいよいよまめやか  
にもてなしをさめ給へれば、今はみづから聞え給ふこともやうやうたてつゝましかりし  
かた、少しづつうすらぎておもなれ給ひにたり。」惱ましうおぼざるらむさまもいかなれば  
など問ひ聞え給へどはかばかしくも御いらへ聞え給はず、常よりもまめり給へるけしきの  
心苦しきも哀におしはかられ給ひて、こまやかに世の中のあるべきやうなどをはらからや  
うのものゝあらましやうに教へ慰め聞えたまふ。聲などもわざと似給へりとも覺えざりし  
かど、あやしきまで唯それとのみ聞ゆるに、人め見苦しかるまじくはすだれもひきあけてさ  
しむかひ聞えまほしく、うち悩み給へらむかたちゆかしう覺え給ふも、猶世の中に物思はぬ  
人もあるまじきわざにやあらむとぞ思ひ知られ給ふ。人々しくさらさらしきかたには侍  
らずとも心に思ふことあり、なげかしく身をもてなやむさまになどはなくて過ぐしつべき  
この世とみづから思ひ給へしを、心から悲しきこともをこがましく悔しき物思ひをもかた  
がたに安からず思ひ侍ることいとあいなけれ。つかさくらゐなどいひて大事にすめること  
わりのうれへにつけて歎き思ふ人よりも、これや今少し罪の深さはまさるらむ」などいひつ  
ゝをり給へる花を扇にうち置きて見居給へるが、やうやうあかみもて行くもなかなか色あ  
はひをかしう見ゆれば、やをらさしいれて、

「よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花」。ことさらびてしももてなさにぬに露を落さてもたまへりけるよとをかしく見ゆるに、おきながら枯るゝけしきなれば、

「消えぬまにかれぬる花のはかなさにおくるゝ露はなほぞまされる。何にかゝれる」といと忍びてこともつゞけずつゝましげにいひけち給へるほど猶いとよく似給へるかなと思ふにもまづぞかなしき。「秋の空は今少しながめのみまさり侍る。つれづれのまぎらはしにもとてさいつころ宇治に物して侍りき。庭もまがきもまとにあればて侍りしに堪へがたきこと多くなむ。故院のうせ給ひて後、二三年ばかりの末に世をそむき給ひし、嵯峨の院にも六條院にもさしのぞく人の心をさめむ方なくなむ侍りける。木草の色につけても水の流にそへても涙にくれてのみなむ歸り侍りける。かの御あたりの人はかみしも心淺き人なくなむ惑ひ侍りけるまゝに、かたがたつどひものせられける人々も皆ところどころにあがれちりつゝおのおの思ひ離るゝ住まひをし給ふめりしに、はかなき程の女房などはまして心をさめむかたなく覺えけるまゝに、物覺えぬ心にまかせつゝ山はやしに行きまじり、すゞろなる田舎人になりなど哀に惑ひちるこそ多く侍りけれ。さてなかなか皆あらしはて忘草おほして後なむこの左のおとゞも渡りすみ、宮達などもかたがたものし給へば昔に返りたるやうに侍るめる。さる世にたぐひなき悲しさと見給へしほどのことも、年月ふれば思ひさますをりの出でくるにこそはと見給ふるに、げにかぎりあるわざなりけりとなむ見え侍りし。かくは聞えさせながらも、かのいにしへの悲しさはまだいはけなく侍りける程にていとさし

もまぬにや侍りけむ。猶この近き夢こそさますべきかたなく思ひ給へらるゝは、おなじごと世の常なきかなしびなれど、罪深きかたはまさりて侍るにやとそれさへなむ心憂く侍るとして泣き給へるほどいと心深げなり。むかしの人をいとしも思ひ聞えざらむ人だに、この人の思ひ給へる御けしきを見むには、すぐろにたぐにもあるまじきを、まいてわれも物を心ぼそく思ひ亂れ給ふにつけては、いと常よりも面影に戀しく悲しく思ひ聞え給ふ心なれば、今すこしもよほされて物も得聞え給はずためらひかね給へるけはひをかたみにいと哀と思ひかはし給ふ。「世のうきよりはなど人はいひしをも、さやうに思ひくらぶる心もことになくて年ごろは過し侍りしを、今なむ猶いかてまづかなるさまにても過さまほしく思ひ給ふるを、さすがに心にもかなはざれば辨の尼こそうらやましく侍れ。この二十日あまりの程はかの近き寺の鐘の聲も聞き渡さまほしく覺え侍るを、忍びて渡させ給ひてむやと聞えさせばやとなむ思ひ侍りつる」とのたまへば「あらさじとおもほすとも、いかてかは。心やすきをのこだにいとゆきゝのほどあらまじき山道に侍れば思ひつゝなむ月日も隔たり侍る。故宮の御忌日は、かの阿闍梨にさるべき事ども皆いひおき侍りにき。かしこは猶たふときかたにおぼしゆづりてよ。時々見給ふるにつけては心惑ひの絶えせぬもあいなきに罪うしなふさまになし侍りなばやとなむ思ひ侍るを、またいかゞ思しおきつらむ。ともかくも定めさせ給はむに隨ひてこそはとてなむ。あるべからむやうにのたまはせよかし。何事もうとからずうけたまはらむのみこそほいかなふにては侍らめなどまめだちたることどもを聞え給ふ。經

佛などこの上も供養じ給ふべきなめり。がやうなるついでにことつけてやをら寵り居なばやとおもむけ給へるけしきなれば、「いとあるまじきことなり。猶何事も心のどかにおぼしなせ」など教へ聞え給ふ。日さしあがりて人々参り集まりなどすればあまり長居もことあり顔ならむによりいで給ひなむとて、「いづこにてもみすのとはならひ侍らねばはしたなき心ちし侍りてなむ。今又かやうにもさぶらはむ」とて立ち給ひぬ。宮のなどかなき折にはきつらむと思ひ給ひぬべき御心なるもわづらはしくて、侍のべたうなる右京のかみ召して、「よべまかてさせ給ひぬと承りて参りつるをまだしかりければ口惜しきを、うちにや参るべき」とのたまへば「今日はまかてさせ給ひなむ」と申せば「さらば夕つ方も」とて出て給ひぬ。猶この御けはひありさまを聞き給ふたびごとくに、などて昔の人の御心おきてをもてたがへて思ひぐまなかりけむと、くゆる心のみまさりて心にかゝりたるもむつかしく、なぞや人やりならぬ心ならむと思ひかへし給ふ。そのまゝにいまださうじにていととおこなひをのみま給ひつゝ、明し暮したまふ。母宮は猶いと若くおほどきて物しどけなき御心にも、かゝる御けしきをいとあやふくゆゝしとおぼして「いく世しもあらじを、見奉らむほどはかひあるさまにて見え給へ。世の中を思ひ捨て給はむをもかゝる身にてはさまたげ聞ゆべきにもあらぬを、この世にてはいふかひなき心地すべき心惑ひにいと罪やうらむ」とのたまふが辱くいとほしくて、よろづを思ひけちつゝ御前にては物思ひなきさまをつくり給ふ。左のおほい殿には六條院の東のおとどを磨きまつらひて限なくよろづをとのゝへて待ち聞え給ふに、

いざよひの月やうやうさしあがるまで心もとなければ、いとしも御心にいらぬことにていかならむと安からずおぼしてあないし給へば、「この夕つかたうちより出て給ひて二條院になむおはしますなる」と人申す。おぼす人も給へればと心やましけれど、こよひ過ぎむも人わらへなるべければ、御子の頭中將して聞え給へり。

「大ぞらの月だにやどるわが宿にまつよひすぎて見えぬ君かな」。宮はなかなか今なむとも見えじ心苦しとおぼしてうちにおはしけるを、御文聞え給へりける。御返りやいかゞありけむ。猶いと哀におぼされければ忍びて渡り給へりけるなり。らうたげなる有様を見捨て、出づべき心ちもせず、いとほしければよろづに契りつゝ、慰めかねてもろともに月を眺めておはするほどなりけり。女君は日頃もよろづに思ふ事多かれどいかでけしきにいださじとよろづに念じ返しつゝ、つれなきさまし給ふことなれば、殊に聞きも咎めぬさまにおほどかにもてなしておはするさまいと哀なり。中將の参り給へるを聞き給ひて、さすがにかれもいとほしければ出て給はむとて、「今いと疾く参りこむ。ひとり月な見給ひそよ。心そらなればいと苦し」と聞えおき給ひて、なまかたはらいたければかくれのかたより寢殿へ渡り給ふ。御うしろでを見送るに、ともかくも覺えねど唯枕のうきぬべき心ちのすれば、心憂きものは人の心なりけりとわれながら思ひ知らる。をさなきほどより心ほそく哀なる身どもにて世の中を思ひとゞめたるさまにもおはせざりし。三所をたのみ聞えさせてさる山里に年經しかど、唯いつとなくつれづれにすごうはありながらいとかく心にまみて世をうさも

のとも思ひ知らざりしに、打ち續きあさましき御事どもを思ひし程は世に又とまりて片時ふべくもおぼえず戀しう悲しきことのたぐひあらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば人の思ひたりし程よりは人かずにもなるやうなる有様を長かるべきこと、は思はねど、見るかぎりはにくげなき御心ばへもてなしなるに、やうやう思ふこと薄らぎてありへつるを、このふしの身のうさはたいはむかたなく限と覺ゆるわざなりけり。ひたすら世になくなり給ひにし人々よりはざりともこれは時々もなかはとも思ふべきを、今宵かく見捨てゝ出て給ふつらさにさしかた行くさき皆かきみだり心細くいみじきが我が心ながら思ひやるかたなく心憂くもあるかな、おのづからながらへばなど慰めむことをおもふに、更に姨捨山の月のみすみのぼりて夜更くるまゝによろづ思ひ亂れたまふ。松風の吹きくる音も、あらましかりし山おろしに思ひくらぶればいとどかに懐かしうめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉のおとには劣りておぼゆ。

「山里のまつのかげにもかくばかり身にまむあきの風はなかりき。さしかたは忘れにけるにやあらむ」。おいびとどもなど「今はいらせ給ひね。月見るは忌み侍るものを。あさましうはかなき御くだものをだに御覽し入れねばいかならせ給はむ。あな見苦しや。ゆゝしう思ひ出でらるゝことも侍るを。いとこそわりなけれ」などいふ。若き人々は「心うの世や」とうち歎きて「この御ことよ、ざりともかくておろかにはよもなりはて給はじ。さいへど、もとの志深う思ひそめつる中は名残なからぬものぞ」などいひあへるもさまたまに聞にくゝ、今は

いかにもいかにもかけていはざらなむ、たゞにこそ見めとおぼさるゝは、人にはいはせじわれひとり恨み聞えむとにやあらむ。いでや中納言殿のさばかり哀なる御心深さをなどそのかみの人々はいひあはせて、人の御すくせのあやしかりけることよといひあへり。宮はいと心苦しくおぼしながら色めかしき御心は、いかでめてたきさまに待ち思はれむと心げさうして、えならずたきまめ給へる御けはひいはむ方なし。まちつけ給へる所の有様もいとをかしかりけり。人の御程さゝやかにあえかになどはあらでよきほどになりあひたる心ちし給へるを、いかならむものものしくあざやぎて心ばへもたをやかなるかたはなく物ほこりになどやあらむ、さあらむこそうたてあるべけれなどおぼせど、さやうなる御けはひにはあらぬにや御志おろかなるべうもおぼされざりけり。秋の夜なれどふけにしかばにや程もなく明けぬ。歸り給ひても對へはふとも得渡り給はず。まばしおほとのごもりて起きてぞ御文書き給ふ。「御けしきけしうはあらぬなめり」とおまへなる人々つきじろふ。「對の御方こそ心苦しけれ。あめのしたにあまねき御心なりともおのづからけおさるゝこともありなむかし」などたゞにしもあらず皆馴れ仕う奉りたる人々なれば、やすからずうちいふことゞもありて、すべて猶妬げなるわざにぞありける。御返りもこなたにてこそはとおぼせど夜のほどの覺束なさも常のへだてよりはいかゞと心苦しければ、急ぎわたり給ふ。ねくたれの御かたち、いとめでたくみどころありていり給へるに、ふしたるもうたてあれば少し起きあがりておはするに、打ち赤み給へる顔のにほひなど今朝しもことをかしげさまさりて見え給へ



ば、あいなく涙ぐまれてまばしうちまもり聞え給ふを、恥しくおぼしてうちうつぶし給へる  
髪のかゝりかんざしなど猶いとありがたげなり。宮もなまはしたなきにこまやかなること  
などはふともえ言ひ出て給はず、おもがくしにや、「などかくのみなやましげなる御けしき  
ならむ。あつきほどのこととかのたまひしかば、いつしかとすゞしきほど待ち出てたるも猶  
はればれしからぬは見苦しきわざかな。さまざまにせざることもあやしうあるしなき心  
地のみこそすれ。さはありともすほふはまたのべてこそはよからめ。あるしあらむ僧もが  
な。なにがし僧都をぞよるにさぶらはすべかりける」などやうなるまめごとをのたまへば、  
かゝるかたにもことよきは心づきなく覺え給へと、むげにいらへ聞えざらむもれいならぬ  
ば、「昔もあやしう人に似ぬありさまにてかやうの折は侍りしかど、おのづからいとよくを  
こたるものを」とのたまへば、「いとよくこそさはやかなれ」と打ち笑ひて、なつかしうあい  
ぎやうづきたるかたはこれにならぶ人はあらじかしと思ひながら、猶又とくゆかしきかた  
の心いられも立ちそひ給へるは御志のおろかにもあらぬなめりかし。されど見給ふほどは  
かはるけぢめもなきにや、後の世までと誓ひたのめ給ふこととものつきせぬを聞くにつけ  
ても、一げにこの世はいと短かゝめる。命まつまもつらき御心に見えぬべければ後の契やた  
がはぬ事もあらむと思ふにこそ、猶こりすまに又またのまれぬべけれ」とていみじうねんず  
べかめれど得忍びあへぬにやけふは泣き給ひぬ。日ごろもいかでかく思ひけりと見え奉ら  
じとよろづに思ひまざらばしつるを、さまざまに思ひ集むることし多かれはさのみもえも

て隠されぬにや、こぼれそめてはどみにもえためらひ給はぬをいと恥しく侘しと思ひて、  
たくそむき給へば、志ひてひきむけ給ひつゝ、「聞ゆるまゝに哀なる御有様と見つるを、猶隔  
てたる御心こそ物し給ひけれな。さらば夜の程におぼしかはりたるか」とてわが御袖し  
て涙をのごひ給へば、「夜のまの心かはりこそのだまふにつけて推しはかられ侍りぬれ」と  
て少しほくゑみぬ。「げにあが君や、をさなの御物いひや。されど誠には心にくまのなれば  
いと心やすし。いみじうことえりして聞ゆともいとまるかるべきわざぞ。むげに世のことわ  
りを知り給はぬこそらうたきものからわりなけれ。よしわが御身になしても思ひめぐらし  
給へ。身を心ともせぬ有様なりかし。若し思ふやうなる世もあらば人にまさりける志の程も  
知らせ奉るべきひとふしなむある。たはやすくこといづべきことにもあらねば命のみこと」  
などのたまふほどに、かしこに奉り給へる御使、いといたうゑひすぎにければ少し憚るべき  
ことも忘れて、けさやかにこの南おもてに参れり。あまの刈るめづらしきたまもにかづさう  
づもれたるを、さなめりと人々見る。いつの程に急ぎ書き給ひつらむと見るも安からずはあ  
りけむかし。宮もあながちにかくすべきにはあらねど、さしぐみは猶いとほしきを少しの用  
意はあれかしとなまかたはらいたけれど、いまはかひなければ女房して御文とり入れさせ  
給ふ。同じくは隔なきさまにもてなしてはて、むとおぼしてひきあげ給へるに、まゝは、の宮  
の御手なめりと見ゆれば今少し心安くてうち置き給へり。せんじがぎにてもうしろめたの  
わざや、「さかしらはかたはらいたさにそゝのかし侍れど、いとなやましげにてなむ。

女郎花をれどまさるあさ露のいかに置きけるなごりなるらむ。あてやかにをかしう書き給へり。「かごとがましげなるもわづらはしや。誠は心安くてしばしはあらむと思ふ世を、思のほかにもあるかな」などはたまへど又二つなくてさるべきものに思ひならひたるたゞ人の中こそかやうなることのうらめしさなども見る人苦しくはあれ、思へばこれはいとかたし、つひにかゝるべき御事なり、宮達と聞ゆる中にもすぢことに世の人思ひ聞えたれば、いくたりもいくたりもえ給はむことももどきあるまじければ、人もこの御方をいとほしなど思ひたらぬなるべし、かばかりものものしくかしづきすゑ給ひて、心苦しきかたおろかならずおぼしたるをぞさいはひおはしけるときこゆる、みづからの心にも、あまりにならし給ひて、俄にはしたなかるべきがなげかしきなめり、かゝる道をいかなれば淺からず人の思ふらむと、昔物語などを見るにも人の上などにもあやしう聞き思ひしはげにおろかなるまじきわざなりけりと、わが身になしてぞ何事も思ひ知られ給ひける。宮は常よりも哀にうち解けたるさまにもてなし給ひて、「むげに物参らざるこそいとあしけれ」などのたまひて、よしある御くだもの召しよせ、又さるべき人めして殊更にてうせさせ給ひなどしつゝ、そののかし聞え給へどいとほるかにのみおぼしたれば「見苦しきわざかな」と歎き聞え給ふに、暮れぬれば夕つ方寝殿へ渡り給ひぬ。風涼しくおほかたの空をかしき頃なるに、今めかしきにすゝみ給へる御心なれば、いとゞしくえんなるに、物おもはしき人の御心の中はよろづに忍びがたき事のみぞ多かりける。ひぐらしの鳴く聲にも山の陰のみ戀しくて、

「おほかたにきかましものをひぐらしの聲うらめしき秋の暮かな」。今宵はまだふけぬに  
いて給ふなり。御さきの聲の遠くなるまゝにあまも釣するばかりになるも、我ながらにくき  
心かなと思ふ思ふ聞き臥し給へり。はじめより物を思はせ給ひし有様などを思ひ出づるも  
うとまじきまでおもほゆ。このなやましき事もいかならむとすらむ、いみじう命短きぞうな  
れば、かやうならむついでにもやはかなくなりなむとすらむなど思ふには惜しからねど、悲  
しうもあり又いと罪深うもあなるものをなごまごろまれぬまゝに思ひ明し給ふ。その日は  
きさいの宮なやましげにおはしますとて、誰も誰も参りつどひ給へれど、いさゝかなる御か  
ぜにおはしましければことなることもおはしまさずとて、おとゞは晝まかて給ひにけり。中  
納言の君さそひ聞き給ひてひとつ御車にてぞまかて給ひにける。今宵の儀式いかならむ、清  
らを盡さむとおぼすべかめれど限あらむかし。この君も心恥しけれど、またしきかたの覺え  
はわがかたざまに又さるべき人もおはせず、物のはえにせむに心ことにはたおはする人な  
ればなめりかし。例ならずいそがしうまうで給ひて、人の御うへに見なしたるを、口惜しと  
も思へらず、なにやかやともろ心にあつかひ給へるを、おとゞは人知れずなまねたしとぞ  
おぼしける。よひ少し過ぐる程におはしましたり。寢殿の南の廂ひんがしによりておまし参  
れり。御臺八つ、例の御皿などうるはしげに清らにて又ちひさき臺二つにけそくの皿どもい  
といまめかしうせさせ給ひてもちひ参らせ給へり。珍しからぬことかきおくこそにくけれ。  
おとゞ渡り給ひて、「夜いたう更けぬるを」と女房してそゝのかし聞き給へどいとあされて

とみにも出て給はず、北の方の御ぼらからの左衛門督藤宰相などばかり物し給ふ。辛うじて出で給へる御さまいと見るかひある心ちす。あるじの頭中將御盃さへげて御臺まゐる。つぎの御かはらけ、二たび三たびまゐり給ふ。源中納言のいたうすめ給へるに宮少しほゝゑみ給へり。わづらはしきわたりをとふさはしからず思ひていひしをおほし出づるなめり。されど見知らぬやうにていとまめなり。ひんがしのたいに出で給ひて御供の人々もてはやし給ふ。おぼえある殿上人どもいとおほかり。四位六人は女のさうぞくにほそながそへて、五位十人はみへがさねのからぎぬ、もの腰も皆けぢめあるべし。六位四人は綾のほそなが、袴などかつは限あることを飽かずおぼしければ、物の色しざまなどをぞ清らをつくし給へりける。めしつぎとねりなどの中にみだりがはしきまでいかめしうなむありける。げにかくにぎはしう華やかなることは、見るかひあれば物語などにもまづいひたてたるにやあらむ。されどくはしうはえぞ算へたてざりけるとや。中納言殿のごせんの中に、なまおぼえあざやかならぬや暗さまぎれに立ちまじりたりけむ。かへりてうち歎きて、「わが殿のなどかおいらかにこの殿の御婿にうちならせ給ふまじき。あぢきなき御ひとりずみなりや」と中門のもとにてつぶやきけるを聞きつけ給ひてをかしとなむおほしける。夜の更けてねぶたきにかものもてかしづかれける人々は心地よげにゑひみだれてよりふしぬらむかしと、うらやましきなめりかし。君は入りて臥し給ひて、はしたなげなるわざかな、ことごとしげなるさましたる親の出でて離れぬなからひなれど、これかれ火あかうかへげてすめ聞ゆる盃など

をいとめやすくもてなし給ふめりつるかなと、宮の御ありさまをめやすく思ひ出て奉り給ふ。げに我にてもよしと思ふをんなごをもたらましかば、この宮をおき奉りてうちになにえ參らせざらましと思ふに、誰も誰も宮に奉らむと心ざし給へるむすめは猶源中納言にこそと、とりどりにいひならぶなるこそ我がおぼえの口惜しくはあらぬなめれ、さるはいとあまり世づかずふるめいたるものをなど心おごりもせらる。うちの御けしきあること誠におぼしたらむに、かくのみものうく覺えばいかゞすべからむ、おもだしき事にはありともいかにあらむ、いかにぞ故君にいとよく似給へらむ時に嬉しからむかしと思ひよらるゝはさすがにえもてはなるまじき心なめりかし。例のねざめがちなるつれづれなれば、あぜちの君とて人よりは少し思ひまし給へるがつぼねにおはして、その夜は明し給ひつ。明け過ぎたらむを人の咎むべきにもあらぬに、苦しげに急ぎおき給ふを、たゞならず思ふべかめり。

「うちわたし世にゆるしなき關川をみなれそめけむ名こそをしけれ」。いとほしければ、「深からずうへは見ゆれどせき川のまたのかよひはたゆるものかは」。深しとのたまはむにてだにたのもしげなきを、このうへの浅さはいと心やましう覺ゆらむかし。妻戸を押しあけて「まことはこのそらを見給へ。いかでかこれを知らず顔にてはあかさむとよ。えんなる人まねにはあらで、いと明しがたくなり行くよなよなのねざめにはこの世後の世までなむ思ひやられて哀なるしなどいひまぎらはしてぞ出で給ふ。殊にをかしきことのかずを盡さねどさまのなまめかしき見なしにやあらむ、なさけなくなどは人に思はれ給はず。かりそ

めのたはぶれごとをもいひぞめ給へる人の、けぢかくてだに見奉らばやとのみ思ひ聞ゆるにや。あながちに世を背き給へる宮の御方にえんを尋ねつゝ参り集まりて侍らふも、哀なることほどほどにつけつゝ多かるべし。宮は女君の御ありさまひるみ聞え給ふにいと御志まさりにけり。おほきさよき程なる人のやうだいいと清げにて、髪のがりばかしらつきなどどものよりことにあなめでたと見え給ひける。色あひあまりなるまで匂ひて、ものものしくけだかき顔のみみいと恥しげにらうらしう、すべて何事もたらひてかたちよき人といはむに飽かぬ所なし。はたちにひとつふたつぞあまりたまへりける。いはけなき程ならねばかたなりに飽かぬ所なく、あざやかに盛の花と見え給へり。限なくもてかしづき給へるにかたほならず。げに親にては心も惑はし給ひつべかりけり。唯やはらかにあいぎやうづさうたきことはかの對の御方はまづおぼし出でられける。物のたまふいらへなども、はぢらひ給へれど又あまり覺束なくはあらず。すべていとみどころおほくかどかとしげなり。よき若人ども三十人ばかり、わらは六人、かたほなるなく、さうぞくなども例の麗はしきことはめなれておぼさるべかめれば、引きたがへ心得ぬまでこのみをし給へる。三條殿腹のおほい君を春宮に参らせ給へるよりも、この御ことをばいとことに思ひおきて聞え給へるも、宮の御おほえありさまからなめり。かくてのち二條院にえ心安くも渡り給はず。かろらかなる御身ならねばおぼすまゝに晝の程などもえ出て給はねば、やがて同じ南の町に年頃ありしやうにおはしまして、暮るれば又えひきよぎても渡り給はずなどして待遠になるをりをりあるを、か

いらむずる事とは思ひしかどさしあたりてはいとかうしもやは名残なかるべき、げに心あらむ人は數ならぬ身を知らずまじらふべき世にもあらざりけりと、かへすがへすも山路わけ出でけむ程うつとも覺えず悔しく悲しければ、猶いかで忍びて渡りなむ、むげに背くさまにはあらずともまばし心をも慰めばや、にくげにもてなしなどもせばこそうたてもあらめなど心ひとつに思ひあまりて、恥しけれど中納言殿に御文奉れ給ふ。「一日の御ことは阿闍梨の傳へたりしに委しう聞き侍りにき。かゝる御心の名残なからましかばいかにいとほしくと思ひ給へらるゝにもおろかならずのみなむ。さりぬべくはみづからも」と聞え給へり。みちのくにかみにひきもつくろはずまめだちて書き給へるしもいとをかしげなり。故宮の御忌日に例の事どもいとたふとくせさせ給へりけるを、喜び聞え給へるさまのおどろおどろしうはあらねどげに思ひ知り給ふなめりかし。例はこれより奉る御返りをだに、うち解けずつゝましげにおぼしてはかばかしくも續け給はぬを、みづからとさへのたまへるが珍しく嬉しきに心ときめきもまぬべし。宮の今めかしくこのみたち給へる程にておぼし忘りにけるも、げに心苦しくおしはからるればいと哀にて、をかしやかなることみな御文をうちもおかずひき返しひき返し見居給へり。御返りはうけ給はりぬ。「一日はひじりだちたるさまにて殊更に忍び侍りしも、さ思ひ給ふるやう侍るころほひにてなむ名残とのたまはせたるこそ、少し淺くなりたるやうにとうらめしう思ひ給へらるれ。よろづは今さぶらひてなむ。あなかしこ」とすくよかに白き色紙のこはごはしきにてあり。さて又の日の夕つ方を



渡り給へる。人知れず思ふ心しそひたれば、あいなく心づかひいたうせられて、なよゝかなる御ぞどもをいとゞ匂はしそへ給へるはあまりおどろおどろしきまであるにちやうじぞめの扇もてならし給へるうつりがなどさへたとへむ方なくめでたし。女君もあやしかりし夜のことなど思ひ出て給ふ折々なきにしもあらねば、まめやかに哀なる御心ばへの人に似ず物し給ふを見るにつけて、さてもあらましをとばかりは思ひもやま給ふらむ、いはけなき程にしおはせねば、うらめしき人の御有様を思ひくらぶるには何事もいとゞこよなく思ひ知られ給ふにや、常にはへだて多かるもいとほしく物思ひ知らぬさまに思ひ給ふらむなど思ひ給ひて、今日はみすの内に入れ奉り給ひてもやのみすに几帳とへて我は少しひきいりてたいめし給へり。「わざと召しとはべらざりしかど例ならず許させ給へりしよろこびにすなはちも参らまほしく侍りしを、宮渡らせ給ふと承りしかば折悪しくやはとてけふになし侍りにける。さは年頃のまるしもやうやうあらはれ侍るにや。隔少しうすらぎ侍りにける御簾のうちよ。珍しく侍るわざかな」とのたまふに、猶いとほづかしくいひ出でむ言の葉もなき心ちすれど、「一日嬉しく聞き侍りし心の中を、例の唯むすほれながら過し侍りなば思ひ知るかたはしをだにかでかはと口惜しさに」といといつゝましげにのみのたまふが、いたく老ぞきてたえだえほのかに聞ゆれば心もとなくて、「いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ承らまほしき世の物語も侍るものを」とのたまへば、げにとおぼして少しみじろきより給ふけはひを聞き給ふにもふと胸うちつぶるれど、さりげなくいとゞ志づめたるさまして

宮の御心ばへ思はずに淺うおはしけりとおぼしく、かつはいひもうとめ又なぐさめもかたがたにまづまづと聞え給ひつゝおはす。女君は、人の御うらめしさなどは打ち出て語らひ聞え給ふべき事にもあらねば、唯世やは憂きなどやうに思はせてことずくなに紛はしつゝ、山里にあからさまに渡し給へとおぼしくいとねんごろに思ひてのたまふ。「それはしも心ひとつにまかせてはえ仕うまつるまじきことに侍るなり。猶宮に唯心美しくしう聞させ給ひてその御けしきにまたがひてなむよく侍るべき。さらずは少しもたがひめありて心軽くもなどおぼしものせむにいとあしう侍りなむ。さだにあるまじうは道のほどの御おくりむかへもありたちて仕うまつらむに何の憚りかは侍らむ。うしろやすく人に似ぬ心の程は宮も皆知らせ給へり」などはいひながら、をりをりは過ぎに上方のくやしきを忘るゝをりなく、物にもがなやと、とりかへさまほしきさまなどほのめかしつゝ、やうやう暗うなり行くまでおはするにいとうるさく覺えて、「さらば心ちも惱ましくのみ侍るを、又よろしく思ひ給へらむほどになにごとも」とて入り給ひぬるけしきなるが、いと口惜しければ、「さてもいつばかりにおぼしたつべきにか。いとまげう侍りし道の草も少しうち拂はせ侍らむかし」と心とり聞え給へば、暫し入りさして、「この月は過ぎぬべかめればついたちのほどにもとこそは思ひ侍れ。唯いと忍びてこそよからめ。何か世のゆるしなどごとしうは」とのたまふ聲の、いみじうらうたげなるかなと常よりも昔思ひ出でらるゝにえつゝみあへてよりぬ給へる柱のもとすだれのしたより、やをらおよびて御袖をひかへつ。女、さりやあな心うと思ふに、

何事かはいはれむ、ものもいはていとゞひき入り給へば、それにつきていとなれがほになか  
らは内に入りてそひふし給へり。「あらずや。忍びてはよかるべうおぼすともありけるが、嬉  
しきはひがみ、かと聞えさせむとぞうとうとしくおぼすべきにもあらぬを、心うの御けし  
きや」と怨み給へば、いらへすべき心ちもせず、思はずにく、思ひなりぬるを、せめて思ひ  
まづめて、「思の外なりける御心のほどかな。人の思ふらむとよ。あさまし」とあばめて泣き  
ぬべき氣色なる、少しはことわりなればいとほしけれど、「これはとがあるばかりのとかは。  
かばかりの對面はいにしへをもおぼし出でよかし。すぎにし人の御許しもありしものを、い  
とこよなうおぼされにけるこそ、なかなかうたてあれ。すぎずさしくめざましき心はあらじ  
と心安くおぼせ」とていとどやかにもてなし給へれど、月頃悔しと思ひ渡る心のうちの苦  
しきまでなり行くさまをつぶつぶといひつゞけ給ひて、許すべきけしきにもあらぬに、せむ  
方なくいみじとも世の常なり、なかなかむげに心知らざらむ人よりも恥しう心づきなくて  
ない給ひぬるを、「こはなど。あなわかかし」とはいひながらいひ知らずらうたげに心苦し  
きものから用意深く恥しげなるけはひなどの、見し程よりもこよなくぬびまさり給へりけ  
るなどを見るに、心からよそ人にまなしてかく安からず物を思ふとと悔しきにも又げにね  
はなかれけり。近うさぶらふ女房二人ばかりあれど、すゝなる男の入り來たるならばこそ  
はこはいかなることぞとも参りよらめ、かくうとからず聞えかはし給ふ御なからひなめれ  
ばさるやうこそはあらめと思ふにかたはらいたければ、知らずがほにてやをらまぞきぬる

ぞいとほしきや。男君はいにしへを悔ゆる心の忍びがたきなどいときづめがたかりぬべ  
かめれど、昔だにありがたかりし御心の用意なれば猶いと思ひのまゝにももてなし聞え給  
はざりけり。かやうのすぢはこまかにもえなむまねびつゞけざりける。かひなきものから人  
めのあいなきを思へば、萬に思ひ返して出て給ひぬ。まだよひと思ひつれど、曉近うなりに  
けるを、見咎むる人もやあらむとわづらはしきも、女の御ためのいとほしきぞかし。惱まし  
げに聞き渡る御心ちはことわりなりけり。いと恥しと思ひ給へりつる腰のまるしに多くは  
心苦しう覺えてもやみぬるかな例のをこがまし的心やと思へどなさけなからむことは猶い  
とほいなるべし。又たちまちの我が心亂れにまかせてあながちなる心をつかひて後心安  
くしもえあらざらむものから、わりなく忍びありかむ程も心づくしに、女のかたがたおぼし  
亂れむことよなどさかしく思ふにせかれず今のまも戀しきぞわりなかりける。更に見ては  
えあるまじく覺え給ふもかへすがへすあやくなる心なりや。昔よりは少し細やぎてあて  
にらうたかりつるけはひなどは、たちはなれたりとも覺えず、身にそひたる心ちして更にこ  
とごとも覺えずなりにたり。宇治にいと渡らまほしげにおぼい給ふめるをさもや渡し聞え  
てまじなど思へど、まさに宮は許し給ひてむや、さりとして忍びてはたいとびんなからむ、い  
かさまにしてかは人目見苦しからて思ふ心の行くべきなど、心もあくがれてながめふし給  
へり。まだいと深きあしたに御文あり。例のうははいとけざやかなるたてぶみにて、  
「いたづらにわけつるみちの露まけみむかしおぼゆる秋の空かな。御けしきの心うさは

ことわり知らぬつらさのみなむ聞えさせむかたなく」とあり。御かへしなからむも人の例な  
らず見咎むべきをいと苦しければ「うけたまはりぬ。いとなやましうてえ聞えさせず」とば  
かり書き給へるを、あまりことずくななるかなとさうさうしくて、をかしかりつる御けはひ  
のみ戀しう思ひ出でらる。少し世の中をも知り給へるけにや、さばかりあさましうわりなし  
とは思ひ給へりつるものから、ひたぶるにいぶせくなどはあらていとらうらうしく恥しげ  
なる氣色もそひて、さすがになつかしういひこしらへなどして、いだし給へるほどの御心ば  
へなどを思ひ出づるも妬うも悲しうもさまたまに心にかゝりてわびしくおぼゆ。何事もい  
にしへにはいと多くまさりて思ひ出でらる。何かはこの宮かれはて給ひなば我をたのもし  
人に志給ふべきにこそはあめれ、さてもあらはれて心安きさまにはえあらじを忍びつゝ又  
思ひます人なき心のとまりにてこそはあらめなど唯この事のみつと覺ゆるぞけしからぬ心  
なるや。さばかり心深げにさかしがり給へど男といふものゝ心うかりけることよ。なき人の  
御悲しさはいふかひなき方にてもいとかう苦しきまではなかりけり。これはよろづにぞ思  
ひめぐらされ給ひける。「今日は宮渡らせ給ひぬ」など人のいふを聞くにもうしろみの心は  
うせて胸うちつぶれていとらやましう覺ゆ。宮は日頃になりけるはわが御心さへうら  
めしうおぼされて俄に渡り給へるなりけり、何かは心隔てたるさまにも見え奉らじ、山里に  
と思ひたつにもたのもし人に思ふ人もうとまじき心添ひ給へりけりと見給ふに、世の中い  
と所せう思ひなられて猶いとうき身なりけりと唯消えせぬほどはあるにまかせておいらか

ならむと思ひはて、いとらうたげに心うつくしきさまにもてなして居給へれば、いと哀に嬉しくおぼされて、日頃のをこたりなどかぎりなくのたまふ。御腹も少しふくらかになりたるに、かの恥ぢ給ふるしの帯のひきゆはれたるほどなどいとあはれに、まだかゝる人をけぢかくても見給はざりければ珍しくさへおぼしたり。うち解けぬ所にならひ給ひてよろづのこと心安くなつかしうおぼさるゝまゝに、ちろかならぬことどもを盡せずのたまひ契るを聞くにつけても、かくのみことよきわざにやあらむとあながちなりつる人の御けしきも思ひ出でられて、年頃哀なる御心ばへとは思ひ渡りつれどかゝるかたさまにては哀をもあるまじきと思ふにぞ、この御行くさきのたのめはいてやと思ひながらも少し耳とまりける、さてもあさましうたゆめたゆめて入り來たりしほどよ、昔の人にとくて過ぎにすることなど語り給ひし心ばへはげにありがたかりけれど、猶うちとくべくあらざりけりかしなどいよいよ心づかひせらるゝにも、久しくとだえ給はむ事はいと物恐しかるべく覺え給へば、ことに出で、はいはねど過ぎぬる方よりは少しまつはしさまにもてなし給へるを、宮はいとゞ限なら哀とおぼしたるに、かの人の御うつりがのいと深う志み給へるが世の常の香のかにいれたきまめたるにも似ずあるさ匂ひなるを、その道の人にしおはすれば怪しと咎めいて給ひて、いかなりしことぞとけしきとり給ふに、殊のほかにもてはなれぬことにしあればいはむかたなくわりなくていと苦しと覺えたるを、さればよ必ずさることはありなむ、よもたゞには思はじと思ひ渡ることぞかしと御心さわぎけり。さるはひとへの御ぞなど

もぬぎかへ給ひてけれど怪しう心より外にぞ身にまみにける。「かばかりにてはのこりありてしもあらじ」と萬に聞きにくゝのたまひつゞくるに、心うくて身ぞおきどころなき。「思ひ聞ゆるさまとなるものを、我こそさきになどかやうにうち背くきは、ことにこそあれ。又御心おき給ふばかりのほどやはへぬる。思のほかにうかりける御心かな」とすべてまねぶべくもあらず、いといとほしげに聞え給へどもかくもいらへ給はぬさへいとねたくて、

「また人になれける袖のうつりがを我が身にまめてうらみつるかな」。女はあさましうのたまひつゞくるに、いふべきかたもなくいかゞはとて、

「見なれぬる中の衣とたのみしをかばかりにてやかかけはなれなむ」とてうち泣き給へるけしきの限なう哀なるを見るにも、かゝればぞかしといと心やましくて、我もほろほろとこぼし給ふぞ色めかしき御心なるや。誠にいみじきあやまちありともひたぶるにはえぞうとみはつまじく、らうたげに心苦しきさまのえ給へればえも怨みはて給はず、のたまひさしつゝかつはこしらへ聞え給ふ。又の日も心のどかに大殿ごもり起きて御てうづ御かゆなどもこなたにまゐらす。御志つらひなどもさばかり輝くばかり高麗もろこしの錦綾をたちかさねたるめうつしには、よのつねにうちなれたる心ちして人々のすがたもなえはみたるうちまじりなどしていとまづかに見まはさる。君はなよゝかなるうす色どもに撫子のほそなが襲ねてうち亂れ給へる御さまの、何事もいとうるはしくことごとしきまで盛なる人の御よそひ、何くれに思ひくらぶれどけ劣りてもおぼえず。なつかしうをかしきは志のちろかな

らぬにはぢなきなめりかし、まろに美しくこえ給へりし人の少しほそやぎたるに色はいよいよ白うなりてあてにかしげなり、かゝる御うつりがなどのいちじるからぬをりだに愛ぎやうづきらうたき所などの猶人には多くまさりておぼさるゝまゝにはこれをはらからなどにはあらぬ人のけぢかくいひ通ひてことにふれつゝおのづから聲けはひをも聞き見馴れむはいかでかたゞにも思はむ、必ずまか思ひよりぬべきことなるをと我がいとくまなき御心ならひにおぼし知らるれば、常に心をかけてゐるきさまなる文などやあると近きみ厨子こからびつなどやうのものをもさりげなくて見給へど、さるものもなし。唯いとすくよかにことずくなにてなほなほしきなどぞわざとしなければ物にとりませなどしてもあるを、あやし猶いとかくのみはあらじかしとうたがはるゝに、いとゞけふはやすからずおぼさるることわりなりかし。かの人のけしきも心あらむ女の哀と思ひぬべきを、などてかはことの外にはさしはなたむ、いとよきあはひなればかたみにぞ思ひかはすらむかしと思ひやるぞわびしくはらだゝしくねたかりける。猶いとやすからざりければ、その日もえいて給はず。六條院には御文をぞ二たび三たび奉れ給ふを、いつのほどにつもる御言の葉ならむとつぶやくおい人どもゝあり。中納言の君は宮のかく籠りおはするを聞くにしも心やましく覺ゆれど、わりなしや、わが心のをこがましうあしきぞかし、うしろやすくと思ひぞめてしあたりのことをかくは思ふべしやと、まひてぞ思ひ返して、さはいへどえおぼし捨てざめりかしと嬉しくもあり、人々のけはひなどのなつかしきほどに、なえばみためりしを思ひやり給ひ



て、母宮の御方に参り給ひて、「よろしきまうけのものどもやさぶらふ。つかふべきことなむ」と申したまへば、「例のたゞむ月の法事のれうに白きものどもなどやあらむ。染めたるなどは今はわざともまおかぬをいそぎてこそせさせめ」とのたまへば、「なにかことごとしきようにも侍らず、侍はむにまたがひて」とて、みくしげ殿などに問はせたまひて、女のさうぞくどもあまたくだりに清けなる細長ども、たゞあるにまたがひてたゞなる絹綾などとりぐしたまふ。みづからの御れうとおぼしきには、わが御料にありけるくれなるのうちめなべてならぬに白き綾どもなどあまたかさね給へるに、袴のぐなかりけるに、いかにしたるにありけむ、こしのひとつありけるを引き結びくはへて、

「むすびける契ことなる下紐をたゞひとすぢにうらみやはする」。たいふの君とて、おとなおとなしき人のむつまじげなる人につかはす。「とりあへぬさまの見苦しきを、つきづきしうもてかくしてなむ」とのたまひて、御料のは忍びやかなれど箱にてつゝみもことなり。御覽せさせねど、さきさきもかやうなる御心まらひは常の事にてめなれにたれば、氣色ばかりかへしなどひこじろふべきにもあらねば、いかゞなども思ひ煩はで人々にとりちらしなどしたればおのおのさし縫ひなどす。若き人々のお前近う仕うまつるなどをぞ、とりわきてはつくろひたつべき。まもづかへどもものいたうなえはみたりつる姿どもなど、白き袴などにてけちえんならぬぞなかなかめやすかりける。誰かは何事をも後見聞ゆる人のあらむ。宮はおろかならぬ御志の程にて萬をいかでとおぼしおきてたれど、こまかなるうちうちのことまで

はいかゞはおぼしよらむ。かぎりもなく人にのみかしづかれてならはせたまへれば、世の中  
のうちあはずさびしきといかなるものとも知り給はぬ、ことわりなり。えんにそゞろさむく  
花の露を翫びて世はすぐすべきものとおぼしたる程よりは、思ほす人のためなれば、おのづ  
からをりふしにつけつゝまめやかなることまでもあつかひ知らせ給ふこと有難くめづらか  
なることなめれば、いでやなどこそしらはしげに聞ゆる御めのとなどもありけり。わらはべな  
どのなりあざやかならぬ、をりをりうちまじりなどしたるを女君はいとはづかしう、なかな  
かなる住まひにもあるかななど人知れずはおぼすことなきにしもあらぬに、ましてこの頃  
は世に響きたる御有様の華やかさに、かつは宮の内の人に見思ふらむとも人げなきこと、  
おぼし亂るゝこともそひて歎かしきを、中納言の君はいとよくおしはかり聞え給へば、うと  
からむあたりには見苦しうくだしかりぬべき心まらひのさまも、あなづるとはなけれ  
ど何かはことごとしくまたて顔ならむも、なかなか覺えなく見咎むる人やあらむとおぼす  
なりけり。今ぞ又例のめやすきさまのものどもなどせさせ給ひて御小袿織らせ綾のれう賜  
はせなどし給ひける。この君しもぞ宮にも劣り聞え給はず、さまことにかしづきたてられ  
て、かたはなるまで心おごりもし世を思ひすまして、あてなる心さまはこよなけれど、故みこ  
の御山ずみをみそめ給ひしよりぞ、寂しき所のあはれさはさまことなりけりと心苦しうお  
ぼされて、なべての世をも思ひめぐらし深きなさをもならひ給ひにける。いとほしの人な  
らはじやとぞ。かくて猶いかでうしろやすくおとなしき人にてやみなむと思ふにもまたが

はず、心にかゝりて苦しければ御文などをありしよりはこまやかにて、ともすれば忍びあま  
りたる氣色見せつゝ聞え給ふを、女君いとわびしきことをひにたる身とおぼしなげかる。ひ  
とへに知らぬ人ならば、あなものをぐるほしと、はしたなめさしはなたむにも安かるべきを、  
昔よりさまとなるたのもし人にならひきて今さらに中あしうならむもなかなか人めあしか  
るべし。さすがに淺はかにもあらぬ御心ばへありさまの哀を知らぬにはあらず、さりとして心  
かはし顔にあへしらはむもいとつゝましく、いかゞはすべからむと萬に思ひ亂れ給ふに、さ  
ぶらふ人々も少しものゝいふかひありぬべく若やかなるは皆あたらしき心ちして、見給ひ  
なれたる人とはかの山里のふる女ばらなり。思ふことをも同じ心になつかしういひあは  
すべき人のなきまゝには、故姫君を思ひ出で聞え給はぬをりなし。おはせましかば、この人  
もかゝる心もそへ給はましやといとかなしう、宮のつらくなり給はむなげきよりもこのこ  
といと苦しう覺ゆ。男君もまひて思ひわびて例のまめやかなる夕つ方おはしたり。やがては  
しに御志とねさし出させ給ひて「いと惱ましき程にてなむえ聞えさせぬ」と人して聞え出し  
給へるを聞くに、いみじうつらくて涙の落ちぬべきを人めにつゝめばまひて紛はして「惱ま  
せ給ふをりは知らぬ僧なども近く参りよるを、くすしなどのつらにてもみ簾の内には侍ふ  
まじうやは。かく人づてなる御せうそこなむかひなき心ちする」と聞え給ひて、いとものし  
げなる御氣色なるを一夜物のけしき見し人々、げにやいと見苦しう侍るめりとして、も屋の御  
簾うちおろしてよるの僧の座に入れ奉るを、女君誠に心ちもいと苦しけれど、人のかういふ

に、うたてけちえんならむも又いかゞとつゝましければ、物うながら少しぬざり出て、たいめし給へり。いとほのかに、時々ものたまふ御けはひの昔の人のなやみそめ給へりしころ、まづ思ひ出でらるゝもゆゝしう悲しうてかきくらす心ちし給へば、とみに物もいはれず、ためらひつゝぞ聞え給ふ。こよなくおくまり給へるものとつらくて、すのしたより几帳を少しおし入れて例のなれなれしげに近づきより給ふがいと苦しければ、わりなしとおぼして少將の君といふ人を近う召しよせて、「胸なむいたき。まばしおさへて」とのたまふを聞き給ひて、「胸はおさへたるいと苦しう侍るものを」と打ち歎きてゐなほり給ふ程も、げにぞまたやすからぬ。「いかなればかくしも常に惱しうはおぼさるらむ。人に問ひ侍りしかば、まばしこそ心ちもあしかなれさて又よろしきをりありなごこそ教へ侍りしか。あまりわかわかしくもてなさせ給ふなめりかし」とのたまふに、いとほづかしうて、「胸はいつともなくかくこそは侍れ。昔の人もさこそはものし給ひしか。長かるまじき人のするわざとか人もいひ侍るめる」とぞのたまふ。げに誰もちとせの松ならぬよをと思ふには、いと心苦しう哀なれば、この召しよせたる人のさかむもつゝまれず、かたはらいたきすぢのことをこそえりとむれ。昔より思ひ聞ゆるさまなどをかの御みゝひとつには心得させながら人は又かたはにも聞くまじきさまに、よくめやすくぞいひなし給ふを、げに有難き御心ばへにもと聞き居たりけり。何事につけても故君の御事をぞ盡せず思ひ給へる。「いはけなかりしほどより世の中を思ひ離れて止みぬべき心づかひをのみならひ侍りしを、さるべきにや侍りけむ、うと

きものからおろかならず思ひそめ奉りしひとふしに、かのほいのひじり心はさすがにたがひやしにけむ、慰めばかりに此處にも彼處にも行きかゝづらひて人の有様を見むにつけて紛るゝこともやあらむなど思ひよるをり侍れど、更にほかさまには靡くべうも侍らざりけり。よろづに思ひ給へわびては心のひく方の強からぬわざなりければ、すぎがましきやうにおぼさるらむと恥しけれど、あるまじき心のかけても侍らばこそめさましからめ、唯かばかりの程にて時々思ふことをも聞えさせ承りなどして隔てなくのたまひ通はむを誰かは咎めいづべき。世の人に似ぬ心のほどは皆人にもどかるまじく侍るを猶うしろやすくを思ほしたれ」など怨みなきみ聞え給ふ。「うしろめたく思ひ聞えは、かく怪しと人も見思ひぬべきまでは聞え侍るべくや。年頃こなたかなたにつけつゝ、見知ることゝもの侍りしかばこそ、さまことなるたのもし人にて今はこれよりなどさへ驚かし聞ゆれ」とのたまへば「さやうなる折も覺え侍らぬものを、いとかしこきことにおぼしおきてのたまはするや、この御山里いでたちいそぎに辛うじてめしつかはせ給ふべき。それもげに御覽じまるかたありてこそはとおろかにやは思ひ侍る」などのたまひて、猶いとものうらめしげなれど聞く人あれば思ふまゝにもいかでかはつゞけ給はむ。との方をながめいだしたれば、やうやう暗うなりにたるに蟲の聲ばかりまぎれなくて、山の方をぐらくて何のあやめも見えぬに、いとまめやかなるさましてよりぬ給へるも煩はしとのみ内にはおぼさる。「限だにある」など、いと忍びやかにうちずじて「思ひ給へわびて侍り。音なしの里ももとめまほしきを、かの山里のわたり

に、わざと寺などはなくとも昔覺ゆる人がたをもつくり繪にも書きとめて行ひ侍らむと  
なむ思ひ給へなりたる」とのたまへば、「哀なる御願ひに又うたてみたらし川近き心ちする。  
人がたこそ思ひやりいとほしう侍れ。こがねもとむる繪師もこそなど、うしろめたうぞ侍る  
や」とのたまへば、「そよそのたくみも繪師もいかでか心にはかなふべきわざならむ。近き世  
に花ふらせたるたくみもはべりけるを、さやうならむへん化の人もかな」などとさまかう  
さまに忘れむ方なきよしを歎き給ふ氣色のいと心深げなるも、いとほしうわづらはしうて  
今少しすべりよりて、「人がたのついでに、いと怪しく思ひよるまじきとをこそ思ひ出で侍  
れ」とのたまふけはひの少しなつかしきも、いと嬉しく哀にて、「何事にか」といふまゝに儿  
帳のまたより手をとらふれば、いとうるさく思ひならるれど、いかさまにしてかゝる心をや  
めてなだらかにあらむと思へば、この近き人の思はむことのあいなくて、さりげなくもてな  
し給へり。「年頃は世にあらむとも知らざりし人の、この夏頃遠き處よりものして尋ね出で  
たりしを、疎くは思ふまじけれど、またうちつけに、さしも何かはむつび思はむと思ひ侍り  
しを、さいつころきたりしこそ、あやしきまで昔の人の御けはひに通ひたりしかば哀に覺え  
なり侍りしか、かたみなど、かう思ほしのたまふめるはなかなか何事もあさましうもてはな  
れたりとなむ皆人々もいひ侍りしを、いとさしもあるまじき人の、いかでかはありけむ」と  
のたまふを夢がたりかともまで聞く。「さるべき故あればこそは、さやうにもむつび聞えらる  
らめ。などか今までかくもかすめさせ給はざらむ」とのたまへば「いさや、その故もいかなり

けむことも思ひわかれ侍らず。物はかなき有様どもにて世にちちとまりさすらへむとす  
らむとのみうしろめたげにおぼしたりしことどもを、唯一人かきあつめて思ひ知られ侍る  
に、又あいなきことをさへ打ち添へて人も聞き傳へむこそ、いといとほしかるべけれ」との  
たまふ氣色を見るに、宮の忍びてものなどのたまひけむ人の、志のふ草摘み置きたりけるな  
るべしと見知りぬ。似たりとのたまふゆかりに耳とまりて、「かばかりにても同じうはいひ  
はてさせ給ひてよ」といふかしがり給へど、さすがにかたはらいたくて、えこまかにも聞え  
給はず。「尋ねむとおぼす心あらば、そのわたりとは聞えつべけれど、委しうはしもえ知らず  
や。又あまりいはゞ御心ちとりもしぬべきことになむ」とのたまへば、「世をうみなかにも  
たまのありかたづねには心の限りす、みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれ  
ど、いとかく慰めむ方なきよりはと思ひより侍る。ひとかたの願ひばかりには、などてかは  
山里のほんぞんにも思ひ侍らざらむ。猶たしかにのたまはせよ」とうちつけにせめ聞え給  
ふ。「いさやいにしへの御許しもなかりしことを、かうまでももらし聞ゆるもかつはいと口  
かるけれど、へん化のたくみもとめ給ふいとほしさにこそ、かくも」とて、「いと遠き所に年  
頃へにけるを母なる人のいとうれはしきことに思ひてあながちに尋ねよりしを、はしたな  
くもえいらへで侍りしにものしたりしなり。ほのかなりしかばにや何事も思ひしほどより  
は見苦しからずなむ見えし。これをいかさまにもてなさむと歎くめりしに、佛にならむはい  
とよなきことにこそはあらめ。さまではいかてかは」など聞えたまふ。さりげなくてかう

うるさき心を、いかてはなつわざもがなと思ひ給へると見るはつらけれど、さすがにあはれなり。あるまじきこと、は深く思ひ給へるものから、けしようにはしたなきさまにはえもてなし給はぬも見知り給へるにこそはと思ふ心時めきに夜もいたう更け行くを、内には人めいとかたはらいたく覺え給ひて、うちたゆめて入り給ひぬれば男君ことわりとは返すがへす思へど、猶いとうらめしう口惜しきに、思ひまづめむ方もなき心ちして涙のこぼるゝも人わろければ、よろづに思ひみだるれど、ひたふるにあさはかならむもてなしはた猶いとうたて我がためもあいなかるべければ、念じかへして常よりもなげきがちにて出て給ひぬ。かくのみ思ひてはいかゞすべからむ、苦しうもあべいかな、いかにしてかは大かたの世のもどきあるまじきさまにて、さすがに思ふ心のかなふわざをばすべからむなど、おちたちれんじたる心ならねばにや、我がため人のためも心安かるまじきことをわりなくおぼしあかす。似たりとのたまひつる人をも、いかてかは誠かとは見るべき、さばかりのきはなれば思ひよらむにかたうはあらずとも人のほいにもあらずは、うるさくこそあるべけれなど、猶そなたさまには心もたゝず、宇治の宮を久しう見給はぬ時はいと昔遠くなる心ちして、すゝろに心ほそければ、ながつきはつがあまりのほどにおはしたり。いとゞしく風のみ吹き拂ひて心すごうあらましげなる水の音のみやどもりにて人かけもことに見えず。見るにまづかきくらし悲しきことぞかぎりなき。辨の尼召し出てたれば、さうじ口に青にびの几帳さし出て、参れり。「いとかしこけれど、ましていと恐しげに待れば、つゝましくなむ」とまほには出てこず。



「いかにながめ給ふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞えむとてなむ。はかなくも積る年月かな」とて涙をひとめうけておはするに、老びとはいとゞ更にせきもあへず、「人のうへにてあいなくものを思ほすめりし頃の空ぞかしと思ひ給へ出づるに、いつと侍らぬ中にも秋の風は身にまみてつらう覺え侍りて、げにかのなげかせ給ふめりしも、老るき世の中の御ありさまをほのかに承るもさまさまになむ」と聞ゆれば、「とあることもかゝることも、ながらふればなほるやうもあるを味氣なくおぼしきみけむこそわがあやまちのやうに猶悲しけれ。この頃の御ありさまは何かそれこそよのつねなれ。されどろろめたげには見え聞え給はざめり。いひてもいひてもむなしき空にのぼりぬる煙のみこそ誰ものがれぬことながら後れさきだつほどは猶いといふかひなかりけれ」とてもまた泣き給ひぬ。阿闍梨召して、例のかの御忌日の經佛のことなどのたまふ。「さて此處にかく時々ものするにつけても、かひなきことの安からず覺ゆるがいとやくなきを、この寢殿こぼちて、かの山寺の傍に堂建てむとなむ思ふを同じうはとく始めてむ」とのたまひて、堂いくつ廊ども僧房などにあるべきことゝも書きいでのたまひなどせさせ給ふを「いとたふときこと」と聞えまらす。「昔の人のゆるある御住まひにまめ造り給ひけむ所をひきこぼたむもなさせなきやうなれど、その御志も功德の方にはすゝみぬべくおぼしけむを、とまり給はむ人々をおぼしやりて、えさはおきて給はざりけるにや。今は兵部卿宮の北の方こそは知り給ふべければ、かの宮の御料ともいひつべくなりたり。さればこゝながら寺になさむことはびんなかるべし。

心にまかせてさもえせじ。所のさまもあまりに川づら近くけまようにもあれば猶寢殿をうしなひてことさまにも造りかへむの心にてなむ」とのたまへば「とさまかうさまにいともしこうたふとき御心なり。むかし、別を悲みてかばねをつゝみてあまたの年くびにかけて侍りける人も佛の御はうべんにて、かのかばねの莖を捨て、遂にひじりの道にも入り侍りにける。この寢殿を御覽するにつけて御心動きはしますらむ。ひとへにたいだいしき御事なり。又後の世の御すゝめともなるべきことに侍りけり。急ぎ仕うまつらすべし。こよみの博士のえらび申して侍らむ日をうけ給はりて物のゆゑまりたらむたくみ二三人をたまはりてこまかなることどもは佛の御教のまゝに仕うまつらせ侍らむ」と申す。とかくのたまひ定めて、みさうの人も召して、このほどのことども阿闍梨のいはむまゝにすべきよしなど仰せ給ふに、はかなく暮れぬればその夜はとゞまり給ひぬ。この度ばかりこそは見めとおぼして、たちめぐりつゝ見給へば、佛も皆かの寺に移してければ尼君のおこなひの具のみあり。いとはかなげに住まひたるを哀にいかにしてすぐすらむと見給ふ。「この寢殿はかへて建つべきやうあり。造り出でむほどはかの廊に物し給へ。京の宮にとり渡さるべきものなどあらば、みさうの人召してあるべからむやうに物し給へ」など、まめやかなることどもを語らひ給ふ。ほかにてはかばかりさだすぎたらむ人を何かと見入れ給ふべきにもあらねど、よるも近くふせて昔物語などせさせ給ふ。故權大納言の君の御有様も聞く人なきに心安くていとこまやかに聞ゆ。「今はとなり給ひしほどに珍しくちはしますすらむ御有様をいぶかしきもの

に思ひ聞えさせ給ふめりし御氣色などの思ひ給へ出でらるゝに、かく思ひかけ侍らぬ世の末に、かくて見奉り侍るなむ、かの御世にむつまじう仕う奉りおきし志るしのおのづから侍りけると、嬉しくも悲しくも思ひ給へ知られ侍る。心うき命のほどにて、かくさまさまのこを見給へすぐし思ひ給へ知り侍るなむ、いと恥しう心うくなむ侍る。宮よりも時々は参りて見奉れ、覺束なくたえ籠りはてぬるは、こよなう思ひへだてけるなめりなどのたまはするをりをり侍れど、ゆゝしき身にてなむ。阿彌陀佛よりほかには見奉らまほしき人もなくなりにて侍る」など聞ゆ。故姫君の御事どもはたつきもせず、年頃の御有様など語りて、何のをりにとのたまひし、花紅葉の色を見ても、はかなくよみ給ひける歌がたりなどを、つきなからずうちわなゝきたれど、こめかしう、ことずくなゝるものから、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ、いと聞きそへ給ふ。宮の御方は今少しいまめかしきものから、心許さゝらむ人のためには、はしたなくもてなし給ひつべくこそものし給ふめるを我にはいと心深くなさせなさせしとは見えて、いかで過してむとこそ思ひ給へれなど心の中に思ひくらべ給ふ。さて物のついでに、かのかたしろのことをいひ出で給へり。「京にこの頃侍らむとはえ知り侍らず。人づてに承りしことのすぢなゝり。故宮のまだかゝる山ずみもし給はず、故北の方うせ給へりけるほど近かりけるころ中將の君とて侍ひける上臈の心ばせなどもけしうは侍らざりけるを、いと忍びてはかなきほどに物のたまはせけるを知る人も侍らざりけるに、をんなごをなむ産みて侍りけるを、さもやあらむとおぼすことのありけるからに、あいなく

煩しうものしきやうにおぼしなりて、またとも御覽じ入るゝことも侍らざりけり。あいなくそのことにおぼしこりて、やがて大かたひじりにならせ給ひにけるを、はしたなく思ひてえ侍はずなりにけるが、みちのくのかみのめになりてくだりけるをひと、せのぼりて、その君たひらかに物し給ふよし、このわたりにもほのかし申したりけるを聞き召しつけて、更にかゝるせうそこあるべきことにもあらずとのたまはせ放ちければ、かひなくてなむ歎き侍りける。さて又常陸になりてくだり侍りにけるが、この年頃おとにも聞え給はざりつるが、この春のぼりてかの宮には尋ね参りたりけるとなむほのぎゝ侍りし。かの君の年ははたちばかりになり給ひぬらむかし。いと美しく生ひ出て給ふが悲しきことなどこそ中頃は文にさへ書きつゝけてなむはべめりしか」と聞ゆ。委しう聞きあきらめ給ひて、さらば誠にてもあらむかし、見ばやと思ふ心出て來ぬ。「昔の御けはひにかけてもふれたらむ人は知らぬ國までも尋ね知らまほしき心ちのあるを、かずまへ給はざりけれど思ふにけぢかき人にこそはあなれ。わざとはなくともこのわたりに音なふ折あらむついでに、かくなむいひしと傳へ給へ」などばかりのたまひ置く。「母君は故北の方の御めひなり。辨も離れぬなからひに侍るべきを、そのかみはほかほかに侍りて委しうも見給へなれざりき。さいつころ京より大輔がもとより申したりしは、かの君なむいかでかの御墓にだに参らむとのたまふなる、さる心せよなど侍りしかど、まだこゝにさしはへてはおとなはず侍るめり。今さらには様のついでにかゝるおぼせごとなど傳へ侍らむ」と聞ゆ。明けぬれば歸り給はむとて、よべ後れてもて参

れる絹綿などやうのもの阿闍梨におくらせ給ふ。尼君にもたまふ。法師ばら尼君のげすども  
の料にとてぬのなどいふものをさへ召してたぶ。心ほそき住ひなれど、かゝる御とぶらひた  
ゆまさりければ身のほどには、いとめやすくまめやかにてなむ行ひける。木枯のたへがたき  
まで吹きとほしたるに、残る梢もなくちりしきたる紅葉をふみ分けゝる跡も見えぬを見わ  
たして、とみにもえ出て給はず。いと氣色ある深山木にやどりたる鳶の色ぞまだ残りたる。  
こだになど少しひきとらせ給ひて宮へとおぼしくてもたせ給ふ。

「やどり木と思ひいはずばこのもとの旅ねもいかにさびしからまし」とひとりごち給ふ  
を聞きて、尼君、

「荒れはつるくち木のもとをやどりさと思ひおさけるほどの悲しさ」。飽くまでふるめき  
たれど、故なくはあらぬをぞいさゝかの慰めにはおぼされける。宮に紅葉奉れ給へれば男宮  
おはしますほどなりけり。南の宮よりとて何心もなくもて参りたるを、女君例のむつかしき  
こともこそと苦しくおぼせど、とりかくさむやは。宮をかしき蔭かな」とたゞならずのたま  
ひてめしよせて見給ふ。御文には「日頃何事かおはしますらむ。山里に侍りていとゞ峯の朝  
霧に惑ひ侍りつる、御物語もみづからなむ。かしこの寢殿、堂になすべきこと阿闍梨に物し  
つけ侍りにき。御許し侍りてこそはほかに移すことも物し侍らめ。辨の尼君にさるべきおほ  
せごととはつかはせ」などぞある。「よくもつれなく書き給へる文かな。まるありとぞ聞きつら  
む」どのたまふも少しはげにさやありつらむ。女君はことなきを嬉しと思ひ給ふに、あなが

ちにかくのたまふをわとなしとおぼしてうち怨じて居給へる御さま、萬の罪も許しつべくをかし。「返事書いたまへ。見しや」とてほかさまにそむき給へり。あまえて書かざらむも怪しければ、「山里の御ありきの羨しくも侍るかな。かしこはげにさやうにてこそよくと思ひ給へしを、殊更に又いはほの中もとめむよりは、あらしはつまじう思ひ侍るを、いかにもさるべきさまになさせ給はゞおろかならずなむ」と聞え給ふ。かうにくき氣色もなき御むつびなめりと見給ひながら我が御心ならひに、たゞならじとおぼすが安からぬなるべし。かれがれなる前裁の中に尾花のものよりことに手をさし出て、招くがをかしう見ゆるに、またほに出でさしたるも露をつらぬきとむる玉の緒はかなげにうちなびきなど、例のことなれど夕風なほ哀なりかし。

「ほにいでぬもの思ふらしまのすゝき招くたもとの露しげくして」。なつかしきほどの御ぞどもに直衣ばかり着たまひて琵琶を弾きむたまへり。わうしき調のかきあはせをいと哀にひきなし給へば、女君も心に入り給へることにて物ゑんじもえしはて給はず、ちひさき御儿帳のつまより脇息によりかゝりて、ほのかにさしいで給へるいと見まほしくらうたげなり。「秋はつるのべの氣色もまのすゝきほのめく風につけてこそしれ。我が身ひとつの」とて涙ぐまるゝがさずがに恥しければ扇をまぎらはしておはする心の中もらうたくおしはからるれど、かゝるにこそ人もえ思ひはなたざらめと疑はしきがたゞならてうらめしきなめり。菊のまだよくもうつろひはてゝ、わざとつくろひたてさせ給へるはなかなかおとぎに、いか

なるひともとにかあらむ。いと見所ありてうつろひたるをとりわきて折らせ給ひて、「花の中にひとへに」とずじ給ひて、「なにがしのみこの、この花めてたる夕ぞかし、いにしへ天人のかけりて琵琶の手教へけるは。何事も浅くなりたる世は物うしや」とて御琴さしおき給ふを、口惜しとおぼして、「心こそ浅くもあらめ、昔を傳へたらむことさへはなどてかさしも」とて、覺束なき手などをゆかしげにおぼいたれば、「さらばひとりごととはさうさうしきにさしいらへ給へかし」とて人召して筆の御琴とりよせさせて弾かせたてまつり給へど、「昔こそまねぶ人もし給ひしかど、はかばかしう聞きもとめずなりにしものを」とてつゝましげにて手もふれ給はねば、「かばかりのことも隔て給へること心うけれ。この頃見るあたりは、まだいと心とくべきほどにもあらねど、かたなりなるうひことをもかくさずこそあれ。すべて女はやはらかに心美しくしきなむよきとこそその中納言も定むめりしか。かの君にはたかうもつゝみ給はじ、こよなき御中なめれば」などまめやかにうらみられてぞうち歎きて少しまらべ給ふ。ゆるびたりければ、ばんしき調にあはせ給ふ。かきあはせなど、つまちとをかしう聞ゆ。伊勢の海謠ひ給ふ御聲のあてにをかしきを女ばら物のうしろに近づき参りて、ふみひろごりてゐたり。「ふたごゝろおはしますはつらけれど、それもことわりなれば猶わがお前をばさいはひびとこそ申さめ。かゝる御ありさまにまじらひ給ふべくもあらざりし年頃の御住まひを又歸りなまほしげにおぼしてのたまはするこそいと心うけれ」など、たゞいひにいへば、若き人々は、「あなかまや」と制す。御ことも教へ奉りなどしつゝ、三四日籠りお

はして、御物忌などことつけ給ふを、かの殿にはうらめしくおぼして、おとづちより出て給ひけるまゝに此處に参り給へれば、宮ことごとしげなるさまして、「何しにいましつるぞとよ」とむつかり給へど、あなたに渡り給ひてたいめし給ふ。「となることなき程はこの院を見て久しうなり侍るも哀にこそ」など昔の御物語など少し聞え給ひて、やがてひきつれ聞え給ひて出て給ひぬ。御子どもの殿ばら、さらぬ上達部殿上人などもいと多くひき續き給へる、御いきほひこちたきを見るに、ならぶべくもあらぬぞくしいたかりける。人々のぞきて見奉りて、「さも清らにおはしけるおとづかな。さばかりいづれともなく若うさかりにて清げにおはさうする御子どもの似給ふべきもなかりけり。あなめてたや」といふもあり、又「さばかりやんごとなげなる御さまにて、わざと御迎に参り給へるこそにくけれ。やすげなの世や」など打ち歎くもあるべし。御自らもさし方を思ひ出づるよりははじめ、かの華やかなる御なからひに立ちまじるべくもあらず、かすかなる身のおぼえをといよいよ心ぼそければ、猶心安く籠り居なむのみこそめやすからめなどいと覺え給ふ。はかなくて年も暮れぬ。むつきのつごもりがたより例ならぬさまに惱み給ふを、宮又御覽じ知らぬことにて、いかならむとおぼし歎きて、みずほふなど所々にてあまたせさせ給ふ。又々始めをへさせ給ふ。いといたう煩ひ給へば、きさいの宮よりも御とぶらひあり。かくて三とせになりぬれど、一所の御志こそあるかならね。太かたの世にはものものしうももてなし聞え給はざりつるを、このをりぞ、いづこにもいづこにも聞し召し驚きて御とぶらひども聞え給ひける。中納言の君は宮



のおぼし騒くらむにも劣らず、いかにおはせむと歎きて心苦しうしろめたくおぼされるれど、限ある御とぶらひばかりこそあれ、あまりもえまうで給はて忍びてぞ御いのりなどもせさせ給ひける。さるは女二の宮の御もぎたゞこのごろになりて世の中ひゞきいとなみのしる。よろづのこと帝の御心ひとつなるやうにおはし急げは、御後見なきしもぞなかなかめでたげに見えける。女御のまおき給へることをばさるものにて、つくもどころさるべきずりやうどもなどとりどりに仕うまつる事どもいと限なし。やがてその程に参りそめ給ふべきやうにありければ、男がたも心づかひし給ふころなれど、例のことなればそなたさまには心もいらで、この御ことのみいとほしうおぼし歎かる。二月のついたちごろに、なほしものとかいふことに權大納言になりて右大將かけ給ひつ。右のおほい殿左にておはしけるが辭し給へる所なりけり。よろこびに所どころありき給ひて、この宮にも参り給へり。いと苦しうし給へば、こなたにおはします程なりければやがて参り給へり。僧などさぶらひて、いとびんなきかたにと驚き給ひて、あざやかなる御なほし、御したがさねなど奉り、ひきつくるひて、おりてたふの拜志たまふ御有様どもとりどりにいとめてたし。やがて今宵つかさの人に祿たまふ。あるじの所にとさうじ奉り給ふを、惱み給ふ人によりてぞおぼしたゆたひ給ふめる。左のおほい殿のま給ひけるまゝにとて六條院にてなむありける。ゑんがのみこたち、上達部、大掣に劣らず、あまりさわがしきまてなむつどひ給ひける。この宮もわたり給ひて、まづ心なければまだことはてぬに急ぎ歸り給へるを、おほい殿の御方には「いと飽かずめさま

しうどのたまふ。劣るべうもあらぬ御程なるを只今のおぼえの華やかさにおぼしおごりて  
おしたちもてなし給へるなめりかし。からうじてその曉に男にてうまれ給へるを、宮もいと  
かひあるさまにて嬉しくおぼしたり。大將殿も喜びに添へて嬉しくおぼす。よべおはしまし  
たりしかしこまりに、やがてこの御よろこびも打ち添へてたちながら参り給へり。かく籠り  
おはしませば参り給はぬ人なし。御うぶやしなひ三日は例の唯宮の御わたくしごとにて、五  
日の夜、大將殿よりとんじき五十具、ごてのせに、わうはんなどは世のつねのやうにて、こも  
ちのお前のつかさね三十、ちごの御ぞいつへがさねにて御むつきなどぞごとしからず  
忍びやかにまなし給へれど、こまかに見ればいとわざとめなれぬ心ばへにぞ見えける。宮の  
お前にも、せんかうのをしき、たかつきどもにて、ふすく参らせたまへり。女房のお前にはつ  
いかさねをばさるものにて、ひわりご三十、さまざまつくしたることどもあり。人目にこ  
とごとしくはことさらまなし給はず。七日の夜はきさいの宮よりの御うぶやしなひなれば  
参り給ふ人々と多かり。宮の大夫をはじめ殿上人上達部數知らず参り給へり。内にも聞  
し召して、宮の始めておとなび給ふなるにはいかでかはとのたまはせて御はかし奉らせ給  
へり。九日も、おほい殿より仕うまつらせ給へり。よろしからずおぼすあたりなれど宮のお  
ぼさむ所あれば、御子の君達など参り給ひて、すべていと思ふことなげにめでたければ、御  
みづからも月頃物思はしく心ちの惱しきにつけても心ぼそうおぼしわたりつるに、かくお  
もだ、しう今めかしき事どもの多かれば少しは慰みもやま給ふらむ、大將殿は、かくのみお

となびはて給ふめればいとわがたさまはけどほくやならむ、又宮の御志も、えちるか  
ならじと思ふは口惜しけれど又始よりの心おきてを思ふにはいとうれしうもあり。かくて  
その月二十日あまりのほどにぞ、藤壺の宮の御もぎのことありて、またの日なむ大將参り給  
ひける。その夜のことは忍びたるさまなり。天の下ひびきていつくしく見えつる御かしづき  
にたゞ人のくし奉り給ふぞ猶飽かず心苦しく見ゆる。「さる御ゆるしはありながらも只今か  
くしも急かせ給ふまじきことぞかし」とぞしらはしげに思ひのたまふ人もありけれど、おぼ  
したちぬることすがすがしうおはします御心にて、さし方のためしなままで同じくばもて  
なさむとおぼしおきつるなめり。みかどの御婿になる人は昔も今も多かれど、かく盛の御世  
にたゞ人のやうに婿とり急かせ給へるたぐひは少くやありけむ。左のおとこも珍しかりけ  
る人の御おぼえ宿世なり。「故院だに朱雀院の御未にならせ給ひて、今はとやつし給ひしき  
はにこそかの母宮をえ奉り給ひしか、我はまいて人も許されぬものを、ひろひたりしや」と  
のたまひつれば宮はげにとおぼすに、恥しうて御いらへもえま給はず。三日の夜は大藏卿よ  
りはじめて、かの御かたの心よせになさせ給へる人々けいしにおほせごとたまひて忍びや  
かなれど、かのごせん、隨身、車ぞひ、舍人などまで祿たまはず。そのほどのことは私ごと  
のやうにぞありける。かくてのちは忍び忍びに参り給ふ。心のうちには猶忘れ難きいにしへ  
さまのみ覺えて、晝は里に起き臥しながめくらして暮るれば心よりほかに急ぎ参り給ふも、  
ならばぬ心ちにいと物うく苦しうて、まがてさせ奉らむことをぞおぼしおきてける。母宮は

いと嬉しきことにおぼして、おはします寢殿を譲り聞え給ふべくのたまへど、いとかたじけなからむとて御ねんず堂のあはひに廊をつゞけて造らせ給ふ。西おもてにうつろひ給ふべきなめり。ひんがしの對どもなども焼けて後、麗しくあたらしくあらまほしきをいよいよ磨きそへつゝこまかにまつらはせ給ふ。かゝる御心づかひを内にも聞し召して程なく打ち解けうつろひ給はむをいかゞとおぼしたり。帝ときこゆれど心のやみは同じことになむおはしましける。母宮の御許に御使ありける御文にも唯この御事をのみなむ聞えさせ給へりける。故朱雀院のとりわきてこの尼君の御ことをば聞え置かせ給ひしかば、かく世をそむき給へれどおとろへず何事もとのまゝに、奏せさせ給ふことなどは必ず聞し召しいれ、御用意深かりけり。かくやんごとなき御心どもに、かたみに限りもなくもてかしづきさわがれ給ふおもだゝしさも、いかなるにかあらむ、心のうちには殊に嬉しくも覺えず、猶ともすれば、うちながめつゝ宇治の寺造ることをば急がせ給ふ。宮の若君のいかになり給ふ日、かぞへとり給ひて、そのもちひのいそぎを心に入れて、こものひわりごなどまでみいれつゝ、よのつねのなべてにはあらずとおぼし心ざして、ぢん、紫檀、しろがね、こがねなど道々の細工どもいと多く召し侍はせ給へば、我劣らじとさまさまの事どもをまいつめり。みづからも例の宮のおはしまさぬひまにおはしたり。心のなしにやあらむ、今少しもおもしろく、やんごとなげなる氣色さへ添ひにたりと見ゆ。今はさりともしつかりしごとなどは思ひまぎれ給ひにたらむと心安くてたいめし給へり。されどありしなからの氣色にまづ涙ぐみて「心に

もあらぬまじらひいとゞ思のほかなるものにこそと、世を思ひ給へ亂るゝことのみなむま  
さりにたる」と、あいたちなくぞ憂へ給ふ。「いとあるまじき御ことかな。人もこそおのづから  
ほのかにも漏り聞き侍れ」などはのだまへど、がばかりめてたげなる事どもにもなくさま  
忘れがたう覚え給ふらむ心深さよと哀に思ひ聞え給ふに、おろかにもあらず思ひ知られたま  
ふ。おはせましかばと口惜しう思ひ出て聞え給へど、それもわが有様のやうにうらやみなく  
身を怨むべかりけるかし、何事も數ならでは世の人めかしきともあるまじかりけりと覺ゆる  
にぞ、いとゞかの打ち解けはてゝやみなむと思ひ給へりし御心おきては猶殊に重々しう思  
ひ出でられ給ふ。若君をせちにゆかしがり聞え給へば、恥しけれど何かはへだて顔にもあら  
む、わりなきことひとつにつけて怨みらるゝよりほかにはいかでこの人の御心にたがはじと  
おぼして、自らはともかくもいらへ聞え給はて、めのとしてさしいてさせ給へり。さらなるこ  
となれば、にくげならむやは。ゆゝしきまで白く美しくうて、たかやかに物語し、うちゑみ給  
へる顔を見るに我がものにて見まほしう、うらやましきも世の思ひはなれがたくなりぬる  
にやあらむ。されどいふかひなくなり給ひにし人の世の常の有様にてかやうならむ人をも  
とゞめおき給へらましかばとのみ覺えて、この頃おもだゝしげなる御あたり、いつしかな  
どは思ひよらぬこそあまりすべなき君の御心なめれ。かくめゝしくねぢけて、まねびなすこ  
そいとほじけれ。まかわろびかたほならむ人を帝のとりわきせちに近づけてむつび給ふべ  
きにもあらじものを、まことしきかたさまの御心おきてなどこそはめやすくものし給ひけ

めとぞ推し量るべき。げにいとかく幼きほどを見せ給へるも哀なれば例よりは物語などこまやかに聞え給ふほどに、暮れぬれば心やすく夜をだにふかすまじきを苦しう覺ゆれば、なげくなげく出て給ひぬ。「をかしの人の御にほひや。をりつればとかいふやうに鶯も尋ね來ぬべかめり」など煩しがる若き人もあり。夏にならば三條の宮ふたがる方になりぬべしと定めて、うづき朔日頃せちぶんとかいふこと、またしきさきに渡し奉りぬ。あすとの日、藤壺にうへわたらせ給ひて藤の花の宴させ給ふ。南の廂の御簾あげて御いたてたり。おほやけわざにて、あるじの宮の仕うまつり給ふにはあらず。上達部殿上人のきやうなど藏づかさより仕うまつれり。左のおとと、按察の大納言、藤中納言、左兵衛督、みこ達は三宮、常陸宮などさぶらひ給ふ。南の庭の藤の花のもとに殿上人の座はまたり。こうらう殿のひんがしにかくその人々召して暮れ行くほどに、さう調吹きて、うへの御あそびに宮の御方より御琴ども笛などいださせ給へば、おととをはじめ奉りてお前にとりつゝ参り給ふ。故六條院の御手づから書き給ひて入道宮に奉らせ給ひし、きんの譜二卷、五葉の枝につけたるをおとと取り給ひて奏し給ふ。つぎつぎに、きん、さうの御琴、琵琶、和琴など朱雀院のものどもなりけり。笛はかの夢につたへしいにしへのかたのみをまたなきものゝ音なりとめてさせ給ひければ、このをりのきよらより又はいつかはえはえしきついでのあるらむとおほして、とうて給へるなめり。おとと、和琴、三宮琵琶、とりどりにたまふ。大將の御笛はけふぞ世になき音のかざりは吹きたて給ひける。殿上人の中にもさうがにつきなからぬどもは召し出でつゝ、いと

もしろう遊ぶ宮の御方よりふすくまゐり給ふ。沈の折敷四つ、紫檀のたかつき、藤のむらごの打敷にをりえだぬひたり。しろがねのやうき、瑠璃の御さかつき、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛督まかなひ仕うまつり給ふ。御盃まゐり給ふに、おとこまきりてはびんなかるべし、宮達の御中に、はたさるべきおはせねば大將にゆづり聞え給ふを憚り申し給へど、御氣色もいかゞありけむ御盃捧げて、「をし」とのたまへるこわづかひもてなしさへ例のおほやけごとなれど人に似ず見ゆるも、けふはいとこみなしさへ添ふにやあらむ。さし返し給はりて、おりて舞踏し給へる程いとたくひなし。上臈のみ子達おとこなどのたまはり給ふだに、めてたきことなるを、これはまして御婿にて、もてはやされ奉り給へる御おぼえおろかならず珍しきにかぎりあればくだりたる座に歸りつき給ふ程、心苦しきまでぞなむ見えける。按察の大納言は我こそかゝるめも見むと思ひしか、ねたのわざやと思ひ居給へり。この宮の御母女御をぞ昔心かけ聞え給へりけるを参り給ひて後も猶思ひはなれぬさまに聞えかよはしなどし給ひて、はては宮をえ奉らむの心つきたりければ御後見望む氣色もらし申しけれど、聞し召しだに傳へずなりにければいと心やましと思ひて「人がらはげにちぎりことなめれど、なぞ時の帝のかくちどろちどろしきまで、むこかしづきし給ふべき、またあらじかし。九重の内におはします殿近きほどにて唯人の打ち解け侍ひて、はては宴や何やともてさわがるゝことは「などいみじうそしりつよやき申し給ひけれど、さすがにゆかしければ参りて心の中にぞ腹立ち給ひける。紙燭さして歌ども奉る。ぶんだいのもとによりつゝ、おくほどの氣色は

おのちのまたり顔なりけれど、例のいかに怪しげにふるめいたりけむと思ひやれば、あながちに皆も尋ねかゝず。かみのまちも上臈とて御口つきどもは異なること見えざめれど、まるしばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。これは大將の君のおりて御かざしをりて参り給へりけるとか。

「すべらぎのかざしにをると藤の花およばぬえだに袖かけてけり」。うけばりたるぞにくきや。

「よろづ世をかけてにほはむ花なればけふをもあかぬ色とこそみれ」。またたれとか、  
「君がためをれるかざしは紫の雲におとらぬ花のけしきか」。

「世のつねの色とも見えす雲井までたちのぼりける藤なみの花」。これやこのはらだつ大納言のなりけむとこそ見ゆれ。かたへはひがごとにもやありけむ、かやうにことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし。夜ふくるまゝに御あそびいとおもしろし。大將の君の、あなたふと謠ひ給へる聲ぞ限なくめてたかりける。按察も昔勝れ給へりし御聲のなごりなれば今もいとものしうてうちあはせ給へり。左のおほい殿の御七郎、わらはにてさうの笛ふく、いと珍しかりければ御ぞたまはす。おとどちりて舞踏し給ふ。曉近くなりてなむ歸らせ給ひける。祿ども、上達部、みこ達にはうへよりたまはす。殿上人がくその人々には宮の御方より品々に賜ひけり。そのよさりなむ宮まかてさせ奉り給ひける。儀式いと心ことなり。うへの女房さながら御送仕うまつらせ給ひける。ひさしの御車にて、ひさしなき糸毛三つ、び



らうげのこがねづくり六つ、たゞのびらうげ二十、網代二つ、女房三十人、わらはまもづかへ  
八人づゝ侍ふに、又迎のいだし車十二、ほんぞの人々のせてなむありける。御送の上達部殿  
上人、六位など、いふかぎりなう清らをつくさせ給へりけり。かくて心安くうち解けて見奉  
り給ふにいとをかしげにおはす。さゝやかにあてにまめやかにて、こゝはと見ゆる所なくお  
はすれば宿世の程口惜しからざりけりと心おごりせらるゝものから、過ぎにし方の忘れ  
ばこそはあらめ、猶まざるゝをりなく物のみ戀しく覺ゆれば、この世にては慰めかねつべき  
わざなめり。佛になりてこそは怪しくつらかりける契のほどを何の報とあきらめて思ひは  
なれめと思ひつゝ、寺のいとぎにのみ心を入れ給へり。加茂の祭など、さわがしきほど過し  
て、二十餘日のほどに例の宇治へおはしたり。造らせ給ふ御堂見給ひて、すべきことどもお  
きてのたまひなどして、さて例の朽木のもとを見給ひ過ぎむが猶哀なれば、そなたさまにお  
はするに、女車のことごとしきさまにはあらぬひとつ、あらましきあづまをとこの腰に物お  
へるあまた具して、まも人数多たのもしげなる氣色にてはしより今渡りくる見ゆ。田舎び  
たるものかなと見給ひつゝ、殿はまづ入り給ひて、ご前どもなどは又たち騒ぎたるほどに、こ  
の車もこの宮をさしてくるなりけりと見ゆ。御隨身どもかやかやといふをせいし給ひて「何  
人ぞ」と問はせ給へば聲うちゆがみたるもの、「常陸の前司殿の姫君の初瀬の御寺にまうで  
ゝ歸り給へるなり。初めもこゝになむやどり給へりし」と申すに、おいや、聞きし人なりと  
おぼし出で、人々をばことかたにかくし給ひて、「はや御車入れよ。此處に又ひとやどり給

へど北面になむ」といはせ給ふ。御供の人も皆狩衣姿にてことごとしからぬ姿どもなれど猶  
けはひやゑるからむ、煩はしげに思ひて、皆馬どもひきさげなどしつゝ、かしてまりつゝぞを  
る。車は入れて廊の西のつまにぞよする。この寢殿はまだあらはにて簾垂もかけず、おろし  
籠めたる中の二まに立て隔てたるさうじの穴より覗き給ふ。御ぞの鳴れば、ぬぎおきてなほ  
し指貫のかぎりを着てぞおはする。とみにもちりて尼君にせうそして、かくやんごとなげ  
なる人のおはするをたれぞなどあないするなるべし。若は車をそれと聞き給へるより、ゆめ  
その人にまろありとの給ふなど、まづ口がためさせ給ひてければ皆さ心得て、「はやおりさせ  
給へ。まらうどはものし給へどこと方になむ」といはせたり。若き人のある、まづおりて籠垂  
うちあくめり。御前どものさまよりはこのおもとなれてめやすし。又おとなびたる人今一人  
ありて、「早う」といふに、「怪しくあらはなる心ちこそすれ」といふ聲、ほのかなれどいとあ  
てやかに聞ゆ。「例の御ことこなたはささささささささささささささささささささささささ  
又いづくのあらはなるべきぞ」と心をやりていふ。つゝましげにおるゝを見ればまづかしら  
つきやうだいほそやかに、あてなる程はいとよう物思ひ出でられぬべし。扇をつとさしかく  
したれば顔は見えぬ程心もとなくて胸打ち潰れつゝ見給ふ。車はたかく、おるゝ所はくだり  
たるをこの人々は安らかにおりなしつれど、いと苦しげにやゝ見て久しくおりてぬざり入  
る。濃さうちきに罌麥とおぼしき細長、わかなへ色の小うちさ着たり。四尺の屏風をこのさ  
うじにそへて建てたるが、かみより見ゆる穴なれば残るべくもあらず。こなたをばうしろめ

たげに思ひて、あなたさまに向きてごそひふしぬる。」さも心苦しげにおはしましたつるかな。いづみ河の船わたりも誠にけふはいと恐しうことありつれ。この二月には水のすくなかりしかばよかりしなりけり。いでやありきは、あづまぢを思へばいつか恐しからむ」など、ふたりして苦しとも思ひたらずいひぬるに、まうはおともせてひれふしたり。かひなをさし出でたるが、まろらかにをかしげなる程も常陸殿などいふべくも見えず誠にあてなり。やうやう腰痛きまでたちすくみ給へど人のけはひせじとて猶動かで見給ふに、若き人「あなからばしや。いみじきかうのかこそすれ。尼君のたき給ふにやあらむ」とおどろく。おい人「誠にあなめでたのもの、香や。京びとはなほいとこそみやびかに今めかしけれ。てんがにいみじきこと、おぼしたりしかど、あづまにてかゝるたきもの、香はえあはせ出で給はざりきかし。この尼君のすまひは、かくいとかすかにははすれど、さうぞくのあらまほしう、にび色あを色といへどいとさよらにぞあるや」など響め居たり。あなたのすのこよりわらはきて、「御湯など参らせ給へ」とてをしきどもとりつゞきてさし入る。くだものとりよせなどしてものけ給はる。これなどおこせど驚かねば、ふたりして栗などやうのものにやほろほるとくふも、聞き知らぬ心ちにはかたはらいたくてまぞき給へど、又ゆかしくなりつゝ猶たちよりたちより見給ふ。これよりまさるきはの人々を、ささいの宮をはじめて、こゝかしこにてかたちよきも心あてなるをもこゝらあくまで見ならし給ふべけれど、おぼろけならては目も心もとどまらず、あまり人にもどかるゝまでものし給ふ御心ちに只今は、なにばかりすぐれて

見ゆることもなき人なれど、かくたちざりがたくあながちにゆかしきもいとあやしき心なり。尼君はこの殿の御方にも御せうそこ聞え出したりけれど「御心ちなやましとて今のほどうちやすませ給へるなり」と御供の人々心まらひていひたりければ、この君を尋ねまほしげにおぼしのたまひしかば、かゝる序に物いひふれむとおぼすによりて、日を暮し給ふにやと思ひて、かく覗き給ふらむとは知らず、例のみさうのあづかりどもの参れるわりごやなにやとこなたにも入れたるを、あづまびとにもくはせなどことども行ひおきて、うちけさうじてまらうどの方に來たり。響めつるさうぞく、げにいとかはらかにて、みめも猶よしよししく清げにぞある。「きのふちはしつきなむと待ち聞えさせしを、などかけふも日たけては」といふめれば、このちい人、「いと怪しう苦しげにのみせさせ給へれば、きのふはこのいづみ河のわたりにとどまりて、けさもむごに御心ちためらひて」など、いちへておこせば、今ぞおきゐたる、尼君をはぢらひて、そばみたるかたはらめ、これよりはいとよく見ゆ。誠にいとよしあるまみの程、かんざしのわたり、かれをも委しくつくづくとしも見給はざりし御かほなれど、これを見るにつけて唯それと思ひ出でらるゝに例の涙おちぬ。尼君のいらへうちする聲はひのほのかなれど宮の御方にもいとよく似たりと聞ゆ。哀なりける人かな、かゝりけるものを今まで尋ねもまらで過しけることよ、これより口惜しからむきはの老ならむゆかひにてだに、かばかり通ひ聞えたらむ人を見ては、おろかにえ思ふまじき心ちするに、ましてこれは知られ奉らざりければ、誠に故宮の御子にこそはありければと見なし給ひては限な

う哀にうれしく覺を給ふ。只今もはひよりて世の中におはしけるものをついに慰めまほし、蓬萊まで尋ねて、かんざしのかぎりを傳へて見給ひけむ帝は猶いといふせかりけむ、これはこと人なれど慰め所ありぬべきさまなりと覺ゆるは、この人に契のおはしけるにやあらむ。尼君は物語少しまてとく入りぬ。人の咎めつるかをりを近くて覗き給ふなめりと心得てければ、打ち解けごとも語らはずなりぬるなるべし。日も暮れもて行けば君もやをら出で、御ぞなど着給ひてぞ、例召し出づるさうじ口に尼君召し出で給ひて、ありさまなど問ひ給ふ。「をりしも嬉しくまうできあひたるをいかにぞ、かの聞えしことは」とのたまへば「まかおほせごと侍りし後は、さるべきついで侍らばと待ち侍りしに、こそは過ぎてこの二月になむ、初瀬詣のたよりに對面して侍りし。かの母君に思し召したるさまは、ほのめかし侍りしかば、いとかたはらいたく忝き御よそへにこそは侍るなれとなむ侍りしかど、そのころほひはのどやかにちほはしまさずとうけ給はりし。をりびんなく思ひ給へつゝみてなむ、かくなども聞えさせ侍らざりしを、又この月にもまうて、けふ歸り給へるなめり。行きかへりの中やどりには、かうむつびらるゝも唯過ぎにし御けはひを尋ね聞えらるゝ故になむ侍るめる。かの母君はさはることありて、このたびはひとり物し給ふめれば、かくおはしますとも何かは物し侍らむ」と聞ゆ。「田舎びたる人どもに忍びやつれたるありきも見えじとて口がためつれどいかゞあらむ。げすどもは隠れあらじかし。さていかゞすべき。一人物し給ふらむこそなかなか心やすかなれ。かく契深くてなむ参りさあひたると傳へ給へかし」とのたまへ

ば、「うちつけにいつのほどなる御契にかは」とうち笑ひて、「さらばあか傳へ侍らむ」とてい  
るに、

「かほ鳥の聲もきしにかよふやとまげみをわけて今日ぞ尋ぬる」。唯口ずさみのやうに  
のたまふを、入りてかたり聞えけり。

### 東 屋

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、は山のまげりまであながちに思ひ入らむも、い  
と人ぎゝかろがるしう、片腹痛かるべき程なれば、おぼし憚りて御せうそこをだにえ傳へさ  
せ給はず。かの尼君の許よりぞ母北の方にのたまひしさまなど、たびたびほのめかしおこせ  
けれど、まめやかに御心とまるべきことゝも思はねば、唯さまざまも尋ね知り給ふらむことゝ  
ばかり、をかしう思ひて、人の御ほどの只今の世にありがたげなるをも、かずならましかば  
などぞ萬に思ひける。かみの子どもは母なくなりけるなどあまた、このはらにも姫君とつ  
けてかしづくあり。また幼きなどすぎすぎに五六人ありければ、さまざまにこのあつかひを  
しつゝこと人と思ひ隔てたる心のありければ、常にいとつらきものにかみをも怨みつゝ、い  
かて引きすぐれて、おもだゝしき程にまなしても見えにしがなど、明暮この母君は思ひあつ  
かひける。さまざまのなのめにとりまぜてもありぬべくは、いとかうしも何かは苦しきま

でももてなやまし。同じこと思はせてもありぬべき世を物にもまじらず哀にかたじけなくおひ出で給へば、あたらしく心苦しきものに思へり。むすめ多かりと聞きてなまきんだちめく人々もおとなひいふ、いとあまたありけり。初の腹の二三人は皆さまさまにくばりておとなひさせたり。今はわが姫君を思ふやうにて見奉らばやと明暮まもりてなてかしづくこと限なし。かみも賤しき人にはあらざりけり。上達部のすぢにて、なからひも物きたなき人ならず徳いかめしうなどあれば、ほどほどにつけては思ひあがりて家の内もきらきらしく物清げに住みなし、ことごのみしたる程よりは怪しうあら、かに田舎びたる心ぞつきたりける。若うよりさるあづまの方の遙なる世界にうづもれて年経ければにや、聲などほどほどうちゆがみぬべく、物うちいふ少しだみたるやうにて、がうけのあたりおそろしく煩はしきものに憚りおぢ、すべていとまたくすさまなき心もあり、をかしきさまに琴笛の道はとほう、弓をなむいとよく引きける。なほなほしきあたりともいはず勢ひにひかされてよき若人どもつとひ、さうぞく有様はえならず整へつゝ、腰折れたる歌合物語庚申をし、まばゆく見苦しく遊びがちにこのめるを、この懸想の君達らうらうしくこそあるべけれ。かたちなむいみじかなるなど、をかしきかたにいひなして心を盡しあへる中に、左近少將とて年廿二三ばかりのほどにて心ばせまめやかに、さえありといふかたは人に許されたれど、きらきらしう今めいてなどは、えあらぬにや、通ひし所なども絶えていとねんごろにいひわたりけり。この母君あまたかゝることいふ人々の中にこの君は人からもめやすかなり。心定りて物思ひ知

りぬべかめるを、人もあてなりや、これよりまさりてことごとしききは人はた、かゝるあたりを、さはいへど尋ねよらしと思ひて、この御方に取りつぎて、さるべきをりをりはをかしきさまに返事などせさせ奉る。心ひとつに思ひまうけて、かみこそおろかに思ひなすとも我は命をも譲りてかしづきてむ、さまかたちのめでたきを見つきなば、さりともおろかになどはよも思ふ人あらじとおもひたちて八月ばかりと契りてうどをまうけ、はかなきあそびものをせさせても、さまことにやうをかしう蒔繪らてんのこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものをばこの御方にと取りかくして、おとりのをこれなむよきとて見すれば、かみはよくしも見知らず、そこはかとなきものどもの、人のてうどといふ限は唯取り集めてならべすゑつゝ、めをはつかにさし出づるばかりにて、琴琵琶の師とて内教坊のわたりより迎へとりつゝならはす。手ひとつひきとれば師を立ちるをがみて喜び、祿を取らすること埋むばかりにてもてさわぐ。はやりかなるこくの物など教へて、師とをかしき夕暮などに弾き合せて遊ぶ時は涙もつゝますをこがましきまてさすかに物めでたたり。かゝる事どもを母君は少し物のゆゑまりて、いと見苦しと思へばことにあへしらはぬを、あこをば思ひおとし給へりと常に怨みけり。かくてかの少將契りし程を待ちつけて、同じくは疾くとせめければ我心ひとつにかう思ひいそぐもいとつゝまじう、人の心の知りがたさを思ひて、初より傳へそめける人の來たるに近う呼び寄せて語らふ。「よろづ多く思ひ憚ることのあるを、月頃かうのたまひて程の經ぬるを、なみなみの人にも物し給はねば、かたじけなう心苦しうて、かう思ひ



立ちにたるを親などものし給はぬ人なれば、心ひとつなるやうにて片腹いたう、打ちあはぬさまに見え奉ることもやとかねてなむ思ふ。若き人々あまた侍れど。思ふ人具したるはおのづからと思ひゆづられてこの君の御ことをのみなむ、はかなき世の中を見るにもうしろめたくいみじきを、物おぼし知りぬべき御心さまと聞きて、かうよろづのつゝまじさを忘れぬべかめるに、若し思はずなる御心ばへもみえば人わらへに悲しうなむあるべき」といひけるを、少將の君にまうて、まかまかなむと申しけるに氣色あしくなりぬ。「初より更にかみの御娘にあらずといふことをなむ聞かざりつる。同じことなれど人ぎもけおとりたる心地して、出いりせむにもよからずなむあるべき。ようもあないせでうかひたること傳へける。このたまふに、いとほしくなりて、「くはしくも知り給へず、女どもの知るたよりにて仰ごとを傳へはじめ侍りしに、なかにかしづく娘とのみ聞き侍れば、かみのにこそはとこそ思ひ給へつれ、こと人の手も給へらむとも問ひ聞き侍らざりつるなり。かたち心も勝れてものし給ふこと母上のかなしうし給ひて、おもだしうけだかきことをせむとあがめかしづかると聞き侍りしかば、いかでかのへんのこと傳へつべからむ人もがなとのたまはせしかば、さるたより知り給へりと取り申しなり。更にうかひたる罪侍るまじきことなり」と腹悪しく詞多かるものにて申すに、君いとあてやかならぬさまにて、「かやうのあたりにいき通はむ人のをさをさ許さぬことなれど、今やうのことにて咎あるまじうもてあがめて後見だつに罪隠してなむあるたぐひもあめるを、同じととうちうちには思ふとも、よその覺えなむへ

つらひて人いひなすべき。源少納言讃岐の守などのうけばりたる氣色にて出て入らむに、かみにもをさを受けられぬさまにてまじらはむなむ、いと人げなかるべき」とのたまふ。この人つゝるそうありうたてある人の心にてこれをいと口惜しう、こなたかなたにいとほしう思ひければ、「誠にかみの娘とおぼさば、まだ若うなどおはすともまか傳へ侍らむかし。中にあたるなむ姫君とてかみはいとかなしうま給ふなる」とさこゆ。「いさや初よりまかいひよれることをおきて又いはむこそうたてあれ。されどわがほいは、かのかんのぬしの人からもものしく、おとなしき人なれば後見にもせまほしう見る所ありて思ひ始めしことなり。もはら顔かたちの勝れたらむ女のねがひもなし。まなあてに艶ならむ女を願はゞやすく得つべし。されどさびしうことうち合はぬみやび好める人のはてはては物清くもなく人にも人とも覺えたらぬを見れば、少し人に譏らるゝともなだらかにて世の中をすぐさむ事を願ふなり。かみにかくなむと語らひて、さもとゆるす氣色あらば何かはさも」とのたまふ。この人は妹のこの西の御方にあるたよりに、かゝる御文なども取り傳へ始めけれど、かみには委しくも見え知られぬものなりけり。たゞいきにかみの居たりける前に行きて、「とり申すべきことありてなむ」といはす。かみこのわたりに時々出入はすと聞けど、前には呼び出でぬ人の何事いひにかあらむとなま荒々しき氣色なれど、「左近少將殿の御せうそにてなむ侍ふ」といはせればあひたり。語らひ難げなる顔して近う居寄りて、「月頃うちの御方にせうそ聞えさせ給ふを御ゆるしありて、この月の程にと契り聞えさせ給ふこと侍るを、日を

はからひ、いつしかとおもほす程にある人の申しけるやう、誠に北の方の御腹にもおし給へど、かんの殿の御娘にはおはせず、きんだちのおはし通はむに、世の聞えなむ詔ひたるやうならむ、ずりやうの御婿になり給ふ。かやうの君達は唯私の君の如く思ひかしづき奉りて、手に捧げたるごとと思ひあつかひ後見奉るにかゝりてなむ、さるふるまひし給ふ人々ものし給ふめるを、さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、をさをさうけられたまはて、けおとりておはし通はむことびんなかりぬべきよしをなむ、せちに譏り申す人々あまた侍るなれば、只今おぼし煩ひてなむ。初めより唯きらきらしう人の後見と頼み聞えむに堪へ給ふべき御覺えをえらび申して聞えはじめ申し、なり。更にこと人物し給はむといふこと知らざりければ、もとの御志のまゝに、まだ幼きもあまたおはすなるをゆるい給はむいと嬉しくなむ。御氣色見てまうでこと仰せられれば」といふに、守「更にかゝる御せうそこ侍るよし委くうけたまはらず。誠に同じ事に思ひ給ふべき人なれど、善からぬわらはへあまた侍りてはかばかしからぬ身にさまさま思ひ給へあつかふ程に、母なるものも、これをこと人と思ひ分けたることくねりいふこと侍りて、ともかくも口入れさせぬ人のことに侍れば、ほのかにまかなむ仰せらるゝ事侍るとは聞き侍りしかど、なにがしをとり所におぼしける御心は知り侍らざりけり。さるはいとうれしく思ひ給へらるゝ御事にこそ侍るなれ。いとらうたしと思ふめのわらは侍り。あまたの中にこれをなむ命にもかへむと思ひ侍る。のたまふ人々あれど今の世の人の御心定めなく聞え侍るに、なかなか胸痛き目をや見むの憚りに思ひ定む

る事もなくてなむ。いかでうしろ安くも見給へ置かむと明暮かなしく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、故大將殿にも若くより参り仕うまつりき。家の子にて見奉りしにいときやうざくに仕うまつらまほしと心つきて思ひ聞えしかど、はるかなる所に打ち續きて過し侍る年頃の程に、うひうひしく覺え侍りてなむ、参りも仕うまつらぬを、かゝる御志の侍りけるを、返すがへすかしまりながら仰のごと奉らむは易き事なれど、月頃の御心たがへたるやうに、この人思ひ給へむことをなむ思ひ給へ憚り侍る」といとこまやかにいふ。よろしげなめりとうれしく思ふ。「何かとおぼし憚るべきにも侍らず。かの御志は唯ひと所の御ゆるし侍らむを願ひおぼして、いはけなく年足らぬほどにおはすとも。しんじちの親のやんごとなく思ひおきて給へらむをこそほいかなふにはせめ。もはらさやうのほとりばみたらむふるまひすべきにもあらずとなむのたまひつる。人がらはいとやんごとなく、おぼえ心にくくおはする君なりけり。若き君達としてすぎさしくあてびてもおはしまさず、世の有様もいとよく知り給へり。領じ給ふ所々もいと多く侍り。まだころの御徳なきやうなれど、おのづから人の御けはひのありけるやう、なほびとの限なき富といふめる勢ひには優り給へり。來年四位になり給ひなむ、こたびのとうは疑ひなく帝の御口づからごて給へるなり。よろづの事たらひてめやすき朝臣のめをなむ定めざるはや、さるべき人えりて後見を設けよ、上達部にはわれしあれば、けふあすといふばかりになしあげてむとこそおほせらるなれ。何事もたゞこの君ぞ帝にも親しく仕うまつり給ふなる。御心はた、いみじうかうざくに重々しくなむ

おはしますめる。あたらの人の御婿を、かう聞え給ふ程に思ほし立ちなむこそよからめ。かの殿には、我も我も婿とり奉らむと所々侍るなれば、こゝに去ぶ去ぶなる御けはひあらばほかさまにもおぼしなりなむ。これ唯うしろ安きことをとり申すなり」と、いと多くよげにいひつゞくるに、いとあさましく鄙びたるかみにて、打ちゑみつゝ聞き居たり。「この頃の御徳などの、心もとなからむ事はなのたまひそ。なにがしいのち侍らん程は、いたゞきにも捧げ奉りてむ。心もとなく何を飽かぬとかおぼすべき。たとひあへずして仕うまつりさしつとも、のこりの寶物領じ侍る所々、ひとつにても又とり争ふべき人なし。子ども多く侍れど、これはさまことに思ひそめたるものに侍り。唯まごゝろにおぼしかへりみさせ給はゞ、大臣の位をもとめむとおぼし願ひて世になき寶物をも盡さむと志給はむに、なきもの侍るまじ。たうじの帝志か恵み申し給ふなれば御後見は心もとなかるまじ。これかの御ためにも、なにがしがめのわらはのためにもさいはひとあるべき事にやとも知らず」と、よろしげにいふ時に、いとうれしくなりて妹にもかゝることありともかたらず、あなたにも寄りつかで、かみのいひつることをいともしもよげにめでたしと思ひて聞ゆれば、君少し鄙びてぞあるとは聞き給へど、にくからず打ち笑みて聞き居たまへり。大臣にならむ、ぞくらうを取らむなどぞ、あまりおどろおどろしきことゝ耳とゞまりける。「さてかの北の方にはかくとものしつや。志ことに思ひ始め給ふらむに、引きたがへたらむ、ひがひがしくねぢけたるやうにとりなす人もあらむ。いさや」とおぼしたゆたひたるを、「何か北の方もかの姫君をばいとやむごとな

きものに思ひかしづき奉り給ふなりけり。唯中のこのかみにて年もおとなび給ふを心苦しき事に思ひて、そなたにとおもむけて申されけるなり」と聞ゆ。月頃は又なく、よのつねならずかしづくといひつるものゝうちつけにかくいふもいかならむと思へども、猶ひとわたりはつらしと思はれ、人には少し譏らるともながらへて頼もしきとをこそと、いとまたくかしこき君にて思ひとりてければ、目をだにとりかへて契りし暮にぞおはしはじめける。北の方は人知れずいそぎ立ちて人々のさうぞくせさせ、まつらひなどよししうし給ふ。御方もかしら洗はせ取りつくろひて見るに、少將などいふ程の人に見せむをしくあたらしきさまを、哀や親に知られ奉りておひたち給はましかば、おはせずなりにたりとも、大將殿のたまふらむさまに、おほけなくともなどは思ひ立たざらまし、されどうちうちにこそかく思へ、ほかのおとぎはかみの子とも思ひわかず、またじちを尋ね知らむ人もなかなかおとしめ思ひぬべきこそ悲しけれなど思ひつく。いかゞはせむ、盛過ぎ給はむもあいなし。賤しからずめやすき程の人のかくねんごろにのたまふめるを、など心ひとつに思ひ定むるもなかなだちのかくことよくいみじきに、女はましてすかされたるにやあらむ。あすあさてと思へば心あわたじしくいそがしきに、そなたにも心のどかに居られたらず、そゝめきありくに、かみとより入り来て、ながながと滞る所もなく言ひ續けて「我を思ひ隔て、あこの御懸想びとを奪はむとま給ひけるが、おほけなく心をさなきこと、めでたからむ御むすめをば、ようせさせ給ふ君達あらじ、賤しくことやうならむなにかし等か女ごをこそ賤しうも尋

ねのたまふめれ。かしく思ひ企てられけれど、もはらほいなしとて、ほかさまへ思ひなり給ひぬべかなれば、同じくいと思ひてなむ、さらば御心と許し申しつる」など怪しくあうなく人の思はむ所も知らぬ人にて、言ひちらし居たり。北の方あきれて物もいはれて、とばかり思ふに、世の中の心うさをかきつらね、涙も落ちぬばかり思ひ續けられて、やをら立ちぬ。こなたに渡りて見るに、いとらうたげにをかしげにて居給へるに、さりと人には劣り給はじとは思ひ慰む。めのと、二人、「心うきものは人の心なりけり。おのれは同じごとと思ひあつかふとも、この君のゆかりと思はむ人のためには命をも譲りつべくこそ思へ、親なしと聞きあなづりて、まだ幼くなりあはぬ人をさし越えて、かくはいひなるべしや。かく心愛く近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど、かみのかくおもだ、しきことに思ひてうけとり騒ぐめれば、あさましくあひあひにたる、世の人の有様を、すべてかゝることに口入れじと思ふ。いかでこゝならぬ所に、まばしありにしがな」と打ち歎きつゝいふ。めのともいと腹だ、しく、わが君をかくおとしむることと思ふに、「何かこれも御さいはひにて、たがふこととも知らず、かく心口をしくいましける君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。わが君をば心ばせあり、物思ひ知りたらむ人にこそ見せ奉らまほしけれ。大將殿の御さまかたちの、ほのかに見奉りしに、さも命延ぶる心地し侍りしかな、哀にはた聞えたまふなり。御すくせに任せて、さもおぼしよりぬかし」といへば、「あなおそろしや。人のいふを聞けば、年頃おぼろけならむ人をば、見じとのたまひて、左の大殿、按察大納言、式部卿宮などの、いとねんごろ

にほのめかし給ひけれど、聞きすぐして、帝の御がしづきむすめをえ給へる君は、いかばかりの人をか、まめやかにはおぼさむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとはおぼしもしなむ。それはたげにめてたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮のうへのかくさいはひびと、世に申すなれど、物思はしげにおぼしたるを見れば、いかにもいかにも二心なからむ人のみこそめやすくだのもしきことにはあらめ、我が身にも知りなき。故宮の御有様は、いとなさけなさけしく、めてたくをかしくおはせしかど、人数にもおぼさざりしかば、いかばかりかは心憂くつらがりし。このいとふかひなくなさけなく、さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年頃をも過しつるなり。をりふしの心ばへの、かやうに愛ぎやうなくよういなきことこそにくけれ。歎かしくうらめしきこともなく、かたみに打ちいさかひても心に合はぬことをばあきらめつ。上達部みこ達にしてみやびかに心はずかしき人の御あたりといふとも、我が數ならではかひあらず、萬の事我が身からなりけりと思へば萬に悲しくこそ見奉れど、いかにして人わらひならず、またて奉らむとかならふ。守はいそぎ立ちて、女房などこなたにめやすきあまたあなるを、この程はあらせ給へ。やがて帳なども新しくまたてられためる方を、ことにはかになりたれば、取りわたしとかく改むまじ」とてこの西の方に來て、立ちぬとかくまつらひさわぐ。めやすきさまにさばらかに、あたりあたりあるべきかぎりしたる所を、さかしらに屏風ども持て來て、いぶせきまでたて集めて厨子、二階など、あやしきまでまきはへて、心をやりていそげ



ば、北の方見苦しく見れど、口入れじといひてしかば、たゞに見聞く。御かたは北おもてに居給へり。かみ、「人の御心は見知りはてぬ。唯同じ子なれば、さりともしいとかくは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ。されば世に母なき子はなくやはある」とて娘を晝よりめのと、二人なでつくろひ立てたれば、にくげにもあらず。年十五六のほどにて、いとちひさやかにふくらかなる人の、髪美しくしげにて小うちきのほどなるすそいとふさやかなり。これをいとめてたしと思ひてなでつくろふ。何か人のことさまに思ひかまへられける人をしもと思へど、人がらのあたらしく、かうさくにもやし給ふ君なれば、われもわれもと婿に取らまほしくする人の多かなるに、取られなむも口惜しくてなむと、かのなかひとに謀られていふもいとをこなり。男君もこの程の、いかめしく思ふやうなること、萬の罪あるまじう思ひて、その夜もかへずきそめぬ。母君御方のめのと、いとあさましく思ふ。ひがひがしきやうなれば、とかく見あつかふも心づきなければ宮の北の方の御もとに御文奉る。「その事と侍らては、なれなれしくやとかしてまりて、え思ひ給ふるまゝにも聞えさせぬを、慎むべきこと侍りて、老ばし所がへさせむと思ひ給ふるに、いと忍びて侍ひ給ひぬべき、かくれのかた候はゞ、いともいと嬉しくなむ、數ならぬ身ひとつの影に隠れもあへず、哀なることのみ多く侍る世なれば、たのもしき方にはまづなむ」と、うち泣きつゝ書きたる文を哀とは見給ひけれど、故宮のさばかり許し給はて止みにし人を、我ひとり残りて、知り語らはむもいとつゝましく、又見苦しきさまにて、世にあふれむも知らず顔にて聞かむこそ、心苦しかるべけれ、ことなる」と

なくて、かたみにちりぼはむも、なき人の御ために見苦しかるべきわざを、覺し煩ふ。たいふがもとにも、いと心苦しげにいひやりたりければ、「さるやうこそは侍らめ。人にくいはしたなくもなの給はせそ。かゝるおとりの物の人の御中にまじり給ふも世の常のことなり。あまりいとなさけなくの給ふまじき事なり」など聞えて、「さらばかの西の方にかくるへたる所ま出て、いとむつかしげなめれど、さてもすぐい給ひつべくば、まばしの程」といひつかはしつ。いと嬉しと思ほして人知れず出てたつ。御方もかの御あたりをば、むつび聞えまほしと思ふ心なれば、なかなかかゝる事どもの出て來たるを、うれしと思ふ。かみ少將のあつかひを、いかばかりめてたきことをせむと思ふに、そのさらさらしかるべき事も知らぬ心には、唯あらゝかなるあづまぎぬどもを、おしまろがして投げ出でつ。くひものも所せきまでなむ運び出で、のゝしりけるを、げすなどは、それをいとかしこきなさに思ひければ、君もいとあらまほしく、心かしくとりよりにけりと思ひけり。北の方この程を見捨て、知らざらむもひがみたらむと思ひ念じて、唯するまゝに任せて見居たり。まらうどの御でゐさぶらひとまつらひさわげば、家はひろけれど源少納言東の對にはすむ。をのこゝなどの多かるに所もなし。この御方にまらうどすみつきぬれば、らうなどほとりばみたらむにすませ奉らむも飽かずいとほしくおぼえて、とかく思ひめぐらす程、宮にとは思ふなりけり。この御方さまにかずまへ給ふ人のなきを、あなづるなめりと思へ、ことにゆるい給はざりしあたりを、あながちに參らす。めのと若き人々、二三人ばかりして西の廂の北に寄りて、人げ遠き

方につぼねしたり。年頃かく遙なりつれど、疎くおぼすまじき人なれば、参るときは耻ぢ給はず、いとあらまほしくけはひことにて若君の御あつかひをしておはする、御有様うらやましく覺ゆるもあはれなり。我も故北の方には離れ奉るべき人かは、仕うまつるといひしばかりに、かすまへられ奉らず口惜しくて、かく人にはあなづらるゝと思ふには、かくまひて睦び聞ゆるもあぢきなし。こゝには御物忌といひてければ人もかよはず、二三日ばかり母君も居たり。こたみは心のどかに、この御ありさまを見る。宮わたり給ふ。ゆかしくて物のはさまより見れば、いと清らに櫻を折りたるさまし給ひて我がたのもし人に思ひて、つらうらめしけれど、心には違はじと思ふ。常陸守よりさまかたちも人のほどもこよなく見ゆる、五位四位ども、あひひざまづき侍ひて、この事かの事と、あたりあたりの事ども啓し、供などまうす。又若やかなる五位ども、顔も知らぬ供も多かり。わが繼子の式部のぞうにて藏人なる、内の御使にて参れり。御あたりにもえ近く参らず、こよなき人の御けはひを、あはれは何人ぞ、かゝる御あたりにおはするめてたさよ、よそに思ふ時は、めてたさ人々と聞ゆとも、つらき目見せ給はゞと物うく推し量り聞えさせつらむあさましさよ、この御有様かたちを見れば、七夕ばかりにても、かやうに見奉りかよはむは、いとみじかるべきわざかなと思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。女君短き几帳を隔て、座するを推しやりて物など聞え給ふ。御かたちどもいと清らに似合ひたり。故宮のさびしくおはせし御有様を思ひくらぶるに、宮達と聞ゆれど、いとこよなきわざにこそありけれと覺ゆ。几帳の内に入り給ひぬれば若君は

めのとなどもてあそび聞ゆ。人々参りあつまれど、なやましとて大殿籠りくらしつ、御臺こなたにまゐる。萬のことけだかく心ことに見ゆれば、我がいみじき事を盡すと見思へどなほなほしき人のあたりは、口惜しかりけりと思ひなりぬれば、我が娘もかやうにてさし並べたらむにかたはならじかし、ゆだけき勢ひをたのみて、父ぬしの、后にもなしてむと思ひたる人々は、おなじ我が子ながら、けはひこよなきをおもふも、猶今よりのちも心はたがふべかりけりと、夜一夜あらましごとと思ひつゞけり。宮日たけて起き給ひて、ささいの宮例のなやましく志給へば、まゐるべしとて御さうぞくなどし給ひておはす。ゆかしう覺えてのぞけば、うるはしく引きつくり給へる、はた似るものなく、けだかくあいぎやうつき清らにて、若君をえ見捨て給はて、もてあそびおはす。御かゆこはいひなど参りてぞ、こなたより出で給ふ。けさよりまゐりて。さぶらひの方にやすらひける人々今ぞ参りて物など聞ゆる中に、清げだちて、なでふことなき人のすさまじき顔したる、なほし着て太刀佩きたるあり。お前にて何とも見えぬを、「かれぞこの常陸のかみの婿の少將な。初はこの御方にと定めけるを、かみの娘をえてこそいたはられぬなどいひて、かじけたるめのわらはをえたるなり。いさこの御あたりの人はかけてもいはず、かむの君の方より、よくさくたよりのあるなり」と、おのがどちいふ。聞くらむとも知らで、人のかくいふにつけても胸つぶれて、少將をめやすき程と思ひける心も口をしく、げに異なることなかべかりけりと思ひて、いとしくあなづらはしく思ひなりぬ。若君のはひ出て、御簾のつまより覗き給へるをうち見給ひて、

立ち返りよりおはしたり。「御心よろしく見え給はゞやがてまかてなむ。猶苦しくま給はゞ、こよひは殿にぞ。今は一夜をへだつるも、覺束なきこそ苦しけれ」とて暫し慰め遊ばして出て給ひぬるさまの、返す返す見るとも見るとも、飽くまじくにほひやかにをかしければ、出て給ひぬる名残さうさうしくぞながめらる。女君の御前に出て来て、いみじくめで奉れば、田舎びたるとおぼして笑ひ給ふ。「故上のうせ給ひしほどは、いふかひなく幼き御程にていかにならせ給はむと、見奉る人も故宮もおぼし歎きしを、こよなき御宿世の程なりければ、さる山ぶところの中にも生ひ出てさせ給ひしにこそありけれ。口惜しく故姫君のおはしまさずなりになるこそ、飽かぬことなれ」など、打ち泣きつゝ聞ゆ。君も打ち泣き給ひて、「世の中のうらめしく心ぼそきをりも、又かくながらふれば少しも思ひ慰めつべきをりもあるを、いにしへたのみ聞えける影どもに後れ奉りけるは、なかなかによのつねに思ひなされて、見奉り知らずなりにければ、あるを、猶この御ことはつきせずいみじくこそ。大將殿の萬の事に心の移らぬよしをうれへつゝ、淺からぬ御心のさまを見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」とのたまへば、「大將殿はさばかり世にためしなさまで、帝のかしづき覺したなるに、心おごりし給ふらむかし。おはしまさましかば、猶このことせかれしもま給はゞらましや」など聞ゆ。「いさややうのものと人笑はれなる心地せましも、なかなかにやあらし。見はてぬにつけて、心にくゝもある世にこそはと思へど、かの君はいかなるにかあらむ、怪しきまで物忘れせず。故宮の御後の世をさへ思ひやり深く、後見ありき給ふめる」など、心美し

う語り給ふ。「かの過ぎにし御かはりに尋ねて見むと、この數ならぬ人をさへなむ、かの辨の  
尼君にはのたまひける。さもやと思ひ給へよるべき事には侍らねど、ひともとゆゑにこそは  
と、かたじけなけれど、哀になむ思ひ給へらるゝ、御心深さなる」などいふついでに、この君  
をもて煩ふこと、なくなかなかたる。こまかにはあらねど人も聞きけりと思ふに、少將の思ひ  
あなづりけるさまなどほのめかして、「命侍らむ限は何か朝夕の慰めぐさにて見過しつべ  
し。打ち捨て侍りなむ後は、思はずなるさまにちりばひ侍らむが悲しさに、尼になして深き  
山にやますゑて、さる方に世の中を思ひ絶えて侍らましなどなむ、思ひ給へ侍びては、思ひ  
より侍る」といふ。「げに心苦しき御有様にこそはあなれど、何か人にあなづらるゝ御有様  
は、かやうになりぬる人のさがにこそ。さりともえ堪へこもらぬわざなりければ、むげにそ  
の方に思ひおきて給へりし身をだに、かく心よりほかにながらふれば、まいていとあるまじ  
き御ことなり。やつい給はむも、いとほしげなる御さまにこそ」など、いとおとなびてのたま  
へば、母君いと嬉しと思ひたり。ねびにたるさまなれど、よしなからぬさまして清けなり。い  
たく肥えすぎにたるなむ常陸殿とは見えける。「故宮のつらう情なくおぼし放ちたりしに、  
いとゞ人げなく、人にもあなづられ給ふと見給ふれど、かう聞えさせ御覽せらるゝにつけて  
なむいにしへの憂さも慰み侍る」など、年頃の物語浮島の哀なりしことも聞え出づ。「我が身  
一つのとのみ、いひ合する人もなき筑波山のありさまもかくあきらめ聞えさせて、いつもい  
つもいとかくて侍はまほしく思ひ給へなり侍りぬれど、かしこには善からぬあやしのもの

ども、いかに立ち騒ぎもとめ侍らむ。さすがに心あわたしく思ひ給へらる。かゝる程の有様に身をやつすは口惜しきものになむ侍りけると、身にも思ひ知らるゝを、この君は唯任せ聞えさせて知り侍らじ」などかこち聞えかくれば、げに見苦しからでもあらなむと見給ふ。かたちも心ざまも、えにくむまじうらうたげなり。物はちもおどろちどろしからず、さまよう子めいたるものから、かどなからず、近く侍ふ人々にも、いとよく隠れて居給へり。物などいひたるも、昔の人の御さまに怪しきまで覺え奉りてぞあるや。かの人がたもとめ給ふ人に見せ奉らばやと打ち思ひ出て給ふをりしも、大將殿参り給ふと人聞ゆれば、例の御几帳引きつくるひて心づかひす。このまらうどの母君、いで見奉らむ、ほのかに見奉りける人の、いみじきものに聞ゆめれど、宮の御有様にはえならびたまはじ」といへば、御前に侍ふ人々、いさやえこそ聞え定めぬ」と聞えあへり。「むかひておはせしさま、宮はいとなさげなげに、見にくくこそ見え給ひしか。とり放ちては、いづれもともかくも分れず、かたちよき人は人をけつこそにくけれ」とのたまへば、人々わらひて、「されどお前にはおされ奉り給はざめり。いかばかりならむ人か、宮をばけち奉らむ」などいふ程に、今ぞ車よりおり給ふなりと聞く程かしかましきまでおひのしりて、とみにも見え給はず。またれたる程に、歩み入り給ふさまを見れば、げにあなめてた、をかしげとも見えながらぞ、なまめかしうあてに清げなるや。すゞろに見えぐるしうはづかしくて、額髪なども引きつくるはれて心はづかしげに、用意多くきはもなささまぞし給へる。うちより参り給へるなるべし。御前どものけはひ

あまたして、「よべ后の宮の惱み給ふよしうけ給はりて、参りたりしかば、宮達の侍ひ給はざりしかば、いとほしく見奉りて、宮の御かはりに今まで侍ひ侍りつる。けさもいとけだしいて参らせ給へるを、あいなう御あやまちに推し量り聞えさせてなむ」と聞え給へば、「げにおろかならず、思ひやり深き御用意になむ」とばかりいらへ聞え給ふ。宮は内にとまり給ひぬるを見おきて、たゞならずおはしたるなめり。例の物語いと懐しげに聞え給ふ。事に觸れて唯一にしへの忘れがたく、世の中の物憂くなりまさるよしを、あらはにはいひなさて、かすめ憂へ給ふ。さしもいかでか世を経て、こゝろに離れずのみはあらむ。猶淺からずいひそめてしことのすぢなれば、名残なからじとにやなど見なし給へと、人の御氣色はまるきものなれば見もて行くまゝに、哀なる御心さまを、岩木ならねば思ほしまる。恨み聞え給ふことも多ければ、いとわりなく打ちなげきて、かゝる御心をやむるみそぎをせさせ奉らまほしくおぼすにやあらむ、かの人がたのたまひ出て、いと忍びてこのわたりになむと、ほのめかし聞え給ふを、かれもなべての心地はせず、ゆかしくなりたれど、打ちつけにふと移らむ心地、はたせず、「いでやその本尊願ひみて給ふべくはこそ尊からめ。時々心やましくば、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、はてはてはうたての御ひじり心や」と、ほのかに笑ひ給ふも、をかしう聞ゆ。「いでさらば傳へはてさせ給へかし。この御のがれ言葉こそ思ひ出づれば、ゆゝしく」とのたまひても、またなみだぐみぬ。

「見し人のかたしろならば身にそへて戀しきせむのなでものにせむ」と例のたはぶれに



いひなして、まぎらはし給ふ。

「みそぎ河せどに出さむなでものを身に添ふかげとたれかたのまむ。ひくてあまたにかや、さかしらなれど、いとほしくぞ侍るや」とのたまへば、「つひによるせはさらなりや。いとうれたきやうなる、水の泡にも争ひ侍るかな、搔き流さるゝなでもの、いでまことぞかし。いかで慰むべきことぞ」などいひつゝ、暗うなるもうるさければ、かりそめに物したる人怪しと思ふらむとつゝまじきを、こよひは猶疾くかへり給へねと、こしらへやり給ふ。「さらばはそのまらうどに、かゝる心の願ひ年経ぬるを、うちつけになど、浅うはおもひなるまじうのたまはせ知らせ給ひて、はしたなげなるまじうはこそ。いとらひうひしうならひにて侍る身は、何事もをこがましきまでなむ」と語りひ聞えおきて出て給ひぬるに、この母君、いとめでたく思ふやうなる御さまかなとめで、めのとのゆくりかに思ひよりて、たびたび言ひしことをあるまじきとにいひしかど此の御有様を見るには天の川を渡りても、かゝる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、我が娘はなのめならむ人に見せむはをしげなるさまを、忍びすめきたる人をのみ見ならひて少將をかしこきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。より居給へりつるまきばしらもしとねも名残にほへるうつり香、いへばいとことさらめきたるまで有難し。時々見奉る人だに、たびごととにめで聞ゆ。經などを讀みて功德の勝れたることあめるにも、かのかうばしきをやむごとなきことに佛ののたまひ置けるもことわりなりや。薬王ぼんなどにも取りわきてのたまへる牛頭栴檀とかや、おどろおどろしき物の名な

れど、まづかの殿の近くふるまひ給へば、佛はまことし給ひけりところ覺ゆれ。幼くおはしけるより行もいみじくしたまひければよ」などいふもあり。また「さきの世こそゆかしき御有様なれ」など、口々めづることどもを、すゞろにゑみて聞き居たり。君は忍びてのたまへることをほのめかしのたまふ。「思ひそめつることさうねきまでかろがるしからずものし給ふめるを、げに只今のありさまなどを思ふは煩はしき心地すべけれど、かの世を背きてもなど思ひより給へらむも同じことに思ひなして、試み給へかし」とのたまへば「つらきめ見せず人にあなづられじの心にてこそ、鳥の音聞えざらむ住ひまで思ひ給へおきつれ、げに人の御ありさまはひを見奉り思ひ給ふるは、しもづかへの程などにても、かゝる人の御あたりには馴れ聞えむはかひありぬべし。まいて若き人は心つけ奉りぬべく侍るめれど數ならぬ身に物思ひのたねをや、いとどまかせて見侍らむ。たかきもみじかきも、女といふものはかゝるすぢにてこそ。この世後の世まで苦しき身となり侍るなれど、思ひ給へ侍ればなむ、いとほしく思ひ給へ侍る。それも唯御心になむ。ともかくもおぼし捨てず、物せさせ給へ」と聞ゆれば、いと煩はしくてなりて「いさやきし方の心深きに打ち解けて、行くさきの有様は知り難きを」とうち歎きて、殊に物ものたまはずなりぬ。明けぬれば車などゐて来てかみのせうをこなどいと腹だししげにおびやかしたれば「かたじけなく萬にたのみ聞えさせてなむ。猶老ばしかくさせ給ひて、いはほの中にとも、いかにとも思ひ給へめぐらし侍る程、かずに侍らずとも思ほしはなたず、何事をも教へさせ給へ」など打ち泣きつゝ聞え置きて、この御かた

もいと心ほそく、ならばぬ心地に立ちはなれむことを思へど、今めかしくをかしく見ゆるあ  
たりに暫しも見なれ奉らむと思へば、さすがに嬉しくおもほえけり。車引き出づる程の少し  
明うなりぬるに、宮うちよりまかてたまふ。若君覺束なく覺え給ひければ、忍びたるさまに  
て御車なども例ならでおはしますに、さしあひて推し留めたてたれば廊に御車寄せてあり  
給ふ。「などの車ぞ、暗き程に急ぎ出づるは」と目留めさせ給ふ。かやうにてぞ忍びたる所に  
は紛れ出づるかしと御心ならひにおぼしよるもむくつけし。「常陸殿のまかてさせ給ふ」と  
申す。若やかなる御前ども「殿ことあざやかなれ」と笑ひあへるを聞くも、げにこよなの身の  
程やと悲しく思ふ。唯この御方のことを思ふゆゑにぞ、おのれも人々しくならまほしく覺え  
ける。ましてさうじみをなほなほしくやつして見むことは、いみじくあたらしく思ひなり  
ぬ。宮入り給ひて、「常陸殿といふ人やこゝに通はし給ふ。心ある朝ぼらけに急ぎ出てつる車  
そひなどこそ、ことさらめきて見えつれ」など、猶おぼし疑ひてのたまふ。聞きにく、片腹い  
たしとおぼして、「たいふなどが若くてのころ友だちにてありける人は殊に今めかしうも見  
えざめるを、ゆゑゆるしげにものたまひなすかな。人の聞き咎めつべきことをのみ、常にと  
りない給ふこそ、なき名はたて」とうちそむき給ふも、らうたげにをかし。明くるも知らず  
大殿籠りたるに人々あまた参り給へば寢殿に渡り給ひぬ。きさいの宮はことごとしき御惱  
みにもあらで、をこたり給ひにければ心地よげにて左の大殿の君達など恭うち韻ふたぎな  
どしつゝ遊び給ふ。夕つ方宮こなたに渡らせ給へれば、女君は御ゆするの程などなりけり。

人々もおのちの打ちやすみなどしてお前には人もなし。ちひさきわらはのあるして、「をり  
悪しき御ゆるすの程こそ見苦しかめれ、さうさうしくてやながめむ」と聞え給へば、げにお  
はしまさぬひまひまにこそ例はすませ、怪しう日頃も物うがらせ給ひて、けふ過ぎばこの月  
は日もなし。ながつきかみなづきいかてかはとて、仕うまつらせつるを」と大輔いとほしが  
り、若君も寝給へりければ、そなたにこれかれある程に、宮はたゞずみありき給ひて西の方  
に例ならぬわらはの見えつるを今まゐりのあるかなとおぼして、さしのぞき給ふ。中の程な  
るさうじのほそめにあきたるより見給へば、さうじのあなたに一尺ばかり引きさげて屏風  
立てたり。そのつまに几帳簾に添へて立てたり。かたびらひとへを打ちかけて、しをんいろ  
の花やかなるに女郎花の織物と見ゆるかさなりて袖口さし出でたり。屏風のひとひらた、  
まれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。今まゐりの口惜しからぬなめりとおぼして、こ  
の廂に通ふさうじを、いとみそかにおしあけ給ひて、やをら歩みより給ふも人知らず。こな  
たの廊のなかの坪せんさいのいとをかしう、いろいろに咲き亂れたるに、やりみづのわたり  
の石高き程いとをかしければ、はし近くをひ臥して眺むるなりけり。あきたるさうじを今少  
し押し開けて屏風をつまよりのぞき給ふに、宮とは思ひもかけず、例こなたに來馴れたる人  
にやあらむと思ひて、起きあがりたるやうだい、いとをかしう見ゆるに、例の御心はすぐし  
給はで、きぬの裾をとらへ給ひて、こなたのさうじ引きたて給ひて屏風のはさまに居給ひ  
ぬ。あやしと思ひて、扇をさしかくして見返りたるさまいとをかし。扇を持たせながら、とら

へ給ひて「誰ぞ名のりこそゆかしけれ」とのたまふに、むくつけくなりぬ。さる物のつらに顔をほかさまにもてかくして、いといたう忍び給へれば、このたゞならずほのめかし給はむ大將にや、かうばしきけはひなども思ひわたさるゝに、いと耻しくせむかたなし。めのと人げの例ならぬを怪しと思ひて、あなたなる屏風を押しあけて來たり、「これはいかなる事にか侍らむ。怪しきわざにも侍るかな」と聞ゆれど、憚り給ふべき事にもあらず。かくうちつくなる御まわざなれど、言葉おほかる御本じやうなれば、なにやかやとのたまふに、暮れはてぬれど「誰と聞かさらむほどは許さじ」とて馴れ馴れしく臥し給ふに宮なりけりと思ひはつるに、めめといはむ方なくあきれて居たり。おほとなぶらは燈ろにて、今わたらせ給ひなむと人々いふなり。お前ならぬかたの御格子どもぞおろすなる。こなたは離れたる方にまなして高き棚厨子ひとよろひばかりたて、屏風の袋に入れ込めたる所々に寄せ掛け、何かのあらゝかなるさまにま放ちたり。かく人の物し給へばとて、通ふ道のさうじひとまばかりぞあけたるを、右近とて大輔が娘の侍ふ來て、格子おろしてこゝに寄りくなり。「あなくらや。まだおほとなぶらも參らざりけり。御格子を苦しきに急ぎまゐりてやみに惑ふよ」とて引き上ぐるに宮もなま苦しと聞き給ふ。めめとはたいと苦しと思ひて物包せず、はやりかにおぞき人にて「物聞え侍らむ。こゝにいと怪しきことの侍るに、見給へこうじてなむ。え動き侍らてなむ」「何事ぞ」とさぐりよるに、袿姿なる男の、いとかうばしくて添ひ臥し給へるを例のけしからぬ御様と思ひよりにけり。女の心合せ給ふまじきとと推し量らるれば「げにいと見苦

しきことにも侍るかな。右近はいかに聞えさせむ。今参りて御前にこそは忍びて聞えさせ  
め」とてたつを、あさましくかたはに誰も誰も思へど、宮は怖ぢ給はず、あさましきまであて  
にをかしき人かな、猶なにも人ならむ、右近がいひつる氣色も、いともしなべての今まゐりに  
はあらざめりと、心えがたくおぼされて、といひかくいひ怨み給ふ。心づきなげに氣色ばみ  
てももてなさねど、唯いみじう死ぬばかり思へるが、いとほしければ情ありてこしらへ給  
ふ。右近うへに「まかまかこそおはしませ。いとほしくいかに思ほすらむ」と聞ゆれば、「例の  
心變き御さまかな。かの母もいかにあははしく、けしからぬさまに思ひ給はむとすらむ。  
うしろ安くと返すがへすいひ置きつるものを」と、いとほしくおぼせど、いかゞ聞えむ、侍ふ  
人々も少し若やかによろしきは見捨て給ふなく、怪しき人の御くせなれば、いかでかは思ひ  
より給ひけむと、あさましきにもものはれ給はず。「上達部あまた参り給ふ日にて、遊び戯  
ぶれ給ひては例もかゝる時は遅くも渡り給へば、皆打ち解けてやすみ給ふぞかし。さてもい  
かにすべきことぞ。かのめのこととおずまじかりけれ。つとそひてゐてまもり奉りひきもか  
なぐり奉りつべくこと思ひたりつれ」と、少將とふたりしていとほしがる程に、内より人参  
りて、大宮この夕暮より御胸惱ませ給ふを、只今いみじく重く惱ませ給ふよし申さす。右近  
「心なきをりの御なやみかな、聞えさせむ」とて立つ。少將「いでや今はかひなくもあべいこ  
とを、をこがましく、あまりなおびやかし聞え給ひそ」といへば、「いなまだしかるべし」と、  
忍びてさゝめきかはすを、うへはいと聞きにくき人の御本じやうにこそあめれ、少し心あら

む人は我があたりをさへ疎みぬべかめりと覺す。参りて御使の申すよりも今少しあわたゞしげに申しなせば動き給ふべきさまにもあらぬ御氣色に「たれが参りたる。例のおどろおどろしく却す」とのたまはすれば、「宮の侍に、平のまげつねとなむ名のり侍りつる」と聞ゆ。出で給はむとのいとわりなく口惜しきに、人目もおぼされぬに、右近立ち出でて、「この御使をにしおもてにて問へば、申しつぎつる人もよりきで、「中務の宮も参らせ給ひぬ。夫夫は只今なむ参りつる道に、御車引き出づる見侍りつ」と申せば、げに俄に時々惱み給ふをりをりもあるをとおぼすに、人のおぼすらむこともはしたなくなりて、いみじう恨み契り置きて出で給ひぬ。恐しき夢の覺めたる心地して、汗に押しひたして臥し給へり。めのとうちあふぎなどして、「かゝる御住ひはよろづにつけて、つゝましうびんなかりけり。かくおはしましをめて、更によきこと侍らじ。あなおそろしや。限なき人と聞ゆとも、安からぬ御有様は、いとあぢきなかるべし。よそのさし離れたらむ人にこそ、善しとも悪しとも覺えられ給はめ、人ぎも片腹痛きこと、思ふ給へて、かまのさうを出して、つと見奉りつれば、いとむくつけく、げすげすしき女とおぼして手をいとたくつませ給へるこそ、猶人のけさうだちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。かの殿には、けふもいみじくいさかひ給ひけり。唯一と所のうへを見あつかひ給ふとて、我が子どもをばおぼし捨てたり。まらうどのおはする程の御たびる見苦しと、あらあらしきまでぞ聞え給ひける。しもひとさへ聞き、いとほしがりけり。すべてこの少將の君ぞ、いと愛ぎやうなくおぼえ給ふ。この御事侍らざらましかばうちうちやすから

ず、むつかしき事は折々侍りとも、なだらかに年頃のまゝにて、おはしますべきものをいなど、打ち歎きつゝいふ。君は只今はともかくも思ひめぐらされず、唯いみじくはしたなく、見知らぬめを見つるに添へても、いかに思すらむと思ふに、侘しければ、うつぶし伏して泣き給ふ。いと苦しと見あつかひて、「何かかくおぼす。母おはせぬ人こそ、たつぎなら悲しかるべけれ。よそのおぼえは、父なき人はいと口惜しけれど、さがなき繼母にくまれむよりは、これはいとやすく。ともかくもし奉り給ひてむ、なちほし届せ。さりともはつせの観音おはしませば、哀と思ひ聞え給はむ。ならばぬ御身に、たびたびあきりてまで給ふことは人のかくあなづりさまにのみ思ひ聞えたるを、かくもありけりと思ふばかりの御さいはひおはしませとこそ念じ侍れば、あが君は人わらはれにては止み給ひなむやと、世を安げにいひ居たり。宮は急ぎて出て給ふなり。内近き方にやあらむ、こなたのみかどより出て給へば物のたまふ御聲もきこゆ。いとあてにかぎりもなく聞えて、心ばへあるふる事など打ちず給ひて過ぎ給ふほど、すゝろに煩はしく覺ゆ。うつし馬ども引き出して、とのゐに侍ふ人十餘人ばかりして参り給ふ。うへいとほしくうたて思ふらむとて、知らずがほにて、「大宮惱み給ふとて参り給ひぬれば、こよひは出て給はじ。ゆするのなごりにや、心地も惱ましくて起き居侍らぬを、わたり給へ、つれづれにもおぼさるらむ」と聞え給へり。「みだり心地のいと苦しう侍るを、ためらひて」と、めのととして聞え給ふ。「いかなる御心地ぞ」と、立ち返りとぶらひ聞え給へば、「何心地ともおぼえず、唯いと苦しく侍り」と聞え給へば、少將右近、めましろ



ぎをして、片腹痛くぞおぼすらむといふも、たゞなるよりはいとほし。いと口惜しく心苦し  
 きわざかな、大將の心留めたるさまにのたまふめりしを、いかにあはあはしく思ひおとさ  
 む、かくのみみだりがはしくおはする人は聞きにく、じちならぬことをもくねりいひ、又誠  
 に少し思はずならむことをも、さすがに見ゆるしつべうこそおはすめれ、この君はいはでう  
 しと思はむこと、いと耻しげに心深きを、あいなく思ふこと添ひぬる人の上なめり、年頃見  
 ず知らざりつる人のうへなれど、心ばへかたらを見れば、え思ひ放つまじうらうたく心苦し  
 きに、世の中はありがたくむつかしげなる物かな、我が身の有様はあかぬ事多かる心地すれ  
 どかく物はかなきめも見つべかりける身の、さははふれずなりにけるにこそ、げにめやすき  
 なりけれ、今は唯このにくき心添ひ給へる人の、なだらかにて思ひはなれなば、更に何事も  
 思ひ入れずなりなむと思ほす。いと多かるみぐしなれば、とみにもえほしやられず、起き居  
 給へるもくるし。白き御ぞひとかさねばかりにておはする、細やかにてをかしげなり。この  
 君は誠に心地も悪しくなりにたれど、めのと「いとかたはらいたし。ことしもあり顔におぼ  
 すらむを、唯おほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには事のありさま初より語り侍ら  
 む」と、責めてそこのかしたて、こなたの御さうじのもとにて、「右近の君に物聞えさせむ」と  
 といへば、立ちて出でたれば、「いと怪しく侍りつることのなごりに、身もあへなうなり給ひ  
 て、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、いとほしく見侍る。お前にて慰め聞えさせ給へと  
 てなむ、あやまちもおはせぬ御身を、いとつゝましげに思ほし侘びにためるも、さすがにこ

そ。いさゝかにも世を知り給へる人こそあれ、いかでかはとことわりにいとほしく見奉るに、引き起して参らせ奉る。我にもあらず人の思ふらむことも耻しけれど、いとやはらかにおほどきすぎ給へる君にて、押し出でられて居給へり。ひたい髪などの、いたうぬれたるをもてかくして、火の方に背き給へるさま、うへをたぐひなく見奉るに、けおとるとも見えず、あてにをかし。これにおぼしつさなば、めざましげなることはありなむかし。いとかゝらぬをだに珍しき人をかしようまたまふ御心をと、二人ばかりぞお前にて、えはぢあへ給はねば見居たりける。物語いとなつかしくし給ひて、「例ならずつゝましき所など、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせずなり給ひし後、忘らるゝよなくいみじく、身もうらめしく、たぐひなき心地してすすすに、いとよく思ひよそへられ給ふ御さまを見れば、慰む心地して哀になむ。思ふ人もなき身に昔の御志のやうに思ほさば、いと嬉しくなむなど語り給へど、いと物つゝましくてまたひなびたる心に、いらへ聞えむともなくて、「年頃いと遙にのみ思ひ聞えさせしに、かう見奉り侍るは何事も慰む心地し侍りてなむ」とばかり、いと若びたる聲にていふ。繪など取り出させて、右近にことわり讀せて見給ふに、向ひて物はちもえしあへ給はず、心に入れて見給へるほかけ、更にこゝと見ゆる所なく、こまかにをかしげなり。額つきまみのかほりたる心地して、いとおほどかなるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、繪はことに目も留め給はで、いと哀なる人のかたちかな、いかでかうしもありけるにかあらむ、故宮にいとよく似奉りたるなめりかし、故姫君は宮の御方さまに、我は母上に似奉りた

りところをは、ふる人どもいふなりしが、げに似たる人はいみじきものなりけりとおぼしくらぶるに涙ぐみて見給ふ。かれは限なくあてに氣高きものから、なつかしうなよゝかに、かたはなるまで、なよなよとたはみたるさまし給へりしにこそ。これはまだもてなしのうひうひしげに、よろづの事をつゝましうのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる。ゆゑゆゑしきけはひだにもてつけたらば、大將の見給はむにも、更にかたはなるまじなど、このかみ心に思ひあつかはれ給ふ。物語などし給ひて曉がたになりてぞ寝給ふ。傍に臥せ給ひて、故宮の御事ども、年頃おはせし御有様など、まほならぬと語り給ふ。いとゆかしうて見奉らずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。よべの心まりの人々は、いかにかなりつらむな。いとらうたげなる御さまをいみじうおぼすとも、かひあるべきことかは。いとほしといへば、右近ぞ、さもあらじ、かの御めのとの引きすゑて、すゑろ語りうれへし、氣色もてはなれてぞいひし。宮もあひても逢はぬやうなる心ばへにこそ、打ちうそぶき口すさび給ひしか、いさや殊更にもやあらむ、そは知らずかし。よべのほかげのいとおほどかなりしも、ことあり顔には見え給はざりしを、うちさゝめきていとほしがる。めのと車こひて常陸殿へいぬ。北の方にかうかうといへば胸つぶれさわきて、人もけしからぬさまにいひ思ふらむ、さうじみもいかおぼすべき、かゝるすぢの物にくみは、あて人もなきものなりと、おのが心ならひにあわたしく思ひなりて、夕つ方まわりぬ。宮おはしまさねば心やすくて、怪しく心幼げなる人を參らせおきて、うしろやすくはたのみ聞えさせながら、いたちの侍

らむやうなる心地のし侍れば、よからぬものともに悪み怨みられ侍り」と聞ゆ。「いとさいふばかりの幼げさにはあらざるを、うしろめたげに氣色ばみたる御まかけこそ煩はしけれ」とて笑ひ給へるが、心耻しげなる御まみを見るも、心のおに、耻しくぞ覺ゆる。いかにおぼすらむと思へばえもうち出て聞えず、「かくて侍ひ給ふは、年頃の願ひのみつこ、ちして、人のもり聞き侍らむもめやすく、おもだ、しきことになむ思ひ給ふるを、さすがにつ、ましきことになむ侍りけるを、深き山のほいは、みさをになむ侍るべきを」とて、打ち泣くもいといとほしくて、「こゝには何事からしろめたく覺え給ふべき。とてもかくてもうとうとしく、思ひ放ち聞えばこそあらめ。けしからずだちて、よからぬ人の時々ものし給ふめれど、その心を皆人見知りたれば、心づかひして、びんなうはもてなし聞えじと思ふを、いかに推し量り給ふにか」とのたまふ。「更に御心をばへだてありても思ひ聞えさせ侍らず、片腹痛うゆるしなかりしすぢは、何にかけても聞えさせ侍らむ、その方ならでも、おぼし放つまじきつなも侍るをなむ、とらへ所に頼み聞えさせるなど、おろかならず聞えて、「あすあさてかたき物忌に侍るを、おほぞうならぬ所にてすぐして、又も參らせ侍らむ」と聞えて誘ふ。いとほしくほいなさわざかなとおぼせど、えとゞめ給はず、あさましうかたはなるとに驚きさわぎたれば、えさを物も聞えていてぬ。かやうのかたゝがへどころと思ひて、ちひさき家設けたりけり。三條わたりにざればみたるが、まだ作りさしたる所なれば、はかばかしきまつらひもせてなむありける。「あはれこの御身ひとつを、よろづにもて惱み聞ゆるかな。心にかたは

ぬ世には、ありなまじきものにこそありけれ。みづからばかりは唯ひたぶるに志なきなしからず、人げなす、たゞさる方にはひこもりて過しつべし。この御ゆかりは心うしと思ひ聞えしあたりを、むつび聞ゆるに、びんなき事も出てきなば、いと人わらへなるべし。あぢきなし、ことやうなりとも、こゝを人にも知らせず忍びておはせよ、おのづからともかくも仕う奉りてむしと言ひ置きて、自らは歸りなむとす。君は打ち泣きて、世にあらむこと、所せげなる身と思ひくし給へるさま、いと哀なり。親はたまして、あたらしく惜しければ、つゝがなくて思ふごと見なさむと思ひ、さるかたはらいたき事につけて、人にもあははしく思はれいはいはれむが、安からぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思ひのまゝにぞすこしありける。かの家にもかくろへてはすゑたりぬべけれど、志かかくろへたらむを、いとほしと思ひてかくあつかふに、年頃かたはら去らず明暮見ならひて、かたみに心ほそく、わりなしと思へり。「こゝはまだかくあばれて、あやうげなる所なめり。さる心したまへ、さうしざうしにあるものども、召し出で、使ひ給へ、とのゐ人のことなどいひ置きて侍るも、いとうしろめたけれど、かしこに腹立ち怨みらるゝが、いと苦しければ」と、うち泣きてかへる。少將のあつかひを、かみは又なきものに思ひ急ぎて、もろごゝろにさま悪しく、いとなまずと忍んずるなりけり。いと心愛くこの人により、かゝるまぎれども、あるぞかしと、またなく思ふ方のことのかゝれば、つらく心うくて、をさをさ見いれず。かの宮のお前にて、いと人げなく見えしに、多く思ひおとしてければ、私物に思ひかしましをなど、思ひしこと

は止みにたり。こゝにてはいかゞ見ゆると、まだ打ち解けたるさま見ぬにと思ひて、のどかに居給へる盡つかた、こなたに渡りてものよりのぞく。白き綾のなつかしげなるに、今やう色のうちめなども清らなるを着て、はしの方にせんざい見るとてゐたるは、いづくかはおとる、いと清けなめるはと見ゆ。むすめまだかたなりに、何心もなきさまにて添ひ臥したり。宮のうへの並びておはせし御さまどもの、思ひ出づれば、口惜しのさまどもやと見ゆ。前なるごだちに物など言ひ戯ぶれて打ち解けたるは、いと見しやうにほひなく、人わろげにも見えぬを、かの宮なりしは、こと少將なりけりと思ふ折しもいふことよ、「兵部卿の宮の萩の、猶殊におもしろくもあるかな。いかでさる種ありけむ、同じ枝さしなどの、いと艶なることを、一日参りて出て給ふ程なりしかば、え折らずなりにき。ことだに惜しきと、宮のうちずじ給へりしを若き人たちに見せたらましかば」とて我も歌よみ居たり。いてや心ばせの程を思へば人とも覺えず、いでぎえは、いとこよなかりけるに何事いひ居たるぞとつぶやかなれど、いと心地なげなるさまは、さすがにまたらねば、いかゞいふとて、こゝろみに、

「まめゆひし小萩がうへもまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ」とあるに、いとほしく覺えて、

「宮城野の小萩がもと、知らませばつゆも心をわかずぞあらまし。いかてみづから聞えさせあきらめむ」といひたり。故宮の御事聞きたるなめりと思ふにいとどいかに人とひとしくとのみ思ひあつかはる。あいなら大將殿の御さまかたちぞ戀しう面影に見ゆる。同じうめ

てたしと見奉りしかと宮は思ひ離れ給ひて心もとまらず、あなづりて押し入り給へりけるを、思ふもねたし、この君はさすがに尋ねおぼす心ばへのありながら、うちつけにもいひかけ給はず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、萬につけて思ひ出でらるれば若き人はましてかくや思ひ出て聞え給ふらむ、我がものにせむと、かくにくき人を思ひけむこそ見苦しき事なるべかりけれなど唯心にかゝりて眺めのみせられて、とてやかくてやと、よろづに善からむあらましごとを思ひつゞくるに、いとかたし。やんごとなき御身のほど御もてなし見奉り給へらむ人は今少しなのめならず、いかばかりにてかは心を留め給はむ、世の人の有様を見聞くに、劣り優り賤しうあてなるまなに従ひてかたちも心もあるべきものなりけり、我が子どもを見るに、この君に似るべきやはある、少將をこの家の内に、又なきものに思へども、宮に見くらべ奉りしかば、いと口惜しかりしに推し量らる、當代の御かしづきむすめを、え奉り給へらむ人の御めうつしには、いともいともはづかしく、つゝましかるべきものかと思ふも、すゝろに心地もあくがれにけり。旅のやどりはつれづれにて、庭の草もいぶせき心地するに、いやしきあづまこゑしたるものどもばかりのみいでいり、慰めに見るべきせんざいの花もなし。打ちあばれて、はればれしからて明し暮すに、宮のうへの御有様思ひ出づるに若い心地に戀しかりけり。あやにくだち給へりし人の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何事にかありけむ、いと多く哀げにのたまひしかな、名残をかしかりし御うつりがも、まだ残りたる心地して恐しかりしも思ひ出でらる。母君だつやと、いと哀げなる文をかきて

おこせ給ふ。おろかならず心苦しう思ひあつかひ給ふめるに、かひなうもてあつかはれ奉ること、打ちなかれて、「いかにつれづれに見習はぬ心地し給ふらむ。まばし忍び過し給へ」とある返事に、「つれづれは何か心やすくてなむ。

ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬ所とおもはましかば」。幼げにいひたるを見るまゝにほろほろと打ち泣きてかうまどはしはふる、やうにもてなすとといみじければ

「うき世にはあらぬ所をもとめても君がさかりを見るよしもがなりとなほなほしきことどもをいひかはしてなむ心をのべける。」かの大將殿は例の秋深くなりゆく頃、習ひにしことなれば、ねざめねざめに物忘れせず、哀にのみ覺え給ひければ、宇治のみ堂つくりはてつと聞き給ふに、みづからおはしましたり。久しう見給はざりつるに、山の紅葉も珍しうおぼゆ。毀ちし寢殿、こたみはいとはればしうつくりなしたり。昔いとことそぎて、ひじりだち給へりすまひを思ひ出づるに、故宮も戀しうおぼえ給ひて、さまかへてけるも、口惜しきまでおぼさるれば常よりもながめ給ふ。もとありし御まつらひは、いとたふとげにて、今片つかたを女しく、こまやかになど、一かたならざりしを、あじろ屏風、なにかのあらあらしきなどは、かのみ堂の僧坊のぐに殊更になさせ給へり。山里めきたるぐどもを殊更にせさせ給ひて、いたうもことそがず、いと清げにゆゑゆゑしくまつらはれたる、遣水のほとりなる岩に居給ひて、とみにも立たれず、

「絶えはてぬ清水になどかなき人のおもかけをだにとどめざりけむ」。涙をのごひつ、辨



の尼君の方に立ちより給へれば、いとかなしと見奉るに、唯ひそみにひそむ。なげしにかりそめに居給ひて、簾垂のつまを引き上げて物がたりし給ふ。几帳にかくろへて居たり。ことのついでに、「かの人はさいつころ宮にと聞きしを、さすがにうひうひしく覺えてこそ、音づれよらね。猶これより傳へはて給へ」とのたまへば、「一日かの母君の文侍りき。いみたがふとて、こゝかしこになむあくがれ給ふめる。この頃もあやしき小家にかくろへものし給ふめるも、いと心苦しく、少し近き程ならましかば、そこにわたして心安かるべきを、あらまじき山道に、たはやすくもえ思ひ立たてなむと侍りし」と聞ゆ。「人々のかく恐しく住める道にまろこそふりがたくわけくれ、何ばかりの契にかと思ふは哀になむ」とて、例の涙ぐみ給へり。「さらばその心安からむ所にせうそこしたまへ、みづからやはかしこに出で給はぬ」とのたまへば、「仰せ言を傳へ侍らむことはやすし。今更に京を見侍らむことは物うくて宮にだにえ参らぬを」と聞ゆ。「なとてかともかくも人の聞き傳へばこそあらめ、あたごのひじりだに時に従ひては出でずやはありける。深きちかひを破りて人の願を満て給はむこそ、たふとやらめ」とのたまへば「人わたすことも侍らぬに聞きにくきともこそ出でまうで來れ」と、苦しげに思ひたれど、「猶よきをりなるを」と、例ならずまひて、「あさてばかり車奉らむ。そのたびの所尋ねおき給へ。ゆめをこがましくひがわざすまじうを」と、ほゝゑみてのたまへば、煩はしく、いかにおぼすことならむと思へど、あうなくあはあはしからぬ御心ざまなれば、おのづから我が御爲にも人聞きなどはつゝみ給ふらむと思ひて「さらばうけ給はりぬ。近き

程にこそ御文などを見せさせ給へかし。ふりはへさかしらめきて、心まらびのやうに思はれ侍らむも今更にいがたうめにや、つしましくてなむ」と聞ゆ。「文はやすかるべきを、人の物いひいとたてあるものなれば、右大將は常陸のかみの娘をなむ、よばふなるなどもとりなしてむをや。そのかんのぬし、いとあらあらしげなめり」とのたまへば、うち笑ひて、いとほしと思ふ。暗うなれば出て給ふ。下草のをかしき花ども紅葉などをらせ給ひて宮に御覽せさせ給ふ。かひなからずおはしぬべけれど、かしてまり置きたるさまにて、いたうもなれ聞え給はずぞあめる。うちよりたゞの親めきて、入道の宮にも聞え給へば、いとやんごとなきかたは限なく思ひ聞え給へり。こなたかなたとかしづき聞え給ふ宮仕にそへて、むつかしき私の心の添ひたるも苦しかりけり。のたまひしまだつとめて、むつましくおぼす下臈の侍一人、顔知らぬ牛飼つくり出て、「つかはす。御さうのものどもの田舎びたる召し出て、「つげよ」とのたまふ。必ず出づべくのたまへりければ、いとつしましく苦しけれど、打ちけさうじつくるひでのりぬ。野山の氣色を見るにつけても、いにしへのふることども思ひ出でられて、眺め暮してなむきつきける。いとつれづれに人めも見えぬ所なれば心やすく引き入れて、「かくなむ参り來つる」と、来るべのをのこしていはせれば、初瀬のともによりし若人出てきておろす。怪しき所をながめ暮し明すに、昔がたりもまつべき人のきたれば嬉しく呼び入れ給ひて、親と聞えける人の御あたりの人と思ふに、むつまじきなるべし。「哀に人おれず見奉りし後よりは思ひ出て聞えぬをりなけれど、世の中かばかり思ひ給へ捨てたる身に

て、かの宮にだに参り侍らぬを、この大將殿の怪しきまでのたまはせしかば、思ひ給へ起してなむ」と聞ゆ。君もめのとも、めてたしと見置き聞えてし人の御さまなれば忘れぬさまにのたまふらむも哀なれど、俄にかくおぼしたばかるらむとは思ひもよらず、宵うち過ぐる程に宇治より人参れりとして、門忍びやかに打ち叩く。さにやあらむと思へば、辨あけさせたれば、車をぞひき入るなる。怪しと思ふに、尼君に對めん給はらむとて、この近き御さうのあづかりの名のりをせさせ給へれば、戸口にゐざり出てたり。雨少しうちそゞくに、風はいとひやくかに吹き入りて、いひ知らず薫りければ、かうなりけりと、たれもたれも心ときめきしつべき御けはひをかしければ、用意もなくあやしきに、まだ思ひあへぬ程なれば心さわぎて、いかなることにかあらむ」といひあへり。「心やすき所にて月頃の思ひあまることも聞えさせむとてなむ」といはせ給へり。いかに聞ゆべきことにかと君は苦しげに思ひて居給へれば、めのと見苦しがりて、「志かおはしましたらむを、立ちながらやは返し奉り給はむ。かの殿にこそかくなむと忍びて聞えめ。近き程なれば」といふ。「うひうひしくなどてかさはあらむ。若き御どち物聞え給はむは、ふとしも志みつくべくもあらぬを、怪きまで心のどかに物深うおはする君なれば、よも人のゆるしなくて打ち解け給はじなどいふ程、雨や、降りくれば、空はいとくらし。とのゐびとのあやしき聲したるやぎやうちして、「やかの辰巳のすみのかぐれいとあやうし。この人の御車入るべくば引き入れて御門さしてよ。かゝるひとの供人こそ、心はうたてあれなどいひあへるも、むくむくしく聞き習はぬ心地し給ふ。さの、

わたりに家もあらなくなど口ずさびて、さびたる寶子のはしつかたに居給へり。

「さしとむるむぐらやまげさあづま屋のあまりほどふる雨ぞ、さかな」とうちはらひ給へるおひ風、いとかたはなるまで、あづまの里人も驚きぬべし。とさまかうさまに聞えのがれむ方なければ、南のひさしにおまし引きつくろひて入れ奉る。心やすくもたいめし給はぬを、これかれをしいでたり。遣戸といふものさして、いさゝかあけたれば、「飛彈のたくみもうらめしきへだてかな。かゝるものゝには、まだるならはず」と愛へ給ひて、いかゞし給ひけむ、入り給ひぬ。かの人かたの願ものたまはて、唯覺えなきものゝはさまより見しより、すゝろに戀しきこと、さるべきにやあらむ怪しきまでぞ、思ひ聞ゆるとぞ語らひ給ふべき。人のさまいとらうたげにおほどきたれば、見おとりもせず、いと哀とおぼしけり。程もなう明けぬる心地するに鳥などは鳴かて、おほち近き所におほどれたる聲して、いかにとか聞きも知らぬなのりをして打ち群れて行くなどを聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、ものいたゞきたるものゝ、鬼のやうなるぞかしと聞き給ふも、かゝる蓬のまるねに、ならひ給はぬ心地に、をかしうもありけり。とのおびとも門あけて出づる音す。おのちの入りて臥しなどするを聞き給ひて、人召して車妻戸に寄せさせ給ふ。かき抱きて乗せ給ひつ。誰も誰もあやしう、あへなきことを思ひさわぎて、「なが月にもありけるを心うのわざや。いかにしつることぞ」と歎けば、尼君もいとほしく、思のほかなることゝもなれど、「おのづからおぼすやうあらむ。うしろめたうな思ひ給ひそ。ながつきはあすこそせちぶと聞きしか」といひ慰む。今日

は十三日なりけり、「尼君こたみはえ參らじ。宮のうへきこし召さむこともあるに、忍びて行きかへり侍らむも、いとうたてなむ」と聞ゆれど、またきこの事聞かせ奉らむも心耻しく覺え給ひて、「それは後にも罪さり申し給ひてむ。かしこにあるべなくては、たつきなき所を」と責めてのたまふ。「人一人やはべるべき」とのたまへば、この君に添ひたる侍従とのりぬ。めのと尼君のともなりしわらはなども後れて、いと怪しき心地して居たり。近き程にやと思へば宇治へおはするなりけり。牛などひきかふべき心まうけし給へり。河原過ぎ法さう寺のわたりおはしますに、夜は明けはてぬ。若き人はいとほのかに見奉りて、めて聞えて、すゞろにこひ奉るに、世の中のつゝましさも覺えず、君ぞいとあさましきに物も覺えて、うつぶしふしたるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて抱き給へり。うすものゝほそながを車のなかに引き隔てたれば、花やかにさし出でたる朝日かげに、尼君はいとほしたなく覺ゆるにつけて、故姫君の御ともにもこそ、かやうにても見奉りつべかりしが、ありふれば思かけぬことも見るかなと悲しう覺えて、つゝむとすれど、うちひそみつゝ泣くを、侍従はいとにくものゝはじめに、かたちことにて乗りそひたるをだに思ふに、なぞかくいやめなると、にくゝをこにも思ふ。老いたるものは、すゞろに涙もろにあるものぞと、おろそかに打ち思ふなりけり。君も見る人はにくからねどそらの氣色につけても、さしかたの戀しさまさりて、山深く入るまゝに霧立ちわたる心地し給ふ。打ち眺めてより居給へる、袖のかさなりながら、ながやかに出でたりけるが、川霧にぬれて御ぞのくれなるなるに、御なほしの花のおどろお

どろしううつりたるを、おとしかけのたかき所に見つけて引き入れ給ふ。

「かたみぞと見るにつけてもあさぎりの所せきまでぬる、袖かな」と心にもあらず、ひとりごち給ふを聞きて、いとまぼるばかり尼君の袖も泣きぬらすを、若き人あやしう見苦しきよかな、心ゆくみちに、いとむつかしきこと添ひたる心地す。忍びがたげなる鼻ずりを聞き給ひて我も忍びやかに打ちかみ給ひて、さすがにいかゞ思ふらむといとほしければ、あまたの年頃、この道を行きかふたび重るを思ふに、そこはかとなく物哀なるかな。「少し起きあがりて、この山の色も見給へ。いとうもれたりや」と、強ひてかきおこし給へば、をかしき程にさしかくして、つゝましげに見出したるまみなどは、いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ心もとなかめる。いといたうこめいたるものから用意の浅からず物し給ひしはやと、猶行くかたなき悲しさは空しきそらにも満ちぬべかめり。おはしつきて、哀なきたまややどりて見給ふらむ、誰によりて、かくすじろに惑ひありくものにもあらず。なくにと思ひ續け給ひて、おりては少し心まらひて立り去り給へり。女は母君の思ひ給はむことなど、いとなげかしけれど、艶なるさまに心深く哀に語らひ給ふに、思ひ慰めておりぬ。尼君はこなたに殊更におりて廊にぞ寄するを、わざと思ふべき住ひにもあらぬを、よういこそあまりなれと見給ふ。みさうより例の人々騒しきまで参り集る。をんなの御だいは尼君の方よりまゐる。道はしげかりつれど、この有様はいとはればれし。河の氣色も山の色も、もてはやしたるつくりさまを見出して、日頃のいふせさ慰みぬる心地すれど、いかにもてない給

はむとするにかと、うきて怪しう覺ゆ。殿は京に御文書き給ふ。「まだなりあはぬ佛の御飾など見給へおきて、けふよろしき日なりければ、急ぎ物し侍りて、みだり心地のなやましきに、物忌なりけるを思ひ給へ出て、なむ、けふあすこゝに慎み侍るべき」など、母宮にも姫宮にも聞え給ふ。打ち解けたる御有様今少しをかしくて、入りおはしたるもはづかしけれど、もてかくすべくもあらで居給へり。女の御さうぞくなど、いろいろによくと思ひてまかさねたれど、少し田舎びたることもうちまじりてぞ、昔のいとなえはみたりし御姿の、あてになまめかしかりしのみ思ひいでられて、髪すそのをかしげさなどは、こまごまとあてなり。宮のみぐしのいみじくめでたきにも、劣るまじかりけりと見給ふ。かつはこの人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、只今ものものしげにて、かの宮にむかへすゑむも、おとぎしびんなかるべし。さりとしてこれかれあるつらにて、おほぞうにまじらはせむはほいならむ。まばしこゝにかくしてあらむと思ふも、見ずばさうさうしかるべく、哀におほえ給へば、おろかならず語らひ暮し給ふ。故宮の御ことものためひ出て、昔物語をかしうこまやかにいひ戯ぶれ給へど唯いとつゝましげにてひた道に耻ぢたるを、さうさうしうおぼす。誤りてもかう心もとなきはいとよし、教へつゝも見てむ、田舎びたるされ心もてつけて、まなまなしからず、はやりかならましかばしも、かたしるふようならましと思ひなほし給ふ。こゝにありけるさん、さうのこと召し出て、かゝることはた、ましてえせじかすと口惜しければ、ひとりまらべて、宮うせ給ひて後、こゝにてかゝるものに、いと久しう手觸れざりつかしと、めづら

しく我ながら覺えて、いとなつかしくまさぐりつゝながめ給ふに、月さし出てぬ。宮の御きんの音のおどろおどろしくはあらで、いとをかしく哀に弾き給ひしはやとおぼし出て、「昔誰も誰もおはせし世に、こゝに生ひ出て給へらましかば、今少し哀はまさりなまし。みこの御ありさまは、よその人だに哀に戀しくこそ思ひ出でられ給へ、などてさる所には年頃經給ひしぞ」とのたまへば、いと耻しくて、白き扇をまさぐりつゝ、添ひふしたるかたはらめ、いとくまなうまろうて、なまめいたるひたひ髪のみまなど、いとよく思ひ出でられて哀なり。まいてかやうのことはつきなからず、教へなさはやとおぼして、「これは少しほのめい給ひたりや。あはれ我がつまといふとは、さりとて手ならし給ひけむ」など問ひ給ふ。「そのやまとことばだに、つきなくならひにければ、ましてこれは」といふ。いとかたはに心後れたりとは見えぬ。こゝにあきて、え思ふまゝにもござらむことをおぼすが、今より苦しきは、なのためにはおぼさぬなるべし。きんは押しやりて、「楚王のたいのうへのよるのきんの聲」と、ずんじ給へるも、かの弓のみひくあたりにならひて、いとめてたく思ふやうなりと、侍従も聞き居たりけり。さるは扇の色も、心おきつべきねやのいにしへをば知らねば、ひとへにめで聞ゆるぞ、後れたるなめるかし。ことこそあれ、怪しくもいひつるかなとおぼす。尼君の方よりくだものまわれり、箱のふたに紅葉蔦など折りまきて、ゆるなからず取りませてきたるかみに、ふつゝかに書きたるもの、くまなき月にふと見ゆれば、目とゞめ給ふ程に、くだものいそぎにぞ見えける。



「やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月かな」とふるめかしく書きたるを、はづかしくも哀にもおぼされて、

「里の名もむかしながらに見し人のおもかはりせるねやの月かけ」。わざとかへりごとくはなくてのたまふを、侍従なむ傳へけるとぞ。

浮船

宮、猶かのほのかなりし夕をおぼし忘るゝ世なし。ことごとしきほどにはあるまじげなりしを、人がらのまめやかにをかしうもありしかなど、あだなる御心には口惜しくて止みにしと、妬うおぼさるゝまゝに、女君をもちうはかなきことゆゑ、あながちにかゝるすぢの物憎みし給ひけり。思はずに心うしと、はづかしめ怨み聞え給ふをりをりは、いと苦しうて、ありのまゝにや聞えてましとおぼせど、やんごとなきさまにはもてなし給はざなれど、あさはかならぬ方に心とめて人の隠し置き給へる人を、物いひさがなく聞えてたらむにも、さて聞きすぎし給ふべき御心さまにもあらざめり。侍ふ人の中にもはかなう物をもの給ひふれむとおぼし立ちぬるかぎりには、あるまじき里までも尋ねさせ給ふ御さまよからぬ本じやうなるに、さばかり月日を経ておぼしきむめるあたりは、まして必ず見苦しき事取り出て給ひてむ。ほかより傳へ聞き給はむはいかゞはせむ、いづかたさまにもいとほしくこそはありと

も、防ぐべき人の御心さまならねば、よその人よりは聞きにくく、などばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても我がをこたりにては、もてそこなはしと思ひかへし給ひつゝ、いとほしなからも聞え出で給はず。ことさまにつきつきしくはえいひなし給はねば、おしこめて物怨じきたる、世の常の人になりてぞおはしける。かの人とはたとしへなくのどかにおぼしおきて、まぢどほなりと思ふらむと心苦しうのみ思ひやり給ひながら、所せき身の程を、さるべきついでなくて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど今いとよくもてなさむとす。山里の慰めと思ひおきてし心あるを、少し日數も經ぬべきことども作り出で、のどやかに行きても見む。さてまばしは人の知るまじきすみどころして、やうやうさる方に、かの心をものどめ置き、我がためにも人のもどきあるまじく、なのめにてこよからめ。俄に何人ぞ、いつよりなど聞き咎められむも物騒しく、初の心にたがふべし。又宮の御方の聞きおぼさむことも、もとの所をきはきはさうゐてはなれ、昔をわすれ顔ならむも、いとほいなしなどおぼしきつむるも例のいとどけさ過ぎたる心からなるべし。わたすべき所おぼし設けて忍びてぞ造らせ給ひける。少し暇なきやうにもなり給ひにたれど、宮の御方には猶たゆみなく心よせ仕うまつり給ふこと同じやうなり。見奉る人も怪しきまで思へど、世の中をやうやうおぼし知り、人のありさまを見聞き給ふまゝに、これこそは誠に昔を忘れぬ心ながさの名残さへ淺からぬためしなめれと哀もすくなからず、ねびまさり給ふまゝに人がらも世のおぼえも、さまことにもおし給へば、宮の御心のあまりたのもしげなき

時々思はずなりける宿世かな、故姫君のおぼしおきてしまゝにもあらで、かく物思ひ憚るべき方にしもかゝりそめけむよとおぼすをりをり多くなむ。されどたい面し給ふことはかたし。年月もあまり昔を隔て行き、うちうちの御心を深う知らぬ人は、なほなほしきたゞ人こそ、さばかりのゆかり尋ねたるむつびをも忘れぬに、つきづきしけれ、なかなかかう限あるほどに、例にたがひたるありさまぞないひ思はむもつゝましければ宮の絶えずおぼし疑ひたるを、いよいよ苦しうおぼし懼り給ひつゝ、おのづから疎きさまになり行くを、さりとても絶えず同じ心の變り給はぬなりけり。宮もあだなる御本じやうこそ見まうきふしもまじれ、若君のいと美しくしうおよすけ給ふまゝに、ほかにはかゝる人も出でくまじきにやと、やんごとなきものにおぼして、うちとけなつかしき方には人にまさりてもてなし給へば、ありしよりは少し物思ひ静まりてすぐし給ふ。む月の一日過ぎたる頃渡り給ひて、若君の年まさり給へるをもてあそびうつくしみ給ふ晝つ方、ちひさきわらは、縁のうすえふなるつゝみ文の大きやかなるに、小さきひげこを小松につけたる、又すぐずくしきたてぶみとり副へて、あうなく走りまゐる。女君に奉れば、宮「それはいづくよりぞ」とのたまふ。「宇治より大輔のおとゞにとて、もてわづらひ侍りつるを、例のお前にてぞ御覽せむとて、とり侍りぬる」といふも、いとあわたゞしき氣色にて、「このこはかねを造りて、色どりたるこなりけり。松もいとよう似て造りたる枝ぞとよ」と、ゑみていひつゞくれば、宮も笑ひ給ひて、「いで我ももてはやしてむ」とめすを、女君いとかたはらいたくおぼして、「文は大輔がりやれ」との

たまふ。御顔の赤みたれば、宮、大將のさりげなくまなしたる文にて、宇治の名のりもつきづきしとおぼしよりて、この文をとり給ひつ。さすがにそれならむ時にとおぼすに、いとまはゆければ「あけて見むよ、怨じやま給はむとする」とのたまへば、「見苦しう。何かはその女どちの中に書き通はしたらむうちとけ文をば御覽せむ」とのたまふが、さわがぬ氣色なれば、「さば見むよ。女の文がきは、いかゞある」とてあけ給へれば、いと若やかなる手にて、「おぼつがなくて年も暮れ侍りにける。山里のいぶせさこそ蜂の霞もたえまなくて」とて、はしに、「これ若君のお前に、あやしう侍るめれど」と書きたり。ことにらうらうじきふしも見えねど、覚えなきを御目たてし、この立文を見給へば、げに女の手にて、「年改りて何事かさぶらふ。御私にも、いかにたのもしき御悦多く侍らむ。こゝにはいとめてたき御住ひの心深さを猶ふさはしからず見奉る。かくてのみつくづくとながめさせ給ふよりは、時々は渡り参らせ給ひて御心も慰めさせ給へと思ひ侍るに、つゝましく恐しきものにおぼしこりてなむ、物憂き事に歎かせ給ふめる。若君のお前にとて、卵槌参らせ給ふ。おほきおまへの御覽せざらむ程に御覽せさせ給へ」となむ、こまごまと、こゝいみもえしあへず、物なげかしげなるさまのかたくなしげなるも、うち返しうち返し怪しと御覽じて、「今はのたまへかし。誰がぞ」とのたまへば、「昔かの山里にありける人のむすめの、さるやうありて、この頃かしこに侍るとなむ聞き侍りし」と聞え給へば、おしなべて仕うまつるとは見えぬ文がきをと心え給ふに、かの煩はしきことあるにおぼしあはせつ。卵槌をかしう、つれづれなりける人のまわざと見

えたり。またぶりに山たちばなつくりて、つらぬき添へたる枝に、

「まだふりぬものにはあれど君がため深きこゝろにまつと知らなむ」と、ことなるとなきを、かの思ひわたる人のにやとおぼしよりぬるに、御目とまりて、「返事し給へ。なさけなし。かくい給ふべき文にもあらざるをなど御氣色のあしき、まかりなむよ」とて立ちたまひぬ。女君少將などして、「いとほしくもありつるかな。幼き人の取りつらむを、人はいかでか見ざりつるぞ」など忍びてのたまふ。「見給へましかば、いかでかは参らせまし。すべてこのこは心ちなうさしすぐして侍り。おひさき見えて人はおほどかなること、をかしけれ」などにくめば、「あなかま。幼き人な腹だてそ」とのたまふ。こぞの冬人の参らせたるわらはの、顔はいと美しかりければ宮もいとらうたくし給ふなりけり。我が御方におはしまして、あやしうもあるかな、宇治に大將の通ひ給ふことは年頃絶えずと聞く中にも、忍びて夜泊り給ふ時もありと人のいひしを、いとあまりなる人のかたみとて、さるまじき所に旅寝し給ふらむことと思ひつるは、かやうの人かくし置き給へるなるべしと、おぼしうることもありて、御文のことにつけ、つかひ給ふ大内記なる人の、かの殿に親しきたよりをおぼし出で、お前に召す。まわれり。おんふたぎすべきに、集どもえり出で、こなたなる厨子につむべきとなどのたまはせて、「右大將の宇治へいますること猶絶えはてずや。寺をこそいとかしこく造りたなれ。いかでか見るべき」とのたまへば、「いとかしこいかめしく造られて、不絶の三味堂など、いとたふとくおきてられたりとなむ聞き給ふる。かよひ給ふとは、こぞの秋頃よりは、

ありしよりもまばまば物し給ふなり。志もの人々の忍びて申さしは、女をなむ隠しすゑさせ給へる。けしうはあらずおぼす人なるべし。あのわたりにらうじ給ふ所々の人、皆仰にて参り仕うまつる。とのゐにさしあてなどしつゝ、京よりもいと忍びて、さるべき事など問はせ給ふ。いかなるさいはひびとの、さすがに心ほそくて居給へるならむとなむ、唯このしはすの頃ほひ申すと聞き給へし」ときこゆ。いと嬉しくも聞きつるかなと思ほして、「たしかにその人とはいはずや。かしこにもとよりある尼ぞとぶらひ給ふと聞きし」。「尼は廊になむ住み侍りける。この人は今たてられたるになむ。きたなげなき女房などもあまたして、口惜しからぬけはひにてゐて侍る」と聞ゆ。「をかしきとかな。何の心ありて、いかなる人をかはさてすゑ給ひつらむ。猶いと氣色ありて、なべての人々に似ぬ御心なりや。左のおとゝなど、この人のあまり道心に進みて山寺によるさへともすれば泊り給ふなる、軽々しさともどき給ふと聞きしを、げになどかさしも佛の道には忍びありくらむ、猶かのふるさとに心をとどめたるとなむ聞きし。かゝることこそはありけれ、いつら人よりはまめなるとさかしがる人しも、ことに人の思ひいたるまじき、くまあるかまへよ」とのたまひて、いとをかしとおぼえたり。この人はかの殿にいとむつましく仕うまつるけいしの聲になむありければ、かくし給ふ事も聞くなるべし。御心のうちには、いかにしてこの人を見し人かとも見定めむ、かの君のさばかりにてすゑたるは、なべてのよろしき人にはあらじ、このわたりには、いかでかうとからぬにかあらむ、心をかはしてかくし給へりけるも、いとねたうおぼゆ。唯そのことをこの

頃はおぼしきみたり。のりゆみ内宴などすぐして心のどかなるに、つかさめしなどいひて人の心盡すめる方は何ともおぼさねば、宇治へ忍びておはしまさむことをのみおぼしめぐらす。この内記は望むことありて、よるひるいかで御心に入らむと思ふ頃、例よりは懐しう召しつかひて、「いと難き事なりとも我がいはむことはたばかりてむや」などのたまふ。「かしこまりて侍ふ」。いとびんなきことなれど、かの宇治に住むらむ人は、はやうほのかに見し人の行くへも知らずなりにしが、大將に尋ねとられにけりと聞き合することとあれ。たしかには知るべきやうもなきを、唯物より覗きなどして、それかあらぬかと見定めむとなむ思ふ。聊か人に知らるまじきかまへは、いかゞすべき」とのたまへば、あな煩はしと思へど、「おはしまさむことは、いと荒き山ごえになむ侍れど、殊に程遠くは侍はずなむ。夕つ方出でさせおはしまして、ぬねの時にはおはしまし着きなむ、さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らむことは、唯御供にさぶらひ侍らむことは、それも深き心はいかてか知り侍らむ」と申す。「さかし。むかしも一たび二たび通ひしみちなり、軽々しきもどきおひぬべきが、物の聞えのつ、ましきなり」とて、返すがへすあるまじきことに我が御心にもおぼせど、かうまでうち出で給ひつれば得思ひ留め給はず、御供に昔もかしこのあない知れりし者ふたりみたり、この内記、さては御めのとこの藏人よりかうふり得たる若き人、むつましきかぎりをえり給ひて、大將けふあすよもおはせじなど、内記に能くあない聞き給ひて出で立ち給ふにつけても、いにしへをおぼし出づ。あやしきまで心を合せつゝ、ゐてありきし人のために、う

しるめたきわざにもあるかなと、おぼし出づることもさまざまなるに、京の内だにむげに人知らぬ御ありきは、さはいへどえし給はぬ御身にしも怪しきさまのやつれ姿して、み馬にておはする、心地も物恐しくやましけれど、ものゆかしきかたは進みたる御心なれば山深うなるまゝに、いつしかいかならむ、見合することもなくて歸らむこそ、さうさうしくあやしかるべけれどおぼすに、心もさわぎ給ふ。ほふさう寺のほどまでは御車にて、それよりぞみ馬には奉りける。急ぎて、よみ過ぐる程におはしましぬ。内記、あなよく知れるかの殿の人に問ひ聞きたりければ、との人あるかたにはよらで、あし垣まこめたるにしおもてを、やをら少しこぼちて入りぬ。我もさすがにまだ見ぬ御住まひなれば、たどたどしけれど人まげうなどしあらねば、しんでんの南おもてにぞ、火ほのぐらう見えて、そよそよと音する。参りて「まだ人は起きて侍るべし。これよりおはしまさむ」としるべしして入れ奉る。やをらのぼりて格子のひまあるを見つけて寄り給ふに、伊豫すはさらさらと鳴るもつゝまし。新しう清げに造りたれど、さすがにあらあらしくてひまありけるを、誰かは来て見むとうちとけて穴もふたがぬなるべし。几帳のかたびら打ち懸けておしやりたり。火あかうともして物縫ふ人三四人居たり。わらはのをかしげなる絲をぞよる。これが顔まづかのほかげに見たまひしそ。れなり。うちつけめかと猶疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君はかひなをまくらにて、火をながめたるまみ、髪のこぼれかゝりたる額つき、いとあてやかになまめきて、對の御方にいとようおぼえたり。この右近物折るとて、「かくて渡らせ給ひなば、とみにしも得歸



り渡らせ給はじを、殿はこのつかさめしのほどすぐして、つたいち頃には必ずおはしましなむと、きのふの御つかひも申しけり。御文にはいかゞ聞えさせ給へりけむ」といへど、いらへもせず、いと物思ひたるけしきなり。「折しもはひかくれさせ給へるやうならむが、見苦し」といへば、向ひたる人、「それはかくなむ渡り給ひぬると御せうそこ聞えさせ給ひつらむこそよからめ。輕々しういかでかは音なくてははひかくれさせ給はむ。御物まうでの後は、やかで渡りおはしましねかし。かくて心ほそきやうなれど心にまかせて安らかなる御住ひにならひて、なかなか旅心地すべしや」などいふ。またあるは、「猶暫しかくて待ち聞えさせ給はむぞ、のどやかにさまよかるべきや。京へなど迎へ奉らせ給へらむ後、おだしくて親にも見え奉らせ給へかし。このおとゞのいと急にものし給ひて、俄にかう聞えなし給ふなめりかし。昔も今も物ねんじ悉て長閑なる人こそ、さいはひは見はて給ふなれ」などいふなり。右近「などてこのまゝを留め奉らずなりにけむ。老いぬる人はむづかしき心のあるにこそ」と憎むは、めのとやうの人を譏るなめり。けににくきものありきかとおぼし出づるも夢の心ちぞする。かたはらいたきまで打ち解けたることどもをいひて、「宮のうへこそいとめてたき御さいはひなれ。左のおとゞのさばかりめでたき御勢ひにていかめしう罵り給ふなれど、若君生れ給ひて後は、こよなくぞおはしますなる。かゝるさかしら人どものおはせて御心のどかにかしこうもてなして、おはしますこそはあめれ」といふ。「殿だにまめやかに思ひ聞え給ふ事變らずば劣り聞え給ふべきことかは」といふを、君少し起きあがりて、「いと聞きにく

きこと、よその人にこそ劣らじともいかにとも思はめ。かの御事なかけてもいひそ。漏り聞ゆるやうもあらば片腹痛からむ」などいふ。何ばかりのしぞくにかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかなと思ひくらぶるに、心恥しげにて、あてなる所はかれはいとこよなし。これはたゞらうたげに、こまかなる所ぞいとをかしき。よろしうなりあはぬ所を見つけたらむにてだに、さばかりゆかしとおぼしきめたる人を、それと見てさて止み給ふべき御心ならねばましてくまもなく見給ふに、いかでかこれを我が物にはなすべきと、わりなくおぼし惑ひぬ。物へ行くべきなめり、親はあるべし。いかでこゝならで、又は尋ね逢ふべき。こよひの程にはまたいかゞすべきと心もそらになり給ひて、猶まもり給へば、右近「いとねぶたし。よべもすゝろに起き明してき。つとめての程にもこれは縫ひてむ。急がせ給ふとも御車は日たけてぞあらむ」といひて、老ざしたるものどもとり具して几帳に打ち懸けなどしつゝ、うたゝねのさまに寄り臥しぬ。君も少し奥に入りて臥す。右近北おもてにいきて、暫しありてぞ來たる。君の跡近く臥しぬ。ねぶたしと思ひければ、いと疾う寝入りぬる氣色を見給ひて、又せむやうもなければ忍びやかにこの格子をたゞき給ふ。右近聞きつけて、「誰ぞ」といふ。こわづくり給へば、あてなる老はぶきと聞き知りて、殿のおはしたるにやと思ひて起きて出でたり。「まづこれあけよ」とのたまへば、「怪しう覺えなき程にも侍るかな。夜はいたう更けてはべらむものを」といふ。「物へ渡り給ふべかなりと仲信がいひつれば、驚かれつるまゝに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづ開けよ」とのたまふ聲、いとようまねび似せたまふ

て忍びたれば、思ひもよらずかい放つ。「道にていとわりなく恐しき事のありつれば怪しき姿になりてなむ。火暗うなせ」とのたまへば、あないみじとあわて惑ひて、火は取りやりつ。「われ人に見すなよ。來たりとて人おどろかすな」といとらうらうじき御心にて、もとよりほのかに似たる御聲を唯かの御けはひにまねびて入り給ふ。ゆゑしきことのさまとのたまへる、いかなる御姿ならむといとほしくて、我もかくろへて見奉る。いとほそやかになよなよとさうぞきて、かのかうばしきことも劣らず。近う寄りて、御ぞども脱ぎ、なれがほに打ち臥し給へれば、「例のちましにこそ」などいへど物ものたまはず。御ふすままりて寝つる人々起して、少し志ぞきて皆寝ぬ。御供の人など、例のこゝには知らぬならひにて、「哀なる夜のおはしましさまかな。かゝる御有様を御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、「あなかま給へ。よごゑはさゝめくしもぞ、かしかましき」などいひつゝ寝ぬ。女君はあらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど聲をだにせさせ給はず。いとつゝましかりし所にだに、わりなかりし御心なれば、ひたふるにあさまし。初よりあらぬ人と知りたらば聊いふかひもあるべきを、夢の心ちするに、やうやうそのをりのつらかりしこと、年頃思ひわたるさまのたまふに、この宮と知りぬ。いよいよはづかしく、かのうへのおぼさむことなど思ふに、又猛きことなければ、限りなうなく。宮もなかなかにて、たはやすくあひ見ざらむことなどをおぼすに、泣き給ふ。夜はたゞあけに明く。御供の人來てこわづくる。右近聞きて參れり。出て給はむこゝちもなく飽かずあはれなるに、又おはしまさむことも難ければ京には求

めさるわがるとも、けふばかりはかくてあらむ、何事も生けるかぎりのためこそあれ、只今出  
ておはしまさば誠に死ぬべくおぼさるれば、この右近を召し寄せて、「いと心ちなしと思はれ  
ぬべけれど、けふは得出づまじうなむある。をのこともは、このわたり近からむ所に、よくか  
くろへてさぶらへ。時方は京へものして、山寺に忍びてなむと、つきづきしからむさまに、い  
らへなどせよ」とのたまふに、いとあさましくあきれて、心もなかりける夜のあやまちを思  
ふに、心地も惑ひぬべきを思ひまづめて、今は萬におぼれ騒ぐとも、かひあらじものから  
なめげなり。怪しかりしをりに、いと深うおぼしつれたりしも、かうのがれざりける御宿世  
にこそありけれ、人のまたるわざかはと思ひ慰めて、「今日御迎にと侍りしを、いかにせさせ  
給はむとする御ことにか、かう遁れ聞えさせ給ふまじかりける御宿世は、いと聞えさせ侍ら  
むかたなし。をりこそいとわりなく侍れ。今日は出でおはしまして御志侍らば長閑にも」と  
聞ゆ。およすけてもいふかなとおぼして、「我は月頃物思ひつるに、ほればてにければ人のも  
どかむも知らず、ひたぶるに思ひなりにたり。少しも身のことを思はゞ、かゝらむ人のかゝ  
るありきは思ひたちなむや。御かへりには、けふは物忌などいへかし。人にまらるまじきこ  
とを誰がためにも思へかし。こと事はかひなし」とのたまひて、この人の世に知らず、哀にお  
ぼさるゝまゝには萬のそしりも忘れ給ひぬべし。右近出て、「このおとなふ人に、かくなむ  
のたまはするを猶いとかたはならむとを申させ給へ、あさましう珍らかなる御有様は、さ思  
し召すとも、かゝる御供の人どもの御心にこそあらめ、いかてかう心をさなうは、ゐて奉り

給ひしぞ。なめげなることを聞えさするやまかづなども侍らましかば、いかならまし」といふ。内記は「げにいと煩しくもあるかなと思ひたてり。」「時方と仰せらるゝは誰にか、さなむ」とつたふ。笑ひて「かうがへ給ふことゝもの恐しければ、さらずとも逃げてまかてぬべし。まはやかにちろかならぬ御氣色を見奉れば、誰も誰も身を捨てゝなむ。よしよしとのゐびとも皆起きぬなり」とて急ぎ出てぬ。右近人に知らすまじうは、いかゞはたばかるべきと、わりなう覺ゆ。人々起きぬるに、「殿はさるやうありて、いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば道にていみじき事のありけるなめり。御ぞどもなど、よさり忍びてもて參るべくなむ仰せられつる」などいふ。ごだち「あなむくつけや、木幡山はいと恐しかなる山ぞかし。例の御さきもおはせ給はず、やつれておはしましけむよ。あないみじや」といへば、「あなかまあなかま、けすなどの塵ばかりも聞きたらむに、いといみじからむ」といひ居たる、心ちおそろし。あやにくに殿の御使のあらむ時、いかにいはむと、初瀬の観音、けふことなくくらし給へと大願をぞ立てける。石山にけふ詣てさせむとて、母君の迎ふるなりけり。この人々も皆さうじし、きよまはりてあるに、「さらばけふは得渡らせ給ふまじきなめりな。いと口惜しきこと」といふ。日たかくなれば格子などあげて右近ぞ近く仕うまつりける。も屋の簾垂は皆おろし渡して物忌などかゝせてつけたり。母君もやみづからおはするとして、夢見さわがしかりつといひなすなりけり。御てうづなど参りたるさまは例のやうなれど、まかなひめざましうおぼされで、「そこにあらはせ給は」とのたまふ。女いとさまよう心にくき人を見習ひたるに、時の

まも見ざらむは死ぬべしとおぼしこがるゝ人を、志深じとは、かゝるをいふにやあらむと思ひ知らるゝにも怪しかりける身かな。誰も物の聞えあらば、いかにおぼさむと、まづかのうへの御心を思ひ出て聞ゆれど、知らぬを、「返すがへすいと心うし。猶あらむまゝにのたまへ。いみじきげすといふとも、いよいよ哀なるべき」と、わりなう問ひ給へど、そのいらへは絶えてせず。ことことはいとをかしく、けぢかきさまにいらへ聞えなどして、なびきたるを、いと限なうらうたしとのみ見給ふ。日高くなる程に迎への人きたり。車二、馬なる人々の例の荒らかなる七八人、をのこどもおほく、まなまなしからぬけはひ、さへづりつゝ入りきたれば、人々片腹痛がりつゝ、「あなたにかくれよ」といはせなとす。右近、いかにせむ、殿なむおはするといひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、おのづから聞き通ひて、かくれなきこともこそあれと思ひて、この人々にもことにいひ合せず、返事かく。「よべより穢れさせ給ひて、いと口惜しき事をおぼし歎くめりしに、こよひ夢見さわがしく見えさせ給へれば、けふばかりつゝしませ給へとてなむ、物忌にて侍る。返すがへす口惜しく、物のさまたげのやうに見奉り侍る」と書きて、人々に物などくはせてやりつ。尼君にもけふは物忌にて渡り給はぬといはせたり。例はくらし難くのみ霞める山ぎはを眺め侘び給ふに、暮れ行くは侘しくのみおぼしいらるゝ人にひかれ奉りて、いとかなう暮れぬ。まぎるゝことなく、のどけき春の日に見れども見れどもあかず、そのことぞと覺ゆるくまなく、愛ぎやうづきなつかしきをかしげなり。さるはかの對の御方には劣りたり。大殿の君の盛ににほひ給へるあたりに

ては、こよなかるべき程の人を、たぐひなくおぼさるゝ程なれば、まだ知らずをかしとのみ見給ふ。女はまた大將殿をいときよげに、又かゝる人あらむやと見しかど、こまやかに匂ひ清らなることは、こよなくおほしけりと見る。硯ひきよせて、手習などし給ふ。いとをかしげに書きすさび、繪などを見所多く書き給へれば、若き心地には思ひもうつりぬべし。「心よりほかに得見ざらむほどは、これを見たまへよ」とて、いとをかしげなるをとこをんな、諸共にそひ臥したるかたを書き給ひて、「常にかくてあらばや」などのたまふも、なみだおちぬ。

「長き夜をたのめてもなほ悲しきはたゞあす知らぬ命なりけり。いとかう思ふこそゆゑしけれ。心に身をも更に得まかせず、萬にたばからむほど誠に死ぬべくなむ覺ゆる。つらかりし御有様を、なかなか何に尋ねけむ」などのたまふ。女ぬらし給へる筆をととりて、

「心をばなげかざらまし命のみさだめなき世と思はましかば」とあるを、かはらむをばうらめしう思ふべかりけりと見給ふにも、いとらうたし。いかなる人の心がはりを見ならひなどほゝゑみて、大將のこゝに渡しそめ給ひけむほどを返すがへすゆかしがり給ひて問ひ給ふを、苦しがりてえいはぬことを、かうのたまふこそとうちゑじたるさまも若びたり。おのづからそれは聞き出でむとおぼすものから、いはせまほしきぞわりなきや。夜さり京へ遣しつる大夫参りて右近に逢ひたり。「後の宮よりも御使参りて、左のおとこもむつかり聞えさせ給ひて人に知らさせ給はぬ御ありきは、いとかるがるしくなめげなるともあるを、すべて内などに聞しめさむとも身のためなむいとからさと、いみじく申させ給ひけり。東山にひ

じり御覽じにどなむ、人には物し侍りつる」など語りて、「女こそ罪深うおはするものにはあれ。すゞろなるけさうの人をさへ惑はし給ひて、そらごとをさへせさせ給ふよ」といへば、「ひじりの名をさへつけ聞えさせ給ひてければ、いとよし。私の罪もそれにてほろぼし給ふらむ。誠にいとあやしき御心の、げにいかで習はせ給ひけむ。かねてかうおはしますべしと、うけたまはらましにも、いとかなじけなければ、たばかり聞えさせてましものを、あうなき御ありきにこそは」と、あつかひ聞ゆ。参りてさなむとまねび聞ゆれば、げにいかならむとおぼしやるに、「所せき身こそわびしけれ。軽らかなる程の殿上人などにて、まばしあらばや。いかじすべき、かうつゝむべき人めも得憚りあふまじくなむ。大將もいかに思はむとすらむ。さるべき程とはいひながら、怪しきまで昔よりむつまじき中に、かゝる心のへだての知られたらむ時、耻かしう、またいかにぞや。世のたといにいふこともあれば待遠なる我がをこたりをも知らず怨みられ給はむをさへなむ思ふ。夢にも人に知られ給ふまじきさまにて、こゝならぬ所にゐて離れ奉らむ」とどのまたふ。今日さへかくて籠り居給ふべきならねば、出て給ひなむとするにも、袖の中にぞとめ給へらむかし。明けはてぬさきにと人々まはぶきちどろかし聞ゆ。妻戸に諸共におはして、得出てやり給はず。

「世に知らず惑ふべきかなさきに立つ涙も道をかきくらしつゝ」。女も限なく哀と思ひけり。

「涙をもほどなき袖にせきかねていかに別れをとむべき身ぞ」。風の音もいとあらまし



う、霜ふかき曉にものがきぬぎぬも、ひやくかになりたる心地して御馬に乗り給ふ程引き返すやうにあさましけれど、御供の人々いと戯れにくしと思ひて、たゞいそがしにいそがし出づれば、我にもあらで出て給ひぬ。この五位二人なむ御馬の口には侍ひける。さかしき山ごえはてゝぞ、ものもの馬には乗る。汀の氷を踏みならず馬の足音さへ心ほそくものがなし。昔もこの道にのみこそは、かゝる山ぶみはま給ひしかば、怪しかりける里の契かなとおぼす。二條院におはしまし着きて、女君のいと心憂かりし御物かくしもつらければ、心安き方に大殿籠りぬるに寝られ給はず、いとさびしきに物思ひまされば、心弱く對に渡り給ひぬ。何心もなく、いと清げにておはす。珍しくをかしと見給ひし人よりも、又これは猶ありがたきさまはま給へりかしと、見給ふものから、いとよく似たるを思ひ出て給ふも胸ふたがれば、痛く物おぼしたるさまにて、み帳に入りて大殿ごもる。女君もゐて入り聞え給ひて、「心ちこそいと悪しけれ。いかならむとするにかと心ほそくなむある。まろはいみじく哀と見おひ奉るとも、御ありさまはいとくかはりなむかし。人のほいは必ずかなふなれば」とのたまふ。けしからぬことをも、まめやかにさへのたまふかなと思ひて、「かう聞きにくきことの漏り聞えたらば、いかやうに聞えなしたるにかと人も思ひより給はむこそあさましけれ、心憂き身には、すぐるなることも、いとくるしく」とて背き給へり。宮もまめだち給ひて、「誠につらしと思ひ聞ゆることもあらむは、いかゞおぼさるべき。まろは御ためにはおろかなる人かは。人もありがたしなど答むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひおとし給ふべかめり。

それもさるべきにこそはとことわらるゝを隔て給ふ御心の深きなむ、いと心うき」とのたまふにも、宿世のちろかならで尋ねよりたるぞかしとおぼし出づるに、涙ぐまれぬ。まめやかなるをいとほしう、いかやうなる事を聞き給へるならむと驚かるゝに、いらへ聞え給はむこともなし。物はかなきさまにて見そめ給ひしに、何事をも軽らかに推し量り給ふにこそはあらめ、すゞろなる人を老るべにて、その心よせを思ひ知らはじめなどしたるあやまちばかりに、覺え劣る身にこそとおぼしつゞくるも、よろづ悲しくて、いとゞらうたげなる御けはひなり。かの人見つけたりとは、まばし知らせ奉らじとおぼせば、ことさまに思はせて怨み給ふを、たゞこの大將の御事を、まめまめしくのたまふとおぼすに、人やそらごとをたしかなるやうに聞えたらむなどとおぼす。ありやなしやを聞かぬまは見え奉らむもはづかし。うちより大宮の御文あるに驚き給ひて猶心解けぬ御氣色にて、あなたに渡り給ひぬ。「きのふのおぼつかなさなを惱しくおぼされたなる。よろしくば参り給へ。久しうもなりにけるを」などやうに聞え給へれば、さわがれ奉らむも苦しけれど、誠に御心地もたがひたるやうにて、その日は参り給はず。上達部などあまた参り給へど、み簾の内にてくらし給ふ。夕つ方右大將参り給へり。「こなたにを」とて、うち解けながらたいめんし給へり。「惱ましげに坐しますと侍りつれば、宮にもいとおぼつかなく思し召してなむ。いかやうなる御惱にかと聞え給ふ。見るからに心さわぎのいとゞまされば、ことづくなにて、ひじりだつこいひながら、こよなかりける山ぶし心かな、さばかり哀なる人をさて置きて、心のどかに月日を待ち侘びますらむ

よとおぼす。例はさしもあらぬことの序にだに我はまめ人ともてなし、名のり給ふをねたがり給ひて、萬にのたまひやぶるを、かゝること見あらはいたるを、いかにのたまはまし。されどさやうの戯ぶれどもかけ給はず、いと苦しげに見え給へば、「ふびんなるわざかな。おどろおどろしからぬ御心のさすがに日かざふるは、いと悪しきわざに侍る。御かせよくつくるはせ給へ」など、まめやかに聞え置きて出て給ひぬ。恥しげなる人なりかし、我が有様をいかに思ひくらべけむなど、さまざまなることにつけつゝも、たゞこの人を時のま忘れずおぼし出づ。かしこには石山もとまりて、いとつれづれなり。御文には、いといみじきことを書き集め給ひてつかはす。それだに心安からず、時方と召し、大夫のずさの心も知らぬしてなむやりける。右近がふるく知れりける人の、殿の御供にて尋ね出てたる、さらがへりてねんどろがると友だちにはいひ聞かせたり。よろづ右近を空言まならひける。月もたちぬ、かうおぼし入らるれど、おはしますことはいとわりなし。かうのみ物を思はゞ更に得ながらふまじき身なめりと心ほそさを添へて歎きたまふ。大將殿少しのどかになりぬる頃、例の忍びておはしたり。寺に佛など拜み給ふみずさやうせさせ給ふ。僧にもものたまひなどして夕つ方こゝには忍びたれど、これはわりなくもやつし給はず、ゑぼしなほしの姿、いとあらまほしく清げにて歩み入り給ふより恥しげに用意ことなり。女いかで見え奉らむとすらむと空さへ恥しく恐しきに、あながちなりし人の御有様うち思ひ出でらるゝに、又この人に見え奉らむを思ひやるなむいみじう心憂き。我は年頃見る人をも皆思ひ變りぬべき心地なむするとのたまひ

しを、げにその後御心ち苦しとて、いづくにもいづくにも例の御有様ならて、みずほふなど騒ぐなるを聞くに、又いかに聞きておぼさむと思ふもいと苦し。この人はた、いとけはひとに心深く、なまめかしきさまして久しかりつる程のをこたりなどのたまふもこと多からず、戀し悲しとちりたゝねど、常にあひ見ぬ戀の苦しさを、さまよき程にうちのたまへる、いみじくいふには勝りて、いと哀と人の思ひぬべきさまをきめ給へる人がらなり。えんなる方はさるものにて行く末長く人のたのみぬべき心ばへなど、こよなくまさり給へり。思はずなるさまの心ばへなど漏り聞かせたらむ時、なのめならずいみじくこそあべけれ、あやしううつしごゝろもなう覺しいらるゝ人を哀と思ふも、それはいとあるまじく輕きことぞかし、この人に憂しと思はれて忘れ給ひなむ心ぼそさは、いと深うきみぬべければ、思ひ亂れたる氣色を月頃にこよなう物の心知り、ねびまさりにけり。つれづれなるすみかのほどに思ひ残す事はあらずかしと見給ふも心苦しければ、常よりも心とめて語らひ給ふ。「つくらす所やうやうよろしうまなしてけり。一と日なむ見しかば、此所よりはけぢかき水に花も見給ひつべし。三條宮も近き程なり。明暮覺東なきへだてもちのづらあるまじきを、この春の程に、さりぬべくは渡してむ」と思ひてのたまふも、かの人の長閑なるべき所、思ひまうけたりと、きのふものたまへりしを、かゝることも知らて、さおほすらむよと、哀ながらもそなたに靡くべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御さまの面影におほゆれば、我ながらもうたて心うの宮と思ひつゞけて泣きぬ。「御心ばへのかゝらておいらかなりしこそ長閑に嬉しかり

しか。人のいかに聞え知らせたることのある、少しもおろかならむ志にては、かうまで参りくべき身の程、道の有様にもあらぬを」などついたり頃の夕づく夜に、少しはし近く臥して眺めいだし給へり。男は過ぎにし方の哀をもおぼし出て、女は今よりそひたる身のうさを歎き加へて、かたみに物思はし。山の方は霞隔て、寒き洲崎に立てるかさゝぎのすがたも處からはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見渡さるゝに、柴つみ船の所々に行きちがひたるなど、ほかにては目なれぬ事どものみ取り集めたる所なれば、見給ふ度ごとく猶そのかみの事の唯今の心地して、いとかゝらぬ人を見かはしたらむだに、珍しきなかの哀多くそひぬべきほどなり、まいて戀しき人によそへられたるもこよなからず、やうやう物の心知り、都なれ行くありさまのをかしきも、こよなくみまさりしたる心地し給ふに、女はかさあつめたる心のうちに催さるゝ涙、ともすれば出てたつを、慰めかね給ひつゝ、

「宇治橋の長さちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな。今見給ひてむ」との給ふ。「絶間のみ世にはあやうき宇治橋を朽ちせぬものと猶たのめとや」。ささきさよりもいと見捨てがたく、まばしも立ちとまらまほしくおぼさるれど、人の物いひの安からぬに、今さらなり、心安きさまにてこそなどおぼしなして曉にかへり給ひぬ。いとようもおとなびたりつるかなと心苦しくおぼし出づること、ありしにまさりけり。ささきさの十日のほどに、内に文作らせ給ふとてこの宮も大將も参りあひ給へり。をりにあひたるものゝまらべどもに宮の御聲はいとめでたくて梅がえなど謠ひ給ふ。何事も人よりはこよなう勝り給へる御さま

にて、すゞろなることおぼしいらるのみなむ、罪深かりける。雪俄に降りみだれ、風など烈しければ御あそび疾くやみぬ。この宮の御とのゐどころに人々参り給ふ。物まゐりなどして、うちやすみ給へり。大將人に物のたまはむとて、すこしはし近く出て給へるに、雪やうやうつもり、星の光におほおほしきを、やみはあやなしと覺ゆるにほひありさまにて、衣かたしきこよひもやとうちずじ給へるも、はかなきことを口すさびにのたまへるも怪しく哀なる氣色そへる人さまにて、いと物深げなり。ことしもこそあれと宮はねたるやうにて御心さわぐ、おろかには思はぬなめりかし。かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるも哀なり、侘しくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、我が方にまさる思ひは、いかてかつくべきぞと妬うおぼさる。つとめて雪のいと高う積りたるに、文奉り給はむとてお前に参り給へる御かたち、この頃いみじくさかりに清げなり。かの君も同じほどにて、今ふたつみつまさるけぢめにや少しぬびまさされる氣色用意などを殊更にも作りたらむやうに、あてなる男のほんにまつべく物し給ふ。みかどの御聲にてあかぬことなしとぞ世の人もことわりける。さえなども、おほやけおほやけしきかたも後れずおはすべき。文講じ果て、皆人まかで給ふ。宮の御文を勝れたりとずじ罵れど、なにとも聞き入れ給はず、いかなる心地にて、かゝる事をもまいつらむと空にのみ思ほしほれたり。かの人の御氣色にもいと驚かれ給ひければ、あさましうたばかりておはしましたり。京には友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るまゝにや、降り積りたり。常よりも、わりなきまれの細道をわけ給ふ程、御供の

人も泣きぬばかりおそろしう、煩はしきとをさへ思ふ。あるべの内記は式部の少輔をなむか  
けたりける。いづ方もいづ方もことごとしかるべきつかさながら、いとつぎづきしく引きあ  
げなどしたる姿もをかしかりけり。かしこにはおはせむとありつれど、かゝる雪にはとうち  
解けたるに、夜更けて右近にせうそこしたり。あさましう哀と君も思へり。右近いかになり  
はて給ふべき御有様にかと、かつは苦しけれど、こよひはつゝましましなからぬを語ら  
へさむ方もなければ、同じやうに睦ましくおぼいたる若き人の、心ざまあうなからぬを語ら  
ひて、「いみじくわりなきこと、同じ心にもてかくし給へ」といひてけり。諸共に入れ奉る。道  
の程にぬれ給へる御ぞのかの、所せう匂ふも、もてわづらひぬべけれど、かの人の御けはひ  
に似せてなむ、もてまぎらはしける。夜の程に立ち歸り給はむも、なかなかなるべければ、こ  
ゝの人めもいとつゝまじさに、時方にたばからせ給ひて、河よりをちなる人の家におは  
せむとかまへたりければ、さきだて、遣したりける。夜ふくるほどに参れり。「いと能く用意  
して侍ふ」と申さす。こはいかに去給ふことにかと右近もいと心あわたゞしければ、ぬおび  
れて起きたる心地もわなゝかれてあやしわらはべの雪遊びまたるけはひのやうにぞ、ふる  
ひあがりける。いかでかなどもいひあへさせ給はず、かきいだきて出て給ひぬ。右近はこゝ  
のうしろみにとどまりて、侍従をぞ奉る。いとはかなげなるものとあけくれ見いだす。ちひ  
さき船に乗り給ひて、さし渡り給ふほど、遙ならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心ほそく  
覚えて、つとつきていだかれたるも、いとらうたしとおぼす。有明の月すみのぼりて、水のお

もてもくもりなきに「これなむ橘の小島」と申して、御船まはしさとどめたるを見給へば、  
大きやかなる岩のさまして、ざれたる常盤木の蔭繁れり。「かれ見給へ。いとほかなけれど、  
千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、

「年ふともかはらむものかたちばなの小島のささに契るこゝろは」。女もめづらしからむ  
道のやうにおぼえて、

「たちばなの小鳥は色もかはらじをこのうき船ぞゆくへ知られぬ」。をりから人のさま  
に、をかしくのみ何事もおぼしなす。かの岸にさし着きてあり給ふに、人に抱かせ給はむは、  
いと心苦しければ抱き給ひて、助けられつゝ入り給ふを、いと見苦しく、何人をかくもてさ  
わぎ給ふらむと見奉る。時方が叔父の因幡の守なるがらうずるさうに、はかなう造りたる家  
なりけり。まだいとあらあらしきに、網代屏風など御覽じも知らぬまつらひにて風も殊にさ  
はらず、垣のもとに雪むらぎえつゝ今もかき曇りつゝ降る。日さし出で、軒の垂氷の光りあ  
ひたるに、人の御かたちもまさる心ちす。宮もところせき道の程に軽らかなるべき程の御を  
どもなり。女もぬぎすべさせ給ひてしかば、ほそやかなるすがたつき、いとをかしげなり。ひ  
きつくるふこともなく、うちとけたるさまを、いと恥しくまばゆきまできよらかなる人にさ  
しむかひたるよと思へど、紛れむ方もなし。なつかしき程なる白きかぎりや五つばかり、袖  
口裾のほどまでなまめかしく、いろいろにあまた襲ねたらむよりも、をかしうきなしたり。  
常に見給ふ人とても、かくまでうちとけたる姿などは見習ひ給はぬを、かゝるさへぞ猶珍ら



かにをかしうおぼされける。侍従もいとめやすき若人なりけり。これさへかゝるを残りなう  
見るよと女君はいみじと思ふ。宮も「これは又誰ぞ。我が名もらすなよ」と口がため給ふをい  
とめてたしと思ひ聞えたり。このやどもりにて住みけるもの、時方をまうと思ひてかしづ  
きありけば、このおはします遣戸を隔て、所えがほに居たり。聲ひきまゝめかしこまりて物  
語考けるを、いらへも得せずをかしと思ひけり。「いと恐しく占ひたる物忌により、京の内を  
さへ去りて謹むなり。ほかの人よすな」といひたり。人目も絶えて心やすく語らひくらし給  
ふ。かの人のものし給へりけむに、かくて見えけむかしとおぼしやりて、いみじく怨み給ふ。  
二の宮をいとやんごとなくて、もち奉り給へる有様なども語り給ふ。かの耳とゞめ給ひし一  
ことは、のたまひ出でぬぞにくきや。時方御てうづ御くだものなど、とりつきて参るを御覽  
じて、「いみじくかしづかるめるまらうどのぬし、きてな見えそや」といましめ給ふ。侍従色  
めかしきわかうどの心地に、いとをかしうと思ひて、この大夫とぞ物語してくらしける。雪  
の降り積れるに、我がすむ方を見やり給へば、霞のたえだえに木末ばかり見ゆ。山は鏡を懸  
けたるやうに、さらさらと夕日にかゞやきたるに、よべわけし道のわりなきなど、哀おほ  
うそへて語り給ふ。

「峯の雪みぎはのこほりふみわけて君にぞまどふ道はまどはず」。木幡の里に馬はあれど  
など、あやしき視めし出で、手習し給ふ。

「ふりみだれ江にこほる雪よりもなかぞらにてぞ我はけぬべき」と書きけちたり。この中

空を咎め給ふ。げにくくも書きてけるかなと、恥しくてひきやりつ。さらでだに見るかひある御さまを、いよいよあはれにいみじと人の心にまめられむと盡し給ふ言の葉氣色いはむかたなし。御物忌二日とたばかり給へれば、心のどかなるまゝに、かたみに哀とのみ深くおぼしまさる。右近はよろづに例のいひまぎらはして、御ぞなど奉りたり。けふは亂れたる髪少しけづらせて、こききぬに紅梅の織物など、あはひをかしく着かへて居給へり。侍従もあやしきしびら着たりしをあざやきたれば、そのもとり給ひて君に着せ給ひて、御手水まゐらせ給ふ。姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものに志給ひてむかし。いとやんごとなききはの人多かれど、かばかりのさままたるはかたくやと見給ふ。かたはなるまで遊び戯れつゝ暮し給ふ。忍びてゐてかくしてむ事をかへすがへすのたまふ。そのほどこかの人に見えたらばといみじき事どもを誓はせ給へば、いとわりなき事と思ひて、いらへもやらす涙さへ墮つる氣色、更に目のまへだに思ひうつらぬなめりと胸痛うおぼさる。恨みても泣きても萬のたまひあかして、夜深くゐて歸り給ふ。例のいだき給ふ。「いみじくおぼすめる人は、かうはよもあらじよ。見知り給ひたりや」とのたまへば、げにと思ひて、うなづきて居たる、いとらうたげなり。右近妻戸放ちて入れ奉る、やがてこれより別れて出て給ふも飽かずいみじとおぼさる。かやうのかへさは猶二條院にぞおはします。いと惱ましう志給ひて物なども絶えて聞しめさず、日を経て青み瘠せ給ふ御氣色變るを、うちにもいづくにもおもほし歎くに、いと物さわがしくて御文だにこまかには得書き給はず。かしこにもかのさかしきめのと、娘の

子産む所に出でたりける、歸り來にければ心やすくも得見ず、かくあやしき住ひを唯かの殿  
のもてなし給はむさまをゆかしく待つことにて、母君も思ひ慰めたるに、忍びたるさまなが  
らも近く渡してむことをおぼしなりにければ、いとめやすく嬉しかるべきことに思ひて、や  
うやう人もとめ、わらはのめやすきなど迎へておこせ給ふ。我が心にもそれこそはあるべき  
ことに初より待ち渡れとは思ひながら、あながちなる人の御事を思ひ出づるに、恨み給ひし  
さま、のたまひし事ども面かけにつとそひて、いさゝかまどろめば夢に見え給ひつゝ、いと  
うたであるまでおぼゆ。雨降りやまで、日頃多くなるころ、いと山路おぼし絶えて、わりな  
くおぼされければ、おやのかうこは所せきものにこそとおぼすもかたじけなし。盡させぬ事  
ども書き給ひて、

「ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるゝころのわびしさ」。筆にまかせて書き  
亂り給へるしも見どころあり、をかしげなり。殊にいと重くなどはあらぬ若き心ちにいとか  
ゝる心を思ひもまさりぬべけれど、初より契り給ひしさまも、さすがにかれは猶いと物深  
う、人がらのめでたきなども世の中を知りにしはじめなればにや、かゝる憂き事聞きつけて  
思ひ疎み給ひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひ惑ふ。おやにも思はずに心づき  
なしとこそはもてわづらはれめ。かく心いられし給ふ人はた、あだなる御心の本じやうとの  
み聞きしかば、かゝる程こそあらめ、またかうながらも京にかくしする給ひ、ながらへても  
おぼしかずまへむにつけては、かかうへおぼさむこと、よろづかくれなき世なりければ怪し

かりし夕暮の来るべばかりにだに、かうたづね出て給ふめり。まして我がありさまのともかくもあらむを聞き給はぬやうはありなむやと思ひたどるに、我が心もきずありて、かの人にとまれ奉らむ、猶いみじかるべしと思ひ亂るゝをりしも、かの殿より御使あり。これかれと見るもいとうたてあれば猶事多かりつるを見つゝ、臥し給へれば、侍従右近見合せて、「猶うつりにけり」といはぬやうにていふ、「ことわりぞかし。殿の御かたちをたぐひおはしまさじと見しかど、この御有様はいみじかりけり。うち亂れ給へる愛ぎやうよ、まるならばかばかりの御思ひを見る見る、得かくてあらじ、きさいの宮にも参りて常に見奉りてむ」といふ。右近「うしろめたの御心のほどや。殿の御ありさまにまさり給ふ人は誰かはあらむ、かたちなどは知らず、御心ばへけはひなどよ。猶この御事はいと見苦しきわざかな。いかゞならせ給はむとすらむ」と、ふたりしてかたらふ。心ひとつに思ひしよりは空ごとともたより出できにけり。後の御文には、「思ひながら日頃になること、時々はそれよりも、おどろかい給はむこそ思ふさまならめ。おろかなるにやは」など、はしがきに、

「水まさるをちの里人いかならむはれぬながめにかきくらすころ。常よりも思ひやり聞ゆることまさりてなむ」と、白きしきしにてたてぶみなり。御手もこまかにをかしげならねど、書さざまゆゑゆゑしく見ゆ。宮はいと多かるをちひさく結びなし給へる、さまたまをかじ。「まづかれを人見ぬ程に」と聞ゆ。「けふは得聞ゆまじ」とはぢらひて、手ならひに、「里の名を我身にまればやましろの宇治のわたりぞいと住みうき」。宮の書き給へりし

繪を時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじきことぞと、とぞまかうさまに思ひなせどほかにたえ籠りてやみなむはいと哀におぼゆべし。

「かさくらしはれせぬ峰のあま雲にうきて世をふる身をもなさはや。まじりなば」と聞えたるを、宮はよと泣かれ給ふ。さりともし戀しと思ふらむかとおぼしやるにも物思ひて居たらむさまのみ、おもかげに見え給ふ。まめ人はのどかに見給ひつゝ、哀いかながむらむと思ひやりて、いとこひし。

「つれづれと身をまゐる雨のをやまねば袖さへいとゞみかさまさりて」とあるを、うちも置かず見給ふ。女宮に物語など聞え給ひてのついでに、「なめしともやおぼさむとつゝましなから、さすがに年經ぬる人の侍るを、怪しき所に捨て置きて、いみじく物思ふなるが心苦しさに近う呼び寄せてと思ひ侍る。昔より異やうなる心ばへ侍りし身にて、世の中をすべて例の人ならで見すぐしてむと思ひ侍りしを、かく見奉るにつけてひたぶるにも捨て難ければ、ありと人にも知らせざりし人のうへさへ心苦しう罪得ぬべき心ちして」など聞え給へば、「いかなることにも心置くものとも知らぬを」と、いらへ給ふ。「うちになど、あしさまに聞しめさする人や侍らむと世の人の物いひぞ。いとあぢきなくけしからず侍るや。されどそれは、さばかりの數にだに侍るまじ」など聞え給ふ。つくりたる所に渡してむとおぼしたつに、かゝるれうなりけりなど花やかにいひなす人やあらむなど苦しければ、いと忍びてさうじはらすべき事など人しもこそあれ、この内記が知る人の親、大藏の大夫なるものに睦ましく心

安さまゝにのたまひつけたりければ、聞きつぎて、宮にはかくれなく聞えけり。「繪師どもなども御隨身どもの中にある睦まじきとのびとなどをえりて、さすがにわざとなむせさせ給ふ」と申すにいとどおぼしきわざにて、我が御めのとの遠きすらうのめにてくだる家下つかたへど大事とおぼしたるに、かたじけなければ「さらば」と聞えけり。これを設け給ひて少し御心のどめ給ふ。この月のつごもりがたにくだるべければ、やがてその日渡さむとおぼしかまふ。「かくなむと思ふ。ゆめゆめ」といひやり給ひつゝ、おはしまさむことはいとわりなくあるうちに、こゝにも、めのといとさかしければかたかるべきよしを聞ゆ。大將殿は卯月の十日となむ定め給へりける。さそふ水あらばとは思はず、いと怪しくいかにまなすべき身にかあらむと、うきたる心地のみすれば、母の御もとにまばし渡りて思ひめぐらす程あらむとおぼせど、少將のめ、子産むべき程近くなりぬとて、ずほふときやうなどひまなくさわげば石山にも得出てたつまじ、母ぞち渡り給へる。めのと出て来て、「殿より人々のさうぞくなども、こまかにおぼしやりてなむ。いかで清げに何事もと思ひ給ふれど、まゝが心ひとつには怪しくのみぞまいて侍らむかし」など、いひ騒ぐが心地よげなるを見給ふにも、君はけしからぬ事どもの出て来て、人わらへならば誰も誰もいかに思はむ、あやにくのたまふ人はた、八重たつ山にこもるとも必ず尋ねて我も人もいたづらになりぬべし。猶心やすく隠れなむことを思へど、けふものたまへるを、いかにせむと心地悪しく臥し給へり。「などか例ならず、

痛く青み瘠せ給へると驚き給ふ。日頃怪しくのみなむ、はかなきものも聞しめさず、惱ましげにせさせ給ふ」といへば、「あやしきとかな。ものけなどにはやあらむ」と、いかなる御心ちぞと思へど石山もとまり給ひにきかしといふも、かたはらいたければふしめなり。暮れていと月あかし。有明の空を思ひ出づる、涙のいととめがたきはいとけしからぬ心かなと思ふ。母君昔物語などまて、あなたの尼君呼び出で、故姫君の御ありさま、心深くおはして、さるべき事もおぼし入れたりしほどに目にみすみす消え入り給ひにし事などかたる。「おはしまさしかば、宮のうへなどのやうに聞え通ひ給ひて、心ほそかりし御有様どもの、いとこよなき御さいはひにぞ侍らましかし」といふにも、我がむすめはこと人かは思ふやうなる宿世のおはしはてば劣らじをなど思ひつゞけて、「世と共にこの君につけては、物をのみ思ひ亂れしけしきの少しうちゆるびて、かく渡り給ひぬべかめれば、此所に参りくること必ずしも殊更には得思ひたち侍らじ。かゝるたいめんのをりをりに昔の事も心のどかに聞え承らまほしけれども」などかたらふ。「ゆゑしき身とのみ思ひ給へまみにしかばこまやかに見え奉り聞えさせむも何かはとつゝましくてすぐし侍りつるを、うち捨て、渡らせ給ひなば、いと心ほそくなむ侍るべけれど、かゝる御住ひは心もとなくのみ見奉るを嬉しくも侍るべかめるかな。世に知らず、おもおもしく、おはしますべかめる殿の御有様にて、かく尋ね聞えさせ給ひしも、おぼろけならじと聞え置き侍りにし。うきたることにはやは侍る」といふ。「後は知らねど只今はかくおぼし離れぬさまにの給ふにつけても、唯御まらるべをなむ思ひ出て聞

ゆる。宮のうへのかたじけなく哀におぼしたりしも、つゝましき事などのおのづから侍りしがば、中空にとろせき御身なりと思ひ歎き侍りて」といふ。尼君うち笑ひて、「この宮のいと騒がしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人、さぶらひにくげになむ、おほかたはいとめでたき御ありさまなれど、さるすぢのことにて、うへのなめしとおぼさむなむわりなきと大輔が娘のかたり侍りし」といふにも、さりや、ましてと君は聞きふし給へり。「あなむくつけや。みかどの御娘をもち奉り給へる人なれど、よそよそにて悪しくも善くもあらむはいかゞはせむと、おほけなく思ひなし侍る。よからぬ事を引き出で給へらましかば、すべて身には悲しくいみじと思ひ聞ゆとも、また見奉らざらまし」などいひかはす事どもに、いと心膽もつぶれぬ。猶我が身をうしなひてばや、遂に聞きにくきことは出できなむと思ひ續くるに、この水の音の恐しげに響きて行くを、「かゝらぬ流もありかし。世に似ずあらましき所に、年月をすぐし給ふを、哀とおぼしぬべきわざになむ」など、母君またり顔にいひ居たり。昔よりこの河のはやく恐しきことをいひて、「さいつころ渡守がうまごのわらは、竿さしはづして落ち入り侍りにける。すべていたづらになる人多かる水に侍り」と人々もいひあへり。君はさても我が身行くへも知らずなりなば、誰も誰もあへなくいみじとしはしこそ思ひ給はめ、ながらへて人わらへに憂き事もあらむは、いつかその物思ひの絶えむとすると思ひかくるには、さはり所もあるまじう、さはやかによろづ思ひなされるれど、うち返しとかなし。親のよろづに思ひいふ有様を、寝たるやうにてつくづくと思ひ亂る。なやま



しげにて瘖せ給へるを、めのとにもいひて、「さるべき御いのりなどをせさせ給へ。祭祓へな  
どもすべきやうなどいふ。みたらし川にみそぎせまほしげなるを、かくも知らてよろづに  
いひさわぐ。人ずくなしめり、よくさるべからむあたりを尋ねて今まゐりはとどめ給へ。や  
んどとなき御なからひは、さうじみこそ何事もおいらかにおぼさめ。よからぬなかととなりぬ  
るあたりは煩しきこともありぬべし。かいひそめて、さる心し給へ」など、思ひ至らぬ事なく  
いひ置きて、かしこにわづらひ侍る人も覺束なしとてかへるを、いと物思はしくよろづ心ほ  
そければ又あひ見てもこそと思へば心地の悪しく侍るにも見奉らぬがいとおぼつかなく覺  
え侍るを、しばしも参りこまほしくこそと慕ふ。「さなむ思ひ侍れど、かしこもいと物さわが  
しく侍り。この人々もはかなき事などえしやるまじく、せばくなど侍ればなむ。たけふのこ  
ふにうつろひ給ふとも忍びては参り來なむを。なほなほしき身のほどは、かゝる御ためこそ  
いとほしく侍れ」など、うち泣きつゝの給ふ。殿の御文はけふもあり、惱ましと聞えたりし  
を、いかゞととぶらひ給へり。「みづからと思ひ侍るを、わりなきさはり多くてなむ。この程  
のくらし難さこそ、なかなか苦し」などあり。宮は「きのふの御返りもなかりしを、いかにお  
ぼしたゞよふぞ。風のなびかむ方もうしろめたくなむ。いとほれまさりてながめ侍る」な  
ど、これは多く書き給へり。雨降りし日、さあひたりし御使どもぞけふも來たりける。殿のみ  
隨身、かの少輔が家にて時々見るをのこなれば、「まうどは何しにこゝにはたびたび参るぞ」  
と問ふ。「わたくしにとぶらふべき人のもとにまうでくるなり」といふ。「私の人にや、えんな

る文はさしとらする。氣色あるまうどかな。物がくしはなぞ」といふ。「まことはこのかうの君の御文、女房に奉り給ふ」といへば、こと違ひつゝあやしと思へど、此所にて定めいはむもことやうなるべければ、おのおの参りぬ。かどかどしきものにて共にあるわらはを「このをのこにさりげなくて目つけよ。左衛門の大夫の家にや入る」と見せければ、「宮に参りて式部の少輔になむ御文はとらせ侍りつる」といふ。さまで尋ねむものともおとりのげすは思はず、事の心をも深う知らざりければ舍人の人に見顯はされにけむぞ口惜しきや。殿に参りて、今出て給はむとするほどに御文奉らす。なほしにて、六條院にきさいの宮出でさせ給へる頃なれば参り給ふなりけり。ことごとしく御前などもあまたもなし。「御文参らする人にあやしき事の侍りつる。見給へ定めむとて今まで侍りつる」といふを、ほの聞き給ひて歩み出て給ふまゝに、「何事ぞ」と問ひ給ふ。この人の聞かむものつゝましと思ひて、かしこまりて居る、殿もまか見知り給ひて出て給ひぬ。宮例ならず惱ましげに坐すとて宮達も皆参り給へり。上達部など多く参りつどひて、さわがしけれど異なる事もおはしませず。かの内記はじやうぐわんなれば後れてぞ参れる。この御文も奉るを宮、臺盤所におはしまして戸口に召し寄せてとり給ふを、大將御前の方より出て給ひ、そばめに見通し給ひて、せちにおぼすべかめる文の氣色かなと、をかしさに立ちとゞまり給へり。引てあけて見給ふ。くれなるのうすえふに、こまやかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れてとみにも向き給はぬに、おとじも立ちて、とゞまにおはすれば、この君はさうしより出て給ふとて、おとじ出て給ふとうちし

はぶきて、おどろかい奉り給ふ。ひき隠し給へるにぞ、おとゞさしのぞき給へる。驚きて御ひもさし給ふ。殿もつゐる給ひて「まかて侍りぬべし。例の御じやけの久しく起らせ給はざりつるを、恐しきわざなりや。山のざす只今さうじに遣はさむ」と、いそがしげにて立ち給ひぬ。夜更けて皆出て給ひぬ。おとゞは宮をさきに立て奉り給ひて、あまたの御子どもの上達部君達ひきつゞけてあなたに渡り給ひぬ。この殿は後れて出て給ふ。隨身氣色ばみつる、あやしとおぼしければ、ごぜんなどおりて火ともすほどに隨身召しよす。「申しつることは何事ぞ」と問ひ給ふ。「けさかの宇治に、出雲の權守、時方のあそんのもとに侍るをのこの紫の薄えふにて、櫻につけたる文を西の妻戸によりて女房にとらせ侍りつる見給へつけて、しかか問ひ侍りつれば、ことたがひつゝ、そらごとのやうに申し侍りつるを、いかに申すぞとて、わらはべして見せ侍りつれば、兵部卿の宮に参り侍りて式部少輔道定の朝臣になんその返事はとらせ侍りける」と申す。君あやしとおぼして、「その返事はいかやうにして出しつるぞ」、「それは見給へず。ことかたより出し侍りにける下人の申し侍りつるは赤き色紙のいと清らなるとなむ申し侍りつる」と聞ゆ。おぼしあはするに、たがふことなし。さまで見せつらむを、かどかどしとおぼせど、人々近ければ委しくものたまはず。道すがら猶いと恐しく隈なくおはする宮なりや、いかなりけむ序に、さる人ありと聞き給ひけむ、いかでいひより給ひけむ、田舎びたるあたりにて、かやうのすぢのまぎれは、えしもあらじと思ひけるこそをさなけれ、さても知らぬあたりにこそ、さるすきごとをもものたまはめ、昔よりへだてなく

て、あやしきまで知るべし、ゐてありき奉りし身にしも、うしろめたくおぼしよるべしやと思ふに、いと心づきなし。對の御方の御事をいみじく思ひつゝ年頃すゞすは、我が心のおもさはこよなかりけり、さるはそれ今は始めて、さま悪しかるべき程にもあらず、もとよりのたよりにもよれるを、唯心のうちの隈あらむは我がためも苦しかるべきによりこそ思ひ憚るもをこなるわざなりけれ、この頃かくなやましく志給ひて例よりも人しげさまぎれに、いかではるばるとかきやり給ひつらむ、おはしやそめにけむ、いと遙なるけさうの道なりや、怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えさかし、さやうの事におぼし亂れて、そこはかとなく惱み給ふなるべし、昔をおぼし出づるにも、えおはせざりし程のなげきは、いといとほしげなりさかしとつくづくと思ふに、女のいたく物思ひたるさまなりしも、かたはし心えそめ給ひては、萬おぼしあはするにいとらし。ありがたきものは人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら色めきたる方はそひたる人ぞかし、この宮の御ぐにては、いとよきあはひなりと思ひも譲りつべく、のく心ちし給へど、やんごとなく思ひそめし人ならばこそあらめ、猶さるものにておきたらむ、いまはとて見さらむはた戀しかるべしと人わろくいろいろ心の中におぼす。我すさまじく思ひなりて捨て置きたらば、必ずかの宮呼びとり給ひてむ、人のため後のいとほしさをも殊にたどり給ふまじ、さやうにおぼす人こそ一品の宮の御方に人二三人參らせ給ひたなれ、さて出て立ちたらむを見聞かむ、いとほしくなど猶捨てがたく、氣色見まほしくて御文つかはす。例の御隨身召して御みづから人ま

に召し寄せたり。「道定のあるは猶仲信が家にやかよふ」。「さなむ侍る」と申す。宇治へは常にや、このありけむをのこはやるらむ。かすかにて居たる人なれば道定も思ひかくらむかしと、うちうめき給ひて、「人に見えてをまかれ。をこなり」とのたまふ。かしこまりて。少輔が常にこの殿の御事あないし、かしこの事問ひしも思ひ合すれど物慣れて得申し出でず。君もげすにくはしくは知らせじとおぼせば問はせ給はず。かしこには、御使の例よりまげさにつけても物思ふことさまざまなり。たゞかくぞのたまへる。

「波こゆるころともまらず末の松まつらむとのみ思ひけるかな。人に笑はせ給ふな」とあると、いと怪しと思ふに、胸もふたがりぬ。御返り事を心えがほに聞えむも、いとつしまし、ひがごとにてあらむも怪しければ、御文はもとのやうにして「ところたがへのやうに見え侍ればなむ、怪しく惱ましくて何事も」と書きそへて奉りつ。見給ひて、さすがにいたくもまたるかな、かけて見及ばぬ心ばへよとほゝゑまれ給ふも、にくしとは得おぼしはてぬなめり。まほならぬどほのめかし給へる氣色を、かしこにはいとと思ひそふ。遂に我が身はけしからず怪しくなりぬべきなめりと、いとと思ふ所に右近來て、「殿の御文は、などて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆゝしくいみ侍るなるものを」といへば、「ひがごとのあるやうに見えつれば所たがへか」とのたまふ。あやしと見ければ道にてあけて見けるなりけり。よからずの右近がさまやな。見つとはいはでないとほし。「苦しき御事どもにこそ侍れ。殿は物の氣色御覽じたるべし」といふに、おもてごとあかみて物ものたまはず、文見つらむとは思はねば、

ことさまにてかの御氣色見る人の語りたるにこそはと思ふに、誰かさいふぞなども問ひ給はず、この人々の見思ふらむこともいみじく耻かし。我が心もてありそめしことならねども心憂き宿世かなと思ひ入りて寝たるに、侍従と二人して、「右近が姉の、常陸にて人ふたり見侍りしを、ほどほどにつけては、たゞかくぞかし。これも劣らぬ志にて思ひ惑ひて侍りしほどに、女は今の方に少し心よせまさりてぞ侍りける。それにねたみて遂に今のをば殺してしぞかし。さて我も住み侍らずなりにき。國にもいみじきあたらつはもの一人失ひつ。又このあやまちしたるも善きならうどうなれど、かゝるあやまちしたるものを、いかでかつかはむとて國の内をも追ひ拂はれぬ。すべて女のたいだいしきぞとて、たちのうちにも置い給へらざりしかば、あづまの人になりて、まゝも今に戀ひ泣き侍るは罪深くこそ見給ふれ。ゆゑしき序のやうに侍れど、かみも下もかゝるすぢのことは、おぼし亂るゝはいと悪しきわざなり。御命までにはあらずとも人の御ほどほどにつけて侍ることなり。死ぬるにまさる恥なることも善き人の御身にはなかなか侍るなり。ひとかたにおぼし定めてよ。宮も御志勝りて、まめやかにだに聞えさせ給はゞ、そなたさまにもなびかせ給ひて物ないたく歎かせ給ひそ。瘡せ衰へさせ給ふも、いとやくなし。さばかりうへの思ひいたづき聞えさせ給ふものを、まゝかこの御いそぎに心を入れて惑ひゐて侍るにつけても、それよりこなたにと聞えさせ給ふ御事こそ、いと苦しくいとほしけれ」といふに、今一人「うたて恐しきまでな聞えさせ給ひそ。何事も御宿世にてこそあらめ。唯御心の中に少しおぼしなびかむ方を、さるべきにおぼ

しならせ給へ。いでやいとかたじけなくいみじき御氣色なりしかば、人のかくおぼし急ぐめりし方に心もよらずしばしはかくろへても御思ひのまさらせ給はむによらせ給ひねとぞ思ひ侍る」と、宮をいみじくめで聞ゆる心なれば、ひたみちにいふ。「いさや右近は、とてもかくても事なくすぐさせ給へと初瀬石山などにぐわんをなむ立て侍る。この大將殿のみぞうの人々といふものは、いみじきぶだうのものどもにてひとるゐこの里にみちて侍るなり。おほかたこの山城大和に殿のりやうじ給ふ所々の人なむ皆このうどねりといふものゝゆかりかけつゝ侍るなる。これが聲の右近の大夫といふものを本として萬の事をおきて仰せられたなるなり。善き人の御中どちはなさせなきこと考出でよとおぼさずとも、物の心得ぬ田舎人どものとのゐびとにて、かはりがはりさぶらへば、おのが番に當りて聊なる事もあらせじなど、あやまちもし侍りなむ、ありしよの御ありきは、いとこそむくつけく思ひ給へられしか、宮はわりなくつゝませ給ふとて御供の人もゐておはします。やつれてのみおはしますを、さるものゝ見つけ奉りたらむは、いとみじくなむ」と言ひ續くるを、君猶我を宮に心よせ奉りたると思ひてこの人々のいふ、いと耻しく、心地にはいづれとも思はず唯夢のやうにあきれて、いみじく入られ給ふをば、などかくしもとばかり思へど、たのみ聞えて年頃になりぬる人を今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじとももの思ひ亂るれ。げによりぬる人も出て來らむ時と、つくづくと思ひ居たり。「まろはいかて死なばや。世づかず心愛かりける身かな。かく憂きことあるためしは、げすなどの中にだにも多くやはあなる」とて、

うつぶしふし給へば、「かくな思し召しそ安らかにおぼしなせとてこそ聞えさせ侍れ。おぼしぬべき事をも、さらぬ顔にのみ長閑に見えさせ給へるを、この御事の後、いみじく心いられをせさせ給へば、いと怪しくなむ見奉る」と、心知りたるかぎりは皆かく思ひ亂れさわぐに、めのとおのが心をやりて、ものそめいとなみ居たり。今まありわらはなどの、めやすきを呼びとりつ、「かゝる人御覽ぜよ。あやしくてのみ臥させ給へるは、ものゝけなどの妨げ聞えさせむとするにこそ」となげく。殿よりは、かのありし返事をだにのたまはて日頃經ぬ。このおどしうどねりといふものを來たる。げにいとあらしく、ふつゝかなるさましたるおきななの際かな。さすがに氣色ある、女房にもものとり申さむといはせられたれば、右近しも逢ひたり。「殿に召し侍りしかば、けさ參り侍りて只今なむ罷り歸り侍りつる。さふじども仰せられたる序に、かくておはします程に、夜中曉のことにも、なにがしらくて侍ふと思ほして、とのゐびとわざとさし奉らせ給ふこともなきを、この頃聞し召せば、女房の御許に知らぬ所の人通ふやうになむ聞し召すことある、たいたいしきとなり。とのゐに侍ふものどもは、そのあない問ひ聞きたらむ、知らずはいかゞ侍ふべきと問はせ給へるに、承らぬとなれば、なにがしは身の病重く侍りて、とのゐ仕らまつることは月頃怠りて侍ればあないも得知り侍らず。さるべきをのこともは、けだいなくもよほし侍はせ侍るを、さのごとき非常の事の侍らはむをば、いかでか承らぬやうは侍らむとなむ申させ侍りつる。用意してさぶらへ。びんなき事もあらば重く勘當せしめ給ふべきよしなむ仰せ言侍りつれば、いかなる仰せ言にか



と、恐れ申しはべる」といふを聞くに、ふくろふの鳴かむよりも、いとものおそろし。いらへもやらで、「さりや聞えさせしに、違はぬ事どもを聞しめせ。物の氣色御覽じたるなめり。御せうそこも侍らぬよ」などなげく。めのとはほのうち聞きて、「いと嬉しく仰せられたり。ぬすびと多かなるわたりにとのゐ人も始のやうにもあらず。皆身のかはりぞといひつゝ、あやしきげすをのみ參らすれば、やぎやうをだにせぬに」とよろこぶ。君はげに只今いと悪しくなりぬべき身なめりとおぼすに、宮よりはいかにいかにと昔の亂るゝわりなさをのたまふ。いとわづらはしくなむ、とてもかくても、ひとかたひとかたにつけて、いとうたてあるとは出できなむ、わが身ひとつのなくなりなむのみこそめやすからめ、昔は懸想する人の有様の、いづれとなきに思ひ煩ひてだにこそ身を投ぐるためしもありけれ、ながらへば、必ずうきこと見えぬべき身の、なくならむは何か惜しかるべき、親も暫しこそ歎き給はめ、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘草つみてむ、ありながらもてそこなひ、人わらへなるさまにてさすらへむは、まさる物思ひなるべしなど思ひなる。こめきおほどかに、たをたをと見ゆれど、けだかう世の有様をも知る方すくなくて、おふしたてたる人にしあれば、少しおすはかるべきを思ひよるなりけむかし。むつかしきほくなどやりて、おどろおどろしく一たびにもしたゝめず、とうだいの火に焼き、水に投げ入れさせなど、やうやう失ふ。心知らぬごだちは、物へ渡り給ふべければ、つれづれなる月日を経て、はかなく去集め給へる手習などをやり給ふなめりと思ふ。侍従などを見つくる時は、「などかくはせさせ給ふ。哀なる御中に、御

心留めて書きかはし給へる文は人にこそ見せさせ給はざらめ、物の底におかせ給ひて御覽  
ずるなむ、ほどほどにつけてはいと哀にはべる。さばかりめでたき御紙つかひ、かたじけな  
き御言の葉を盡させ給へるを、かくのみやらせ給ふ、なさけなきこと」といふ。「何か、むつか  
しく長かるまじき身にこそあめれ。おちとどまりて、人の御ためもいとほしからむ、さかし  
らにこれを取り置きけむよなど、漏り聞き給はむこそ恥しけれ」などのたまふ。心細き事を  
思ひもて行くには、まだを思ひ立つまじきわざなりけり。親をおきてなくなる人は、いと罪  
深くなるものをなど、さすがにほの聞きたることをも思ふ。廿日あまりにもなりぬ。かの家  
あるじ、廿八日にくだるべし。宮は「その夜必ず迎へむ。しもびとなどに、よく氣色見ゆまじ  
き心づかひし給へ。こなたさまよりは夢にも聞えあるまじ。疑ひ給ふな」などのたまふ。さて  
あるまじきさまにて、おはしたらむに、今一たび物をも聞えず、おぼつかなくて返し奉らむ  
ことよ、又時のまにても、いかでこゝには寄せ奉らむとする、かひなく恨みて歸り給はむさ  
まなどを思ひやるに、例のおもかげ離れず、絶えず悲しくて、この御文を顔におしあて、ま  
ばしはつゝめども、いとみじくなき給ふ。右近「あが君、かゝる御氣色遂に人見奉りつべ  
し。やうやう怪しなど思ふ人も侍るべかめり。かうかゝづらひ思ほさて、さるべきさまに聞  
えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなきことも、たばかり出し侍らば、かばかり小き御身ひ  
とつは、空よりもゐて奉らせ給ひなむ」といふ。とばかりためらひて、「かくのみいふこそい  
と心愛けれ。さもありぬべきこと、思ひかけばこそあらめ、あるまじきこと、皆思ひとる

に、わりなく、かくのみ頼みたるやうにのたまへば、いかなる事を志出で給はむとするにか  
など思ふにつけて身のいと心憂きなり」とて返事も聞き給はずなりぬ。宮かくのみ猶うけひ  
く氣色もなくて、返事さへ絶えだえになるは、かの人のあるべきさまにいひしたゝめて、少  
し心やすかるべきかたに思ひ定りぬるなめり、ことわりとおぼすものから、いと口惜しくぬ  
たく、さりとも我をば哀とおぼしたりしものを、あひ見ぬとだえに人々のいひ知らずるかた  
によるならむかしなどながめ給ふに、行くかた知らず、むなしき空にみちぬる心地し給へ  
ば、例のいみじくおぼしたちておはしましぬ。あしがきのかたを見るに、例ならず、「あれは、  
たぞ」といふ聲々いざとげなり。たちのきて、心煮りのをのこを入れたれば、それをさへ問  
ふ。さぎさぎのけはひにも似ずわづらはしくて「京よりとみの御文あるなり」といふ。右近が  
ずさの名を呼びて逢ひたり。いと煩しくいととおぼゆ。「更にこよひは不用なり、いみじく忝  
きこと」といはせたり。宮、などかくもてはなるらむとおぼすにわりなくて「まづ時方入りて  
侍従に逢ひて、さるべきさまにたばかれ」とて遣す。かどかどしき人にて、とかくいひかまへ  
て、尋ねて逢ひたり。「いかなるにかあらむ、かの殿ののたまはすることありとて、とのゐに  
あるものどものさかしがりたちたる頃にて、いとわりなきなり。お前にもものをのみいみじ  
くおぼしためるは、かゝる御事の忝なきをおぼし亂るゝにこそはと心苦しくなむ見奉る。更  
にこよひは人げしき見侍りなば、なかなかいと悪しかりなむ。やがてさも御心づかひせさ  
せ給ふべからむ夜、こゝにも人知れず思ひかまへてなむ聞えさすべかめる」めのとのいざと

き事なども語る。大夫「おはします道のおぼろけならず、あながちなる御氣色に、あへなく聞  
えさせむことなむたいだいしき。さらばいざ給へ、共に委しく聞えさせ給へ」といさなふ。  
「いとわりなからむ」といひしろふ程に、夜もいたく更け行く。宮は御馬にて少し遠く立ち給  
へるに、さとびたる犬どもの出て來てのゝしるもいとおそろしく、人ずくなにいと怪しき御  
ありきなれば、すゞろならむものゝ走り出て來たらむも、いかさまにかと侍ふかぎり心をぞ  
惑はしける。「猶疾く疾く参りなむ」といひさわがしてこの侍従をゐて参る。かみわきよりか  
いこして、やうだいいとをかしき人なり。馬に乗せむとすれど更にきかねば、きぬの裾をと  
りて立ちそひて行く。我がくつをはかせて、みづからは供なる人のあやしきものはきた  
り。参りて「かくなむ」と聞ゆれば、語らひ給ふべきやうだになければ、やまがつの垣根のお  
どろむぐらの影に、あふりといふ物を敷きておろし奉る。我が御心ちにも、あやしきありさ  
まかな、かゝる道にそこなはれて、はかばかしくはえあるまじき身なめりとおぼし續くる  
に、泣き給ふことかぎりなし。心よわき人は、ましていとみじく悲しと見奉る。いみじきあ  
だ、おににつくりたりとも、おろかに見捨つまじき人の御有様なり。ためらひ給ひて、「唯ひ  
とことも聞えさすまじきか。いかなれば今更にかゝるぞと、猶人々のいひなしたるやうあ  
るべし」とのたまふ。有様委しく聞えて、「やがてさ思し召さむ日を、かねてさべきさまにた  
ばからせ給へ。かく忝き事どもを見奉り侍れば、身を捨てしも思ひ給へたばかり侍らむ」と  
聞ゆ。我も人目をいみじくおぼせばひと方に怨み給はむやうもなし。夜はいたく更け行く

に、このものがめする犬の聲絶えず、人々追ひさげなどするに、弓ひきならし怪しきをのこどもの聲して、「火あやふし」などいふも、いと心あわたゞしければ、かへり給ふほど、いへばさらなり。

「いづくにか身をば捨てむと白雲のかゝらぬ山もなくぞゆく」。さらばやとてこの人を返し給ふ。御氣色なまめかしくあはれに、夜深き露にまめりたる御かのかうばしさなど、たとへむかたなし。泣く泣くぞ歸りきたる。右近はいひきりつるよしいひ居たるに、君はいよいよ思ひ亂るゝこと多くて臥し給へるに、入り来て、ありつるさま語るに、いらへもせねど枕のやうやうさぬるをかつはいかに見るらむとつゝまし。つとめても怪しからむまみを思へば、むごに臥したり。物はかなげに帶うちかけなどして經讀む。親にさきだちなむ罪失ひ給へとのみ思ふ。ありし繪を取り出て、見て、書き給ひし手つき、顔のほひなどのむかひ聞えたらむやうに覺ゆれば、よべ一言をだに聞えずなりにしは、猶今ひとへまさりていみじと思ふ。かの心のどかなるさまにて見むと、行く末遠かるべき事をのたまひわたる人も、いかゞおぼさむといとほしう、憂ささまにいひなす人もあらむこそ、思ひやり恥しけれど、心淺くけしからず人わらへならむを聞かれ奉らむよりはと思ひつゞけて、

「歎きわび身をば捨つともなきかげにうき名流さむことをこそ思へ」。親もいと戀しく、例はことに思ひ出でぬはらからのみにくやかなるもこひし。宮のうへを思ひ出で聞ゆるにも、すべて今一たびゆかしき人多かり。人は皆おののものそめ急ぎ、何やかやといへど耳

にも入らず。よるとなれば人に見つけられず出て、行くべき方を思ひまうけつゝ、寝られぬまゝに心地も悪しく皆たがひにたり。明けたてば、川の方を見やりつゝ、羊のあゆみよりも程なき心ちす。宮はいみじき事どもをのたまへり、今さらに人や見むと思へば、この御返事をだに思ふまゝにも書かず。

「からをだにうき世の中にとゞめずばいづこをはかと君もうらみむ」とのみ書き出て出しつ。かの殿にも、いまはの氣色見せ奉らまほしけれど、ところどころに書きおきて、離れぬ御中なれば遂に聞き合せ給はむ事いと憂かるべし、すべていかになりけむと、誰にも覺束なくて止みなむと思ひ返す。京より母の御文持て來たり。「寝ぬる夜の夢に、いとさわがしく見え給ひつれば、ずきやう所々にせさせなどし侍る。やがてその夢の後、寝られざりつるげにや、只今晝寢して侍る夢に、人のいむといふことなむ見え給ひつれば驚きながら奉る。能くつゝしませ給へ。人離れたる御住ひにて、時々立ちよらせ給ふ人の御ゆかりも、いと恐しく、惱しげに物せさせ給ふ、折しも夢のかゝるを、よろづになむ思ひ給ふる。参りこまほしきを、少將の方の猶いと心もとなげに、ものゝけだちて惱み侍れば片時も立ち去ることゝ、いみじくいはれ侍りてなむ。その近き寺にも御ず經せさせ給へ」とて、その料のもの、文など書きそへて持て來たり。限と思ふ命の程を知らず、かくいひつゝけ給へるもいと悲しと思ふ。寺へ人やりたる程、返事かく。いはまほしきこと多かれど、つゝましくてたゞ、

「のちにまたあひ見むことを思はなむこの世のゆめに心まどはて」。ずきやうの鐘の風に

つきて聞えるを、つくづく聞き臥し給へり。

「鐘のおとの絶ゆる響にねをそへて我が世盡きぬと君に傳へよ」。くわんじゆ持て來たるに書きつけて、こよひは得歸るまじといへば、物の枝にゆひつけて置きつ。めのと、「あやしく心ばしりのするかな、夢も騒しくとのたまはせたりつ。とのるびとよく侍へ」といはするを、苦しと聞き臥し給へり。「物聞き召さぬいとあやし。御湯づけ」などよろづにいふを、さかしがるめれど、いと見にく、おいなりて、我なくはいづくにかあらむと思ひやり給ふもいと哀なり。世の中にえありはつまじきさまをほのめかしていはむなどおぼすには、まづ驚かされて、さきだつ涙をつゝみ給ひて物もいはれず。右近程近く臥すとて、「かくのみ物をおもほせば、物思ふ人のたましひはあくがるなるものなれば夢も騒がしきならむかし。いづかたとおぼし定りて、いかにもいかにもおはしまさなむ」とうちなげく。なえたるきぬを顔におしあて、臥し給へりとなむ。

## 蜻蛉

かしこには人々おはせぬを、究めさわげどかひなし。物語の姫君の人にぬすまれたらむあしたのやうなれば委しくもいひつけず。京よりありし使の歸らずなりにしかばおぼつかなしとて又人おこせたり。また鳥の鳴くになむ出し立てさせ給へる」と使のいふに「いかに聞

えむ」と乳母よりはじめてあわて惑ふことかぎりなし。思ひうる方なくて唯さわぎあへるを  
かの心知れるどちなむ、いみじく物を思ひ給へりしさまを思ひ出づるに身をなげ給へると  
は思ひよりける。なくなくこの文をあけたれば「いとおぼつかなさにもどろまれ侍らぬけに  
や、今宵は夢にだにうちとけても見えず物におそはれつゝ心地も例ならずうたて侍るを、猶  
いとおそろしく物へわたらせ給はむことは近くなれど、そのほどこゝに迎へ奉りてむ。今日  
は雨降り侍りぬべければ」などあり。よへの御かへりをもあけて見て右近いみじくなく。さ  
ればよ、心ほそきことは聞え給ひけり、我れになどかいさゝかのたまふことのなかりけむ、  
をさなかりし程より露心おかれ奉ることなくちりばかりへだてなくて習ひたるに、今はか  
ぎりの道にしも我れをおくらかし、氣色をだに見せ給はざりけるがづらきこと、思ふに、足  
ずりといふことをして泣くさま若き子どものやうなり。いみじくおぼしたる御氣色は見奉  
り渡れど、かけてもかくなべてならずおどろしき事おぼしやらむものとは見えざり。  
つる人の御心さまを、猶いかにしつる事にかとおぼつかなくいみじ。乳母はなかなか物も覺  
えて唯「いかさまにせむ、いかさまにせむ」とぞいはれける。宮にもいと例ならぬ氣色ありし  
御返りいかに思ふならむ、我をさすがにあひ思ひたるさまながらあだなる心なりとのみ深  
く疑ひたれば、外へいき隠れむとにやあらむとおぼしさわぎて御使あり。あるかぎり泣きま  
どふ程にきて御文もえ奉らず「いかなるぞ」とげす女に問へば、「上の今宵俄にうせ給ひにけ  
れば物もおぼえ給はず。たのもしき人もおはしまさぬをりなればさぶらひ給ふ人々は唯物



にあたりてなむまどひ給ふ」といふ。心も深く知らぬをのこにて委しうも問はてまゐりぬ。「かくなむ」と申させたるに夢と覺えていとあやし。いたくわづらふとも聞かず、日比なやましとのみありしかど昨日の返事はさりげもなくて常よりもをかしげなりしものと覺しやる方なければ「時方いきて氣色見、たしかなる事問ひ聞け」とのたまへば、「かの大將殿いかなる事か聞き給ふこと侍りけむ、とのゐするものおろかなりなどいましめ仰せらるゝとて下人の罷り出づるをも見とがめ問ひ侍るなれば、ことづくることなくて時方まかりたらしむを物の聞え侍らばおぼしあはすることなどや侍らむ。さて俄に人のうせ給ひつらむ所はろなうさわがしく人まげく侍らむを」と聞ゆ。「さり」といとおぼつかなくてやあらむ。猶とかくさるべきさまにかまへて例の心知れる侍従などにあひていかなる事をかくいふぞとあないせよ。げすはひがごともしふなり」とのたまへば、いとほしき御氣色もかたじけなくて夕つかたゆく。かやすき人は疾くいさつきぬ。雨少し降りやみたれどわりなき道にやつれてげすのさまにて來たれば人多く立ちさわぎて「今宵やがてをさめ奉るなり」などいふを聞く心地もあさましく覺ゆ。右近にせうそしたれどもえあはず。「只今物おぼえず起きあがらむ心ちもせてなむ。さるはこよひばかりこそかくも立ちより給はめ。え聞えぬ」といはせたり。「さり」とてかく覺束なくてはいかゞ歸り侍らむ。今一所だに「とせちにいひたれば侍従ぞあひたりける。」いとあさましくおぼしもあへぬさまにてうせ給ひにたればいみじといふにもあかず夢のやうにて誰もたれも惑ひ侍るよし申させ給へ。少し心地ものどめ侍りてなむ。

日比も物おぼしたりつるさま一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有様なども聞えさせ侍るべき。このけがらひなど人の思み侍るほど過ぐして今一度たちより給へといひて泣くといみじ。内にも泣く聲々のみして乳母なるべし。「あが君やいづかたにかおはしましぬる。かへり給へ。空しさからをだに見奉らぬがかひなく悲しくもあるかな。明暮見奉りても飽かず覺え給ひいつしかかひある御さまを見奉らむとあしたゆふべに頼み聞えつるこそ命もひ侍りつれ。うち捨て給ひてかく行くへも知らせ給はぬ事鬼神もあが君をばえらうじ奉らじ。人のいみじく惜む人をばたいしやくも返し給ふなり。あが君を取り奉らむ人にまれ鬼にまれ返し奉れ。なき御からも見奉らむ」といひつゞくるが心得ぬとともまじるをあやしと思ひて「猶のたまへ。もし人のかくしも聞え給へるかたむかに聞しめさむと御身のかはりに出し立てさせ給へる御使なり。今はとてもかくてもかひなきことなれど、後にも聞しめしあはすることの侍らむに違ふとまじらば参りたらむ御使の罪になるべし。又さりととも頼ませ給ひて君達に對面せよと仰せられつる御心ばへも辱しとはおぼされずや。女の道に惑ひ給ふことは人の御門にも深きためしどもありけれど、又かゝることこの世にはあらじとなむ見奉る」といふに、げにいと哀なる御使にこそあれ、かくすとすととも、かくて例ならぬ事のさま、おのづから聞えなむと思ひて、「などかいさゝかにても人やかくい奉り給ふらむと思ひよるべき事あらむにはかくしもあるかぎり惑ひ侍らむ。日比いといみじく物をおぼしいるめりしかば、かの殿のわづらはしげにほのめかし聞え給ふとなどもありき。御母に物し給

ふ人もかくのゝしる乳母なども初めより知りそめたりし方に渡り給はむとなむ急ぎ立ちてこの御事をば人知れぬさまにのみ辱く哀と思ひ聞えさせ給へりしに御心みだれけるなるべし。あさましうて心と身をなくなし給へるやうなれば、かく心のまどひにひがひがしく言ひ續けらるゝなめり」とさすがにまほならずほのめかす。心得がたく思ひて「さらばのどかに参らむ。立ちながら侍るもいとこととぎたるやうなり。今御みづからもおはしましたむ」といへば、「あなかたじけな。今さら人の知り聞えさせむもなき御ためはなかなかめてたき御宿世見ゆべき事なれど忍び給ひしことなればまたもらせ給はてやませ給はむなむ御志に侍るべき。こゝにはかく世づかずうせ給へるよしを人に聞かせじ」とよろづにまぎらはすを、おねんに事どもの氣色もこそ見ゆれと思へばとかくそののかしやりつ。雨のいみじかりつるまぎれに母君の渡り給へり。更にいはむ方もなく目の前になくなしたらむ悲しさはいみじくとも世の常にてたぐひあることなり。これはいかにまつる事ぞと惑ふ。かゝる事どものまぎれありていみじう物思ひ給ふらむとも知らねば身をなげ給へらむとも思ひもよらず。鬼や食ひつらむ、狐めくものや取りもていぬらむ、昔物語の怪しき物の事のたとひにか、さやうなる事もいふなりしと思ひいづ。さてはかのおそろしと思ひ聞ゆるあたりに心など悪しき御乳母やうのものやかう迎へ給へしと聞きて、めざましがりてたばかりたる人もやあらむとげすなどを疑ひ「今まわりの心知らぬやある」と問へば、「いと世はなれたりとて、ありならぬ人はこゝにてはかなき事もえせず、今疾く参らむといひつゝなむ、みなその急ぐ

べき事どもなど取り具しつゝかへり出て侍りにし」とて、もとよりある人だにかたへはなくていと人すくななる折になむありける。侍従などこそ日比の御氣色思ひいで身をうしなひてばやなど泣きいり給ひし折々の有様書きおき給へる文をも見るに、なきかげにと書きすさび給へるものゝ硯の下にありけるを見つけて河の方を見やりつゝ響きのゝしる水の音を聞くにも疎ましく悲しと思ひつゝさて「うせ給ひけむ人をとかく言ひ騒ぎていづくにもいづくにもいかなる方になり給ひにけむとおぼし疑はむもいとほしき事」といひ合せて「忍びたる事とても御心よりおこりてありし事ならず。親にてなき後に聞き給へりともいとやさしき程ならぬを、ありのまゝに聞えてかくいみじく覺東なき事どもをさへかたがた思ひ惑ひ給ふさまは少しあきらめさせ奉らむ。なくなり給へる人とてもからを置きてもあつかふこそ世の常なれ。世づかぬ氣色にて日比も経ば更にかくれあらじ。猶聞えて今は世の聞えをだにつくるはむ」と語りひて忍びてありしさまを聞ゆるにいふ人も消えいりえいひやらす、聞く心地も惑ひつゝ、さはこのいとあらましと思ふ河に流れうせ給ひにけりと思ふに、いとゞ我れも落ち入りぬべき心地して「おはしましにけむ方を尋ねてからをだにはかばかしくをさめむ」との給へど「更になにかひ侍らじ。行くへも知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。さるものから人のいひ傳へむ事はいと聞きにくし」と聞ゆれば、とさまかうさまに思ふに胸のせきのぼる心ちして、いかにもいかにもすべき方も覺え給はぬを、この人々二人して車よせさせておましとも氣近う使ひ給ひし御調度どもみなながらぬぎおき給へる御ふ

すまなどやらの物を取りいれてめのとこのだいとこそそれがをぢの阿闍梨その弟子の睦しきなどもとより知りたる老法師など御忌に籠るべき限りして人のなくなりたるけはひにまねびて出し立つるを、めのと母君はいといみじくゆしとふしまろぶ。大夫うどねりなどおどし聞えしものども、参りて「御葬送の事は殿にことのよし申させ給ひて、日定められていかめしうこそ仕うまつらめ」などいひけれど「殊更にこよひ過すまじ、いと忍びてと思ふやうあればなむ」とてこの車をむかひの山の前なる原にやりて人も近うもよせず、このあない知りたる法師のかぎりしてやかす。いとはかなくてけぶりをはてぬ。田舎人どもはなかなかかゝる事をことごとしく志なしこといみなど深くするものなりければ、「いとあやしう例の作法などあることども、ま給はず、げすげすしくあへなくてせられぬるとかな」と誇りければ、かたへおはする人は「殊更にかくなむ、京の人はま給ふなる」などさまさまになむ安からずいひける。かゝる人どもの言ひ思ふとだに包ましきを、まして物の聞えかくれなき世の中に大將殿わたりにからもなくうせ給ひにけりと聞かせ給はゞ必ず思ほし疑ふこともあらむを宮はた同じ御なからひにてさる人のおはしおはせず暫しこそ忍ぶともおぼさめ、遂にはかくれあらじ又定めて宮をしも疑ひ聞え給はじ、いかなる人か居てかくしけむなどぞおぼしよせむかし、いき給ひての御宿世はいと氣高くおはせし人のげになさかげにいみじき事をや疑はれ給はむと思へば、このうちなる下人どもにもけさのあわだしかりつるまどひに氣色も見聞きつるには口かため、あないまらぬには聞かせじなどぞたばかりける。ながら

へては誰にもまづやかにありしさまをも聞えてむ。只今は悲しささめぬべきと、ふと人づてに聞しめさむは猶いとほしかるべき事なるべしと、この二人ぞ深く心のちにそひたればもてかくしける。大將殿は、入道の宮のなやみ給ひければ石山にこもり給ひて騒ぎ給ふころなりけり。さていとどかしこはおぼつかなうおぼしけれど、はかばかしうさなむといふ人はなかりければ、かゝるいみじき事にもまづ御使のなきを人めも心憂しと思ふに、みさうの人なむ参りてまかゝかと申させければ、あさましき心地し給ひて御使そのまたの日まだつとめて参りたり。「いみじき事は聞くまゝにみづから物すべきにかく惱み給ふことによりつゝしみてかゝる所に口を限りて籠りたればなむ。よべのことはなとかこゝにせうそこして日を延べてもさる事はするものを、いと軽らかなるさまにて急ぎせられにける。とてもかくても同じいふかひなさなれど、とぢめのことをしもやまがつのそしりをさへ負ふなむ、このためもからきなどかのむつまじき大藏の大夫してのたまへり。御使の來たるにつけてもいとどいみじきに聞えむ方なき事どもなれば唯涙におぼれたるばかりをかごとにてはかばかしうもいらへずなりぬ。殿は猶いとあへなくいみじと聞き給ふにも、心うかりける所かな、鬼などや住むらむ、などて今までさる所にすゑたりつらむ、思はずなるすぢのまぎれあるやうなりしもかく放ち置きたるに心やすくて人もいひをかし給ふなりけむかしと思ふにも、我がたゆく世づかぬ心のみくやくしく御胸いたく覺え給ふ。なやませ給ふあたりにかゝる事おぼし亂るゝもうたてあれば京におはしぬ。宮の御方にも渡り給はず」ことごとしき程

にも侍らねどゆゝしき事を近う聞き侍れば、心の亂れ侍るほどもいましうて」など聞え給ひて盡せずはかなくいみじき世を歎き給ふ。ありしさまかたちいと愛敬づきをかしかりしけはひなどのいみじく戀しく悲しければ、うつゝの世にはなどかくしも思ひ入れずのどかにて過ぐしけむ。只今は更に思ひまづめむ方なきまゝに悔やしき事の數知らず、かゝるとのすぢにつけていみじう物思ふべき宿世なりけり。さまことに心ざしたりし身の思の外にかく例の人にてながらふるを佛などのにくしと見給ふにや、人の心を起させむとて佛の志給ふ方便は慈悲をもかくしてかやうにこそはあなれと思ひつゞけ給ひつゝ、行ひをのみ志給ふ。かの宮はたまして二三日は物も覺え給はず、うつしこゝろもなきさまにていかなる御ものゝけならむなどさわぐに、やうやう涙つくし給ひておぼしまづまるにしもぞ、ありしさまは戀しういみじく思ひ出でられ給ひける。人には唯御病の重きさまをのみ見せてかくすゝるなるいやめの氣色知らせじと、かしこくもてかくすとおぼしけれどおのづからいとまるかりければ「いかなるとにかくおぼし惑ひ御命もあやふさままでまづみ給ふらむ」といふ人もありければかの殿にもいとよくこの御氣色を聞き給ふに、さればよ、猶よその文通はしのみにはあらぬなりけり。見給ひては必ずさおぼしぬべかりし人ぞかし。ながらへましかばたゞなるよりは我がためにをこなる事も出てきなましとおぼすになむ、こがるゝ胸も少しさむる心地し給ひける。宮の御とぶらひに日々に参り給はぬ人なく、世のさわぎとなれる比ことごとしききはならぬ思ひに籠りゐて参らざらむもひがみたるべしとおぼして参り給ふ。そ

の比式部卿宮と聞ゆるもうせ給ひにければ御をぢの服にて薄鈍なるも心の中に哀に思ひよそへられてつきづきしく見ゆ。少し面やせていとどなまめかき事まさり給へり。人々まかで、まめやかなる夕暮なり。宮ふしまづみてのみはなき御心地なれば疎き人にこそあひ給はね、御簾の内にも例いり給ふ人には對面し給はずもあらず、見え給はむもあいなくつゝましく見給ふにつけてもいとど涙のまづせきがたさをおぼせど、思ひまづめて「おどろおどろしき心地にも侍らぬを、皆人はつゝしむべき病のさまなりとのみ物すれば、内にも宮にもおぼしさわぐがいと苦しく、げに世の中の常なきをも心ほそく思ひ侍る」との給ひて押し拭ひまぎらはし給ふとおぼす涙のやがて滞らずふりおつれば、いとほしたなれど必ずしもいかでか心えむ。唯め、しく心弱きとや見ゆらむとおぼすもはづかし。さりや唯この事をのみおぼすなりけり、いつよりなりけむ、我れをいかにをかしと物笑ひし給ふ心ちに月比おぼし渡りつらむと思ふに、この君は悲しさは忘れ給へるを、こよなくもあろかなるかな、物のせちに覺ゆる時はいとかゝらぬ事につけてだに空飛ぶ鳥の鳴き渡るにももよほされてこそ悲しけれ、わがかくすじろに心弱きにつけても若し心を得たらむに、さいふばかり物の哀も知らぬ人にもあらず、世の中のつねなきとをしてみて思へる人しもつれなきと、うらやましくも心にくいもおぼさるゝものからまきばしらは哀なり。これに向ひたらむさまもおぼしやるに、かたみぞかしたもうちまもり給ふ。やうやう世の物語聞え給ふにいとこめてしもはあらずとおぼして、「昔より心にこめてまばしも聞えさせぬ事残し侍るかぎりはいといふせくのみ



思ふ給へられしを今はなかなかの上臈になりて侍り。まして御暇なき御有様にて、心のどかにおはします折も侍らねば殿居などにその事となくてはえさぶらはず、そこはかとなくて過ぐし侍りてなむ、昔御覽せし山里にはかなくてうせ侍りにし人の、同じゆかりなる人覺えぬ所に侍りと聞きつけ侍りて、時々さて見つべくやと思ひ給へしに、あいなく人のそしりも侍りぬべかりし折なりしかばこの怪しき所に置き侍りしををさまかりて見る事もなく、又かれも某一人をあひたのむ心もことになくてやありけむとは見給ひつれど、やんとなくものしきすぢに思ひ給へばこそはあらめ、見るにはた殊なるとがも侍らずなどして心やすくらうたしと思ひ侍りつる人のいとほかなくなり侍りにける、なべての世の有様を思ひ給へ續け侍るにも悲しくなむ。聞しめすやうも侍るらむかし」とて今ぞ泣き給ふ。これもいとかうは見え奉らし、をこなりと思ひつれどとほれそめてはいととめがたし。氣色のいさゝかみだり顔なるを怪しくいとほしとおぼせどつれなくて「いと哀なる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思ふ給へながら、わざと人に聞かせ給はぬと聞き侍りしかばなむ」とつれなくの給へど、いと堪へがたければことずくなにておはします。「さる方にも御覽せさせばやと思ひ給へりし人になむ。おのづからさもや侍りけむ。宮にも参り通ふべき故侍りしかば」など少しづつ氣色ばみて「御心地例ならぬ程はすゞるなる世の事聞しめしいれ御耳驚くもあいなさわざになむ。よく謹ませ給へ」など聞えおきて出て給ひぬ。いみじくもおぼしたりつるかな。いとほかばかりけれどさすがに高さ人の宿世なり

けり、たうじのみかど后のさばかりかしづき奉り給ふ御子かほかたちよりはじめて、只今の世にはたぐひおはせざめり、見給ふ人とてもなのめならずさまさまにつけて限りなき人をあきてこれに御心を盡し、世の人立ちさわぎせずほうどきようまつりはらへと道々にさわぐはこの人をあぼすゆかりの御心ちのあやまりにこそはありけれ、我れもかばかりの身に時のみかどの御むすめをもち奉りながらこの人のらうたく覺ゆる方は劣りやはあつる、まして今はと覺ゆるには心をのどめむ方なくもあるかな。さるはをこなり、かゝらじと思ひ忍ぶれどさまさまに思ひ亂れて「人木石にあらざれば皆なさけあり」とうちずして臥し給へり。後のまたゝめなどもいとはかなくしてけるを、宮にもいかゞ聞き給ふらむといとほしくあへなく母のなほなほしくはらからあるはなどさやうの人はいふ事あなるを思ひて事そぐなりけむかしなど心づきなくあぼす。あぼつかなさも限りなきをありけむさまもみづから聞かまほしとあぼせどながごもりあ給はむもびんなし。いきといきて立ちかへらむも心苦しなどあぼしわづらふ。月たちて今日ぞ渡らましとあぼし出て給ふ日の夕暮いと物あはれに御前近き橘の香のなつかしきに杜鵑の二聲ばかりなきてわたる。「宿にかよは」とひとりごち給ふも飽かねば、北の宮にこゝに渡り給ふ日なりければ橘折らせて聞え給ふ。

「忍びねや君もなくらむかひもなき死出のたをさに心かよは」と。宮は女君の御さまのいとよく似たるを、哀とあぼして二所ながめ給ふ折なりけり。氣色ある文かなと見給ひて、

「橘のかをるあたりはほととぎすこゝろしてことなくべかりけれ。わづらはし」と書き給

ふ。女君この事の氣色は皆見知り給ひてけり。哀にあさましきはかなさのさまざまにつけて心深き中に我れ一人物思ひ知らねば今までながらふるにや、それもいつまでと心ほそくおぼす。宮もかくれなきものからへだて給ふもいと苦しければ、ありしさまなど少しは取り直しつゝ語り聞え給ふ。「かくし給ひしがつらかりし」など、泣きみ笑ひみ聞え給ふにもこと人よりはむつましく哀なり。ことごとしくうるはしくて例ならぬ御事のさまも驚き惑ひ給ふ所にては御とぶらひの人まげく、父おとせうとの君たちひまなきもいとうるさきにこゝはいと心安くてなつかしくぞおぼされける。いと夢のやうにのみ猶いかでいと俄なりけることにかはとのみいぶせければ、例の人々召して右近を迎につかはす。母君も更にこの水の音けはひを聞くに我れもまるび入りぬべく悲しく心うき事のとまるべくもあらねばいと侘しうて歸り給ひにけり。念佛の僧どもをたのもしきものにていとかすかなるに入り來れば、ことごとしく俄に立ちめぐりしとのぬびとども見とがめず、あやにくに限りのたびしも入れ奉らずなりにしよと思ひいづるもいとほし。さるまじきことを思ほしこがるゝこと、見苦しく見奉れど、こゝに來てはおはしましよなよな有様いだかれ奉り給ひて船にのり給ひしけはひのあてに美しかりしとなどを思ひ出づるに心強き人なく哀なり。右近あひていみじうなくもことわりなり。「かくの給はせて御使になむ参りさつる」といへば、今更に人もあやしといひ思はむもつゝましくまゐりてもはかばかしく聞しめしあきらむばかり物聞えさすべき心地もま侍らず。この御忌はてゝあからさまに物になど人にいひなさむも少

し似つかはしかりぬべき程になしてこそ。心より外の命侍らばいさゝか思ひ静まらむ折になむ仰言なくとも参りてげにいと夢のやうなりし事ども、語り聞えまほしき」といひて今日は動くべくもあらず。大夫もなきで「更にこの御中の事ごまかに知り聞えさせ侍らず、物の心も知り侍らずながらたぐひなき御志を見奉り侍りしかば君達をも何かは急ぎてしも聞えうけ給はらむ。遂には仕うまつるべきあたりをこそと思ひ給へしを、いふかひなく悲しき御事の後はわたくしの御志もなかなか深さまさりてなむ」と語らふ。「わざと御車などおぼしめぐらして奉れ給へるを空しくてはいといとほしうなむ。今一所にても参り給へ」といへば侍従の君よび出て、「さば参り給へ」といへば「まして何事をか聞えさせむ。さてもこの御忌の程にはいかでかいます給はぬか」といへば「なやませ給ふ御ひびきにさまたまの御つゝしみども侍るめれど忌あへさへ給ふまじき御氣色になむ。又かく深き御契にては籠らせ給ひてもこそおはしまさめ。のこりの日いくばくならず。猶一所参り給へ」とせむれば、侍従ぞ、ありし御さまもいと戀しう思ひ開ゆるにいかならむ世にかは見奉らむ、かゝる折にと思ひなして参りける。黒ききぬども着て引きつくりひたるかたちもいと清げなり。裳は只今我れより上なる人なきにうちたゆみて色もかへざりければ薄色なるを持せて参る。おはせましかばかの道にご忍びて出て給はまし、人知れず心よせ聞えしものをなど思ふにも哀なり。道すがら泣くなくなむ來ける。宮はこの人参れりと聞しめすも哀なり。女君にはあまりうたてあれば聞え給はず。寝殿におはしましてわたどのおろし給へり。ありけむさまなど委し

う問はせ給ふに「日比おぼしなげきしさまその夜泣き給ひしさまあやしきまでことずくな  
におぼおぼとのみ物し給ひていみじとおぼす事をも人にうちいで給ふことはかたく物づゝ  
みをのみま給ひしけにやのたまひおくとも侍らず。夢にもかく心強きさまにおぼしかくら  
むとは思ひ給へずなむ侍りし」など委しう聞ゆれば、ましていとみじうさるべきにてとも  
かくもあらましよりも、いかばかり物を思ひたちてさる水に溺れけむとおぼしやるに、これ  
を見つけてせきとめたらましかばとわきかへる心ちま給へどかひなし。「御文を焼き失ひ給  
ひしなどになどてめをたて侍らざりけむ」など夜一夜語り給ふに聞えあかす。かのくわん  
じゆに書きつけ給へりし母君の返事などを聞ゆ。何ばかりのものとも御覽せざりし人もむ  
つましく哀におぼさるれば「我がもとにあれかし。あなたももてはなるべくやは」とのたま  
へば「さてさぶらむにつけても物のみ悲しからむを思ひ給へれば今この御はてなど過ぐし  
て」と聞ゆ。「又もまゐれ」などこの人をさへ飽かずおぼす。曉歸るにかの御料にとて設けさ  
せ給へりける櫛の箱一よろひ衣箱一よろひ贈物にせさせ給ふ。さまさまにせさせ給ふとは  
多かりけれど、おどろおどろしかりぬべければ、唯この人に仰せたる程なりけり。何心もな  
く参りてかゝるとどものあるを人はいかゞ見むすゝろにむつかしきわざかなと思ひわぶれ  
どいかゞは聞えかへさむ。右近と二人忍びて見つゝ、つれづれなるまゝにこまかに今めかし  
うまあつめたる事どもを見てもいみじうなく。そうぞくもいとうるはしうまあつめたる物  
どもなれば、かゝる御服にこれをいかでかかくさむなどもぞわづらひける。大將殿も猶い

と覺束なきにおぼしあまりておはしたり。道のほどより昔の事どもかき集めつゝ、いかなる契りにてこの父みこの御許にきとめけむ、かゝる思ひかけぬはてまで思ひあつかひ、このゆかりにつけては物をのみ思ふよ、いと尊くおはせしあたりを佛をゑるべにて後世をのみ契りしに心ぎたなき末のたがひめに思ひ知らするなめりとぞ覺ゆる。右近召し出て、「ありけむさまもはかばかしうさかず。猶盡せずあさましうはかなければ忌ののこりも少なくなりぬ。過ぐしてと思ひつれどまづめあへず物しつるなり。いかなる心ちにてか俄にはかなくなり給ひにし」と問ひ給ふに、尼君なども氣色見てければ遂に聞き合せ給はむをなかなかくしても事違ひて聞えむにそなはれぬべし、怪しき事のすぢにこそ、そらごとも思ひ廻らしつゝならひしか、かくまめやかなる御氣色にさしむかひ聞えてはかねてといはむかくいはむと思ひ設けし詞をも忘れ、煩しう覺えければありしさまの事どもを聞えつ。あさましうおぼしかけぬすぢなるに物もとばかりの給はず、更にあらじと覺ゆるかな、なべての人の思ひいふことをもこよなくことずくなに、おほどかなりし人は、いかでさるおどろおどろしきことは思ひ立つべきぞ、いかなるさまにこの人々もてなしていふにかあらむと御心も亂れまさり給へど宮もおぼし歎きたるけしさいとまるし。この有様もまかつれなしつくりたらむけはひはおのづから見えぬべきを、かくおはしましたるにつけても悲しくいみじきことをかみしもの人集ひて泣きさわぐをと聞き給へば「御供に具して失せたる人やある。猶ありけむさまをたしかにいへ。我をおろかなりと思ひて背き給ふことはよもあらじとなむ思

ふ。いかやうなる、たちまちにいひあらぬことありてかざるわざはま給はむ。我なむを信ずまじき」とのたまへば、いといとほしくさればよとわづらはしくておのづから聞し召しけむ。もとよりおぼすさまならておひ出で給へりし人の世ばなれたる御住ひの後はいつとなく物をのみおぼすめりしかど、たまさかにもかくおはしますを待ち聞えさせ給ふに、もとよりの御身のなげきをさへ慰め給ひつゝ心のどかなるさまにて時々も見奉らせ給ふべきやうにいつしかとのみ言に出で、はの給はねどおぼしわたるめりしを、その御ほ意かなふべきのさまにうけ給はる事ども、侍りしに、かくて侍ふ人ども、嬉しきとに思ひ給へいそぎかのつくば山も辛うじて心ゆきたる氣色にて渡らせ給はむことをいとなみ思ひ給へしに、心得ぬ御せうそ侍りけるに、このとのゐなど仕らまつるものども、女房達らうがはしかなりなと戒め仰せらるゝことなど申して、物の心えず荒々しき田舎人どもの怪しきさまにとりなし聞ゆる事ども侍りしを、その後久しう御せうそこなども侍らざりしに、心憂き身なりとのみいはけなかりし程より思ひ知るを、人かずにいかで見なさむとのみよろづに思ひあつかひ給ふ母君のなかなかなることの人わらはれになりはてばいかに思ひなげかむなど、おもむけてなむ常になげき給ひし。そのすぢより外に何事をかと思ひ給へよるにたへ侍らずなむ。鬼などのかくし聞ゆとも聊殘る所も侍るなるものを」とて泣くさまもいみじければいかなることにかと紛れつる御心も失せてせきあへ給はず。われは心に身をもまかせずけんそなるさまにもてなされたる有様なれば覺束なしと思ふ折も今近くて人の心おくまじくめ

やすきさまにもてなして行く末長くをと思ひのどめつゝ過しつるを、おろかに見なし給ひ  
けむこそなかなかわくる方ありけると覺ゆれ。今はかくだにいはしと思へど又人の聞かば  
こそあらめ、宮の御ことよいつよりありそめけむ。さやうなるにつけてやいとかたはに人の  
心を惑はし給ふ宮なれば常にあひ見奉らぬなげきに身をも失ひ給へるとなむ思ふ。なほい  
へ。我には更になかくしそ」との給へば、たしかにこそは聞き給ひてけれといといとほしく  
て「いと心うき事聞しめしけるにこそは侍るなれ。右近も侍はぬ折りは侍らぬものをとなが  
め休らひておのづから聞しめしけむ、この宮の上の御方に忍びて渡らせ給へりしをあさま  
しく思ひかけぬ程に入りおはしたりしかど、いみじき事を聞えさせ侍りて出でさせ給ひに  
き。それにおぢ給ひてかの怪しく侍りし所に渡らせ給へりしなり。その後音にも聞えじとお  
ほしてやみにしをいかでか聞かせ給ひけむ。唯そのきさらざばかりより音づれ聞えさせ給  
へし御文はいと度々侍りしかど御覽じ入るゝことも侍らざりき。いとかたじけなくなかな  
かうたてあるやうになどぞ右近など聞えさせしかば、ひとたびふたたびや聞えさせ給ひけ  
む。それより外の事は見給へず」と聞えさす。かうぞいはむかし、まひて問はむもいとほしく  
てつくづくと打ちながめつゝ宮をめづらしく哀と思ひ聞えても我が方をさすがにおろかに  
思はざりける程にいとあきらむる所なくはかなげなりし心にて、この水の近きをたよりに  
てかく思ひよるなりけむかし、我がこゝにさし放ちすゑさらましかばいみじううき世にふ  
ともいかでか必ず深き谷をもとめて出でましと、いみじううき水の契かなと、この川の疎ま



しうおぼさるゝこといと深し。年比哀と思ひそめたりし方にて荒き山路を行きかへりしに今は又心うくて、この里の名をだにえきくまじき心地志給ふ。宮の上ののたまひはじめし人がたとつけたりしさへゆゝしう唯我があやまちに失ひつる人なりと思ひもて行くには、母の猶かるびたる程にて後のうしろみもいとあやしきこととぎて志なしけるなめりと、心ゆかず思ひつるを委しく聞き給ふになむ、いかに思ふらむ、さばかりの人の子にてはいとめでたかりし人を忍びたることは必ずしもえ知らで、我がゆかりにいかなる事のありけるならむとぞ思ふならむかしなど萬にいとほしくおぼす。けがらひといふことはあるまじけれど御供の人めもあればのぼり給はで、御車のしぢを召して妻戸の前にぞ居給ひけるも見苦しけれどいとまげき木の下に苔をおましにて、とばかり居給へり。今はこゝを來て見むことも心うかるべしとのみ見めぐらし給ひて、

「われもまたうきふる里をあれはてばたれやどり木のかげを志のばむ」。阿闍梨今はりしなりけり。めしてこのほふじのことおきてさせたまふ。念佛の僧のかずそひなどせさせ給ふ。罪いと深くなるわざとおぼせばかるむべきことをぞすべき。七日七日に經佛供養すべきよしなどこまかにのたまひていと暗うなりぬるに歸り給ふもあらましかば今夜歸らむやはとのみなむ尼君にせうそせさせ給へれど「いとものもゆゝしき身をのみ思ひ給へまづみていとゞ物を覺え給へられずほれ侍りてなむうつぶしふして侍る」と聞えて出て來ねば強ひても立ちより給はず、道すがら疾く迎へとり給はずなりにけることくやしう、水の音の

聞ゆるかぎりは心のみさわぎ給ひて、からをだに尋ねずなりにける事あさましくても止みぬるかな、いかなるさまにていづれの底のうつせにまじりけむなどやる方なくおぼす。かの母君は京に子うむべきむすめのことによりつゝしみさわげば例の家にもえいかず、すゝなる旅居のみして思ひ慰む折もなきに、又これもいかならむと思へどたひらかに産みてけり。ゆゑしければえよらず。残の人々のうへも覺えずほれまどひてすぐに大將殿より御使忍びてあり。物覚えぬ心地にもいとうれしくあはれなり。「あさましきことはまづ聞えむと思ひ給へしを、心ものどまらず目もくらさ心地きて、まいていかなる闇にか惑はれ給ふらむとその程を過ぐしつるに、はかなくて日比も経にけるとをなむ。世のつねなさまいとと思ひのどめむかたなくのみ侍るを思の外にもながらへば過ぎにしなごりとは必ずさるべき事にも尋ね給へしなどこまかに書き給ひて御使にはかの大藏大夫をぞ給へりける。「心のどかに萬を思ひつゝ年比にさへなりにける程必ずしも志あるやうには見給はざりけむ。されど今より後何事につけても必ずわすれ聞えじ。又さやうに人をたれず思ひ聞え給へをさなき人ども、あなるを、おほやけに仕うまつらむにも必後見思ふべくなむ」などことばにもものたまへり。「痛くしも思むまじきけがらひなれば深うもふれ侍らず」などいひなしてせめてよびすゑたり。御返りなくなくかく。「いみじき事にえなれ侍らぬ命を心うく思ひ給へ歎き侍るに、かゝる仰言見給ふべかりけるにやとなむ年比は心細きありさまを見給へながらそれは數ならぬ身のをこたりに思ひ給へなしつゝ、忝き御ひとことを行く末長く頼み聞えさせ侍り

しに、いふかひなく見給ひはて、は里の契もいと心憂く悲しくなむ。さまざまに嬉しき仰言に命のび侍りて今暫しなからへ侍らば猶頼み聞え侍るべきにこそと思ひ給ふるにつけても目の前の涙にくれ侍りてえ聞えさせやらず」など書きたり。御使になべての祿などは見苦しき程なり。飽かぬ心地もすべければかの君に奉らむと心ざしてもたりけるよきはんさいの帯たちのをかしきなど袋に入れて車に乗るほど、「これは昔の人の御志なり」とて贈らせてけり。殿に御覽せさせれば「いとすゞなるわざかな」とのたまふ。「詞にはみづからあひ侍りたうびていみじくなく萬の事のたまひてをさなきものどもの事まで仰せられたるがいともしききに、又數ならぬほどはなかなかいと耻しう人になにゆゑなどは知らせ侍らて、あやしきさまどもを皆まゐらせ侍りて侍はせむとなむ物し侍りつる」と聞ゆ。げに異なる、事なきゆかりむつびにぞあるべけれど、みかどにもさばかりの人のむすめ奉らずやはある、それにさるべきにて時めかしおぼさむをば人の謗るべきことかは、たゞ人はたあやしき女世にふりにたるなどをもちゐるたぐひ多かり、かの守のむすめなりけりと人のいひなきにも我がもてなしのそれにけがるべくありそめたらばこそあらめ、一人の子をいたづらになして思ふらむ親の心に猶このゆかりこそ面だ、しかりけれど、思ひ知るばかり用意は必ず見すべき事とおぼす。かしこには常陸の守たちながらきて、をりしもかくて居給へることなど腹立つ。年比いつぐになむおはするなどありのまゝにも知らせざりければはかなきさまにておはすらむと思ひいひけるを、京になど迎へ給ひて後、めいぼくありてなど知らせむ

と思ひけるほどに、かゝれば今はかくさむもあいなくでありしさま泣くなく語る。大將殿の御文どもとり出で、見すれば善き人かしくしてひなびものめでする人にて驚きおくしてうち返しうちかへし、「いとめてたき御さいはひを捨て、うせ給ひにける人かな。おのれも殿人にて参り仕うまつれども近く召しつかひ給ふこともなくいとけ高くおはする殿なり。若きものどものこと仰せられたるはたのもしきとになむ」など喜ぶを見るにもましておはせましかばと思ふに、ふしまろびてなかる。守も今なむうちなきける。さるはおはせし世にはなかなかかゝるたぐひの人しも尋ね給ふべきにしもあらずかし。我があやまちにて失ひつるもいとほし。慰めむとおぼすによりなむ人のそしりねんごろに尋ねじとおぼしける。四十九日のわざなどせさせ給ふにもいかなりけむとにかはと覺せば、とてもかくても罪得まじきことなればいと忍びてかのりしの寺にてせさせ給ひける六十僧のふせなどおほきにおきてられたり。母君も來居てことどもそへたり。宮よりは右近がもとにしるがねの壺に金入らぬ人は「いかでかくなむ」などいひける。殿の人どもむつまじきかぎり數多たまへり。怪しく音もせざりつる人のはてをかくあつかはせ給ふ。誰ならむと今驚く人のみ多かるに常陸の守きて、心もなくあるじがりをるなむ、あやしと人々見ける。少將の子うませていかめしき事せさせむとまどひ、家の内になき物はすくなくもろこし新羅のかぎりをもまつべきに、限りあればいとあやしかりけり。この御法事の忍びたるやうにおぼしたれどけはひこよな

きを見るにいきたちましかば我が身にならふべくもあらぬ人の御宿世なりけりと思ふ。宮の上も誦經し給ひ七僧のまへのこともせさせ給ひけり。今なむ、かゝる人もたまへりけりともかとまで聞しめしてあるかにもあらざりける人を宮にかしこまり聞えてかくしおき給ひけるを、いとほしとおぼしける。二人の人の御心の中ふりずかなしくあやにくなりし御思のさかりにかきたえてはいといみじけれどあだなる御心はなぐさむやなど試み給ふこともやうやうありけり。かの殿はかくとりもちて何やかやとおぼして残の人をはぐませ給ひても猶いふかひなき事を忘れ難くおぼす。後の宮の御きやうぶくの程は猶かくておはしますに二の宮なむ式部卿になり給ひにける。おもおもしうて常にしも参り給はず。この宮はさうざうしく物哀なるまゝに一品の宮の御方をなぐさめ所に去給ふ。よき人のかたちをもえまほに見給はぬのこりおほかり。大將殿のからうじていと忍びて語らひ給ふ。小宰相の君といふ人かたちなども清げなり。心ばせある方の人とおぼされたり。同じことを掻きならすつま音もばち音も人にはまさり文をかき物うちいひたるもよしあるふしをなむとへたりける。この宮も年比いといたきものに去給ひて例のいひやぶり給へど、などかさしもめづらしげなくはあらむと心強くねたきさまなるを、まめ人はすこし人より異なりとおぼすになむありける。かく物おぼしたるさまも見知りければ忍びあまりて聞えたり。

「あはれまる心は人におくれねど數ならぬ身にきえつゝぞふる。かへたらば」とゆゑある紙に書きたり。物哀なる夕ぐれまめやかなるほどをいとよく推し量りていひたるもにくか

らず。

「つれなしとこゝら世を見るうき身だに人の知るまで歎きやはする。このよろこび衰なりし折からもいとゞなむ」など云ひに立ちより給へり。いと耻しげにもものしげにてなべてかやうになどもならはし給はぬ人からもやんどなきにいと物はかなき住ひなりかし。つぼねなどいひてせばくほどなきやりどぐちにより居給へる。かたはらいたく覺ゆれど、さすがにあまりひげしてもあらでいとよき程に物なども聞ゆ。見し人よりもこれは心にくさけそひてもあるかな、などてかく出てたちけむ、さるものにて我もおいたらましものをおぼす。人あれぬすぢはかけても見せ給はずはちすの花の盛に御入講せらる。六條院の御ため紫の上など皆おぼしわけつゝ御經佛など供養せさせ給ひていかめしく尊くなむなりける。五卷の日などはいみじき見物なりければ、こなたかなた女房につきて参りて物見る人多かりけり。五日といふあさ座にはてゝ御堂の飾とりさけ御志つらひあらたむるに、北の廂もさうじども放ちたりしかば皆入りたちてつくろふ程、西の渡殿に姫宮おはしましけり。物さゝこらうじて女房もおのの局にありつゝ御前はいと人少なゝる夕暮に、大將殿直衣着かへて、今日まかづる僧の中に必のたまふべき事あるにより釣殿の方におはしたるに、皆まかてぬれば池の方にすゞみ給ひて人少なゝるに、かくいふ宰相の君などかりそめに几帳などばかり隔てゝうちやすむらへつぼねしたり。こゝにやあらむ人のきぬの音するとおぼしてめだうの方のさうじの細く明きたるよりやをら見給へば、例さやうの人の居たるけはひには似ず

はればれしくまつらひたれば、なかなか几帳どもの立てちがへたるあはひより見とほされ  
てあらはなり。ひを物の蓋に置きてわるともてさわぐ人々おとな三人ばかり童と居たり。  
唐ぎぬも汗衫も着ず皆うちとけたれば御前とは見給はぬに白きうすもの、御ぞ着給へる人  
の手にひを持ちながらかく争ふを少しるみ給へる御顔いはむ方なく美しげなり。いとあつ  
さの堪へがたき日なればこちたき御髪の苦しうちぼさるゝにやあらむ、少しこなたになび  
かしてひかれたる程たとへむものなし。こゝらよき人を見集むれど似るべくもあらざりけ  
りと覺ゆ。御前なる人は誠に土などの心地ぞするを、思ひまづめて見れば黄なるすゞしのひ  
とへ薄色なる裳着たる人の扇うちつかひたるなど用意あらむはやとふと見えてなかなか物  
あつかひにいと苦しげなり。「唯さながら見給へかし」とて笑ひたるまみ愛敬づきたり。聲聞  
くにぞこの志の人とはまりぬる。心づよくわりて手毎にもたり。かしらにうち置き胸にさし  
あてなどさまあしうする人もあるべし。この人は紙につゝみて御前にもかくて参らせたれ  
ばいと美しき御手をさしやり給ひてのごはせ給ふ。「いなもたらじ。まづくむつかし」とのた  
まふ御聲いとほのかに聞くも限りもなく嬉し。またいとちひさくおはしまし、程にわれも  
物の心も知らず見奉りし時めでたのちごの御さまやと見奉りし。その後絶えてこの御けは  
ひをだに聞かざりつるものをいかなる神佛のかゝる折見せ給へるならむ、例のやすからず  
物思はせむとするにやあらむと、かつはまづ心なくてまもり立ちたる程に、こなたの對の北  
面にすゝみける下臈女房のこのさうじはとみの事にてあけながらありにけるを思ひ出て、

人もこそ見つけてさわがるれと思ひければまどひ入る。この直衣姿を見つくるに誰ならむと心さわぎておのがさま見えむことも知らず、簀子よりたゞきにくれば、ふとたちざりて誰とも見えじ。すきずきしきやうなりと思ひて隠れ給ひぬ。このおもとはいみじきわざかな、御几帳をさへあらはにひきなしてけるよ、左の大殿の君達ならむ、うとき人はたこゝまでくべきにもあらず、物の聞えあらば誰かさうじあけたりしと必ず出てきなむ、ひとへも袴もすじしなめりと見えつる人の御姿なればえ人も聞きつけ給はぬならむかしと思ひこうじてをり。かの人はやうやうひじりになりし心をひとふしたがへそめて様々なる物思ふ人ともなるかな、そのかみ世を背きなましかば今は深き山に住みはてゝかく心亂らましやはなどおぼし續くるもやすからず。などて年比見奉らばやと思ひつらむ、なかなか苦しうかひなかるべきわざにこそと思ふ。つとめて起き給へり。女宮の御かたちをかしげなめるはこれより必ず優るべきことかはと見えながら、更に似給はずこそありけれ、あさましきまであてにかをりえもいはざりし御さまかな、かたへは思ひなしかをりからかとおぼして「いとあつしや。これより薄き御ぞ奉れ。女は例ならぬ物着たるこそ時々につけてをかしけれ」とてあなたに参りて大貳に「うすものゝひとへの御ぞ縫ひてまぬれといへ」とのたまふ。御前なる人はこの御かたちのいみじき盛りにおはしますをもてはやし聞え給ふとをかしう思へり。例のねんずし給ふ我が御方におはしましたとして、晝つかた渡り給へれば、のたまひつる御ぞ御几帳にうちかけたり。「なごこは奉らぬ。人おほく見る時なむすきたる物着たるは傍側に



覺ゆる。唯今はあへなむ」とて手づから着せ奉り給ふ。御袴も昨日の同じくれなるなり。みぐしのおほさ、すそなどはおとり給はねど猶様々なるにや似るべくもあらず。ひ召して人々にわらせ給ふ。とりてひとつ奉りなど志給ふ心のうちもをかし。繪に書きて戀しき人見る人はなくやはありける、ましてこれは慰めむに似げなからぬ御程ぞかしと思へど、昨日かやうにてわれまじりぬ、心に任せて見奉らましかばと覺ゆるに、心にもあらずうちなげかれぬ。一品宮に御文は奉り給ふや」と聞え給へば、「内にありし時上のさのたまひしかば聞えしかど久しうさもあらず」とのたまふ。「唯人にならせ給ひにたりとてかれよりも聞えさせ給はぬにこそは心うかなれ。今大宮の御前にて恨み聞えさせ給ふと啓せむ」とのたまふ。「いか恨み聞えむ。うたて」とのたまへば、「下すになりたりとておぼしおとすなめりと見れば驚かし聞えぬとこそは聞えぬ」とのたまふ。その日はくらしてまたのあしたに大宮にまゐり給ふ。例の宮もおはしけり。丁子に深く染めたる羅の單衣をこまやかなる直衣に着給へるいとこのましげなり。女の御身なりのめでたかりしにも劣らず白く清らにて猶ありしよりはおもやせ給へるいと見るかひあり。覺え給へりと見るにもまづ戀しきを、いとあるまじきこと、まづむるぞたゞなりしよりは苦しき。繪をいと多く持たせて参り給へりける女房してあなたに参らせ給ひてわれも渡らせ給ひぬ。大將も近く参りより給ひて御入講のたふとく侍りしこといにしへの御事少し聞えつゝ残りたる繪見給ふついでに「この里にもなし給ふ御子の雲の上はなれて思ひくし給へるこそいとほしう見給ふれ。姫宮の御方より御せうそこも

侍らぬを、かく品定めり給へるにおぼし捨てさせ給へるやうに思ひて心ゆかぬ氣色のみ侍るをかやうのもの時々もせさせ給はなむ。なにがしがあろしてもてまからむ、はた見るかひも侍らじかし」と聞え給へば「怪しくなどてか捨て聞え給はむ。内にては近かりしにつきて時々も聞えかよひ給ふめりしを、所々になり給ひし折にとだえそめ給へるにこそあらめ。今そいのかし聞えむ。それよりもなどかは」と聞え給ふ。「かれよりはいかでかは。もとより數まへさせ給はざらむをもかくたたくして侍ふべきゆかりによせておぼし召しかずまへさせ給はむをこそ嬉しくは侍るべけれ。ましてさも聞えなれ給ひにけむを今捨てさせ給はむはからき事に侍り」と啓せさせ給ふをすきばみたる氣色あるかとはおぼしかけざりけり。立ちいで、一夜の志の人にあはむ、ありし渡殿もなぐさめに見むかしとおぼして御前をあゆみ渡りて西ざまにおはするを、御籠のうちの人ハ心ことに用意す。げにいとさまよく限なきもてなしにて渡殿の方は左のおほい殿の君達など居て物いふけはひすれば、妻戸の前に居給ひて「大方にはまわりながらこの御方のげざんに入る事のかたく侍れば、いとおぼえなくおきなびはてにたる心地まはべるを、今よりはと思ひおこし侍りてなむ。ありつかず若き人どもぞ思ふらむかし」と甥の君達の方を見やり給ふ。「今よりならはせ給ふこそげに若くならせ給ふならめ」などほかなきとをいふ。人々のけはひもあやしうみやびかにをかしき御方の有様にぞある。その事となけれど世の中の物語などしつゝ、まめやかに例よりは居給へり。姫宮はあなたに渡らせ給ひけり。「大宮大將のそなたに参りつるか」と問ひ給ふ。「御供に

参りたる大納言の君小宰相の君に物のたまはむとこそは侍るめりつれ」と聞ゆれば「まめ人のさすがに心留めて物語すること心地後れたらむ人は苦しけれ、心の程も見ゆらむかし。小宰相などはいと後やすし」とのたまひて御はらからなれどこの君をば猶はづかしく人も用意なくて見えざらなむと覺いたり。「人よりは心よせ給ひて局などに立ちより給ふべし。物語こまやかにま給ひて夜更けて出てなどし給ふ折々も侍れど例のめなれたるすぢには侍らぬにや。宮をこそいと情なくおはしますと思ひて御いらへをだに聞えず侍るめれ。忝きこと」といひてわらへば、宮も笑はせ給ひて「いと見苦しき御さまを思ひ知ることをかしけれ。いかでかゝる御癖やめ奉らむ。はづかしやこの人々も」とのたまふ。「いと怪しきことをこそ聞き侍りしか。この大將殿のなくなし給ひてし人は、宮の御二條の北の方の御弟なりけり。ことほなるべし。常陸の前の守某がめはをばとも母ともいひ侍るなるはいかなるにか。その女君に宮こそいと忍びておはしましたしけれ。大將殿や聞きつけ給ひたりけむ、俄に迎へ給はむとてまもりめをへなど、ことごとしくま給ひける程に、宮もいと忍びておはしましたながらえ入らせ給はず、あやしきさまに御馬ながら立たせ給ひつゝぞかへらせ給ひける。女も宮を思ひ聞えさせけるにや、俄に消えうせにけるを、身なげたるなめりとしてこそ乳母やうの人どもは泣き惑ひ侍りけれ」と聞ゆ。宮もいとあさましと覺して「誰かさる事はいふぞとよ。いとほしく心憂きことかな。さばかりめづらかならむことはおのづから聞えありぬべきを、大將もさやうにはいはいはで、世の中のはかなくいみじき事、かく宇治の宮のぞうの命みじか、

りけるとをこそいみじう悲しと思ひてのたまひしか」とのたまふ。「いざや下すはたしかならぬことをもいひ侍るものと思ひ侍れど、かしこに侍りける下童の唯この比宰相が里に出でまうできてたしかなるやうにこそいひ侍りけれ。かくあやしうてうせ給へること人に聞かせじ、おどろおどろしくおぞきやうなりとていみじくかくしけることどもとや。さて委しくは聞かせ奉らぬにやありけむ」と聞ゆれば「更にかゝる事又まねぶなどいはせよ。かゝるすぢに御身をももてそこなひ人にも心づきなきものに思はれ給ふべきなめり」と、いみじう覺えたり。その後姫宮の御方より二宮に御せうそこありけり。御手などのいみじううつくしげなるを見るにもいとうれしく、かくてこそ疾く見るべかりけれとおぼす。數多をかしき繪どもおほく大宮も奉らせ給へり。大將殿うちまさりてをかしきども集めてまゐらせ給ふ。せり川の大將のとを君の女一宮思ひかけたる秋の夕暮に思ひ侘びて出ていきたるかたをかしく書きたるをいとよく思ひよせらる。まかばかりおぼしなびく人のあらましかばと思ふ身ぞ口をしき。

「萩の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはまみける」と書きてもそへまほしくおぼせど、さやうなる露ばかりの氣色にても漏りたらばいと煩はしげなる世なればはかなきこともえほのめかし出づましく、かく萬に何やかやと物を思ひ思ひのはては昔の人ものしたまはましかばいかにもいかにも外さまに心わけましや、時のみかどの御娘を給ふともえ奉らざらまし、又さ思ふ人ありと聞しめしながらはかゝる事もなからましを、猶心うく我が

心亂り給ひけるはし姫かなと思ひあまりては又宮の上にとりかゝりて戀しうつらくもわりなきことぞをこがましきまでくやしき、これに思ひわびてさしつぎにはあさましくてうせにし人のいと心をさなく滞る所なかりける輕々しさをば思ひながら、さすがにいみじと物を思ひ入りけむほど我が氣色例ならずと心の鬼になげきまづみて居たりけむ有様を聞き給ひしも思ひ出でられつゝ、おもひかななる方ならて唯心安くらうたきかたらひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を思ひもていけば宮をも思ひ聞えじ、女をもうしと思はじ、唯我が有様の世づかぬをこたりぞなどながめ入り給ふ時々多かり。心のどかにさまよくおはする人だにかゝるすぢには身も苦しき事自からまじるを、宮はまして慰めかね給ひつゝ、かのかたみに飽かね悲しさをものたまひいづべき人さへなきを、對の御方ばかりこそは哀などのたまへど深くも見馴れ給はざりける。うちつけのむつびなればいと深くしもいかてかはあらむ。またおぼすまゝに戀しやいみじやなどのたまはむにはかたはらいたければ、彼所にありし侍従をぞ例の迎へさせ給ひける。皆人どもいきちりて乳母とこの人二人なむとりわきて覺したりしも忘れがたくて、侍従はよそ人なれど猶語らひてありふるに、世づかぬ川の音もうれしき瀬もやありとたのみし程こそなぐさめけれ。心憂くいみじく物おそろしくのみ覺えて京になむあやしき所にこの比來て居たりける。尋ね出で給ひてかくて侍へとのたまへど、御心はさるものにて人々のいはむともさるすぢの事まじりぬるあたりはさゝにくき事もあらむと思へばうけひき聞えず。後の宮に參らむとなむおもむければいと

よかなり。さて人知れずおぼしつかはむ」とのたまはせけり。心ぼそくよるべなきも慰むや  
とて知るたよりもとめてまゐりぬ。きたなげなくてよろしき下臈なりとゆるして人もそし  
らず大將殿も常に参り給ふを見る度ごとに物のみ哀なり。いとやんどとなきもの、姫君の  
み参りつどひたる宮と人もいふをやうやう目留めて見れど猶見奉りし人に似たるはなかり  
けりと思ひありく。この春うせ給ひぬる式部卿の宮の御女を繼母の北の方殊にあひ思はて  
せうとの右馬の督にて人がらもことなることなき心かけたるをいとほしうなども思ひたら  
でさるべきさまになむ契ると聞しめすたよりありて「いとほしう父宮のいみじうかしづき  
給ひける女君を徒らなるやうにもてなさむことなどのたまはせければいと心ぼそくのみ思  
ひ歎き給ふ有様にて懐しうかく尋ねのたまはする」などせうとの侍従もいひてこの比迎へ  
とらせ給ひてけり。姫宮の御ぐにていとよなからぬ御ほどの人なればやんどなく心こ  
とにて侍ひ給ふ。かぎりあれば宮の君などうちいひて裳ばかりひきかけ給ふぞいと哀なり  
ける。兵部卿の宮この君ばかりや戀しき人に思ひよそへつべきさましたらむ、父みこははら  
からぞかしなど例の御心は人をこひ給ふにつけても人ゆかしき御くせやまでいつしかと御  
心かけ給ひてけり。大將、もどかしきまでもあるわざかな、昨日今日といふばかり春宮にや  
などおぼし、我にも氣色ばませ給ひきかし、かくはかなき世のおとろへを見るには水の底に  
身をまづめてももどかしからぬわざにこそなど思ひつゝ人よりは心よせ聞え給へり。この  
院におはしますをば内よりもひろくおもしろく住みよきものにして常にしも侍はぬ人ども

皆うちとけ住みつゝはるばると多かる對ども廊渡殿にみちたり。左大臣殿昔の御けはひにも劣らずすべて限もなくいとなみ仕うまつりたまふ。嚴めしうなりにたる御ぞうなればなかなかいにしへよりも今めかしきことはまさりてさへなむありける。この宮例の御心ならば月比の程にいかなるすきごとどもをまいて給はまし。こよなくまづまり給ひて人めには少しおひなほりし給ふかなと見ゆるを、このころぞ又宮の君に、本性あらはれてかゝづらひありき給ひける。涼しくなりぬとて宮内に参り給ひなむとすれば秋のさかり紅葉の比を見ざるむこそなど若き人々は口惜しがりて皆参りつどひたるころなり。水になれ月をめて御あそび絶えず、常よりも今めかしければ、この宮ぞかゝるすぢはいとこよなくもてはやし給ふ。朝夕めなれても猶今見む初花のさまし給へるに、大將の君はいとさしも入りたちなどし給はぬほどにてはづかしう心ゆるびなきものに皆思ひたり。例の二所参り給ひて御前におはする程に、かの侍従は物より覗き奉るに、いつ方にもいづかたにもよりてめてたき御宿世見えたるさまにて世にぞおはせましかし。あさましくはかなく心うかりける御心かななど人にはそのわたりのことかけてまり顔にもいはぬことなれば心ひとつに飽かず胸いたく思ふ。宮はうちの御物語などこまやかに聞えさせ給へば今一所はたち出て給ふ。見つけられ奉らじ、まばし御はてをも過さず心淺しと見え参らじと思へば隠れぬ。ひんがしの渡殿にあきあひたる戸口に人々あまた居て物語など忍びやかにする所におはして「某をぞ女房はむつまじとおぼすべきや。女だにかく心やすくはよもあらじかし。さすがにさるべからむこ

と教へ聞えぬべくもあり。やうやう見知り給ふべかめればいとなむ嬉しき」とのたまへばいといらへにくくのみ思ふ。中に辨のおもとてなれたるおとな「そもむつましく思ひ聞ゆべきゆゑなき人の耻ぢ聞え侍らぬや。ものはさこそはなかなか侍るめれ。必ずそのゆゑ尋ねてうちとけ御覽せらるゝにしも侍らねど、かばかりおもなくつくりそめてける身におはざらむもかたはらいたくてなむ」と聞ゆれば「恥づべきゆゑあらじと思ひ定め給ひてけるこそ口惜しけれ」などのたまひつゝ見れば、からぎぬは脱ぎすべしおしやりうちとけて手習しけるなるべし、硯の蓋にすゑて心もとなき花の末々たをりてもてあそびけりと思ゆ。かたへは几帳のあるにすべりかくれ、あるはうちをむき、おしあけたる戸の方にまぎらしつゝ居たる頭つきどもをかしと見渡し給ひて硯ひきよせて、

「をみなへし亂るゝ野邊にまじるとも露のあだ名を我にかけめや。心やすくはおほさて」とたゞこの草紙にうしろしたる人に見せ給へば、みじろきなどもせずのどかにいと疾く、

「花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露にみだれやはする」と書きたるて、唯片そばなれどよしづきて大方めやすれば誰ならむと見給ふ。今まうのぼりける道にふたげられて滞り居たるなるべしと思ゆ。辨のおもてはいとけざやかなる翁言にくく侍りとして、

「旅ねして猶こゝろみよ女郎花さかりの色にうつりうつらず。さて後定め聞えさせむ」といへば、

「宿かさはひと夜はねなむおほかたの花にうつらぬ心なりとも」とあれば「何かはづかし



めさせ給ふ。大かた野邊のさかしらをこそ聞えさせしれ」といふ。はかなきことを唯少しの給ふも人はのこり聞かまほしくのみ思ひ聞えたり。「心なし、道あけ侍りなむよ。わきてもかの御物耻のゆゑ必ありぬべき折にぞあめる」とて立ち出て給へば、おしなべてかく残なからむと思ひやり給ふこそ心うけれと思へる人もあり。ひんがしの高欄におしかゝりて夕かげになるまゝに花のひもとく御前の叢を見渡し給ふ。ものゝみ哀なるに中についてはらわた絶ゆるは秋の天といふことをいと忍びやかにずんじつゝ居給へり。ありつるきぬの音なひまゐるきけはひしてもやの御さうじよりとほりてあなたに入るなり。宮の歩みおはして「これよりあなたに参りけるは誰ぞ」と問ひ給へば「かの御方の中將の君」と聞ゆなり。猶あやしのわざや、誰にかとかりけるにやがてかくゆかしげなく聞ゆる名ざしよといとほしく、この宮には皆めなれてのみ覺え奉るべかめるも口惜し。をりたちてあながちなる御もてなしに女は、さもこそまけ奉らめ、わがさも口惜しうこの御ゆかりにはねたく心うくのみあるわざかな、いかてこのわたりにもめづらしからむ人の、例の心入れて騒ぎ給はむを語らひとりて我が思ひしやうにやすからずとだにも思はせ奉らむ、誠に心ばせあらむ人は我が方にぞよるべきや、されどかたいものかな人の心はと思ふにつけて、對の御方のかの御有様をばふさはしからぬものに思ひ聞えて、いとびんなきむつびになり行き、大方のおぼえをば苦しと思ひながら、猶さし放ちがたきものにおぼし知りたるぞありがたく哀なりける。さやうなる心ばせある人こゝらの中にあらむや、入りたちて深く見ねば知らぬぞかし、ねざめ

がちにつれづれなるを少しはすきもならはゞやなど思ふに今は猶つきなし。例の渡殿をありしに習ひてわざとおぼしたるもあやし。姫宮よるはあなたに渡らせ給ひければ人々見るとてこの渡殿にうちとけて物語する程なりけり。箏の琴いとなつかしうひきすさぶつまおとをかしうきこゆ。思ひがけぬによりおはして「などかくねたましがほにかきならし給ふ」との給ふに、皆驚かるべかめれど少しあげたる籠垂うちおろしなどもせず、起きあがりて「似るべきこのかみや侍るべき」と應ふる聲中將の御もとゝかいひつるなりけり。「まろこそは御母方のをぢなれ」とはかなきことをのたまひて例のあなたに坐しますべかめる。「何わざをかこの比御里住の程にせさせ給ふ」など味氣なく問ひ給ふ。「いづこにても何事かは唯かやうにてこそは過ぐさせ給ふめれ」といふにをかしの御身のほどやと思ふに、すゞろなるなげきのうち忘れてまつるもあやしと思ひよる人もこそとまぎらはしにさし出でたる和琴をたゞさながらかきならし給ふ。りちの調べはあやし折にあふと聞く聲なれば聞きにくくもあらねど、ひきはて給はぬをなかなかなりと心入れたる人は消えかへり思ふ。我が母宮も劣り給ふべき人かは、きさい腹と聞ゆばかりのへだてこそあれ、みかとみかどのおほしかしづきたるさま異ごならざりけるを猶この御あたりはいと殊なりけることあやしけれ、明石の浦は心にくかりける所かなと思ひ續くることどもに、我が宿世はいとやんごとなしかし、ましてならべてもち奉らばと思ふぞいとかたきや、宮の君はこの西の對にぞ御かたしたりける、若き人々のけはひ數多して月めであへり、いであはれこれも又同じ人ぞかし

と思ひ出て聞えて「御子の昔心よせ給ひしものを」といひなしてそなたへ坐しぬ。童のかしきとのゐ姿にて二三人出て、ありきなどしけり。見つけて入るさまども、かじやかし。これぞ世のつねと思ふ。南面の隅の間によりてうちこわづくり給へば、少しおとなびたる人出で來たり。「人知れぬ心よせなど聞えさせ侍れば、なかなか皆人聞えさせふるしつらむことをうひうひしきさまにてまねぶやうになり侍り。まめやかにむことより外をもとめ侍る」とのたまへば「君にも言ひ傳へず、さかしだちていと思ほしがけざりし御有様につけても故宮の思ひ聞えさせ給へりしことなど思ひ給へ出でられてなむ、かくのみ折々聞えさせ給ふなる御まじらうごとをも喜び聞え給ふめる」といふ。なみなみの人めきて心地なのさまやと物うければ「もとよりおぼし捨つまじきすぢよりも今はましてさるべきことにつけても思ほし尋ねむなむ嬉しかるべき。うとうとしう人づてなどにてもてなさせ給はゞえこそ」とのたまふに、げにと思ひさわぎて君をひきゆるがすめれば「松も昔のとのみながめらるゝにもとよりなどのたまふすぢはまめやかにたのもしうこそは」と人づてともなくいひなし給へる聲、いと若やかに愛敬づぎやさしき所そひたり。唯なべてのかるゝすみかの人と思はゞいとをかしかるべきを只今はいかでかばかりも人に聲聞かすべきものとならひ給ひけむとなまうしろめたし。かたちもいとなまめかしからむかしと見まほしきはひのまたるをこの人ぞ又例のかの御心亂るべきつまめると、をかしうもありがたの世やとも思ひ居給へり。これこそは限なき人のかしづきおぼしたて給へる姫君又かばかりぞ多くはあるべき。あやし

かりけることはさる聖の御あたり山にふところより出て來たる人々のかたほなるはなかりけるこそ。このはかなしやかるかるしやなど思ひなす人もかやうのうち見るけしきはいみじうこそをかしかりしかと何事につけても唯かのひとつゆかりをぞ思ひ出て給ひける。あやしうつらかりける契どもをつくづくと思ひ續けながめ給ふ夕暮、かげろふの物はかけに飛びちがふを、

「ありと見て手にはとられず見れば又行くへもまらず消えし蜻蛉。あるなきかの」と例のひとりごち給ふとかや。

## 手習

そのころ横川に某僧都とかいひていとたふとき人すみけり。八十が餘りの母五十ばかりの妹ありけり。ふるきぐわんありてはつせにまうでたり。むつまじうやんごとなく思ふ弟子の阿闍梨をそへて佛經供養すること行ひけり。事ども多くして歸る道に奈良坂といふ山越えける程よりこの母の尼君心ち悪しうまければ、かくてはいかでのこりの道をもおはしつかむともてさわぎて宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるに留めて今日ばかりやすめ奉るに、猶いたうわづらへば横川にせうそこまたり。山ごもりのほ意ふかく今年は出でじと思ひけれど、かぎりのさまなる親の道の空にてなくやならむと驚きて急ぎものし給へり。

惜むべくもあらぬ人のさまをみづからも弟子の中にも驗あるして加持しさわぐをいへある  
じ聞きて「みたけさうじまけるをいたう老い給へる人の重く惱み給ふはいかゞ」と後めたげ  
に思ひていひければ、さもいふべきとといとほしう思ひて、いとせばくむつかしうもあれば  
やうやうゐて奉るべきに、中神ふたぶりに例すみ給ふ方はいむべかりければ、故朱雀院の御  
領にて宇治の院といひし所のわたりならむと思ひ出て、院守僧都知り給へりければ一二  
日宿らむといひにやり給へりければ、泊瀬になむ昨日皆参りにけるといとあやしき宿守の  
翁を呼びて率て來たり。「おはしまさばはや。いたづらなる院の寢殿にこそ侍るめれ。物語の  
人は常にぞやどり給ふ」といへば「いとよかなり。公所なれど人もなく心やすきを」とて見せ  
にやりたまふ。この翁例もかく宿る人を見ならひたりければ、おろそかなるまづらひなどし  
て來たり。まづ僧都渡り給ふいといたく荒れて恐しげなる所かなと見給ひて「大とて達經讀  
め」などのたまふ。この泊瀬にそひたりし阿闍梨と同じやうなる今一人何事のあるにかつき  
づきしき程の下藤法師に火ともさせて人もよらぬ後の方にいきたり。森かと思ゆる木の下  
をうとましげのわたりやと見入れたるに白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と  
立ちとまりて火をあかくなして見れば物のゐたるすがたなり。「狐の變化したるか。にくし、  
見顯さむ」とて一人は今少し歩みよる。今一人は「あなような。よからぬものならむ」といひ  
てさやうのものしぞくべき印つくりつゝ、さすがになほまもる。頭の髪あらばふとりぬべき  
心地するにこの火燈したる大とて憚もなくあうなきさまにて近くなりてそのさまを見れば

髪は長くつやつやとして大きな木の根のいとあらあらしきにより居ていみじうなく。「珍しきことにも侍るかな。僧都の御坊に御覽せさせ奉らばや」といへば「げに怪しき事なり」とて一人はまうて、「かゝることなむ」と申す。「狐の人に變化するとは昔より聞けどまだ見ぬものなり」とてわざとおりておはす。かの渡り給はむとすることによりて下すども皆はかばかしきは御厨子所などあるべかしきことどもをかゝるわたりには急ぐものなりければおまづまりなどしたるに、唯四五人してこゝなるものを見るにかはることもなし。怪しうて時のうつるまで見る。疾く夜も明けはてなむ人か何ぞと見顯さむと心にさるべき眞言を讀み、印をつくりて試るにまゐるくや思ふらむ、「此は人なり、更にひさうのけしからぬものにあらず。寄りて問へ。なくなりたる人にはあらぬにこそあめれ。もし死にたりける人を捨てたぢけるがよみがへりたるか」といふ。「何のさる人をかこの院の内に捨て侍らむ。たとひ誠に人なりとも狐こだまやうのもの、あざむきてとりもて來たらむにこそ侍らめ。いと不便にも侍りけるかな。けがらひあるべき所にこそ侍るめれ」といひて、ありつる宿守のをのこを呼ぶ。山彦の答ふるもいとちそろし。あやしのさまに額おしあげて出て來たり。「こゝには若き女なとやすみ給ふ。かゝる事なむある」とて見すれば「狐のつかうまつるなり。この木のもとになむ時々怪しきわざなむ侍る。一昨年の秋もこゝに侍る人の子の二つばかりに侍りしをとりてまうで來たりしかども見驚かず侍りき」、「さてそのちごは死にやまにし」といへば「生きて侍りき。狐はさこそは人をおびやかせどことにもあらぬやつ」といふ様いとなれたり。

かの夜深きまゐりものゝ所に心をよせたるなるべし。僧都「さらばさやうのものゝ志たるわざか猶能く見よ」とてこの物ぢせぬ法師をよせたれば「鬼か神か狐かこだまか。かばかりの天の下の験ざのちはしますにはえかくれ奉らじ。名のり給へ名のりたまへ」ときぬをとりて引けば顔をひき入れていよいよなく。「いであなさがなのこだまの鬼や。まさにかくれなむや」といひつゝ顔を見むとするに昔ありけむ目も鼻もなかりける。め鬼にやあらむとむくつけきをたのもしういかきさまを人に見せむと思ひてきぬをひき脱がせむとすればうつぶして聲たつばかりなく。「何にまれかく怪しき事なべて世にあらじ」とて見はてむと思ふに「雨いたく降りぬべし。かくておいたらば死にはて侍りぬべし。垣のもとにこそ出さめ」といふ。僧都「まことの人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る捨てむ事はいみじきことなり。池に泳ぐいを山に鳴く鹿をだに人に捕へられて死なむとするを見つゝ助けざらむはいとかなしかるべし。人の命久しかるまじき物なれど殘の命一二日をもしますはあるべからず。鬼にも神にも領せられ人に追はれ人にはかりごたれてもこれよござまの志にをすべきものにこそあめれ。佛の必ず救ひ給ふべききはなり。猶試に悉ばし湯をのませなどして助け試みむ。遂に死ぬべくばいふ限にあらず」とのたまひてこの大とこして抱き入れさせ給ふを弟子ども「たいたいしきわざかな。いたう煩ひ給ふ人の御あたり善からぬ物をとり入れてけがらひ必出て來なむとす」ともどくもあり。又「物の變化にもあれ目に見すみす生ける人をかゝる雨にうち失はせむはいみじき事なれば」など心々にいふ。下すなどはいとさわが

しく物をうたていひなすものなれば人さわがしからぬかくれの方になむ臥せたりける。御車寄せてあり給ふほど「痛う苦しがり給ふ」とてのゝしる。すこしまづまりて僧都「ありつる人はいかゞなりぬる」と問ひ給ふ。「なよなよとして物もいはず、いきもし侍らず。何か物にけどられにける人にこそ」といふを妹の尼君聞きて「何事ぞ」と問ふ。「まかまかの事をなむむそぢにあまる年珍らかなるものを見給へつる」とのたまふ。うち聞くまゝに、「おのが寺にて見し夢ありき。いかやうなる人ぞまづそのさま見む」と泣きてのたまふ。「唯この東の遣戸になむ侍る。はや御覽せよ」といへば急ぎ行きて見るに人もよりつかへ捨ておきたりける。いと若う美しげなる女の白き綾の衣一襲紅の袴ぞ著たる。かうはいみじうかうばしくてあてなるけはひ限なし。たゞ我が戀ひ悲むむすめの歸りおはしたるなめりとして、なくなく御達を出して抱き入れさす。いかなりつらむとも有様見ぬ人は恐しからで抱き入れつ。生けるやうにもあらでさすがに目をほのかに見あげたるに「物のたまへや。いかなる人かかくては物し給へる」といへど物覚えぬさまなり。湯とりて手づからすくひ入れなどするにたゞよわりに絶え入るやうなりければなかなかいみじきわざかなとて「この人なくなりぬべし。加持し給へ」と験ざの阿闍梨にいふ。「さればこそ怪しき御物あつかひなりとはいへ」と神などの御爲に經讀みつゝ祈る。僧都もさし覗きて「いかにぞ何のまわざとよく調じて問へ」とのたまへどいとよわげに消えもて行くやうなれば「得生き侍らじ。すゞろなるけがらひに籠りて煩ふべきことさすがにいとやんごとなき人にこそ侍るめれ。死にはつともたゞにやは捨て



させ給はむ。見苦しきわざかな」といひあへり。「あなかま人に聞かすな。煩しきこともぞある」など口がためつゝ、尼君は親の煩ひ給ふよりもこの人を生けはてし見まほしう惜みてうちつけにそひ居たり。知らぬ人なれど、みめのこよなうをかしければいたづらになざじと見るかぎりあつかひさわぎけり。さすがに時々目見あげなどしつゝ、涙の盡せず流るゝを「あな心うや。いみじう悲しと思ふ人のかはりに佛の導き給へると思ひ聞ゆるを、かひなくなり給はゞなかなかなる事をや思はむ。さるべき契にてこそかく見奉るらめ。猶いさゝか物のたまへ」といひつゞくれど辛うじて「いき出てたりとも怪しき不用の人なり。人に見せてよるこの河に落し入れ給ひてよ」と思のまたにいふ。「まれまれ物のたまふを嬉しと思ふに、あなみじや、いかなればかくのたまふぞ。いかにしてさる所にはおはしつるぞ」と問へども物もいはずなりぬ。身にもし疵などやあらむとて見れどこゝはと見ゆる所なく美しければあさましく悲しく誠に人の心惑はさむとて出て來たる假のものにやと疑ふ。二日ばかり籠り居て二人の人を祈り加持する聲絶えず、怪しきことを思ひさわぐ。そのわたりの下すなどの僧都に仕うまつりける、かくておはしますなりとて訪ひ出て來るも物語などしていふを聞けば「故八宮の御むすめ右大將殿の通ひ給ひしが殊に惱み給ふこともなくて俄にかくれ給へりとしてさわぎ侍る。その御葬送の雜事ども仕うまつり侍るとして昨日は得參り侍らざりし」といふ。さやうの人のたましひを鬼のとりもて來たるにやと思ふにも、かつ見るみるあるものとも覺えず危く恐しとおぼす。人々「よべ見やられし火はまかことごとしき氣色も見えざり

しをといふ。「殊更ことそぎていかめしうも侍らざりしといふ。けがらひたる人として立ちながら追ひ返しつ。大將殿は宮の御むすめもち給へりしはうせ給ひて年比になりぬるものを、誰をいふにかあらむ。姫宮を置き奉り給ひて世にことごとくおはせじ」などいふ。尼君宜しくなり給ひぬ。方もあきぬればかくうたてある所に久しうおはせむもびんなしとてかへる。「この人は猶いと弱げなり。道の程もいかゞものし給はむ。いと心苦しき事」といひあへり。車二つして老人乗りたまへるには仕うまつる尼ふたり、次のにはこの人をふせて傍に今一人乗りそひて道すがら行きもやらす車とめて湯參りなどし給ふ。比叡坂本に小野といふ所にぞ住み給ひける。そこに坐し着く程いと遠し。「なかやとりをぞ設くべかりける」などいひて夜更けておはし着きぬ。僧都は親をあつかひ娘の尼君はこの知らぬ人をはぐみみて皆抱きおろしつゝやすむ。老の病のいつともなきが苦しと思ひ給へしとほ道のなごりこそまばし煩ひ給ひけれ、やうやうよろしうなり給ひにければ僧都はのぼり給ひぬ。かゝる人なむ率て來たるなど法師のあたりには善からぬ事なれば見ざりし人にはまねばす、尼君も皆口がためさせつゝ、もし尋ね來る人もやあると思ふも靜心なし。いかでさる田舎人の住むあたりにかゝる人おちあふれけむ、物詣など志たりける人の心ちなど煩ひけむを繼母などやうの人のたばかりて置かせたるにやなとぞ思ひよりける。かはに流してよといひし一言より外に物も更にのたまはねば、いと覺束なく思ひていつしか人にもなして見むと思ふに、つくづくとして起きあがるよもなくいとあやしうのみ物し給へば遂に生くまじき人にやと思ひな

がら、うち捨てむもいとほしういみじ。夢がたりもま出で、始より祈らせし阿闍梨にも忍び  
やかにけしやくことせさせ給ふ。うちはへてあつかふ程に四五月も過ぎぬ。いと侘しうかひ  
なき事を思ひわびて僧都の御許に「猶おり給ひてこの人助け給へ。さすがに今日までもある  
は死ぬまじかりける人をつきしみりやうじたる物のさらぬにこそあめれ。あがほとけ京に  
出で給はゞこそはあらめ、こゝまではあへなむ」などいみじき事を書き續けて奉れ給へれば  
「いとあやしきことかな。かくまでもありける人の命をやがてうち捨て、ましかばさるべき  
契ありてこそは我しもみつけぬ。試に助けはてむかし。それにとまらずばがふ盡きにけり  
と思はむ」とており給ひけり。悦び拜みて月比の有様をかたる。「かく久しう煩ふ人はむつ  
かしき事おのづからあるべきを、聊衰へずいと清げに拗けたる所なくのみ物し給ふ。さてか  
ざりと見えながらもかくて生きたるわざなりけり」などおふなちふななくのたまへば、  
「見つけしより珍らかなる人の御有様かな。いでとてさし覗きて見給ひて、實にいときやう  
ざくなりける人の御ようめいかな。くどく報いにこそかゝるかたちにも生ひ出で給ひけめ。  
いかなるたがひめにてかくそこなはれ給ひけむ。もしさにやと聞き合せらるゝこともなし  
や」と問ひ給ふ。「更に聞ゆることもなし。何かは初瀬の観音の給へる人なり」とのまたへば  
「何かそれ縁にまたがひてこと導き給ふらめ。たねなき事はいかでか」などのたまひあやし  
がり給ひてすほふはじめたり。おほやけの召しにだに隨はず深く籠りたる山を出で給ひて  
すじろにかゝる人のためになむ行ひさわぎ給ふと物の聞えあらむいと聞きにくかるべしと

おぼし弟子どもいひて人に聞かせじとかくす。僧都「いであなかまだいとこたち、われ無  
慚の法師にて忌むことの中に破る戒は多からめど女のすぢにつけてまだそしり取らず過つ  
ことなし。齡六十にあまりて今更に人のもどきおはむはさるべきにこそはあらめ」とのたま  
へば、「善からぬ人のびんなくいひなし侍る時には佛法のきずとなり侍ることなり」と心よ  
からず思ひていふ。「このすほふの程にゐるし見えすは」といみじき事どもを誓ひ給ひて夜  
一夜加持し給へる曉に人にかりうつして「何やうの物かく人を惑はしたるぞ」と、有様ばか  
りいはせまほしうて、弟子の阿闍梨とりどりに加持し給ふ。月比はいさゝかも顯れざりつる  
ものゝけ調ぜられて「おのれはまゝまでまうて来てかく調ぜられ奉るべき身にもあらず。昔  
は行ひせし法師のいさゝかなる世に恨を留めて漂ひありさしほどに、よき女のあまた住み  
給ひし所にすみつきてかたへは失ひてしに、この人は心と世を恨み給ひて我いかで死なむ  
といふことをよるひるのたまひしにたよりを得ていと暗き夜一人ものし給ひしをとりてし  
なり。されど観音とごまかうごまにはぐゝみ給ひければこの僧都にまけ奉りぬ。今はまかり  
なむ」とのゝしる。「かくいふは何ぞ」と問へば、つきたる人物はかなきけにや、はかばかしく  
もいはず、さうじみの心地はさはやかに聊物覺えて見まはしたれば、一人見し人の顔はなく  
て皆老法師ゆがみ衰へたるものゝみ多かれば、知らぬ國に來にける心ちしていとかなし。あ  
りし世の事思ひ出づれど、住みけむ所誰といひし人とだにたしかにはかばかしうも覺えず。  
唯、我はかぎりとして身と投げし人ぞかし、いづくに來にけるにかとせめて思ひ出づればいと

いみじと物を思ひなげきて皆人の寝たりしに妻戸を放ちて出でたりしに風烈しう川波も荒  
う聞えしを一人物恐しかりしかばさしかたゆくさきも覺えずこの端に足をさしおろし  
ながら行くべき方も惑はれて、歸り入らむも中空にて心強くこの世にうせなむと思ひたち  
しををこがましてうて人に見つけられむよりは鬼も何もくひて失ひてよといひつゝつくづく  
と居たりしを、いと清げなる男のよりきて、いざたまへおのがもとといひて抱く心ちのせ  
しを、宮と聞えし人の志給ふと覺えしほどより心惑ひにけるなめり、知らぬ所にすゑおきて  
この男は消え失せぬと見しを、遂にかくほ意のごともせずなりぬると思ひつゝいみじう泣  
くと思ひしほどに、その後の事は絶えていかにもいかにもおぼえず、人のいふを聞けば多く  
の日比も經にけり、いかに憂きさまを知らぬ人にあつかはれ見えつらむとはづかしう遂に  
かくて生きかへりぬるかと思ふも口惜しければいみじおぼえてなかなかまづみ給へる日比  
はうつしごゝろもなきさまにて物いさゝか參ることもありつるを露ばかりの湯をだにまゐ  
らず。「いかなればかくたのもしげなくのみはおはするぞ。うちはへぬるみなどし給へるこ  
とはさめ給ひてさはやかに見え給へば嬉しう思ひ聞ゆるを」となくなきたゆむをりなくそ  
ひ居てあつかひ聞え給ふ。ある人々もあたらしき御さまかたちを見れば心を盡してぞ惜み  
まもりける。心には猶いかで死なむとぞ思ひわたり給へど、さばかりにていきとまりたる人  
の命なればいと老ふぬくてやうやう頭もたげ給へば物まゐりなどし給ふにぞなかなかも  
辨せもて行きいつしかと嬉しう思ひ聞ゆるに「尼になし給ひてよ。さてのみなむ生くやうも

あるべきことのたまへば、いとほしげなる御さまをいかでかさはなし奉らむとて唯いたゞきばかりをそぎ五戒ばかりをうけさせ奉る。心もとなければどもとよりをれをれしき人の心にて、えさかしく強ひてもものたまはず。僧都は「今はかばかりにていたはりやめ奉り給へ」といひ置きてのぼり給ひぬ。夢のやうなる人を見奉るかなと尼君は喜びてせめておこしすゑつゝみぐし手づからけづり給ふ。さばかりあさましう引きゆひてうちやりつれど、いたうも亂れず。ときはてたればつやつやとけうらなり。一年たらぬつくも髪多かる所にて目もあやにいみじき天人の天降れるを見たらむやうに思ふもあやふき心ちすれど「なぞかいと心うくかばかりいみじく思ひ聞ゆるに御心を隔て、は見え給ふ。「いづくに誰と聞えし人の、さる所にはいかで坐せしぞ」とせめて問をいと恥かしく思ひて「怪しかりし程に皆忘れたるにやあらむ、ありけむさまなども更に覺え侍らず。たゞほのかに思ひ出づる事とはたゞいかでこの世にあらじと思ひつゝ夕暮ことに端近くてながめし程に前近く大きな木のありし下より人の出てきて率て行く心地なむせし。それより外の事は我ながら誰とも得思ひ出でられ侍らず」といとらうたげにいひなして「世の中に猶ありけりといかて人に知られじ。聞きつくる人もあらばいとみじうこそ」とて泣い給ふ。あまり問ふを苦しとおぼしたれば得問はず。かくや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりも珍しき心ちするに、いかなる物のひまに消え失せむとすらむとまづ心なくぞおぼしける。このあるじもあてなる人なりけり。むすめの尼君は上達部の北の方にてありけるが、その人なくなり給ひて後娘唯一人をいみじくかしづ

きてよき君達を聲にして思ひあつかひけるを、その娘の君のなくなりなければ心うしいみ  
じと思ひ入りてかたちをもかへかゝる山里には住み始めたるなりけり。世と共に戀ひわた  
る人のかたみにも思ひよそへつべからむ人をだに見出で、しがなとつれづれと心ぼそさま  
ゝに思ひ歎きけるを、かく覺えぬ人のかたちけはひも勝りざまなるをえたればうつゝの事  
とも覺えず、あやしき心地まながらうれしと思ふ。ねびにたれどいと清げによしありて有様  
もあてはかなり。昔の山里よりは水のおともなごやかかなり。作りさまゆるある所の木立おも  
しろくせんざいなどもをかくゆるを盡したり。秋になりゆけば空の氣色も哀なるを、門田  
の稻刈るとして所につけたる物まねびしつゝ、若き女どもは歌謠ひ興じあへり。ひたひきなら  
す音もをかく見し東路などの事なども思ひ出でられて、かの夕霧の御息所の坐せし山里  
よりは今少し入りて山にかたかけたる家なれば、松蔭まげく風の音もいと心細きにつれづ  
れと行ひをのみまつゝいつとなくまめやかなり。尼君ぞ月などあかき夜はきんなど弾き給  
ふ。少將の尼君などいふ人は琵琶弾きなどまつゝ遊ぶ。「かゝるわざはま給ふや。つれづれな  
るに」などいふ。昔もあやしかりける身にて心のどかにさやうの事すべき程もなかりしか  
ば、聊をかしきさまならずもちひ出でにけるかなとかくさだ過ぎにける人の心をやるめる  
をりをりにつけては思ひ出づ。猶あさましくものはかなかりけるとわれながら口惜しけれ  
ば手ならひに、

「身をなげし涙の河のはやき瀬をまがらみかけてたれかとめし」。思の外に心うければ

行く末もうしろめたくうとましまで思ひやらる。月のあかき夜な夜なおい人どもはええに歌よみにしへ思ひ出でつゝさまざまの物語などするにいらふべき方もなければつくづくとうちながめて、

「われかくてうき世の中にめぐるとも誰かはしらむ月のみやこに」。今はかぎりと思ひし程は戀しき人多かりしかどこと人々はさしも思ひ出でられず。唯親いかに惑ひ給ひけむ、乳母よろづにいかで人なみなみになさむと思ひいられしをいかにあへなき心ちしけむ、いづこにあらむ我が世にあるものとはいかてか知らむ。同じ心なる人もなかりしまゝに萬隔つる事なく語らひ見なれたりし右近などもをりをりは思ひ出でらる。苦き人のかゝる山里に今はと思ひたへ籠るは難きわざなりければ唯いたく年経にける尼七八人を常の人にてはありける。それらがむすめうまごやうのものども京に宮仕するもことざまにてあるも時々ぞ來通ひける。かやうの人につけて見しわたりにいき通ひおのづから世にありけりと誰にも誰にも聞かれ奉らむこといみじく恥かしかるべし。いかなるさまにてさすらへけむなど思ひやり萬怪しかるべきを思へば、かゝる人々にかけても見えず。たゞ侍従もきとて尼君のわが人にゑたりける二人をのみぞこの御方にいひわけたりける。みめも心ざまも昔見しみやこ鳥に似たることなし。何事につけても世の中にあらぬ所はこれにやあらむとぞかつは思ひなされける。かくのみ人に知られじと忍び給へば誠に煩しかるべきゆゑある人にも物し給ふらむとて委しき事、ある人々にも知らせず。尼君の昔の婿の君今は中將にて物し給ひ



ける、弟の禪師の君僧都の御許にものし給ひける。山ごもりまたるをとぶらひにはらからの君だち常にのぼりけり。横川に通ふ道のためによりによせて中將こゝにおはしたり。さきうちおひてあてやかなる男の入り来るを見出して忍びやかにて坐せし人の御有様けはひぞさやかに思ひ出でらるゝ。これもいと心細き住ひのつれづれなれど住みつきたる人々は物清げにをかしうまなして、垣ほに植ゑたるなでしこもおもしらく女郎花き梗など咲きはじめたるに色々の狩衣姿のをのこども若きあまたして君も同じさう束にて南面に呼びすゑたればうちながめて居たり。年廿七八のほどにてねびとゝのひ心地なからぬさまもてつけたり。尼君さうじ口に几帳立て、對面し給ふ。まづうち泣きて「年比のつもりには過ぎにし方いとゞけどほくのみなむ侍るを山里のひかりに猶待ち聞えさすることのうち忘れずやみ侍らぬを、かつはあやしく思ひ給ふる」とのたまへば心の中あはれに「過ぎにし方の事ども思ひ給へられぬ折なきをあながちにすみはなれ顔なる御有様に怠りつゝなむ、山ごもりもうらやましう常に出てたち侍るを同じくばなど慕ひまどはさるゝ人々に妨げらるゝやうに侍りてなむ、今日は皆省きすて、物し侍りつる」とのたまふ。「山ごもりの御うらやみはなかなか今やうだちたる御物まねびになむ。昔をおぼし忘れぬ御心ばへもも世になびかせ給はざりけるとおろかならず思ひ給へらるる折多くなどいふ。人々にすゑばんなどやう物のくはせ君にもはすのみなどやうの物出したればなれにしあたりにてさやうの事もつゝみなき心地して村雨の降り出づるに留められて物語まめやかに志給ふ。いふかひなくなりにし人よりも

この君の御心ばへなどのいと思ふやうなりしを、よそのものに思ひなしたるなむいと悲しき。など忘れがたみをだに留め給はずなりにけむと戀ひ忍ぶ心なりければ、たまさかにかく物し給へるにつけても珍しく哀に覺ゆべかめるまゝに問はずがたりもあいでつべし。姫君はわれは我と思ひ出づる方多くてながめ出し給へるさまいとつづくし。白きひとへのいとなさけなくあざやぎたるに袴もひはだ色に習ひたるにや、光も見えず黒きを着せ奉りたればかゝる事ども見しには變りてあやしうもあるかなと思ひつゝ、こはごはしういらゝぎたるものども着給へるしもいとをかしき姿なり。御前なる人々「故姫君のおはしまいたる心ちのみし給ふに、中將殿をさへ見奉ればいとあはれにこそ。同じくば昔のさまにておはしまさせばや。いとよき御あはひならむかし」といひあへるを、あなしみじや、世にありていかにもいかにも人に見えむこそ。それにつけてぞ昔の事思ひ出でらるべき、さやうのすぢは思ひ絶えて忘れなむと思ふ。尼君入り給へるまにまらうと雨の氣色を見煩ひて少將といひし人の聲を聞き知りて呼びよせ給へり。「昔見し人々は皆こゝに物せらるらむやと思ひながらもかう参り來ることもかたくなりたるを、心あさきにや、誰もたれもみなし給ふらむ」などのたまふ。仕らまつりなれにし人にて哀なりし昔の事ども思ひ出でたる序に「かの廊のつま入つるほど風さわがしかりつるまぎれに簾垂のひまよりなべてのさまにはあるまじかりつる人のうちたれ髪の見えつるは世をそむき給へるあたり誰ぞとなむ見驚かれつる」とのたまふ。姫君の立ち出で給へりつるうしろでを見給へりけるなめりと思ひて、ましてこまかに

見せたらば心とまり給ひなむかし、昔の人はいとこよなく劣り給へりしをだにまだ忘れ難く、志給ふめるをと心ひとつに思ひて「過ぎにし御事を忘れ難く慰めかね給ふめりし程に、覚えぬ人を得奉り給ひて明暮の見物に思ひ聞え給ふめるをうち解け給へる御有様をいかで御覧じつらむ」といふ。かゝる事こそはありけれとをかしくて、何人ならむ、げにいとをかしかりつとほのかなりつるをなかなか思ひ出づ。こまかに問へどその儘にもいはず。「おのづから聞しめしてむとのみいへどうちつけに問ひ尋ねむもさま悪しき心地して「雨も止みぬ。日も暮れぬべし」といふにそゞのかかれて出て給ふ。前近き女郎花を折りて「なににほふらむ」と口ずさみて獨りごち立てり。「人の物いひをさすがにおぼし咎むること」など、こだいの人どもは物めでをしあへり。「いと清げにあらまほしくもねびまさり給ひにけるかな。同じくば昔のやうにても見奉らばやとて、藤中納言の御あたりには絶えず通ひ給ふやうなれど、心も留め給はず、親の殿がちになむ物し給ふところいふなれ」と尼君ものたまひて「心憂く物をのみおぼし隔てたるなむいとつらき。今は猶さるべきなめりとおぼしなしてはればれしくもてなし給へ。この五年六年時の間も忘れず、戀し悲しと思ひつる人のうへもかく見奉りて後よりはこよなく思ひ忘れにて侍る。思ひ聞え給ふべき人々世におはすとも今は世になきものにこそはやうやうおぼしなりぬらめ。萬の事さしあたりたるやうにはえしもあらぬわざになむ」といふにつけてもいと涙ぐみて「隔て聞ゆる心は侍らねど、怪しくていきかへりける程に萬の事夢のやうにたどられてあらぬ世に生れたらむ人はかゝる心地すらむと

覺え侍れば、今は知るべき世にあらむとも思ひ出でず、ひたみちにこそむつまじく思ひ聞ゆれ」とのたまふさまもげに何心なくうつくしくうち笑みてぞまもり居給へる。中將は山におはし着きて、僧都もめづらしがりて世の中の物語し給ふ。その夜はとまりて聲たふとき人々に經などよませて夜一夜あそび給ふ。禪師の君こまかなる物語などするついでに「小野に立ち寄りて物哀にもありしかな。世を捨てたれど猶さばかりの心ばせある人かたうこそ」などのたまふついでに「風の吹きあげたりつるひまより髪いと長くをかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらむ、立ちてあなたに入りつるうしろでなべての人とは見えざりつ。さやうの所によき女は置きたるまじきものにこそあめれ。明暮見るものは法師なり。おのづからめなれて覺ゆらむ。不便なることぞかし」とのたまふ。禪師の君「この春初瀬に詣て、怪しく見出でたる人となむ聞き侍りし」とて見ぬことなればこまかにはいはず。「哀なりけることかな、いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞさる所には隠れ居けむかし。昔物語の心地もするかな」とのたまふ。またの日歸り給ふにも「過ぎがたくなむ」とておはしたり。さるべき心づかひしたりければ昔思ひ出でたる御まかなひの少將の尼なども袖口さまことなれどもをかし。いといやめに尼君はものし給ふ。物語のついでに「忍びたるさまに物し給ふらむは誰にか」と問ひ給ふ。わづらはしけれどほのかにも見つけ給ひてけるをかくし顔ならむもあやしとて、「忘れ侘び侍りていと罪深うのみ覺え侍りつるなぐさめにこの月比見給ふる人になむ。いかなるにか、いと物思まげきさまにて世にありと人に知られむ事

を苦しげに思ひて物せらるれば、かゝる谷の底には誰かは尋ね聞えむと思ひつゝ、侍るを、いかでかは聞き顯させ給ひつらむ」といらふ。「うちつけ心ありて参り來むにだに山深き道のかごとは聞えつべし。ましておぼしいそふらむ方につけてはことごとくに隔て給ふまじきことにてこそは。いかなるすぢに世を恨み給ふ人にか、慰め聞えばや、などゆかしげにのたまふ。いて給ふとてたゞうがみに、

「あだしの、風になびくな女郎花われまめゆはむ道とほくとも」と書きて少將の尼して入れたり。尼君も見給ひて「この御かへり書かせ給へ。いと心にくきけつき給へる人なればうしろめたくもあらじ」とそゝのかせば「いとあやしき手をばいかでか」とて更に聞き給はねばはしたなきことなりとて「尼君聞えさせつるやうに世づかず人に似ぬ人にてなむ。

うつしうゑて思ひみだれぬをみなへしうき世をそむく草の庵に」とあり。こたみはさもありぬべしと思ひゆるして歸りぬ。文などわざとやらむもさすがにうひうひしうほのかに見しさまは忘れず物思ふらむすぢ何事と知らねどあはれなれば八月十日あまりのほどに小鷹狩のついでにおはしたり。例の尼呼び出て、一目見しより「まづ心なくて」などのたまへり。いらへ給ふべくもあらねば尼君「まつちの山のとなむ見給ふる」といひ出し給ふ。對面し給へるにも「心苦しきさまにて物し給ふと聞き侍りし人の御上なむのこりゆかしく侍る。何事も心になはぬ心地のみし侍れば山住もま侍らまほしき心ありながらゆるい給ふまじき人々に思ひさはりてなむ過し侍るに、世に心ちよげなる人のうへはかくくしたる人の心

からにやふさはしからずなむ。物思ふらむ人に思ふ事を聞えばや」など心留めたるさまに語らひ給ふ。「心ちよげならぬ御願は聞えかはし給はむにつきなからぬさまになむ見え侍れど。例の人にてはあらじといとうたゝあるまで世を恨み侍るめれば、のこり少なき齡の人だに今はとそむき侍る時はいと物心ほそく覺え侍りしものを、世をこめたる盛にては遂にかかゝとなむ見給へ侍る」とおやがりていふ。「入りてもなさけなし。猶聊にても聞え給へ。かゝる御住ひはずゝなることも哀知るこそ世の常のことなれなどこしらへていへど」人に物聞ゆらむ方も知らず。何事もいふかひなくのみこそ」といといつれなくて臥し給へり。「まらうどはいづらあなこゝろう、秋を契れるはずかし給ふにこそありけれ」など、うらみつゝ、

「松むしの聲をたづねてきつれどもまたをぎはらの露にまどひぬ」。「あないとほし、これをだに」などせむれば、さやうに世づいたらむこといひ出でむもいと心うく又いひそめてはかやうの折々にせめられむもむつかしう覺ゆればいらへをだに去給はねば、あまりいふかひなく思ひあへり。尼君はやうは今めきたる人にぞありけるなごりなるべし。

「秋の野の露わけきたるからごろもむぐらまげれる宿にかこつなとなむ煩はしがり聞え給ふめる」といふをうちにも猶かく心より外に世にありと知られはじむるをいと苦しとおぼす。心の内をば知らず男君をもあかず思ひ出でつゝ戀ひわたる人々なれば「かくはかなきついでにもうち語らひ聞え給はむに、心より外に世にうしろめたくは見え給はぬものをよのつねなるすぢはおぼしかけずともなさけなからぬほどに御いらへはかりは聞え給へか

し「なごひきうごかしつべくいふ。さすがにかゝる古代の心どもにはありつかず今めきつゝ、腰折歌このましげにわかやぐ氣色どもはいとうしろめたう覺ゆ。限りなく憂き身なりけりと見はてし命さへあさましう長くていかなるさまにさすらふべきならむ。ひたぶるになきものと人に見聞き捨てられてもやみなばやと思ひふし給へるに、中將は大方物思はしきとのあるにや、いといたうち歎きつゝ忍びやかに笛を吹きならして「鹿の鳴く音に」などひとりごつけはひまことに心地なくはあるまじ。「過ぎにしかたの思ひ出でらるゝにもなかなか心づくしに今はじめて哀とおぼすべき人はたかたげなれば見えぬ山路にもえ思ひなすまじうなむ」と怨めしげにて出でなむとするに、尼君「などあたら夜を御覽じさしつる」とてゐざり出でたまへり。「なにかをちなる里も試み侍りぬれば」などいひすさみていたうすきがましからむもさすがに便なし。いとほのかに見えしさまの目とまりしばかりにつれづれなる心なぐさめに思ひ出づるに、あまりもてはなれ奥深げなるけはひも所のさまにはあはずすさまじと思へば歸りなむとするを笛の音さへあかず、いと々おぼえて、

「ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかき宿にとまらぬと、なまかたはなることをかくなむ聞え給ふ」といふに心ときめきして、

「山のはに入るまで月をながめみむねやのいたまもゑるしありやと」などいふにこの大尼君笛の音をほのかに聞きつけたりければさすがにめで、出で來たり。此所彼所うちまはぶき淺ましきわなき聲にてなかなか昔の事などもかけていはず。誰とも思ひわかぬなる

べし。「いでそのきんのこと弾き給へ。横笛は月にはいとをかしきものぞかし。いづらくそたち琴とりて參れ」といふにそれなめりと推し量りに聞けど、いかなる所にかゝる人いかてこもり居たらむ。定めなき世ぞこれにつけて哀なる。ばんしきてうをいとをかしく吹きて「いづらさらば」とのたまふ。むすめの尼君これもよきほどのすきものにて「昔聞き侍りしよりもこよなく覺え侍るは山風をのみ聞きなれ侍りにける耳からにや」とて「いでやこれは僻事になりて侍らむ」といひながらひく。今やうはをさをさなべての人の今は好まずなり行くものなればなかなか珍しく哀に聞ゆ。松風もいとよくもてはやす。吹き合せたる笛の音に月もかよひてすめる心地すればいよいよめてられて宵惑もせず起き居たり。「おうなは昔はあづまごとをこそはこともなく弾き侍りしかど、今の世には變りにたるにやあらむ、この僧都の聞きにくし念佛より外のあだわざなせそとはしたなめられしかば、何かはとて弾き侍らぬなり。さるはいとよくなることも侍り」といひつゞけていと弾かまほしと思ひたればいと忽びやかにうち笑ひて「いとあやしき事をせいし聞え給ひける僧都かな。極樂といふなる所には菩薩なども皆かゝる事をして天人なども舞ひ遊ぶこそたふとかなれ。行ひまぎれ罪得べきことかは。今夜聞き侍らばや」とすかせばいとよしとおもひて「いでこのもりのくと、あづまとりて」といふにも志はぶきは絶えず。人々は見苦しと思へど僧都をさへうらめしげに憂へていひ聞かすればいとほしくてまかせたり。取りよせて只今の笛の音をも尋ねず唯おのが心をやりてあづまの調べをつきさはやかにまらふ。皆こと物は聲やめつるをこれをのみ



めでたると思ひてたけふぢ、ちりちりたりたななど搔き返しはやりかに弾きたることばどもわりなくふるめきたり。「いとをしう今の世に聞えぬ言葉こそは弾き給ひけれ」と譽むれば、みほのほのしく傍なる人に問ひ聞きて「今やうの若き人はかやうの事をぞ好まれざりける。此所に月比物し給ふなる姫君かたちはきよらに物し給ふめれど、もはらかゝるあだわざなどし給はず、うもれてなむ物し給ふめる」と、我かしこにうちあざわらひて語るを、尼君などはかたはらいたしとおぼす。これに事皆さめて歸り給ふほど山あろし吹きて聞え來る笛の音いとをかしう聞えて起きあかしたり。つとめて「よべはかたがた心亂れ侍りしかば急ぎまかて侍りし。

忘られぬむかしの事も笛竹のつらきふしにもねぞななけれける。猶少しおぼし知るばかり教へなさせ給へ。忍ばれぬべくはすすきすすきまでも何かは」とあるをいとと侘びたるは涙とどめがたげなる氣色にて書き給ふ。

「笛の音にむかしのことも忍ばれてかへりしほど袖ぞぬれにし。あやしう物思ひ知らぬにやとまで見え侍る有様はよい人の問はずがたりにも聞しめしけむかし」とあり。珍しからぬも見所なき心ちしてうちおかれけむかし。萩の葉に劣らぬ程々に音づれわたる、いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけりと見知りにしをりをりもやうやう思ひ出づるまゝに「猶かゝるすぢのこと人にも思ひはなたすべきさまに疾くなし給ひてよ」とて經習ひて讀み給ふ。心のうちにも念じ給へり。かくよろづにつけて世の中を思ひ捨

つれば若き人とてをかしやかなることも殊になく、むすぼゝれなる本性なめりと思ふ。かたちの見るかひあり美しきに萬の谷見ゆるして、明暮の見物にまたり。少しうち笑ひ給ふをりは珍しくめでたきもの思へり。九月になりてこの尼君初瀬にまうづ。年比いと心ぼそき身に戀しき人の上も思ひやまれざりしを、かくあらぬ人とも覺え給はぬなぐさめを得たれば、観音の御ゑるしうれしとてかへり申しだちて詣て給ふなりけり。「いざ給へ。人やは知らむとする。同じ佛なれどさやうの所に行ひたるなむゑるしありてよきためし多かる」とそゝのかしたつれど、昔母君乳母などかやうにいひ知らせつゝ度々詣てさせしをかひなきにこそあめれ、命さへ心になはずたぐひなきいみじきめを見るはと、いと心憂さうちにも知らぬ人に具してさる道のありきをまたらむよとそら恐しくおぼゆ。心ごはきさまにはいひもなさて心地のいと悪しうのみ侍ればさやうならむ道の程にも、いかいなどつゝまじうなむ」とのたまふ。物おぢはさも老給ふべき人ぞかしと思ひて強ひてもいざなはず。

「はかなくてよにふる川のうきせには尋ねもゆかじふたもとの杉」と手習にまじりたるを尼君見つけて「二本はまたもあひ聞えむと思ひ給ふ人あるべし」とたはふれごとをいひあてたるに胸つぶれておもて赤め給へるもいとあいきやうづき美しげなり。

「ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る」。異なることなきいらへを口疾くいふ。「忍びて」といへど皆人慕ひつゝこゝには人少なにておはせむを心苦しがりて心ばせある少將の尼左衛門とてあるおとなしき人、童ばかりぞ留めたりける。皆出て立

ちけるをながめ出で、あさましき事を思ひながらも今はいかゞせむとたのもし人に思ふ人一人ものし給はぬは心細くもあるかなと、いとつれづれなるに中將の御文あり。「御覽せよ」といへど聞きも入れ給はず。いとゞ人も見えすつれづれときしかた行くさきを思ひくし給ふ。「苦しきまでもながめ給ふかな。御恭うたせ給へ」といふ。「いと怪しうことはありしか」とはのたまへど、うたむとおぼしたれば盤とりにやりてわれはと思ひてせんせさせ奉りたるにいとよなければ又手なほしてうつ。「尼上疾う歸らせ給はなむ。この御恭見せ奉らむかの御恭ぞいと強かりし。僧都の君早うよりいみじう好ませ給ひてけしうはあらじとおぼしたりしを、いとさせいだいとこになりてさし出で、こそうたざらめ。御恭に負けじかし」と聞え給ひしに遂に僧都なむ二つ負けさせ給ひし。「させいが基にはまさらせ給ふべきなめり。あないみじ」と興ずれば、さだすぎたるあまびたひの見つかぬに物ごのみするに、むつかしき事も志そめてけるかなと思ひて「心地あし」とて臥し給ひぬ。時々「はればれしうもてなしておはしませ。あたら御身をいみじう沈みてもてなさせ給ふこそ口惜しく玉に瑕あらむ心地し侍れ」といふ。夕暮の風の音も哀なるに思ひ出づる事多くて、

「こゝろには秋の夕をわかねどもながむる袖につゆぞみだる」。月さし出で、をかしき程に晝文ありつる中將おはしたり。あなうたて、こはなぞと覺え給へば、奥深く入り給ふを、「さもあまりにもおはします物かな。御志のほども哀まさる折にこそ侍るめれ。ほのかにも聞え給はむことも聞かせ給へ。まみつかむ事のやうにおぼしたるこそいふに、いとう

しろめたくおぼゆ。おはせぬよしをいへど晝の使の一所など問ひ聞きたるべし。いとこと多く恨みて「御聲も聞き侍らじ。唯け近くて聞えむことを聞きにくしともおぼしことわれ」とよろづにいひ侘びて「いと心うく所につけてこそ物の哀もまされ。あまりかゝるは」などおぼめつゝ、

「山里のあきの夜ふかきあはれをも物思ふ人はおもひこそ知れ。おのづから御心も通ひぬべきを」などあれば、「尼君おはせてまぎらはし聞ゆべき人も侍らず。いと世づかぬやうならむ」とせむれば、

「うきものと思ひも知らず身をも物思ふ人とひとは知りけり」。わざといふともなきを聞きて傳へ聞ゆればいと哀と思ひて「猶唯聊いで給へ」と聞えうごかせど、この人々をわりなきまで恨み給ふ。「怪しきまでつれなくぞ見え給ふや」とて入りて見れば、例はかりそめにもさし覗き給はぬ老人の御方に入り給ひにけり。あさましう思ひて「かくなむ」と聞ゆれば「かゝる所にながめ給ふらむ心の中の哀に大かたの有様なども情なかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりもけにもてなし給ふめるこそ、それも物ごりし給へるが猶いかなるさまに世を恨みていつまでおはすべき人ぞ」など有様問ひていとゆかしげにのみおぼいたれど、「こまかなる事はいかでかは言ひ聞かせむ。唯知り聞え給ふべき人の年比はうとうとしきやうにて過ぐし給ひしを、初瀬に詣うであひ給ひて尋ね聞え給へる」とぞいふ。姫君はいとむつかしとのみ聞く。おい人のあたりらうつぶしふしていも寝られず、よひまでひは

えもいはずちどろちどろしきいびきまつゝ、前にもうちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびきあはせたり。いとちそろしう今宵この人々にやくはれなむと思ふも惜しからぬ身なれど、例の心よわさは一つ橋危がりて歸り來たりけむものやうに倅しく覺ゆ。こもき共におておはしつれど色めきてこの珍しき男のえんだち居たる方に歸りにけり。今やくるくると侍ち居給へれどいとはかなきたのもし人なりや。中將いひ煩ひて歸りにければ、いと情なくうもれてもちはしますすかな。あたら御かたちを「など譏りて皆一所にねぬ。夜中ばかりにやなりぬらむと思ふ程に尼君まはぶきおぼゝれて起きにたり。火影に頭つきはいとまろきに黒きものをかつきてこの君の臥し給へるを怪しがりて、黽とかいふなるものがさるわざする額に手をあて、「あやし、これは誰ぞ」とまふねげなる聲にて見おこせたる、更に只今くひてむとするぞと覺ゆる。鬼のとりもて來けむほどは物覺えざりければなかなか心やすし。いかさまにせむと覺ゆるむつかしさにもいみじきさまにて生き返り人になりて又ありしいろいろのうき事を思ひ亂れ、むつかしとも恐しとも物を思ふよ、死なましかばこれよりも恐しげなるものゝ中にこそはあらましと思ひやらる。昔よりの事をまどろまれぬまゝに常よりも思ひつゞくるにいと心うく、親と聞えけむ人の御かたちも見奉らず、遙なるあづまをかへるがへる年月をゆきてたまさかにたづねよりて嬉したのもしと思ひ聞えしはらからの御あたりも思はずにてたゞすぎ、さる方に思ひ定め給ひし人につけてやうやう身の憂さをも慰めつべきさはめに、あさましうもてそこなひたる身を思ひもて行けば、宮を少

しも哀と思ひ聞えけむ心ぞいとけしからぬ、唯この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば小島の色をためしに契り給ひしを、などてをかしと思ひ聞えけむと、こよなくあきになる心ちす、初めよりうすきながらも長閑に物し給ひし人はこのをりかのをりなど思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられ奉らむ恥しさは人よりまさりぬべし、さすがにこの世にはありし御様をよそながらだに何時かは見むとするとうち思ふ。なほわろの心やかくだに思はじなど心ひとつをかへさふ。辛うじて鳥のなくを聞きていとうれし、母の御聲を聞きたらむはましていかならむと思ひ明して心ちもいとあし。供にて渡るべき人も頓に來ねば、猶臥し給へるにいびきの人はいとく起きて、かゆなどむつかしき事どもをもてはやして御前に「とく聞し召せ」など寄り來ていへど、まかなひもいと心づきなくうたて見知らぬ心ちして惱しくなどことなしひ給ふを強ひていふもいとこちなし。げすげすしき法師ばらなど數多來て「僧都今日ありさせ給ふべし。など俄には」と問ふなれば、「一品宮の御物のけに惱ませ給ひける。山の座主御修法仕らせ給へど猶僧都參らせ給はではまるしなして昨日二度なむ召し侍りし。左大臣殿の四位少將、よべ夜更けてなむ上り坐しまして後の宮の御文など侍りければありさせ給ふなり」などいと花やかにいひなす「恥しくとも逢ひて尼になし給ひてよといはむ、さかしら人少くてよき折にこそと思へば起きて、心地のいと悪しうのみ侍るを、僧都のありさせ給へらむに忌む事うけ侍らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞え給へ」と語り給へばほけほけしううちうなづく。例の方に坐して髪は尼君のみ

けづり給ふを、ことびとに手觸れさせむうたて覺ゆるに、手づからはたえせぬことなれば  
唯少し解きくだして、親に今一度かうながらのさまを見えずなりなむこそ人やりならずい  
と悲しけれ。いたう煩ひしけにや、髪も少し落ちほそりにたる心ちすれど何ばかりも衰へ  
ず、いと多くて六尺ばかりなる末などぞいと美しかりけるすぢなどもいとこまかに美しげ  
なり。「かゝれとてしも」とひとりごち居給へり。暮方に僧都ものし給へり。南面拂ひまつら  
ひてまるなる頭つきども行きちがひ騒ぎたるも例に變りていと恐しき心ちす。「母の御方に  
參り給ひていかにぞ月比は」などいふ。「東の御方は物詣し給ひにきとか、このおはせし人は  
猶物し給ふや」など問ひ給ふ。「まかこゝに泊りてなむ、心地悪しところ物し給ひて忌む事う  
け奉らむとのたまひつる」と語る。立ちてこなたにいまして「爰にやおはします」とて几帳の  
もとにつゐ居給へばつゝましけれどぬざりよりていらへま給ふ。「不意にて見奉りそめてし  
もさるべき昔の契りありけるにこそと思ひ給へて御いのりなどねんごろに仕うまつりしを  
法師はその事となくて御文聞え承らむも便なければ、じねんになむおろかなるやうになり  
侍りぬる。いとあやしきさまに世を背き給へる人の御あたりにかでおはしますらむ」との  
たまふ。「世の中に侍らじと思ひ立ち侍りし身のいと怪しくて今まで侍るを、心憂しと思ひ  
侍るものから萬に物せさせ給ひける御心ばへをなむ、いふかひなき心ちにも思ひ給へ知ら  
るゝを、猶世づかずのみ遂に得とまるましく思ひ給へらるゝを、尼になさせ給ひてよ、世の  
中に侍るとも例の人にて長らふべくも侍らぬ身に」など聞え給ふ。「まだいと行く先遠げな

る御程にいかてかはひたみちに志かはおぼしたむ、かへりて罪ある事なり。思ひたちて心を起し給ふ程は強くおぼせど、年月経れば女の御身といふものいとたいだいしきものになどのためへば「幼く侍りし程より物をのみ思ふべき有様にて、親なども尼になしてや見ましなどなむ思ひのためひし。まして少し物思ひ知りて後は例の人さまならで後の世をだにと思ふ心深く侍りしを、なくなるべき程のやうやう近くなり侍るにや、心ちのいと弱くのみなり侍るを猶いかで」とてうち泣きつゝのためふ。怪しくかゝるかたち有様をなどて身を厭はしく思ひはじめ給ひけむ、ものゝけもさこそいふなりしかと思ひあはするに、さるやうこそはあらめ、今まで生きたるべき人かは、悪しきものゝ見つけをめたるにいと恐しく危き事なりとおぼして「とまれかくまれおぼし立ちてのためふを三寶のいとかしこくほめ給ふことなり。法師にて聞え返すべき事にあらず。御忌むことはいと易く授け奉るべきを急なることにて罷出たれば今宵はかの宮に参るべく侍り。明日よりや御修法はじまるべく侍らむ。七日はてゝまかてむに仕うまつらむ」とのためへば、かの尼君おはしなば必ずいひ妨げてむといと口惜しくて、みだり心地あしかりし程にまたるやうにて「いと苦しく侍れば重くならば忌むことかひなくや侍らむ。猶今日は嬉しき折とこそ思ひ侍れ」とていみじく泣き給へば聖心にいとほしく思ひて「夜や更け侍りぬらむ。山よりあり侍ると昔はととも覺え給はざりしを、年の老ゆるまゝには堪へ難く侍りければうち休みて内には参らむと思ひ侍るを、志かおぼし急ぐことなれば今日仕うまつりてむ」とのためふにいと嬉しくなりぬ。鉄とりて櫛の



箱の蓋さし出でたれば、「いづら大徳達こゝに」と呼ぶ。初め見つけ奉りし二人ながら共にありければ呼び入れて「御髪おろし奉れ」といふ。げにいみじかりし人の御有様なればうつし人にては世におはせむもうたてこそあらめとこの阿闍梨もことわりに思ふに、几帳の帷子のほころびより御髪をかきいだし給へるがいとあたらしくをかしげなるになむ、まばしは鉄をもてやすらひける。かゝに程少將の尼はせうとの阿闍梨の來たるにあひてしもに居たり、左衛門はこのわたくしの知りたる人にあへまらふとて、かゝる所につけては皆とりどりに心よせの人々珍しくて出で來たるに、はかなき事まけるみいれなどしける程に、こもき一人してかゝる事なむと少將の尼に告げたりければ惑ひて來て見るに、我が御上の衣袈裟などをことさらばかりとて着せ奉りて「親の御方を拜み奉り給へ」といふに、いづかたとも知らぬほどなむ得忍びあへ給はで泣き給ひにける。「あなあさましや。などかくあうなき事はせさせ給ふ。上かへりおはしてはいかなる事をのたまはせむ」といへど、かばかりにまそめつるをいひ亂るともものしと思ひて僧都諫め給へばよりもえ妨げず。流轉三界中などいふにもたちはてし物をと思ひ出づるもさすがなりけり。御髪もそぎ煩ひて「のどやかに尼君だちしてなほさせ給へ」といふ。ひたひは僧都ぞそぎ給ふ。「かゝる御かたちやつし給ひてくひ給ふな」など尊き事ども説き聞かせ給ふ。とみにせさせ給ふべくもあらず、皆いひ知らせ給へることを嬉しくもまつるかなとこれのみぞ生ける佛はしるしありて覺え給ひける。皆人々いでまづまりぬ。夜の風の音にこの人々「心ほそき御住ひもまばしのことぞ、今いと

めでたくなり給ひなむと頼み聞えつる御身をかく志なさせ給ひて、残り多かる御世の末を  
いかにせさせ給はむとするぞ、老い衰へたる人だに今はかぎりと思ひはてられて、いと悲し  
きわざに侍る」といひ知らすれど猶只今は心やすくうれし、世に經べきものとは思ひかけず  
なりぬるこそはいとめでたきことなれと胸のあきたる心地ぞ志給ひける。つとめてはさす  
がに人の許さぬことなれば變りたらむさま見えむもいと恥しく、髪の手その俄におほどれ  
たるやうに志どけなくさへそがれたるを、むつかしき事どもいはてつくるはむ人もがたと、  
何事につけてもつゝましくてくらうしなしておはす。思ふことを人にいひつゝけむ言の葉  
はもとよりだにはかばかしからぬ身を、まいて懐かしくことはるべき人さへなければ唯硯  
に向ひて思ひあるをりには手習をのみ、たけきことゝは書きつけ給ふ。

「なきものに身をも人も思ひつゝ捨てゝし世をぞさらすてつる。今はかくて限りつ  
るぞかし」と書きても猶みづからはいとあはれと見給ふ。

「かぎりぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな」。同じすぢのことを  
とかく書きすさび居給へるに中將の御文あり。物騒しくあきれたる心地しあへる程にてか  
ゝることなどいひてけり。いとあへなしと思ひてかゝる心深くありける人なりければはか  
なきいらへをも志をめぐじと思ひ離るゝなりけり。さてもあへなきわざかな、いとをかしく見  
えし髪をほどをたしかに見せよと一夜も語らひしかば、さるべからむ折にといひしものを  
と、いと口惜しくて立ちかへり聞えむかたなきは、

「岸遠くこぎはなるらむあま船に乗りおくれじといとがるゝかな」。例ならずとりて見給ふ。ものゝ哀なるをりに今はと思ふも哀なるものからいかゞおぼさるらむ。いとほかなき物のはしに、

「心こそうき世の岸をはなるれど行くへも知らぬあまのうき木を」例の手習に志給へるをつゝみて奉る。「書さうつしてだにこそ」とのたまへど「なかなか書き損ひ侍りなむ」とてやりつ。珍しきにもいふ方なく悲しくなむ覺えける。物語の人歸り給ひて思ひ騒ぎ給ふ事かぎりなし。「かゝる身にては進め聞えむこそはと思ひなし侍れど、のこり多かる御身をいかで經給はむとすらむ。おのれは世に侍らむこと今日明日ともおろし難きにかて後ろ安く見おき奉らむとよろづに思ひ給へてこそ佛にも祈り聞えつれ」とふしまろびつゝ、いとみじげに思ひ給へるにもまことの親のやがてからもなさものと思ひ惑ひ給ひけむ程推し量るぞ先いと悲しかりける。例のいらへもせて背き居給へるさまいと若く美しげなればいと物はかなくぞおはしける。つらき御心なれどなくなく御どの事など急ぎ給ふ。鈍色は手なれにしとなれば小袷袈裟などしたり。ある人々もかゝる色を縫ひ着せ奉るにつけてもいと覺えず。嬉しき山里の光と明暮見奉りつるものを、口惜しきわざかなとあたらしがりつゝ、僧都を怨みそしりけり。一品宮の御惱げにかの弟子のいひしもあるく、いちぢるき事どもありて怠らせ給ひにければ、いよいよいと尊きものにいひのゝしる。名残もおろしとて御修法延べさせ給へば、とみにもえ歸り入らで侍ひ給ふに、雨などふりておめやかなる夜召してよむに侍

はせ給ふ。日比いたく侍ひごうじたる人は皆休みなどして、御前に人すくなにて近く起きたる人少きをりに、同じ御帳におはしまして「昔よりたのませ給ふ中にもこの度なむいよいよ後の世もかくことはとたのもしき事まさりぬる」などのたまはず。「世の中に久しく侍るまじきさまに佛なども教へ給へる事ども侍るうちに、今年來年過ぐし難きやうになむ侍りければ、佛をまぎれなく念じつとめ侍らむとて深く籠り侍るを、かゝる仰言にてまかり出て侍りにし」など啓し給ふ。御ものゝけのまうねきこと様々になのが恐しきことなどのたまふ序に「いとあやしうけうのことをなむ見給へし。この三月に年老いて侍る母の願ありて初瀬に詣て侍りし、かへさの中やどりに宇治の院といひ侍る所に罷り宿りしを、かくのごと人すまで年經ぬる大なる所は善からぬ物必ず通ひすみて、重き病者のため悪しき事どもやと思ひ給ひしもまるく」とてかの見つけたりし事どもを語り聞え給ふ。「げにいと珍らかなるとかな」とて近く侍ふ人々皆寝入りたるを恐しくおぼされて驚かさ給ふ。大將の語らひ給ふ宰相の君しもこの事を聞きけり。驚かさ給ふ人々は何とも聞かず、僧都おちさせ給ふ御氣色を心もなき事啓してけりと思ひて委しくその程の事をばいひさしつ。「その女人この度罷り出で侍りつる便に小野に侍る尼どもあひとぶらひ侍らむとてまかりよりしに泣く泣くすけの志深きよしねんごろに語らひ侍りしかば頭おろし侍りにき。某が妹故衛門のかみのめの侍りし尼なむうせにし女子のかはりにと思ひ喜び侍りて随分にいたはりかじづき侍りけるを、かくなりたればうらみ侍るなり。げにぞかたちはいとうるはしくけうらにて行ひ

やつれむもいとほしげになむ侍りし。何人にか侍りけむ」と物よくいふ僧都にて語りつゞけ申し給へば「いかでさる所によき人をしもとりもていきけむ、さりとて今は知られぬらむ」などこの宰相の君を問ふ。「知らず。さもやと語らひ侍らむ。誠にやんごとなきか人ならば何かくれも侍らじをや。田舎人のむすめもさる様したることは侍らめ。龍の中より佛生れ給はずはこそ侍らめ。たゞ人にては罪輕きさまの人になむ侍りける」など聞え給ふ。その比かのわたりに消え失せにけむ人をおぼし出づ。このお前なる人も姉君のつたへに怪しくてうせたる人とは聞き置きたれば、それにやあらむとは思ひけれど定めなきことなり。僧都もかゝる人世にあるものとも知られじとよくもあらぬかたきだちたる人もあるやうにおもむけてかくし忍び侍るを、事のさまの怪しければいし侍るなりと、なまがくす氣色なれば人にも語らず「宮はそれにもこそあれ。大將に聞かせばや」とこの人にどのたまはすれど、いづかたにも隠すべき事を定めて、さならむとも知らずながら恥しげなる人にうち出でのたまはせむもつゝましくおぼしてやみにけり。姫宮をこたりはてさせ給ひて僧都ものほりぬ。かしこに寄り給へればいみじく恨みて「なかなかかゝる御有様にて罪も得ぬべきとをのたまひもあはせずなりにけることをなむ、いと怪しき」などのたまへどかひなし。「今は唯御行ひをま給へ、老いたる若き定めなき世なり。はかなきものにおぼしとりたるもことわりなる御身をまや」とのたまふにもいと恥しくなむ覺えける。「御法服新しく給へ」とて綾、羅、衣などいふ物奉りおき給ふ。「某が侍らむかぎりには仕うまつりなむ。なにかおぼし煩ふべき。常なき世に

生ひ出て、世間の榮花に願ひまつはるゝかぎりなむ所せく捨てがたく我れも人もおぼすべ  
かめることなめる。かゝる林の中に行ひ勤め給はむ身は何事かはうらめしくも恥しくもお  
ぼすべき。このあらむ命は葉の薄きが如し」といひ知らせて「松門に曉いたりて月徘徊す」と  
法師なれどいとよしよししう恥しげなるさまにてのたまふ事どもを、思ふやうにもいひ聞  
かせ給ふかなと聞き居たり。今日はひねもすに吹く風の音もいと心ぼそきにおはしたる人  
も「あはれ山伏はかゝる日にぞねはなかるなるかし」といふを聞きて、我れも今は山伏ぞか  
し、ことわりにとまらぬ涙なりけりと思ひつゝ、端の方に立ちいて見れば、遙なる軒端より  
狩衣姿いろいろにたちまじりて見ゆ。山へのぼる人なりとてもこなたの道には通ふ人もい  
とたまさかなり。黒谷とかいふ方よりありく法師の跡のみまされは見ゆるを、例の姿見つ  
けたるはあいなく珍しきに、この恨み侘びし中將なりけり。かひなきこともいはむとて物し  
たりけるを、紅葉のいとおもしろく外の紅にそめましたるいろいくなれば入り来るよりぞ  
物哀なりける。こゝにいと心ちよげなる人を見つけたらば、怪しくぞ覺ゆべきなど思ひて  
「暇ありて徒然なる心ち志侍るに、紅葉もいかにと思ひ給ひてなむ。猶立ち返り旅寝も志つ  
べき木のもとにこそ」とて見出し給へり。尼君例の涙もろにて、

「木がらしの吹きにし山のふもとにはたち隠るべき影だにぞなき」とのたまへば、

「まつ人もあらじと思ふ山里のこずゑを見つゝなほぞすさうき」。いふかひなき人の御こ  
とを猶盡せずのたまひて、「さまかはり給へらむを聊見せ給へよ」と少將の尼にのたまふ。

「それをだに契りし志るしにせよ」とせめ給へば、入りて見るに、殊更人にも見せまほしきさましてどおはする。薄鈍色の綾、中にはくわんざうなどすみたる色を着ていとさゝやかに容体をかしく今めきたるかたち、髪は五重の扇を廣げたるやうにこちたきすゑつきなり。こまかに美しきおもやうのけさうをいみじく志たらむやうにあかく匂ひたり。行ひなどを志給ふも猶珠數は近き几帳にうち懸けて經に心を入れて讀み給へるさま繪にも書かまほし。うち見るごとに涙の留め難き心ちするを、まいて心かけ給はむ男はいかに見奉り給はむと思ひて、さるべき折にやありけむさうじのかけがねのもとにあきたる穴を教へてまぎるべき几帳など引きやりたり。いとかくは思はずこそありし、いみじく思ふさまなりける人と、わが志たらむあやまちのやうに惜しく悔しく悲しければつゝみもあへず、物ぐるはしきけほひも聞えぬべければ、のきぬ。かばかりのさましたる人を失ひて尋ねぬ人ありけむや、又その人かの人のむすめなむ行方も志らずかくれにたる、もしは物ゑんじ志て世をそむきにけるなど、おのづからかくれなかるべきをなど怪しく返すがへす思ふ、尼なりともかゝるさま志たらむ人はうたても覺えじなど、なかなか見所まさりて心苦しかるべきを志のびたるさまに、猶かたらひとりてむと思へば、まめやかにかたらふ。「世の常のさまにはおぼしはかかる事もありけむを、かゝるさまになり給ひにたるなむ心安く聞えつべくなむ侍る。さやうに教へ聞えたまへ。來し方忘れがたくてかやうに參りくるに又ひとつ志をそへてこそなどのたまふ」と行く末心ほそくうしろめたき有様に侍るめるにまめやかなるさまにおほ

し忘れず問はせたまはむ、いとうれしくこそ思ひたまへおかめ。侍らざらむ後なむ、哀に思ひ給へらるべき」とてなき給ふに、この尼君もはなれぬ人なるべし。誰ならむと心得がたし。「行く末の御うしろみは命もまじ難くたのもしげなき身なれど、さきこえをめ侍りなばさらにかはり侍らじ。尋ね聞え給ふべき人はまことにものし給はぬがさやうのこのおぼつかなきになむ、はゞかるべきことには侍らねど猶へだてある心ちし侍るべき」とのたまへば、「人に知らるべきさまにて世に經給はゞ、さもや尋ね出づる人も侍らむ。今はかゝる方に思ひ限りつる有様になむ、心のおもむけもさのみ見え侍るを」など語らひ給ふ。こなたにもせうそこし給へり。

「大かたの世をそむきける君なれどいとふによせて身こそつらけれ」。ねんごろに深く聞え給ふことなどいひ傳ふ。「はらからとおぼしなせ、はかなき世の物語なども聞えて慰めむ」などいひつゞく。「心深からむ御物語など聞きわくべくもあらぬこそ口惜しけれ」といらへて、このいとふにつけたるいらへは志給はず、思ひよらずあさましき事もありし身なればいととまし。すべて朽木などのやうにて人に見捨てられて止みなむともてなし給ふ。されば月比たゆみなくむすぼゝれ、物をのみおぼしたりしもこの本意のこと志給ひて後より、少しはればれしくなりて、尼君とはかなくたはぶれも志かはし、恭うちなどしてぞ明し暮し給ふ。行ひもいとよく志て法華經はさらなりこと法文などもいと多く讀み給ふ。雪深く降り積み人め絶えたるころぞげに思ひやる方なかりける。年もかへりぬ、春の志るしも見えず、氷



りわたれる水の音せぬさへ心ぼそくて「君にぞまどふ」とのたまひし人は心憂しと思ひはてにたれど、猶そのをりなどのことは忘れず、

「かさくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も戀しき」など例のなぐさめの手習を行ひのひまには志給ふ。われ世になくて年隔たりぬるを思ひ出づる人もあらむかしなどと思ひ出づる時も多かり。若菜をちろそかなるこに入れて人のもて來たりけるを、尼君見て、

「山里の雪まの若菜つみはやし猶おひさきのたのまるゝかな」とてこなたに奉り給へりければ、

「雪ふかき野邊のわかかなも今よりは君がためにぞ年もつむべき」とあるをさぞおぼすらむと哀なるにも見るかひあるべき御さまと思はましかばとまめやかにうちない給ふ。ねやのつま近き紅梅の色も香も變らぬを春やむかしのとこと花よりもこれに心よせのあるは、あかさりにほひのまみにけるにや、ごやにあか奉らせ給ふ。下臈の尼の少し若きがある召し出で、花折らすればかごとがましくちるにいとゞにほひくれば、

「袖ふれし人こそ見えね花のかのそれかとにほふ春のあけぼの」。大尼君の孫の紀守なりけるがこの比上りて來たり。三十ばかりにてかたち清げに誇りかなるさましたり。「何事かこそおとし」など問ふに、ぼけぼけしきさまなれば、こなたに來て「いとことよくこそひがみ給ひにけれ、哀にも侍るかな。のこりなき御さまを見奉ることかたくて遠き程に年月を過

し侍るよ。親たち物し給はて後は一所をこそ御かはりに思ひ聞え侍りつれ、常陸の北の方は音づれ聞え給ふや」といふは妹なるべし「年月にそへてはつれづれに哀なる事のみまさりてなむ、常陸はいと久しく音づれ聞え給はざめり、えまちつけ給ふまじきさまになむ見え給ふ」との給ふに、我が親の名とあいなく耳とまれるに、またいふやう「まかりのぼりて日比になり侍りぬるに、公事のいとまげくむつかしくのみ侍るにかゝづらひてなむ、昨日も侍はむと思ひ給へしを、右大將殿の宇治におはせし御供に仕うまつりて故入宮の住み給ひし所におはして日くらし給ひし。故宮の御むすめに通ひ給ひしをまづ一所は一とせうせ給ひき。その御弟また忍びてすゑ奉り給へりけるを、去年の春又うせ給ひにければ、その御はてのわざせさせ給はむ事、かの寺の律師になむさるべきことのためはせて、某もかの女のさうぞくひとくだり調じ侍るべきをせさせ給ひてむや。織らすべきものは急ぎせさせ侍りなむ」といふを聞くにいかでか哀ならざらむ。人やあやしと見むとつゝましうて奥に向ひて居給へり。尼君「かのひじりのみこの御むすめは、二人と聞きしを、兵部卿の宮の北の方はいづれぞ」とのたまへば、「この大將殿の御後のはおとり腹なるべし。ことごとしくももてなし給はざりけるをいみじく悲ひ給ふなり。はじめのはた、いみじかりき、ほどほどすけもま給ひつべかりきかし」などかたる。かのわたり親しき人なりけると見るにもさすがあそろし。「あやしくやうのものとかしこにてしもうせ給ひけること昨日もいとふびんに侍りしかな。川近き所にて水をのぞき給ひていみじく泣き給ひき。上にのぼり給ひて柱に書きつけ給ひし、

見し人はかけもとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとせきあへず、となむ侍りし。殊にあ  
らはしてのたまふ事は少けれど唯氣色にはいと哀なる御さまになむ見え給ひし。女はいみ  
じくめで奉りぬべくなむ、若く侍りし時より優におはしますと見奉りまみにしかば、世の中  
に一の所も何とも思ひ侍らず、唯この殿を頼み聞えてなむ過ぐし侍りぬる」と語るに、殊に  
深き心もなげなるかやうの人だに御有様は見知りけりと思ふ。尼君「ひかる君と聞えけむ故  
院の御有様にはえならび給はじと覺ゆるを、只今の世にこの御ぞうぞめてられ給ふなる。左  
のおほいどの」とのたまへば「それはかたちもいとうるはしう清らに老うとくにてきはこと  
なるさまぞ給へる。兵部卿の宮ぞいといみじくおはするや、女にてなれ仕うまつらばやと  
なむ覺え侍る」など教へたらむやうにいひつゞく。哀にもをかくも聞くに身の上もこの世  
の事とも覺えず、滯ることなく語り置きて出てぬ。忘れ給はぬこそはと哀に思ふにもいと  
母君の御心の中推し量らるれど、なかなかいふかひなきさまを見え聞え奉らむは、猶いとつ  
ましくぞありける。かの人のいひつけし事などを染め急ぐを見るにつけても、怪しく珍ら  
かなる心ちすれどかけてもいひ出でられず、裁ち縫ひなどするを「これ御覽し入れよ、物を  
いと美しくひねらせ給へば」とて、小褂のひとへ奉るを、うたて覺ゆれば心地悪しとて手も  
觸れず臥し給へり。尼君急ぐことをうち捨て、いかゞおぼさるゝなど思ひ亂れ給ふ。紅に櫻  
の織物の袷かさねて「御前にはかゝるをこそ奉らすべけれ、あさましき墨染なりや」といふ  
人あり。

「あま衣かはれる身にやありし世のかたみの袖をかけて老のばむ」と書きて、いとほしくなくもなりけむ後に物のかくれなき世なりければ、聞き合せなどしてうとましまでかくしけるとや思はむなどさまさま思ひつゝ、「過ぎにし方の事は絶えて忘れ侍りにしを、かやうなる事をおぼし急ぐにつけてこそほのかに哀なれ」とおほどかにのたまふ。「さりともおぼし出づる事は多からむを、盡きせず隔て給ふこそ心うけれ。こゝにはかゝる世の常の色あひなど久しく忘れにければ、なほなほしく侍るにつけても昔の人あらましかばなど思ひ出て侍り。老かあつかひ聞え給ひけむ人世におはすらむや。かくなくなして見侍るだに猶いづこにかあらむ、そことだに尋ね聞かまほしく覺え侍るを、行くへ知らず思ひ聞え給ふ人々侍らむかし」とのたまへば「見し程までは一人はものし給ひき。この月比うせや老給ひぬらむ」とて、涙の墮つるをまぎらはして「なかなか思ひ出づるにつけてうたて侍ればこそ聞え出てね。へだては何事にか残し侍らむ」と、ことずくなにのたまひなしつ。大將はこのはてのわざなどせさせ給ひてはかなくとも止みぬるかなと哀におぼす。かの常陸の子どもは、かうぶりしたりしは藏人になし、我が御つかさのどうになしなどいたはり給ひけり。童なるが中に清げなるをば近くつかひならさむとおぼしたりける。雨など降りて老めやかなる夜、后の宮に参り給へり。お前のどやかなる日にて御物語など聞え給ふついでに「あやしき山里に年比まかり通ひ見給へしを、人のそしり侍りしもさるべきにこそはあらめ、誰も心のよるかたのとはさなむあると思ひ給へなしつゝ、猶時々見給へしを、所のさがにやと心愛く思ひ給へなり

にし後は、道も逃けき心ちし侍りて久しくものし侍らぬを、さいつころ物のたよりにまかりてはかなき世のありさまとり重ねて思ひ給へしに殊更道心起すべく作りおきてたりける。ひじりのすみかとなむ覺え侍りしと啓し給ふに、かの事おぼし出で、いとほしければ「そこに恐しきものや住むらむ、いかやうにてかかの人はなくなりにし」と問はせ給ふを、猶うちつゞきたるをおぼしよるかと思ひて「さも侍らむ。さやうの人ばなれたる所は善からぬものなむ必ず住みつき侍るを、失せ侍りしさまなむいと怪しく侍る」とて委しくは聞え給はず。猶かく忍ぶるすぢを聞き顯しけりと思ひ給はむがいとほしくおぼされ、宮のものをのみおぼしてその比は病になり給ひしをおぼし合するにも、さすがに心苦しくてかたがたに口入れにくき人のうへとおぼしとゞめつ。小宰相に忍びて「大將かの人のこととをいと哀と思ひてのたまひしに、いとほしうてうち出づべかりしかど、それにもあらざらむものゆゑとつゝ、ましくてなむ君ぞことごと聞き合せける。かたはならむ事はとり隠してさる事なむありけると、大方の物語のついでに僧都のいひし事語れ」とのたまはす。「御前だにつゝませ給はむとを、ましてこととはいかでか」と聞えさせと、「さまたまなることにこそ。又まろはいとほしき事ぞあるや」とのたまはするも心えてをかしと見奉る。立ちよりにて物語などし給ふついでにいひ出でたり。珍らかに怪しといかてか驚かれ給はざらむ、宮の問はせたまひしもかゝることをほのおぼしよりてなりけり、などかのたまはせはつまじきとつらけれど、われも又はじめよりあしざまの事聞えそめざりしかば、聞きて後も猶をこがましき心ちして人

にすべでもらさぬを、なかなかほかには聞ゆることもあらむかし。うつゝの人々の中に忍ぶる事だにがくれある世の中かはなど思ひいりて、この人にもさなむありしなどあかし給はむことは猶口おもき心ちして「猶あやしと思ひし人のことに似てもありける人のありさまかな。さてその人は猶あらむや」とのたまへば、「かの僧都の山より出でし日なむ尼になしつる。いみじう煩ひし程にも皆人をみてせさせざりしを、さうじみの本意深きよしをいひて、なりぬるところを侍るなりしか」といふ。所もかはらずそのころの有様など思ひあはするに違ふ節なければ誠にそれと尋ね出でたらむ、いとあさましき心ちもすべきかな、いかでかたしかに聞くべき、ちりたちて尋ねありかむもかたくなしなどや人のいひなさむ、又かの宮も聞きつけ給へらむには必ずおぼし出で、思ひ入りにけむ道も妨げ給ひてむかし、さてさなたまひそなど聞え置き給ひければにや、われにはさる事なむ聞さしと、さる珍しき事を聞き召しながらのたまはせぬにやありけむ、宮もかゝづらひ給ふにてはいみじう哀と思ひながらも、更にやがてうせにしものと思ひなしてをやみなむ、うつゝびとになりて末の世には黄なる泉のほとりばかりをおのづから語らひよる風のまぎれもありなむ。我が物にとり返し見むの心は又つかはしなど思ひ亂れて、猶の給はすやあらむと覺ゆれど、御氣色のゆかしければ大宮にさるべき序作り出で、ぞ啓し給ふ。「あさましうて失ひ侍りぬと思ひ給へし人、世におちあぶれてあるやうに人のまねび侍りしかな。いかでさる事は侍らむと思ひ給へれど、心とおどろおどろしうもてはなるゝことは侍らずやと思ひわたり侍る人の有様に侍れ

ば、人の語り侍りしやうにてはさるやうもや侍らむと、似つかはしく思ひ給へらるゝ」とて今少し聞え出て給ふ。「宮の御事をいと耻しげにさすがに恨みたるさまにはいひなし給はで、かの事又さなむと聞きつけ給へらば、かたくなにすぎずしくもおぼされぬべし。更にさてありけりともまらず顔にて過ぐし侍りなむ」と啓し給へば「僧都の語りしに、いと物恐しかりし夜のことにて耳も留めざりしことにこそ。宮はいかてか聞き給はむ。聞えむ方なかりける御心のほどかなと聞けば、まして聞きつけ給はむこそいと苦しかるべけれ。かゝるすぢにつけていと軽くうきもののにのみ世に知られ給ひぬめれば、心憂くなむ」とのたまはず。いと重き御心なれば必ずしもうちとけ世がたりにても人の忍びて啓しけむことを漏らさせ給はじなどおぼす。住むらむ山里はいづこにかあらむ、いかにしてさま悪しからず尋ねよらむ、僧都に逢ひてこそはたしかなる有様も聞き合せなどしてともかくも問ふべかめれなど、唯この事をささふし覺す。月ごとの八日は必ず尊きわざせさせ給へば薬師佛によせ奉るにもてなし給へるたよりに中堂に時々参り給ひけり。それよりやがて横川におはせむとおぼして、かのせうとの童率ておはす。その人々にはとみに知らせじ、有様にぞ隨はむとおぼせど、うち見む夢のこゝちにも哀をも加へむとにやありけむ、さすがにその人とは見つけながら怪しきさまにかたちことなる人の中にて憂き事聞きつけたらむこそいみじかるべけれど、よろづに道すがらおぼしみしだれけるとや。

夢浮橋

山におはしまして例せさせ給ふやうに經佛など供養せさせたまふ。またの日は横川におはしたれば僧都驚きかしてまり聞え給ふ。年比も御いのりなどにつけかたらひ給ひけれど、ことにいと親しきことはなかりけるを、このたび一品宮の御心ちの程にさぶらひ給へるに勝れ給へるげん物し給ひけりと見給ひてよりこよなうたふとび給ひて、今少し深き契り加へ給ひてければ、おもおもしろおはする殿のかくわざとおはしたることゝもてさわぎ聞え給ふ。御物語などこまやかにしておはすれば御ゆづげなど參り給ふ。少し人々まづまりぬるに「小野のわたりに知り給へるやどりや侍る」と問ひ給へば「まか侍り、いと異やうなる所になむ。某が母なる朽尼の侍るを京にはかばかしきすみかも侍らぬうちにかくて籠り侍るあひだは、夜中曉にもあひとぶらはむと思ひ給へおきて侍る」など申し給ふ。「そのわたりにはたゞ近きころほひまで人おほう住み侍りけるを、今はいとかすかにこそなり行くめれなどのたまひて、「今すこし近うぬよりて忍びやかにいとうきたる心ちもし侍り。又尋ね聞えむにつけてはいかなりけることにかと心得ずおぼされぬべきに、かたがたはゞかられ侍れど、かの山里にゐるべき人のかくろへて侍るやうに聞きしを、たしかにてこそは、いかなるさまにてなども漏らし聞えめなど思ひ給ふるほどに、御弟子になりて忌むことなど授け給ひてけ



りと聞き侍るはまことが、まだ年も若く親などもありし人なればこゝにうしなひたるやうに、かごとかくる人なむ侍るをなどの給ふ。僧都、さればよたゞ人と見えざりし人のさまぞかし。かくまでのたまふは輕々しくはおぼされざりける人にこそあめれと思ふに、法師といひながら心もなく忽にかたちをやつしけることゝむねづぶれていらへ聞えむやう思ひまはさる。たしかに聞き給へるにこそあめれ、かばかり心得給ひてうかゞひ尋ね給はむに、かくれあるべきことにもあらず、なかなかあらがひかくさむにあいなるべしなどとはかり思ひえて、いかなりけることにか侍りけむとこの月比うちうち怪しみ思ひ給ふる人の御ことにとりて、かしこに侍る尼どもの初瀬に願侍りて詣て、かへりける路に、宇治の院といふ所にとりて侍りけるに、はゝのあまのらうけ俄におこりて、いたくなわづらふと告げに人のまうで來たりしかば、まかりむかひたりしに、まづ怪しき事なむとさゝめきて、親の志にかへるをばさしおきてもてあつかひ歎きてなむ侍りし。この人もなくなり給へるさまながらさすがに息は通ひておはしければ、昔物語にたま殿に置きたりけむ人のたとひを思ひ出て、さやうなる事にやとめづらしがり侍りて、弟子ばらの中に驗あるものどもを呼び寄せつゝ、かはりがはりに加持せさせなどなむし侍りける。なにがしはをしむべき齋ならねど、母の旅のそらにて病おもきを助けて、念佛も心みだれずさせせむと、佛を念じ奉り思ひ給へしほどに、その人のありさま委しくも見給へずなむ侍りし。ことの心推し量り思ひ給ふるに天狗こたまなどやうのものゝ欺きゐてたてまつりけるにやとなむうけ給はりし。助け

て京にゐて奉りて後も三月ばかりはなき人にてなむものし給ひけるを、なにがしが妹故衛門督の北の方にて侍りしが尼になりて侍るなむ、一人もちて侍りし女子を失ひて後、月日は多くへだて侍りしかど、かなしひに堪へず歎き思ひ給へ侍るに、おなじ年のほど、なむ見ゆる人の、かくかたちいとうるはしくさよらなるを見出て奉りて、観音の賜へると喜び思ひてこの人いたづらになし奉らじとまどひいられて、なくなくいみじき事どもを申されしかば、後なむかのさかもとにみづからおり侍りて護身など仕うまつりしにやうやういき出て、人となり給へりけれど、猶このらうじたりけるもの、身に離れぬ心地なむする。この悪しきもの、さまざまだけを遁れて後の世を思はむなど悲しげにの給ふ事どもの侍りしかば法師にてはすゝめも申しつべきことにこそはとて誠にすけせしめ奉りてしに侍る。更に老ろしめすべきこと、はいかてかそらにさと侍らむ。珍しき事のさまにもあるを、世語りにも老侍りぬべかりしかど聞えありて煩しかるべきことにもこそと、このおい人どものとかく申して、この月ごろおとなくて侍りつるになむ」と申し給へば、さてこそあなれとほのきゝて、かくまでもとび出で給へることなれど、むげになき人と思ひはてにし人を、さは誠にあるにこそはとおぼすほど夢の心地してあさましければ、つゝみもあへず涙ぐまれ給ひぬるを、猶僧都の耻かしげなるにかくまで見ゆべき事かはと思ひ返して、つれなくもてなし給へど、かくおぼしけることをこの世にはなき人と同じやうになしたること、あやまちまたる心地して、罪深ければ「悪しきものならうぜられ給ひけむも、さるべきさきの世の契なり。思ふにたかき

家のこにこそものし給ひけめ。いかなるあやまちにてかくまではふれ給ひけむにか」と問ひ申し給へば「なまわかんとほり」などいふべきすぢにやありけむ。こゝにももとよりわざと思ひしことにも侍らず、物はかなくて見つけそめては侍りしかど、又いとかくまでおちあふるべきさはと思ひ給へざりしを、珍らかに跡もなく消え失せにしかば、身をなげたるにやなどさまさまに疑ひおほくて、たしかなる事はえさく侍らざりつるになむ。罪かゝるめて物すなれば、いとよしと心やすくなむみづからは思ひ給へなりぬるを、はなる人なむいみじく戀ひ悲しぶなるを、かくなむ聞き出でたるとつけまらせまほしく侍れど、月比かくさせ給ひけるほい違ふやうに物さわがしくや侍らむ。親子の中の思ひたえず、かなしびにたへてとぶらひ物しなどし侍りなむかし」などのたまひて「さていとびんなきまゐるべとはおぼすとも、かのさかもとにあり給へ。かばかり聞きてなのために思ひ過すべくは侍らざりし人なるを、夢のやうなる事どもを今だに語り合せむとなむ、思ひ給ふる」とのたまふ氣色いと哀と思ひ給へれば、かたちをかへ世を背きにきとおぼえたれど、かみひげをそりたる法師だにあやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身といふものはいかゞあらむ、いとほしう罪えぬべきわざにもあるべきかなと味氣なく心みだれぬ。「罷りありむと今日明日さはり侍り。月たちての程に御せうそこを申させ侍らむ」と申し給ふ。いと心もとなけれどなほなほとうちつけにいられむもさまあしければ「さらば」とてかへり給ふ。かのせうとの童御供にゐておはしたりけり。ことはらからどもよりはかたちも清げなるを呼び出て給ひて「これなむその人の近

きゆかりなるを、これをおつかつものせむ。御文ひとくだりたまへ。その人とはなくて、唯尋ね聞ゆる人なむあるとばかりの心をまらせ給へ」との給へば「なにがしこのまるべにて必罪え侍りなむ。ことのありさまは委しくとり申しつ。今は唯御みづからたちよらせ給ひてあるべからむことは、物せさせ給はむに、何の咎か侍らむ」と申し給へば、うちわらひて「罪えぬべきまると思ひなし給ふらむこそはづかしけれ。こゝには俗のかたちにて、今まで過ぐすなむいとあやしき。いわけなかりしより思ふ志ふかく侍るを、三條の宮の心ほそげにたのもしげなき身ひとつをよすがにおぼしたるが、さがたきほだしに覺え侍りてかゝづらひ侍りつるほどにおのづから位などいふこともたかくなり、身のおきても心にかなひがたくなどして、思ひながら過ぎ侍るには、又えさらぬことも數のみそひつゝすぐせとおほやけわたくしに遁れ難きことにつけてこそさも侍らめ。さらでは佛の制し給ふ方のことを僅にもきゝ及ばむことは、いかてあやまたじとつゝしみて、心のうちは聖に劣り侍らぬものを、ましていとはかなきことにつけてしも重き罪うべきことは、などてか思ひ給へむ、更にあるまじきとに侍る。疑ひおぼすまじ。たゞいとほしき親の思ひなどを聞きあきらめ侍らむばかりなむ嬉しう心やすかるべきなど、昔より深かりし方の心おきてかたり給ふ。僧都もげにとうなづきていとたふときことなど聞え給ふ程に日も暮れぬれば中やどりもいとよかりぬべけれど、うはの空にて物したらむこそ猶びんなかるべけれと思ひわづらひて歸り給ふに、このせうとの童を、僧都めとてめてほめ給ふ。これにつけて「まづほのめかし給へ」と聞え給へば、

文かきてとらせ給ふ。「時々は山におはしてあそび給へよ。すゞろなるやうにはおぼすまじきゆゑもありけり」とうち語らひ給ふ。この子は心もえねど文とりて御供にいづ。坂本になれば、「御前の人々すこしたちあがれて忍びやかにを」などのたまふ。小野にはいと深くまげりたる青葉の山に向ひてまぎることなくやりみづのほたるばかりを昔覺ゆるなくさめにてながめ給へるに、例のはるかに見やらるゝ谷の軒端より、さき心ことにおひていとおほうともしたる火ののどかならぬ光を見るとて尼君達もはしに出て居たり。「たがおはしますにかあらむ、御前などいと多くこそ見ゆれ。ひるあなたにひきほし奉れたりつる返事に大將殿おはしまして御あるじのことにはかにするを、いとよき析とこそありつれ。大將殿とはこの女二の宮の御をとこにやおはしつらむ」などいふもいとこの世とほく田舎びにたるや。誠にさにやあらむ、時々かゝる山路わけおはせし時いとまるかりし隨身の聲もうちつけにまじりて聞ゆ。月日のすぎ行くまゝに昔のことかく思ひ忘れぬも今はなにすべきことぞと心うければ、阿彌陀佛に思ひまぎらはしていと物もいはて居たり。横川に通ふ人のみなむこのわたりには近きたよりなりける。かの殿はこの子をやがてやらむとおぼしけれど、人め多くてびんなければ殿に歸り給ひて又の日殊更にぞいだしたて給ふ。むつましくおぼす人のことごとしからぬ二三人ばかりおくりにて、むかしも常に遣はし、隨身をへ給へり。人さかぬまに呼び寄せ給ひて「あこがうせにし妹の顔はおぼゆや。今は世になき人と思ひはてにしを、いとたしかにこそものし給ふなれ。疎き人にはさかせじと思ふを、いきて尋ねよ。はしに

はまだしきにいふな。なかなか驚きさわがむほどに、老るまじき人も老りなむ。その親の御思ひのいとほしさにこそかくも尋ぬれ」とまだきにいと口がため給ふを、をさなき心地にもはらからはちほかれど、この君のかたちをば似るものなしと思ひまみたりしに、うせ給ひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるにかくのたまへば、いとうれしきにも涙の落つるを耻かしと思ひてまぎらはしに「を」と荒らかに聞えぬたり。かしてにはまだつとめて僧都の御許より「よべ大將殿の御使にてこそ君やまうて給へりし。ことのこゝろうけ給りしに、あぢきなく歸りておくし侍りてなむと、姫君に聞え給へ。みづから聞えさすべきことも多かれど今日明日すぐしてさぶらふべし」と書き給へり。これは何事ぞと尼君驚きてこなたへもてわたりてみせ奉り給へば、おもてうち赤みて物の聞えあるにやと苦しう物がくしまけると恨みられむを思ひつゞくるに、いらへむ方なくて居給へるに「猶の給はせよ、心うくおぼし隔つること」といみじく恨みてことの心を知らねばあわたしきまで思ひ居たるほどに「山より僧都の御せうそにて参りたり人なむある」といひ入れたり。怪しけれど「これこそは、さはたしかなる御せうそこならめ」とて「こなたに」といはせれば、いと清げにまなやなる童のえならずさうぞきたるぞ歩みきたる。わらうださし出てたれば、簾垂のもとについで、「かやうにてはさぶらふまじくこそは、僧都はのたまひしか」といへば、尼君ぞいらへなどし給ふ。文とり入れて見れば「入道の姫君の御方に、山より」とて名書き給へり。あらじなどあらがふべきやうもなし。いとほしたなく覺えていよいよ奥の方に引き入られて人に顔も見

合せ給はず、常もほごりかならずものし給ふ人がらなれど、「いとうたて心うし」などいひて、  
僧都の御文見れば、「今朝こゝに大將殿の物し給ひて御ありさま尋ねとひ給ふに初よりあり  
しやう委しく聞え侍りぬ。御志深かりける御中を背き給ひてあやしきやまがつの中にすけ  
し給へること、かへりては佛のせめ添ふべき事なるをなむ、承り驚きはべる。いかゞはせむ、  
もとの御契りあやまち給はであいしうの罪をはるかし聞え給ひて一日のすけのくどくは、  
はかりなきものなれば猶頼ませ給へとなむ。ことことには自らさぶらひて申し侍らむ。かつ  
かつこの小君聞え給ひてむ」とかいたり。まがふべくもあらず書きあきらめ給へれど、こと  
人は心もえず、「この君は誰にかおはすらむ。猶いと心うし。今さへかくあながちに隔てさせ  
給ふとせめられて少しとざまに向きて見給へば、この子は今はと世を思ひなりし夕暮にも  
いと戀しく思ひし人なりけり。同じ所にて見しほどはいとさがなくあやにくにおごりてに  
くかりしかど、母のいと悲しくして宇治にも時々ゐておはせしかば、少しをよすけしまゝに  
かたみに思へりしわらは心を思ひ出づるにも夢のやうなり。まづ母のありさまいと問はま  
ほしくこと人々の上はものづからやうやう聞けど、親のおはすらむやうはほのかにも聞  
かずかしと、なかなかこれを見るにいと悲しくてほろほろとなかれぬ。いとをかしげにて少  
しうち覺え給へる心ちもすれば、「御はらからにこそおはすめれ。聞えまほしくおぼすことも  
あらむ。うちに入れ奉らむ」といふを、何か今は世にあるものとも思はざらむに、怪しきさま  
におもがはりしてふと見えむも恥しと思へば、とばかりためらひて「げにへだてありともお

ぼしなすらむが苦しさに物もいはれてなむ。あさましかりけむありさまは珍らかなること  
見給ひてけむを、さてうつしこゝろもうせたましひなどいふらむものもあらぬさまにな  
りにけるにやあらむ。いかにもいかに過ぎにし方のことを我れながら更にえ更にえ思ひ  
出でぬに、きのかみとかありし人の世の物語すめりし中になむ、見しあたりのことにやとほ  
のかに思ひ出でらるゝことある心ちせし。その後とさまかうさまに思ひ續くれど更にはか  
ばかしくも覺えぬに、唯一人物し給ひし人のいかでかとおろかならず思ひためりしを、まだ  
や世におはすらむとそればかりなむ心にはなれず悲しき折々侍るに、今日見ればこの童の  
顔はちひさく見し心ちするにもいと忍びがたけれど、今さらにかゝる人にもありとば知  
られて、止みなむとなむ思ひ侍る。かの人若し世に物し給はゞそれ一人になむたいめんせま  
ほしく思ひ侍る。この僧都ののたまへる人などには、更にありとあられ奉らじとこそ思ひ侍  
れ。かまへてひがことなりけりと聞えなしてもてかへし給へ」とのたまへば、「いとかたいこ  
とかな。僧都の御心はひじりといふ中にもあまりくまなく物し給へば、まさのこいては開  
え給ひてむや。後にかくれあらし。なのめに輕々しき御程にもおはしまさず」などいひさわ  
ぎて「世に知らず心強くおはしますことぞ」と皆いひ合せて母屋のきはに几帳たてゝ入れた  
り。この子もさは聞きつれど、幼ければふといひよらむもつゝましけれど「まだ侍る御文い  
かてたてまつらむ。僧都の御志るべにはたしかなるを、かくおぼつかなく侍るこそ」とふし  
めにていへば「そゝや、あなうつくし」などいひて「御文御覽すべき人はこゝに物せさせ給ふ



めり。けそうの人なむいかなることにかと心得がたく侍るを、猶の給はせよ。をさなき御程なれどかゝる御老るべに頼み聞え給ふやうもあらむしなどいへど「おぼしへだて、おぼおぼしくもてなさせ給ふには、何事をか聞え侍らむ。疎くおぼしなりにければ聞ゆべきことも侍らず。唯この御文を人づてならて奉れとて侍りつる、いかて奉らむ」といへば「いとことわりなり。猶いとかくうたてなおはせそ。さすがにむくつけき御心にこそ」と聞えうごかして、几帳のもとにおし寄せ奉りたれば、あれにもあらで居給へるけはひと人には似ぬ心地すればそこもとによりて奉りつ。「御返りとくたまはりて参りなむ」と、かくうとうとしきを心うしと思ひていそぐ。尼君御文ひきときて見せ奉る。ありしながらの御手にて紙の香など例の世つかぬまでまみたり。ほのかにみて例のものめでのさしすぎ人いとありがたくをかしと思ふべし。「更に聞えむ方なくさまざまに罪重き御心をば僧都に思ひ許しきこえて今はいかてあさましかりし世のゆめかたりをだにと、いそがるゝ心のわれながらもどかしきになむ。まして人めはいかに」と書きもやり給はず。

「法の師と尋ぬる道を老るべにておもはぬ山にふみまどふかな。この人はみや忘れ給ひぬらむ。こゝには行くへなき御かたみに見る物にてなむ」などいと細やかなり。かくつぶつぶと書き給へるさまのまぎらはむ方なきに、さりとてその人にもあらぬさまを思の外に見つけられ聞えたらむほどのはしたなさなどを思ひ亂れて、いといはれはれしからぬ心はいひやるべき方もなし。さすがにうちなきてひれふし給へれば、いとよつかぬ御ありさまかな

と見わづらひぬ。「いかゞ聞えむ」などせめられて「心ちのかき亂るやうにし侍るほどためらひて今聞えむ。昔のこと思ひ出つれど更に聞ゆることなく、あやしういかなりける夢にかとのみ心も得ずなむ。少しまづまりてやこの御文なども見知らるゝこともあらむ。今日は猶もてまゐり給ひぬ。所違へにもあらむにいとかたはらいたるべし」とてひろげながら尼君にさしやり給へれば「いと見苦しき御ことかな。あまりけしからぬは、見奉る人も罪さり所なかるべし」などいひさわぐも、いとうた聞きにくく、覺ゆれば、顔も引き入れて臥し給へり。あるしぞこの君に物語少し聞えて「ものゝけにておはすらむ。例のさまに見え給ふ折なくなやみわたり給ひて御かたちもことになり給へるを、尋ね聞え給ふ人あらばいとわづらはしかるべき御事と見奉り歎き侍りしもまゐるく、かくいとあはれに心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむいとかたじけなく思ひ侍る。日比も心地うちはへなやませ給ふめるを、いとどかゝる事どもにおぼし亂るゝにや、常よりも物覺えさせ給はぬさまにてなむ」と聞ゆ。所につけてをかしきあるじなど、またれど幼き心ちはそこはかとなくあわてたる心ちして「わざと奉れさせ給へるまゐるしに、何事をか聞えさせむとすらむ。唯一言をのたまはせよかし」などいへば「げに」などいひて、かくなむとうつし語れども物もの給はねばかひなくて、「唯かく覺束なき御有様を聞えさせ給ふべきなめり。雲の遙にへたゝらぬほどにも侍るめるを、山風ふくとも又も必ず立ち寄せ給ひなむかし」といへば、すゞろにゐくらさむもあやしかるべければかへりなむとす。人まれずゆかしき御ありさまをもえ見すなりぬるを、覺束なく口

惜しくて、心ゆかずながらまゐりぬ。いつしかと待ちおはするにかくたどどしくかへり來たれば、すさまじくなかなかなりと、おぼすことおまごまにて、人のかくしすゑたるにやあらむと、我が御心の思ひよらぬくまなくおとしおき給へりしならひにとぞ。

源氏物語

終

明治三十六年三月二十六日印刷  
 明治三十六年三月二十九日發行



發行所

監修者 同  
 同 同 同 同  
 校訂者 同  
 發行者 同  
 印刷者 同  
 印刷所 同

全九冊定價金貳拾圓

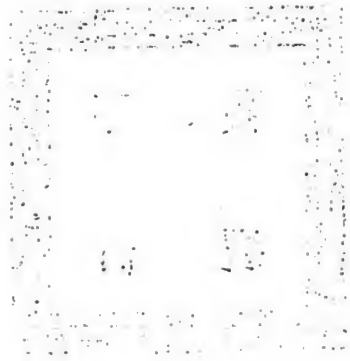
國文大綱物語部次原附

東京市京橋區銀座三丁目十番地

板倉屋書房

(電話長距離加入)  
 (新橋一六三四番)

木村正 辭  
 本居豐 穎  
 小杉楓 邨  
 井上頼 邨  
 落合直 文  
 丸岡 文  
 松下大 桂  
 三郎 郎  
 松田度 計  
 下田度 計  
 石川金太郎 郎  
 英舍 舍



Vertical text on the left side of the page, possibly a page number or a reference code. The text is extremely faint and illegible.

Horizontal text in the middle of the page, possibly a title or a section header. The text is extremely faint and illegible.

Horizontal text in the lower middle of the page, possibly a body of text or a list. The text is extremely faint and illegible.

明治三十六年六月

井村真琴





